

# Magic game

曉楓

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ようこそ神の居城へ。

自らを負け組と理解する百人の転生者達が、リリカルなのは世界で人生の逆転を目指すして頑張ります。

基本ルールは、私の指示に従い、目標をクリアすること。ただそれだけ。与えられるのは、軍資金と願いを叶えてもらえる権利。

果たして百人の転生者は、どのようなにしてクリアするのでしょうか。読者様には、彼らの踊る様を楽しんでもらえたら幸いです。

なお、少々残酷な描写もあるかもしれません。お気をつけください。

フ  
フ  
フ  
……  
。

# 目次

第十話	151
第九話	131
第八話	119
第七話	100
第六話	86
第五話	69
第四話	54
第一章 願望機争奪編	
第三話	38
第二話	26
第一話	1

第二十二章 騎士討伐編	309
第二十一話	292
第二十話	279
第十九話	269
第十八話	256
第十七話	241
第十六話	231
第十五話	219
第十四話	204
第十三話	191
第十二話	178
第十一話	166

第二十三話  
第二十四話  
第二十五話  
第二十六話  
第二十七話  
第二十八話  
第二十九話  
第三十話  
第三十一話  
第三十二話  
第三十三話  
第三十四話  
第三十五話

319 335 343 353 366 375 389 402 412 423 433 445 457

第三十六話  
第三十七話  
第三十八話  
第三十九話  
第四十話  
第四十一話  
第四十二話  
第四十三話  
第三章 エーヌ武闘編  
第四十四話  
第四十五話  
第四十六話  
第四十七話

469 484 496 512 518 526 543 558 565 580 588 595

第四十八話	604
第四十九話	615
第五十話	627
第五十一話	641
第五十二話	649
第五十三話	663
第五十四話	675
第五十五話	682
第五十六話	700
第四章 運命の齒車編	
第五十七話	714
第五十八話	726
第五十九話	742

第六十話	757
第六十一話	768
第六十二話	784
第六十三話	796
第六十四話	807
第六十五話	819
第六十六話	837
第六十七話	851
第六十八話	869
第六十九話	888
第七十話	903
第七十一話	923
第七十二話	941

第八十四話	1089
第八十三話	1079
追憶 劍の姫	
第八十二話	1066
第八十一話	1050
第八十話	1033
第七十九話	1017
第七十八話	1004
第七十七話	995
第七十六話	982
第七十五話	972
第七十四話	961
第七十三話	949

第九十二話	1188
第九十一話	1180
第九十話	1163
第八十九話	1148
第八十八話	1133
魔法都市争乱編	
第八十七話	1127
第八十六話	1110
第八十五話	1100





# 第一話

つまらない。そんな日常。当たり前と思える日常。

そんな日常が何より大事だと思えるのは、いつだって——その日常が存在しなくなつた時なんだ。



「——あれ？」

気がついて、呆気に取られた俺の最初の一言がこれだった。

おかしい。俺は家に帰って寝ていたはずだ。なのに気がついたら、自宅ではないどころか。人が大勢いるどこかだった。と言っても、百人かそこらだろうか？

場所は……どこかの神殿のようだ。中央に噴水があり、周りを取り囲むように建てられた建物が、荘厳な雰囲気醸し出している。時刻は太陽が真上にあることからして、多分正午前後。

「なんだ(っ)……？」

「どうなってるの……何が起きてるの……？」

周囲から、色んな人達の困惑の声が聞こえる。

一体どうなっている……？ 夜に寝て、気がついたらこんな場所……半日ちよつとの時間でここまで、しかもこれほどの人数を運ぶなんて、簡単にできるもことじゃないだろ？

「おーい！ 綾——！」

「！」

聞き覚えのある声がして、振り返る。振り返った視線の先にはやはり、俺のよく見知った顔があった。

彼の地毛である、殆ど赤に近い茶髪。適当に伸びたその髪を鉢巻で縛り、逆さまにした竹箒のように立てている。細くはあるがしっかりした体つき……痩せマッチョというやつだ。

俺の親友——藤木海斗だ。

「おお、やっぱり朝霧綾、学年首席様だったか。いやー、助かった。親友のお前がいて良かったぜ」

「そんなことはいい。……海斗、一体どうなってるかわかるか？」

海斗を引き寄せ、後半は声を潜めて尋ねる。こんなことをする犯人が何者かわからな

いたため、警戒しなければならぬ。

「首席にわからなくて、俺みたいなのドベにわかる訳がねえだろ。俺だつてついさつき目え覚めたばつかなんだからよ」

「……だよな」

こいつに情報を期待した俺が馬鹿だった。

「……おい、なんか今、俺を馬鹿にしなかつたか？」

「してない。お前に期待してた俺に悪態ついただけだ」

「してんじゃねえか！ それ！」

「とにかく。さっさと出るぞこんなどころ」

「出れねえぞ」

「——は？」

歩き出そうとして、海斗の言葉に足を止めた。

海斗は、どこか——俺が行こうとしていたずっと先を指差した。

「ほら、あそこ見えるだろ？ 壁が変な波つぼいのを打つてんの。俺も出ようとしたんだけどよ、なんか光の膜みたいなのが張つてて出れねえんだよ」

人ばかりでよく見えないが、確かにそうらしい。人が出て行く気配がない。よく見回したら、他のところも同じ様子だ。

「すげえよな。まるでファンタジーの世界に入ったみたいじゃねえか」

「呑気だなお前……」

自分の状況もわからずに……。

『——ようこそ。私の居城へ……』

「っ！」

「うおっ!? な、なんだあ!?!」

突如、頭の中に響く声。海斗がやかましく驚くのを無視して、周囲を警戒する。

他の人達も、突然の声に動揺しているらしい。しきりに周囲を見回しているのがわかる。

(どこだ……??)

『私に名前はない……強いて名乗るなら、君達の呼び方として、神を名乗ることになる』

「か、神……?」

誰かが呟いた。声の方を見ると、その呟いたと思われる人は警戒を解いて呆然としていた。

彼だけじゃない。他の人達も、海斗も、呆然と棒立ち状態になっていた。

噴水の上で強い光が拡散した。

「うっ……!?!」

あまりの光の強さに反射的に目を瞑る。

しばらくして目を開けると、噴水の上に人が立っていた。白いローブを纏っていて、顔は整っている。見たところ、そこそこ若い。

『改めてようこそ、神の居城に招待されし百名……突然だが、君達にはある異世界へ転生してもらおうことになる』

「て、転生……」

「それって、あれだよな……よく特典付きとかがある、あれ……」

『……いかにも、それに値するものだ』

困惑する人達に、神を名乗る男は悠然と答える。

一体、何が目的だ……？

『……君達は今、なぜ？』と思っていることだろう。……安心して欲しい。これは君達を思っていることなのだ』

「何……？」

『君達は……ここに在る百名の諸君は、理由はどうあれ今の人生に後悔し、人生をやり直したいと願っているはず……私は君達の為に、チャンスを与えた……』

「なんでそのことを……それにチャンスってなんだよ？」

「静かにっ」

海斗の口を塞ぐ。

『私の指示に従い、行動せよ。そうすれば、君達の住む世界が素晴らしいものになる……言わば、『勝ち組』の人生を歩むことができるだろう』

「か、勝ち組……!」

誰かが、声を上擦らせた。

『そう……勝ち組だ。……自分のポケットを探ってみるのだ』

言われて、ポケットに手をつ突っ込む。ポケットの中で手が何かを掴んだ。

出してみると、その手が掴んでいたのは小さい星の形をした、チップのようなものだった。全部で三つ。

『私の指令をクリアし、そのチップ……スターチップを集めることで、チップと引き換えに願いを叶えよう。引き換えるチップの数によって叶えられる願いの範囲や質は変化する。……以上だ』

「待てよ」

一声発し、俺は前に出る。

「概要がわかって、俺は参加はするし、そもそも自分で負け組を認めてる奴に拒否権はないんだろうが……転生する場所もわからずに転生してくださいってのは納得できない。教えてもらおうか」

「おお、神をも恐れぬその口調……!」

バシーン!

「うっさい、ちよつと黙つてろ」

海斗を叩いて黙らせる。

直後周囲から「そうだそうだ!」とか「ちゃんと説明しろ!」という声かにわかに聞こえ始めた。野次馬か、お前ら。

『……そうだな。場所ぐらいは伝えておこう。……リリカルなのは……と言えば、わかつてくれるだろうか……』

その声に、野次馬の声がピタリとやんだ。

そして、次に湧き上がってきたのは、歓喜の声。

「リリカルなのは……?」

「マジで?」

「マジかよ……俺達にとって楽園じゃん……!」

「すっげえ……!」

ちなみに三番目が海斗である。

『……他に、質問はないかな?』

「正直、ルールがわからんから何から質問すればいいのかわからない」

『問題ない……ルールなら君達の手持ちに入れておいた。後で確認するといい』

「そうか。なら、ルールに書いてあるかもしれないけど最後に一つ。スターチップと願いの交換つて、何個からなんだ？」

『一個からでもいい。……しかし先程言ったように、叶えられる範囲や質は交換するチップの数によって異なる』

……一個からでもありだと？

でも、それって……。

「だったら、話は早え」

「！」

いつの間にか自称神の隣にまで近づいていた青年はそう言うと、自称神に向かって右手を差し出した。その手には、スターチップが握られている。

「早速この三つで、叶えてもらおうじゃねーか！ 魔力とデバイスを寄越しな！」

「！！」

その青年の一声は、瞬く間に周囲に波紋を広げていった。

『……いいだろう』

さらにその波紋に追い討ちをかける、承諾の一声。

それは全体に伝達させ、行動させるにはあまりにも十分なものだった。



「お、俺もだ！ 魔力とデバイスをくれ！」

「私も！ 同じのをください！」

「魔力とデバイス、それと戦闘技術もくれよ！」

「レアスキルを超越せ！」

あつという間に神の周囲に人だかりが出来上がる。さつきまで噴水に最も近かったはずの俺達は、人だかりの外へと追いやられていた。

「お、おい。俺達もこれ使った方がいいんじゃないのか？」

海斗がチップを見せてそう言い、人だかりへ突っ込もうとする。

そんな海斗の首根っこを俺は掴んで止めた。

「待て、それよりこっち来いっ」

「うおっ!? お、おう……」

ズルズルと海斗を引き摺って行く。

『……フフツ』

「——!？」

一瞬、しかし確かに聞こえたその笑い声に、背筋が凍るような感覚がした。

振り返ってみるが、声の主である神は最初に現れた時から同じ無表情のままだった。

「? どうした?」

「……いや、なんでもない」

海斗にそう返して、再び引き摺っていく。

しかし途中で、突然海斗が抵抗してきた。

「ん？ ちよつと待った綾。待ってくれ」

「どうした？」

「ちよつとだけ待ってくれないか？ 別にあつちには行かないからさ」

「……わかった。あつちの壁際で待ってるからな」

「おうー」

海斗の首根っこを離し、海斗がどこかへと走っていくのを少し見届けてから、俺も歩き出した。

壁際に立って少ししたら、海斗が戻ってきた。

……女の子連れて。

「……お前、こんな状況でナンパする奴だったか？」

「いや、違えよ！ 困ってそーな感じだったから、それで連れてきただけだよ！」

「——という名目のナンパなんだろう？」

「だから違えって！」

「わかってる。お前は困った人にはいの一番に助けに回るお人好しだからな。……それ

に、今は人手が多い方が何かと助かる」

「へ？ 人手って……」

「海斗。それと君……」

海斗が言い切る前に話を始め、海斗が連れてきた女の子に声をかける。

海斗が連れてきた女の子は少々小柄に加え、黒い髪をツインテールにしていることから幼く見えた。丸縁メガネをつけているため、ちよつと顔が見えにくい。

「君、名前は……」

「あつ、すみません……藤木由衣ふじきゆいって言います。さつきはありがとうございました。色々、怖くて……」

「へえ！ 同じ苗字って偶然あるものだなあ！ 俺、藤木海斗って言うんだ！ よろしくな！」

「まあ、藤木なら珍しくないだろうな。俺は朝霧綾。海斗とは親友なんだ。……早速、二人にしてもらいたいことがある」

「ん、なんだよそれって？」

「持ち物を全部出してほしい」

俺は即答した。

「あいつは、ルールは既に俺達の元に配布してあるみたいなこと言ってただろ。その

ルールブックを確認したいんだ。そしてきっきのスターチップ以外に何がルール上の手持ちとして配布されてるのか、まずそれを確認したい」

「首席らしい、最初の状況確認って奴だな。よしわかった！」

海斗が早速自分のポケットを探り始めた。それを見て由衣もポケットを探り始める。

「えっと、スターチップと携帯電話……あとは……んん？」

何かを掴んだらしい。海斗が手を引っこ抜くと、分厚い札束が握られていた。

「うげっ!? おおおおいっ、これ!？」

「一万円の札束……百万分はあるかもな」

「ひゃっ、百万!？」

「ああ、あのっ、わ、わ、私にもこれがつ……!」

由衣にも同じくか……。

確信を持ちつつ、俺もポケットを探る。

「……俺もだ。自分の携帯とスターチップ、そして百万。間違いなく全員の最初の持ち物がこれだな」

「で、でも、ルールブックがねえぞ?」

「決まってるだろ。携帯の中だ」

携帯を開き、操作を始める。

「二人も携帯の中を探すんだ。必ずどこかにルールが書かれてるはず……」

「お、おう」

「は、はい」

三人で携帯からルールの搜索を始める。操作に集中している間、聞こえるのは外の喧しい声ばかり。

「なあ、綾」

「なんだ」

「あいつ言ってたよな。ここにいる百人全員が、今の人生に後悔している奴だって」

「ああ、言ってたな」

「じゃあ、お前はなんで今の人生に後悔してんだ？ 成績優秀な学年首席。まさに勝ち組じゃねえか」

「……………」

しばらくの間を開けて、俺はようやく答えを出した。

「成績優秀だから、イコール勝ち組って訳じゃない……そういうことだ」

「やっぱ俺にはわからんね。天才の考えなんて」

「他人の思考なんてわかるものじゃないだろ」

「そーだな」

「あ、あの……」

由衣が声を上げた。何か発見したようだ。

「どうした？」

「あの……ルールではなかったんですけど、プロフィールを開いたらこんなのが……」  
言って由衣は携帯を見せてきた。

……なんだこれ？

プレイヤー 藤木由衣

チーム 未設定（ソロ）

身体年齢 未確定

住所 未確定

魔力ランク 未確定

スターチップ 3

「なんだこりゃ？」

「海斗、プロフィールだ。自分のを確認してくれ」

「ん、ああ。プロフィールだな……」

海斗に指示を出して、自分もプロフィールを出してみる。

携帯番号、メールアドレスと続いて、由衣が表示していた『情報』があった。

だが内容は由衣とほぼ同じ。違いはプレイヤーの名前が俺の名前に変わっていることのみ。

「こっちは確認した。海斗は？」

「ああ、俺も。由衣ちゃんと同じだった」

「住所は当然として、魔力ランクや年齢まで未確定……？ それにチームってどういうことなんだ……？」

「多分、ルールの一つなんでしょうけど……肝心のルールが見つかりません……」

そう、ルールが見つからない。アプリにもないし、特別携帯の仕様が変わった訳でもない。プロフィールだって、由衣が見つけてくれなければ発見できなかった……。

……でも、これでわかることがある……。

噴水の方を見る。ごった返しているせいで、時間がかかっているようだ。

「綾、何を見て……ああ、やっぱ俺達もこれ使うか？ 魔力がねえと、原作に関わることもできないぜ」

「やっぱり、そうした方がいいんですかね……ちよつと怖いけど……」

「……いや、逆だ」

噴水の元へ行くこうとする二人を引き止める。

「逆？」

「ここでスターチップを使ってはいけない。……このチップには、多分間違いない願いを叶える以外に意味がある」

「か、考えすぎでは、ないでしょうか……？」

由衣の意見に、俺は首を横に振った。確信は、あった。

「考えてみる。始めっから願いを叶えてもらえるだなんて、虫が良すぎると思わないか？　人が集っていく時、あいつの微かな笑い声を俺は聞いた。無計画な人達を見て嘲笑っているような感じだった」

「おいおい、それだけで疑うってのか？」

「ルールを把握してからでも遅くはない。どっちにしろあれじゃあ時間はかかるし、そもそもデカい願いを叶えてもらうには相当な数が必要になるはず」

「でも、魔力がないと原作に関わることも難しいですよ……？　結界から弾かれてしましますし……」

「魔力ランク未確定って書いてあった……つまり最低限魔力は与えられるさ」

「よくわかるなーおい」

「それとだ、これからの話は本当に俺の勝手な推測なんだが……」



「…………？」

「なんですか？」

首を傾げる二人に、俺は意を決して、俺の推測を告げた。

「…………これは、奴にとつての『遊び』だ。俺達のことをどうとでも思っていない」

「…………はっ」

「どういうこと…………ですか？」

予想通り、訳がわからないといった様子 of 二人に、推測の説明を始める。

「さっきのチップの話からもそうだ。ルールの説明をほとんどしてない上、配布したと言っているルール説明もまだ見つかからない。携帯に細工したことすら説明なしだ。そんな状態で異世界に放り込む奴が、俺達を思ってるって言えるか？」

「で、でも、基本ルールはあの神様に従うことですし…………説明する程でもないんじゃないか…………」

「…………その基本ルールも罠だ」

「え？」

「おいおい、どういうことだよ？」

海斗が食ってかかった。

俺はそれの説明を行う。

「……二人とも、よく考えてみる。奴に従えば勝ち組って話を、違う視点で考えてみるんだ」

「違う視点……？」

「いや、早く言ってくれよ。俺じゃわからねえから」

……少しは考える素振りをしろよ……。

親友の脳筋具合にため息を吐きつつ、俺は答えを述べることにした。

「——勝ち組になるためと言って、得体の知れない奴の言いなりになって操り人形のような人生を、俺達に送らせようとしてるんだ」

「!!」

二人が息を飲むのがわかった。

誰かの言いなりになり、危険かもしれない指示に従わされる。それは、負け組と言えるものだ。

「ま、マジかよ……マジなのかそれ！」

「……勝手な推測だけど、奴の態度を見れば、多分……」

「そ、そんな……みんなにも知らせなきゃ……！」

「ダメだ。あの噴水に群がってる人達にはもう、あいつが本当に救いの神様にしか見えてない。それに俺達は自分で負け組を認めてる。そんな負け組の言うことなんて聞いてない」

てくれやしない」

「そんな……」

由衣は座り込んでしまった。彼女の目には、涙が浮かんでいた。

「どうすんだよ、お前の言うことが正しいなら、俺達に拒否権ないんだろ!？」

「ああ、そうだな。仮に今抗議なり謀反を謀っても、無視されるか消されるかだ」

「打つ手、なしかよ……!」

海斗も座り込んでしまった。

俺は、その二人に言い放つ。

「だからだ。今は従うんだ」

右手を視線を移す。右手には、己の願いを叶えるスターチップが握られている。

「今は従って、スターチップを多く集めるんだ。そして力を溜めて、あいつに不意打ちを

仕掛ける。……奴を倒すんだ」

次に視線を噴水の上に立つ神に向ける。

忙しそうにしている神……いや、神の衣を被った悪魔を、睨む。

しばらく奴を睨んだ後、視線を座り込む二人に戻し、敢えて声を少し明るくする。

「……とまあ、俺の勝手な推測と演説はここまでなんだけど。どうする海斗？俺の推

測は外れてるかもしれないし、合っていても謀反が成功する確率はかなり低いと思う。

俺とチームを組むことになれば、自殺しようとしてるようなものだけぞ？」

「……………」

海斗はゆっくり立ち上がった。

「……………やっぱ俺はダメだな。話にほとんどついていけなかった」

「……………だよな。難しい話が多かったって思ってる」

「でも、やっぱお前と一緒に何かした方がずっと楽しいからな。一緒に下克上と行こうじゃねえか！」

拳を突き出す海斗。相変わらずの単純さに呆れつつ、しかし頼りになる親友に、俺は拳を合わせた。

そして、視線はもう一人、由衣の方へ。

「由衣、君はどうする？ さつき言ったように、これは危険だ。俺達と組むことになれば、どうなるかわかったものじゃない。組まなければ、俺達の計画で危険に晒されることはなくなるぞ？」

「……………私、今まで優しくしてもらったことがなかったんです。親からは出来のいい兄さんと比べられて、学校でも虐められてばかりで……………そんな自分の人生が物凄く嫌でした……………」

「……………」

「由衣ちゃん……」

「海斗さんは、困ってた私に手を差し伸べてくれた……綾さんは話は難しいけど、私を正しい方へ導いてくれた……初めてなんです。優しくしてもらったのは」

由衣が顔を上げた。涙目だが、微笑んでいた。

「だから……あなた達と一緒にいたいんです……ご一緒させてください！」

「……だつてよ。お前が連れてきたんだから、責任持てよ」

「おう！ 由衣ちゃんは俺が守ってやるぜ！」

「はい！ あ、アドレス交換しませんか？」

「おう、いいぜ！ ほら、綾も！」

「俺はルール説明を探す。メールでアドレスを送ってくれ。後で登録するから——」

海斗の手を払いのけて携帯を弄ろうとして——そこでようやく気づいた。

俺達の携帯を弄ったつてことはあいつ、俺達のアドレスを知つてもおかしくないよな？ ならなんで、情報伝達の基本であるメールを使わなかったんだ？

いや、本当に使わなかったのか？ 奴が携帯を弄ったなら、メールを送った後にそのメールを新着でなくする可能性が——

「まさか……」

今開いているメニュー画面を閉じ、受信メールのボックスを開く。

……受信メールの一番上、『ゲームルール説明書』が、開封済みとして存在していた。  
「……あつた、ルール説明だ！」

「マジで!？」

なんてあくどいやり方なんだ。新着でなければ見過ごすような作りにしやがって

……!

「受信メールの一番上、開封済みメールにしてやがった！」

「えっと、ちよつと待て……うわ、本当だ。くそつ、見落としてた！」

「普通だったら見過ごしますよね。新着はないからって……」

とにかくメールを開き、中にある説明を片っ端から読んでいった。

件名：ゲームルール説明書

内容：

□基本ルール

・参加者の初期能力は身体年齢8（小学2年生）～15（中学3年生）、魔力ランクはE～B+、デバイスなし、所持金100万円、住居あり、スターチップ所持数3。

・指令者が発表したノルマをクリアすること。

・指令者が発表したノルマを指定期間内にクリアした場合、結果に応じて報酬のス

ターチップが成功者へ配布される。

- ・期間終了後、指令参加者はノルマ達成の有無に関わらずスターチップを3つ支払う。
- ・指令には開始前にスターチップを2つ支払うことで不参加とすることができる。
- ・緊急指令を受理した場合、その者は緊急指令に強制参加される。
- ・緊急指令を達成した場合報酬のスターチップを指定量配布、失敗した場合スターチップを指定量剥奪する。

・スターチップを支払うことができない場合、その者を失格とする。

□スターチップについて

・スターチップの入手方法は上記参照。

・スターチップの譲渡、売買、強奪は禁止。違反した場合は即失格とする。

・スターチップを消費して願いを叶えることができる。叶えられる範囲や質はチップの数によって変化。

・願いを叶えてもらう時、スターチップを握って強く念じれば神の居城へ移動することができる。

□チームについて

・4人までで1つのチームを編成することができる。（編成後にチームリーダーによる申告が必要）

- ・所属できるチームは1つまで。
- ・チームを結成している場合、指令の不参加は全員分行わなければならない。
- ・指令達成の報酬は、チーム全員にそれぞれ配布される。
- ・緊急指令の場合、不参加だった者には報酬は半分（少数切り捨て）になる。
- ・チーム脱却、解散する場合は本人による申告が必要。（チームリーダーがチーム脱却をした場合、チームは解散となる）

「これがルールですか……」

「あー、くそつ、ルールが多すぎるだろ、これ。綾、どうする？」

「まず、チームを作ろう。元々目的は一緒になったんだしチームを作れば、主にチップ獲得の面で有利だ」

「チームかあ。チームリーダーは綾で決定として、チーム名どうする？」

「リーダーは俺で決定なのか……」

「適任だと思えますよ？」

「まあいいけど。チーム名なら俺達の目的を反映して、『反逆者』……つてのはどうだ？」

「え、でもそれだと神様に目を付けられるんじゃない……私達のすることがバレちゃったら……」



「多分、すぐにバレるさ。だからコソコソしないで、堂々と反逆者を名乗り出ようぜってこと。海斗もその方がいいだろ？」

「おうよ！」

「じゃ、決定だな。申告は……ああ、申告用のメアドが登録されてら。えっと、チーム結成申告、チームメンバーの名前、チーム名を入力して送信と……よし、完了だ」

「綾、早く行こうぜ！ 他の参加者もここから出始めてる！」

「そうだな。よし、行くか！」

「おう！」

「はい！」

——こうして、俺達三人組、チーム『反逆者』の物語は始まった。

## 第二話

どれだけ頭が良くても、学年主席でも、なんでもできるって訳じゃない。

それを思い知った時、自分の非力さを、自分の無能さを呪い、そして自覚した。俺は、クズなんだって。



居城の廊下に入ると光に包まれ、次の瞬間どこかの森の中にいた。

「うおっ？ おいおい、さつきまで廊下歩いてたよな？」

「……転移させられたんだろ？ つまりここが俺達の舞台……」

「リリカルなのはの世界ってことですね……きやつ!？」

ドシャツ。誰かが、というか確実に由衣が転んだ音がした。

「おい由衣、大丈——」

振り返って助けようとして……俺の動きは止まった。

「いたた……だ、大丈夫です。ちよつと躓いただけで……」

目の前にいたのは、丸メガネをかけた小さい女の子だった。大体十歳前後。

おかしい。俺達がさつき会った由衣は中学生ぐらいはあつたはずだ。

「えつと……由衣ちゃんつてそんなにちっちゃかつたっけ……?」

「うっ! ひ、酷いです! 確かに私は元から小柄ですけど、今言うことないじゃないですか!」

「いや、その……ホントに由衣ちゃんが縮んでるんだけど」

「へ? ……へえええつ!」

ようやく由衣は気づいたらしい。自分の体を見て驚いている。

「ええ!?! なんで!?! つつというか、海斗さんも綾さんもなんだか少し幼くなったような

……」

「へ、マジ?」

「……マジだ。携帯のプロフィールを見ろ」

そう言った俺はすでに、指定した画面を開いていた。

「身体年齢十四歳……魔力ランクC……住所も確定している」

「本当だ……俺は十四歳……げっ、魔力ランクDのしかもマイナスじゃねえか」

「えっと、私は……九歳!? しかも魔力ランクB+……!」

規定範囲内であれば年齢や魔力はランダムみたいだ。俺も海斗もあまり歳が変わらなかつたのは運が良かったか……。

……ゲームはすでに始まっている。指令が来る前にやるべきことをやらないと……。とりあえずここから動こう。住所が確定しているから、住居も用意されてるはずだ。まずは自分の済む場所を確認、そして生活の準備だ」

「お、おお」

「あれ、でも……住所はわかりましたけど、私達この場所がわからないですよ……?」  
……開始早々壁にぶち当たった。

そうだよ、この住所がどこなのか俺達知らねえじゃないか。どうやって行くんだよ。プルルルル。プルルルル。

「? メール着信?」

「俺もだ」

「私も……」

差出人は管理者……奴か。

差出人：管理者

件名：ナビアプリ追加

内容：

ナビゲーションアプリを追加した。

行きたい場所の住所を入力することで、ナビゲーションマップが表示される。

ナビゲーションアプリは待ち受け画面に表示。

メールを閉じて待ち受け画面に戻ると、確かにアプリが追加されていた。アプリを開くと、住所入力画面が切り替わる。

試しに俺の新しい住所を入力するとマップが表示された。赤い線が道を通っており、どうやら道筋を表しているらしい。

「……そういうことらしい。まずは自分の住居に行ってみようぜ」

「おう、そうだな」

「ここで……一旦お別れになりますね……」

「大丈夫だよ、由衣ちゃん。なんかあったら連絡してくれ。すぐに駆けつけるからな」

自分の住居へ向かうため、俺達はここで一時解散となった。



だがしかし。

「……………なあ」

「……………なんだ」

海斗の声に短く返す。

「一時……………解散だったよな？」

「ああ、確かにそんな感じだったな」

「あはは……………一旦お別れって、私が言いましたね」

森を抜けるまでは別に良かった。特に不思議とは思わなかった。

その後も途中までは、まあ一緒に道つてことも十分あると思つていた。

「結局、三人揃つてお隣同士つてオチどう思う？」

「……………」

「す、すみません……………」

そう、海斗の言う通り俺達の住居は三つ並んで建つていた。

どうやら指令の時どころか、日常生活もチームになりそうだ。

「……………あの城から出る前にチームを結成したからかもな。確かにこれなら合流も楽で助かる」

「綾！ 頼む！ お隣なんだから飯作つてくれ！」

「そう言うと思つていたよ」

早速海斗から拜まれた。こいつとことん脳筋だから、料理もドベなんだよなあ。

「わかつたよ。由衣も飯の時はうちに来るか？ 食費は馬鹿にならないんだ。三人分纏めて作る方が費用も抑えやすくして何かといい」

「は、はい！ お世話になりますっ」

「まずは自分の家に入つて、家の中を調べてみるか。服とか用意されてれば助かるけどな」

そう言つて、俺は真ん中の『朝霧』と書かれたプレートのある家へと入つた。



予想通りというか、なんとというか、家の中にはまさに何もなかった。

いや、一般的な家具や調理器具は揃つてはいた。だがそれだけ。衣類も食材も空っぽ、新築直後の家同然の有り様だった。

「新築買うと、こんな感じなんだなあ」

食材と衣類の確認だけしてこつちにやつて来た海斗は現在、リビングのソファにふん

ぞり返っていた。

俺はそんな親友を気にせず、ソファの下を覗き込む。

「綾さん、何やってるんですか？」

海斗と同じく、簡単に点検してこつちにやってきた由衣は、そんな俺に質問してきた。

「盗聴器の存在有無の確認」

「ブッ!!」

おい海斗、人の家に睡かけてんじゃねえ。

「まあ、そんな機械使わなくても監視できるだろうけどな」

「マジかよ」

「マジだ」

とりあえず一通り調べてみて、怪しいものは見つからなかった。

「で、これからどうすんだよ？」

「買い物だな。生活に必要な食料と衣服を買いに行くぞ」

ぐぎゆる。と由衣の方からそんな音が聞こえてきた。

現在、十二時二十七分である。

「………と思っただけどそれより先に昼飯だな。コンビニ弁当でいいか？」

「あう………す、すみません………」



「ええー？　せっかく俺達それぞれに百万あるんだし、パーツと外食しようぜ？」

「したければお前だけでしろ。そして勝手に軍資金尽きる」

アホなことを主張する海斗を簡単に切り捨てる。

「んだよ、なんか今日の綾は厳しーな」

「手持ちの金百万。これで一年どころか、数年間生活しなきゃいけないんだぞ。食費、衣類代、電気・水道・ガス代、その他諸々。お前がアホみたいに金使つて、金欠状態になるのはご免だぜ？」

「うぐつ……わかったよ」

がつくりと肩を落とす海斗。諦める。仕方ないことだ。

「道覚えるために、みんなで行こうぜ。それから必要なものを買に行くぞ。支払いは俺が纏めてやってやるから」

「あ、はい」

由衣も賛成したし……よし、じゃあ行くか！

「あれ、もう行くの？　ちよつ、待てよおい！」

さっさと来いよ海斗。置いてくぞ？



俺達の家は駅前通りの近くに近かったため、その商店街を通ることにした。

海斗と由衣があちこちせわしなく視線を巡らせるのを片目で見ながら、俺は観光気分の二人とは別の理由であちこち視線を巡らせる。探している対象はなかなか見つからない。

「ん!? おい、あれって翠屋じゃねーか!？」

「えっと……あ、本当ですー!」

「お前ら……もう少し声抑えろ。恥ずかしいじゃないか」

海斗の声がデカいせいで行人人の注目の的になってしまった。マジでやめてくれ。

「いや、だって翠屋だぜ? リリカルなのは知ってる奴にとつて実際に見れて感動しない方がおかしいだろ!？」

「俺の場合はお前に無理やり見せられたんだ。しかも六週も。だから感動はしねえ……ん?」

ため息をついて翠屋に視線を向けた俺だったが、直後俺は翠屋に注目することとなった。いや、正確には翠屋の客として来ている人達に、だ。

……やっぱり海斗は、こういう時に役に立つ。なんせ思考が一般人そのままだからな。

「ん、どうした？ ……ははーん、さては行きたくなつたな？ ならば——」

「行かねえぞ。コンビニはすぐそこだ。ほら、由衣も」

「は、はいっ」

コンビニで俺は鮭の塩焼き弁当、海斗は豚肉生姜焼き弁当、由衣はおにぎり二個、そしてそれぞれジュースを買い、近くのベンチで昼食とした。

「なあー………なんで翠屋に行かなかつたんだ？ あそこは喫茶店なんだからケーキ以外にも普通にあるんだぜ？」

「お前なあ………気づかなかつたのか？ あそこにいた客の半数以上が、『参加者』だったんだぞ」

「え、わかつたんですか？」

口元に「ご飯粒をつけた由衣が訊いてきた。

いつご飯粒に気づくかなと思いつつ、鮭の身をほぐす。

「遠かつたけど見た感じ、年齢が明らかに十代前半の奴ばかりだった。考えは海斗と同じ、なのはの家の経営してる店だからってところだろ。ついでに言ったら、多分参加者はみんなケーキ買ってくぜ。それもたくさん」

「お前、エスパーか？」

「お前も翠屋行ったら、ケーキ買うつもりだったろ」

「……………」

目を剝らされた。

まあ親に保護され、金に困ることがあまりない高校生がいきなり百万持ったなら基本的にはこんな感じなんだろう。高校生はしっかりとっているように無計画だ。

そりゃ、生活費を出しているのは大抵親だ。高校生から一人暮らしをすることはまずない。だから生活費のやりくりというのを知らず、大金を一気に持たされたら簡単に使ってしまう。

俺の場合はまあ、ちよつと特殊だし、一人暮らしに慣れてるからなんとか二人を先導していつてるけど。

それにしても翠屋にいた参加者達は大概一つの席に一人……相席している奴らも会話をしている奴らは一切見えなかった……ただ偶然会話してなかったかもしれないけど、あの様子だとチームを組んでないか、ルールそのものを見てない可能性が高いな。

ルールを確認してない奴らで恐ろしいのは、ルールを知らない故にスターチップを強奪しようとする野郎の可能性があることだ。ルール上そういう奴は失格になるが、俺達のスターチップを狙って、海斗や由衣に危害を加えられる危険性がある……対策を考へとかかないと。

他にも、考えるべきことがたくさん――

「綾さん？」

呼ばれて気がつくのと、二人はすでに食事を終えていた。

「ん、おつとわりい。考えすぎた。すぐに食うよ」

「急いでくれよ。次は買い物だろ？」

「……ああ、そうそう。晩飯はどうする？ できればみんなの意見に応えたい」

「綾は料理もうまいからな！ 俺は肉があればなんでもいい！」

「あ、私、ハンバーグがいいかな……」

「じゃ、ハンバーグで。よかつたな海斗。お前の意見が反映できて」

「え、全員の意見を反映させるんじやなかったの？」

さて、午後からは買い物だ。

まずは服と下着を買って、食材や調味料も買って……あ、先に料理本も買わなくっちゃな。

ああ……海斗にラノベをある程度なら買わせてやろうかな？ あまり金がかからない程度に、三シリーズまで。由衣にも、何か自由に買わせてやるか。

……荷物が重くなりそうだなあ……。今日は最低限の量に抑えられるよう頑張ろう。

## 第三話

「ん……くあつ……」

もぞもぞ、のそりと布団から這い出る。

目に映ったのは見慣れない部屋。昨日奴に用意された俺だけの自宅を見て、夢じやないと改めて自覚する。

(今何時だ……)

眠気の残る目で時計を探す。いくらか視線を巡らせ、壁にかけられた五時三十六分を示す時計を見つけた。

(早い……じゃないや。大体予定通りか……)

これからは俺が自分を含む三人分の飯を作らねばならないため、朝は早く起きなければならぬ。

飯できたら二人を起こして三人で朝食取って、食い終わったら食器洗って洗濯もして、掃除もこまめにやるか。この世界の調査に探索……俺達が最もやるべきことが最後になつてゐる気がするが気にしない。俺が母さんみたいなことやる感じになつてはいるが気にしてはいけない。

(……まずは飯作っか)

料理はともかく、自分の家の掃除くらいは海斗にもやらせよう。



朝食を三人で取り(主食は米、おかずは味噌汁に鮭の塩焼き、ほうれん草のゴマ和え)、食器を片付け、洗濯して(三人分纏めてやった)、掃除も一応やって、やることをやりきった後、俺は今度はパソコンを弄っていた。ネットは繋がっていた。

「どうよ?」

海斗が訊いてきた。由衣もいる。食事のみならず、そのうち寝るのも俺の家になるんじゃないだろうかこの二人。構わないけど。

海斗の質問に対して、俺は顔に難色を示した。

「……やつぱり厳しいな。完全に無理って訳じゃないけど、運に任せて出せるような額じゃない」

俺達がパソコンで見てるのは原作キャラが通う、私立聖祥大学付属小学校のホームページ。その中の学費について見ているんだが……はつきり言って高い。

奴のゲームに向けて、原作キャラに関わりやすくするため由衣を聖祥小学校に通わせ

ようと思ったのだが、これはキツイ。俺と海斗が年齢偽ってバイトで稼いでもだ。完全に無理ではないって言ったけど、冗談抜きでキツイ。

その上、編入しても必ずなのは達と同じクラスになれるという保証はない。そこは完全な運任せだ。クラスになれなければ必然的にエンカウント率が圧倒的に低く、場合によつては関わるのが困難になる。そんなギャンブル性の高いところに大金を注ぎ込む余裕はない。

「どうする？　由衣ちゃんが聖祥に行つて同い年を活用してなのは達との接点を作るつて計画。最初つから転けてんじやん」

……返す言葉もない。

「……どこか市立の学校にしよう。どの道由衣は年齢的に学校に通わせなくちゃいけない。給食費とか色々出す必要が出てくるし、俺達はバイトはするぞ」

「おう。……ところで、無印ではなのは側とフェイト側、どっちにつくつもりなんだ？」「指令の内容にもよるけど、管理局と接点を繋いで、味方につけたいところ。だからなのは側についての方がいいと思つての聖祥への編入計画なんだが……」

「ぼつちり潰れたと……」

そうなんだよなあ。

まあ、指令の内容がフェイト側の方が有利になるようなものであれば、やるべきこと



も変わってくるし、まだなのはと接触する時じゃないけど……。

「あ、あの……」

「ん？ 由衣ちゃん、どうした？」

「えっと……私となのはちゃんが、その、友達になる方法なんですけど……」

「……あるのか？」

「あの……なのはちゃん達、塾に通ってるから……私もそこに通えば……」

「……………」

……それだーっ！



なのはと接点を繋ぐなら、塾で繋げばいい。由衣のそのアドバイスのおかげで市立の学校で問題なくなり、午後に近くの学校への編入手続きを行った。

それにしても、手続きがかなり緊張した。俺の身体年齢が十四歳であるため、話し合  
いの時には怪訝そうな顔をされた。

どうにかして手続きが終わり、俺と由衣は帰路につく。ちなみに海斗は自宅待機。

「はあー。これでなんとかなったか」

「お疲れ様です……学校かあ……」

後半そう呟いた由衣の表情は暗い。前の学校ではいい思い出がないのだろう。

俺は由衣を安心させるべく、彼女の頭に手を置き、優しく撫でた。

「大丈夫さ。俺達がいるし」

「……はいっ」

由衣は嬉しそうに微笑んだ。その顔はとても可愛らしいものだった。

——そんな俺達の前に、一つの影が立ちふさがった。

「……お前ら、転生者だろ」

「……転生者？　なんだそれは。悪いけど俺達は帰りを急いでるから」

知らないという風に答えつつ、いつでも動けるようにかつ相手に気づかれないように身構える。

立ちふさがったのは見たところ十二歳くらいか？　見るからにデブイブイであることを伺わせる短剣、金髪、オッドアイ……ではないのは、自重ではなくチップで叶え損ねたからなんじゃないだろうか。

明らかに俺達に威嚇の姿勢を示している。本来なら意味のない行為。——ルールを把握していない転生者だ。

「とぼけんな。多少ガキっぽくなってもお前の顔は覚えてるぜ。あの時、最初に神に意

見した奴だろ？　そんでもってお前と一緒にいるってことは、そいつも転生者なんだろ？」

「……だからどうした？」

「お前、スターチップ一個も使ってなかったよなあ。使わないんだったら、チップを俺に寄越せよ。全部だ」

説明読んでない奴ってこうも恐ろしくなるんだな。説明はちゃんとしつかり読むようにしないとな。

「断る。というか、ルール説明ぐらい読めよ。スターチップの譲渡や売買、強奪とかは禁止。違反した場合は即失格にされるんだぞ」

「はっ！　そんなハツタリ効くかよ！　神は指令に従い、チップを集めて願いを叶えてもらう。これしか言ってるねえ。そんなルールがあるなら、神がちゃんと説明するじゃねーか！」

言わないところに罠があるってのがわかんねーのかこいつは。

「まあいい。どつちにしろ敵は少ない方がいいんだ……二人ともぶっ殺して、それから奪ってやる！」

「危ない思考だな……」

短剣を上段に構えて突進してくる。ぶっ殺すという言葉からして、非殺傷設定なんて

ないんだらう。

……だが。

(……甘い)

握りが甘い。構えが甘い。それに遅い。

こんなの、スポーツだけは一流の、海斗の剣道に比べたら圧倒的に弱い。

短剣を簡単によけ、足を払ってあっさり倒す。

短剣を握る右手を踏みつけ、頭を地面に押しさえつけ、殴る態勢を取る。

「誰をぶつ殺して何を奪うって？ ガキ」

「ぐっ……!!」

さて、こいつ警察に突き出そうかな。あ、警察署までの道のりがわからん。とりあえずなんか適当なもので縛って――

「きゃあっ!!」

「っ!」

突然の由衣の悲鳴。振り向くと、由衣を抱えるようにして拘束し、首もとにナイフを突きつけるもう一人の少年がいた。

(野郎……グルだったか!)

迂闊だった。相手が一人と思って油断してしまった。

「クククツ……どうする？ 殴るのか？ 下手に動けばそのガキの命はねえぞ……？」

「クズが……！」

「お前も負け組だろ？ とつとと離せよ。そしてチップを渡しな」

「……………」

ゆつくりと離れて立ち上がり、ポケットからスターチップを取り出す。区別がつかないチップを、普段しつかり持っておくように、俺から指示を出していた。

そのスターチップを、その場に放り投げる。

「へへっ……お前も、さっさとスターチップを渡しな……」

「で、でも……それはルール違反で……」

「由衣！ ……今は身を守ることを考えろ」

「綾さん。でも……」

由衣は少し躊躇して、それからポケットからチップを取り出して俺同様に投げた。

「へへへっ……それでいいんだよ。……まだ動くなよ。人質がどうなつても知らねえからなあ」

短剣持ちは地面に散らばった俺のチップを拾い上げる。ナイフ持ちも、由衣を人質に取ったまま由衣のチップを拾っていった。

「つたく……痛かったじゃねえかこの野郎!!」

「ぐっ!!」

「綾さん!」

短剣持ちの突然の一閃に、反射的に盾にした両腕が斬られ、鮮血が噴き出した。幸い、傷は浅い。

「てめえはぶっ殺してやる……手足切り落として、メツタ刺しにしてぶっ殺してやる。そうやって他の参加者どもも殺して、俺がオリ主になってやるんだよおっ!!」

「くっ……………」

狂人の刃が振り下ろされる。……………ここまでか……………!

ジュツ……………。

「え……………」

「は……………」

互いに呆けた声を出した。肉を斬るのは明らかに違う、蒸発するような音。そして短剣は、俺が触れるはずだった部分から先が消えていた。

「な、何が起きた……………」

刃がなくなった剣を持って狼狽える少年。

俺も訳がわからなくなっているところに、もう一人の絶叫が響いた。

「うわあああああっ!?!」

「っ!？」

絶叫の方に振り向くと、先に仰向けに倒れた由衣が見えた。  
すぐに、由衣の元へ走る。

「由衣っ!」

「いたたたっ……一体、何が……」

「……っ!」

走っている途中に『異常』に気づいた俺は、由衣の頭を胸板に押し付け、彼女の視界を封じる。

「わぶっ!　り、綾さん!？」

「後ろを見るな……!」

……由衣の後ろには、由衣を抱えていた片腕と、胴体の大部分を失った少年の姿があった。削げた腹から、赤い筋肉や内蔵がはつきりと見える。俺でも下手に気を抜いたら胃の中身をぶちまけてしまいそうな程の吐き気と不快感が襲ってくる。不思議なことに、血は落ちてこない。

「な……何だよっ、何だよこれえっ!？」

痛覚が潰されてるのか、意識はあるらしい。

少年が狼狽していると、そいつの身体が青白く発光し始めた。

「な、何だ!? たっ、助け——」

少年が言い切ることは叶わなかった。言い切る前に少年は、光の粒子となつて跡形もなく弾けてしまった。残つたのは、いつの間にか取り落としていた由衣のスターチップのみ。

「な、何だよ……何なんだよお……!」

狼狽える金髪少年の身体も、青白く発光し始めていた。

「……言つたろ。チップの強奪はルール違反で即失格だつて」

「は……? 何言つてんだよ? そんなルールあるわけ——」

「ルール説明はメールで、開封済みとして表示されている。そこにちゃんと記されていた」

「……何だよ。なんでお前はそんなに知つてんだよ……」

「……警告はした。聞かなかつたお前が悪い」

「ふざけんな——!」

刃のない短剣を持つて殴りかかってきた。が、触れる直前にその腕が蒸発するような音を発して霧散した。

「あああああつ、う、腕があつ……!」

そんなやり取りの間にも、少年は光に包まれていく。



「た、助けて……助けてくれよお……！」

継るように伸ばした手が、俺の腕に触れる前に霧散する。

「いやだ……いやだあああつ……！」

悲痛な声に対して無情に、パキンツ……と小さく音を立てて少年は光の粒子となって弾けた。

カラン……。俺のスターチップが地面と小さな音を立てた。

沈黙が流れる。そこでようやく、由衣が震えているのに気がついた。

「由衣……？」

「……綾さん……さっきの人達は……？」

「……消えた。失格者として、光の粒子みたいなのになって消された。多分、奴の仕業だ」

「……失格者って……みんなそうなるんですか……？」

「それは——」

自分で声が震えているのがわかった。一旦言葉を呑み込んで、言い直す。

「わからない。でも、可能性は高い」

「——」

由衣がよりはつきりと震えた。次には嗚咽を漏らし、俺にしがみついてきた。

「……嫌だ。死にたくつ、ひつく、死にたくないよ……綾さんや……海斗さんとまだまだ一緒にいたいよ……」

泣きつく由衣を、俺は強く抱き締める。

「大丈夫だ……二人とも俺が守ってやる……!」

俺が二人を、海斗と由衣を守る。

それが、リーダーである俺の使命。

このふざけたデスゲームから二人を守り、そして止めてみせる……!

もう……失うことがないように……!



服を破って両腕の応急処置を行い、泣き疲れて寝てしまった由衣を背負って帰宅。

由衣をベッドで寝かせ、ちゃんとした手当てをした後海斗を呼んで今日起きたことを説明した。

「つまり失格になったら……スターチップを払えなくなったら俺達死んじまうつてのかわかる!?」

「ああ……ほぼ間違いない。それと声がデカイ。もうちよい抑えろ」

「あ、わりい」

寝ている由衣に気づいて海斗が声を抑えたのを確認してから、次の言葉を紡ぐ。

「それと、その失格者は願いを叶えてもらったにしては大して強くなってるように見えなかった。叶えてもらった内容にもよるけど……チップ一個の期待値は低そうだったぜ」

「マジかよ……一個からでもいいって話、ほとんど詐欺じゃね？」

……元はと言えば、俺が質問したからなんだよな、それ。

チップとの交換は何個からかと訊いて、奴は一個からでいいと答えた。もし俺があんな質問をしなければ、こんなことにもならなかった気がする。……まあ、たられば言うのはただの言い訳に過ぎない。無駄だ。

「……とにかく俺達が生きるためにも、スターチップを集めなければならない。幸いチームルールで、俺達で指令を達成すれば由衣の安全も確保できる」

「だよな。由衣ちゃんを危険な目に遭わすのは俺も反対だぜ」

「最優先事項は俺達自身の安全確保。神への謀反はその次だ」

謀反する以前に俺達が生きていなければ意味がない。

まずは生きるためにも、力を蓄えるためにもスターチップを収集が必要だ。分量を集めて、謀反はそれから。

具体的にいくつ集めればいいのか知ることができればいいんだが……まあ、たられれば言うのは以下略。

「まあ、話はここまでにして、そろそろ飯を作るか。ちようどいい時間になったら由衣を起こしてくれ」

「お前、その腕で大丈夫なのか？ 料理の時に下手したら、傷口開くんじゃね？」

「……………」

その日の夕食は急遽買ったコンビニ弁当になった。



プルルルル。プルルルル。

差出人：管理者

件名：指令1

内容：

次の指令を指定期間内に実行、達成せよ。

指令内容：ジュエルシートを3個以上入手せよ。入手と判定される条件は、所有時間

12時間以上、もしくは緊急指令等で管理者から入手承認を得た場合に限定する。なお、同シリアルジュエルシードの複数回入手はカウントされない。

期間：PT事件終了（時の庭園崩壊）まで

報酬：入手したジュエルシードと同数のスターチップ

——午前零時。指令が携帯に届いた。

# 第一章 願望機争奪編

## 第四話

違反者の襲撃、そして失格者への処罰を目の当たりにした次の日。

朝食を取り、由衣を学校に送り出して、家に帰ってから、俺と海斗で緊急会議を開いていた。

議題は、夜中に送られてきたらしい、奴からのメール。

差出人：管理者

件名：指令1

内容：

次の指令を指定期間内に実行、達成せよ。

指令内容：ジュエルシードを3個以上入手せよ。入手と判定される条件は、所有時間12時間以上、もしくは緊急指令等で管理者から入手承認を得た場合に限定する。なお、同シリアルジュエルシードの複数回入手はカウントされない。

期間：PT事件終了（時の庭園崩壊）まで

報酬：入手したジュエルシードと同数のスターチップ

「……ジュエルシード争奪戦ってことか？ これ」

「だろうな。ジュエルシードは全部で二十一個。理論上の入手最大値は二十一個になる」

「いや、それ無理じゃね？」

「当たり前だ」

「ごまかすことなく肯定。全部集めようとするのは馬鹿と限られた勇者だけだ。」

「でも、これなら今すぐ町中を搜索すればいいんじゃないか？ 原作で見つかった場所もわかるし、全体の七分の一だから案外あっさり見つかるかも……」

「馬鹿だなお前は。七分の一じゃない。お前散々俺に見せてきただろ。海の中に何個あるか。」

「あつ、六個……」

「まずその時点で十五個。さらに原作で描写されたものはやフェイトにすぐに見つかり、十二時間も持つてられない。それが確か……七個だったか？ 正確な数は忘れたけど。つまり俺達が実質探せるのは結局のところ約八個。そのうちの三個以上を指令の参加者に加えてるのはやフェイト、管理局を差し置いて入手しなければならない

んだ」

「……それ、なんて鬼畜ゲー？」

「それに半分以上が強制参加って時点で、こりやハメだな」

「これの恐ろしいところは、不可能じゃないように見せているところに加えて強制参加させられる奴がいることだ。」

指令の下に追記として、『不参加の申告は指令が届いて24時間以内に行うこと』と書かれてあったが、ルールには不参加の申告をするにはスターチップを二つ消費する。払えなければ、その人は強制的に参加となり、期間終了までにチップを手に入れなければ失格となってしまうのだ。

「強制参加って、大体どれくらい？」

「お前が由衣を連れてくるのを待つ時にざっと見たけど、あいつに群がるのがなかったのが俺達を含めて十三人程だった。壁際から全体の四分の三見渡せたとして、人混みで見えなかった四分の一を加えたら大体十六人前後。そこから逆算して、大体八十人以上がああ場でチップを使ったはずだ。群がった奴らの中でチップを二個以上残した奴はまずいないだろ」

「……。それって、つまり……」

「三つ以上手に入らなければ、八十人以上が問答無用で失格になる」



「……………あ、あの時、チップ使わなくてよかったなあ。おかげで俺達スルーでき——」

「生き残っても、その先にあるのはより激闘になる第二期」

ここまでの会話で海斗の顔は見てないが、絶句したのがすぐにわかった。

そう、この指令の成功は絶望的だ。だが仮にチップを二つ払って不参加にしても、第二期のA's編で狩られる。

この指令の難易度——いや、難易度なんて生易しいものじゃない、鬼畜度と言った方が正しい——を見て改めてよくわかった。俺が質問をしようがしなろうが、ほとんど関係なかったんだ。あいつは端から俺達を生かすつもりなんてない。

失格者の断末魔を聞きたいだけ。

失格者が踊り狂う様を見たいだけ。

あの時笑ったのはただ、それが早く見れるようになったから。

ああ、そうか。俺達はあの神様を喜ばせるために呼ばれたのか。大義なことに選ばれたんだなあ……………。

「二十一個集めるぞ」

「……………」

「失敗しようが棄権しようが大して変わりないんだ。なら成功して、大量のチップを稼ぐしかない」

「いや……お前、さつき無理って言ったろ？」

「普通にやればな。だけど普通のやり方をやってるようじゃあ奴に適わない。だから、普通より一線越えたやり方で二十一個の獲得を目指すんだ」

目が笑ってない笑みというのをラノベとかでよく見るけど、多分今の俺がそのような気がする。

……冗談じゃねえ。あいつの満足のために死んでたまるか……！

「とにかく、俺はやるぞ。海斗も手伝え」

「お、おう。……で、何をすればいいんだ？」

「今は、まだ待機。今のうちにバイトを探しておけ。俺は今腕がこんだし、周辺調査でもしてる」

「え、ジュエルシード探しに行かないのか？」

「行動するタイミングも大事なんだよ。俺の考えに任せとけ」

第一期での指令が、ジュエルシード絡みだというのは予想がついていた。ある程度の動き方なら、もうシミュレートできている。

由衣にも手伝ってもらおう。やはり、管理局に接触する必要がある。

チーム反逆者も、静かに動き出した。



なのはと接触するために由衣には塾に通ってもらうことにして、それから数日後の夕食の時のこと。

「え、なのはがもう魔導師に目覚めてる?」

「はい……制服の下から出ていた紐を尋ねたら、待機状態のレイジングハートを見せてくれて……」

由衣は塾に行った初日に色々と偶然が重なってなのはと隣の席に。それから由衣がなのはに問題のフォローをしてから三人と知り合いになったらしい。ちなみに由衣曰わくまだ友達にはなれていないとのこと。

で、今日はなのはの制服の襟から見えた紐を発見、訊いてみるとレイジングハートだったそうだ。

「つてことは、なのはの初変身シーンを見逃したつてことか!？」

「……そうなるけど、そもそも俺達が来る前に始まってたんじゃないのか? ユーノの念話も聞こえてこなかったし」

どつちにしろ、最初と神社のジュエルシードは回収されたと見た方が良さそうだ。

「あ、そうなんですかね？ 私もそこは不思議に思つてて……」

「それはいいとしてだ。多分巨大樹の事件はまだ起きてないはずだから、気をつけろよ」  
「というか、その事件が起きるのは休日なんだし、俺達三人揃つていれば問題なくね？」

「まあ、そうかもな」

「あ！ というかその日のサッカーの試合観に行こうぜ！ なのは達に会える！」

「あ！ 私も賛成です！」

「へいへい……」

呑気な考えである二人に呆れつつ、夕食の麻婆豆腐を口にした。



土曜日。例のジュエルシード事件の日。

そんでもってそれより先にある翠屋JFCの試合を観に、俺達はその場所へとやってきた。

「おー」

「わー」

二人して感動の声を漏らしている。そんなに感動するものなのか？

「ばっか、原作の場面に立ち会っているんだぞ？ 感動しない方がおかしいって」

「俺は変人だと言いたいんだな？ それとこれから何回感動するつもりだ」

俺のツツコミを聞かず、二人は歩いていく。仕方なくついていくと、俺達が知る顔に会った。俺と海斗は一方的に知っているのだけれど。

「あ、由衣ちゃん！」

「なのはちゃん！」

なのはである。さらに彼女の後ろにはアリサとすずかもいる。

由衣もなのはに近づくと彼女へと駆け寄っていく。……なんだ、仲良いじゃないか。

「偶然だねー。由衣ちゃんもサッカー観に来たの？」

「うん。ちよつと興味持って」

「そうなんだー。由衣ちゃん、よかったら一緒に観よ！ 私達が応援するチーム、お父さ

んが監督してるの！」

「うん！」

完全に友達の話だよ。

「由衣、後ろの二人は？」

そこに、アリサが近づいてそう尋ねた。よかった。蚊帳の外に出されるかと思った。

「あ、えっと……」

由衣はその質問に言葉詰まらせ、困ったような表情でこっちを見てきた。いや、そこまで困る程のものか？ 確かにデスゲームのことは言えないけど。ほら、そんな仕事するからアリサから疑いの視線が。

……はあ、しょうがない。

「訳あって、俺達は三人で共同生活してるんだ。俺は朝霧綾、呼び方は好きにしてくれ。……海斗、お前も自己紹介しろ……」

「……………」

海斗は少しだけ口を開けたまま呆然となのは達を見ていた。さっき言ってた感動と似たようなもの……だと思う。

俺はそんな無防備同然の馬鹿の脇腹に、肘鉄を叩き込む。

「おげっ!？」

妙な喘ぎ声を上げ、馬鹿はその場に倒れる。

「なにしてんだ馬鹿。さっさと自己紹介しろ」

「てめっ……いきなり肘鉄はねえだろっ……藤木海斗だ。よろしくな」

爽やかな笑みを浮かべる海斗だが、無様に倒れている上に痛みで引きつっているため、全然格好がつかない。

「ちなみに、同じ藤木でも由衣との血の繋がりなんてものはないから」

「へ、へえ……」

なのはが引き気味に呟いた。アリサも、目の前の倒れている海斗に目をとられ疑りの目はなくなっている。

「あはは……あ、自己紹介まだでしたね。月村すずかです」

乾いた笑みの後、思い出したように自己紹介をしたすずかに続いて、残る二人も自己紹介をする。

「あ、そうだった。高町なのはです」

「……ちよつと疑ってた私が馬鹿だったかも……アリサ・バニングスです」

「ああ。由衣から三人のことは聞いてるよ」

互いに自己紹介を終えたところで、すずかがこんなことを言った。

「共同生活って言うと、和也かずやさんと竹太刀たけだちさんに似てるね」

「ああ、そうねー」

「和也くんと……竹太刀さん？」

由衣が反復して訊くと、なのはが説明してくれた。

「うん。由衣ちゃんみたいに塾で知り合ったのが佐崎和也くんだね。さつきたまたま会って、一緒に試合を見ることになったの。それで、和也くんと一緒にいたのが、大体

綾さんや海斗さんと同じぐらいの人で、坂本竹太さかもと刀さん。二人で一緒に暮らしてるんだって」

……間違いない。転生者だ。それにルールを読んで二人でチームを組んでる可能性もある。

「偶然もあるんだねー。最近塾で知り合った二人と今日会って、しかも二人とも共同生活を送ってるって」

「性格は全く違うけどね。片や丸メガネのせいでかわいい顔が残念な内気な女の子、片や自分勝手にやけにキメたがる男の子」

「え、そうなの？ 俺由衣ちゃんが眼鏡外したとこ見たことねえぞ？」

「あら、そうなの？ ちょっと前に由衣が転んで眼鏡が外れちゃった時があって、その時見えた素顔がそれは結構なかわいさで——」

「わああつ！ あ、アリサちゃんつ、言っちゃダメ！」

いつの間にか話が変わっていた。というか、そろそろ試合が近いんじゃないか？

「立ち話もそれぐらいにしないか？ そろそろ試合も近いだろ」

「あ、そうでした。よかつたら、みんなと一緒に観ませんか？」

「おう。俺は勿論いいぜ！ 綾もいいだろ？」

「どっちでもいい。元々付き添いなんだし。由衣は？」



「はいー！」

「……じゃ、頼む」

「はいー！」

なのは達の案内についていく。すると先に二人の人影が座っていた。

一人は、こちらを見て明らかに不機嫌そうな顔をした、なのはや由衣と同じくらいの少年。銀髪……というか白髪だな。かつ、緑と金色のオツドアイ。

もう一人は、茶色い髪の毛がクリクリのもつさもさ……所謂、天然パーマ。年齢は俺や海斗と同じぐらい。男だ。

天パの方は俺達に気づくなり、爽やかな笑みを浮かべた。ああいう笑みを自然にできるって、モテるんだろうな。俺はよく仏頂面だ。

「おー、なのはちゃん。帰ってきたかあ。三人増えとるけど、その人達は誰なん？」

天パは訛りのある声——大阪弁だ——でなのはに尋ねた。

なのはは由衣を自分の横に誘導し、紹介する。

「こちらは塾で知り合った友達、藤木由衣ちゃん」

「ど、どうも……」

友達みたいではなく、もう既に友達だった。

「藤木海斗。由衣とは兄妹って訳じゃなく、たまたま苗字が同じってだけだ」

「朝霧綾。色々あって、この海斗と由衣の三人で共同生活している」

「おー。そうなんかそうなんか」

天。パは納得したようにうんうんと頷いて、それから自己紹介に移った。

「わいは坂本竹太刀。名前を要約すりゃあ長い竹光や。わははははー！」

笑うところなのだろうか？ これ。

「ほれ、和也。おめーも自己紹介しい」

「……ケツ」

竹太刀は未だに不機嫌な様子の子の少年——和也に自己紹介を促すが、和也は鼻を鳴らしてそっぽを向いた。

ガシッ。

「自己紹介しいゆーとるやろ？ な？」

「ぬあっ!? てめっ、いきなりなにしやが——いだだだだっ!!」

反抗的な態度の和也の後頭部に、竹太刀がアイアンクローを決め込んだ。

和也は抵抗するが、体格差故か全くアイアンクローから解放される気配がない。

「あー！ 言うっ！ 言うから離せよ！」

「よし離した」

「いって……ったく……。……佐崎和也だ」

上下関係がしつかりしているようだ。

「色々話してみたいけど、もうすぐ試合の始まりや。試合の応援に集中しよか」  
名前だけ言つて黙り込んだ和也に竹太刀は不満そうだったが、それを言うのはやめた  
ようだ。

「あ、そうだったの。由衣ちゃん、こっちこっち」

「うん！」

なのは由衣を連れて誘導していく。

「さて、男子も集まつて、一緒に見るで！ な！」

「おう！ 綾、さっさと行こうぜ！」

「ああ」

すぐに仲良くなる海斗と竹太刀を見て、俺も男三人の中へと入っていく。



元々二人の付き添いで来たため試合に大した興味のなかつた俺は、由衣や海斗の様子を見ていた。

俺達とは少しだけ離れた場所にいる由衣は、なのは達とすっかり友達として溶け込ん

でいた。最初は先程の友達と言われたことに戸惑っていたが、今では三人を友達として思えているようだ。

あれだけ仲良くしているのを見ると、塾友達で終わらせるのは惜しいように思えてくる。なんとかして、聖祥に通わずことってできないかな……。

海斗は竹太刀と、あつという間と言えるぐらいに打ち解け、試合観戦と一緒に楽しんでいた。元々バカ騒ぎが好きな海斗と、竹太刀は馬が合うらしい。

ちなみに和也はなのは達のところへ行こうとしていた……というか現在進行形で行こうとしているのだが、そこは竹太刀に油断なく、首根っこを掴まれて止められていた。(それにしても……)

俺は辺りを見回した。明らかに、俺達に敵意を向けてる奴らがこの場に複数いる。その上俺が見渡すと咄嗟に視線を逸らした奴らが見えた……見え見えじゃないか。

そうして敵意のある奴らを特定していると、いつの間にか坂のてっぺんまで登っていた竹太刀が、こちらに手招きをしていた。ふむ……。

「海斗、少し由衣達のこと頼む」

「へ？」

返事を聞く前に、俺は竹太刀の元へと向かった。

## 第五話

竹太刀についていき、辿り着いた時には、試合場所からそれなりな離れた距離になっていた。

「いやあ、すまへんなあ。こないなところに呼び出してもうて」

「別にいいさ。で、何の話だ？ ……つつても、どうせ指令についてなんだろ」

「……やっぱり、気づいとったか」

竹太刀は含み笑いを浮かべた後、コホンと一つ咳払い。そして話を始めた。

「確かにわいらは転生者や。も一つ言えば、わいは自分のことあの場所で観察してたんだよ。神様に対してあの態度、おもしろい思うてな。それで携帯よう見るから、わいは携帯の中にルールがあるのに気づけたんや。ようあないなところ見つけたなー自分。開封済みにしとくとかやらしーやろあの神」

「……わいは？ ……じゃあ、あいつは？」

「ああ、和也か？ あいつはとつくに三つ使うたわ。あいつはこの世界に降りた後、チームの仲間集めよー思うて歩き回った時に会うて——というか、襲ってきてなあ。わいのチップ狙って。適当にあしらった後、ルール聞かせてチーム組んだんや。ちなみにチー

ム名は『名付けがたいコンビのようなもの』

チーム名はほっとくとして、実力——主に行動力はいいみたいだな。周囲への観察、俺達の行動から情報分析、そして地上に降りて仲間集め……もし海斗がいなかったら地上に降りて家を確認した後、俺もまずは仲間集めに動いていただろう。このゲームはチームでいる方が断然有利だ。

「全く、和也と来たらルールを見ようとせえへんし、勝手な行動ばかり取るし、計画性皆無やし偉そうやして大変やわー。チームについてもただ稼ぎが良くなるかもってだけしか考えとらんし。わいも聖祥行かそー思うとってたけど高くて無理や言うたら逆ギレするしで適わんわー。結局塾行きや会えるってことで堪忍してもらおうたけど」

「ああ、やっぱ聖祥行かそー思うか？俺もそう思ってたけど、結局金がないからなあ。それなのに海斗は余計なところに金使おうとするんだよなあ」

「あー、綾やったか。やっぱその心配あるんか？わいも何度も言い聞かせとるのに、和也が聞かずに何でも買うんよー」

「困ったもんだよなー。海斗にはバイト行ってもらって、俺も近いうちにバイト行こうと思うけど」

「あー、やっぱ歳偽装してやつとるんか？そうしないとやっぱあかんかなあ……」

あれ、これ主婦の愚痴みたいになってね？ いかん。話を戻すべきだ。

「ゴホン。話を戻すが、それで俺に何の用だ？」

「おお、あかんあかん。すっかり話逸れてたわ」

俺の咳払いで気がついた竹太刀がすまんすまんと謝って、本題の方に戻る。

「話ゆーんは他でもない、今出ている、ジユエルシードを三つ以上集めるゆう指令や。ほぼ無力、もしくははなけなしのチップで叶えてもらうた程度の貧相な力で挑むこの鬼畜ゲーを、自分はどう見とるか。それを聞いてみとうてな」

「……まず、あんたの意見を聞かせてくれよ」

「そうやなあ。転生者百人中半数以上はふるい作業や思うてるやろな。せやけどほんの一部——わいや自分みたいに気づいとる奴もいるやろ？ あいつがほくそ笑んだんを。つまり神はわいらにクリアさせる気があらへん。そもそも無理やろ、仮に転生者百人がチーム組んで探したとしても実質取れる数が十個程度しかない中から三つ見つかるかわからへんし、十二時間も持つてられへん。なのはちゃんやフェイトちゃんのええのや」

あの笑いに気づいたのは、俺だけじゃなかったんだな……。

それにしてもやつぱりやるなこいつ。行動力といい分析力といい、さすがと言うべきか。

けど一部足りないのは、単に情報が足りてないからか……。

「さて、わいは言うたで。綾の意見、聞かせてもらおか」

「ああ、そうだな。大体お前と同じだ。俺はそれに補足意見をさせてもらう」

「ん、補足？」

俺は携帯を取り出し、あるメールを開いて竹太刀に見せた。

「このメール、知ってるよな？」

「ん？ ……ああ、失格者の知らせやな？ 知つとる。最初の指令が来て一日半で来たから随分早く落ちたなあ思うとったけど……これがどないしたん？」

彼の言った通りこれは失格者が出たことを知らせるメールで、指令が来て一日半……三十六時間後に来た。書かれていたのは、失格者二名の名前と、残り九十八人という表示。

「指令が届くより前に、俺は転生者二人組に襲われて一時スターチップを奪われた」

「何やて？ それって、違反行為やろ。即失格の」

「ああ。知らせに時間がかかるのか、ルールに気づかせないようになるためかははつきりしないが、こいつらはその違反者だ。そいつらはその時即刻失格となって、チップは手元に戻った……お前、失格者がどうなるか考えたことはあるか？」

「そーいや……自分は見たんやろ？ どうなったんや？」

やはり、知らないらしい。



俺はこの目で見た現実を口にする。

「消されたんだ。光の粒子みたいになつて……消される前には周辺の物質に干渉できないようにする何かをされたらしく、俺に触れた途端にその部分が蒸発した」

「これでお前も見えてきただろ、俺の意見が……あいつは、俺達が断末魔上げるのを見て楽しんでる」

絶句してるのかと思つて見てみると、しかし竹太刀はそれを現実として受け入れようとしているみたいだった。

「……疑わないのか？」

「そないなこと、嘘吐いてどうすんねん」

「俺ならまず疑う。相手からの情報は立証できなければ気が済まない」

「わいだって基本はそうや。てな訳で立証して」

「断る。死にたくないし死ぬ訳にはいかない」

「なら信じる他ないやろ」

「もつともだ。」

「最初つからこの難易度だ。今後これ以上のレベルのものが来ると考えていい」

「……で、自分はどうするつもりなん？」

この質問は、いかにしてこの状況を切り抜けるかという意味だな。切り抜けなければ、消されるだけなのだから。

「手段まで言わないが、俺はこの指令でジュエルシード二十一個全部集める気だ。俺達、チーム名は『反逆者』だからな」

「ほお……そのうち、殺るんか？ あいつを」

「おう。そのつもりだ」

一瞬、沈黙が流れる。

風が吹き、辺りの草花を撫でてサラサラと音を立てた。

「……ふう。あんたには適わんわ」

「何言ってるんだか。どうせ前の世界では成績優秀だったんだろ？」

「そういう自分もやる。わいは進学校のトップ五やった。ちなみに高二や」

「十分優秀だろ。俺は高三で、進学校の首席だ」

「首席な上に先輩か。やっぱり適わへんわ。……で、首席の綾先輩に頼みがあるんやけど」

「今更先輩言うな。気持ち悪い……で、なんだ」

訊いてみると、竹太刀はいきなり拜んできた。

「頼む！ そっちのチームに入れさせて」

「断る」

即断で断った。

「……なして?」

「チームの掛け持ちはできない上に一チームに四人までつてルールを知らない訳じゃないだろ? つまりお前は和也を切り捨てることになる。仲間を簡単に切り捨てる奴を信じる程俺はお人好しじゃない。後、単にこれ以上人数が増えたら、守りきれなくなりそうだしな」

「……なんや、結局お人好しやんか」

「うっせ。とにかくお前をチームには入れれない」

そう言うのと、竹太刀はがっかりするどころか安堵したような表情を浮かべた。

「安心や。ここで承諾するような軽い奴やと、こっちも不安になるとこやった」

「何だよ、今更試してたのか?」

「悪かったつて。せやけどアドレス交換せえへん? もしもの時は助け合いっこや」

「期待、し過ぎんなよ?」

「わーっとる」

説明の後しまっていた携帯を再び取り出し、互いのアドレスを交換する。

「これでよしと……ほな早速、助け合いせえへんか? 試合の時、自分は気づいとした

やる？ 試合後なのはちゃん達と別れた後に来るで」

「ああ、そうだな。早速共同戦線と行くか」

軽く拳をぶつけ合う。

チームではなく、同盟を結んで、俺達は試合の方へと戻った。



俺と竹太刀が戻った時には、試合はすでに終わっていた。

そしてその場で解散し（なのは達についていこうとする海斗を俺が、和也を竹太刀が押さえた）、話の前に俺達五人は人気のない場所を探し移動する。

「なあ、どこ行くんだ？」

「静かに歩け」

「つたく、なんで俺がこいつの言いなりに……」

「黙つときい」

スタスタスタ。

「あの……綾さん。どうして翠屋へ行かなかったんですか？ 翠屋JFCのチームの子がジュエルシードを持つてるのを、なのはちゃんが気づかないうちに私達のなくしもの

として回収もできましたよね？」

由衣が小声で話しかけてきた。確かに、それも不可能ではない。だが、

「ジュエルシードを手に入れるのは、まだ先だ」

今ジュエルシードを手に入れても、カウントが一個増えるだけ。それではダメだ。

ジュエルシードを手に入れるのは今じゃない。二十一個手に入れるためには、今はまだ動かない。

そのまま歩き続け、人気がない路地裏に到着した。路地裏、といってもそこまで狭くない。とりあえず両腕を広げる余裕はある。

「ここならいいか。……出てこい！ コソコソついてきてるのはわかってるー！」

戦場として使える場所と判断し、俺は後ろに振り返って声を張り上げる。

するとゾロゾロと、俺と変わらない、もしくは少し若い程度の少年達が出てきた。全員デバイスを展開し、バリアジャケットを纏っている。

それが前後両方。数は、合わせて約二十人程。

「へへ……よくわかったなあ……」

「そう言えばカッコいいか思ってるみたいだけど、バカ以外にはもうバレてたぞ」

「おい！ 由衣ちゃんまでバカ扱いすんのか！」

「あの、海斗さん……私は気づいてましたよ？」

「え？ マジで？」

「おい！ なんて言わなかったんだよ！」

「自分が阿呆やったつちゅー何よりの証拠や」

「ゴチャゴチャ喋ってんじやねえっ！」

俺側の最前列の少年が杖型のデバイスを壁に打ちつけた。ガンッ！ という鈍い音に由衣の身体が強張る。

それから少年はデバイスを持っていない方の手をこちらに差し出す。

「お前ら、スターチップ持ってんだろ？ 全部寄越せ」

手首を縦に動かし、要求を表すジェスチャーも取る——が、すでに俺の眼中にはなかった。

「竹太刀、お前って格闘技関係はどうなんだ？」

「わい、あまり身体動かすのは好かんなあ」

「ああ、そっか」

ブチッ。何かが切れる気配がした。

続いて、こちらに走ってくる足音。

「てめえっ、無視してんじや——」

「じゃあ——」

後ろを振り返り、敵の行動を確認。

デバイスを振りかざす少年を確認して即座に、振り下ろされたデバイスをキャッチ、デバイスを回し持ち主を巻き込んで地面に倒すと同時にデバイスを取り上げる。

デバイスを竹太刀へと放る。

「鉄パイプ代わりだ。由衣を頼む」

「高性能な鉄パイプやなあ。ほんなら、首席さんの指示通りに子供達の護衛でもしてるわ」

「海斗ー、そっちは頼むぞ」

「おう。加減は？」

「後で説教のつもりだからな。意識さえ飛ばさなけりやどうでもいい」

「な……なめんじゃねえ!!」

竹太刀や海斗とのやりとりで腹が立ったのか、少年達——違反者予備軍と呼べばいいか。ルール見てないんだろ——が一斉に襲いかかってきた。

「おら……よっ!」

「ぐあっ!」

「うわあっ!?!」

俺は最前列の少年を躊躇いなく蹴り飛ばす&そいつが持っていた杖型デバイスを奪取。そこそこの幅があるとは言え、倒れた人間という障害物に躓き、後続の奴らが足止めを食らう。

「ほら次いつ!」

「がっ!!」

「ぎゃあっ!」

そこに奪ったデバイスで殴る。気絶しない程度に容赦なく、頭を狙って。脳を揺らす加減を間違えなければ、意識を刈ることなく無力化できる。

順調に躓いた奴らを無力化させていると、最後列にいたために躓くことなく無事だった奴が一人、俺にデバイスを振るってきた。こちらもデバイスを盾に防ぐが、その隙に一人が脇を通り抜ける。

狙いは、竹太刀と二人の子供達。

「貰ったあ!!」

カアン! 乾いた音を立て、襲った方のデバイスが吹っ飛んだ。

「へ?」

竹太刀に攻撃を仕掛けた少年が気の抜けた声を出した。

「ああ、言うてへんかったか? わい、身体動かすんは好かんけど、成績はいつもエリー



トやったで?」

「な………てめつ、騙し………」

「言葉履き違える自分が悪いんやろ」

言つて竹太刀はデバイスで少年の頭を殴つた。

軽い脳震盪を起こした少年はその場に倒れ、意識はあるが動かない。

『嫌い』と『苦手』は別物や。よう覚えときい」

「ホント、その間違いする奴多いよな。というか海斗がよく間違えてるんだよな現在進行形で」

最後の一人の無力化も終え、違反者予備軍をひとまとめにする作業をしながら竹太刀の台詞を話題に話をする。

ちなみに纏めながら違反者予備軍のデバイスを回収。ひとまず取り上げ、ルールのことを告げた後に返すつもりだ。

なお、先にこいつらの沈静化を計つたのは、以前説得に失敗した経験に加え、数の差で不利という状況からだ。とりあえず数の多い方についた方が安全。そう人間………特に日本人は考える。

「ええ? 『嫌い』と『苦手』は一緒じゃねーのかよ。『嫌い』な食べ物はその人にとって『苦手』な食べ物だろ?」

俺に名指しされた内容に納得がいかなかったか、海斗が反論してきた。この脳筋が……。

ちなみに海斗の方はすでに沈静化されていた。デバイス同士でぶつかり合った音は聞こえなかったから、全部素手で殴り飛ばしたんだろう。

「お前なあ……例外だつてあるだろーが。得意だけど嫌いとか、逆に好きだが苦手とか」「そう言われてもなあ……まあとにかく俺は身体を動かすのは好きだし得意だぜ。逆にウダウダと考えるのは嫌いだし苦手だ」

「とんだ脳筋やなあ……」

面目ない。

無力化させた違反者予備軍を一カ所に纏めて座らせる。人数は十八人。五分の一近くになるのか。

「よくもこんな人数集められたな。これじゃあ俺達のスターチップが足りないぜ?」

「う……うるせえ……俺のデバイス返しやがれ、この悪魔が……」

脳を揺らされまともに動けない状態でも反抗的なのは、最初に俺に殴りかかった少年だった。

だが俺はそんな奴の言葉に耳を貸さず、携帯を開いて操作を始める。ちなみに、俺のじゃない。

「元の世界じゃ何歳か知らねーけど、今は十八歳未満だろお前。年齢不相応なもん待ち受けにするなよ」

「てめっ……！ 返せ俺の携帯っ……！」

そう、さっきのこいつのだ。

奪い返そうと伸ばしたトロい腕を難なくよける。よけられた少年はバランスを崩してうつ伏せに倒れた。

そんな少年の眼前に、俺が彼の携帯で開いた画面を見せる。

「あ……？」

「このゲームのルールだ。他の奴らにもちゃんと開封済みメールとして存在する。死にたくなければ、全部見て把握しろ」

「そう言っつて携帯を置き立ち上がる。デバイスは近くに纏めて置いといた。動けるようになれば自分で持つて行くだろう。」

もうここに用もなくなった俺達は、違反者予備軍を置いてこの場から立ち去った。



「あの……よかったですか？」

「ん?」

違反者予備軍との沈静化を済ませ、竹太刀・和也コンビと解散し三人で歩いていると、不意に由衣にそう言われた。

「失格者はこの世界から消されることです。ルールにない話なのに、綾さん、言わなかったですよね?」

「あー、そうだな」

「なんだよ、忘れてたのか?」

「お前じゃあるまいし」

ちなみに海斗は運動系のルールはすぐ覚えるくせにそれ以外だとよく忘れる。どう  
いう頭してんだ……。

「下手に真実を教えて絶望されたら、それこそいつらは終わりだ。だから敢えて伏せ  
た……まあ、責任逃れの言い訳にしかならないけどな」

あいつの言った通り、確かに俺は悪魔なんだろう。中途半端な情報開示は、より最悪  
な状況を招く可能性もある。

だがそれでも、すでにチップを使い、三つ持っていない奴らには、頑張つてクリアする  
以外に生存の手段はない。そのためにも失格＝死のこの現実で絶望させるのはまずい。

現実を教えて絶望させないがための言い訳であつても……そうするしかない。

「……そうですか。綾さんって冷たい印象に感じることもありますが、ちゃんと思いやりのあるいい人ですね」

「……どうだかな」

「あー、いい感じかもしれないところ悪いけど……」

ふと、海斗の声が後ろから聞こえた。振り向くと、前を歩いていたはずの海斗がいつの間にか後ろで立ち止まっていた。しかも、口元が引きつっている。

「お前達、すっげー大事なことを忘れてねーか……？」

ズウウン……。

鈍い音……揺れる地面……地鳴りだ。

一体どこから？ それは、この日ということを考えればあれしかない。

ズズウウン……！！

音と振動が大きくなっている……こっちに來ている！

「……走れえええっ!!」

叫びは通ったが、叫び終わる前に巨大な木の根がコンクリートや家屋を砕いて姿を現した。

——ジュエルシールドが発動された。

## 第六話

「うおおおおっ!!」

急速に成長して襲いかかってくる大樹を必死でよける。

無差別攻撃で必ずしも人間を襲うことが目的でないことが、この状況の救いだった。

なお、俺は由衣を脇に抱えながら樹木をよけている。本当なら俺以上に動ける海斗の方がいいのだが、とっさのことで由衣に近かった俺が抱えているのだ。余裕ができれば海斗に渡そう。

「おいおいどうする!!? どうやって逃げ切るんだよ!!?」

「とにかく走れ! それしかない!」

俺と海斗が併走し、迫り来る樹木から逃げつつ叫びあう。

プルルル。プルルル。

「携帯……!!? こんな時に——まさか……海斗っ、携帯見ろ!」

「ああ!!? こんな時に!!?」

言いながらも、海斗は携帯を開いて操作する。

ある程度見た後、海斗は舌打ちして携帯を閉じた。

「ああ畜生っ、緊急指令だ！」

「内容は!？」

「こんな状況で読めるかよっ!」

「ろっ、路地裏に隠れましょう!」

由衣が言うなり手近な路地裏へと逃げ込む海斗。俺も後についていく。

何度か曲がり道を利用して逃げていき、樹木が来ないのを確認して、ようやく由衣を一旦降ろした。

肩で息をするのも程々にして、すぐに俺は自分の携帯を確認する。

新着メールが一件。差出人は、管理者。

差出人：管理者

件名：緊急指令

内容：ジュエルシードの発動によって成長・攻撃する樹木を回避せよ。

成功条件・報酬：ジュエルシード封印まで暴走樹木に接触していないこと。成功者全員にスターチップ一個配布。

失敗条件・罰：暴走樹木と接触する（ただし、動きが止まっているものは除く）。失敗者からスターチップを一個剥奪。

「ようは逃げ切れればいいんだな？」

「らしいな。接触した時点で失格……服もアウトだろうな」

身だしなみを軽く整え、路地裏から出ようとする。

「お、おいつ、どこ行くんだよ？　ここにいた方がいいんじゃないのか？」

「いつ来るかわからない状況で、逃げ道が限られる場所に留まるのは危険だ。できるだけ広い道、多方の道別れがある道にいる方がいい……由衣は頼むぞ」

「はいはいわーったよ」

路地裏の外の様子を一旦確認し、安全を確認してから海斗に来るよう指示。

由衣を背負う海斗に合わせ、できるだけ急いで移動を進める。

「っ！　来るぞー！」

「うおっ！」

「きゃあ!？」

地面からの強襲をなんとか避ける。

海斗の背中を押して前進を催促し、後ろからの追撃を回避。

曲がり角を利用して、樹木の追撃から逃れていく。

「うわあああああっ!!」



「!?」

十字路に入った時、誰かの絶叫が響いた。

発生源である右側を見てみると、少年が一人、樹木の細いツタに巻き付けられ、捕らえられていた。

捕まった少年が、青白く発光し始める。

「おい、助けねえと!」

「た、助け——」

海斗が助けに駆け寄る前に、少年が助けを乞う前に、少年の身体は砕け散った。失格。ゲームオーバー。それらの表す意味は、その人の死。

「あつ……!」

「なっ——」

「ボサツとすんな、早く走れっ!」

消滅の光景を見て停止した海斗の背中を押し、無理やり走らせる。

しばらく走ると、海斗が気が抜けたような声で話しかけてきた。

「……なあ、綾……あれが……失格者の末路だつて……?」

「……………」

俺は答えない。答える暇もないし、答える必要すらない。

「ふざけんなよ……あいつはまだ助かるかもしれないなかったじゃんか……なのになんで、あんな風に殺せるんだよ……!」

「……海斗……これが現実だ……。理不尽が乱立し、誰かの勝手な思想が中心になって動く……それが世界なんだ……!」

きつく歯を噛み締める。

失格になれば即消去……それがどんな状況だったとしても、一瞬にして消せるということとは俺達の命は神の手の中にあることを意味する。

スターチップを支払えなければ消され、支払うために奴の言いなりになる……今の俺達に生存権はない、奴隷同然……!」

「綾さん! 後ろ!!」

「——っ!」

由衣の言葉に振り向くと、樹木が俺の眼前まで迫っていた。

(間に合わない——!)

直撃を覚悟し、強く目を閉じた。

ゾゴンツ!

鈍い音がした。

痛覚に刺激が入ってこない。だがそれとは別に樹木に対して防御の姿勢を取って

た俺はそのまま尻餅をついてしまう。

目を開けてみると、樹木は途中で輪切りにされて地面に落ちていた。

「首席の先輩、無事かー?」

樹を輪切りにしたのは、先程別れたはずの竹太刀だった。こんな時にも爽やかな笑顔が様になる。いや、こんな時だからこそ、ヒーローみたくで様になったのか?

右手に身の丈近い刀身で分厚い大型剣を持ち、左腕には和也を抱えている。剣も人間もそこそこの重さのはずなのに、苦にしている様子は見えない。

「……ああ。助かった」

「あれ、竹太刀のそれってデバイス? まさかあんたの——」

「ちげーよ! 俺のだよ!」

海斗が言い切る前に和也が怒鳴った。

「そないなことより、まずは避難や。立てるか?」

竹太刀の言葉に応えるように、俺はすぐに起き上がる。

「ほな、逃げるでー!」

もの二つも抱えているくせに誰よりも速い竹太刀の先導に身を任せ、俺達はその場を後にした。



「ここらでもうええやろ」

樹木の追撃を逃れ、もうこつちに來ないことを確認した竹太刀はその場で足を止めた。

「おい、もういいなら離せよ！ それとガルマも返せ！」

「へいへい」

ジタバタと暴れ出す和也に竹太刀は呆れた様子で和也を降ろし、大型剣を小さな剣型のアクセサリーに変換、和也に渡す。

「へえ、お前のデバイスなのか」

「フンッ」

海斗の言葉に和也はそっぽを向く。

「確かにあれは和也のデバイスなんやけどなあ、重くて和也にはまだ扱えへんから、わいに使わせてもろうとるんや」

「てめえ、勝手なことやってんじゃ——」

「お前あのデバイスと和也抱えてあの速度ってことは魔法使ってたんじゃないのか？」

「ん、確かに身体強化魔法は使ってたで。せやけど和也こいっは『強化魔法に頼るなんてダメセエ』って言って使おうとせえへんのや。ガルマが強い使って強化魔法を引つ張り出したちゅーのになー」

「勝手なこと言ってるじゃねえ！」

飛びかかった和也を竹太刀は簡単に叩き落とす。ベシッ。グシャッ。なんと情けない音。

「まあ、ガルマについての話はこの辺にして、ここから真面目な話や」

竹太刀が真面目な顔に変わったので、俺も表情を引き締める。

「今回の緊急指令やけど、失格者の人数には覚悟した方がええで」

「え？ どういうことだよ？」

海斗が訊く。

「実はわいら、あの後ジュエルシードの発動地点まで行ってたんよ。もしかしたら、まだジュエルシード入手に間に合うかもしれへんって和也がな。それで行ってみると、わいらと同じくジュエルシードを狙う奴らが、確認しただけでも十数人おった。わいらは発動ちよい前に強化魔法使うてとんずらしたからなんとか助かったけど、他の連中はまづ直撃やろ」

「いいじゃねえか。邪魔者はいない方が楽だしよ」

「黙つとれど阿呆」

和也は地面に顔をうずめた。

巨大樹の方を見ると、ちょうど封印を終えたのか、樹木が消えていくのが見えた。

プルルルル。プルルルル。

「メールだ……」

「ん、俺もだ」

「全員にかかつとるみたいやな」

開いてみると、管理者から指令終了を告げるものだった。

差出人：管理者

件名：緊急指令終了

内容：

緊急指令達成おめでとう。

君の努力を称え、報酬を渡す。

読んだ直後、目の前に鈍い小さな光が現れた。光は俺達それぞれの目の前に現れていく。

その光から、星型のチップ……スターチップが落ちてきた。

(……指令をクリアすれば、報酬としてスターチップを得る……)

一体、この二個を手に入れるためにどれだけの命が犠牲になったんだ……？  
プルルルル。プルルルル。

「何だよ、またか？」

「……海斗、これは多分失格者通知やな。和也、まだ見ない方がええで」

「ああ？ 何俺に命令して——わかったよ、見なけりやいいんだろ」

「海斗と由衣も、まだ見るなよ」

釘を刺しておき、俺と竹太刀でメールの確認をする。

竹太刀の言った通り、件名には『失格者通知』の文字……メールを開く。

一行ずつ、びっしりと並べられた失格者となった人達の名前。名前はスクロールして流し読みして、一番下の結果に辿り着く。

「……!!」

「ホンマにか……」

「ふ、二人とも……何人が犠牲になったんですか……？」

そこに突き出された事実……失格者の人数に、俺と竹太刀は愕然とした。

「犠牲？ 何言って——」

「……二十一人死んだ」

「——ツ!!」

「嘘だろ……!?!」

「……は? 死んだ……?」

たった、たった三十分にも満たない時間のはずだ。その三十分以内の時間に、転生者の五分の一を超える人数が死んだ……。

「おい……死んだってどういうことだよ?」

「……まだ言うてへんかったな。そのままの意味や。このゲームで失格になった人は死ぬ」

「は……? なんだよそれ……そんなルール、お前が見せたあのルール説明にも書いてなかったじゃんか……」

「見てへんかったのか? 樹から逃げとる時、やられた奴が光って碎けるの、わいも見たで」

俺達に対していつも不機嫌面だった和也の顔が、真つ青なものとなっていた。

「ふざけんなよ……なんで俺が死ななきゃなんねえんだよ……!」

かぶりを振ってうなだれる和也。相当堪えたみたいで、絶望が表情に現れている。

「……。……なあ、綾」



「……………なんだ」

「ぶっちゃけ、わいらはこの有り様や。このゲームが鬼畜なこととはわかつたけどそれまで。二十一個どころか三個手に入れる手段すら検討がつかへんのだ。このままやと時の庭園が砕け散る時に和也は殺される。それはリーダーとして、一度組んだ仲間として見過ごせへん」

せやから、と言つて、竹太刀は両手を合わせて俺を拝んだ。先程とは違い、頭を深く下げる。

「頼む、あんたらの作戦に手伝わせてくれ。そして三つだけでええ。ジュエルシードを分けてほしい」

「……………」

彼の二度目の懇願に、俺はふう、とため息を吐いた。

「俺達の家は三つとも隣接している。海斗の荷物を俺の家に移させるから、お前らは海斗の家に移り住め」

「へ？ ほんなら……………」

「秀才もう一人とデバイス持ち、どっちも必要だ。ジュエルシードの取り分はチームで山分け、余りはこつちのもの。お前ら、これでいいか？」

「おう、竹太刀とは仲良くしていきたいしな！」

「はい！ 勿論です！」

「あんたら……おおきになー！」

「……騙されないぞー！」

「ここで和也が吼えた。」

「何が取り分は山分けだ！ 俺達を利用して、用が済めば切り捨てるつもりなんだろう！」

「チームじゃねえんだからよー！」

「和也っ！」

「……確かに、証拠はないから可能性は捨てきれないだろうな」

怒る竹太刀を抑え、否定をせず静かに話す。

「強制するつもりはないさ。お前の場合竹太刀とチームさえ繋いでおけば、何もしなくても取りあえず命は助かるだろうな」

「おいおいいいのかよそれ？ 完全に寄生プレイじゃん、カツコ悪っ。モンハンでも何にもしねーで採取しかやらないパターンだよこれ」

「ブチッ。誰かの何かが切れた。」

「上等だてめえええっ!! 何でも言ってみやがれ、完璧にこなしてやる！ この身体は小三だが、元の世界じゃ高一だったんだぞ!!」

「え、俺高三だけど」

「バカだけどな。俺も高三だ」

「わいは高二や」

「あ、私も高二です」

「え、由衣ちゃん高二だったの？ てつきり中学生だったかと」

「し、身長だけで決めつけないでください！ 怒りますよ!?!」

「なんや、和也の立場は一番下やないか」

「だあああつ、ちくしよーっ!!」

街中にて、和也の叫びが木霊した。

## 第七話

巨大樹の事件から一週間程経った休日。

——パチツ。

「いや、綾にはホント適わへんわー」

パチツ。

「何がだ」

パチツ。

「だって、頭ええしスポーツ万能やし料理もうまいし家事も完璧。ついでに気遣いも上手やし、マッサージもうまいんやろ？」

パチツ。

……パチツ。

「頭がいいのはお前もだろ。スポーツは海斗の方が上だし、家事や料理は生きる上で必要だからやってるだけだ。気遣いなんて大したことやってないし、マッサージはやろうとすれば誰でもできる」

パチツ。

パチッ。

パチッ。

「いやいや、そんなことあらへんって。ついでに言えば顔もなかなかイケてるで自分」

「んな訳ないだろ、こんな仏頂面。お前の笑顔の方がずっと人にモテるぞ」

パチッ。

パチッ。

パチッ。

パチッ。

「いやあ、褒めても何にも出えへんで？」

「事実なんだろ？ 元の世界じゃ何人に告られたんだ？」

「んー、そこそこ来たけど数えとらんし、大したおもしろいから付き合わんかった。そう

言う綾はどうやねん？」

「六、七人だったか。全員フった」

「酷いなー自分」

「お前よりは真面目な理由だ」

パチッ。

パチッ。

パチツ。

パチツ。

パチツ。

パチツ。

「……だあああつ！ パチパチパチパチうるせえつ!!」

いきなり、ソファから立ち上がった和也に怒られた。

「なんや和也？ そんなイライラしてたらあかんでえ？ カルシウムとれ」

「ほっとけ！ つーか、なんでお前ら二人揃って呑気に将棋なんかしてんだよ！」

和也の言うとおり、俺と竹太刀は将棋で対局している。パチパチというのは一手打つ時の音だ。

「だって、暇やし。バイトは午後からやし」

「バイトそのものをやってないこと以外は竹太刀に同じく」

ちなみに、バイトをやってるのは海斗と竹太刀の二人。俺もバイトしようとしたのだが、竹太刀に、

「バイトはわいらに任せて、綾はうちの主夫として家におりい」

……と言われた。もう、俺は母さんのポジションで確定になってるらしい。

「だったら！ ジュエルシード探せよ！ もう少ししたら管理局来ちまうつてのに、な

んで探もしないでのおんびりしてんだよ！」

「お前な……話聞いてなかったのか？ 管理局が来てからジュエルシードを探すって言っただろ」

「はあっ!？」

「聞いてなかったのかよこいつ……」

「海斗さんも、話の時寝てましたよね？」

ツッコむ海斗に由衣がツッコんだ。

竹太刀と和也が引越してきた後、作戦会議をした。その時管理局に接触することを伝えたのだが、和也は聞いてなかったらしい。

「とにかくだ。準備はしてるから、今は管理局が地球に来るまで現状待機。いいな」



それからさらに日が経った。

クロナ登場の日にちの翌日、遂に俺達はジュエルシード捜索に乗り出した。

全員の時間が空いてる時に、街へと駆り出す。

「で、どうやって探すんだよ？」

「和也が俺達の中で唯一デバイスを所有……つまり魔法を使うことができる。広域探索魔法で探そう」

そして適当に人目のつかない場所につく。港の倉庫が立ち並び、物陰に隠れやすい場所だ。

「まずはこの辺でいいか。和也、広域探索頼む」

「わかったよ……」

和也は大剣型デバイス、ガルマを起動。バリアジャケットを纏った和也の足下に魔法陣が展開される。ちなみに和也のバリアジャケットは Fate のアーチャーの衣装そのものだ。

「……………あつた」

魔法陣を消して和也やそう短く言うと、一人道を歩き出した。俺達も静かに後をついていく。

何度か曲がり角を曲がった後、道端に溜められたゴミを漁る。

中から、青い宝石……ジュエルシードが出てきた。

「おお、早速ゲットじゃん！」

海斗がテンションを上げる中、和也は封印処理を済ませる。

「これは俺が見つけた……俺がもらうぜ」



「ああ、いいぞ」

「ええの？」

竹太刀が訊いてきた。あまりにあっさりと所有を許したのを疑問に思ったらしい。

「いいさ、それくらい。……そもそも、誰であつても十二時間も持つてられないだろうしな。だったら持たせて喜ぶ奴に持たせてやれ」

「なんや、来るんか？」

「ちよつと違うな。……もう来てる」

辺りの景色が、色褪せたものに一変した。それはつまり、結界が張られたことを意味する。

周囲を警戒する。結界を張ってくる勢力は、大きく二つ。なのは及び管理局の者か、それともフェイトか……。

やってきたのは——金色と橙色。

「ジュエルシードを……その石を渡して」

金色髪を揺らし、空から降りてきたフェイト・テストアロツサがバルディツシュを向けてそう言った。

「うおつ、生フェイト……」

「ごすつ。余計なこと言おうとする海斗に肘鉄をかます。怯む程度の軽さにだ。こい

つを抱えて走るようなことはやめたい。

「ジュエルシード……そうやって武器を向けて、渡せつて言うことはお前らのじゃないんだな？」

実際には色々知ってはいるのだが、知つててことをバラすような馬鹿な真似はしない。

何も知らないように演じつつ、着けてきたウエストポーチから『管理局より先にフェイトが来た場合』の対策の道具の準備をする。

「……ここに渡して」

「おいおい、会話はちゃんと成立させないと——なあっ！」

言い終わると同時に、ポーチから取り出したものを投げる。

パァンツ!!

「っ!?!」

投げたそれは空中で破裂、大きな音を響かせ、フェイトとアルフを怯ませた。爆竹である。

二人が怯んでいる隙にさらにポーチから小さな包み袋を取り出し、地面に投げつける。破裂した包みから白い煙が舞う。

「走れっ!」

言うなり煙とは逆方向へと走り出す。

事前に爆竹に備えて耳を塞いでいた竹太刀はすぐに、爆竹で怯んでいた三人も慌てて走り出した。

取りあえずは一旦角を曲がり、死角に身を隠して走る。

プルルルル。プルルルル。

走っている最中に、俺達の携帯から着信音が鳴りだした。

「あ？ つたく、誰だよこんな時に！ 空気読めよ！」

「……竹太刀！」

和也の言葉には心の中で賛同したいが、それは置いてこう。今は着信した内容だ。ほぼ間違いないく、緊急指令。

「了解や………ああもうっ、あいつは面白そうや思うたら即指令か！」

「内容は!？」

「早い話、管理局が来るまでジュエルシード持って逃げろって話や！ 成功報酬はチツプ二個に今持つとる人に対してジュエルシード所有承認！ 失敗はチツプ二個剥奪や

！」

「……!？」

俺が反応したのは、成功報酬の内容ではなくその逆。失敗時の罰だった。

チップを二つ剥奪……和也のスターチップはまだ一つだ。すなわち、失敗したら和也はここで失格になる……！

(させて……たまるか……！)

「……散るぞ！ 竹太刀は由衣を、海斗は和也を抱えて走れ！ 海斗は俺についてこい！」

「お、おう！」

「了解や！」

二人は指示通り、それぞれ由衣、もしくは和也を抱え、二手に別れる。

「まああああてええええええええつ!!」

「げえつ、来やがった!?!」

「……っ!」

和也がジュエルシードを取るところを見たのか、それとも探知魔法で和也が持っていることを知ったのか……そこはいつでもいいが、とにかく二人ともこちらに狙いを定めてきた。

……速い。成人体格のアルフは当然として、フェイトもとても速い。低空飛行によって自分の速さを生かしている。

「おい！ このままだと追いつかれるぞ!? だいたい、射撃魔法でも使われりや終わり

だろうが!」

海斗に抱えられている和也が叫ぶ。

「大丈夫だ。ジュエルシードを暴走の危険に晒すような真似はしないはず。そもそも、雑魚には射撃すらないで殴り飛ばすはずさ」

「ああ!? 誰が雑魚だ!」

「俺達全員だ」

言いながらポーチから新たに道具を取り出し、その場で加工を始める。

取り出したのは綿を挟めた割り箸と、少しだけ黄色い液体が入ったペットボトル。ボトルの蓋を開け、中身を綿に垂らす。

「……なんだそれ?」

「綿を挟んだ割り箸」

「んなのわかる。ペットボトルの方は?」

「サラダ油」

「はあ?」

和也が頭にクエスチョンマークを浮かべているのはほつといて、ペットボトルはしまつて次に取り出したのはライター。サラダ油を湿らせた綿に着火。油のおかげですぐに火が着く。

後ろを確認する。だいぶ離れていたはずの距離が、かなり近づいてきていた。

「おい！ 追いつかれちまうぞ!？」

「しつこい。……大丈夫だ」

ポーチから次の道具を取り出し、タイミングを計る。……三……二……一……。

ゼロをカウントすると同時に、包み袋を二、三個一気に俺達の少し後ろの地面に叩きつける。最初の時と同じもので、白い煙が上がる。

その煙に、俺は躊躇いもなく火のついた割り箸を投げ込んだ。

ドオオオオオンツ!!

「うおおっ!？」

「……っ!？」

火が煙の中に入った瞬間、凄まじい爆発が起きた。突然の爆音と爆風に二人は驚き、俺も爆風に体が強張った。

「早く走れっ!？」

爆風が止まない内に、俺は海斗に櫂を飛ばす。

「さ、さっさきのはなんだよ!？」

「粉塵爆発だ！ それはいいからさっさき行け!!」

粉塵爆発というのは、知ってる人も少なくないだろう。空気中に舞った小麦粉などの

粉末に引火した時に起こる爆発である。白い煙の正体が、その小麦粉だったのだ。

「てめえ！ 俺のフェイトになにしてやが——」

「早く走れえっ!!」

グズグズしている二人に怒鳴り、さっさと走らせる。同時に、粉塵爆発からの追撃に入った。

ポーチから取り出すのは、液体を入れて固く結んだレジ袋。その結びを少し緩め、爆発の煙の上へと投げる。

それと共に爆竹も投擲。うまくタイミングを計って投げた爆竹は煙の真上、レジ袋と接触した瞬間に破裂、袋に穴を開け、中身を煙の中へとぶちまけた。

それを見届けてから、俺は海斗の元へと走る。爆竹の音が気になっていたのか、足は止まっていた。

「何してんだ！ さっさと走れ！」

怒鳴って海斗を引つ張りながら走ると、和也がまた嘔みついてきた。

「何してんだはこつちの台詞だ！ 今度は何かかけやがった！ まさか液体燃料——」

「違う！」

和也の考えを即否定。そして、加えてこう言った。

「海水だ」



「ペツ、ペツ！ あんのやろー、爆発の次は海水かい！ なにもんだよあいつ……」

ある程度晴れた煙の中で、アルフは口内に入ってしまった海水を吐き出していた。防護服は濡れているだけでなく、所々焦げている。

煙で姿を眩まされる前に突破しようと、煙の中に飛び込んだ結果がこれだった。煙で視界が閉ざされた状態での予期しない粉塵爆発。防護服が無ければ火傷は免れなかっただろう。

その上海水でびしょ濡れになった。何の嫌がらせかと、怒りが沸いてくる。

「あー、もうっ……フェイト、大丈夫かい……っ!？」

手にかかった海水をパツパと切りながら自分の主人へと視線を向ける。バリアジャケットで守られているだろうから大丈夫だろう——そう思っていたアルフの表情が驚愕に染まるのは、身体をうずめるフェイトの姿を見てからだった。

「フェイト!?! どうしたんだい!?!」

「……っ。……だ、大丈夫だよアルフ。ちよつと背中に染みただけだから……」

苦痛に耐えて言ったフェイトの言葉で、アルフはようやく彼——綾のこの行動に合点





やかましい海斗の言葉は無視して目的地へ急ぐ。確か、ここからならこつちだつたか……。

海斗の言いたいことは、わからなくもない。キレた奴を相手にするのは難しいどころか、俺達の場合では絶望的だ。そいつに勝つことが目的なら。

「海斗、今回は時間稼ぎが目的だ。フェイトは一時ダウンしてるから、アルフの標的を俺に絞らせれば、ジュエルシードを確保したまま逃げることはできる」

「お、おい、それってお前が危ねえんじゃ……」

「死にはしないさ」

そう答えつつ、角を曲がる。

「あ、綾さん！ 海斗さん！ こつちです！」

曲がった先に由衣と竹太刀がいた。すぐに二人の元へ駆け寄る。

「随分と相手をキレさせたみたいやなあ。ほれ、補充！」

竹太刀は呆れた顔をしながらもウエストポーチを差し出す。爆竹やら海水込みのポーチから小麦粉袋と油、割り箸松明の粉塵爆発特化のポーチへと切り替える。

「それとほれ、武器になりそうなもんも拾ってきたで！」

「助かる！」

鉄パイプも二本受け取る。鉄パイプは多めに拾ったらしく、海斗と竹太刀も鉄パイプ

を装備。

「あのつ、指示通りこれもやっておいたんですけど、本当に大丈夫なんですか?」

由衣が言う『これ』とは、道の真ん中に置かれた中華鍋。中に油を大量に入れられ、七輪の火で熱されている。

「油流し込んでできるだけ大火力で熱したけど、大丈夫なんかこれ?」

「やるしかないさ」

前のポーチから松明を製作し、着火して油の中に放り込む。油が勢い良く燃えだした。

そしてまた前のポーチから水入りの袋と紙コップを取り出し、紙コップに水を注ぐ。

「見つけたあああああつ!!!」

後ろからの怒号に振り返ると、アルフが敵意剥き出しでこちらに猛ダツシュしてきていた。

「げえつ、来たぞ!」

「ほな由衣ちゃん、行くで! 海斗、こつちや! 綾! しくじるんやないで!!」

「ああ!」

四人一斉で逃げ出す。俺は中華鍋を挟むようにアルフと向き合う。右手には水入りのコップ、左手には鉄パイプ二本。

「てめえは絶つっつ対つ、ぶっ飛ばしてやる!!」

「やれるもんならやってみな……!!」

タイミングを見計らい、コップを中華鍋へと投げ込む。

……突然だが、熱した油に水を入れるのは大変危険で絶対にはいけないことだ。

なぜか? それは……

ボジユワアアアアアツ!!!

「っ!?! 熱っ、あっつっ!!」

「っ!!」

——油が物凄い勢いで飛び跳ねるからだ。

飛びかかってくる高熱の油に驚きジタバタするアルフ。鍋の近くでコップを投げ込んだ俺にも油が襲いかかり、反射的に腕で顔を庇う。

だが多少取まったところですぐアルフへと肉薄する。多少といってもまだ油は跳ねていて、かかった高熱の油が肌を焼き付ける。

その痛みを無視し、アルフの顎にアッパーを仕掛ける。

「っ!!」

だが寸前でかわされた。

身体を仰け反らせてアツパーを回避したアルフは、追撃を避けるため後ろへ飛ぶ。  
「やってくれるねえあんた……」

「……………」

俺は黙って鉄パイプを両手で一本ずつ持ち、構える。

二度の小細工が効いたのか、アルフは警戒してなかなかかかってこない。

……なら、もう一度沸点に達してもらおうか……！

「金髪の女の子はいないんだな。塩水はよく効いたか？」

ニヤリと口元を歪ませて一言。

「……………!!」

沸点に達するのは簡単だったようだ。一瞬で俺に肉薄し、殴りかかってくる。

「っー」

寸前で回避……いや、少し頬を掠めた。

擦り切れた頬を気にするより早く、鉄パイプで反撃を仕掛ける。

パアンツ！ 乾いた音を立て、鉄パイプが弾き飛ばされた。

「くっ!!」

「くらえっ……………!」

鉄パイプを弾き飛ばされた痺れで硬直し、がら空きとなった胴に、魔力を込められた

拳が叩き込まれる。

五十キログラムを超える肉体が易々と吹っ飛ぶ。肺から空気が押し出されるのは、壁にぶつかつた後だった。

「がはっ!!」

壁に叩きつけられた時に頭を打つたのか、視界が酷くチカチカとする。

そんな酷い視界の中で、アルフがこちらに接近してくるのが見えた。それもかなりのスピード。

(ちつと怒らせすぎたか……?)

だが、覆水盆に返らず。今更後悔しても仕方ない。過去に対して後悔する暇があるなら今に対する策を練らねばならない。

すぐに起き上がり、アルフの拳を避け、ポーチから道具を取り出す。

取り出したもの——小麦粉袋を掴んだ分纏めて地面に叩きつける。三、四個ぐらいだったか。かなりの量の煙が俺とアルフを包む。

そして、取り出したのは着火用松明ではなく、ライター。

(グズグズしてる暇は……ない!)

ジュツ。その場でライターの火を、つける。

辺りの小麦粉に引火し、盛大な爆発が生まれた。

## 第八話

「なあ」

「なんや？」

「綾、大丈夫なのか？ さっきから爆発音が聞こえてる気がするんだけど」

「安心せえ。みんな聞こえてるから」

どの辺に安心すればいいんだろう。和也を脇に抱えて走りながら海斗はそう思った。

フェイトは一時ダウン、アルフは囀の綾と交戦、ジュエルシードを持つ自分達の間、その間にひたすら逃げる。ここまでは綾と竹太刀で組み立てた対フェイトの作戦通りらしい。そう竹太刀が言っていた。

「綾さん、大丈夫かな……」

「……ケツ。デバイスもねえ雑魚が適う訳がねえだろ」

「デバイスあつても適わへん雑魚もおるけどな」

「なんだと！ やんのかコラ！」

「やれる奴なら自力で走つとるやろ」

確かに担がれてる状態で威嚇しようとも、全く迫力がない。

海斗は和也を、竹太刀は由衣を抱えて走っている。理由は至極簡単なこと。担がれる二人の身体能力が年相応に低い。和也にはデバイスがあり、身体強化魔法も使えるのだが、当の本人が格好を気にして使おうとしない。見えるものでもないのに。

「こいつが勝手に担いでんだろうが！ おい離せよ!!」

「だああつ、暴れんな！ ジュエルシード持つてるお前を置いてくことなんてできねえだろが！」

ジタバタして大声出す和也に、海斗はなんとか押さええながら同じく大声で対応する。この二人は相当仲が悪い……否、ただ和也が一方的に嫌っているだけだった。元々、海斗はお人好しな性格である。

(同じ転生チートに憧れとる二人やのに、なしてここまでちゃうんやろなあ)

そんな様子を見て竹太刀は心の中で呟く。

海斗が二次創作の代表例である転生チートに憧れていることを竹太刀が知ったのは、大樹事件から数日後。似た時間帯にバイトがある二人は、馬が合う分バイトの行き帰りによく話をしていったのだ。和也については、早くもチップを消費したことから容易に判断できた。

ちなみに海斗がスポーツが綾以上に万能なものも似たようなもので、『主人公〓強い』を理由に鍛えているからである。そういう自分に真っ直ぐで、努力を惜しまない海斗に竹



太刀は好感を持った。

(そういう性格やから、綾も親友と認めとるんやろなあ)

正直、羨ましい。

竹太刀は転生前の世界では親友と呼べる人がいなかった。

父は大手企業の社長。とても優しい父だったが、母を亡くしてから感情が抜けたようになり、会話もすつかりなくなつて冷めた間柄になつた。

学校では金持ちかつエリートということで妬みの対象にされた。嫌がらせを受けた。以前話した告白の話も、自分が金持ちだから、それだけの理由で気持ちなどもつていなかった。

そんな灰色の世界に、竹太刀はいた。

そして、このゲームに参加させられた。

何もかも変わった。財力を失つた。ただ一人の肉親ももういない。そして、彼らに出会つた。

こんなふざけたゲームに集められた百人。その中で友人関係を持つ者自体いるだろうか。二人は自分達の中で……このゲームの中で最も固い絆で結ばれている。それがとても羨ましい。

そして、その絆は途切れることなく続いてほしい。

(そのためにわいが守らへんと……)

今、綾がアルフの囿をやっている。フェイトは海水を浴びせられたが、それでいつまでもダウンしている訳がない。必ず来る。その時には、指令云々よりまず海斗を守るために動くつもりだ。海斗だと、フェイトに攻撃するのには躊躇いがあるだろう。

未だに和也と口論している海斗を見て固い決意を鉄パイプを握る手に込め、角に差し掛かる。

コンテナの陰から、金色が躍り出た。

「っ!!」

反応した竹太刀と海斗は急ブレーキをかける。急停止によって動きが硬直した海斗にめがけて、バルディツシユが襲いかかる。

「そうはいかんわあつ!!」

竹太刀が斬り上げるように鉄パイプを振り上げ、バルディツシユの軌道が止まった。

「海斗走れえええっ!!」

「お、おう!?!」

続いて海斗に叫ぶ。聞き慣れぬ竹太刀の怒声にびっくりしながらもフェイトを抜けて走り出す。

探知魔法で和也がジュエルシードを所持していることを知っているフェイトは彼ら

を逃がすまいと海斗に身体を向ける。しかし動く前に竹太刀に腕を掴まれ、海斗とは反対側へ一本背負いで投げ飛ばされた。

「由衣ちゃんはどうつかに隠れとき」

「は、はいっ」

竹太刀の指示を聞き、由衣は物陰へと避難する。

「さてと……ちよいとおにーさんの相手してもらおか」

「……邪魔するのなら、容赦はしない」

「おお、怖い」

鉄パイプを双剣のように構える。

はつきり言って、勝機はほとんどない。強いて言うなら綾の場合とは違って相手は子供。身体能力で勝つ他になかった。

だがアルフとは違い、ジュエルシードを持たない人を襲う理由がなく、そんな無駄なことをするほど激情している訳でもない。抜かれれば終わりだ。

救いは、フェイトには飛ぶ高さのハンデがあることだった。この辺りはコンテナで比較的低い。コンテナを超えて飛んで管理局に見つかればジュエルシードどころではなくなる。

「そっかを……どいてっー」

「どくかあつー！」

フェイトが一瞬で駆ける。バルディッシュを叩き落とすつもりで鉄パイプ二つを振るう。

スパンツ。鉄パイプが四つに増えた。

(しもた！)

振るう直前にサイズフォームに姿を変えたバルディッシュ。それによつて鉄パイプは二つとも真つ二つになってしまった。もうこの短さでは武器にはならない。

「くそっー！」

すぐに鉄パイプを捨て、フェイトに掴みかかろうとするが、あっさりと後ろを抜かれる。狙いは言うまでもない。和也だ。

追いかけるため、後ろを向く。と、

「おらよっー！」

そんな声。そしてフェイトがこつちにすつ飛んできた。

「ぶげっ!?!」

後ろを振り向いて直後だった竹太刀は対処仕切れず、フェイトを身体で受け止め、そのまま倒れる。

とりあえずフェイトをホールド。そして起き上がると、そこには逃げたはずの海斗が

いた。

「おまつ、海斗お！ 手柄やけどなにすんじゃあつ!!」

「だってそうしねーと怪我すんじゃん」

「つーか、和也はどないした!？」

「置いてきた」

「おい!？」

「まずい。和也一人なんて無謀だ。綾がいつまでも持つていられるはずがない。そのために、一人でも多く護衛をつけるために四人で動き、そして海斗を逃がしたというのに。」

「大丈夫だって。綾はやる奴だし、ここで抑えればあいつには届かないって」

「あのかな……!？」

「それに!？」

海斗が語調を強くした。

「親友を置いていくなんて、俺の柄じゃねえんだよ!」

「!!」

竹太刀は目を見開いた。

初めてだ。親友と、はっきり言ってくれたのは、彼が。

思わず、笑みが漏れる。

(……なんや。羨ましがってたのがアホらしくなってしまうたやないか)

青春の一コマが展開された。

しかしその間にもフェイトはホールドから脱出しようと抵抗している訳で。

「……っ、離せっ……!」

バチツ!

「へ? あちっ、あちちっ!」

業を煮やしたフェイトは、魔力でできた電撃を放出。その電熱やら痛みで竹太刀はとっさにフェイトを離してしまった。

「ああ! お前に押さえてもらうためにそっちに蹴り飛ばしたんだぞ!」

「おい、蹴ったんか! よりによつて蹴ったんか! 普通に考えても幼女を蹴るって正気か自分!」

「俺だつて乗り気じゃなかったんだよ! でも手で突き飛ばそうとしてもつとタブーなことになつたら嫌じゃん! ……つて逃げんなコラ!」

二人の口論の隙に抜けようとしたフェイトの腕を掴み、投げて二人の間に戻す。

「さて……俺達の相手をしてもらうぜ嬢ちゃん……!」

「台詞的にも構図的にもある意味危ないな」

「いや、そんなこと言ってる場合じゃないから」

「海斗に正論言われてもーた」

「どういう意味だよそれ」

「……っ！」

フェイトが動く。それに合わせて、二人も素早く動き出した。



爆発の煙に隠れ、コンテナの陰へと身を移す。

座り込んで体力の回復を図り、息を潜ませ心配を消す。

「あんの野郎！ 今度はどこ行きやがったんだい！」

煙の方から、苛立ったアルフの声が聞こえた。俺がキレさせて思うのも何だがこのアルフ、俺を地の果てまで追い詰める気にいるらしい。ジュエルシードのことをすっかり忘れていた点では、計画通りというべきか。

だが、こつちとしてはもう限界だった。粉塵爆発の多用で体中火傷だらけ。その上マジグレ状態のアルフの拳を何発も受け、左腕が骨折、肋骨もいくらか折った。正直、じつとしているだけでも痛い。

手持ちの問題もあった。粉塵爆発で最も重要な材料……小麦粉が切れたのだ。ライターや油はまだあるが、肝心のものがなければ意味がない。唯一、竹太刀から渡された鉄パイプ一本が俺の武器だった。

（つーか管理局も何やってんだよ……これ以上あのアルフとやりあえとか言ったらマジで持たねえぞ……）

未だにやってくる気配がない連中に心の中で悪態をつく。何十分とは言わないが、それなりの時間はかけているはずだ。仮にジュエルシードの方を優先しているとしても、フェイトが管理局に気づいた瞬間にアルフに通信、二人とも離脱するはず。つまり、まだ結界内に管理局は来ていない。

「チツ……とにかく辛抱強く待つしかないか……！」

いつまでも隠れることは、狼であるアルフの鼻が許すはずがなく、そして隠れ続ける訳にもいかなかった。万が一、アルフが本来の目的であるジュエルシードの方に気が向いたら、もう俺では足止めもできない。

急いで武器の加工を開始する。服の袖を破き、鉄パイプに固く巻きつける。巻かれた布切れとなった袖に油を垂らし、着火。即席の松明が出来上がった。

即席松明を手に、コンテナの陰から飛び出す。

「もう観念しな……！」



「観念する訳ないだろ犬」

「狼だっ！ ……だけど少しびっくりしたよ。あたしの拳で軽く捻ってやればすぐ終わるって思ってたのにさ」

「今更かよ。冷静さが足りねえぞ」

「あたしが怒ってたのは誰のせいだと……！」

「誰だそんな命知らずな奴。顔を見てみたいぜ」

「鏡を見ろっ!!」

よし、まだこいつをキレさせたまま維持できそうだ。

「まあ冷静になれって。はい深呼吸」

「それやったら馬鹿にしてきた上に逃げたじゃないかあんだ！」

「知らないそんなん。引つかかるお前が馬鹿だっただけだろ」

「誰が馬鹿だあっ!!」

お前だよ。

逆ギレで殴りかかってきたアルフを避け、松明で反撃。

「あつつつつ!! つーかあんだ、どうして火ばつか使ってくるのさ!？」

「犬の丸焼きというのにちよつと興味が湧いてな」

「ふぎけんなっ!! あと犬じゃなくて狼だっって言ってるだろ!!」

ちなみに嘘である。丸焼きは豚か鳥で十分だ。というか犬の丸焼きなんて料理はあるのか？ 俺なら拒否る。

アルフの攻撃を避け、松明の反撃を加えていく。炎の攻撃はアルフに効果抜群である。

しかし、それも長くは続かなかった。

「んなろおっ！」

「っ!!」

パアンツ！ と、鉄パイプが弾き飛ばされた。鉄パイプの布が巻かれてない部分に一撃を入れられたのだった。

鉄パイプを弾かれた衝撃で、身体がよろめく。

「くっ……………」

「終わりだ…………っ！」

（……………までか……………！）

魔力が込められた拳を視界に納め、一撃を覚悟した。

次の瞬間、緑色の魔法陣が俺とアルフの間に割り込んだ。

## 第九話

ドカツ！ という鈍い音と共に、海斗の身体が吹っ飛んだ。

「がはっ！」

「海斗っ！」

竹太刀が叫ぶ。ゴロゴロと転がったが、すぐに海斗は起き上がる。

二人は押されていた。

フェイトの速さを捉えきれず、ほぼ一方的な展開となっていた。しかし二人は気合いで、フェイトが通過することだけは防いでいた。

二人ともボロボロだが、竹太刀は海斗に比べるとマシだった。いや、海斗が竹太刀以上にダメージを受けていたと言うべきか。

海斗は何度も、竹太刀をフェイトの攻撃から庇っていた。もうかなりの攻撃を受けても意識が飛ばないのは、元々の頑丈さと鍛えられた身体能力が幸いしているからだ。

「大丈夫だ。……って言いてえけど、結構限界だな……」

「そら当然やろ。どんだけわいを庇ってんねん。庇いすぎやろ」

「つい動いちまうんだよ」

「正義の主人公か自分」

「そういうのに憧れてんだ」

「そうやったな」

二人して構えをとる。

フェイトは油断なくバルディッシュを構えている。すぐに突破しようとしなのは闇雲に突っ込んででも捕まると理解したからだ。

「さて、どないしようか……」

（海斗はもう限界が近い……これ以上は張り合えへんな……。……。でも、そろそろ……）

「フォトンランサー、ファイアー！」

雷を纏う魔力弾が三発、海斗と竹太刀に向かって発射される。

だがその三つは、別方向からやってきた水色の魔力弾三発と衝突して相殺された。

「っ!？」

「うおっ!？ なんだ?」

「……やっと来たか。そろそろ来てもらわな困るところやったで」

竹太刀はフェイトに聞こえない程度の声で呟き、魔力弾が飛んできた方向を目をやった。

上空——コンテナより少し高い程度——そこにいたのは黒いバリアジャケットを纏

い、杖型デバイス『S2U』をフェイトに向ける、待ちに待った管理局の魔導師……クロノ・ハラオウン。そして、

「フェイトちゃん！」

対照的に白いバリアジャケットを纏い、杖型デバイス『レイジングハート』を手にしたなのは姿もあつた。

二人は海斗と竹太刀の目の前に降り立ち、庇うようにフェイトに立ちふさがる。

「くっ……！」

一方的だった状況から一転、一気に不利に傾いた現状を見てフェイトは身を翻し、空を飛び立って逃走を開始した。

「待——」

「逃がすか阿呆」

クロノが言い切る前に竹太刀がそう言って、首根っこをがっしり掴んだ。……クロノの方を。

予想だにしない方向、人物からの攻撃にクロノはぐえ、と断末魔。なのはは予想外な場所での顔見知りとの遭遇かつ、顔見知りの予想外な行動に驚き、その間にフェイトは飛び去ってしまった。

「こちとらさっきの少女を含めた二人組にいきなり襲われて困ってたんよ。自分らは事

情知つとるみたいやし、なしてわいらが襲われたか教えてほしいんよ？」

優しい口調とは裏腹にグギギギツ、と襟を締め上げる竹太刀。

可能性は低いだろうが、このままフェイトを追跡して管理局とのコネは煙に巻かれて失敗なんてことはなんとしても避けねばならない。管理局に逃げられたら最後、今までの苦勞が跡形もなくなってしまう。あと、ここでフェイトが捕まってしまうのも原作的に悪いし。

「なあ、説明してくれへんか？ ついでに自分ら空飛んでたよな？ なにもんやあんたら」

「た、竹太刀さん！ 手つ、手を離してくださいー！」

「ああ、そうやったなあ」

わたわたとしたなのはの説得で、ようやく竹太刀はクロノを解放。クロノは咽せた後竹太刀を睨むが、当の本人はどこ吹く風。

一方、海斗は隠れている由衣を引っ張り出してきた。

「由衣ちゃん、怪我はないか？」

「はい、大丈夫です……」

「え？ 由衣ちゃん!？」

「あ、なのはちゃん」

次々と出てくる知人になのはは混乱。

そこにクロノは咳払いをして、彼の本来の目的を話した。

「ゴホン。説明はするが、その前に僕達の話を聞いてほしい。青い菱形の石がこのあたりにあるらしいのだが、君達は知らないか？」

「ああ、あれなー……海斗、あいつどこ置いてった？」

「え？ あー……すっかり忘れてた。どこに置いてったっけ……」

「……はあ。一緒に探しに行こか。オッドアイな子供が持つとるんよ」

「そうか、わかった」

「あーあと、それとは別にもう一人の友人が、わいらを逃がすために匣を買って出たんやけど……」

「ああ、そのことなら大丈夫だ。フェレットもどき……ゴホン、もう一人の仲間が向かってる」

噂をすればなんとやら、クロノが言い終わってすぐに竹太刀の携帯に電話がかかった。



「竹太刀、無事か？」

『おお、綾！ こつちは何とか助けが来たから無事や。綾の方こそどうや？』

「正直かなりヤバい。左腕とあばらの骨がやられた。今は金髪の少年が手当てしてくれてる」

『金髪の少年……ああ、そうか。なら、とりあえず助かったつてどこか？』

「まあな」

ギリギリのところ借金髪の少年——ユーノの助けが入り、それによって管理局の介入を察知したアルフは逃走。ポロポロの俺は、ユーノの治療魔法をかけてもらっていた。

簡易的な手当てしてみたいなもので、さすがに骨折を治すような回復力はないが、痛み止めとしては十分助かっている。……まだ痛みが物凄いが。

「とりあえず俺はこいつ使ってお前らと合流するから。そつちは任せるぞ」

『了解や。ほなな』

通話を終了する。

「友達は大丈夫そうでしたか？」

「ああ、助かったらしい……さて、まずは友人と合流したい。なんで俺達が襲われたのかも聞いときたいんだけど」

「あー、えつとですね……」



魔法のことを迂闊に喋れないと思っ  
ているのか、ユーノが言い淀んで  
いると、空中にモニターが展開  
された。

『ユーノ君、聞こえますか?』

「リンデイさん!？」

『大丈夫よ。彼にはこちらで事情説明  
しますから。彼と一緒にアースラへ  
来てくれますか?』

「あ、はい」

『あなたも、それでよろしいですね?』

「……構いませんが、連れも一緒  
ですよね」

『ええ。勿論』

「わかりました」

モニターが閉じられる。

会話を聞いていたユーノは、俺達の  
やり取りに首を傾げていた。

「そういえば思ったんだけど……驚  
かないんですか? さっきのとか、今  
僕が使っている魔法とか」

「生憎、連れに魔法使いがいるん  
でね。慣れた」

「はあ……」

「じゃ、案内してくれよ。そのアースラってどこに」

「あ、もうすぐゲートが開きますから」

彼の言葉通り、程なくしてアースラへ繋がるゲートが開いた。



「綾！ 無事か——げふっ!？」

「触ろうとすんな。骨折に響く」

ゲートを通ってアースラに着いて早々、海斗が飛び込んできたため鳩尾に拳を入れた。

「て、てめっ……俺怪我人なんだぞ……っ」

「お前頑丈だろうが。というか、俺の方が骨折してる分重傷だ」

床に突っ伏して呻く海斗を冷静にあしらう。

海斗のことはほつといて、次に由衣の方を向く。

「由衣、怪我はなかったか？」

「はい。……でも、私、いつも助けてもらってばかりで、何の役にも立ってなくて、その……」

「そりや仕方ないさ。気にしなくていい」

「まあ、確かにしゃあないわ。こういうのは年長者に任しとき」

竹太刀が割って入ってきた。海斗と比べたら、怪我は少ないようだ。

「はい……」

「……竹太刀も、ご苦労だったな」

「おお、でも労いは海斗にかけておき。わいの怪我が少ないんも、海斗のおかげなんやで？」

「そうか。……で」

「……まできてようやく、俺はさつきから訊きたかったものの方を向く。」

俺の視線の先、武装局員に背負われている気を失った和也がいた。

「……なんでこいつは気絶してるんだ？」

「わいがやった。局員に敵意剥き出しでジュエルシード渡そうとせえへんかったから」

「ああ、なるほど」

確かにありそうだ。こいつなら。

そういうえばメール（確実に指令達成の知らせ）が届いたけど、まだチップ受け取っていない。まあアースラから降りた後で受け取ればいいけど。

「話は済んだか？　まずは君達の手当てのため医務室へ案内しよう。話もそこでして構

わないか？」

「ああ、わかった」

「ええでー。綾、肩貸そか？」

「大丈夫だ。歩ける。……海斗、行くぞ。いつまでもへばんな」

「お前が鳩尾にぶち込んだからだろうが……てか、俺こんな扱いはつか……」

え、今更？



「ああ……生き返る……」

「オヤジか」

「おじさんっぽい言い方すんなあ海斗は。風呂の気分か」

「でもすげえよ。傷が見る見るうちになくなっていくぜ」

「しかし治癒魔法は再生というより回復促進なんだ。骨折のような場合はやはり時間がかかる」

「それでも約二週間で動かせる程度にはなるんだろ？」

「リハビリは必要だな」

「医務室にて治療をしてもらおう。なお、ここに居るのは怪我の手当てをしてもらっている俺、海斗、竹太刀。俺達に治癒魔法をかけているアースラの医務員（ユーノ含む）。後はクロノと未だ気絶中——というか、寝ているだけじゃないのだろうか——の和也。怪我もなく、（なのはにとっては）予想外な場所での再会となった由衣は、なのはとアースラ巡りをしている。

「で、話については？」

「ああ、もう少し待ってくれ。今、艦長が来ている」

噂をすればというか、クロノがそれを言った直後に扉が開いた。

「怪我の具合はいかがかしら？ 初めまして……って言うのも変よね。少し前にモニター越しに会ったから」

入ってきた人物……リンディ・ハラオウンは部屋に入って俺達を見回した後、そう言うてきた。

「そうですね。話をするにあたっては問題ありません」

「そう」

リンディ提督は近くの椅子に座る。

簡単に自己紹介を済ませる。

「じゃあ、まずはあなた達の話の聞こうかしら」

「ええ。いいですよ」

俺はあらかじめ考えておいた説明を頭に思い浮かべ、再生を始める。

「世界が多数に存在し、魔法という技術が存在することはそこで未だに寝てる和也から聞いているんですよ。和也が魔法を知っている経緯については今は置いときますが。で、いつだか前に街中ででかい樹が街を破壊したり、それ以外にも奇妙な事が起こったり、それで俺達は独自に調査を行ってたんす。そしたら今日、魔力を帯びた石……ジュエルシードでしたっけ。……を見つけて、それから魔導師の二人組に襲われたんです。俺達は、もしもの時にと用意していた道具を使って逃げ続けて、ギリギリのところでクロノ他、あなた方が介入して助かった、という訳です」

「……なるほど。そういうことでしたか」

「では、そちらからも話をお願いしますかね？ あなた達の組織……管理局でしたっけ？ ……についてとか、ジュエルシードとは何なのか、とか」

「え、それは俺達には必要——」

「黙って聞きたい」

竹太刀ナイス。

確かに説明は本来必要ないのだが、そのその事実を俺達以外が知るはずもない。なので敢えて聞かなければ後の話がマズい。

リンディさんから、時空管理局という組織について、ロストログアについて、ジュエルシードについて、そして襲撃者、フェイトについての話を受けた。時々クロノも説明に入っていた。魔導師や次元世界については知っていると云った分まだ説明は短い方のだろうが、その間に和也は起きて、なのはと由衣も戻ってきた。

「しかし、ジュエルシードを渡して難を逃れる、とは考えなかつたのですか？」

一通りの話が終えたところで、いきなりそう訊かれた。

「いきなり武器を向けられたので。逃げることばかりで石のことは失念していました」

答えると、リンディさんは呆れたように息を吐いた。

「……まあ、ジュエルシードを相手方に渡らせず、こちらで回収できたことでは感謝すべきですし、対応に遅れがあつた私達にも非があります」

ですが、とリンディさんはまるで子供に説教するような厳しい口調で続ける。

「あなた達の大怪我をしてまで戦う姿勢は容認できません。特にあなた！」

ズイ。リンディさんが俺に顔を近づけてきた。おおう、近い！

「全身大火傷に加えて、骨折もしてるじゃないですか！ 魔法で回復を速めることはできるとはいえ、すぐに元通りになる訳じゃないのですよ！」

うわあ、ようなではなくガチで説教だった。

海斗、由衣、竹太刀、助けて！

「……………」

プイッ。

「……………」

プイッ。

「……………」

グッ！

……おい！ 露骨に目を逸らすな二人！ そして竹太刀！ その親指はなんだ？

何の意味なんだ!?

「こら、目を逸らさない！」

寧ろ目を逸らしてるのはあいつらで……ギャー!!



小一時間、こつてり絞られた。クロノが手のかからない奴だからだろうか、俺への説教に滅茶苦茶力が入っていたような気がする。

ジュエルシードを譲渡した恩でデバイス作ってもらおうとか若干考えていたが、しばらくは意見できる気がしない。



ちなみに海斗と竹太刀は俺ほど説教されなかった。おのれ……!

「さて、これからのあなた達のことですが」

その言葉に、海斗と和也が妙に表情を引き締めだしたが、俺はそんなことにまで気にする気になれない。

「重傷である綾さん、海斗さんはこちらで治療をしてから帰します。怪我のなかった和也さんと由衣さん、もう少し治療したら大丈夫な竹太刀さんは今日中に帰っても大丈夫です。そして、ジュエルシードについては私達が担当してます」

「君達はこのからはジュエルシードに関わることなく、今まで通りの日常に戻ってくれ」  
クロノがそう言った直後、やはりというか和也が動いた。

「危険なものが海鳴市にあるのに、黙ってられっか——ぶふっ!?!」

和也が言ってる途中で、俺は和也にピロースローイング。和也の顔面に直撃させた。

「竹太刀、あいつを押さえにGO!」

「らじや!」

竹太刀の動きは早く、俺のGOサインに素早く反応して和也の首をがっちりホールドした。

「なんだよ! 交渉の邪魔すんじゃないね——」

「黙っと……れっ!」

グキツ！

「あばす!？」

「か、和也くん!？」

和也撃沈。なのはが驚きの声を上げるがそれは無視。

「……わかりました。ただ、それについて一つ話が」

「……何でしょう?」

うわあ、リンデイさんすつげえ警戒している。なのはが協力すると言った事実があったからか、単に俺を警戒してんのか……多分後者だな。

「ジュエルシードがどこに散らばってるのかはわかりません。そちらでジュエルシードが見つかった場合や、こっちが偶然見つけた場合にそちらと連絡する手段が欲しいのですが」

「……確かに、それは一理ありますね。わかりました。あなたが達の携帯を、次元通信ができるように手を加えます。和也さんは、デバイスにこちらのアドレスを入れます。それでよろしいですか?」

「ええ。わかりました」

……よし、これで管理局との通信手段を得た。

携帯四つ、デバイス一つをリンデイ提督に預け、リンデイ提督は退室。クロノも用が

済んだため退室。

二人が医務室から出て、ふう、と溜め息。

「お疲れやなあ」

「ああ……まさか説教事になるとは思わなかった……」

「あ、あはは……私も、リンデイさんに怒られないようにしないと……」

「それ以前に、どうしてこんな大怪我になったんですか？ あのと二人がこんな大怪我をさせるとは思いつらいし、そもそも魔法でこんな大怪我をさせることなんてめつたにないものですよ？」

「粉塵爆発を多用して、狼女の方をキレさせながら戦った。さすがに挑発しすぎて、あばらや腕の骨がこの様だけど」

「え……アルフさんを怒らせてたんですか……？」

「常にな。ちなみに火傷については自打球だ」

「アルフをキレさせて」の部分でなのはとユーノにかなり引かれた。マジ切れのアルフが殴りかかるような場面ってあったっけ？

「まあ、しばらくはこの厄介になるんだし。話はその時にしよう。今日は疲れた」

「あ、そうでしたか。すみません。じゃあ、失礼しました」

「じゃあ、僕もこれで。……安静にしてくださいね？」

「なんで俺の顔見て言った？」

そんなに信用ないのか俺？

なのはとユーノが退室。それから、他の医務員達もお大事に、と言って出て行き、部屋にいるのは五人のみとなった。

「……ふう」

「なんや溜め息が多いなあ。計画通りに行かんかったんか？」

「いや、計画通りだ。これで管理局とのコネを持つことに成功した」

「で、これからどうすんだよ？ あ、わかった。連絡を利用してジュエルシードの回収しろ？」

「全然違う。というか、そんなやり方してもあつさり見つかって十二時間も持てないだろ。二十一個にも届かん」

それにバレたらリンデイさんからの説教が来る。あれは当然受けたくない。

「じゃあ、どうすんだよ？」

「二十一個全てが管理局もしくはテストタロツサ勢によって回収されるまで待機、やろ？」

俺が答える前に竹太刀が答えた。

俺は頷く。

「可能性があるならその状態で、タイミングは第一期の終盤だ。俺達はそれまで、しっか

り体力を回復させる。これが俺のプランだ」

「一発逆転……つてことなんですね？」

「まあな。竹太刀はプランの全容が見えてるみたいだな」

「なんとかなー」

「へー。じゃ、俺は二人の指示があるまで、待機を兼ねてなのはちゃんと話とかしてていいんだな？」

「ああ。自由でいいぜ」

よっしゃ、とガッツポーズを取る海斗。あいつにとって怪我の功名といったところなのか。

「和也はどないすんのや？　ぶっちゃけ説明しても納得せえへん気がすんのやけど」

「納得させろ。というか、納得してもらおう以外ないな」

「了解や。綾がいない間のオカン役は任しとき」

誰がオカンだ。

「あ、そつか……綾さんと海斗さんはここで怪我を治してもらうんですよね」

「ああ。だから、竹太刀の言うことをちゃんと聞いとけよ」

「はい！」

「みんな、携帯を次元通信ができるように改造、終わったぞ」

「あ、はい」

「案外早いな。四台もあるのに」

「すでになのはの携帯で経験済みだから、だそうだ」

そうなのか。

説明を受けた後、由衣、竹太刀、気絶したままの和也は海鳴市へと戻っていった。

さて、ここからが本番だな……。

## 第十話

管理局とのコネを手に入れた日の、時刻としては夜の九時半頃。竹太刀から電話がかかってきた。

「そうか……やっぱそうだったか」

『やっぱって、綾は予想してたんか？』

「可能性は考えてた。なんだかんだで、俺の意見を押し付けていたからな」

『いや、綾のせいやあらへんって』

「で、手持ちはいくら残った？」

訊くと、竹太刀は一旦黙り込んだ。

ややあつて、答える。

『……小銭と、なんとか奪い返した八万三千。綾の方は無事や。あいつ、そっちの方は全

然知らへんしな』

「……そうか」

『わい、今すつごい後悔しとるわー。なしてあの時綾達のこと観察で留めて、仲間に入れてもらおうとせえへんかったんやろ……』

「過ぎてしまったものは仕方ないさ。金が足りなかったらこっちのを使ってもいいから」

『すまへんなあ』

さて、一体なんの話をしてるのか。大体予想のついてる人もいるかもしれないが説明しよう。

竹太刀の話を纏めると、こういうことらしかった。



海鳴市に帰還してその夜、竹太刀は夕食を作り三人で食事。

その頃には和也も起きていて、彼に今後の行動——ジュエルシード全てが管理局もしくはフェイトに回収されるまで待機——を説明したところわ和也が早くこちらで回収すべきだと激怒。

その時は竹太刀が素早く取り押さえ、終盤で一気に回収するということを説明したため、和也も大人しくなったらしい。

しかし九時頃。竹太刀と和也の寢床である海斗の家で和也が不審な行動をとる。

様子を見に行き、「何してんの？」と聞いたところ、リュックに荷造りをしていた和也



がガルマを起動して暴れ出した。

とりあえず取り押さえてみると、リュックの中から一万円の札束——竹太刀と和也の合計分。明らかに五十枚以上あったので自分の分も入っているとわかったらしい——を発見。和也が金を奪って逃げるつもりだったのがバレた。

その時和也が初めて身体強化魔法を使用。竹太刀を超える身体能力で無理やり竹太刀の拘束を抜け、逃亡。

逃げる和也からなんとか八万程取り返したが、それ以上追跡して金を取り返そうとすれば今度は俺達の金を狙って襲撃してくる恐れもあったため、追跡は断念。

ちなみに、和也は逃げるときに、

「お前らみたいなトロい考えしか持たないノロマについて行くかバー——カツ!!（竹太刀の再現。トーン込み）」

……とかいう捨て台詞を吐いて行ったらしい。



で、現在。その報告のため竹太刀が電話をしてきているところに至る。

『まったく、あいつも好き勝手やりおって』

「それはいいとして、お前は どうするんだ？ あいつ チームを抜けたから、今 ソロなんだろう？」

和也は金を奪って逃げた挙げ句、竹太刀とチームも切ったらしい。確認すると確かに竹太刀の扱いがソロになっていたそうだ。

『そうなんよー。せやから、そっちのチームに入れさしてくれへんか？』

「まあ、いいけど。あいつについては？」

『そら、戻ってきた時にはまた二人でチーム組むわ』

「オーケー。じゃ、こっちで申請しておくから」

『おお。ほんならなー』

電話を切る。

近くで聞き耳を立てていた海斗が、俺から離れてやれやれと肩をすくめた。

「何やってんだあいつ。一人で指令をクリアできる訳がないだろ」

「今の和也が所有するスターチップは三つ。加えて、ジュエルシード一個の入手承認を受けている。緊急指令を受けない限りは死ぬことはないし、新たにチームを探すなら絶好の条件だろうな」

海斗の受け答えをしながら、携帯を操作して竹太刀のチーム『叛逆者』への加入申請を進める。

「なんで？」

「チームに入れるだけでジュエルシードの入手数を一個増やせる。そのアドバンテージはこの指令においては絶大だ。そいつを巡って取り合いが起き、最も有能や奴、入手数が多いチームと組むことができる」

「なるほどな。でも、俺はどんなことがあってもチームは抜けないぜ。親友だからな」

「そう言ってくれると助かる」

送信。……よし、チーム加入完了つと。

「……ま、三個以上の入手に失敗するか、第二期で崖っぷちになったら泣きついてくるだろうな」

「チームを引き連れてか？」

「そうなったら、そのチームのまま動いてもらうよ」

携帯を近くのテーブルに置いて、ベッドに寝転がった。もう寝よう。心身共に疲れた。



翌日。

学校の帰り道、由衣は歩きながらあることについて悩んでいた。

悩みは早い話が、自分が役に立ててないのではないかとということ。

(仕方ないっていうのはわかるけど……やっぱりに役に立ちたいなあ……)

子供だから仕方がない。言うのは簡単だが、やはり堪えるものがある。

なので、何かできることはないかと考えてみた。

(綾さんの怪我が回復するのは、確か回復魔法を使っていけば十日ぐらいだっと思ってたから、海斗さんと綾さんがアースラに居られるのは大体十日間……ジュエルシードが全部回収されて、なのはちちゃんとフェイトちゃんとの決戦がある日が確か……)

今から十日ぐらい後だったか。だとしたら結構ちょうどよくアースラにいる間に原作に関われるのかもしれない。そう思うと、本当にやることがない現実に気持ちがしぼんでしまう。

でも、と首を横に振る。

(やっぱりでできるだけ早い方がいいよね……誤差もどれくらいかよく覚えてないし……)

怪我でアースラに居座ることになったのは偶然だろう。しかし、どうやってアースラにいない状態から事件に関わっていかうとしていたのかわからない。関われない可能性もあり得る。

なら、できるだけ早く回収できる方がいいかもしれない。

「……………よしっ」

由衣はジュエルシードの独自搜索をすることを決意した。

（別に入手する訳じゃない……………見つけたら、触らずにアースラの人に連絡して、ただ待つていれば、ジュエルシードが発動することはないし……………）

安全に問題ない。そのことを認識した由衣はさつそく搜索に乗り出した。

道端、草原、小川の中と、仮に子供がいてもおかしくない、簡単に言い訳を言うことができる場所を入念にチェックしていく。

しかしいくら探せども、目当ての物が見つかる気配がない。

（うー……………やっぱりデバイスなしで探すのは無理かな……………）

当然の結果である。人の目に留まるような場所にあるジュエルシードはなのはやフェイトな加えて、他の転生者によって取り尽くされていた。

実のところ、海に存在する六個を除いてすでに誰かに回収されている。なので由衣が見つけることは最初から不可能であった。

「……………はあ、帰ろう」

もう日も暮れる。竹太刀に心配されなかったためにも早く帰らねば。

そう思つて来た道から折り返そうと踵を返すと、前方に人がいた。男だ。

別にそれだけならどうでもよかったのだが、その人から放たれた言葉が由衣の動きを止めた。

「お前、転生者だな」

「……………」

ビクツと肩が震える。

前回、前々回とは違い、由衣は一人。それが恐怖を煽る。

込み上げてくる恐怖を断ち切るように、グツ……と唇を噛む。

「ククツ、凶星って感じだなあ……じゃ、早速だけど消えてもらおうか……」

「……………何のためですか？ 人のスターチップを強奪したら、ルール違反で失格になるんですよ……………」

できるだけ自分を落ち着かせて、由衣は相手を静止を求める。前々回の相手は聞く耳を持たなかったことから、今回も同じである可能性がある。しかし、綾達のように抵抗する力のない由衣にはそれしか手立てがなかった。

しかし相手の転生者はその言葉に対して、クックと笑い声を上げた。

「そんなの知ってるさ。ついでに、失格者はこの世界から消されるってこともな。それでも、邪魔な奴は消すのが常識だろ？」

「……………」

相手はデバイスを起動した。起動して出来上がった杖を持ち、バリアジャケットを纏う。そして杖の先から紫の炎弾を精製する。

ひっと、由衣が小さな悲鳴を上げる。

転生者はそれを見て、薄く笑った。口調を軽く言う。

「まあでも、君はよく見たらかわいいみたいだし。俺に従うと誓うなら、命は見逃してあげても構わないけど？」

「……………っ。……………嫌です」

由衣は震える声で、しかしはつきりと言った。

由衣は持てる勇気を振り絞り、自分の意志を最大限に吐き出す。

「あなたみたいなののために……………海斗さんや綾さん達を裏切りたくありません！」

語尾を強めて言う。すると途端に転生者の顔から卑屈な笑みが消えていった。

「……………じゃあ、死ねよ」

紫の炎弾が由衣に襲いかかる。

高速で飛ぶ炎弾に反応しきれずら直撃を受けて由衣の身体が飛んだ。

「きゃあっ！」

「ああ、悪かったな。そういや、殺傷設定にするのを忘れてたよ」

ケラケラと笑い声を上げながら、転生者はデバイスを軽く動かす。デバイスの稼働音

が鳴る。殺傷設定になった。

杖から、先程よりも確実に大きな炎が上がった。これはきつと、魔力弾じゃない、砲撃だ。

さっきの何倍になるんだろう。痛みを感じる前に死んでしまうかもしれない。そういった思考に、カチカチと奥歯が鳴る。

(綾さん……竹太刀さん……海斗さん……!!)

最期を覚悟して、目をぎゅつと瞑った。

しかし、いつまで経ってもその最期がやってこない。代わりに前方から耳に届いたのは、トン……という小さな音。

(え……?)

由衣は前を見た。

そこにいたのは竹太刀でもなければ、綾でも海斗でも、そもそも男ではなかった。

フェイト・テストアロッサ。彼女が由衣の前に立ったのである。

「フェイト、ちゃん……?」

「……………」

フェイトは見向きもしない。

転生者はフェイトの登場が予想外らしく呆けた表情をしていたが、すぐに、由衣より



遥かに優しさのこもった声をかけた。

「やあ、フェイト・テストアロツサ。悪いけど、そこどいてもらえるかい？ その悪い魔導師を片付けるところなんだ」

「……あなたのデバイスから、ちゃんと封印しきれないジュエルシードの反応がある。それを渡して」

そう言つて黒い杖——バルディツシユの先端を転生者へ向ける。

どうやら、そういうことらしかった。フェイトはこの転生者が持つジュエルシードを奪いに来た。そして結果的に、由衣を助けることになっただけだった。

「うーん、まあこつちとしては、君に渡してあげてもいいんだけど……？」

転生者が言い終わるより前に、携帯の着信音がした。

「ちよつと失礼……」

転生者は懐から携帯を取り出し、いくらか操作をした。おそらくはメールを見ているのだろう。

フェイトはその間に彼に襲いかかることはしなかった。余計に魔力や体力を消費せずにジュエルシードが手に入る可能性があるからだろう。

しかし、画面を見た転生者の顔つきが険しいものに一変した。

「チツ……事情が変わった。ジュエルシードは渡せない」

「……なら」

《フォトンランサー》

バルデイツシュの機械音声。それと共に、フェイトの周りに金色の魔力弾が精製される。

「……力づくでも、渡してもらおう……っ！」

《ファイア》

フェイトが言葉を言い終わると同時にフォトンランサーが発射される。すかさず転生者は用意していた砲撃を撃ち出し、二つが衝突して爆発した。

「う……っ！」

巻き起こった爆風を何とか耐え、由衣が視線を正面に戻すとすでにフェイトの姿が消えていた。

あれ、と思うより前に前方から「ぐえっ！」と潰れたような呻き声が煙の奥から聞こえてきた。カランカランツと乾いた音もなる。

煙が晴れる。晴れた視界に映ったのはバインドをかけられた転生者、地面に転がっている彼のデバイス、そして、そのデバイスにバルデイツシュを向けるフェイトの姿だった。

一瞬で勝負は終わった。自分達が到底及ぶ相手ではないということが、由衣は痛感さ

せられた。

魔力量は当然だが、それだけでは一瞬で終わる理由にも、息一つ乱さない理由にもなかなかならない。高い魔力ランクから来る速さや的確な攻撃を打ち込む正確さ、何より、それらを最大限に生かす経験の差であった。

当然だが、自分達——転生者には戦闘の経験なんてものはない。剣道、柔道のような格闘技の経験を持つものならいるだろうが、魔法戦はそれとはほぼ全く意味がない。アニメなどでイメージできるなどと言っても、イメージだけでは高が知れている。それに自分の得意とするもの、苦手とするものがわかっていない。

それに対してフェイトはリニスという家庭教師がいて訓練を積んでいた。自分の戦法を磨き、弱点も理解している。圧倒的な差であった。

「デバイス内のジュエルシードを再封印。そして収奪」

《イエツサー》

機械音声が鳴り、まず転生者のデバイスのコアが光った。その光から、ジュエルシードが一つ排出される。そして今度はバルディッシュのコアが光り、ジュエルシードの封印をする。

魔法陣を足元に展開し、魔力光に照らされているフェイトの姿が幻想的に見え、ファンタジーの世界みたいだと由衣は思った。実際、魔法が存在するこの世界は一種のファ

ンタジーの世界であるが。

「きれいだなあ……」

「……？」

つい、声に出た。しかし少し距離があったためかフェイトには聞こえなかったらしい。

フェイトはジュエルシールドをバルディッシュに吸収させると、用がなくなったこの場所を飛び去っていった。

フェイトの姿が見えなくなつてから、ドシャツと崩れ落ちる音が由衣の耳に入つてきた。

はつとして音源に視線を向けると、そこにはうつ伏せに倒れた転生者の姿があつた。気絶しているらしい。

その転生者から、スターチップ二つが浮かび上がってきた。一つは見慣れているものだったが、もう一つは無色透明なものだった。

その二つのチップが砕け散る。程なくして、転生者の身体が青白く発光し始めた。

「……っ！」

とつさに目を逸らす。パキンッ……という音が後ろから聞こえた。

恐る恐る後ろに向き直ると、そこにはもう何もなくなつていた。

魔力反応を元になのはとクロノが駆けつけてきたのは、それから間もなくだった。

## 第十一話

アースラで療養を始めてから、五日経った。

転生者が由衣を襲った事件については、由衣は『ジュエルシードの思念体』が襲ってきて、先にやってきたフェイトがそれを撃退・封印した、という説明をしたらしい。確かに、転生者云々を抜いても魔導師に襲われたというのは説明としては面倒なことになる分、その方が納得がいくだろう。あとでフェイトちゃんに口裏合わせてもらわないとなー、と由衣が呟いていたが。

で、五日経ってジュエルシードの収集率は著しいものになっていた。

それというのも、陸にあるジュエルシードは全て一度は人の手によって回収済みだったのである。管理局の登場に伴って、そろそろとジュエルシードを持つ、もしくはそのチームにいる転生者が現れてきた。実は俺達がアースラに乗り込んだ日に来た人もいたりする。フェイトも、転生者からジュエルシードを強奪しているようだ。

で、やってきたのは、からすまひむろ鳥間氷室率いる三人チーム『インテリ不良』。

たきかわよしき滝川由樹率いるチーム『連合軍』。

この二チームがアースラにやってきた。どの人もスターチップを使わず、もしくは緊

急指令によって現在生存圏に入っていて、この指令についてはもう関わるつもりのない人達ばかりだ。

……もう一人、アースラにやってきた例外を除いて……。



「やあ、綾！ 調子はどうだい？ ラーメン持ってきたけど、味噌と醤油、どっちがいい？」

「……じゃあ、味噌で」

「了解つと。じゃあ俺は醤油の方を頂くよ」

昼食時になって、背が高くやせ細った男、烏間氷室がやってきた。彼に続いて二人の男も入ってくる。

氷室は療養中の俺に代わって食事を持ってきてくれたりと、それだけ見れば世話好きな印象も受ける。しかし、実際にはチーム名で『インテリ不良』と名乗っている通り、不良のチームメイトの頭。自らも元の世界では不良として腐っていたらしい。

対面した時には俺にチームを切って氷室のチームに来るよう言ってきた。しかし理由を付けてきっぱり断ってからそれきり勧誘がない。てつきりしつこく迫るものかと

思ったからそこは意外だった。

他の二人は『インテリ不良』のメンバー、高田と末崎だ。末崎はグラサンすえぎをしているためそれで見分けている。彼らは氷室曰わく『動くこと以外には役に立たない』らしい。ちなみに三人の年齢は氷室、高田、末崎の順に十五、十三、十五である。

ちなみにここは医務室だが、俺がここにいるためか、ここが転生者の溜まり場になってしまっている。クロノが頭を抱えてたな。

「あれ、氷室、俺の分は？」

「ん？ ……お前はもう治ったんだろ？ だったら自分で取りにいけよ」

「なんで綾と俺とで態度に差があるんだよっ……！」

氷室に冷たく突き放された海斗はプルプルと拳を震わせた。

氷室の言う通り、海斗の怪我はすでに完治している。怪我の度合いが俺よりまだマシだったし。降りていないのは、

「綾が完治した時に同時に降りれば問題ないだろ？」

と言つて無理やり居座ったのである。まあ俺も友人がいる方が助かると言つて許してもらったのだ。

「差なんて当然じゃないか。療養中の実力者と元気いっぱいなのドベとでは」

「ぬぐぐぐぐ……ッ！」



「抑えろ海斗。それと氷室、海斗は基本は確かにドベだが、スポーツに限っては俺以上だぞ。スポーツ以外はドベだが」

「お前はどつちの味方なんだよ!!」

「よくキレルなあ海斗は」

新たに人が入ってきた。ボサボサで赤く染めた髪を生やした少年、滝川由樹（十二）だ。カレーライスを二つ乗せたトレーを持っている。

「ほら、海斗。カレー持ってきてやつたぜ。食いなよ」

「おお! ……いや待て。由樹、お前、このカレーに手加えてないよな?」

海斗は由樹が差し出したカレーライスに喜んだがすぐに警戒し出し、差し出した本人にそう訊いた。

「何言ってるんだよ。食い物や料理した人に失礼なこととはしてないって」

「……そう、だよな。うん、そうだよな! 悪い由樹、疑いすぎた。じゃ、いただきまーす!」

海斗は疑っていた海斗に謝って、それからカレーを食べ始める。

が。

「かれえええええつ!!」

海斗大絶叫。カレーを除けてからのた打ち回った。

それを見て由樹は大笑い。

「ギャハハハハッ!! 管理局名物『激辛カレーライス』の辛さSSSランク、本物なんだな!!」

……見ての通り、由樹は悪戯好きなのである。特に海斗はあつさり引つかかっではそのリアクションが面白いのだそう。以前くれと言われた。当然断った。

(というか海斗も引つかかりすぎだろ……)

警戒してもあつさり引つかかってるし。ラーメンをズルズルと啜りながら未だにのた打ち回る友人を見てそう思った。

「あら、まーた由樹の悪戯? 彼も大変よねえ」

いつの間にかもう一人やってきていた。相川あいかわマリア(年齢は教えてくれなかった。多分十三か四)である。名前から察することができるだろうが、日本人と外人のハーフ。髪の色が染めたようなくすんだ金髪なのが悩ましい。

現在アースラにいる転生者の中では唯一の女性である。由衣? あいつは地球だ。彼女は由樹と連合を組む前はコンビで『エレガンス』のリーダーであつたそう。そんな彼女が由樹にリーダーを譲っているのは、彼に相応の実力があるからであろう。

ちなみに『連合軍』の残るメンバー二人は田嶋たしぎと城崎しろさきというのだが、二人ともここにはいない。

「ほら、あなたが頼んでた魔法の術式資料、持ってきてあげたわよ」

「ああ、ありがとう」

マリアが差し出した本を受け取る。そしてその本を片っ端から読み始める。

マリアが言った通りこの本は魔法の術式を記した資料本だ。ずらりとその計算式とミッド語の解説が書かれているが、難しすぎる訳ではない。

実は療養している間、俺達転生者は暇潰しとしてクロノから魔法を教えてもらっていた。簡易検査で魔法を使える資質を確認されてから、量産型のストレージの杖をもらい、クロノから教授してもらったりこうして自分で勉強したりしている。ミッド語についてもクロノやエイミーなどから教えてもらった。

なのでミッド語はわかるし術式も理解できる。海斗とか一部はまだわからないようだが、そこは理解の速さの違いというものだろう。

マリアは他に持ってきた本を近くの机に置いといた。そこにはすでに何冊も本が積まれている。全て魔法関係の資料本だ。

パタン……。

部屋の隅で、本を閉じる音が聞こえた。

音を立てた主は立ち上がると、静かに本が積まれた机へと向かっていく。

少年だった。俺達よりも確実に幼い。多分なのはと同じ九歳か、このゲームの中では

最年少となる八歳。

日に焼けたのか地肌なのか、褐色の肌で、髪の毛も焼けたような茶髪。

「……………」

彼は持っていた本を机に置き、新たに積まれた本を一冊手に取る。

そして部屋の隅に戻ると、床の上に座って本を読み始めた。

……彼は、才さいというらしい。

苗字は知らない。彼は名前も含め、必要以上に語ろうとしない。

彼は、アースラに來た転生者の中では唯一のソロだ。デバイスを保有し、そして現時点でおそらく唯一、ジュエルシードを三つ入手を承認されている人物だ。

なぜ、三つ入手したとわかるのか。簡単だ。彼は三つジュエルシードを出したからだ。

俺達を含め、他のチームは一つが限界だったのにも関わらず、彼はソロで三つ手に入れている。実力を持っているということは、目に見えて明らかであった。

当然氷室や、すでに四人埋まっている由樹も勧誘に乗り出した。しかし、才は何に対しても沈黙を貫くため、どうしようもなかった。

「やっぱ、お前も気になるか？ あいつのこと」

「……………」

氷室の問いには反応せず、じつと本を読む才を見つめる。

(ただ気になるのは……あいつが時折俺達を観察するようにこつちを見てくることだ……)

それに気づいているのは、この中に何人いるだろうか。

本当に極稀に、一瞬だけなのだから、気づくことは難しい。俺も、気づいたことは本当に偶然だった……。

(……よし)

訊いてみよう。身体も随分治ったし、話しかけるなら今だ。

「……なあ、才」

「……………何？」

反応した。本から顔を上げて、こちらを見て。

「それだけのことでこの場にいるほとんどが驚きの声を上げた。今まで、反応なんてしなかったのだから。」

「……………いくらか、俺の質問に答えてくれないか？」

「……………いいよ」

ざわめきが生じる。俺も驚いた。今まで反応しなかった彼が急に素直な対応をすること、不快感を覚えずにはいられなかった。

『……おい、おい朝霧!』

グラサンの男——末崎が念話で声をかけてきた。念話なのに、音量を抑えている。

『何でかは知らんがやつと反応したんだ! ここは慎重に、まずは名前から——』

末崎の言葉は、それ以上聞く気にはならなかった。元より、話す内容の確認ばかりを  
していて、話は半分以上聞いていなかったが。

それでも俺が最初に尋ねた内容は末崎の考えの正反対であるというのは、確かだつ  
た。

——どうして、アースラにやってきた?

「……………」

返ってきたのは、沈黙だった。

俺は、言葉が続ける。

「お前がここに来る目的がわからない。俺や海斗のように怪我を治すためや、氷室達の  
ようにただ見物客として来た訳でもない。指令は目標個数の入手は達成しているみた

いだから、これ以上危険に巻き込まれる理由はないはずだろ？」

「こ、コラ！ 朝霧！ 話には手順つてもんが——」

「まあまあまあ！」

怒り出す末崎だが、それは氷室によって取り押さえられた。

「な、何すん——」

抵抗する末崎を押さえつけ、氷室は声を潜めて悟す。

「落ち着きなつて。ボンクラな交渉術は効かないつて考えたんだろ。それに、どうやらあの才つて子供は元から綾と話をするつもりだったみたいなんだ。だまって見ようぜ」

「……………」

才は静かに、本を閉じた。

ややあつて、小さく呟くように答えた。

「…………人を、探してた」

「…………人？ このゲームに巻き込まれた友達か？」

「いや…………違う」

本をそばに置き、才は立ち上がった。静かに、俺の元へと近寄る。

「…………一つ、勝負しないか？」

「勝負？」

「ルールは君に任せる。君が決めたゲームで、一つ勝負したいんだ」

「……それに……勝たなきゃ聞けないのか？」

「勝負さえしてくれればいい……勝つても負けても話すよ……勝負中に話してもいい……」

「俺が負けた場合には……？」

「何も無いよ……僕はただ勝負がしたいだけ……」

「意図が読めない……何をしたいんだ……？」

「……だが、リスクもなくこいつを知れるなら……！」

「……わかった。じゃあ、勝負しようぜ。……海斗、頼んどいた新品二つくれ」

「二つ？ お、おう」

海斗から投げられた二つの箱。その二つを右手に納め、うち一つを才へと投げる。才は難なくキャッチ。

キャッチしたものを見て、才はその正体を確認する。

「トランプ……」

そう、トランプ。管理世界にも存在するらしい、ギャンブルでは定番のカード。

「ゲームやルールは俺が決めていいんだよな？ ならこいつでやろうぜ。……変則式

ギャンブル、『五十四の二倍ポーカー』で……！」



口角を吊り上げ、俺は才に挑戦状を叩きつけた。

## 第十二話

「『五十四の二倍ポーカー』……?」

「ああ。ルールは普通のポーカーと大体同じだ。役の種類、強さも同じ。そこに、自分の五十四枚の山札を持ち、自分で山札を切り、自分で引く。つまり、運を引き寄せるのは自分次第ってことだ。で、十回繰り返し返して多く勝った方の勝ち」

ゲームのルールをざっくり説明する。

この説明で大体全部だ。自分で山札を切り、五枚引き、それから一度だけ手札をチェンジ、そしてオープンして役の強弱を競う。それを十回行うゲーム。

「……ジョーカーは?」

……ああ、そうだった。ポーカーは普通、ジョーカー抜きで五十二枚で行うゲームだったわけ……。

……このポーカー自体、あいつ以外の人とやるのは初めてだしな……。

「……綾?」

……っと、ルール説明だったな。

訝しげに呟く海斗に気がつき、慌ててルール説明に戻る。

「ジョーカーはいかなるカードにもなり得る。ただし、ジョーカーの入った役は同じ役の中でも最弱となる。これでいいな？」

「ワイルドポーカーということか……いいよ。……それと」

才は俺——正確には俺の左腕を指差した。

俺の左腕はまだ、ギプスによつて固定されている。完治するまであと数日かかると言われている。

「その腕でシャツフルはできないと思うけど……代理立てるの？」

「いいや」

俺はデバイスを展開した。

長杖となったデバイスの先端を左腕に向け、先端に可能な限り威力を高めたシューターを三つ精製、叩き込んだ。

ビリビリと痺れ、完治してない左腕が痛みで悲鳴を上げるが、なんとか耐える。ギプスはシューター三発によつて碎け散った。

付着している石膏の欠片をほろい落とし、左手を握つたり離したりする。

「カードを持つ程度なら、もうできる」

「……そつか。じゃあ、始めよう」

箱からカードを取り出すのは、ほぼ同時だった。



『……おい、海斗』

「んあ？」

綾と才がカードをバラバラに混ぜ始めている間、氷室は海斗に念話で話しかけた。海斗はいきなりの念話で思わず声を出してしまったが。

『念話にしろ。お前は、このゲームを知ってるのか？』

『……いや、知らねえけど。即興で作ったんじゃねーの？』

『即興にしてはルールを決めるのがやけに早い。それに即興勝負ならめくりとかもっと単純なものにすることだってできるんだぜ？ 過去にやったことのあるゲームだと見た』

『うーん……つつても、俺があいつと知り合ったのは高校に入ってからだったしなあ』

『……ま、それはどうでもいいか』

氷室は海斗との念話を打ち切った。綾についての情報の足しにしようと思論んでいたのだが、知らないのであれば意味がない。

そんな氷室に、念話で由樹が語りかけてきた。

『早速仕掛けてきたね、彼』

『……なんだ、お前もそう思うか?』

『それ以外有り得ないっしょ。自分で山札切つて自分で引くつて、どう考えてもイカサマありつてことじゃん?』

由樹の言葉に氷室も賛同した。

自分で山札を切るということは、自分で山札のカードを操作することができるといふことになる。カードの縁に目印となるものをつければ、それが重なつて上に来るようにシャツフルすればよい。

『チェンジ含めて一回で引ける枚数は最大十枚……スペードのロイヤルストレートフラツシュの素材は三、四巡ぐらいで全部引くだろうか』

『まあ、そこは運勝負だけだねー。綾はあいつが最初に五枚捨てるかどうかで判断するんじゃない? ゲームのカラクリに気づいて五枚捨てればやれる奴、初のゲームつて感覚に吞まれて出し惜しんだら大したことなし、つてさ』

シヤララララ……。二人がこうして話している間にも二人は念入りにシャツフルをしている。

最初にごちゃごちゃにかき混ぜ、一纏めにしたら数回カット、それからマシガンシャツフルし、またカット。手順もタイミングも両者全く同じで、奇妙に思えるほど

だった。

シヤツフルを終え、両者共に山札を置いた。

「じゃ……始めるぜ」

綾の宣言と共に、二人は五枚カードを引く。

才が壁を背にしている関係上綾側にいた氷室達は、綾の手札に後ろから覗き込んだ。

「おおっ……！」

「へえ……」

末崎の嬉しそうな声と、氷室の感心したような呟き。

綾の引いたカードは全てスペード。数字は左から順に10、3、8、K、J。

末崎は初手でフラッシュというなかなかの役が出来上がっていることに歓喜しているようだったが、氷室が感心したのは当然別のところ。初手でロイヤルストレートフラッシュの素材を三枚引いたところである。

氷室と由樹の予想通り、この勝負で最も重要なのはいかにスペードのロイヤルストレートフラッシュのカードを引き、そのカードに目印——ガンを仕掛けるかにある。そのうちの10、J、Kを初手で引くというのはそれだけでアドバンテージであり、かつチェンジによってさらに引き当てるチャンスも得る。綾の勝負運はなかなかであった。

綾は順番、上下がバラバラなカードの整理を始める。

(ガンを付けたな……)

ここからでは具体的な目印の形は見えないが、カードを整理している時に綾がこっそりI O、J、Kのカードの縁に爪を立てたのを氷室は見落とさなかった。相手からはただ整理しているだけのようにはしか見えないう。それほど自然で素早いテクニクだった。

(やつぱり、こいつをどうにかしてこつちに引き込みたいねえ……)

海斗に聞いたところ、進学高校で主席であつたらしい上、アルフとなかなか張り合つていたらしいことから自分以上にかんりのやり手だ。逃す手はない。

しかし、彼が断る際に言つた理由——「仲間を見捨てる気はない」——それが引き入れるのを拒んでいる。

人は受け身姿勢では本来の力は發揮されない。自主的であつてこそ本来の力が引き出される。

氷室はそこはわかつているため、無闇に勧誘する訳にはいかないのである。チームではなく連合を組むのどうか——と思つたことはあつたのだが、断られそうな気がなんとなくした。連合を組めたとしてもある日突然、なんてこともあり得る。

まあ、それはともかく。

「じゃ、五枚チェンジ」

カードにガンを付けた後、氷室の予想通り綾は迷わずにフラッシュの手を捨てた。カードの種類がわからないよう、重ねて置いたのにも計画性を感じる。むしろ末崎が騒ごうとしたりと、才がこっちの反応で感づかれはしないか冷や冷やした。すぐに末崎は取り押さえたが、バレてないかは不明だ。

綾が新たに五枚のカードを引く。

さらにスペードのAを引き当てた。残念ながらQのカードは見えない。

(まあ、一回目で四枚も引ければ上出来か。さてあいつの方は……)

氷室は才の方に視線を移す。しかし奇妙な光景が映った。

捨て札がない。

シャッフルの手順、タイミングを完全に綾と同じにしていた才が、まだ手札を捨てていない。このルールのポーカーならチェンジも同時にやりそうだったのだが、順番を意識したのだろうか。

「どうした？ お前もチェンジしていいんだぜ」

そう言つて綾は促すと、才から予想外な答えが返ってきた。

「いい……。チェンジはしない……」



——え？

氷室のその反応は、そのまま目の前にいる綾の反応でもあった。



「いい……。チェンジはしない……」

(え……?)

才の放った言葉に、俺は一瞬耳を疑った。

チェンジは……しない……?

(自分で仕掛けてなんだが……本当に気づいていないのか……?)

でも、ジュエルシードを三つ素早く手に入れることに成功した奴が、このような仕掛けに気づかないというのか?

すでにロイヤルストレートフラッシュを揃えたという確率は……まず有り得ない。

シャツフルは念入りに行っていた……ガンをつけるような動作も見られなかった……というか、このトランプは買った時にはAを1として1〜13で並んでる。埋もれた状態の10〜Kを、確認もせずガンをつけるのは難しいはずだ……。

でも、だからと言って一枚も変えないだろうか?

五枚必要とする、もしくはチェンジの必要がない役はストレート、フラッシュ、フルハウス、フーカーカード、ストレートフラッシュ、ロイヤルストレートフラッシュ。役の種類こそ数はあるものの、役そのものが出る確率は滅多にあるものじゃないだろ……？（俺は初手でフラッシュを引いたけど）

「……どうしたの？」

「あ、いや……じゃあ、開くぞ？」

「うん」

フラッシュを捨てて引いた俺の役は4のワンペア。お世辞にも強いとは言えない。多分才には勝てないだろう。

それで、彼の役は………!?

「……!？」

「マジか………！」

俺や、思わず声を上げた氷室……他の全員も……驚きを隠せずにはいられなかった……。

スペードの10……。

J ……。

Q ……。

K ……。

A ……。

最強の……純正かつスピードのロイヤルストレートフラッシュが、目の前に完成して  
いた……。

「ちよつと、確認させろ……！」

目の前の光景が信じきれず、才が揃えたカードを手にとってみる。

……上下も順番もバラバラ……しっかりシャツフルされている証拠だ。カードの裏  
や縁にガンを付けた形跡も全くない……。

こいつ……本当にただのシャツフルでロイヤルストレートフラッシュを引き寄せ  
たっていうのか……!?

「……どうするの……？ 残り九戦やるの？ 君のやり方があるなら、これから先僕の

負けはないよ……」

「……。……いや、いいよ。俺の負けだ」

手を上げて降参の意志を示す。

イカサマゲームということにも気づかれている……。ここから先、俺がロイヤルスト

レートフラッシュを出せるのは最低でも三巡目以降だ。対して、才は常に出し続けることが可能……勝ち目は無い。

「……そう」

才はカードを箱に戻し、こっちに返した。

「勝負をしたら話すって約束だったから……話すけど、いいかい？」

「……、……あ、ああ。……人を探してるけど、その人とは友人関係はないんだよな？」

「ああ……人名で探してはいないんだ……ある基準で、僕の求める人を探していた……」

基準……求める人……チームに入れる人を探して、その選別作業中……ことか。  
なるほど……この勝負も、選別作業の一つだったって訳か……。

「とすると、こいつの示す基準というのは判断力、発想力、その他諸々……大雑把にすれば実力を持つ者ってことか。」

「僕が掲げる基準……それは、人がどの道を進んでいるのかだ……」

「え……？」

「進んでる……道？ 実力じゃなくてか……？」

「観察していて、ほとんどの転生者が現実を知ってから進む道は三つ……」

「……」

「一つ目は、理不尽な現実と指令を前に匙を投げ、命あつての物種、現状維持するだけで

満足する人……二つ目は、自ら攻略することをしないで、誰かの傘下に下ることです。生きようとする小判鮫……そして三つ目は、目の前の利益に溺れ、不要な裏切りや脅迫、暴力を振るって天罰をくらう者……」

才は俺の後ろ……氷室達の方を見やった。

「大体の人は……僕と綾以外の今まで見てきた転生者はみんな、この中に入る」

「なんだとガキツ……！」

「そうカリカリすんなって。確かに俺は一つ目に入るし、末崎は三つ目っぽいよなあ」

「なんだとお！」

「……じゃあ訊くけど、あなたと綾は一体何に分類されるのかしら？」

それは俺も訊きたかった。

思想者である彼はともかく、俺までも入っている四つ目の分類。彼が探していた分類もそこになるはずだ。一体何が……。

「……僕と君は……」

不条理な運命に立ち向かい、神を討たんと前に進む……同志だよ」

「……………!!」

神を……………討つ……………どうしてそのことを……………そして……………同志……………!?

「僕は……………ずっと君のような人を探してた……………!」

幼さを感じる彼の瞳は真っ直ぐと……………俺の姿のみを映していた……………。

## 第十三話

(同志……！)

「僕は……ずっと君のような人を探してた……！」

俺と才が……同志……!?

「……………」

「……………」

沈黙……いや、俺の場合は硬直と言った方が正しいものだった。

後ろでは末崎が吹き出して、馬鹿馬鹿しいとか色々言っているが、耳に入っていない。い。

「……いつ? どうしてそう思った?」

「……君を見て、ふっ……と、そう思った」

「は……?」

「時々、あるんだ。勝負の時とか、探し物をしている時とか……無意識にそうだって感じたら、それが寸分違わず当たってることが」

さっきのポーカーも、ふと「勝てる」と感じ、それが当たった。そう彼は付け足した。

「勿論それだけじゃ確証足り得ないから、君のことについて調べてみた。クロノに訊いてみたり、後は今の勝負だつてそうだ。いや……君の質問した内容ですでに、実力のあ  
る人だつて確信はできていた……凡人だったら、ただ慎重な質問ばかり並べていくだけ  
だから……」

「……それで、どうするつもりだ？　俺のチームは四人埋まつてる。誰かを捨ててお前  
と組むなんてことはしないぞ」

「必要ないよ……神を討つ時、そんな制度に関係なく肩を並べて戦う……僕は、その時を  
待ってるよ」

「……これから、どうするつもりなんだ？」

「逆に訊くけど、君はどうするつもりなの？」

「……ジュエルシードを、全部回収する」

「……そっか」

表情に変化はない。だが、その言葉を待っていたと言っているような、そんな雰囲気  
がした。

「誰もその気がないなら、僕がやるつもりだったけど……それは君に譲るよ。僕はもう  
しばらく、ここに本を読んで……」

「いつ——」



いつ、策を思いついた？ ……そう訊こうとして、やめた。それを訊いたら、俺では一生及ばない——そんな気がした。

才は紙とペンを取り出して何か書くと、それを折り畳んで俺に握らせた。

「協力が必要なら、いつでも喜んで力を貸すよ……じゃあ僕は、ちよつと昼食をとつてくる」

言つて、才は医務室を出ようとする。

俺は、それを呼び止めた。

「……名前」

「ん……？」

「フルネームを教えてください。戦いで肩を並べる相手の名前も知らないつてのはどうかしてる。俺の名前は朝霧綾。……お前は？」

「……フフ」

彼は笑つて、しつかりと体をこちらに向けた。

「そつか……まだ言つてなかつたね。……天翔才……それが、僕の名前……」

才は医務室を後にした。

紙には、携帯の電話番号が書かれていた。



それから、何事も無いように時間が経っていった。

あれ以降も才は特別な動きはせず、部屋の隅で静かに本を読んでいる。

俺はあの後ギプスを勝手に壊したことが医務員にバレ、こつぴどく怒られた。しかしもう左腕が動くことから、ギプスを付け直すことはなかった（安静にしているよう強く言われたが）。

氷室や由樹は才について勧誘することは諦めたらしい。彼に話しかけることはなかった。

そして、次の日。

俺と才がいつもの通り医務室で術式資料本を読み漁っていると、海斗が念話で声をかけてきた。ちなみに、今医務室にいるのは俺、海斗、才の三人だけである。

『なあ』

『なんだ。念話でないといけないことなのか？』

『いけないつつーか、なんつつーか……まだ一日しか経ってないけどあれ以降お前と才が何かをするってことも全然ないけどさ、お前才のことどう思ってるの？』

どう思ってる、ねえ……。

そうだな……。

『……今のところは、とても越え難い存在だな。とても大きく、ずっと先を進んでる……』

『そこまで……』

『でも、いつかは追い付いて、乗り越える。乗り越えてみせるさ』

そう、才に負けては、その更に先に居座る神にはその元へ辿り着くことすら不可能だろう。少なくとも、彼に追いつけるようにしなくては。

そのためにも、『譲る』という形で俺に差し出された、全ジュエルシード回収という『お題』……これを完全にクリアしなければ……。

ビー!! ビー!! ビー!!

「ー」

「な、なんだなんだ!?!」

「……早いね」

喧しいサイレンと夥しい『EMERGENCY』の文字の中、才は呟いた。

俺達が聞き取ることを意識したその呟きは少し大きいものだった。

「……早い? それって……」

「え? てことは何、もう海のジュエルシード!?!」

「……そんなに早いのか？」

訊いてみると、海斗が物凄い勢いで振り返った。

「はえーよ！ 海のやつは本来なのはちゃんがアースラに協力してから十日目なんだぞ!? まだ三日もあんだぞ！」

「ジュエルシードの回収効率はとても良かったからね……」

「つと、それよりも！ 早くブリッジに急ぐぞ！」

「おい、引つ張んな！ わかったから！ ……才は行かないのか？」

「変わんないよ……僕達が関わっても関わらなくても……」

「………違うないね」

本を読み続ける才に苦笑しながら、俺はブリッジへと急いだ。



俺達がブリッジに着くと、すでになのはや他の転生者メンバーも揃っていた。

「状況はどうなんだ!？」

「敬語ぐらい使え。……で、そこんどこどうなんですか？ つつても、まだ見始めたばかりですかね」

「…………ええ、そうね。でも見たところ、このままでは確実にあの子は墜ちるわ」

やってきた俺達に呆れたような疲れたような、そんな様子リンデイさんが答えた。  
…………多分、氷室達ですでに注意して無駄と悟ったんだろうな、これ。

「あの、私、フェイトちゃんを助けに…………！」

だがなのはの意見はクロノによって止められる。

「その必要はないよ。放っておけば、勝手に自滅する。仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「そんな…………」

「今の内に捕獲の準備を」

「私達は、常に最善の選択をしなくてははいけないわ。残酷に見えるかも知れないけど、コレが現実…………」

「…………ま、艦長が判断したからには従うしかないだろな」

「綾さん!？」

「綾、てめえ!」

「……………………」

俺の一言に、ほぼ全員から驚愕、非難、怒り、疑念、警戒と様々な視線が…………つて、待て。氷室と由樹は若干気づいてるっぽいけど、なんでリンデイさんとクロノまでこつち

見る。さっきの台詞に警戒する要素があったのか。

「綾、お前あいつがあんな目に遭っている状態でそんなこと言うのか!」

俺の胸倉を掴み、声を荒げる海斗。

俺は溜め息を吐いて海斗の手をほどく。

「落ち着け海斗。ちゃんと考えがあつて言つてる。……リンデイさん」

「……何かしら?」

静かに、しかし確実に警戒を強くされる。もうすでにここまで読んでいるようだ。

「なのは、ユーノ、クロノの三人に現地への出撃命令をお願いします」

「……君は人の話を聞いていたのか?」

「ああ、聞いてたよクロノ。『常に最善の選択をしなくてはならない』という考えに基づいて俺なりに客観的に考えた結果、直ちに三人を現地に向かわせるのが最善と判断した」

「理由を……聞かせてもらえないかしら?」

「主にジュエルシードの暴走、それに伴う被害によるものです。まず、彼女が自滅するまで放置するということは必然的にジュエルシードも暴走したまま放置することになります。そうなれば暴走の範囲が拡大し、民間人への被害が予想されます。六個同時ともなれば、被害が甚大なものになる可能性は、あなた達もわかっているはずです」

ジュエルシード一個で中規模次元震を起こすのだから、それが六個になった場合の被害は小さくはないはずだ。

これは持論だが、警察組織の最優先事項は犯人確保や危険物押収ではなく、民間人の安全確保だ。時空管理局もある意味では警察組織。そして民間人の安全確保を最優先することは管理世界だろうが管理外世界だろうが関係ない——少なくとも、リンディさんはそう思えるはず。

「確かにそうね。でも、それだとあの子に逃走の力を残してしまいわ。あの子もジュエルシードを持っている……逃がしてしまえば、彼女が所有しているジュエルシードが暴走してあなたが言っていた被害が出る可能性があるのよ？」

「彼女が疲弊しているというのはあなた達もわかっているでしょうが。加えて三対二なら数の差で有利ですから、沈静化させてから確保も十分可能でしょう。次いつ起こるか分からない火事の分の水がなくなるからと目の前の火事を見過ごすのと同じですよ、それ」

しばしの間沈黙が流れる。なのは他落ち着きのない奴らのそわそわした音やモニターから流れる音がうるさい。

「……綾さん。私は艦長としてなのはさんやあなた達を含め、このアースラに乗っている全ての人の命を預かっているの。その命を危険に晒す訳にはいかないわ」

……くそ、やっぱ大人相手に論破はきついな。というか余計に厳しいところをついてきやがった。

ええい、なんとかなれ。

「……疲弊状態や単独で向かうならまだしも、体力や魔力が十分整っている三人なら大丈夫でしょう」

「リンディさん、お願いします！ フェイトちゃんを助けたいんです！」

「僕からも、お願いします！」

なのはとユーノが頭を下げる。

リンディさんはそれを見てしばらく黙っていたが、やがてやや深めの溜め息をついた。

「……わかりました。なのはさん、ユーノさん、そしてクロノ。直ちに現場に向かってください」

「はいっ！」

「……了解しました」

なのは、ユーノ、クロノが転送ポートへと駆け、フェイトのいる沖合へと転送されていく。

「綾さん」



三人の転送を見送ったところで、リンデイさんが再び口を開いた。

「はい」

「今回はあなたの意見が一理あるものとして、特別に許可しました。ですが、さつき言ったように私はアースラの艦長として乗員の命を預かり、乗員の安全を最優先に判断する義務があります。……今後は、くれぐれも勝手な言動は控えるように」

「ええ。合理性皆無の我が儘は俺もする気はありませんよ」

あつさりと言ったのが疑わしかったようではばらく疑いの目が向けられたが、それ以上はなかった。

「……そう。他の皆さんも、よろしいですね？」

「ええ。というか、大人に真つ向から意見言うなんて綾こいつしかできないでしょう」  
「ま、確かにそれはそうだねえ」

氷室の言葉に、由樹他複数名がうんうんと頷いた。

その後、氷室から念話が入ってきた。

『しかし、綾。どうしてこんな時間かけてまでリンデイに許可させた？ ほつといても勝手に行ってただろ？』

『言つたろ。あれが最善だと考えたからだ』

『はあ？ クロノ込みで送り込むことのどこが最善なんだよ』

末崎が会話に入ってきた。

『寧ろ、最悪じゃねえか！ お前も言つたら！ フェイトは疲弊してるし、三対二！ 捕まっちゃうぞ！』

『いいじゃないか。虐待から保護できる』

『あつ……！』

『へえ、やつぱりそうだったんだ？』

由樹も割り込んできた。気づいていたようである。

『あそこでフェイトを捕まえることができれば、直接プレシアの虐待から保護することにもなる。逃げられても、管理局員がいて、状況的に不利だと明確にわからせればフェイトが全て回収できなかったとしてもプレシアが虐待を免除もしくは軽減する可能性がある……でしょ？』

『ああ。まあ、クロノがいることがわかればフェイトも警戒していつでも離脱できるようにするだろうから、逃げられるだろうと思ってるけどな。ついでに言つたら、警戒を跳ね上げている分封印直後に速攻でジュエルシードをかつさらっていくだろうから、フェイトとアルフ合わせて四つ以上持つて行っちゃうかもな』

『それも、虐待軽減になつてくれるかも……つて？』

『ああ』

モニターを見やる。

ユーノ、アルフ、クロノの三人がバインドで童巻を押さえつけたところに、ちょうどなのはとフェイトが砲撃を撃ち込むところだった。

## 第十四話

結果を先に言おう。

フェイトが三つ、アルフが一つ、つまり計四つかつさらって逃げていかれた。

詳しく言うなら、封印直後フェイトはなのはの提案に乗っ取って三つ取っていったのだが、アルフがなのはの取り分も横取り。だが一つ取ったところでこれ以上はクロノらの妨害がかかると読んだのか、残り二つは諦めて逃走していった。

結果としてなのはの取り分は二つ。しかし転生者おれたちの分六つに加えてなのは自身も原作でも出ていた火の鳥のジュエルシードを回収したりして合計十二個。原作と同じになった。ある意味すげえ。

ちなみに封印直後にフェイトが動いたということがあったということではフェイトの会話、及びプレシアの次元跳躍攻撃は丸々カットされる形に。プレシアの方は狙ってやったことだが、二人の会話がカットされてしまったことについては原因である俺も悪かったと思ってる。後悔はしてないが。

で、現在。三人が戻ってきて場所は会議室。

会議室にいるのは俺になのは、ユーノ、クロノ、そしてリンディさん。俺がいるのは

今回の指示の責任者としてリンデイさんに連れてこられたから。さすがに他の転生者達は別の場所で待機させている。

「すみません……逃げられた上に、ジュエルシード六つのうち四つを相手に奪われました」

「ええ。でも、全員が無事で何よりだわ」

クロノの報告にリンデイさんは柔らかに返す。だが俺はその言葉に安心できない。

なぜなら……

『さて、逃げられた上にジュエルシードを奪われたけど、何か弁明はあるかしら?』

……目の前の会話と平行してリンデイさんが俺におっかない念話を送ってくるからである。

『確かに相手の速さを見誤ったのは俺の落ち度です。しかし、俺は確保するには『有利』だとは言いましたが、『絶対に』確保できると言った覚えはありませんよ』

『……屁理屈は度を過ぎると愛想を尽かされるわよ。注意した方がいいわね』

『おお、愛想尽かされるなんて怖い怖い。注意しておきますよ』

なお、この会話の間にも目の前の話はどんどん進んでいて、気づいた時にはクロノがプレシアについて説明していた。

リンデイさんは二つを確実に両立させてるんだろなあ……一体どういう風にやつ

てるんだらう。今度コツを教えてもらおうかな。

その後の話で、なのはは一旦帰宅することになった。



翌日。

なのはは一時帰宅だが、俺はアースラにいた。具体的にはいつもの通り医務室。

「ところで、腕の方はもう大丈夫なの？ あと肋骨」

「肋骨、ついでなんですネ。……まあすでに繋がってはいますし、あとはリハビリって感じなんですかね」

言つての通り、左腕はすでに繋がってはいる。ただ負担をかけられる状態ではないため、まだ療養中である。

「そう……ところで、由衣さんと竹太刀さん、でしたっけ。二人の様子を見に行かなくて大丈夫なんですか？」

「大丈夫でしょう。竹太刀がしつかり者なので……というか、気になるんだつたらアースラに搭乗させればよかつたんじゃないですか。確認する必要がなくなるし、俺達の生活費が丸々浮くしで一石二鳥です」

「さらつとそつちの欲を言ったわね……まさか怪我をしたのは、それも考えて？」

「狙つて怪我をするほどMじゃないです。しかしタダで朝昼晩三食は本当においしいです  
すありがとうございました」

「……」応言つておくけど、あれは税金で賄われているんだけど」

やれやれと頭を抱えるここの艦長。お疲れさんです。原因俺。

プルルルル。プルルルル。

「ん、電話？」

相手は……竹太刀？

「……もしもし？」

『あー、綾、聞こえるかー？』

「どうした？ 和也が戻ってきたとか？」

『あー、それといい勝負かもなー。……由衣ちゃんがアルフ発見してもーた。アリサ  
ちゃんより先に』

「ブツ」

まさかそうなるとは。

別に計画に支障はないと思うが、ちよつと驚いた。

『今家に連れて手当てしとるけど、どないする？』

「他にやってることは？」

『ああ、由衣ちゃんがなのはちゃん呼んだ。もうすぐ来ると思うで』

「なるほどね……ちよつと待つてろ。リンディさんに指示を仰ぐ。……リンディさん  
「どうしたの？」

「アルフが保護されたらしいです。怪我をしているらしく、現在竹太刀と由衣が家で手  
当てをしているとのことですよ」

「あら……わかったわ。事情聴取にクロノを向かわせましょう。家への案内は……」

「海斗が。俺が行くと、会った瞬間私怨で殴られそうです」

話が纏まったところで、再び携帯に耳を当てる。

「……ということだ」

『わからへんわ。説明して』

「こつちの人が今から行くから、逃げられんようにしとけてことだ。包帯でもきつめ  
に縛つとけ」

『いや、逃げる気配ないねんけど』

「いいから。そういうことだからな？　じゃ、切るぞ」

『ん、ほんならなく』

ピッ。



「……という訳で」

「ええ。それじゃ、私は二人を呼びに行くわね」

言つて、リンディさんは医務室から出て行つた。

「……いいよかな？」

そう言つて部屋の隅で立ち上がったのは、才である。話に入つて来てなかつただけで最初つからいた。

「……ああ、明日が正念場だな……」

プランは……もう完成している。リンディさんに怒られるだけではほぼ確実に済むことはないだろうが。

……だが、そのプランのために欲しい人物が、一人いる。

「……才」

俺はその人物……才に、声をかけた。

「何……？」

「……明日、これから言うプランに手を貸してくれないか……？」

「いいよ」

彼の返事は早かつた。まるで、前から来ることがわかつていたかのように。

「手伝いなら、喜んで」



さらにその翌日。

普段は転生者達の話し声で騒がしいか、本のページを捲る音しか聞こえないほど静かかの両極である医務室。そこには今、魔法陣の展開音とぶつぶつと呪文を呟く二人の声が聞こえる。

「……………」

小さく魔法の呪文を唱えているのは、量産の長杖型のデバイスを持った綾と海斗だった。灰色の魔力光を発する綾と、赤い魔力光を出す海斗。そして二人の前には、才の姿もあった。

先に綾の詠唱が終わり、彼に変化が起きる。

綾の身体が光に包まれ、その光から解放されると綾の背が若干高くなり、身に纏っているものが管理局武装隊のバリアジャケットになった。

遅れて、海斗もやっと詠唱が済み、綾と全く同じ姿になる。

二人が唱えていたのは変身魔法。それによって武装隊員に化けたのである。

「…………じゃあ、才。俺達は行くよ」

「……………うん。こっちの方は任せて」

互いに頷き合つて、それから綾と海斗は医務室を飛び出し、駆け足で去っていった。

「……………」

才も、医務室から出て歩き出した。

目指すは、直になのはやフェイトが来る場所……ブリッジであった。



武装隊員に変装し時の庭園に潜り込んだ俺達は、そのまま武装隊の最後尾をついていた。

『なあ、綾』

『なんだ？ できれば黙って後ろをついて行くようにしたいんだけど』

『ごめん。でも、どうすんだ？ このままプレシアの元に行っても、電撃食らつてアースラに連れ戻されるぜ？』

『対策は考えてあるさ……俺がうまくやるから、お前はやられるフリしてよけるか防衛しろ』

『わかった』

そうして話し合っているうちに、プレシアがいる部屋の扉の前に辿り着いた。

先頭に行く隊員が開け、次々と中へ。俺と海斗も部屋の中へと入る。

『海斗、うまく隊員の中に入り込め』

『うーっす』

海斗に指示を出し、俺も隊員の列の中へ。

先頭の隊員が隠し通路を発見し、俺達も続いて中へと入る。

その先にあるのは、フェイトに瓜二つの少女、アリシアの遺体……それが入った培養槽。

『綾……』

『……海斗、来るぞ。構えろ』

海斗に警告し、俺もいつでも動けるように構えておく。

直後、プレシアがアリシアを守るように、隊員達に立ちはだかるように転移されてきた。

「私のアリシアに触らないでっ!!」

ヒステリック気味に怒鳴るプレシアが魔力弾を放つ。

プレシアの出現とほぼ同時に動いていた俺は、呆気にとられていた隊員を引き倒し、防御魔法で防ぐ。

「ぐっ……!!」

ガアンツ! と鈍い音。翳した左腕にじわりと伝わる強い衝撃。削られる魔力。引き倒された隊員他、ようやく状況に追いついた隊員達が杖を手に一斉に魔法射撃を行う。

その間に俺は少し後退。海斗が寄ってくる。

『綾! 無茶すんな!』

『大丈夫だ……それより防御魔法を準備しろ。来るぞ!』

念話で返事をしつつ、魔法陣を展開。一つはデバイスを介して発動待機させ、もう一つの発動を急ぐ。間に合うか……!?

「うるさいわね……」

「……っ! エリアプロテクション! 間に合えっ……!」

プレシアが魔法陣を展開。俺は全体防御の魔法を発動する。

エリアプロテクションは、特定範囲に防御加護を与える魔法。ただ、加護であって完全に防御ができる訳ではなく、俺の魔力の少なさも相まって気休め程度にしか効力は発揮しないが、少しでも全員の怪我を抑えられれば……。

プレシアの魔法発動により、雷が落ちてきた。エリアプロテクションは間に合ったが紫の雷はそんなものなどなかったかのように容赦なく俺達に降り注ぐ。

「ぐああああああつ!!」

「ぐああつ!! ぐつ……!」

前方の隊員達の悲鳴が響く。

気を抜いたらすぐに意識が飛びそうだ。辛うじて意識を保っているのは俺の防御加護だけでなく、海斗が防御魔法で防いでいるからだ。

雷の奔流の中、魔法発動待機中のデバイスを握り締める。

「ミラージュハイド……発動つ……!」

デバイスに発動待機させていた魔法を発動し、俺と海斗の姿が消えた。

雷がやみ、見えなくなつた姿で海斗を連れて急いで玉座の間まで後退する。隊員達はすぐに転移されていった。

『おい綾、大丈夫か!』

『大丈夫だ……つて言いたいけど、なかなかつらいな……意識が刈り取られずに済んだのが幸いだよ……』

しゃがみ込み、入り口の陰からこつそりと様子を伺う。ミラージュハイドで姿が見えないとは言え、堂々と身を乗り出す気はなかった。

通路は暗いためほとんど見えない。だが、プレシアの話し声はなんとか聞こえる。アースラと通信中なのだろう。

『綾、これからどうするんだ?』

『ちよつと小休止……いや、すぐに行こう。プレシアは時の庭園の最深部に直接転移する。なら、傀儡兵が出てくるより早く早く少しでもプレシアの元へ急ぐべきだ』

『……訊いた俺が言うのも何だけどよ、無理すんじゃないぞ?』

『わかつてるっ』

勢いをつけて立ち上がる。電撃の影響が残っているのか若干ふらついたが、なんとか踏ん張りをきかせる。

『……行くぞ!』

『おう!』

俺達は走り出した。



時の庭園への突入前、なのはは才に呼ばれた。

今日まで彼と話したことはほとんどない。自己紹介をしあつて、ほぼそれきりだった。そんな彼が念話で話がしたいと言ってきたのだ。それで今、才と二人で個室にいる。

「えと……才くん、話って何かな。できれば急がないと……」

「……ごめん、なのは。長くするつもりはないから……今、ジュエルシードはどうしてる？」

「え？ ジュエルシードは……今レイジングハートの中だけだ」

「そっか……じゃあ、時の庭園に行っている間、ジュエルシードをこっちに預けてくれな  
いか？」

「へ？」

どうして？ そう尋ねる前に、才の方から答えがやってきた。

「決戦の後にプレシアから攻撃が来たということは、プレシアはなのはとフェイトの戦いを監視していたことになって、当然、君がジュエルシードを持っていることも確認しているはず……君が時の庭園にやってきたら、プレシアはジュエルシードを手に入れるために君を狙う可能性がある……今から狙われないようにするのは難しいけど、ジュエルシードを別のデバイスに移して、奪われることがないようにするにはするべきだと思う……」

「あ、そっか」

大体話の内容は掴めた。

早い話、ジュエルシードを奪われないようにしたいということのようだ。確かにその



通りだ。奪われてプレシアに利用されたら、さらに大変なことになりかねない。

今アースラの人達はプレシアへの対応に忙しい。だから一旦才が預かり、落ち着いたところでアースラの方へと受け渡すつもりなのだろう。才がデバイス持ちであることは、彼がジュエルシードを受け渡すところで確認している。

「うん、わかったよ。才くんに預けるね」

「……………うん」

才は待機状態のデバイスを取り出した。真つ白なクリスタル状だった。

なのははそれに待機状態のレイジングハートを重ねた。チカチカとデバイス同士が光り、やがてその光がやんだ。

《転送完了しました》

「……………じゃあ、気をつけて……………」

「うん！　ありがとね、才くん！」

なのはは話で遅れた分を取り戻すためか、駆け足で部屋を退室、転送ポートの方へと走っていった。

……………なのはが急いでいたからか、見送る才の眩きがとて小さかったからか、それとも、両方か。

「……………(づ)めんね」

なのはの耳に、その眩きが聞こえることはなかった。

才は小さくそう眩いた後、魔法陣を展開し、姿を消した。

誰も見えなくなつた通路に、走る音だけが鳴つた。

## 第十五話

ミラーージュハイドで姿を隠していたためか、傀儡兵に見つかることなく進んでいき、最深部の入り口まで辿り着いた。

入り口から顔を覗かせると、プレシアとアリシアの存在が確認できる。

なお、今は周囲に傀儡兵の気配はないし、プレシアにも見つからないように隠れているため魔力を消費しないようミラーージュハイドは解除している。

「……で、どうするんだ？ 俺達でプレシアを止めるのか？」

「それができたらどれだけ苦労しないことか……ちよつと待つてろ」

『管理局員、聞こえますか？ 応答願います』

意識を集中し、すでに時の庭園に突入しているであろう管理局員の誰かに念話を送る。プレシアに聞かれたらまずいため、範囲には気をつける。

『聞こえますか？ 応答願います』

『こちら時空管理局執務官、クロノ・ハラオウン』

……こいつに当たったのか。

まあ、いいのか。原作通りになるし。

『クロノ、お前か』

『その声……綾か!? 見ないと思つたら、なんで時の庭園内にいる!?!』

『そこについてツツコむのは後にしてくれ。現在俺と海斗はプレシアの後をつけている。随分下まで降りた……最下層まで来たんじゃないかと思う。プレシアの他に、アリシアの遺体が入ったカプセルとジュエルシード九つを確認。後、つけている途中でエレベーターらしきものを確認。周辺に多数の傀儡兵がいることから、何か重要施設に繋がつてると見た』

『……情報提供には感謝するが、勝手な行動をしたことには変わらない。アースラに帰還後、相応の罰は覚悟しておけよ』

『情報提供と、武装隊員へのフォローを減刑材料にしてくれ』

『……艦長にはそう伝えておく。いいか、プレシア女史に気づかれることのないようにな』

『善処はしてるよ。じゃ、できるだけ早く来てくれ』

念話を閉じ、溜め息をつく。

後は、必要な人が来るまで待ちか。

早く来ないかな……範囲には気をつけたとはいえ、聞かれた可能性もゼロとは……っ

!?

「海斗、伏せろー！」

「へ？ うおおおっ?!」

俺達の背中を預かっていた壁が吹き飛んだ。

壁が崩落するより先に走り、壁から退避。入り口をくぐる。

……あ。

「羽虫が紛れ込んでいたわね」

「やべ……」

いきなりバレてしまった。杖がこちらに向けられている。これなら、ミラージュハイド解かずに継続させた方が良かったか。

自分の迂闊さに溜め息を吐き、自分の杖を構える。杖、というよりは構えは棒術だが。海斗も、俺に倣って杖を構えた。

「いいか、あくまで時間稼ぎだ。保身以上のことを追求するなよ」

「へっ、了解っ」

「——散るぞー！」

左右に分かれる。直後、俺達がいいた場所に雷が落ちた。

走りながら、魔力弾を精製。しかし時間稼ぎという目的の上、何より残り魔力の少なさから弾殻のみの威力のないものを、二発。

「シュートツ！」

「フン……」

発射した形だけの魔力弾を、プレシアはそんなこともつゆ知らずにシールドを張って防ぐ。

プレシアは撃ち込まれた魔力弾の軽さに気がついたか、訝しげな表情を一瞬したが、その一瞬だけで気にした様子はなかった。

（まあ、そういうもんだろうな。プレシアのような大魔導師にとって見れば、こいつもさっきの局員の射撃も同じようなもんだろ）

プレシアからすれば、局員達での一斉射撃も、俺のカス弾に等しく弱い、ということだ。加えて病魔に侵され、気が立っている状態……気にしようとする気もなくなっているはずだ。だからこそ、このカス弾が使える。

防御魔法を発動するということは相手の攻撃への対応に集中するため、他の行動を取っていられなくなる。言ってみれば、その分時間を稼げる。頻繁に撃っていたら感づかれ、防ぐことすらやめられてしまうかもしれないが、時間がある程度置きながら、あと偶に本物を混ぜながら撃てば、時間稼ぎをよりやっていけるはず。

「つとー」

走っているとところから急停止し、走る方向を転換。プレシアがコースを読んで落とす

た雷を回避する。

海斗は俺以上に少ない魔力を先の防御で使ってしまった、その上射撃技能がとても低い。防御も牽制もできない以上、俺が引き受けるしかない。

プレシアも走るだけの海斗より俺が厄介と思ったのか、俺に攻撃を集中させる。

かわし、撃ち、防ぎ、掠め、撃ち、弾き、流し、反撃。

緊急停止や急な方向転換、緊急時限定の防御魔法など、あらゆる方法でプレシアの猛攻を凌ぎ、注意を引きつける。

魔力は、反撃の分はまだ良かった。本物の魔力弾を混ぜても、そこまで大きく消費するものではない。

しかし、防御での削られ方が半端じゃなかった。防いだ回数はせいぜい二回程だったというのに、それで魔力がほとんど底をついてしまった。

「はっ、はっ……うあっ!」

走りながらもプレシアの攻撃に意識を割きすぎたせい、つい足元が疎かになって転んでしまった。

プレシアはその隙を見逃すまいと、地面に倒れた俺杖を向ける。

「もらったわ」

「動くなっ!」

ありつたけの声での叫びに、プレシアは一瞬動きを止めた。  
その一瞬を逃さず、言葉を紡ぐ。

「今魔法陣を展開してみろ。お前の後ろにあるものがどうなってもいいって言っただけなら」

「後ろ……っ!!」

プレシアがはつとして振り向くがもう遅い。

プレシアの後ろにあるもの——アリシアのカプセルに、海斗は杖を突きつけていた。海斗は魔法陣を展開し、杖の先端には魔力が集束している。

「あんたが下手な行動をとるなら、海斗の砲撃でそのカプセルと中身を吹っ飛ばすぜ」  
言っておくが、海斗にそんな大火力砲撃は撃てない。少なくとも、現状では。

海斗に指示をして用意させた、形だけ、見た目だけの砲撃である。勿論威力なんて欠片もない。そもそも、次元震に耐えられるように補強なりカプセルを強化ガラスのものに変えるなりしているだろうから、並みの砲撃でもガラスを砕けるのか微妙なところ。

だがそれは関係なく、アリシアに砲撃を向けられたということだけでプレシアの表情が怒りに染まる。

「貴様っ……っ!!」

「だから動くなって。……計画の成功率を上げたいなら、俺の指示を聞いてくれ」



「…………？」

小声で言った内容に疑問を抱いたのか、プレシアの動きが止まった。

クロノは……まだ来ないようだが、念のため話が聞かれないように念話で話しかける。

『実は今あんたの手元にある以外のジュエルシードを持った奴がこつちに來る手筈になっっている』

『あの白い魔導師が……？』

『いや、俺の協力者だ。なのはからちよいと拝借したそれを持ってくる。それで二十一個全て揃う』

『あなた、何が目的なの？』

『アルハザードへの切符、俺達にも買わせてくれよ』

『……………』

笑ってみせると、プレシアからは何も言わなくなつた。

ややあつて、念話が入ってきた。

『…………それで、何をすればいいの？』

…………よし。

けどどうすれば、か……元々プレシアが勝手に落ちるところに介入して、その場で二

十一個揃えるつもりだったからな……クロノも直に来ちまうし……そうだ。

『海斗、作戦変更だ。魔法陣しまえ』

『え？ おう』

海斗が魔法陣を消したところで、俺はプレシアに念話を送る。

『海斗に砲撃準備をやめさせた。俺と海斗をバインドで縛って人質にしておいてくれ、もうすぐクロノ……管理局の執務官も来ちまう』

『そういえばあなた、誰かに念話繋げてみたいだったわね……まあいいわ』

プレシアは指示通り俺と海斗にバインドをかける。ちなみに俺はカプセルから少々離れていたため、近くに寄ってからバインドをかけられた。

俺はこの状況を利用し、人質になってプレシアと一緒に落ちることにした。

プレシアが俺の頼みを聞いたのは、プレシア自身身体の限界がわかってからだろう。同リアルハザードへ行こうとするなら、自分の目的を俺達に手伝わせればいいのか考えたのだろう。うまくいった。

暫し待っていると、クロノが天井をぶち破ってここに辿り着いた。

「プレシア・テストアロツサ！ あなたの身柄を拘束する！」

『あなたを人質にするけど、いいわね？』

『人質にしると言ったからな』

『その通りね』

プレシアは俺に杖を突きつける。

「動かないで。それ以上近づくな、この二人の命はないわ」

「なっ……、綾、海斗！」

「……すまんクロノ。あの後すぐバレて捕まっちゃった」

「くっ……！」

クロノが苦い顔をする。

……近い内にフェイトも来るだろうな。フェイトが来る前には才が来て、準備完了になってほしいものだが。とにかく、フェイトとプレシアの話が終わるより前には来てほしい。

早く来ないものかと思っていると、プレシアが突然咳き込んだ。押さえた手の隙間から、血が零れ落ちる。

『プレシア！』

『私のことはどうでもいいわ……それより、ジュエルシードはまだなの……？』

『それは……』

思わず言い淀むが、そこに待ちに待った念話がかけられた。

『綾』

『! 才か!』

『うん。通路が崩れててどうしようかと考えてたところで別の場所でクロノが天井を破ったから……それでなんとか辿り着いた。……今、ミラージュハイドで姿を隠してる』

……よし、準備は完了か。後は、うまく俺達が虚数空間へと落ちれば。

「母さん!」

フェイトとアルフがやってきた。……物語も、終盤だ。

プレシアが鬱陶しそうにフェイトを見る。

「……今更、何をしにきたの? 消えなさい。もう貴女に用はないわ」

「……貴女に、言いたい事があって来ました。私はアリシア・テストアロツサではありません。貴女が作った只の人形かもしれません。……だけど私は、フェイト・テストアロツサは貴女に育ててもらった貴女の娘です」

「だから、何? 今さら貴女を娘と思えと言うの?」

「貴女が、それを望むなら。それを望むなら……私は世界中の誰からもどんな出来事からも貴女を守る。私は貴女の娘だからじゃない。貴女が私の母さんだから」

「くだらないわ」

プレシアはその一言でフェイトを一蹴した。

そしてプレシアは俺に念話をかけてきた。

『ジュエルシードは？ いままで待たせるつもりなの？』

『さつき来たさ。準備はできてる。あんたのタイミングで、俺達を落としてくれ』

『わかったわ。やつと……この陰鬱な時間から解放されるのね』

計画の発動ができるのと知るや否や、プレシアは魔法陣を展開。床が揺れ始める。

クロノが焦りだした。

「！ 待て、プレシア！ 関係のない人を巻き込むな!!」

「知ったことじゃないわ！ 私は向かう……アルハザードへ！ そして、全てを取り戻す！ 過去も、未来も、そして……たった一つの幸福も……!!」

遂に床が崩壊し、俺達は虚数空間へと身を投げ出された。

「綾ーっ!! 海斗ーっ!!」

「母さんっ!!」

「くっ……!!」

バインドにかけられたまま、重力に従って落ちていく。

途中でバインドから解放されようとも、俺も海斗も飛行魔法は使えないし、そもそもバインドが解けた時には虚数空間の影響下。結局使えない。

だがまだバインドされているということはまだ、魔法は使える。少なくとも、念じれ

ば通る。

『才、来いっ!!』

念じて間もなく、バインドが消え失せた。

バインドの消滅とほぼ同時に、ミラージュハイドの恩恵が取り払われた才が姿を現す。

デバイスからジュエルシード十二個を排出し、プレシアが持つ九個と合わせて二十一個揃える。

「ジュエルシード……シリアルIからシリアルXXIまで全て確認……起動……」

ジュエルシードは、願いを歪めて叶える宝石の種。

しかし今は問題なくいけるということは、神頼みにしてもほとんど確信はあった。

(さあ起きろジュエルシード。俺達のために……アルハザードへの道を作り出せ!!)

二十一個の光に、俺達全員が包まれた。

## 第十六話

気がつくくと、辺りは真っ黒だった。

俺はその真っ黒な空間に立っていた。黒くても暗闇という訳ではなく、自分の姿ははっきりと見える。そしてすぐそばに同じくはっきりと海斗と才の姿もあった。

プレシアとアリシアの姿は、ない。ついでにジュエルシードも一つ残らず消え失せている。

……予想通りだ。

「……………えつと……………どうなってるんだ？ これ……………」

「……………」

海斗はこの異質な空間にオロオロしている。対して才は落ち着き払った様子だ。やはり予想通りらしい。

「……………海斗、落ち着いて聞いてくれ」

「お、おう？」

「これからもうすぐ、神から緊急指令が来る。成功条件は恐らくプレシア、アリシア、ジュエルシードを回収した上での迷路からの脱出といった感じだ」

懐から携帯を取り出し、メールボックスを開く。

「そもそも俺は最初から、ジュエルシードを二十一個どころか三つもの数を十二時間も持ち続けることはできないって考えてた。ジュエルシードを求める奴が多すぎるし、フェイトや時空管理局のように俺達じゃ勝ち目もない相手だっている。実質的にその方法は使えない」

だから、と言葉を繋ぎ、俺は海斗に携帯を見せる。

それは、今回の指令のルールだった。

「これに書かれてある『緊急指令等で管理者から入手承認を得た場合』……実質的に、俺達はこれでジュエルシードを入手した扱いにする、もしくはそれ相応のスターチップを手に入れる他はなかったんだ」

「それで……どうしてこの空間で、お前がそんな指令の予想になったんだ？」

「神は俺達の様子を窺いながら、リアルタイムで緊急指令を作り上げている。俺はそれを逆利用して、緊急指令になるような状況を作り出したんだ。ジュエルシードを二十一個集め、アルハザードへの道を作れと願う。そうすると奴は緊急指令になるような道を作り、道にジュエルシードをばらまき、プレシアとアリシアを同様に置いておく。そしてここ——スタート地点に俺達を置く。これで準備は完了さ。後はメールで指令を送り、開始させるまで」



すなわちここは、ジュエルシードによつて作られた道ではなく、正確には神によつて作られた迷宮ということになる。

ジュエルシードが暴走しないという確信もこれによるものだった。そもそもジュエルシードの効果ではないのだから。

プルルル。プルルル。

「……来たか」

携帯を持つていた俺が、そのままメールを開く。

差出人：管理者

件名：緊急指令

内容：迷宮から脱出せよ。出口はアルハザードへ繋がっている。なお、迷宮内にジュエルシード、プレシア・テスタロッサ、アリシア・テスタロッサをそれぞれ配置。制限時間は二十分。

成功条件・報酬：制限時間内に迷宮から脱出。脱出の際に所持していたジュエルシードの個数分のスターチップを配布（プレシア、アリシアは報酬には関係ない）。

失敗条件・罰：制限時間内の迷宮脱出に失敗。脱出不能になる。

「報酬の最大が二十一個の代償に、失敗は実質即失格か。極端だな」  
「つて、呑気にしている場合か!? これもう始まつてるんだよな!」

「だろうな。まあ落ち着け」

俺は手を前に突き出して周囲を歩いてみる。

すると途中で手が壁のようなものに触れる。横に伸びているようだ。壁を伝いながら少し歩いてみる。

「こっちにも道があるみたいだな……才、そっちはどうだ?」

振り返って訊く。俺と全く同じことを才が向こう側でやっていた。

「こっちにも道があるみたい……二つに別れているようだね……」

「二つか……」

海斗の元へ戻り、少し悩む。

道と壁の識別が不可能な空間で人数を分けて探索というのは危険だが……制限時間ははつきりいって少ない。固まって動いたら、二つのうちのどちらかは行けず終いになる危険性が高い。それはチップの獲得数が少なくなることや、プレシアやアリシアの救出ができなくなる可能性があるだけではない。脱出に失敗する可能性にもなる。

「……二手に別れよう」

「そうだね。僕と綾で別れば、各ルートでの攻略はできそう……けど、連絡手段はどうす

るつもり？　ここは虚数空間内だから魔法は使えないよ？」

「あるぜ。海斗」

「何のためにも思ったら、これのためだったのか……」

海斗が取り出したのは、トランプとマジックペン。それぞれ二つずつ。

「別れ道になつたら、トランプに矢印を書いて進む方向に合わせて置いてくれ。全部調べきつたり、残り時間がなくなつても出口を発見できなかつたら引き返して、これを道標にもう片方と合流。スタート地点はこれを目印にするぞ」

言つて俺は自分のデバイスを立てかけた。

「わかつた……じゃ、気をつけて……」

「ああ……あ、才。もう一つ話がある」

「……何？」

「海斗を連れていけ」

「え？」

海斗が声を上げた。

「ここで魔法が使えない以上、お前が人を背負うのは無理がある。そつちのルートにプレシアもしくはアリシアがいる可能性を考えて、海斗を連れて行つた方がいいと思う。……報酬には関係ないとは言え、救える命は救いたいんだ。目的のために救える命を見

捨てるというのは、間違ってると思ってるから」

「……いいの？ 左腕は……」

「俺は大丈夫だ。左腕は治ってる」

「……わかった」

才は小さく頷いた。

俺は海斗に向き直る。

「そういうことだ。海斗、才のサポートを頼む」

「まあ、いいけど……綾は大丈夫か？」

「何度も言わせるな。左腕は治ってるさ」

「……無茶、すんなよ！ お前は誰かのためなら真っ先に、自分を捨てる性格なんだから

な！」

「わかってるっ」

互いに拳を突き出し、互いの拳を合わせた。



「これで十二個目……」

地面に落ちていたジュエルシードを回収する。

今宣言した通り、俺は十二個目のジュエルシードを回収。今の所発見したのはジュエルシードのみで、出口もプレシア、アリシアも発見できていない。

(そろそろ十分になるか……でも、もう一ルートは調べておくか……)

迷路自体はそこまで複雑ではない。しかし、道を目視できないのが問題だった。どうしても壁づたいに慎重に移動せざるを得ず、結果としてタイムロスに繋がってしまったている。

来た道を引き返す。頭の中で歩いてきたた道の地図を描き、それに従って道を進んでいく。やがて地面にトランプが置かれた場所に辿り着く。

(確か、左が元来た道で、右がまだ見てなかったよな)

身をかがめ、トランプの矢印の向きを右に変更する。そして壁を伝いながらトランプの向きへと歩を進めた。

いくらか進んでいくと、手が角を捉えた。

「！」

曲がり角を確認し、ついでに周辺を確認する。

……どうやら、ここは曲がり角一つのようなだ。トランプを一枚取り出して矢印を書き込み、地面に置く。

そしてまた壁づたいに進んでいくと、その先にあるものを発見した。

「！」

発見したのは、アリシアの遺体だった。カプセルから出され、裸体のまま横たわっている。

裸体のままなのはさすがにまずいため、俺の上着を着せる。五歳児にはあまりにもブカブカだが、ないよりはマシだ。

念の為にその先を調べるが、行き止まりだった。俺の記憶では、もうスタート地点からのルートは全て調べた。こっち側はこれで全てになる。

「才の方に出口とジュエルシード九つ、そしてプレシアか……俺の采配もなかなか良かったみたいだな……つと」

アリシアを抱きかかえる。五歳児であるためとても軽い。

残り時間は……八分かそこらか。ひよっとしたらもつと少ないかもしれない。急がないと……！

壁が見えない空間の中、俺は走り出した。

道は全て記憶している……歩幅を利用して距離もわかるし、曲がる箇所にはトランプを配置しているから問題はない。

そんなに長い迷路ではなく、初めて通る時のように慎重になる必要がないため、ス

タート地点までは二分とかわからずに辿り着いた。デバイスを回収し、そのまま走る。

走っていくと、トランプを発見。トランプの前で一旦立ち止まる。

「つと……右だな……」

道を確認し、また走る。

トランプを見つけると立ち止まり、才が書き残した支持を信じて走る。

右へ、左へ、時にそのまま真っ直ぐ。

推定残り時間、約四分。

何度目かの曲がり角を曲がった時、探し求めた姿を見つけた。

「海斗！ 才！」

「綾！ よかったあ……い！」

白い渦の両側に立つ俺の親友と追いつくべき存在。

俺を見るや気を失ったプレシアを背負う海斗は安堵した表情を浮かべ、才も小さく笑顔を見せた。

「時間がないけど、報告だけはするよ。……見ての通り、プレシアと出口を見つけた。後、こっちで見つけたジュエルシード九つは、全部彼にあげようと思ってただけど

……」

「俺が出口まで来れたのはこいつのおかげだからな。五個やった。いいだろ？」

「……ああ。それだけでは済まないくらいなんだがな」

「いいよ……これ以上もらったら、君達の分がなくなる……綾は？」

「俺はジュエルシード十二個、そして見ての通りアリシアを見つけてきた」

「……全部回収できたんだね……じゃあ、行こう。時間がない」

「……ああ！」

俺達は足を揃え、出口である白い渦へ足を踏み出した。

また再び、俺達は光に包まれた。



## 第十七話

「(ハハ)は……」

辿り着いた場所は、どこかの街の中だった。

まるでRPGにあるような、石造りの街だった。全て廃墟となっており、人っ子一人どころか、生物の気配すらない。

「ここが……アルハザード、なのか？」

辺りを見回して、海斗が呟く。

御伽噺になるほど前の世界だから、建物の様式とかが古いとは思っていたけど、本当にここに死者蘇生の技術なんてあるのだろうか？ 技術というよりは魔術のような気がしなくもないが……。

「とりあえず、プレシアとアリシアをどこかに寝かせよう。色々整理する必要があるしそ  
うだし」

「ん、了解」

「うん……」

とりあえずは近くの民家に入り、背負っている、もしくは抱きかかえているプレシア

とアリシアをベッドに寝かせることにした。

家の外見は古風なのだが、中の技術は地球にはない技術ばかりだった。最低でも数百年前の民家のはずなのだが、何一つ劣化している様子がなく、機器も動力が落ちているもののそれ以外は今にも動かせるような気配さえある。

ベッドにプレシアとアリシアを寝かせ、俺達は別の部屋で会議を開いた。

まず、メールの確認。メールは全部で三つ届いていた。

「一つ目は緊急指令終了の知らせ、二つ目は指令1期間終了の知らせ……」

「俺と綾は緊急指令の取り分合わせて二十二個から三つ引いて十九個か……才は？」

「八個……迷宮の指令の取り分五つとジュエルシード入手三つ……あと、それ以前の緊急指令で手に入れた三つを合わせた十一個から、三マイナス……」

「由衣と竹太刀は、六個に加えて俺達の緊急指令の取り分の半分、八個を加えて三マイナスだから十一だな。……あとは」

俺は三つのメールの最後……『失格者通知』のメールを開く。

ずらりと並べられた失格者〓死んだ転生者の名前。それは読み飛ばしてスクロールしていく。

最後に見た時は確か、残り六十七人だったな……これから一体どれだけ消されたのか……。

……結果に、辿り着いた。

「……………」

「な、なあ……結果は……どうだったんだ？」

「……………」

「……………」

チーム『反逆者』、チーム『インテリ不良』、チーム『連合軍』、才、和也……これらを入れて、あと六人しか生きていない……。

たった、たった一カ月程度で、神を楽しませるために呼ばれた百人のうち、八十一人が殺された……それが、許されるのか？

「くっ……………」

「り、綾……………」

「……………」

ふつつつと怒りが込み上げてくる。

その時、才が俺の携帯を取り上げた。

「あ……………!？」

「……………死んだ人は、何も語らない。死んだ人に未来はない……死んで救うことのできない人のことを思うのは、意味がない」

才は俺の携帯を閉じて俺に返却すると、部屋の扉へと向かった。

「僕達のやるべきことは、アリシアの蘇生、プレシアの病の治癒、元の世界への帰還……それぞれを行うための技術を見つけること……」

言つて、才は部屋を去っていく。

「お、おい待てよー!」

海斗はそれを止めようと動き出すが、それを俺は止めた。

「綾!?! いいのかよあんなこと言われて!」

「……あいつの言つてゐることは正論だ。俺達に失格者達を生き返らせるすべはない……」

海斗に胸倉を掴まれる。

「だからつて……!」

「だから。……俺達は生きるんだよ。こいつらの分まで。こいつらの無念を背負えるのは、俺達だけじゃないか……」

「……っ」

胸倉を掴む握力がなくなったのを見計らつて、手をほどく。

「……行くぞ。才が行つたように、俺達にはやるべきことがある」

俺達も部屋を後にした。



しばらく歩いて、俺達は大きなタワー状の建物に入った。

そこは図書館らしく、壁一面に大量の書籍が並べられていた。移動用の乗り物や、検査用の端末らしき機械があるのだが、いずれも動力が落ちている。

「うへえ、すげえな……無限書庫よりもデカそうだな……でも機械は動きそうにないし、探してるものはなさそうだぜ？」

「そうだな……」

そう言いつつ、俺は近くの棚の本を一冊手に取り、開く。

書かれているのが(多分)アルハザードの言語であるため文字は全くわからないが、俺が見ているのは文字ではなく、本の質だった。

「でもすごいな。もう何百年も経ってるはずなのに、どれも劣化の気配を見せていない。動力だけ落ちてるのが謎だけど、それでもこの保存技術はすごい」

「ふーん……でもないんだろ？ 次行こうぜ。できるだけ早く戻れるようにしないと」

「……そうだな。早く戻らないと、始末書になんて書かれるかわかったもんじゃないな。リンデイさんにもなんて怒られることか」

冗談めかしく言って、図書館を後にする。

と、ちょうど図書館を出たら才に行くわした。

「探したよ」

「何か、見つかったのか？」

「特殊な装置がたくさんある施設を見つけた……文字がわからないから確証はないけど、多分、当たりだと思う……」

「案内してくれ」

才は頷いた。

才に案内されて着いた場所は、一部屋に一つの大型の装置が置かれ、そのような部屋が多数にならぶ建物だった。部屋の前にプレートがかけられ、廊下から見たら病院に見えるなくもない。

「確かにたくさんあるな……文字が読めないから、どうしようもないけど」

「つーか、装置は未来的なのに建物は石造りとか、おかしくねーか？」

「言うな」

なお、ここも例外なく装置の動力が落ちている。

文字が読めないのも問題だが、それ以上に動かないというのは大問題だ。動かすことができなければ、帰還も蘇生も治療もあつたものじゃない。

「一体何が動力なんだ……？ どっかに発電装置とかないのかよ？」

「動力は魔力よ」

「！」

声に振り向くと、そこにはアリシアを抱えたプレシアがいた。

「プレシア……！ あまり身体に負荷をかけるな！」

「うるさいわね。アルハザードの言語もわからないあなた達に言われる筋合いはないわ」

「……魔力が動力ということは、アルハザードが滅んだ理由は虚数空間で魔法行使ができなくなったことによる技術のシステムダウンなんですわ」

才が尋ねた。

「察しがいいわね、その通りよ。……ここが虚数空間に飲み込まれた後、アルハザードの住人が転移装置で脱出したと言われているわ。でも全員ではなく、アルハザードの大勢の魔導師はここに取り残されたそうよ」

「……つまり、人間のリンカーコアを直接動力として扱い、転移装置を動かした……」

「ええ。魔法が使えなくなるとは言え、魔力そのものやリンカーコアが消える訳ではないもの」

「……それで？ 俺達を人柱にするのか？」

「あなた達のようなはしたの魔力なんて期待しちやいないわよ」

俺は身構えたのだが、プレシアはそう言い返した。

だが、プレシアは手を差し出してきた。

「けど、ジュエルシードは頂戴。持っているのでしょうか？」

「ジュエルシード？ ……ああ、なるほどね」

次元震を起こすほどの魔力を持つこれなら、確かに動力としては十二分にも発揮できそう。二十一個あるんだし、動力不足になることはそうそうないだろう。

ジュエルシードを取り出し、プレシアに手渡す。

プレシアは俺達からジュエルシードを受け取った後歩き出し、部屋のプレートを眺めては歩き、次のプレートを見てまたさらに次へと進んでいく。

海斗が尋ねた。

「なあ、文字わかるのか？ ミッドの言語じゃねーんだろ？」

「そんなもの、プロジェクトF、A、T、Eが失敗して、この可能性を見いだしてから調べているわよ」

「ごもつともな返しだった。」

やがて、プレシアは一つのプレートの前で止まった。

間違いないか確認するように、部屋の入り口とプレートに視線を何度も往復させ



て、そして駆け足でその部屋に入っていった。俺達も後に続く。

「これだわ……!」

プレシアが感極まったかのように呟いた。

そこにあつたのは、巨大な装置だった。何段もの大きな台があり、その台を取り囲むように支柱のような装置もある。機械仕掛けの祭壇という表現がしっくりくる。

プレシアの反応から見るに、これが蘇生装置らしい。

「すぐにアリシアを……っ、っほっ、っほっ!!」

「プレシア!」

動き出そうとして、しかしプレシアは座り込み、咳き込んだ。

病魔が深刻なところまで蝕んでいるらしい。プレシアは立ち上がろうと力を入れてるが、全く立ち上がれない。

「プレシア、まずはあなたの身体の方が先だ! その病を治す装置を……」

「黙りなさい! っほっ……ここまで来てっ……アリシアのことを、後回しにできないわっ……!」

「それでお前が死んだら……!」

ポン……と、手が置かれた。

振り向くと、才がゆっくりと首を横に振った。

一瞬、情に流されようとして、『あの時』のことを思い出し……あることに思い至った。  
「まさか……感じたのか……?」

「……残り少ない時間で……せめてもの手向けを用意しよう……」

……。

……。

……。

「………………。わかった」

目を伏し、静かに頷いた。

俺はプレシアに向き直る。

「プレシア、俺達に指示を出してくれ。俺達が装置を起動させる」

「ごほつ。……はあ、はあ……。……それしかなさそうね……」

プレシアは俺にジュエルシードを返すと、指示を始めた。



プレシアの指示に従ってできるだけ早く装置の起動準備を整えた俺と才は、現在プレシアの後ろで起動している装置を眺めていた。プレシアはコンソールを操作し、アリシ

アは台の上で横たわり、装置の発する光に包まれている。海斗はまともに立っていられないプレシアの支えになっている。

俺はじつと、目の前の光景を眺めた。ただただ眺め続けた。

「……綾」

同じく前を眺めていた才が、眺めたまま声をかけてきた。

俺は答えない。答えようとしなない。

「……人を生き返らせることと、人の寿命を延ばすことは違う」

「……」

「……人を生き返らせることと、人の病気を治すことも違う」

「……」

「……不死の技術は、この世界には存在しない」

「……」

「その技術が存在していたなら、この世界から住人が抜け出すことはなかっただろうし、この世界の住人がいなくなることはない」

「……才」

「何……?」

「お前が直感的に救うことができないと思って、諦めた人の数は、これで何人目だ?」

「……………」  
今度は才が黙った。

才は、感じたのだ。俺との勝負の時のように、プレシアの命が長く持たないこと……  
そしてその残り時間が、アリシアの蘇生にかかる時間程度しかないだろうということ  
を。

才が言う通り、蘇生と言っても寿命が長くなる訳ではない。病の元がなくなる訳では  
ない。蘇生のできることは、心臓を再び動かし、肺が空気を取り入れることを可能にす  
るだけ。

それに、あの時点でプレシアの治療をする装置を探したとしても、見つからずにプレ  
シアが事切れる可能性が高い……それを見越して、才は生き返ったアリシアと再会する  
チャンスを得る方を選んだのだった。

「……………さあね」  
才は短く答えた。

「……………」

「……………」

それから数分後、装置は輝きを止めた。

直後、プレシアが倒れそうになり、それを海斗が慌てて支える。

俺達はその二人の元へ駆け寄った。

「プレシアー！」

「ア、アリシア……アリシアは生き返ったの……？」

すでに焦点が合わなくなり始めたプレシアが、譫言のように呟く。

俺は急いで台を駆け上がった。

横たわるアリシアの元で腰を下ろし、手首に指を当てる。

——脈が、あった。

すぐにアリシアを抱え、プレシアの元まで降りる。

「プレシアー！ アリシアは今、生きています！ 生き返ったぞ！」

できる限りの声で、励ますように叫ぶ。

俺の言葉が通じたのか、プレシアはゆっくりと顔をアリシアの方向に向け……愛おしそ

うに微笑む。

「ああ……アリシア……アリシア……」

手を伸ばし、ゆっくり、優しく、アリシアの頬を撫でる。

プレシアと、生き返ったアリシアとの再会。

しかし、時間が無情を見せた。

「うっ……うっ……うっ……うっ……！！」

「プレシア！」

プレシアが激しく咳き込む。しかも、咳が止まらない。

「才、治療装置を探すぞ！ お前の予感によく当たっても、必ずではないんだろ!？」

「……………うん」

「よっしゃ、運びは任せろ……………いつ!？」

プレシアを運ぼうと腰に力を入れようとした海斗だが、次にはびくりと一瞬跳ねてプレシアを離してしまった。

「海斗!？」

「す、すまん。急にビリツと来て……………」

「ごほっ……………必要、ないわ……………」

海斗が手を離したことによって倒れてしまっていたプレシアが身体を起こした。

「自分の……………死期が来てる、ことぐらい……………わかるわよ……………」

「……………だからって……………!」

「私が……………やるべきことは……………アリシアが生きていける、チャンスを作ること……………」

そう言うのとプレシアは指先に自分の吐いた血を付け、床になにやら描き始めた。

絵、か……………?」

「文献によると……………アルハザードの、転移装置は……………筒状の装置で、内側に操作パネルが

ある、構造らしいわ……」

描いてる絵も筒のような絵で、その上下に横線が引かれている……床と天井両方と繋がっているようだ。

描くにつれて、紅い線は震え、弱々しいものになっていた。

「ほっ……アリシアを……お願、い……」

……そう言うプレシアの表情は、我が子のことを想う母親の表情で。

……それ以降、プレシアが言葉を発することはなかった。

これが、大魔導師プレシア・テストアロツサの最期だった。

## 第十八話

プレシアの最期を看取った後、俺はまずアリシアを近くの民家のベッドに寝かせ、それと並行して海斗と才の手でプレシアの埋葬を行った。それから、俺は眠っているアリシアのそばにつき、二人はプレシアが残した手掛かりを元に転移装置を探している。（とにかく、できる限り早く虚数空間から抜けること……そしてアースラに早く通信して拾ってもらわないと……）

理由は勿論ある。アリシアのことだ。

アリシアは自力で呼吸はできてはいるが、死んでいる間に身体能力が衰え、死後硬直によつて固まり、全く動くことができなくなっていると見た。今は眠っているが、目を覚ましてもまともに会話ができる状態とは言えない。虚数空間の影響で魔法が使えないため、念話による意志疎通もできない。そういう状況だった。

また、ここには食糧がない。俺や海斗、才もなんとか大丈夫か……は、数日間は何も食わずに済むだろうが、アリシアはそうはいかない。朝に食事を取った俺達とは違ってアリシアは死んでいる間全くものを口にしていない。栄養失調の危険性が高い。

それに下手に時間が延びたら、管理局から俺達が死んだ扱いにされそうだし……とい



うか今すでに死んだ扱いにされてるのだろうか？

(あとは……この世界であれを手に入れることができればいいんだけど)

少なくとも、あの図書館にあれに関係するものはあるはずだ。

問題は、装置の使用方法なんだが……ここはやむを得ないと割り切るしかないのか……。

携帯で時刻を確認する。日本の時刻ではもう夜の十一時になっているらしかった。

こここの天気は真つ黒な雲が際限なく覆っていて、ずっと薄暗く、天気どころか外の明るさもそれから全く変わらぬ。……おかげで今でも二人は探索を続けていられるが、時間感覚が掴めないのは地味につらい。

(そろそろ呼び戻すか……って、連絡手段がないんだつたな)

ここでは魔法は使えないし。携帯もそもそも電波なんて届かないし。神からのメール？ あれは例外だろ。

まあ、遅くなってきたら戻ってくるよう言ったし、いい加減戻ってくるだろ……ここは蘇生装置のあった建物から近いし、道に迷うこともない。

俺がそう考えて間もなく、才と海斗が帰ってきた。

「ただいまーっと」

「ん、どうだった？」

「ダメだ。施設の中一通り見てみたけど見つかんねえよ」

海斗が疲れたように言う。海斗の言う施設とは、アリシアを蘇生させた装置のある施設のことだ。

「あの施設……装置の他にベッドや医療器具もあった。病院で間違いないと思う……」

「……そうか。じゃあ、今日のところはここまでにして休んどけ。疲れたろ」

「おお、そうする……あー、腹減ったなあ……」

昼も夜も食ってないからな……。

「……………」

才は海斗の言葉を聞くと、ごそごそとポケットを探り出した。どうしたんだ？

「はい」

「え？」

才がポケットから取り出したのは、カロリーメイトによく似たお菓子の箱だった。アースラの食堂で売ってあるのを俺は知っている。

「たまたまポケットに入れてた……行く前に一本食べて、今ちようど三本あるから、三人で分けよう……」

「おお！ くれるのか!?!」

才の提案に海斗は大喜びで一本受け取る。

海斗に分けた才は次に俺に箱を向けてきた。

「綾も、いるかい?」

「……いや、今はいい。ほとんど動かなかつたし……限界になった時に、最後の一本を三人で分けるとするよ」

「……そう」

俺のやせ我慢な言葉に受け取ると、才は軽く笑みを作つて箱をポケットにしまい込んだ。そして壁際で座り込む。

「じゃあ、僕もいい……今開けたら、最後の一本の保存状態が悪くなる……」

「え……?」

声を出したのは海斗だった。ちようと、菓子に口をつける直前で止まっている。

「え、何この状況……俺がここでこれ食ったら、俺悪者な感じじゃね?」

「……そんなことはないと思うよ。それに開いてた袋のものだから、ほうつておくと保存が悪くなる」

「いいからとつとそれ食え。お前の口が着いたそれなんて俺は食わんぞ」

「むっ!」

無駄に躊躇う親友の口に、彼の手に持っていたものを無理やりねじ込んだ。



それからそのままアリシアの看病も兼ねてこの部屋で就寝となった。

海斗は自分に正直な奴、才は身体がまだまだ子供であるため、他の民家から布団を拝借し、それにくるまって眠っている。俺は一応起きたまま、アリシアの看病を続けている。

静かに寝息を立てるアリシアの頭を優しく撫でる。未だに起きないのは、俺は医学に詳しい訳じゃないからなんとも言えないけど、怪我などで意識不明になった人が目を覚まさないのと似たようなものなんじゃないだろうか。蘇生されたからと言って、直後に目を覚ますことなんてまずないような気がする。

……さて。

蘇生されてからアリシアの呼吸は正常だ……半日以上正常なままでいるということ  
は、呼吸困難とかの心配は少ないだろう……。

二人……特に海斗もしっかり寝ている……今なら行動できそうだ。下手に心配かけられたくないからな……才はすぐに感づかれそうだから怖いけど、バレるもんだと割り切るしかないか。

俺は静かに立ち上がり、そして音を立てぬように部屋から出て行った。

目指す場所は……図書館。



図書館で、俺はまず館内の装置を一通りいじってみた。

装置は全て動力が落ちているのだが、ジュエルシードがある。取り付け方は先の蘇生装置とだいたい同じ感覚で取り付けることができた。

動力が入り、装置が輝きを発する。

一通りの装置に動力を入れた後、俺は試しに、恐らく検索用端末である機械に触れてみた。

しかし画面に映し出されるのはアルハザードの言語。全くわからない。唯一この世界の言語を知っていたプレシアも、この世にいない。

(……やるしかないか)

ポケットに手をつ突っ込み、取り出したのは星のチップ。

それを握り締め、悪夢のゲームの始まりである、あの居城を頭に思い浮かべる。

(来い……来いっ……！)

強く強くあの場所を、そしてあの元凶を脳から呼び出す。

視界が一瞬、真つ白に変わった。



荘厳な雰囲気醸し出す宮殿。

中庭の中央に噴水。一体この中庭だけでどのくらい広いんだろう。百人なんて簡単に入るのだから、かなりのものだろう。

かつてはここに百人集められたのだが、今は誰一人、人っ子一人いない。

いや、いる。俺と奴だ。

噴水の上に浮かぶ『奴』。白いローブを羽織る彼——神は、まっすぐこちらを見下ろしている。

『……汝、望みが叶うことを欲するか?』

神はそう問うた。

だが、俺はすぐそれに答えることはしなかった。その前に、訊きたいことがある。

『……その前に、いくつか訊きたいことがある』

『……………』

「願いを叶えるために必要なスターチップの個数を事前に知ったり、必要な数を聞いて

内容を変えることってできるのか？」

『……それはできぬ。……それが汝の望みとして、星を捧げるのであれば、話は変わるがな……』

……すなわち、こいつに対しては何を頼むにしてもチップ次第ってことか。

「じゃあ……最初の時、参加者の多くがチップ三つで叶えられるだけ……みたいな願い方をしてたけど、個数もこつちで設定しなきゃならないのか？」

『否……望みのみを言った場合には、こちらで必要な数をいただこう……無論、数が足りることが前提ではあるがな……』

なるほど……変に多く支払うこともないようだ。支払う数がわからないのが不安だが。

「そうかい。じゃあ……俺に二十四時間の間、アルハザードの言語がわかるようにしてくれ」

二十四時間に設定するのはスターチップを節約する他に、アルハザードからの脱出を二十四時間以内に達成する……という決意の意味もあった。

『……よかろう。星を三つ捧げよ……』

言われて、スターチップを三つ放り投げる。

チップは空中で粉々な砕け散り、消えていった。

『望みは叶った……他に、叶うことを欲する望みはあるか?』

「ない」

きつぱりと言った。

『そうか……では、元の場合へ戻そう……』

再び、視界が真っ白になった。



目を開くと、図書館内に戻っていた。

早速、検索用端末を動かしてみる。画面にアルハザードの言語が並ぶ。

——わかる。

つい数分前まで訳もわからなかった言語が、読める。

画面に触れ、装置を操作する。

(館内本の検索……検索ワードを入力して、検索ワードに関連する書籍を転送……)

タタタタツ……画面を叩き、指定の動作を行っていく……。

館内転送機が動くことを確認して、実行キーをタツチ。

実行させて十数秒で、検索ワードに引っかけた本が転送されてきた。ぱっと見、十



冊ちよい。

転送されてきた本を片っ端から確認する。しかし中身は開かず、まずは手に取った本の表紙を見てどかし、また次の本の表紙を見て……を、繰り返す。

「……あつた!」

ちょうど十冊目で、目的のものが見つかった。

茶色いブックカバーの、分厚い本。表紙には、黄金色の剣十字の装飾がされている。開くと、アルハザードのものではない言語が綴られていた。

「探せばあるものなんだな……」

「怪しいとは、思わないのかい?」

「!」

振り返る。声をかけてきたのが入り口に寄りかかる才であると判別したのには数秒かかった。

「……起きてたのか」

「だいたい予想はついてたよ……古くから存在し、極めて高度な技術があるこの世界なら、闇の書を夜天の書に戻す方法もしくは、夜天の書の模造品があるかもって見ていたんだよね?」

「……ああ」

「そしてそれを持つていたら、神が高度な指令を向けてくる……チップを大量に手に入るチャンスも来るって考えてたんだよね？」

「ああ」

才の言ってることはその通りだった。

緊急指令を発するには、それにふさわしい状況や条件が必要だ。ならそれを、こつちの手で揃えれば、緊急指令によつてチップを獲得するチャンスはやつてくる。そう考えていた。

そして今手にしているのは、言わば写本だ。一体どこまで夜天の書をコピーしているのかはここではわからないが、これを使えば闇の書から無事な人格プログラムを移し替えることで闇の書の意志——後のリインフォースを生かすことができる。奴なら、それを妨害するような指令を出してくる。

「でも……いくらここが技術がどこより発達しているアルハザードで、夜天の書が極めて強力な分、模造しようとするのがあり得たからと言って、それがここにあるのは都合が良すぎるとは思わないかい？」

「つまりは……奴がこれを用意したと？」

「可能性は、なくはないよ」

「奇遇だな。俺と全く同じ考えだ」

「どうするの？ この流れ自体、罠かもしれないよ……う？」

「そうだな。確かにそうかもしれない」

もしそうだった場合、待ち受けているのは敗北必至の鬼畜使用なものがくるだろう。奴は俺達の謀反計画を知ってるだろうから、危険因子として摘み取ろうとするかもしれない。

……だけど。

「けど……多少のリスクを犯すぐらいじゃないと、奴を……神を倒すことなんか無理だ。

それに……」

「……それに？」

「言ってみればそいつは間接的に、神との勝負ってことだ。やる価値はある……！」

笑ってみせる。才は呆れ半分といった苦笑を見せた。

「……そっか。じゃあ、早くここを出よう……」

「そうだな……言語解読ができるのは二十四時間までだから、さっさとしねーと」

「……使ったんだ？ いや、逆に使わなかったら、装置の操作もできないか……」

「ああ。時間は限られてるし、俺は転移装置を探しに行くよ。才はアリシアの看病につ

いてくれ」

「……わかった」

俺と才は、それぞれ街を歩き出した。  
夜は更ける。

## 第十九話

神に言語解読能力を頼んだのが午前の一時近く。それから十時間後……すなわち、午前十一時。

医療施設から少し離れた、医療施設と引けを取らない程の大きな建物。いくつか見た部屋の作りからして、多分政府関係の施設の、ある一室。

「見つけた……！」

目の前にあるのは、筒と言うよりは柱と言うべきかもしれない巨大な装置。

天井と接面しているその装置は、内側にコンソールが存在していて一人でも転移が可能な作りになっている。

プレシアが言っていた通りの外見、そして何より、部屋の前にあったプレートには『転移ポート』という文字。

間違いなく、これが俺達が探していた、脱出に必要な装置だった。

「……ああ」

安心感が力が抜け、その場に座り込んでしまう。

不眠不休の上、飲まず食わずで動き続けた……正直、もう限界が近かった。

「……でも、俺が動かないとっ……」

持てるだけの力を振り絞り、立ち上がる。

十二時になったらアリシアが眠る民家に集合ということになっている。今から行つて、待つついでに休めば大丈夫だろう。

「とにかく、まずは戻るか……」

場所をしつかり脳に記憶させ、一時この場から立ち去る。



動力となるジュエルシードを三つ入れ、装置を起動させる。

装置の中にはすでに海斗、才、海斗に背負われているアリシアが乗っている。

起動を確認した俺も、装置の中へ。

コンソールを起動。俺だけが理解できる言語に従って操作する。

「……とっころで、どっこへ行くの？」

「さあ………あ、ミッドチルダの座標なんてのがあった。これにしよう。ここから抜けられれば、あとは次元通信でどうにでもなる」

「それなんだけど」

「ん？」

「次元震の影響で、しばらくは無理なんじゃない？」

「あ」

手の動きが止まる。そういや、そんなのあったっけ……？

「……海斗、時の庭園が崩壊してから次元震ってどのくらい続くんだったっけ？」

「正確には余波じゃね？ 確か一週間ぐらいじゃなかったかなー。そんな重要視されな  
いとこなんて正確には覚えてないけど」

「……大丈夫だろ。ミッドに行けば、管理局に拾ってもらえるはずだ」

「そうかな……」

「そうだと信じろ」

信じるしかないんだ。

決定のコマンドを押しした。



なんだろう。身体が暖かい。

自分は横になってるようだ。もつと言うなら、布団に包まれているような感覚がす

る。

「ん……」

「あ、起きたかい？」

目を開けると、青年がこちらを覗き込んでいた。

……えつと。

「……あなたは？」

「俺の名前は、ティード・ランスター。管理局員だよ」

……ランスターって、ティアナの苗字だよな？ 兄妹か？ ティードって人がいた気がしないでもない。

……そこまで詳しく見ていた訳じゃないからな……。

「あ、お腹空いてるよね？ 何か作ってくるよ」

言つてティードさんが立ち去る前に、素早く起き上がつて彼の肩を掴んだ。

「その前に……状況説明をお願いしますっ……！」

「わ、わかつた……わかつたから！ 手を離してくれ！ 結構痛い！」





必要な情報を纏めると、以下のようになるらしかった。

まず、俺達は転移装置によって無事にミッドチルダに着地することに成功したらしい。しかし、俺は転移直後に体力の限界で気を失った……というか寝た。

ティーダさんが来たのは、転移反応と共に強力な魔力反応——ジュエルシードの反応をキヤッチしたからだ。現場に急行し、俺達四人を保護。ジュエルシード十八個（三個は動力源として置き去りだ）は封印処理をして本局へ、アリスは才から事情を聞いた後に病院へ、そして寝ていた俺は、身体自体に問題はないとしてここ——ランスター家へ。

才はアリスの元についているらしい。海斗は、ついさつき来た。

あと、アースラとの通信は昨日の次元震の余波によって今は繋がらない状態らしい。だがティーダさんによって連絡が取れるようになったら教えてもらおうことになった。

……とまあ、ざつとこんなところか。

「……状況はわかりました。助けていただき、ありがとうございます」

「気にしなくていいよ。困った時は、お互い様さ……さて、ちょうど夕食時だし、何か作るよ。ちよつと待っててね」

そう言つて今度こそティーダさんは立ち去った。外はもう暗くなっている。

「……………ふう」

溜め息を吐いて横になる。

首を動かして視線を巡らせると、机の上に本が置かれているのを見つけた。

……夜天の書の、写本だった。

アルハザードから持ち出した、大いなる魔導書の模造品……見た目は闇の書と何一つ変わりが無い。管理局員であるティーダさんなら、闇の書ぐらい知っていてもおかしくはないはずだ。なのに、訊かれることはなかった。

気を利かせてくれたのだろうか。それとも、才からすでに聞いているのか……前者のような気がする。

……そういや、才はどこまで話したんだろうか。転移されてから後の話しか聞いてないため、俺達がアルハザードから脱出してきたこととかを彼が知っているかどうかまでは判別できない。アリシアのことも少し心配だ。アリシア本人を知る者は少ないだろう——ティーダさんも知らない様だった——が、テストロッサの苗字が危ない。説明したのが才だから、アリシアの苗字は伏せているだろうけど『かつて故人であった人が生きていく』というのが伝われば騒がれかねない。

……いつか。それは後で。

「……腹減ったな」

アルハザードにいる間、四食分抜いてきたのだから、もう腹の減りが異常だ。……そ

う思ったら、喉も渴いてきた。夕食では、失礼にならない程度に、たくさん食おう。それから、ティーダさんから夕食ができたという知らせが来るまでの間、ゆつくりと過ごした。



ティーダさんに呼ばれてリビングまで案内してもらい、そこでティアナと自己紹介しあつた後、俺、海斗、ティーダさん、ティアナ、そして病院から帰ってきた才の五人で夕食となつた。

夕食のハンバーグを食べている途中、ティーダさんからこんな提案があつた。

「ねえ君達、もしよかつたら、アースラとの連絡がついてそこに行けるまでの間、ここに泊まつていくかい？」

「え……いいんですか？」

「住む場所はないんだろう？ だつたら、構わないよ。それに……俺が忙しくつて、ティアナはよく一人で家にいることが多いんだ。寂しくないかとか、ちよつと不安でね……」

つまり、ティーダが忙しい間、俺達が代わりにそばにいてやってほしい、ということ

だった。

「わかりました。色々と助けていただきありがとうございます、少しでも恩返しをしたいところです……できることなら、なんでもします」

「本当かい!? ありがとう!」

夕食を取って、食器を片付けた後、暇潰しとして俺は手品を披露することにした。今は、ティアナの引いたカードを当てようとしているところだ。ちなみに、カードは虚数空間の迷宮で使ったものだが、二つで足りない分を補完することで一組のトランプになっている。

「……ラスト。一番上のカードを引いてみてくれ。最初に選んだカードが来てるはずだ」

「……わあ!」

ティアナは引いたカードを見て驚いている。引いたカードは、最初に引いて書いてもらった『ティアナ』と書かれたカードだったのだから。

「すごいすごい! 綾さん、どんな魔法を使ったの!?!」

「確かにマジックだが、魔法という意味じゃなくて、手品って奴さ」

「しかしすごいな。あんなに細かくシャッフルして、よくわかるんだな」

「ま、綾の頭脳は天才級だからねえ」

天才も何も、今回ののはカードの位置を記憶してただけなんだが。

カードマジックというのは、基本的にはカードを記憶しているだけだと聞いたことがある。あとは法則性とか、ガンカードなんてのもある。中には、相手の反応からカードを絞り込むなんてやり方もあるそうだが、俺にはそこまでの技術はない。

時計を見る。夜の九時を回っていた。

「……もうそろそろ、寝ましようか。夜更かしは子供にはいけないですし、俺も疲れが抜けきつてないですし」

「ああ、そっか……じゃ、そうしようか」

俺の言葉にティーダは頷いたが、手品に惹かれていたティアナは反対した。

「えー？ もつと手品見たいなあ……」

「一週間ぐらいここに居るから、手品はいくらでもやれるよ。……それにあんまりやると手品が尽きちゃうな」

「は〜い……」

「部屋を案内するよ。綾は、さつき使っていた俺の部屋のベッドでいいかな？」

「ええ、構いません」

「じゃあ、あと二人にそれぞれ部屋に案内するから、ついてきて」

ティーダの案内に二人がついていき、俺も道を引き返すようにしてティーダの部屋へ

と向かう。

こうして、また一夜明ける。

## 第二十話

一週間が経った。

アースラとの通信が繋がり、アースラへ行くこともできるとティードさんに教えてもらって、早速アースラへ向かうことにした。

そして現在、すでに目の前にはアースラの転送ポートへと繋がっているゲートが存在している。

「……本当に、一週間お世話になりました」

「いやいや、こつちもティアナのそばにいてももらったりして助かったよ」

見送りに来てもらった、一週間お世話になったティードさんとティアナに頭を下げる。

「綾さん、海斗さん、才さん。また来てね！」

「ああ」

「おう。また来るぜ」

「……うん」

「アリシアちゃんも！」

そうやってティアナは海斗の背中……海斗に背負われているアリシアに視線を向けた。

「今度はうちに来て、いっぱい遊ぼう！」

「……うー」

アリシアはもぞもぞと小さく身体をよじった。

一週間の間に、アリシアは目を覚ました。しかし筋肉の衰退や硬直の影響で動くことができず、会話もままならないのが現状だ。ただ、念話は可能であるため、意志疎通はできる。

ティアナはアリシアから念話を受け取ったのか、嬉しそうな顔をした。

「うん！ 元気でね！」

「……では、俺達はこれで」

「ああ。元気でな」

最後にもう一度礼をして、俺達はゲートをくぐった。



「……さて、今度もなにか弁明があるのかしら？」



「……ないです」

アースラに乗り込み、アリシアを医務室のベッドに寝かせた後、会議室にて待つていたのはリンディさんからの説教だった。俺と海斗と才、三人並んでリンディさんの前に並ばされている。なお、これまでの経緯については、説教タイムに入る前に一通り説明した。

まあ、当然だろう。勝手に時の庭園に乗り込むという危険行為をした上に、何より、十二個ものジュエルシードを持ち出すということをしたのだから。普通に窃盗である。

「結果的に回収したジュエルシードが十八個になっているとは言え……今回のあなた達の行動はあまりに容認できないことです。それはもうわかりますね？」

「はい……」

「うい……」

「……はい」

「……あなた達の身柄を、こちらで拘束。罰としてしばらくの間、無償奉仕活動をしていただきます。よろしいですね？」

うへ……と海斗が呟いたが、リンディに睨まれて背筋を伸ばした。

「わかりました……では早速、何をすればよろしいでしょうか？」

「基本はアースラ内の清掃や、お茶係の仕事をやってもらいます。あと、あなた達が連れ

てきたアリシア・テスタロッサ。彼女のお世話もお願いね」

「了解しました」

と、ここで、リンデイさんの表情が柔らかくなった。

「……それでは、まずは友人達に会って来なさい。まだ会っていないでしょう？」

「……ありがとうございます！」

海斗は礼をするらずぐに部屋を出て行った。才も話はここまでだと理解して、部屋を出て行く。

俺も才に続いて出ようと動き出すと、そこでリンデイさんに止められた。

「待って。綾さんにはまだ話があるわ」

「え？ あ、はい。わかりました。……じゃあ、才。またな」

「うん」

才が出て行き、扉が閉まる音を聞いてから、リンデイさんが口を開いた。

「……ホントにとんでもないことをしてかすわね、あなたは」

「いきなり本人の前で愚痴ですか。いや、反論はしませんしできませんけど」

「勝手な言動は控えるようにと言って、あなたは領かなかった？」

「全部否定はされてなかったですし、様々なことを合理的に考えた結果なので」

「様々ってなによ」

「俺様々です」

「反省文。五十枚」

「ごめんなさい」

笑顔の上に血管マーク。怖いね。

「全く……でも、全員無事で何よりだわ」

「俺としては、そこにプレシアも加えたかったですけどね」

「そうね……」

場がしんみりとする。

だが、本題はこれではないだろう。ぶっちゃけ、こんな話はどうでもいい内容だ。

なので、俺から切り出すことにした。

「……そろそろ、本題に入ってもらえますか？ 俺も早く仲間と会いたくないなんて思っ

てたりしてるので」

「そうね……じゃ、本題に入りましょうか」

先程とは打って変わって、リンディさんの表情が険しくなった。

「話というのは他でもないわ。あなた達がアルハザードへ行き、そこでアリシアを蘇生

させて帰ってきたということよ」

「やっぱり、そこで見てきた技術を吐け……ってことですかね」

「簡単に言えばそういうことね。プレシア女史は元々管理局勤めだったの。プレシアが管理局を辞めたのは研究事故の責任つてことになってるけど、その事故でアリシアが亡くなったのよ。管理局上層部には、そのことを知っている人もいるわ」

それも予想はついでる。

ティードさんが気を利かせてくれたことや、才がアリシアをフルネームで話さなかったことが幸いして一週間の間にそういうお偉方が来ることはなかったが、バレるのも時間の問題だろう。

「来るとしたら後何日後ぐらいですかね？」

「そう遠くない話だと思っうわよ？ もう報告書を出すもの。あなた達のこと、報告書で誤魔化せる範囲を大きく飛び抜けているわ」

「アリシアが生き返ったことは書いてないですよね？」

「書いてないけど、虚数空間に飛び込んだ三人が戻ってきたなんて知られたら、タネを訊かれるわよ」

確かにそうだ。

「ま、うまく言い逃れるように努力してみます」

「返事が軽いわね。勝算でもあるの？」

「さあ」

溜め息つかれた。素直に答えただけなのに。

「まあ、こちらでもできる限りのことはしてみます」

「了解です。……じゃ、そろそろいいですかね？」

「ええ。呼び止めちやつてごめんなさいね」

「いえいえ。そちらこそお疲れ様です」

「疲れさせられた原因は誰だったかしら」

「誰ですかねー。そんな人」

「……そろそろ怒るわよ？」

「失礼しました」

そろそろまずいと思った俺は、早足で部屋を出た。



「綾……っ！ ホンマに、ホンマによかったあ……!!」

「綾さん、お帰りなさい！ グスツ……」

食堂にいるというみんなの元へ行き、竹太刀と由衣が俺を見つけるや否や俺は二人の突撃をもらった。

二人とも涙目であるのをみて、心配かけてしまったなと思った。

「まさか、こうして戻って来るとはな」

「しかもチップを大量に手に入れて、アリシアも蘇生してきたっていうんだからすごいねえ」

「氷室、由樹……」

「じゃ、僕はお暇するよ。君が帰ってきたと聞いて、確認のために来ただけだからね」

「俺も同じだ。帰らせてもらうぜ……綾」

氷室が去り際に俺に話しかけてきた。

「今回はお前の策がうまくいったみたいだが、次の戦いはこうは行かねえ。今回の結果に、浮かれない方がいいぜ？」

「わかっている。ちゃんと策は考えるさ」

「言うねえ……じゃ、俺はその策をじっくり見させてもらうぜ？」

そう言つて、氷室は食堂を後にした。それによって、ここにいるのが俺達のチーム四人だけになった。

誰もいないことを再度確認した後で、俺は竹太刀と由衣に話しかける。

「二人とも……そろそろいいか？」

「ん、もう大丈夫や」

「はい……私も、もう平気です」

「さて……これからのことについて、少し話をしたい」

「あの……私も、一つ話が……」

由衣がおずおずと言った。そのことによって、俺達の視線が由衣に集まる。

「どうした？」

「あの……以前、私が他の転生者に襲われて、フェイトちゃんに助けてもらった話はしましたよね？」

「ああー、由衣ちゃんそんな話していたなー。それがどうしたんだ？」

確かにそんな話あったな。確か、由衣はリンデイさん達には「ジュエルシードの思念体に襲われた」って言ったんだっけ。

「それで……事件終了後、フェイトちゃんと話す機会ができたんです。それでまずはお礼をして、それから口裏を合わせてもらおうとしていたんです。でも、実際会って、まずお礼をした時に……」

——あの時、ジュエルシードの思念体に襲われてた子だよ。あの時は訊かなかったけど、大丈夫だった？

……え？

「えっと、由衣ちゃん。その時、他に人は……？」

「いませんでした。いない時を狙っていたので……」

「わいもその話は聞いた。考えられるのは一つや。失格者は身体をだけでなく、人々の記憶からも存在を消される」

「……意味はあるのか？」

「たった一ヶ月の内に百人近い人が消えるなんてもん現実にしたら、警察沙汰になるやろ。……まあ、そないなことよりも奴の考えとしては、わいらに精神的苦痛を与えるつもりちやうかな」

「精神的苦痛……？」

「考えてみい。仲間である海斗が消されて、自分以外の全員が海斗の存在を覚えとらんなんてこと。そないな矛盾した世界で生かされたら、かなりの苦痛になるんちやうか？ 由衣ちゃんがいっつのこと覚えとるのも、それが理由とちやうか」

「……………」

「……ま、わからんことを考えてもしやーないわ。とりあえず事実としては、失格者は転生者以外の人の記憶からも消去される……という報告や。はつきり言つて、今までと大して変わりはない。失敗できへん理由が一個増えた程度や。わいらは生きる。そして、こないなとしよる神に反逆する。やる？」

「……そうだな……そのためにも、今後の策だ」



「そうだ。存在が消される……それでもやることは変わらない。俺達は、神に勝たなくてはならない。」

「まず、俺と海斗はしばらくの間地球には戻れない……竹太刀は、由衣のことを頼むぞ」「了解や」

「それで……竹太刀にはこれを預けとく」

「言つて、俺が差し出したのは夜天の書の写本と、一つの包みだった。」

「え、あのつ、綾さん、これって……!」

「アルハザードから持ち出した、夜天の書の写本だ……これは俺が地球に戻ってくるまで、俺の部屋に隠しておいてくれ……そして、この包みには俺が考えた指令に対する対策が書いてある。指令の目標は恐らく守護騎士との勝負で勝つこと……だが、必ず戦闘で勝つ必要はないはずだ。戦闘以外で勝つ方法が書いてある。指令が来て、内容を確認してから開けてくれ。一応、俺からも連絡を入れる」

勝負が戦闘である必要がないと言える理由は、俺達のステータスだ。Sクラスの魔力と戦闘技術を持つ守護騎士……対して、俺達転生者はデフォルトでの限界がB+だ。差が大きすぎる。さすがに、絶対不可能な内容にはしないはずだ。

「了解つと……そや、夜天の書の……なんかのが多いし面倒やな。夜天の写本でええか? これ、綾が地球に来れんかったらどないすんのや?」

「……なんとかして、地球に行く。だから、それまで待っていてくれ  
ん、了解や」

「じゃあ竹太刀……俺達が動けない間、頼むぞ」

「任しとき」

仲間に出来る限りのことを託し、俺達は解散した。



解散してから、早速艦内の清掃をしていると、同じく清掃をしていた才と出くわした。  
「……うまくいきそうかい？」

その言葉に、モップを動かす手が一旦止まった。

「……見たのか？」

「ちよつとね……」

……清掃を再開する。

「お前は、仲間を作らなくていいのか？ 俺達が十二月までに解放されるとは考えにく

いぞで」

「だろうね……でも、その時はその時だよ」

「……………」

静かになり、二人して付近の清掃をし続ける。

何か話そうかと思つたが、話の内容がないため、やめて別の所の掃除に向かうかと思つた。

その時に、才が再び話しかけてきた。

「そう言えば」

「？」

「これ……結局食べなかつたよね」

才が取り出したのは、アルハザードにいた時に才が唯一持っていたあの食糧だった。

「ああ、それね。すっかり忘れてた」

「どうせだし、食べる？ 生還記念に」

「いいね。じゃあ、そうするか」

才が袋を開け、差し出された一本を受け取る。

「じゃあ……」

「俺達の、アルハザードからの生還を祝して……」

グラスで乾杯するように、菓子を重ね、それから口へ放り込む。

ボソボソとした食感の、メープル味だった。

## 第二十一話

俺達がアースラで無償奉仕活動を始めて一週間。

俺達の仕事——まあ、俗に言う雑用だ——の評価は中々のもので。

例えば……

「……どうぞ」

「ああ、ありがとう。君、お茶の淹れ方とてもうまいね」

「……いえ」

才は口数が少ないながらも、お茶係として高評価をもらったり……

「あ、すいませーん。これを、そつちに運んでくれますか？」

「あ、いいですよー。……よいしょつとー！」

スポーツ、体力馬鹿な海斗は機材運びなどの重労働な場所で活躍したり。

アースラの人達が優しいということもあってか、アースラのみんなと親しくなりつつある。

そして俺は、一日の大多数をある部屋で過ごしている。

「おはよう、アリシア。今日の調子はどうだ？」

部屋に入って、ベッドに横たわる少女……アリシアに声をかける。俺の手には彼女の食事を乗せたトレーがある。

「……そうか。じゃあ早く良くなるためにも、しっかり食べような」  
もぞもぞと動くアリシアに、俺は優しく微笑みかけてやった。



アリシアは顎の筋肉も衰退しているため、噛む力もほとんどない。

そのためアリシアの食事は噛む必要のないスープ、もしくはお粥状のもので、それを流し込むようにして食べさせる。ただただ流し込むのではなく、一度口に含ませて顎を動かすことをさせるといった感じでリハビリも取り入れている。

「どうだ？ 今日のスープ」

『うん、おいしいよ。……でも、早くハンバーグとかカレーライスとかも食べたいなあ』  
アリシアは念話で返してくる。アリシアにとっては念話は現時点で唯一の会話手段だ。

アリシアの要望に対して、俺は苦笑する。

「それ、昨日も言っただけじゃなかったか？ ……でも、早く自分で何でもできるようになりたい

よな」

『うん』

「じゃあ、そのためにも身体を動かす練習、頑張っついていかないと」

『うん！』

食事が終わってからはいつも、アリシアの手足をマッサージしている。少しでも固まった筋肉を解せたらと始めたことだ。

アリシアが痛がらないように気をつけつつ、ゆっくりと指で圧力をかける。

「どうだ、痛くないか？」

『うん。気持ちいいよ』

「そっか。痛かったりしたらすぐ言ってくれ」

『うん。……ねえ、綾さん』

「ん？」

『いつになったら、私も走り回れるようになるかな？』

「うーん、病気の影響とか、それで眠っている間の衰えで動けないんだからなあ……お医者さんの話だと、リハビリの経過にもよるけど、しっかりと話ができるようになるのが半年ぐらい、自分で立って、自由に走り回れるようになるのはさらにもうちょっとかかるって」

アリシアには、アリシアは重い病気にかかって眠り続けて、それで身体が動かなくなっていた。そして病気が治って、これからリハビリを頑張ればまた動けるようになる」と説明している。自分は元々死んでいたと、そう説明しても信じられないだろうと考えた結果だ。

『そっかあ……早く歩けるようになりたいなあ』

「動くことができないって、退屈だよな」

『それもあるけど……早くよくなって、忙しくって来れないお母さんに、私から会いに行くんだー』

「……………」

……プレシアの死は、アリシアには教えてない。

いずれは知ることになるとしても、幼い今のアリシアにその現実を突きつけるのはあまりに酷に思えた。

だから……俺はアリシアに「プレシアとはある仕事で遠くに行っている」と……そう嘘をついた。

「…………ごめんな」

『…………？ 綾さん？ どうしたの？』

「…………いや、何でもない。…………はい、ひとまずマッサージはここまで」

『ありがとう！ ねえ綾さん、手品見せて！』

「……………ああ」

贖罪をするかのように、俺は努めて笑顔を作った。



昼になって、俺はある部屋の前に来ていた。

二回ノックする。少しすると、自動式の扉がスライドした。

「はいはい……………って、あんたか」

「あ、こんにちは」

出てきた二人の反応は、以上の通りだった。

「こんにちは。フェイト、アルフ」

「で？ 今回は何さ。またどうでもいい話をしたいってのかい？」

「だめだよ、アルフ。そんな言い方しちゃ」

「ああ、いいよ。俺も前回はホントにどうでもよかつたって思ってる」

「じゃあ話すなよ。あんな雑学」

アルフは以前のジュエルシードの奪い合いの件が尾を引いてるのか、俺に対して言葉



がキツイ。そして俺がいる場合、アルフの態度にフェイトがオロオロすることが多い。

「今回はフェイトに真面目な話がある。ついでにアルフ、お前も聞くといい」

「あたしはついでか」

「ああ、ついでだ」

「殴るよ？ もしくは噛み付く」

「アルフ、落ち着いて……あの、立ち話もあれですし、入りますか？」

「ああ。そうさせてもらおうよ」

フェイトの提案を快く受け取り、部屋へと入る。

一応、事件の重要参考人の部屋とあって、女の子らしいものがほとんどない寂しい部屋だ。ビデオレターという手法もまだとっていないためか、本当に何にもない。

唯一あるとすれば、机に置かれた写真立て……そこに納められた、フェイトとプレシア——否、アリシアとプレシアの写真一つだけだった。

どうぞ、と椅子に座ることを勧められ、礼をしてから座る。フェイトとアルフはベッドに腰掛ける。

「それで、話って……？」

「ああ。前振りも面倒だし、単刀直入に言うよ。……アリシアがお前に会いたいと言っている」

「っ！」

「……っ」

びくり、と二人の肩が揺れた。それから一人は警戒心を剥き出しにし、一人は不安げな表情で俯く。誰がとは、言うまでもないだろう。

「アリシアには、フェイトはアリシアが病気で眠っている間に生まれた妹だって……そう説明したのは覚えてるよな？」

「……はい」

まさかアリシアの代わりとして造られた子なんて説明ができる訳がなく、そう俺がでっち上げたのだ。……アリシアに色々嘘ついてるな、俺。

「それでお前の話をしていったら、『今まで見ることができなかった妹の姿を見てみたい』……それが、『姉』の要望だ」

「……………」

「無論、強制はしない。会いたくないと言うのならそれでもいいし、気持ちの整理ができるまで待つてほしいと言うのなら、いくらでも待とう。リンデイさんにもそういうことで許可はもらっている。後はフェイト次第だ」

できるだけ穏やかな口調で、変な圧力をかけないように言う。圧力がかかってそれが影響して答えが出たなら、それはフェイトの意見ではなくなる。

フェイトはしばらく俯いたままだったのだが、ようやく、振り絞るようにして答えた。

「一日だけ……考える時間をくれませんか……?」

「……わかった。明日また来るよ。その時、一日で決まらないようならそう言ってくれ。

何日でも延ばそう」

フェイトは僅かに、本当に僅かにだけ頷いた。

それを見た後、俺は退室をした。

「あら」

「……どうも」

退室したら目の前にリンデイさんがいた。

「この部屋に、何かご用で?」

「いえ。ただ通りかかっただけだから」

「……そうですか」

「……もう、あのこと話したの?」

「ええ。早い方がいいかと思いましたが」

「返事は?」

「一日考える時間をほしい……とのことでした。一日では決まらないかもしれないので

一応、何日延ばしても構わないと言っておきました」

「そう……フェイトさんにとっては、複雑な存在だものね」

「まあ、それも明日になったら答えが出るかもしれないですよ」

「それでいい結果になればいいのでしようけどね……」

ところで、ここでリンデイさんが話題を変えてきた。

「前から思ってたて、そのうち訊こうと思ってたんだけどあなた、本当に十六歳なの？ 交

渉力があつたり、他にも色んなことができたり……あなたの出身国で言う十六歳って中学生卒業した辺りだって聞いたんだけど……海斗さんと同じ年には見えないんだけど」

「実は少し、年齢を詐欺ってるんですよ」

「ああ、やっぱり」

「十四です」

「もつと有り得ないわ」

残念ながら、現実だ。



翌日。

まだ自由に部屋を出ることはできないフェイトが、現在部屋を出て医務室の扉の前に

いた。アルフもついている。

ここに来ることに、一日悩んだ。そして悩んだ結果、フェイトは自分の『オリジナル』であるアリシアに、会うことにしたのだった。

今、目の前の部屋の中にはアリシアと、先程部屋に綾が入っていった。これから対面するということを教えるためだそうだ。

扉が、開いた。

「……フェイト、入っていいぞ。ああ、アルフはここで待ったな」

「え、なんでさ？」

綾の『アルフは待機』という指示に、アルフ本人が怪訝な顔をした。

理由は単純だった。

「なんでって、今回は姉妹水入らずにしてやれよ」

「う……わかったよ」

「さて、フェイト……事前に話した注意事項はわかってるな？」

「……はい」

注意事項とは、フェイトが答えを出した後で綾が話した、アリシアと話す時に注意してほしいと言ったものだった。

それは、フェイトの知っているプレシアとアリシアの知っているプレシアは違うとい

うこと、そしてフェイトの知っているプレシアをアリシアは知らない、ということだった。

言われて、フェイトも理解した。アリシアを蘇らせるためにプレシアは自らの命を賭してアルハザードへ向かった。アリシアを生き返らせる手段の一つとしてフェイトを造り、出来損ないの人形と嫌悪した。自分と違ってアリシアへの愛情が強かったというのは、容易に想像できる。また、後者のことについても当然だ。フェイトが生まれ、プレシアが死ぬまでの間、アリシアは死んでいたのだから。

また、アリシアにはまだプレシア事件のことは教えていないということも聞かされた。つまり、アリシアにとってプレシアは『たくさんのお母さん』という認識のままなのである。

「……すまん。今は……アリシアに話を合わせてくれ。時期を見て、俺からちゃんと説明するから」

「……は、い」

「ん……じゃ、行って、い」

ポンと、優しく背中にも手を乗せられた。

そしてフェイトは、アリシアが待つ部屋に、一步踏み出した。

部屋に入っただけでアリシアと対面、ということではなかった。カーテンレースの柵が

ベッドを隠している。

すう、はあ。と深呼吸をして、気持ちを整える。震えそうになるのを抑えて、レースの向こうへと向かう。

距離にして二、三メートルもない距離なのに、今まで何十メートル何百メートルという距離を一瞬で駆け抜けてきたというのに、この距離を歩くのにとても時間がかかった気がした。

レースの向こうへとついた。

ベッドが見える。

ベッドには、自分と瓜二つ……いや、自分より少し幼い顔つきか。とにかく自分にそっくりな彼女が、横になっていた。

フエイトは彼女に、なんて声をかければいいか、わからなくなった。

『あなたが、フエイト?』

「っ！」

自分によく似たトーンの声が、頭に響いてきた。

クローンとそのオリジナルなのだから、声が同じであるのはある意味当然だが、いざ聞くと得体の知れない不安にかられる。

『ごめんね、私一人だと全然動けないから……こつちに来てくれないかな? ちゃんと

あなたの顔を見てみたいの』

「あ……う、うん……」

ゆっくり、ゆっくりと、アリシアからよく見える位置、アリシアの隣まで歩く。

歩きたび、得体の知れない不安は大きくなり、足が止まりそうになった。

アリシアの隣にようやくつく。筋力の衰えで半分程しか瞼が開かない目が、こちらを見ていた。

『綾さんの言ってた通りだ……私そっくり』

表情を作れない顔とは裏腹の、少し楽しそうな声が響く。

「え、えっと……」

『まずは、自己紹介からかな？　こうして話し合うのは初めてだからね。私は、アリシアです』

「わ、私は……私は、フェイト……」

『うーん、フェイトは恥ずかしがり屋さんなのかな？　それとも、緊張してる？』

「えっと、私は……」

アリシアを前にして、言葉が纏まらない。

不安の理由はわかっていた。オリジナルであるアリシアが、クローンである自分を嫌悪するのではないか、自分の存在を否定されるのではないかという恐れだ。



今はまだ、綾が誤魔化しているから大丈夫なのだろう。

しかし、いずれ真実を知る時がきつと来る。

その時、アリシアはどうするのだろうか。今のようにはならないかもしれない。今かけてくれている優しい声が、もう聞けなくなるかもしれない。

『……フェイト』

「え？ あ、何かな？ アリ、シア……」

『……ちよつと、手、握ってくれる？』

「あ、うん……」

フェイトはアリシアの言う通りに手を握った。

『……次は、この手をあなたのほっぺに触らせて？』

「うん……」

アリシアの意図が読めないまま、言われるままに握った手を頬に当てる。

すると急に、アリシアの手が震えだした。

「アリシア……？」

『……ごめんね。撫でてあげたいんだけど、身体が全然動かなくなつて』

どうやら、撫でようとしていたらしい。

それならばと、自分からアリシアの手を上下に動かし、撫でる動作を手助けする。

ありがとね。とアリシアが言った。

大したことじゃないよ。とフェイトが返す。

しばらく続けていると、アリシアの方から言葉を発してきた。

『私、知ってるんだ』

「え……？」

『綾さん、私に何か隠し事してるんだよね？ それはとても大切なことで、フェイトが震えていることにも関係してるんじゃないかな？』

「……………」

『待ってるよ』

「え？」

『待ってる。いつか、綾さんやフェイトが話してくれるまで。それが、私と、フェイトのことだとしても、ちゃんと受け入れるよ……だって、お姉ちゃんだもん』

「アリシア……」

『それよりあなたに会って、伝えたいことがあったんだ』

言うのと、アリシアは目を細め、口角をヒクヒクと動かし……彼女なりの、笑顔を作った。

『フェイト……こうやって、あなたに会えてよかった』

「……………」

フエイトは痛がらない程度に『姉』の手を強く握り締め、頬を擦り付けた。涙が溢れる。

「アリシア……姉さん……っ」

『うん……背はちっちゃいし、知ってることもきつとフエイトより少ないお姉ちゃんだけど……ちゃんと、お姉ちゃんとして頑張るよ』

「私も……姉さんに会えてよかった……！」

『うん……』

しばらくの間、姉妹はこのまま一緒に居続けた。



「うわああああ……フエイトおおおお……っ」

「……お前、周りから見られた時を考えろよ。変な人に見られるぞ」

部屋の前でフエイトを待つ俺は、一人号泣しているアルフにそう注意した。効果は薄い……いや、なさそうだ。

しかし理由が精神リンクによって伝わってくる感情によるものだと知っているため、

これ以上言うつもりはない。

それに、アルフの様子は中の様子でもある。

(どうやら、中の様子について心配ないみたいだな……)

安心した俺は、壁に寄りかかってフェイトが戻ってくるのを待った。

## 第二章 騎士討伐編 第二十二話

——六月九日——。

差出人：管理者

件名：指令2

内容：

次の指令を指定期間内に実行、達成せよ。

指令内容：闇の書の守護騎士ヴォルケンリッターと勝負し、二人以上に勝利せよ。同  
一人物との複数回勝利はカウントされない。

期間：闇の書事件終了まで（闇の書防衛プログラム消滅まで）

報酬：報酬は勝利した相手によって以下の通りになる。

シグナム……4個

ヴィータ……3個

ザフィーラ……2個

シャマル……1個

なお、報酬は二人以上に勝利した時点で配布され、その後は勝利ごとに上記の個数分配布される。



プルルルル。プルルルル。

……ガチャ。

『もしも〜し』

「俺だ。聞こえるか？」

『オレオレ詐欺は堪忍やで〜』

「冗談言ってる場合かど阿呆」

『阿呆やないで。わいの成績は常に上位や』

「いいから、さつさと本題入るぞ」

やや語尾を強くする。ようやく相手の真面目な声が届いた。

『ん。ほんで、電話かけてきたのは、指令の話なんやろ？』

「ああ」

六月九日の午前八時。俺は自分の部屋で竹太刀に電話をかけていた。

今日の午前零時。神から指令のメールが届いた。その対策を話し合うためである。

『読んだ感じ、綾の言う通り勝負は戦闘以外もありつぽそうやな。リリカルなのは世界つちゅー先入観で戦闘一択に見えなくない書き方やけど』

「ああ。でも戦闘以外もありならなんとかなる。包みの中にある、『2』の番号が振ってある紙だ。それを由衣と一緒に読め。後、『1』の番号の紙も読んどけ。もし戦闘でやらなきゃならない場合、準備として必要なものを書いてある。可能な限り揃えてくれ。できれば俺達がいらない分浮いた金もそこに当ててくれ」

『1の番号と2の番号やな。どころで訊くけど、なして2番は由衣も読むんや?』

「んなの、決まってるだろ」

俺はニヤリとした。

電話なので竹太刀に俺の表情は見えないだろうが、それでもそれがわかるくらい口の調で、こう言った。

「ヴィータを狩るのが、由衣だからだ」



竹太刀は綾の言う通り、包みから『1』と書かれた紙を取り出し、その指示に従って行動していた。

『2』の紙は由衣と一緒に読むようにということなので、まだ開いていない。今日は休日なのだが、由衣は午前からは達と会う約束をしていたので、すでに出掛けていた。なので由衣が帰ってくるまで紙を開くのは待つとして、先に1の指示に従うことにしていたのだった。

「打ち上げ花火……四個以上、可能な限り多く。モデルガン……一丁。……バッチ……大きめのもので、とりあえず十個……」

歩きながら、綾曰わく必要だとする物とその個数をブツブツと読み上げていく。

綾が必要とするものは、しかし竹太刀は納得のいかないような顔をしていた。

「花火は、まあわかるわ。モデルガンについても納得したる。せやけどバッチってなんや。しかも大ききにはこだわって数はアバウトやん。何でやねん。他にも奇天烈な品要求しとるな。何でやねん」

打ち上げ花火は、中身を分解して火薬を手に入れたり、花火そのもので爆弾の代わりにするつもりなのだろうと予想できた。モデルガンもブラフとして使うつもりであるのが見える。

だが、意味がわからないものもいくらか書かれており、それが竹太刀の頭上に疑問符



を置く原因になっていた。

まあ、包みの中に入っていた『1』の紙に二種類あり、その内の『準備編』と書かれた紙しか見てない故の疑問符なのであるが。

「……いやいや、あんな分厚いの読んだら日暮れてまうわ。何やねん『実戦編』て。あれはもうメモやあらへん。本や。本にする前の原稿や」

守護騎士それぞれに対して、細かい指示まで綴れば当然量が多くなってしまうことは致し方ない。

ともかくは指示に従って、書かれた品を買い集めていくため、竹太刀は歩を早めた。



「はあー。まーこんなもんやろか……花火はまだ夏やないからしゃーないとして」  
数時間街を回って、買うべき物はある程度買うことに成功した。

しかし打ち上げ花火だけ例外で、まだ夏と言うには早すぎてスーパーやデパートには売られていなかったため手に入れることはできなかった。仕方ないと言えば仕方ない。

しかし元はと言えば実戦用。夏までは闇の書の収集は始まることもないであろうから問題ない。

「さーてと、今日の晩御飯はなんにしよかなー」

帰路に着きながら、最近毎日一回は口になっている悩みに、今日はあーでもないこーでもないと呟く。

と、その途中、周りに異変が起きた。

「ん?」

竹太刀は一旦立ち止まって首を傾げる。

その間に、影は彼の背後を狙って素早く迫って――

「ほいっと」

「!?!」

横一闪。しかしすでに察知していた竹太刀は難なく身を低くして潜り抜けた。

その上で腕を振るい、相手の足を躓かせる。

「うあつ!?!」

「でやあああああつ!!」

「!」

竹太刀が一人を転ばせた直後、第二の刺客が物陰から飛び出て、跳躍。真上から唐竹割りを仕掛ける。

「気配丸出しで当たる訳ないやろ」

竹太刀は指摘の後で軽く横へ回避。

そして相手を大外刈りの要領で地面に押し倒す。畳の上ではないため綺麗な音はしなかったが、鈍い音が竹太刀の耳にも入った。

「がはっ!!」

「大人しくせえ。そっちの倒れとる自分も、逃げ出そうとせえへんようになー」

「ぐっ……」

相手の動きを素早く封じる。先に抵抗しないよう言っておいてから、竹太刀は二人に訊くことにした。

「さて、自分らなしてわいを襲おう思うたんや? しかも結界なんぞを張って」

「……お前、転生者なんだろ」

「そやけど、それが何やねん。まさかこのデスゲームが始まって二ヶ月経つ言うのに、まだルール知らんとか言うんやあらへんやろな?」

「……はあ?」

二人は揃って訝しげな表情を取った。

そして一人が、竹太刀にとって衝撃の一言を言った。

「デスゲーム? 始まって二ヶ月? 何言ってるんだよ。転生してから一日しか経ってねえじゃねえか」

「……なんやと?」

竹太刀はしばらく固まっていたが、ややあつてから突然封じていた方の転生者の胸倉を掴んで引き寄せた。

「うわっ!? 何すんだよ!」

「その話、よく聞かせえ! 今すぐ、全部や!」

今日は竹太刀にとって特に忙しい一日になりそうだった。



竹太刀の方から電話がかかってきた。

何かあったのかと思つて出てみたら、なかなか急な事態だった。

「……なるほどな。つまり補充要員、と」

『……やろな。最初の指令で全滅せえへんようにする算段つちゅーことやろ』

竹太刀が捕まえた新規転生者の話では、転生者の人数は百人。つれてこられた場所は俺達と同じ居城。神は俺達の時と同じく必要な情報を故意に抜いたルール説明の後に海鳴市へ転送。

なおその時、神は願いを叶えてもらうのに必要なスターチップは一つからでいいと

自分から発言。それによってほぼ全員が最初の三つ配布される命綱スターチップを手離したらしい。捕らえた二人もすでに使用後だった。

ちなみに、竹太刀に襲いかかって返り討ちにされた二人は竹太刀によってルール説明書とこの世界の現実を知った後、顔を真つ青にして帰っていったそうだ。

「おかしいと思つてたんだ。ついさつき失格者通知が来たから、もうヴオルケンリーターに仕掛けた奴がいたのかと」

『ああ、その時わいは二人に現実教えてた。失格者通知を読んだ二人の顔、真つ青になつてたなあ』

なお、その百人によるものと思われる失格者はすでに出始めている。竹太刀が電話をする前に二人、この世界から消滅した。しかし今までとは違い残り人数の表示がなくなつていて、それも疑問に感じていた。

「……竹太刀。これからしばらく、由衣の学校の登下校時、送り迎えに行つてくれ」  
『了解や』

俺の指示に竹太刀はそう返した。

ルールによってスターチップが奪われる心配はないとはいえ、それも知らずに転生者が襲つてくる可能性が高い。未然に防ぐことができないにしても、予防線を張らねばならない。力の無い由衣は特にだ。

「……で、話は以上か？」

『おお、そんな感じや』

「じゃあ、今後変わったことがあったら連絡してくれ。あと、くれぐれも気をつけろよ。以前みたいな強硬派がいる可能性だってあるんだからな」

『わかつとる。ほなな』

ブツツ。電話はこれで終わった。

（海斗や才、氷室に由樹にも伝えとかないとな……）

現在海鳴市にいる氷室と由樹はこの事態に気づいている可能性はあるが、念のためだ。

（……波乱にならなければいいんだけど）

俺は才のように運が超絶に良くも、勘が鋭い訳でもない。

けど、なぜだか……嫌な予感が脳裏に纏わりついていた。

## 第二十三話

六月一六日。もう指令発信から一週間。

未だに失格者（多分自爆）のメールが連日届く中、俺達アースラ組はそんな影が来る訳もなく雑用の日々を送っていた。

が、そんなある日俺、海斗、才のアースラ雑用組はリンデイさんに呼び出された。場所は艦長室。和室だ。

「……で、話とは？」

まずは俺から切り出した。

「綾さん、あなたには以前話したからわかると思うんだけど、虚数空間からあなた達が抜けてきたことで上層部からの言及が来たわ」

「やっぱり、それですか」

「え、そんな話あったの？」

「ああ。説教ついでに言われた。……それで、そのことについて俺達が話せと」

「ええ」

「いつ、どのような人が来るんですか？」

才が尋ねた。

その質問に答えるため、リンデイさんは一つモニターを展開した。

モニターには白い髭をたつぷりと蓄えた、『いかにも』な男性の顔写真が映し出されていた。

「ジェリス・コード少将。この人が明後日アースラに来て、応接室で話になるわ」

「三人で行かないとダメなんですか？」

再び才が質問をそれは俺も訊きたかったことだ。

「そうするべきね」

「……わかりました。じゃあ、俺が先頭に立って話をします。シナリオもある程度考えているので」

「ええ。お願いね」

さて、明後日に向けて色々準備しておくか。

果たしてうまくいくか……やるだけやってみるしかないか。



二日後。



リンディを先導に、俺達三人は応接室へと向かう。

『いいか、俺が話を担当するから、無理に話す必要はない。話を振られた時は俺がした話に合わせることに』

『お、おう』

『才は、俺が万が一話に詰まったりした場合、適当に話をでっち上げてくれ』

『……わかった』

二人とも最後の確認。二人とも俺の話に小さく頷いた。

そうしている内に、応接室の前まで到着。

「……さて、入るわよ？」

「はい」

「ういっす」

「……はい」

俺達の返事を確認したリンディさんは自動ドアを開け、中へと入る。俺達も、後に続く。

「失礼します。コード少将、三人を連れてきました」

リンディさんの横に立つ。それでようやく、応接室のソファに居座る人物の姿が目映った。

一昨日見た通り、たつぷりと蓄えられた白い髭。顔つきもそうだが、肥えて張った腹が『いかにも』な雰囲気強くした。具体的かつ端的に言うなら、利益優先のハイエナ。一昨日からアースラ内でスタッフから聞いた噂も嘘ではなさそうだ。

リンディさんが呼んだ通り、彼がジェリス・コード少将。金や権力のためにコネや他人のスキヤンダルで少将まで上り詰めたという噂の男である。後ろには秘書だろうか。少し身体が細い女性もいる。

「御苦労。ふむ……、まあ座りたまえ」

コード少将は品定めするような視線を俺達に向けた後、着席を促した。  
促され、コード少将の前のソファに俺だけが座る。

「む？ 君達も座っていいのだぞ」

「……いえ」

「俺達はいーです。話をするのは綾なので」

「君達からも聞きたいのだがね」

「僕達が話せることは彼が話す内容と同じ……それだけでなく、プレシア女史が綾だけに話したこともあるそうです」

「……フン。……まあいい。君から話をするにしよう」

自分の指示に従わないことが気に入らないのか、鼻を鳴らして一瞥した後、コード少

将はこちらを向いた。

強制しなかったのは、俺達が管理外世界の人だからか。良心というよりは、利益になる人じゃないと判断したからだろう。

「私が聞きたいのは、虚数空間に落ちた君達が空間から脱出した経緯。それとプレシア事件の後、ミッドチルダの病院にてアリシアという少女が入院したという話の事実確認。これらの説明をしてもらおうか」

威圧のつもりだろうか。目を細め、目尻を吊り上げ、最後の言葉には攻撃的に語調を強めた。しかし、肥えているのは腹だけでなく、雰囲気にも影響しているようで、迫力も威圧感も欠片も感じない。

威圧感なら、病で弱っているはずのプレシアの方が圧倒的に強かった。欲に溺れた転生者の凶剣の方が恐ろしかった。

虎の威を借る狐は、結局は弱い狐のままだ。

(その気になれば、今ここで潰すこともできそうだがな……)

だが即興は難しいし、軽はずみな行動で俺や海斗達に何かされる訳にはいかない。

予定を変化させることなく、脳内のシナリオを再生させる。

「……そうですね。長つたらしい説明は苦手ですし、そちらも好かないでしょうから、簡潔的にいかせてもらいます。……俺達は、アルハザードへ行き、その技術によつて脱

出しました。アリシアは元故人であるプレシアの娘で、これもアルハザードの技術で蘇生させたものです」

「……ほう？」

隠すことなくさらけ出した言葉に、コード少将は予想通り食いついた。特に『アルハザードの技術』という言葉に反応していたのは、ハイエナの証明と行ったところか。

「アルハザードは実在していると、君はそう言いたいのだな？」

「ええ。俺達が虚数空間から抜け出したこと、そして故人であったアリシアが生き返っていること。この事実が何よりの証拠です」

「では、そこに存在する多数の技術も、見てきているんだな？」

「いえ、一つも見えてません」

「……なんだと？」

少し上機嫌だったコード少将の雰囲気はまだ攻撃的なものになる。

しかしさつきと同じく威圧感の欠片もないそれを無視し、俺は言葉を続けた。

「厳密に言えば、俺達は技術の『結果』を見てきました。しかし『結果』だけでは技術そのものを見てきたとは言えません。俺達は、技術構造については何一つ見ていません」「なぜ見て来なかったのだ？ あそこには素晴らしい技術の数々が存在すると言われているのに」

「まず、装置の動力が落ちていて起動すらままならない状態でした。それ自体は後に解決するのですが、アルハザードの言語を俺達は知らないというもう一つの根本的な問題がありました。幸い、プレシア女史は言語を知っていたのですが、逆を言えばプレシア女史に従う他はない状況……なので装置の運用もプレシアの指示の通りに動くしかなかったので、技術解析についてはからきしでした」

「なんと愚かなことを。アルハザードの技術を手にして帰って来れば、恩賞を手に入れることができたというのに」

「脱出が最優先事項でしたし、アルハザードの存在を知ったのがプレシア事件当日でしたし、それを抜きにしたとしてもそちらにとつての価値とかは知らないのです」

ドライな回答で返す。キレられるかなとは思ったけど、ぶっちゃけとうでもよかったです。大したことないだろうし、リンデイさんがいるところであまり軽々しく動けないだろうし。

予想通り、コード少将は苛立ってこそいたが視界に入っているだろうリンデイさんの姿を見たのか怒鳴るようなことはしなかった。

「役立たずが……フンツ。では少なくとも、その『結果』だけでも見せてもらおうぞ」

「役立たず」という言葉は、ここからなんとか聞き取れた。おそらくリンデイさんには聞き取れなかっただろう。

「『結果』なら、ここに三人いますが」

求めている『結果』が俺達ではないと知りながらも、わざとそう言ってみせる。

「アリシア・テストアロツサのことだ！ ミッドの病院からここに移されたという調べは  
ついている！ 案内しろ！」

やはりというか予想通りというか、堪えきれなくなつてコード少将がキレて口調を荒  
げた。

多少ふざけた回答をしたらキレると思つたが、ここまで予想通りだとんだか必要な  
ことなのに可哀想になつてくる。いつだか転生前に海斗が言つてたが、パターンに敵を  
嵌めると敵が可哀想に見えてくるのか。こういうことなんだろうか。

やれやれと思いつつ、その感情はある程度抑えて立ち上がる。

「わかりました……ただ、その『結果』に価値がなかったとしても、俺は責任を負いませ  
んよ？」

「知つたことか。早くしろ！」

……言つたな？



コード少将の要求通り、俺はアリシアがいる部屋へ案内する。俺が先頭であり、コード少将と秘書がその次、あとは海斗、才、リンディさんといったところだ。

案内の途中、リンディさんから念話が送られてきた。

『ねえ、綾さん？』

『なんです？』

『どこへ向かおうとしているの？ アリシアちゃんの部屋はもうすぎてるわよ？』

リンディさんの言う通り、いつも俺が通っている場所はすでに通過していた。だがこれも策だ。

『ちゃんと考えがあつてのことです。リンディさんも、俺の話に合わせてください。まあ何も言わなくて結構ですので』

『コード少将を怒らせたりとか、もう嫌な予感ばかりなんだけど……』

はあ、と念話で溜め息をつかれた。器用なことだ。

……と、そういう言ってる内についたようだ。

「……着きました。こちらの窓ガラスからどうぞ」

俺の指示で、コード少将とその秘書だけでなく、シナリオを聞かされていない海斗や才、リンディさんも窓ガラスの方を見た。

そこ——アースラでもほとんど使われないという集中治療室の中に、アリシ

アの姿があった。ベッドで眠る彼女の顔には呼吸機器が取り付けられ、点滴、あとはベッドの周りを何種類もの医療器具が取り囲んでいる。部屋の傍らで、医務員が一人アリシアの様子を見ている。

「これが、あなたが求めていた『結果』です。コード少将」

さて、これまでは嘘をほとんど使わずに進めてきたが、ここからは大嘘、ガセ、ハツタリの時間だ。

「アルハザードの技術によって心肺機能が蘇生されたアリシアですが、蘇生されてから今日まで一切目を覚ましていません。それどころか日に日に様態は悪化の一途を辿り、もうあと数日の命という話です。これはいくらアルハザードと言えども完璧という訳ではなく、蘇生も所詮は心臓を一時的に動かせる程度のものであるということでしょう」

「むう……」

唸るコード少将にさらに追い討ち。

「ついでに言っておきますが、アルハザードへの渡航はもう不可能でしょう」

「……なぜだ。理由を言ってみろ」

「ジュエルシードには二十一個全て順番にシリアルナンバーが刻印されているのをご存知ですか？ 存じ上げなくとも、そういう構造なんです。では、なぜシリアルナンバー



がついているか、そこまで考えたことはありませんでしようか？」

「知らん。早く言えっ」

「あくまで推測ですが、二十一個存在することに意味がある、すなわち、二十一個揃って初めて安定発動する可能性がある、ということではないでしょうか。事実、二十一個のジュエルシードと虚数空間へ落ちて、アルハザードに辿り着いたのですからその可能性があります」

「……だが、我々管理局が回収したジュエルシードは十八個だぞ。残り三つはどうした」  
「前に言った通り、アルハザードの装置の動力は落ちていたので、そこで動力源としてジュエルシードを使用し、それで三つ置き去りになってしまいました。つまりジュエルシードはもう二十一個揃うことはない。後は別の渡航手段を手にするしかないでしょうが、危険な上考えつきませんし、俺はそのような危ない船には乗りませんよ？」

コード少将がこちらを見た。さつきよりも苛立った様子で、どうやら俺の最後の言葉が刃向かうような態度として頭に來たらしい。

「……貴様、管理外世界の余所者ごときが、私に意見するのかね」

「俺はあなたに従って『結果』を述べているまでです。それにあなたは俺の見せる『結果』が例え使えないもののだとしても俺は責任を負わないという言葉に了承したじゃありませんか」

「そんな話、了承した覚えはない！」

「……機械は嘘をつきません」

言つて、俺が懐から取り出したのは一つの録音テープ。ボタンを押し、再生する。

『わかりました……ただ、その『結果』に価値がなかったとしても、俺は責任を負いませんよ？』

『知ったことか。早くしろ！』

カチツ。

テープを止め、山なりに投げる。落下地点にいたリンディさんは少し驚いた様子だったが難なくキャッチ。

コード少将は今の音声を聞いて、ワナワナと拳を震わせていた。

「貴様……私を脅すつもりか！」

「正当防衛以上のことはしませんよ。これだけでは流しても意味はありません。俺の潔白を証明するだけの物……あなたは俺の注意事項に了承して話を聞いた。それだけです。脅す要素がどこにあるというのですか」

しばらくの沈黙が流れる……俺は先にそれを破った。

「俺の話せることは以上です。これ以上の説明を求められても、俺は説明できないことは説明のしようがありません」

「……フンッ」

コード少将は鼻を鳴らし、そっぽを向いた。

「つまり君は、アルハザードに行ったのにも関わらず役に立つものを持ち出すことはしなかった。それどころか犯罪者に手を貸した。そう報告しても構わないと、そう言いたいのだな」

「事実に変わりはありません。まあそれも含めて、執行猶予付きでこうして生活してますし」

「……チツ。……もういい。これで話は終わりだ」

全く、余所者の罪人まがいの癖に偉そうにしておつて。全くです。……という会話をしながらコード少将と秘書は去って行った。

二人の声が聞こえなくなつて、さらにそれから数秒経つてから、俺は窓ガラスを軽く叩いた。

音に気づいた医務員が部屋から出てくる。

「終わりました？」

「ええ。ご協力ありがとうございます」

「いえいえ」

では片付けますね。と医務員が言って治療室に入ると、アリシアの周囲を囲む医療機

器を片付け始めた。

嘘のデータを表示していた心電図、実際は打っていない点滴、その他置いているだけの医療機器。

身体がうまく動かないだけのアリシアも、医務員に抱えられ元の医務室へと戻ってゆく。

「……これ、全部あなたの計画？」

「ええ。変に誤魔化すよりは、使えないということ进行全面的に押し出してしまえば追求されることもないと思ひまして」

溜め息をつかれた。

「あなたね……報復されるかもしれないのよ？」

「それから身を守るためのそれですよ」

「実力行使で来た時にもそれが言えるの？」

「税金を食い散らかすハイエナに負けるつもりはありませんよ」

また溜め息をつかれた。本日三度目。

「……で、もう一つ訊きたいんだけど」

「何でしょう」

「アリシアちゃんの命、残り数日って言ったじゃない。嘘だとバレたらどうするの？」

「ええ。俺もあんなこと言ってようやくそのことに気づきました。なのでアリシアを地球に逃がすことはできませんかね?」

ちなみに嘘ではない。本当にうっかりだった。

「……あなた、アリシアちゃんはあなたをすごく頼りにしてるってこと、わかってるわよね?」

「はい……」

リンデイさんの笑顔がなんか怖い。ある意味本当の敵はリンデイさんらしい。

「そしてあなたは今、プレシア事件での行動の処罰としてここにいるというのは?」  
「わかっております……」

沈黙が流れる。刺すような視線が痛い……。

「わかりました。あなたとアリシアちゃんを地球へ送ります」

「え? 本当ですか?」

ただし、と素晴らしく怖い笑顔でリンデイさんは続ける。

「執行猶予期間中であるということは忘れずに。魔法の無断行使はいけませんよ? アリシアちゃんに様子を報告してもらうので、デバイスはアリシアちゃんに持たせてくださいね?」

「はい……」

やっぱり、自由に動くのはしばらく先になりそうだ……。

「じゃあ準備をして。私は医務員に話を通しておくから」

「あれ？ 俺は？」

そう疑問を投げかけたのは海斗だった。海斗はつて、そりや……。

リンデイさんは俺に向けていた素晴らしい笑顔を海斗に向けた。ああ、海斗がたじろいでいる。

「あなたはこのままでも問題ないでしょう？ 引き続き雑用仕事、お願いね？」

「えっ、ちよっ、お前ずるくね!？」

「すまん。諦めて自由になる日を待ってくれ」

「おいしいいいいっ!？」

いつの間にか才の姿はなくなっていた。くだらなくなっただんたろうな、多分。

## 第二十四話

「到着っ」

『わー』

光から解放されて、俺が立っている場所は桜台の一角だった。

昨日コード少将との対話をして、追求が来る前にアリシアを海鳴市に連れてきた訳だが。

アリシアは俺に背負われている。車椅子を使いたいところだが、ミッド技術の車椅子は先を行っていて逆に使えなかった。

だって、デバイスの技術を取り入れて魔力操作でヌルヌル動くんだぜ？ この世界で使えるか。ちなみに魔力がない人用の車椅子なんてのもあるのだが、その場合は魔力↓電力に変わってちよっとコスト面で不便になっただけで動きがハイスペック過ぎることに変わりなかった。というかそんなもん積んでいない普通の車椅子というのはないのか。

まあ、車椅子はリンデイさんが後でここの世界のものを用意してくれるって話だし。少しの間だけ我慢してもらおう。

「さてと……とりあえず家に向かおう。今の時間だったら由衣も竹太刀も出て家にはいないかもしれないけど」

『うん！ しゅっぱーっ！』

今日も念話が元気なアリシアを背負って、道を歩き出す。



「ただいまー……おお、綾！ お帰りやなあー！」

「あ、綾さん！ お帰りなさい！」

「おう、お前もお帰り」

夕方になって、バイト帰りの竹太刀と学校帰りの由衣が一緒に帰ってきた。

そして竹太刀はすぐにソファでテレビ番組を見ているアリシアに気づいた。

「ん、その子は……」

「ああ。アリシア、紹介するよ。一緒に同居している、坂本竹太刀と藤木由衣だ」

「坂本竹太刀や。よろしゅうな、アリシアちゃん」

「藤木由衣です。その、よろしくね」

『お世話になります！ 竹太刀さん、由衣ちゃん』



仲良くやっていけそうで何よりだ。

特に、由衣には色々頼んでいきたいからな。

「由衣、同じ女の子として、家にいる時にはいくらかアリシアの世話を頼んでもいいか？」

「あ、はい！」

「ん、ありがとな」

「わいもなんかやつたるか？」

「ああ。必要に応じて頼むわ」

「了解やー」

『あと、俺が指示の紙で頼んでおいたものは？』

アリシアがいるため、念話に切り替えて竹太刀に尋ねる。

『んー？ 花火はまだ売つとらんかったけど、それ以外ならだいたい揃えたで。でも一部本当に意味あんのか疑問なんやけど』

『ただの戦闘で俺達が勝てる訳がないだろ。勝てる勝負でやり合うのが必要なんだよ』  
『それはわかつとるけどな。後、2番のあれってホンマにありなんかなあ？』

『やるだけタダだ。やったところで不審がられないようにシナリオも書いていただろ？』

『そーなんやけどなー』

『狙いの時期は九月上旬。練習やつとけよ』

『そーいや、綾はどないすんねん？ この世界に来れたのやし、なんか……てか手伝わへんの？』

『まあ付き添いぐらいは考えてやる。他にも当然やるさ』

狙うは、守護騎士完全制覇だ。



数日後の休日。車椅子も手に入れて、アリシアに海鳴市の案内をすることにした。

アリシアを乗せた車椅子を押しながら、所々解説。アリシアが気になった場所があれば、その場所まで行ってやる。

「あれ、綾さん？」

「ん？」

声をかけられたので振り返ると、なのは、由衣、アリサ、すずかの四人がいた。

「ああ……お前らか」

「こんにちは……って、あれ？ その子……」

アリサがさっそくアリシアに気づいた。すずかもアリシアに気づく。

「あれ……フェイト?」

「残念ハズレ」

「え?」

「アリシアっていうの。フェイトちゃんのお姉さんだよ、アリサちゃん」

「あれ? 由衣ちゃん、知ってるの?」

「一緒に住んでるからな」

俺がそう言ったら、アリサとすずかが驚いた。

「ええ? なんで!」

「まあ、色々あるんだよ。アリシアはちよつと訳ありで今は身体が動かないんだが、リハビリで治るまでの世話役になった訳だ」

「え、でも、フェイトちゃんは……?」

「だから色々あるものなんだよ」

「色々って何よ」

そう言われても。

俺的にはバラしちまっても一向に構わないのだが、なのはは隠しておきたいんだろうし……という訳で、二人の後ろで苦笑いしているのはアイコンタクト。なんとかし

てくれ。

「え、えつと……アリサちゃん、すずかちゃん、きつとそつちにも色々あるんだよ。色々！」

おい、援護になつてないぞ。アリサがジト目になつてる。

「色々つてね……そもそも、なのはもこの子のこと何も言つてなかつたじゃない。由衣も全く話してこなかつたし」

「あう……」

「あはは……そ、そろそろ自己紹介はしようよ、三人とも」

「あ、そうだね。じゃあ私から……」

由衣の言葉でようやく言及は止まり、三人が自己紹介をすることに。

「はじめまして。月村すずかです」

「……うー……あ……」

「……うん。よろしくね」

口もまともに動かせないアリシアにすずかは同情などはせず、につこりと微笑んでアリシアの頭を撫でた。いい子だよなあ……。

「次は私ね。アリサ・バニングスよ。よろしくね」

「じゃあ最後は私！ 高町なのはです。フェイトちゃんとは友達なの！」

「あーっ、なのはだけズルいわよ!」

「ズルいって訳じゃないとは思うけど……でも、私達だつてフェイトちゃんと友達にはなりたいよ?」

「ふええ!?! 私に言うの!?!」

残り二人はちよつと違う……か?

『ねえ、綾さん』

『ん? なんだ?』

『私も……みんなと友達になりたいなあ……』

『あの子らは優しいからな。もう友達と思ってくれてるだろうけどな。……それでも不安なら、リハビリして自由に喋れるようになったら、その時に自分から友達になりたいって言ったらいいと思うぞ』

『……うん、頑張る』

『おう、頑張ろうな』

アリシアの頭を撫でる。

しばらく言い合っていた四人だったが、途中でアリサが「そういえば」とこちらを向いた。

「綾さん、アリシアを連れて何をしてたんですか?」

「ああ、アリシアにこの街の案内をしてたんだ。それが、何か？」

「じゃあ、私達も案内やっつていいですか？　アリシアに色々教えてあげたいんです！」

「わあ、賛成！」

「私も！」

「いい考えだな。じゃ、そうするか」

『な？　優しいだろ？』

『……うん！』

「さて、まず最初にあんないする場所は……」

アリサが先導して各所色々教えたり、さすがが車椅子を押してくれたり、なのはが話をしてくれたり。

その間、アリシアのとても楽しそうで、嬉しそうな声ばかりが続いた。

## 第二十五話

時は流れ、九月。

由衣は学校、竹太刀はバイト、俺はアリシアの介護とそれぞれの役割を果たして生活をしつつ、指令を攻略するために少しずつ動いていた。

まず、七月辺りに打ち上げ花火を購入。そのままでも連絡や合図に使える他、分解して火薬を入手、容器に入れて簡易性の爆弾を作るといった工作もした。

あと、八神家の動向の観察。これでもできるだけさり気なく行うようにし、他にも氷室や由樹のチームと互いの情報提供を条件に協力関係を築いて観察してきた。

そして、九月ももう下旬。ついに、動く時がきた。



海鳴市のとある公園では、老人会の人達でゲートボールが行われていた。

老人達の中で一人、ステイックを手にしている少女がいた。赤い髪をお下げにしている少女——守護騎士ヴォルケンリッターの一人、ヴィータである。

主である八神はやてを救うために禁じられていた蒐集活動を始め、その出かける理由として目をつけた訳なのだが、今では老人達の人気者であり、ヴィータ自身趣味として楽しんでゐる。

コンツとスティックでボールを打つ。

「よっしやあ！ あたしの勝ちだ！」

「ヴィータちゃんはどうまいねえ」

「へへっ！」

嬉しそうに鼻を擦るヴィータ。

そこに、二つの人影がやってきた。

「あの一、すんません」

「ん？」

ヴィータが声の方に振り向くと、そこにいたのは茶色の天然パーマの少年と黒髪で丸眼鏡をかけた少女——竹太刀と由衣であつた。竹太刀の格好は至つて普通だが、由衣は黒いハットを被つていて、恥ずかしそうにそれで目元を隠している。

「はい、なんででしょうか？」

「あの、この子が学芸会の出し物の一つで手品をするんですけど、よかつたらお客さんになつてくれませんか？ 見るだけでもええですのぞ」



「ほー、手品ですかあ」

「手品？」

はやてを主として三ヶ月。しかしこの世界の文化を知らない部分が多いヴィータは首を傾げた。

「そうだねえ、ちようど一区切りついたし、見させてもらおうかねえ」

「ありがとうございます！ほんなら、今準備しますんで」

了承の言葉を聞いて頭を下げた竹太刀は、由衣と共に準備のため駆け出した。

ヴィータは気になったので尋ねることにした。

「なあじーちゃん、手品ってなんだ？」

「まー、見ればわかるよ」

そう言われたので、とりあえず見てみることにした。

事前にある程度の準備はしていたらしく、僅か一、二分で準備を仕上げ、いよいよその手品が始まった。

手品を披露する由衣は緊張した面持ちで、折り畳み式の机におかれたトランプの箱を手取る。

「えつと……ここ、ここにトランプがあります。普通のトランプです」

箱からトランプのカードを取り出し、中身を客であるヴィータや老人達に見せる。

ヴィータもトランプは家で遊んだことがあったから知っており、うんうんと頷く。

「じゃあ、これをシャツフルします」

言うのと由衣はそのトランプをシャツフルし始めた。それなりに手際良く、数回シャツフルが行われる。

次に由衣はシャツフルされたトランプを二つに分けた。

「えっと、それでは……そこあなた」

由衣はヴィータに向かって言った。

「へ、あたしか？」

「は、はい。その、どちらかのカードを引いてくれますか？ 私には見えないように」

「おう、いいぞ」

ヴィータは右側のカードを引いた。カードは、ダイヤの9。

「お、覚えましたら、引いた場所に戻してください」

言われて、ヴィータはカードを元の位置に戻す。

「じゃあ、これをまたシャツフルしますね……」

そう言っただけで由衣は二つの山札を合わせてシャツフルを始めた。シャツフルだけでなく、時折カットも混ぜ、何度も行う。

そして何度目かのシャツフルを終え、ここで由衣はトランプを机の上に置いた。

「あなたの引いたカードは何ですか？」

「え？ ダイヤの9だけど」

「そうですか。では、一番上のカードを引いてください」

まさか、と思いつつ、ヴィータはカードを引いた。

ヴィータが引いたのは、先程と同じダイヤの9のそれだった。

「おお!! すげえ！」

「あつと、そうだ……その一枚だけでは寂しそうなので、お仲間も連れてきましたよ！」

「おおお!!」

ヴィータはさらに驚いた。由衣が三枚引くと、引いたカードはスペード、ハート、クラブそれぞれの9だったのだから。

「お前、どんな魔法使ったんだ!？」

「はっはっは。これが手品じやよヴィータちゃん」

「大成功やなあ、由衣ちゃん」

ヴィータ達と共に客席で見守っていた竹太刀は立ち上がり、ヴィータの元へ近づいた。

「お嬢ちゃん。よかったら、これからこの子とトランプを使ったゲームに付き合ってくださいへんか？」

「ゲーム？」

「オリジナルのもんでな。『トランプ足し算』っちゅーのや」

竹太刀は机の方へと移動し、由衣と解説を始めた。

「ルールは簡単や。互いにそれぞれのトランプの山をシャッフルして、二枚引く。ほんで、その二枚の合計が高かった方の勝ち。Aは1として扱う」

解説をしながら、竹太刀はもう一つのトランプを取り出してそのゲームを始める。

互いに自分の山札をシャッフルし、二枚捲る。竹太刀が引いたのはスペードの5とダイヤの2。由衣はダイヤのJとクラブの3。点数は7体14で、今回の場合は由衣の勝ちである。

「……とまあ、こんな感じかな。どやろ？」

「へー……いいぞ。やるー！」

「おおきになあ」

竹太刀は礼を言つて由衣の後ろについた。ヴィータは竹太刀が立っていた位置に移動し、置かれていたトランプを手に取る。

（へへっ！ ジャンケンでは負けなしのあたしの實力を見せてやる！）

ジャンケンとトランプは違うが、運勝負という点は同じだ。ヴィータは何気にジャンケンには強いのである。その運が味方すれば勝てると、そう思っていた。

(来いっ！)

念入りにシャツフルし、二枚一気に捲る。

引いたカードは、ダイヤの8とスペードのQだった。合計点は20となる。

「よっしや！ どうだ！」

「じゃあ、次は私ですね……」

高得点に喜ぶヴィータに対し、由衣は自分を落ち着かせながらシャツフルを始めた。別に先攻後攻があるゲームではないのだが、由衣が見入るほどにヴィータが気合いを入れていたのだろう。

数回シャツフル、最後に一回カットを行って、二枚引く。

引いたカードは、スペードのJとクラブのQだった。合計して23点。

「私の勝ち……ですね」

「うぐ……！」

ヴィータは一瞬言葉に詰まった後、すぐに机に身を乗り出した。

「もう一回！ もう一回勝負だ！」

「ふええっ!?!」

「ははは、ほんなら、三回勝負にしよか」

竹太刀の提案によって、もう二回勝負を行った。

結果は二対二と結局ヴィータは由衣に勝てず、今度は絶対に勝つと言ってヴィータは帰っていった。



手品ショーが終わってヴィータが帰っていった後……。

差出人：管理者

件名：攻略通知

内容：ヴィータとの勝負での勝利を確認した。このメールをその証明とする。

なお、あなたがチームに所属している場合にはチーム全員がこの証明を共有できる。

「本当に……ありだったんですね」

「練習した甲斐があったやろ？」

「そうですね……実感が湧きづらいというか……」

自分の携帯に届いたメールを読んで、由衣は少し微妙そうな顔をした。

綾が考案した、ヴィータに勝利する作戦とは、あの『トランプ足し算』で勝利するこ

とだった。勿論、ただ勝負をしては勝率は五分であるため、必勝法……イカサマをしたのだが。

ちなみにイカサマは、カードを削って凹凸をつけ、指で認識できるようにするタイプのガンカードだ。イカサマだとバレないようJとKのカードに加工を施し、三回勝負になった時は敢えて一回普通に引いた。ちなみに手品のタネもこれであり、混同しないように竹太刀がルールを説明する前にトランプをすり替えている。

「ん？ メールに続きがあるみたいやな」

「え？ あ、本当ですな」

竹太刀が気づき、指摘を受けた由衣が携帯を操作する。メールの続きには、このようなことが書かれていた。

なお、戦闘以外による勝負を行った場合、勝敗に関わらず以後は同様もしくは類似の手段による勝利はチーム全員が無効となる。

「せやろな」

「ですよね」

二人揃って頷いた。もし仮に同じ手段がありだとしたら、ザファイラ以外全員を狩る

ことが可能になってしまう。ザフィーラは基本狼なので勝負を仕掛けることが不可能。まあ、シグナムの場合もイカサマがバレて駄目かもしれないが。

「でも、類似ってことは、どのくらい駄目になっちゃうんでしょう？」

「捲り勝負全般やろなあ。ポーカーとかそういう引きがモノを言つて、イカサマで勝てる奴は軒並み無効にされるやろ……まあ、このことは後で綾に教えたる。ほな、帰るか」  
「はいー！」

演技に使った道具を片付け、密かに勝利した二人は帰路へと降り立った。

チーム反逆者、ヴィータに勝利。

攻略者、藤木由衣。



## 第二十六話

「ヴィータ攻略おめでとさん。反逆者のリーダー」

「別に。俺が勝った訳じゃないぞ」

媚びへつらうような態度を少々鬱陶しく感じながらも、取り合えずは事実で言い返して先に進む。

今日、俺はある場所へと向かっていたのだが、偶然出会った氷室とこうして歩きながら会話をしている。

「つつても、お前も攻略した扱いにはなっているんだしよ。何より作戦考えたのはお前じゃないか」

「まあ、な」

「ところで、どこ向かってんだ？」

「大体はお前もわかってんだろ。シグナムに勝負できる可能性がある場所」

「やっぱり、あそこか。一応言っとくが、やめた方がいいぜ？」

「理由は」

「俺もリサーチしに行ったんだが、お前と同じく『シグナムと勝負できる』って理由で何

人もその門をくぐって、その全員が手を出す前に惨敗したって調べがついてんだぜ？」  
「だろ。シグナムなら手を抜くことはないだろうし」

「挙げ句の果てには最近、そういう奴ばかり押し寄せては負けてもう来なくなる奴ばかりだからシグナム自身かなりイラついてるらしいぜ？」

「今までの相手全員が根性なしだとしたら十分ありえるな。というかそれはどこで仕入れた」

「頭の回るガキ」

「どっちだ。一応二人いるぞ」

「由樹の方だ。つーか才のアドレスなんて持ってねえし、そもそもあいつはアースラだろうがよ。あいつにはガキ呼ばわりもしない」

だよな。俺も絶対にしらない。

「それで？ シグナムからしたら俺もボロクソに負けてもう来なくなる根性なしと見られると？」

「お前、剣道やったことがあんのかよ？」

「ある。大分昔で、もう錆だらけかもしれないけど」

「そんなんで勝てるのか」

知るか。

話の途中にもう出たが、俺が向かっている場所はやはり剣道場である。非常勤講師をしているシグナムが今日そこにいると聞いて、向かっているといるところだ。

けれど話を聞く限りでは相当ヤバイことになってるみたいだな……戦闘以外の勝負もありだと気づいている奴がそこそこいることを喜ぶべきか。

と、話し合っている家に道場の門前に到着した。

「そうこうしてる内に、着いちまったぞ」

「ああ、着いたな。剣道体験や防具貸し出しをやってくれるらしい」

「俺も一応ついてくが、どうなつても知らねえぞ。剣道つて防具着けてるとは言え、怪我することも十分ありえるんだからな」

「一切怪我のないスポーツの方が珍しいさ。行くぞ」

俺達は門をくぐった。



剣道の体験として手続きを取り、道場内を見学。

一通り見学していった後、防具を借りて体験させてもらうことになった。氷室も一応防具を着込んでいる。渋っていたが、俺が説得した。

「で？」

稽古の途中、氷室が話しかけてきた。

「何が」

「調子だよ。どうなんだ？」

「六年ぶりかな。久々に着て重い。あと視界が悪い」

「そっからかよ……」

……さて、挑戦前にこれだけは確認しないと。

「氷室、ちよつと胸当てで脱いで吊すように持ってくれ」

「あん？ いいけどよ……」

一旦稽古を中断し、氷室は俺の言うとおりに胸当てを腕に吊す形で持った。

「で？ どうすんだよ」

「……………」

俺は胸当ての正面に立った。

そして右足を引き、重心を落とし、肩と同じ高さで水平になるように持った竹刀を先端を胸当てに向けて引く。

その態勢で、俺は身体を固めた。

「平突き、か？」

「……………」

氷室の呟きには答えず、とにかく己の集中力を高める。

……一呼吸。

「——だああつ!!」

バシッツ!!

声とともに勢い良く突き出された竹刀の先端が、胸当てを捕らえて乾いた音色を打ち出した。

胸当てでは氷室の腕を中心に弧を描き、それから重力に従って元の位置へ戻る。突き出してそのままだった竹刀の先端に当たり、振動が腕に伝わった。

「……………おい、今の突きは、なんだ」

俺が突きを繰り出してから十数秒後、ポカンと口を開けていた氷室がようやく言葉を発した。

「誰から教わったんだ?」

「……………教わった、というより、一緒に作り上げた我流だ。六年前に知り合った人とこの突きの技術を磨いていたんだよ」

「あのドベとか?」

「違う。海斗と知り合ったのは高一の頃だ」

『あいつ』は……元の世界で元気になっているんだろうか。……いや、今はよそう。考えるべきなのは勝負のことだ。

長年やってなかった分、筋がかなり荒くなっているが、使えなくはない。

……よし、準備運動もこんなもんか。

「……勝負、やるか」



試合の体験をさせてもらうことにした。というか、お願いした。

それでシグナムを相手をお願いすると、案内人は「最近シグナムさん人気者だなあ」とぼやいていた。

シグナムは最近自分への指名が多いのか一瞬だけ苛立った様子だったが、すぐに平然とした表情に戻して申し込みを受け入れてくれた。

試合場に入り、二歩進んで礼、三歩進んで蹲踞。

「始め！」

審判員のその声で、立ち上がる。そしてすぐ俺は平突きを構えを取った。

(試合は一本勝負……これにかける他はない……)

あくまで体験だからということ。一本勝負となったのだが、俺にとつては有り難かった。一本取られれば終わりになってしまいが、俺には三本勝負でシグナムから二本取れるとは思えない。良くて最初の一本だ。

開始早々平突き構えを取るの、元から防御なんて考えていないから。錆びた腕で剣に長けたシグナムの太刀筋を防ぎきることは絶対不可能だ。

(そもそも、『あいつ』は防御なんて一切考えてなかったからな……)

『あなたの攻撃なら、防ぐ必要ありませんわ』

脳裏に、『あいつ』の言葉が蘇る。

『攻撃は最大の防御という言葉がありますが、それ以前に『相手に何もさせずに』倒す。これがわたくし流ですの!』

……ああ、そうだったな。結局はお前には一度も勝つことはできなかったな。竹刀を握る手に力を込める。いつでも踏み込めるよう、足に力を溜める。

シグナムは中段の構えのまま、まだ来ない。普通とは違う俺の構え方に出方を伺って

いるらしい。俺にとつては好都合だ。

『彼女』が言った言葉を……思い出す。

『いいこと？ 突きというのは斬撃の中でも最も相手への到達に必要な距離が短い攻撃ですの』

……ああ、そうだ。そして、

『そしてその最短距離を、最速最強の力で貫く。それが、わたくし流刺突術ですの！ 極めれば敵などいませんわ！』

……そう、なんだな。でも、当時の俺は「敵なしなんて言葉を使う流派はどこにでもあるだろ」なんて言って、

『う、うるさい！ 文句があるなら、わたくしに勝ってみせてから言いなさい！』

そう怒られたものだ。

それから一緒に研究したりして俺は『彼女』と我流剣術を作っていったんだよ……。……つと、思い出はまた今度だな)

思考を試合に戻し、相手を見据える。

防御に回って勝ち目はない……勝つとしたら、相手の攻撃が入るより早くこちらが決める他はない……！

(初撃で勝つつもりで……行くぞ！)



摺り足で踏み込みまでの距離を調節後、ダンツ！ と一気に踏み込む。

右足で踏み込むと同時に突き出した竹刀が、シグナムへと迫る。

バシンツ！！

しかし鳴り響いた音は、竹刀同士のぶつかり合う音。

シグナムの袈裟切りによって、竹刀の軌道は右下へと叩き落とされてしまった。

それだけじゃない。

(……………!!)

手首を返し、迎撃から反撃に移ろうとしているのが見えた。

(右切り上げによる籠手打ち……………！ ……なら！)

「……………でああっ!!」

力一杯に腕を上げ、竹刀をかち上げる。

追撃……………はせず、すぐに間合いを取る。無駄に上げ過ぎた。攻撃しても防がれたか、

最悪先に打たれる。

間合いを取った俺は、再び平突き of 構えを取った。

呆気なく防がれてしまったが、他が有効だとは思えない。やるべきなのは、突これき一つ

だけだ。

(もつと速く……………もつと強く！)

ダンッ!!

先程以上の力で踏み込み、突きを繰り出す。

バシンッ!! という音と共に、また同じく竹刀が叩き落とされる……だが!

(引かない! 前へ!!)

さらに左足で相手の右側へと踏み込む。ぶつかるギリギリの距離。面越しに、シグナムの顔に驚きが見えた気がした。

踏み込んだ左足を軸に半回転。反撃時に逃げられないよう詰めるつもりだったらしいシグナムは前に出掛かっけていて、俺はやや斜め後ろを取った形になった。

(取った! 入る!)

上段に構えていた竹刀を振り下ろす!

「っ……おおおおっ!!」

その時、シグナムが叫びを上げた。

驚異的なスピードで、右薙ぎの一閃が俺の面へと迫る——。  
パアアンッ!!

竹刀の乾いた音が、室内に響き渡った。



「ど、どっちだ……!?!」

氷室は試合の様子を見ていた。座って観戦していたのだが、思わず立ち上がっていた。

「ど、同時……?」

「おい、どっちが先に入った?」

「俺にわかる訳ないだろ……」

氷室の周りからそんな囁き声が聞こえた。

綾や氷室の他にも、何人か転生者がやってきてこうして観戦していたのだが、大したレベルではない彼らには判断がつかなかった……いや、そこその経験者でも判断が難しいものだった。そう思わせる程に、二人の攻撃が入ったのが一緒のタイミングであった。

審判員が、手を上げる。

「一本! シグナムの勝利!」

それが、結果だった。

打ち込んでから微動だにしなかった二人が、その言葉を聞いてやっと時を取り戻したように動き出した。

互いに礼をして、氷室の元に綾が戻る。

「負けちまったな。惜しかったんだが、な」

氷室が慰めの言葉を発した。いつもは卑屈な言葉である彼がそういう言葉を発するとは、それほど見入っていたということだろう。

綾は静かに面を外した。ふう、と息をして、一言ぼやくように言った。

「ああ。負けちまったよ」

神から敗北の、そして剣道での勝負が有効にならないという旨のメールが届いたのは、道場を出てからだった。



帰宅したシグナムは今日の対戦相手——綾のことを考えていた。

(なかなか腕の立つ奴だったな。あの突きや、特に最後の動きはさすがだった)

判定で自分の方が早かったとは言え、本当に危なかった。振るうのがもう一瞬でも遅かったら、結果は変わっていただろう。

それに、終盤で面越しに見えた彼の目……必勝に全てを捧ぐその目は、最近迫ってきたどの対戦相手よりも強く輝いていた。

(朝霧綾、か……)

去っていく前に聞いた名前を思い出す。

あの後、彼はあの実力が認められてか講師から強く勧誘されていたのだが、忙しいと  
のことで断った。シグナムは道場を去っていこうとする彼を呼び止め、互いに改めて自  
己紹介をしあつた。

再会の可能性は、低いかもしれない。

だがもう一度、闇の書が完成して八神家に平穏が訪れた後にでも、また試合をしてみ  
たいものだというのが、シグナムの正直な気持ちであつた。

「……ふふ」

「ん？ 何やシグナム、今日何かええことでもあつたん？」

「主はやて……ええ、まあ」

「今日は道場に行つてたのよね。だとしたら、いい相手がいたのかしら？」

「戦いに燃えるのはいいけど、本気出しすぎて相手の心まで叩きのめすなよ。相手いな  
くなんぞで」

だが、次の対戦は闇の書完成の『後』ではなく『前』に、本気でやりあうことになる  
ということ、シグナムは知らなかつた。

## 第二十七話

『結局、ヴィータとシヤマルを攻略つてとこで原作メインに突入かあ』

食事中、突拍子もなく竹太刀がそう念話をしてきた。

十二月に入り、季節は冬。確かに原作A'sの激闘が始まる頃である。

『こつからどないすんのや？ 原作に突入したら守護騎士とのエンカウント率がかなり

下がるんとかやう？ シグナムとザッフィーどないすんねん』

『ザッフィーつてなんだ。まあそれもそうなんだが、今話しかけてくん。こつちは忙しいから』

『忙しいて……』

竹太刀は俺の方をジト目で見てきた。なんだ。

『幼女とラブラブしてるここのどこが忙しいねん』

何その言い方。お前事情知ってる上にいつも見てるだろうが。

「アリシア、あーん」

「あーん♪」

『どこが忙しい訊いとるやろが』

『まずさっきの言葉訂正しろ。俺はアリシアにご飯食べさせているだけでラブラブはしてない』

『アリシアは幸せそうなんやけど。そして普通にラブラブやん。で、どこが忙しいねん』  
『由衣に手伝ってもらってる分業になってるとは言え、ほぼ四六時中アリシアのそばで世話役だぞ。忙しい、つかお前もわかりきっているだろ』

『幼女と四六時中……うわあ、変態や』

『ぶつ飛ばすぞ』

念話は混沌としているが表面上はとても平穏だ。

普通に作業しながら、アリシアには内容を聞かれないように竹太刀に念話でツッコむ……俺も成長したもんだ。あまり嬉しいとは思えないが。

『何、冗談や冗談』

『わかつてはいたけどな』

心の中で溜め息をついた。

さて、ここで今日に至るまでの経過を話しておこう。

まずアリシア。リハビリの甲斐あって、ちゃんと声を出し会話をすることが可能になった。

アリサとすずかに「友達になってほしい」と自分から言いたいということが原動力と

なり、アリシアがすごく頑張ったのだ。たまに噛んだりつかえたりすることがあるが、日常の会話に支障がない程にまで上達した。

そして二人への友達宣言は無事に達成した。というか、やっぱり予想通りもう友達として見てたらしい。アリサ談。ちなみになのはについてはそれより前に念話で完了してたりする。

きちんと喋れるようになり顎の筋肉もしっかりとしてきて、食事もスープやお粥状のものから普通の食事に変わった。ハンバーグやカレーライスといったものが食べられてとても嬉しいとのこと。

それと手足についてだが、こちらは進展が遅い。というのも握力もないため手すりや松葉杖を使って立つというリハビリができないことに俺も結構最近になって気づいたからである。なのでまだしばらく車椅子の生活が続きそうだ。現段階では、手や足を上げたまま静止することが少しだけできたり、軽く滑らないものを持つことができるくらい。食事でスプーンやフォークを扱う程細かい動きはまだできないため、練習させつつもこちらで食べさせている。竹太刀がさっきクラブクラブ云々言ってたのはこれだ。

次に指令について。こちらは竹太刀が言った通りシャマルに勝利した。

攻略者は竹太刀になっている。攻略したのは由衣がヴィータに勝った数日後。あの偽学芸会練習を続けていると、ヴィータがはやと、はやての付き添いの形でシャマル



もやってきた。戦闘関係ではなく、ああいった手品のことならヴィータははやてに話を  
 する。そしてヴィータ、はやてともう一人来る可能性があるかもしれないと考えてい  
 て、うまくその通りに動いてくれた。

それで由衣がヴィータやはやての相手をしている間に、竹太刀がシャマルと勝負。

ゲームは、俺も興味があつて読んでた『賭博霸王伝 零』で出てきた『百枚ポーカー』。  
 ただし少しルールを変えてやってみた。

百枚ポーカーオリジナルバージョン

・ジョーカーを抜いたトランプ五十二枚で、十種類の役を作る。

・役の作成に制限時間は設けない。(シャマルへの配慮)

・役を作成し終えた後、互いにそれぞれルーレットを三回回し、出た数字三種類を開  
 示する。

・先攻後攻はコイントスで決め、最初に先攻が三回、次に後攻が三回、後の四回は後  
 攻だった者が先に二回攻撃。

・役同士をぶつけ合った結果、強い役が勝利となり、役において一番大きな数字が得  
 点になる(Aは14点)。終了時の合計得点が高い方が勝利となる。

まあ、要するに買い物タイムというのが排斥されたつてことである。当然だが。

買い物タイムがない代わりにルーレットで三種類開示するルールは、ギャンブル性が

高いとは言え必要だった。これがなければただの運頼みのゲームとなり負ける可能性も十分あり得る。

このルーレット開示のルールで運を見せたこともあつて、百枚ポーカーで竹太刀は勝利を収めることに成功した。

チームで二人に勝利したことによつて、報酬として四個のスターチップが渡された。後はシグナムとザフィーラ、それぞれ勝つごとにチップが配布されるとのことらしいが、二人には勝つどころか勝負すらできていないのが現状だった。

シグナムにトランプゲームを仕掛けても乗つてはくれないだろう。そもそも、怪しきまれずに仕掛ける時期はもう過ぎていく。となると、何か格闘技系のものになるのだが、俺が剣道で負けてしまったためにそれもできない。ザフィーラについては言うまでもなく、狼に勝負なんて普通は無理だ。

だから、全員に勝つには手段はもうあれしかないと考えてはいるんだが……。

『綾、今日がヴィータのなのは襲撃日なんやから、夜は気い付けてな』

『わかつてる。まあ、俺達みたいな低魔力に食い付くことはないだろ』

『せやなー。普通に自分はアリシアちゃんといちゃいちゃしてればええんやー』

また言うか。



冬の夕暮れは早い。外がすっかり暗くなった頃、俺は夕食の準備に取りかかった。

アリシアの食事が変わったのが比較的最近であり、アリシアの希望に合わせて洋食寄りにしていたのだが、そろそろ和食も食べたくなってきた。そこで昼に鯖を買って鯖味噌でも作ろうとしたのだが、ここで問題が起きた。

「味噌、切らしてたんだった……」

すっかり忘れてた。さらには生姜もない。

まずった。洋食寄りの食生活で使う回数がなかったから、どのくらいあったかとか把握してなかった。

「どうすつかなあ……」

もう近いうちにヴィータが結界を張ってくる。ここはなのはの家に近いとも遠いとも言えないため微妙だ。だが仮に入るとしたら家から出る訳にはいかない。だが正直、鯖味噌を諦めたくない。

よし、ここは一つ。

「竹太刀に頼むか」

まだバイトから帰ってきてない竹太刀を使うことにした。この選択肢も竹太刀が一

人になる時間が長くなるため危ないのだが、背に腹は代えられん。もしもの時には救援に行くか、アースラに救援を頼もう。

携帯を取り出し、竹太刀をコールする。

『もしもし。どないしたん?』

「ああ、竹太刀。今日の晩飯鯖味噌にしようと思っただけど、味噌と生姜を忘れてた。買ってきてくれないか?」

『味噌忘れるって……まあええわ。その二つでええんやな? ちようど今から帰るとこ』

やし、買ってきて——』

ブツツ。突然切れた。

「……………え?」

次の瞬間、辺りの風景が色褪せたものに変貌した。

「!!」

「り、綾さん! これって……………!」

由衣が慌てた様子で走り込んできた。

プルルルル。プルルルル。

着信が来た。差出人は竹太刀。すぐに出る。

「もしもし、竹太刀! 無事か!」

『いやー、びつくりしたわー。突然結界に入れられて電話切れてまったから。こっちは無事や』

どうやら無事のようなだ。電話が切れたのは、時間差で結界に入れられたからだろう。つまり、竹太刀の方が結界の発生源に近いことを意味する。

「すぐそっちに向かう！ 竹太刀はどこか建物の中に隠れる！」

『ちよい待ちい！ 自分が行ったら、由衣ちゃんやアリシアちゃんはどうすんねん！』  
「氷室や由樹に頼む！ だから待ってる！」

『あんなあ！ あいつら自分にはようしてくれとるけど！ あんま借り作りすぎたらアカン——』

ブツツ。切った。自分から。

すぐにまずは氷室に電話をかけてみる。

……………繋がった！

「もしもし、氷室！ 今どこにいる!？」

『よう、綾。繋がってるってことは、お前も結界に入れられてるみてえだな。チームで連合軍の四人と一緒にいるぜ』

「由樹もいるのか……今竹太刀が一人なんだ！ 俺は竹太刀の元に行くから、家に来て由衣とアリシアのこと頼まれてくれないか!？」

『二人のお守りね。いいぜ。そんなに遠くねえし、任せろ』

「頼む！」

電話を切り、由衣の方を向く。

「由衣、俺は竹太刀の元に行く。氷室達<sup>が</sup>来るから、それまでアリシアを頼むぞ！」

「は、はい！」

すぐに出かける支度をし、待機状態のデバイスを手から飛び出した。

A, sの激戦<sup>が</sup>、幕を開ける。

## 第二十八話

あらゆる電気が落ちた、竹太刀が利用するバイト先までの道に沿って走る。

『竹太刀、お前今どこにいる?』

『いつもの道にある、スーパーの中や。運良く扉が開いたままやったからな』

『そこに、何か使えそうなものはあるか?』

『火を着ければ火力になる油とか小麦粉なんてのは勿論あるけど……結界ん中にあるこれって、使えるんか?』

『魔法が原子組成を変えることはないだろ。小麦粉と点火道具でできるだけ集めろ』

『了解。他に使えそうなもんあつたら探すわ……ところで、綾は道走つて大丈夫なん? 襲われるんとちやうか?』

『大丈夫……だと思いたいな』

『確証はないんやね。まあ早く来てな』

『わかつてるっ』

十字路を左折。国道に入り、広い道の先にスーパーがある。あそこだな。

「早く行つて……!」

何か、来る。

青い服と褐色の肌のそれは、俺目掛けて急降下して、手甲を着けた腕を腹へ――

「――っ!!」

左腕で遮り、加えて灰色の壁を作る。

防壁は呆気なく砕け、左腕突き飛ばし、拳が腹に食い込む。

刹那、俺と襲撃者の距離が一気に開き、止まると同時に背中に強い衝撃。

「――っ、がはっ!!」

肺から空気が押し出される。

げほ、げほっ、と咽せながら、こちらに近付いてくる襲撃者を見る。

「……つたく、冗談キツイぜ」

「魔導師か。……お前に恨みはないが、ここで闇の書の糧となってもらおう」

「んなもん、嫌に決まってるんだろ」

杖を展開。右手で持ち、左手は殴られた腹を押さえる。

(肋骨またやられたかもな……二度も獣人に殴られて骨折とか俺だけじゃないか?)

全く嬉しくない史上初だが。

ザフィーラとの戦闘勝負ってことになるんだろうが、勝つことは考えない方がいいな。状況云々以前に、ガチの戦闘で勝てる訳がない。



とすれば、やるべきなのは救援が来るまでとにかく逃走し続けること。

「目え伏せろおおおっ!!」

「っ!」

竹太刀の怒号。ザフィーラの周囲に点火された球状を見て、すぐに腕で目隠しをする。

直後に、鮮やかな火が花を咲かせた。

「あつつつ、綾、逃げるで! 花火をあつただけ、ぎょうさん持ってきた!」

「でかした……逃げるぞ!」

不意打ちの目くらましとしては効いたようで、動かないザフィーラを置いて走り出した。

道をまっすぐ、急いで走る。この世界において逃走で重要なのは距離だ。隠れても探知魔法で一発。道を複雑に曲がって撒いても空を飛ばば意味がない。

「くそっ……ここでザフィーラが来るとはな……」

「どないする!? ここで勝てるんか!」

「勝てる訳ないだろど阿呆! ただガチの戦闘やってあいつらに勝てるなんざ十年経っても無理だろうが!」

「じゃあ、どないすんねん!」

「逃げる！」

「ラジャツ!! で、具体的には!？」

「油貸せ！」

「バッグの中や！」

肩からぶら下がってるバッグを漁る。花火やライター、小麦粉らと一緒にサラダ油が小さいもので三本ほど入っていた。

「袋はあるか？」

「ああ!?! んなもんあらへんわ！」

「じゃあ、いい」

油を一本個取り出し、逃走時に一旦しまっていた杖を再び展開する。

「……何するん？」

「冬だから、だるま作ろうと思って」

「火だるまはやめい」

「よくわかったな」

後ろを見て、すでにザファイラが追いかけてきているのを確認して油ボトルを投擲。

魔力弾を発射し、ボトルを破裂させる。魔力弾による攻撃も兼ねたが、防御壁で防がれる。だが、油は一部一部には着いたはず。

ライターと打ち上げ花火を用意。

「喜べ竹太刀。やっぱりひよつとしたら勝ちになるかもしれないぞ」

「勝ちにはなるかもやけどやめて！ んなことしたら後で殺されるわ！」

「知るか！」

「知れええええつ!!」

着火。砲口をザファイラへ。

ジジジジツ……と導火線が短くなつていき、筒に辿り着いた瞬間バシユンツ!! とい  
う音が響く。

「やりおつたあああつ!!」

竹太刀、うるさい。

火の弾丸は真つ直ぐ飛んでいき、ザファイラに直撃して花を咲かせ……直撃？

「むんっ！」

「ぐっ!？」

火の直撃を受けたはずのザファイラが、一カ所も火が着くことなく、俺達に急接近、竹  
太刀を蹴り飛ばし、俺の顔面を捕らえ、ずつと奥の壁に叩きつけた。

頭から叩きつけられた。ヤバいくらいクラクラする。

(でもなんでだ？ 油がかからなかったのか?)

いや、よく見ると一部濡れている。確かにかかっている。じゃあ、なんで油の上に火がかかったのに着火しなかった？

(いや、まずそんなことよりだ！)

足でザフィーラの腹を蹴り押し、作用反作用の法則で抜けようとする。しかしザフィーラの握力から抜け出せない……というか、顔が痛い。

どうすればいい？ 答え自体は簡単だ。作用の力を強くすればいい。かつ、怯ませて相手の握力を弱めれば脱出率は上がる。

(吹っ飛べ……！)

杖をザフィーラの顔面に向け、砲撃をぶち込む。

爆風が巻き起こり、数十センチ先の様子も見えない程の煙が舞う。

——だが。

(……っ!?)

離れない。怯んだような気配もない。

煙が晴れる。

——無傷だった。

(一体なんで……っ、ああ、そうか、そういうことだったか畜生！)

合点がいった。なぜ無傷なのか。なぜかかった油に着火しなかったのか。

『ファイールド型の防御魔法で……防いでやがったな！』

「……よくわかったな。その通りだ」

なら納得だ。盾の守護獣と呼ばれる程なら、俺の砲撃程度ならそれで十分防げるし、油についても、油の上に耐火性のある魔力でコーティングすれば火は着かない。

(どうする!?) 竹太刀が持つていた火薬道具は効かない、竹太刀はデバイスすら持つてない! そもそも威力不足じゃ切り抜けないし何よりあいつはダウン中だ!)

まずい、まずい。対策がない。いや、あるはずだ。だがそれが考えつかない。

「では……魔力をいただくぞ」

ザフィーラが空いている方の拳を握り締めたのを見て、ヤバいという脳内アラートより一層やかましくなる。これは、まずい——!

「おおおらあああああつっ!!!」

「っー」

横から、馬鹿でかい声。

ザフィーラはその声に反応。俺を離し、やってきた男の跳び蹴りを回避する。ザフィーラの手から解放され、俺は地面にへたり込む。

「……むー」

ザフィーラが上に反応。後ろへ跳び、上から来た砲撃を回避した。

上から、少年が降りてきた。

「……大丈夫かい？」

「綾！ 大丈夫か!？」

駆けつけてくれたのは、才と海斗の二人だった。

「……ああ。助かった」

俺は安堵の息をつく。

海斗が気合いを入れるように自分の手の平を拳で叩いた。

「うっし！ こっからは俺達が相手だ！」

が、俺と才にそこまでの気合いはなかった。

「残念だけど……時間切れ」

「ああ。時間切れだな」

「へ？」

「む……」

ザフィーラが反応を示した。しかしそれはこちらに対するものじゃない。つまり、念

話だ。

ふむ、と少し思考したザフィーラが俺達に声をかけてきた。

「仲間の救援に向かうことになった。今回は見逃そう」

「あーそうかい。だったらとっとと行っちゃまえ」

「え？ おい……」

「次は、お前達全員から魔力をいただく」

「痛えしつぺ返し食らわしてやる」

ザファイーラは返すこともなく飛び去っていった。

「おい、いいのか？ ザファイーラはまだ攻略できてないんだろ？」

「戦闘で俺達が勝つのは無理だ。ここは退かせよう」

「うん……その方が、僕にとってもありがたい……」

言うのと、才は魔法陣を形成した。

「それは……？」

「……戦闘における勝負が無理なのは、実力だけの話じゃない……そもそも、守護騎士は物語上、負けて捕まることはできない……」

言われてみれば、そうだ。守護騎士が捕まるようなことは事実上不可能。つまり、戦闘による勝負では相手を撃墜までさせる必要はない。

となると……。

「つまり……相手の目的を完全妨害して、僕達の介入という理由によつて撤退させたとなれば、すなわち勝利となる……」

「えーっと、つまり……」

「この戦いにおける守護騎士らの目的……なのはからの蒐集の妨害か」

「正解……」

魔法陣をしまった才が、今度はどこかのやや上に杖を向けた。

「座標捕捉……砲撃の術式を一部改正……誘爆機能力ット……代わりに威力、貫通性能を強化……」

また魔法陣が敷かれる。言葉から察するに、やはり砲撃だろう。杖の先端に魔力が集束されていく。

そして、この射線には……。

「……海斗。才が砲撃を撃ったら、すぐにその射線を連れ」

「え？ おう……ん？」

海斗が何かに気づいた。

視線を辿ると、馬鹿でかい集束された魔力の塊があった。いや、今もなお集束されている。その集束されている魔力の塊は、桜色に輝いている。

「あれって……なのはのスターライトブレイカーじゃねえか？」

「……そろそろ、撃つよ」

才が、静かに宣言した。





はやてとの電話も終え、湖の騎士ことシャマルは蒐集作業に乗り出すところだった。

蒐集対象は、ヴィータが撃墜状態に追いやったなのはと、ザフィーラが追い詰めた綾と竹太刀の、計三人。先に蒐集の量に期待でき、かつ今放とうとしている集束砲の妨害もできるなのは、続いて綾や竹太刀という予定だ。

「お願いね、クラールヴィント」

旅の鏡を発動し、なのはの背後へと座標を繋げる。

離れた空間を繋いだ旅の鏡へ手を伸ばし、リンカーコア抽出用の魔法でなのはを貫こうと――

《主！ 砲撃反応を捕捉！ こちらに向かっています！》

「え!？」

クラールヴィントの警告に驚き、動きが止まった。

その動きの止まったシャマルの目の前を、壁を砕いて一本の魔力が、才の砲撃が貫いていった。

「っ！ そんな、まさか捕捉されてる!？」

シヤマルは慌てて広域の探索魔法を発動する。

すると、こちらに向かってくる魔力反応をキャッチした。綾の指示で砲撃を追いかけている海斗である。

『シグナム大変！ 捕捉されちゃった！ こつちに人が来てる！』

『集束砲の発射も近い……ここは引き上げよう。惜しいものを逃すことになるが、仕方ない』

『わかったわ！』

集束砲を発射されれば結界が破壊され、さらに多くの管理局員がやってくる可能性が高い。深追いはリスクが高かった。

実は先程の砲撃以降の妨害は来ないということに気づかぬまま、蒐集を諦めてシヤマルは撤退した。



「……シヤマル攻略……」

「……お前にはホントに頭が上がらねえよ。来て早々に一人攻略なんて」

守護騎士達の撤退後、才の元に届いたメールを見て溜め息をついた。

時期や能力も関係あるだろうが、俺のようにまどろっこしいやり方をせず、たった一発で一人攻略してみせた才は、さすがとしか言いようがない。

こいつには、本当に適わない。俺が本当に彼と肩を並べることができるといいうのだろうか。そこまで追いつけるのだろうか。

(いや……追いつかなきゃならない……追いついて、さらには追い越すぐらいにならないと、神に適うことはできない……)

プルルルル。プルルルル。

「……携帯、鳴ってるよ」

「ん、ああ……もしもし」

『綾、無事か!』

電話に出ると、相手はクロノだった。

「ああ、無事……肋骨折られて無事って言えるのか?」

『そうか……そっちは何があったんだ?』

「才と海斗が来るまで、襲撃者に襲われてた。それでちよいとやられた。竹太刀も……」

「ああ、わいは平気やでー」

いつの間にか竹太刀が来ていた。肩に手を置いて首を鳴らしている。

「……竹太刀は平気だそうだ。一応検査を頼む」

『わかった。今なのはをアースラに搬送しているから、それが終わったらすぐそつちに向かう』

「了解」

電話を切り、溜め息をつく。

「ボロクソにされてばっかだなあ、俺……」

そう、眩いた。

アースラ局員が来て、転送されたのは、それから数分後のことだった。

才、シヤマルに勝利。

## 第二十九話

「……またあなたね」

「悪いのは襲撃者です。俺は悪くありません」

「……まあ、それはわかってるけれど」

はあ、とリンデイさんが溜め息をついた。

ここはアースラの医務室。ここで俺と竹太刀は手当てを受けていた。

やはり、俺の肋骨は折られていた。これで二度目だよ、肋骨。ちなみに竹太刀は軽い

捻挫で済んだらしい。

「とにかく、あなた方が無事で何よりでした」

「ええ。ありがとうございます」

「綾が無事でよかったです」

「ほう、わいのことは無事でなくともええと?」

「え? あ、いや!」

「……………」

他にも才や海斗など、結構な人数がいるため、医務室はいつぞやのように騒がしかつ

たりする。なのはもここで寝てるんだから、もう少し静かにしろよ……。

呆れつつも、俺はベッドから起き上がり、ジャンパーを身につけ、帰る支度をする。

実は由衣とアリシアにはまだ連絡を入れてなかったため、俺達の状況が知らないままである。かつ、夕飯もまだだ。早く戻らんと。早く戻らんと。

「待て、綾。帰るのか？」

「ああ。晩飯まだだったからな。早く帰って作んねーと」

「由衣とアリシアなら、アースラに連れてきてやる。君に、会わせたい人がいる」

「話の内容は十割方アルハザードだろうが、俺が話せる内容はもう何も無い。つか、才と海斗がいただろうが」

「もう二人は会わせた。後はお前だけだ。いいから来い」

今日は帰れなさそうだ。

まあ、食費が浮くんだしいいか。鯖味噌は今度にしよう。

クロノが言う会わせたい人ってのは……あの人か。



クロノがノックし、開いた扉を通る。

「失礼します。グレアム提督、朝霧綾を連れてきました」

「ああ、ご苦労」

部屋の主である、初老に差し掛かったくらいであろう男性は、クロノに労いの言葉を与えた後、後ろをついてきた俺に微笑みかけた。俺はそれを受けて軽く会釈をする。

ギル・グレアム。猫の使い魔を二人従えていて、はやてごと闇の書の永久封印を目論んでいる人物……だったな。

そういや猫の使い魔で思い出したが、その使い魔の妨害にも警戒しなけりやならないんだよな……今まで襲われなかったのは偶然か、休暇中の守護騎士は監視対象外だったのか……ともかく、これから先守護騎士らとの接触をした場合、本気で奴らへの警戒をしなければ。闇の書封印のために人を殺す覚悟があるんだから、冗談抜きで命の危機になりかねない。

「さて、立ち話もなんだ。どうぞ座りなさい」

「ああ、はい。それでは」

グレアム提督に促され、向かいのソファに座る。

「襲撃を受けて怪我をしたと聞いたのだが、大丈夫かね？」

「まあ、ここにきて、話をするこことくらい難なくできる程度には大丈夫ですよ」

「そうか。それはよかった」

「で、話とは？」

さっさと切り出す。早く終わらせて、怪しまれたり敵として意識されないようにしたい。

「君のことはクロノや君の友達から聞いたよ。あのアルハザードへの渡航に成功し、しかもそこから生還してきたということを」

「……その話は、俺もしないといけないんですかね？　すでに海斗や才から聞いてるみたいですし、それ以前にも管理局の少将が来て話をしたというのが、そちらの耳に入ってるんですが」

「ああ。確かにコード少将が君と話をしたというのは私の耳にも入っているし、さっき言った二人から当時の様子も聞いた。ただ、私としては、コード少将と話した、見てきたものを最も客観的に話せるであろう君の話も聞いてみたいんだ」

「当事者何人に何度訊いたところで、答えは変わりませんよ。俺達はアルハザードの技術の『結果』しか見ていません。アルハザードの技術は持ち出していないし、その技術すら使えたものじゃありません。海斗はともかく、才はこれにほぼ近い答えだったのでしよう？」

「……驚いたな。その通りだよ。なぜわかったんだ？」

「あいつは、完全な天才ですから……もういいですかね？　話すべきことは話しました



し、家族がここに来るってことで色々やらなきゃならないと思うんで」

「ああ、そうか。ただ最後にこれだけは聞いて欲しい。君は、たくさんの友達や君を信頼する人に支えられているはずだ。その友達や、自分を信頼してくれる人の事を決して裏切ってはいけない。このことを、君は誓えるかね？」

「無理です。というか、嫌です」

「綾!？」

横で立っていたクロノが驚きの声を発したが、それは無視。

目の前のグレアム提督も、今の回答に難色を示した。

「なぜだね? 理由を聞かせてもらえるかな?」

「誓いつていうのは、神だとかその偶像だとかに宣言することというのが大義ですが、神や偶像がそれに応えたりすることがない以上、結局のところは一人で勝手な口約束をするようなものであり、そんなのは簡単に破れたり屁理屈でねじ曲げられてしまうんですよ。俺としては、人同士とする約束とか契約といったものの方が好きですかね。それなら守りますよ」

「……なるほど。そういうことか……なら、私にそう約束できるかね?」

「あなたも、それを守ることができると言うのなら。俺は、自分にできない約束をするもさせるもしない主義なので。……では、失礼しました」

礼をして、クロノと共に退室した。

「綾、君はグレアム提督に警戒していたように見えたんだが、理由を聞かせてもらっても構わないか？」

扉が閉じてから、クロノは俺にそう尋ねてきた。

「初対面の人に警戒しない理由なんてないだろう？」

俺はそう答えた。



襲撃者が何者だ、とかなのは家の近くに捜査本部を置く、という話は原作そのままなのでカットするとして、翌日。

現在、捜査本部となるマンションへの引越し作業が行われていた。

「海斗、竹太刀はバイトでいないんだし、頑張れよー」

「海斗さん、頑張つてねー！」

俺と、車椅子に乗っているアリシアが応援した。

重そうな機材を重そうに運んでいる海斗がこっちを向いた。

「お前なあ、ちったあやってくれよー！」

「だって俺怪我人だから」

「だああつ、畜生！ 確かにそうだけどその当たり前つて顔がムカつく!!」

「でも、綾さんいないと私動けないよ？」

「あれ、由衣ちゃんは？」

「由衣ならフェイトの方だ。久々の再開に喜んでるぞ」

ちなみにアリシアとフェイトの再開は昨日のうちにもうやっている。

回想に入ると長くなるのでやめるが、二人とも再開に喜んだ。その後、フェイトがアリシアをどう呼ぶのかで色々手間取った。主に名前で呼ぶか姉さんと呼ぶか。たまに『お姉ちゃん』というオーダーをアリシアが出してフェイトがうろたえていたりもした。

……結局は『姉さん』で決定されたが。

「畜生、なんで俺ばっか……」

「まあ、頑張れよ」

「他人事だと思つて……!」

なお、俺達がここにいたり、海斗がこうして引つ越し作業を手伝っているのはこれから俺達もここに住むからだ。

理由はアリシアとフェイトと一緒にさせたいという俺やリンディさんの計らいとか、襲撃を受けた俺達の保護も兼ねている。後、一応俺と海斗は処罰を受けてる身だし。

なお、事件対処でここで暮らす間は金額的には食事代を一部負担するだけでいいらしい。電気代とかはアースラ側が払ってくれるとか。やったね。

ちなみに才は家が近所らしく、住み込みにすることを断った。ただ毎日マンションに通ってスタッフの手伝いはするらしい。

「じゃ、アリシア。そろそろまたフェイトの元に行ってみるか?」

「はい!」

海斗にはこのまま頑張ってもらうことにして、俺は車椅子を押していった。



「こんにちはー」

「来たよー」

フェイトと話をしていると、アリサとすずかがやってきた。

「ああ、お前らか」

「あれ、綾さん? なんでここにいますか?」

アリサが俺の顔を見てそう訊いてきた。なんでつてそりや……

「こいつの家族が来てるのに、連れてこない訳がないだろ?」

「ああ、そうでした。……フェイト、はじめまして……つていうのも変かな？」

納得したアリサはフェイトへと視線を移す。

「さすがも続いてフェイトの方を向いた。」

「ビデオメールで何度も会ってるからね」

「うん。……でも、会えて嬉しいよ。アリサ、すずか」

「そりゃあね！　しっかし、生で見るとほんとそっくりよねー」

「ほんと。双子つて言われても納得しちやいそうだよ」

「うん、まあね……」

「そっくりさんなのだー♪」

そっくりである理由が理由なために言葉を濁すフェイトと、理由を知らないがために嬉しそうに言うアリシア。まあこの差は当然か。

さて、アリシアのことは由衣に任せて、俺も荷解きぐらいいは手伝った方がいいだろうか……。

プルルルル。プルルルル。

「ん、メール？　氷室から……由衣、アリシアを頼む」

「あ、はい」

（内容は……『話がある。家に来い』……一体何をする気なんだか……）

とにかく、聞くだけ聞いてみることにしよう。借りもいくらあることだし。



俺達『反逆者』、氷室達『インテリア不良』、由樹ら『連合軍』の拠点の住所は互いに公開しあっている。

『インテリア不良』の拠点はなのはの家に一番近いということでも末崎の家(それでも数百メートルという距離があるが)。俺達とは違ってそれぞれチームメンバーの家が離れている彼らは、日中は拠点で生活。夜解散してそれぞれの自宅で睡眠という生活スタイルを取っているそうだ。ベッド一つしかないからな。俺も三戸五人暮らしの時海斗にベッド譲ってソファで寝てたし。

それは置いといて、俺は氷室達の拠点、すなわち末崎家に来ていた。

テーブルを挟んで向き合う俺と氷室。高田と末崎は氷室の指示で雑用仕事をして、用がない時は離れた場所から様子を見るといった感じだ。

「よく来たな。ま、とりあえずは茶でも飲みな」

「安心しろ。ちゃんと自分のペースで飲む。で、話ってなんだ？ 言っておくが、借りがあるとは言えチームを変えるつもりはないぞ」

しれっと返してから訊くと、氷室は「わかってるよ」と言っ手て手をブラブラとさせた。

「安心しろ。むしろ今回の場合はチームを変えない方がよかつたりするかもだぜ」

「あん？」

「以前、お前んとこに和也つてガキがいたよな？」

「ああ……いたよ。全く見ないけど」

そう、全く見ない。とにかくこの半年近くであいつが俺達の前に現れていなかつた。失格者の中に名前がないし、何よりなのは達の話にたまに出てくるから、今も生きてるはずだけだ。

でも、なんでいきなりそいつの話に？

「ああ、お前らがそのガキを見ねえのはよ、俺がたまたまそいつとばつたり出くわした時に、お前らのチップの持ち数を軽く教えてやつたんだよ。そしたらチップ数ゼロになつてたそいつが勝手にキレだしてな。「あんなトロい奴らに俺様が負けるなんてあり得ねえ」とか言つてどっか行つちまつた訳なんだよ」

「何やつてんだかあいつは……」

ほとんど自業自得じゃんか。しかもチップ数ゼロつてことはジュエルシードの入手数を増やすこともしくじつてこの指令に強制参加させられてんのか。

「……で、その和也がどうしたんだ？」

「実はそいつよ、十月の中頃に蒐集の被害に遭ってんだ」

「……なんだと？」

「海鳴市このまちでか？」

「ああ。なんで知ってんのかって言われたら、見た奴がいんだよ。こいつも抜かれてんだ」

言つて、氷室が後ろに親指を向け、それに合わせて高田がペコペコと頭を下げた。

「わざわざ高田や和也を襲う意味は？ 二人とも魔力の値は決して高くはない。埋まるページの量にも高が知れてるぞ」

「近場に餌がありゃ、まずそれにつつのが常識ってもんじゃねーの。魔法生物と比べたら簡単に潰して蒐集もできるだろ」

「……俺達転生者を狙ってるってことか」

「そういうことになる」

「……………」

確かに、ザフィーラが俺達に襲いかかったことからしても、前からそういう動きがあつても不思議じゃない。むしろ、守護騎士らがこの餌場を知ったら、管理局という敵が来る前に食い尽くそうという動きをするだろう。

「俺は高田からその情報を仕入れてから極秘で調査を続けた。そして結果として、奴ら



のこの街での蒐集活動の周期性を見つけたんだよ」

「……だが、もう管理局が来た今、守護騎士がこの街での活動をやめる可能性が高いぞ」「いいや、まだ間に合う。奴らは二対一の戦闘では負けはないという確信があるだろうし、なのはとフェイトが実質戦闘不能の状態。むしろこのチャンスに一気に蒐集を仕掛けて取り尽くそうとするはずだ。転生者の大半は、目立つ魔法で仕留めるまでもないような奴ばかりだろうしな」

ばつさりと言ったな。しかも強く言い返せない。

なんせ、ザフィーラにポコポコにされてたアルフにポコポコにされる始末だからな、俺……。そして昨日にはザフィーラにほぼ一方的にやられてたし。

「一応お前はクリアしてる身なんだし、この情報を知りたくないならそれでもいいいぜ？ただ、神を討つ奴が、シグナムにもザフィーラにも負けっぱなしっつーのはどうかと思うなあ」

……やむをえんな。第一、俺だって奴らに負けっぱなしにはなりたくない。

俺はテーブルに手を置き、身を少し乗り出した。

「……条件を言え。内容次第でその情報を買ってやる！」

「……まっ、お互い利益が最大になるようにしてやるよ」

その言葉を待っていたと言わんばかりに、彼は口角を吊り上げた。

## 第三十話

リンデイラアースラストアップが現地入りした、翌日の深夜。

今日も蒐集活動を行うべく、ビルの屋上にヴォルケンリッターが集まっていた。

「やつと三百頁を超えたわ。先日の魔導師を逃したのは痛いけど、なんとかここまでこれたわね」

闇の書の文字が書かれている頁と書かれていない頁の境目を確認してシャマルは報告する。

本来、原作ではなのはからの蒐集で三百頁を超すことになるのだが、海鳴市に魔導師——転生者が多く存在し、そこから蒐集していた。しかも大半が魔力強化の願いを叶えてもらっているため、蒐集の量もそれほど悪くもなかったのである。

シャマルの報告を聞いて、ヴィータは「よしっ」と呟いた。

「やつと半分まで来たな」

「だが、先日管理局が来た以上、この街での蒐集活動も潮時だろう」

ザフィーラが言った。シグナムもそれに頷く。

「負けはないだろうが、今日でここでの蒐集は終わりにする。いいな」

「了解。今日は、シグナムとザファイーラだったわね」

「じゃ、あたしとシヤマルは他の世界に行ってくる。二人ともしくじんなよ」

「当然だ。では、行くぞ！」

シグナムの号令で、四人は空へと飛び立った。四人の魔力光が空に軌跡を描く。

その姿を、遠くから見届ける人影があった。

その人影は携帯を取り出すと、どこかへと繋げる。

「氷室さん、僕です……」



「おう。じゃあな」

ピツ、と。氷室は電話を切った。

「……本当にシグナムとザファイーラが来るんだろうな。両方違った場合にはさすがに俺でもキレルぞ」

「問題ねえよ。俺のデータに狂いはねえ」

深夜。俺、氷室、末崎の三人は道端でたむろっていた。

氷室の情報を買う条件は、勝負の際に俺が氷室とタッグを組むこと。しかし、このデ

スゲームにおけるチームとは別である。

早い話が、氷室はチーム戦の勝負で勝てば、俺も氷室も同時に二人に勝ったことになるのではないかと考えたのだった。

確かに理論的には問題ないし、チームを変えずに済むことから俺もその条件を承諾。シグナム、ザフィーラと勝負ができるという日を選び、今ここに至る。

末崎は俺が来てもらうように頼んだ。発見されやすいよう魔力を垂れ流してもらう他にも、いくらか頼みたいこともある。

また、俺と氷室はそれぞれ腰に俺が用意したポーチを着け、長杖を展開している他、俺の腰には短剣型のデバイスが据えられている。末崎のもののだが、氷室が以前見た俺の刺突術から見越して貸し出してくれた。

「……それにしてもこのポーチ、臭くせえんだけど。何入ってんだよ」

氷室は眉間に皺を寄せて、自分の腰に着けているポーチを見た。

臭いと言ったそれから発せられるにおいはかなりのもので、俺にも届いている。末崎の元にも届いているようで、鼻を押さえている。

「通販で買った世界一臭い缶詰め、シユールストレミングの汁だ」

「おいおい、マジかよ？ てか、こんな臭えもんで何するつもりなんだよ？」

「俺がシグナムの相手をしている間氷室にはザフィーラを引きつけてもらうんだけど、

その時にザファイーラの顔面に浴びせてくれ」

沈黙が流れた。

「……………え、何？ 聞き間違えた気がするからもう一度言ってくんねーか？」

二回ほど目を瞬いてから、氷室が言った。

「安心しろ、聞き間違いじゃない。ザファイーラの顔面に世界一臭い汗をぶっかけろと言った」

俺はいつもの顔で、なんともなさそうに言っただけ。

氷室の顔が引きつり始めた。

「あー、あのさ。シユールストレミングだったか……その汗って体に着いちまったら数週間においが取れないってテレビで聞いたことがあるぞ？」

「ああ、知ってる」

「……………えーと、服に着いちまったらもうそれは捨てる他ないなんて聞いたこともあるぜ？」

「ああ。俺も缶開ける時に一着お釈迦になった」

「え？ お前、俺に死ねって言ってるの？」

「解釈は自由だ」

まあそう解釈してもしようがないだろうな。

においがこびりついた結果、仲間はともかく主から「臭い」なんて言われたら、そのシヨックは計り知れないだろう。その結果、もしくはそれを想像して殺意を覚えるのは、まあ十分ありえる。

「俺の策に乗るんだろ。気合いでなんとかしろ」

「お前、本当にその策で勝てるんだろ？」

「お前が落とされることなく、俺が先にシグナムに勝てたらな」

「おい、来たぞ！」

末崎が空に指差して叫んだ。

指差した方向を見ると、空から二人の人影がやってきた。人影はこちらに降りてきて、暗くてよく見えなかった姿が街灯の明かりに照らされて露わになる。

シグナムと、ザフィーラだった。

シグナムは俺の姿を見て、驚きの表情を見せた。

だが、すぐに凜とした表情に戻る。

「魔力を垂れ流している者がいると思つて来てみたら、まさかお前がいたとはな……朝霧」

「そうですね。だいたい、二ヶ月振りになりますか……シグナムさん」

「知り合いなのか、シグナム」

「剣道で知り合った仲だ……朝霧」

ザフィーラに簡単に答えた後、シグナムは俺に声をかけてきた。

「こうして私達の姿に驚かないこと、魔力を垂れ流しにしていること、そしてその手にしているデバイス……お前達は魔導師であり、時空管理局と繋がっている……そう見て、間違いないな？」

「否定はしませんよ。第一、その守護獣ザフィーラともやり合いましたし」

シグナムがザフィーラを見た。ザフィーラは静かに頷く。

「ということとは、お前達は囷で、近くに局員が潜んでいるのか」

「いいえ。俺達が勝手にやってるんですよ。管理局は俺達がこうしてあなた達と会ってることなんて知りません」

「……なぜだ？」

「単純戦力であなた方囷の書の守護騎士に対抗でき得る主力の二人が先日叩きのめされて、管理局が動くにはちよつと厳しい状態なので。でも、それでもすぐに動きたい理由があるんですよ」

「理由だと？」

「この街でも蒐集活動をしているらしいですね？　後ろにいる人の連れが被害に遭ったそうですよ。というか、それ以前にも俺が襲われましたし」

「……ああ、そうだ」

「正直、不安なんですよ。家族とも言える小さな子も魔力持ちなんで、襲われるかもって思うと。俺自身も、狙われるのは嫌ですし……なので」

そこで一旦言葉を止め、深呼吸するように息を吸う。緊張感を抑え、言葉を言い放つ。

「勝負しませんか？」

「何……？」

「ルールは……これです」

俺はあるものを二人に投げ渡した。

「……バッジ？」

シグナムは受けとったものを見て言った。

「そのバッジを、服のどこかに付けてください。どこに付けても構いません」

言って、俺はバッジを取り出してジャンパーの下の服に付けた。氷室は左腕の袖に付けた。

それを見て、シグナムとザフィーラは二人とも左胸の辺りに付けた。

「勝負では俺と氷室、シグナムさんとザフィーラの二対二で、このバッジを取り合ってもらいます。相手チームのバッジ二つを奪うか破壊したチームの勝ち。自分のバッジを奪われた、もしくは破壊された人はその時点で勝負に干渉できないものとします。制限



時間は無制限。強いて言えば管理局が嗅ぎ付けて来るまでですかね……あー、あと、俺達は飛べないので、飛行制限をお願いします。俺達が手を伸ばしてバツジに届く程度に。跳躍は問題ないので」

「……ルールはわかったが、勝敗の対価も教えてもらおう。それなりの対価がなければ、わざわざ敵に合わせるつもりはない」

「わかってますよ。あなた方は魔力が欲しいんですね？　なら、俺達三人の魔力は勿論として、他にも管理局に属していない俺達の知り合いをできるだけ集めて、その人達全員から蒐集できるようにする……というのでどうでしょう」

「……お前達が勝った場合には？」

「これから先、この街で蒐集活動をするのはやめると約束していただきます」

「自首しろ、とは言わないのだな」

「こう言つては何ですけど、たかだかバツジの取り合いで逮捕は嫌でしょう？」

……さあ来い。シグナムらにとつて条件は悪くないはずだ。乗って来い……！

沈黙が流れる。シグナムとザファイラとで念話で相談でもしてるんだらうか。

「……いいだろう、朝霧。お前の勝負に乗ってやる」

「……ありがとうございます。じゃ、結界を張ってもらえますか」

「わかった。……ザファイラ」

「心得た」

ザフィーラの足元に魔法陣が展開され、そしてここを中心として空間が切り取られる。

「試合開始の合図は公平に、末崎がコイントスでやつてもらいます。投げられたコインが地面に落ちた瞬間、勝負開始です」

「え？ 俺!？」

いきなり振られて、末崎が驚きを露わにした。

「ここは公平にするべきなんだからやってくれ。タイミングは任せる。ほら、コイン。道の端でやれよ」

コインを末崎に手渡す。末崎はぶつくさ言いながら間に立ち、コイントスの準備をした。

末崎がトスの準備をしたのに合わせて、四人全員が構える。

『氷室、開始直後に散るぞ。逃げることに集中しろよ』

『了解』

氷室に念話を入れ、開始直後の準備をする。

背中に手を回し、相手に見えないようにポーチをいじる。

「じゃ、じゃあ……いくぞー」

緊張した面持ちで、ピーン……と高くコインを弾いた。

末崎が弾いたのに合わせ、ジュツ！ とポーチ内の細工を動かした。

ジジジツ……と小さくポーチ内で道具の作動音が俺の耳に届く。

……そして。

——キンッ

「勝負……開始いいいいっ!!」

耳に届いた小さな金属音。それにいち早く動き、両チームの間にポーチの中身の一つを放り込んだ。

導火線が迫り着き、閃光の花が両者の間に咲き乱れた。

## 第三十一話

勝負開始の合図であるコインの音が聞こえたと同時に、綾が大声を発しながら何かを投げ込んだ。

暗くてよく見えないが、それは球状。そして導火線の火花が見える。

「っ！ シグナム、下がれ！」

見覚えがあつたザフィーラはすぐに前に出て、防御魔法を展開する。

球状が破裂し、眩い光の花が咲いた。

「くっ!?!」

至近距離での花火の炸裂に、シグナムもザフィーラも思わず腕で目を庇う。

一瞬の炸裂が終わり、シグナムが腕をどかす。

(む?)

ある光景が見えた。綾が、自分が顔を上げたのを確認してから奥の左側にある狭い路地裏へと入っていったのだ。

あの細い男……氷室はいない。ここにいるのはシグナムとザフィーラ、そして花火に驚いて腰を抜かしている末崎だけになった。

「ザファイラ。氷室だったか……そいつを追えるか？」

「ああ。異様なにおいを発するポーチを身に付けていたからな。すぐに追える」

元が狼であるザファイラにとって、これくらい訳のないことだ。氷室自身強烈なおいを発する物を身に付けていたため、余計簡単に区別できていた。

「私は朝霧を追う。ザファイラはもう一方を頼む」

「わかった。シグナム、奴は魔力が低いとはいえ、侮れんぞ」

「わかつている」

シグナムの返事を聞いて、ザファイラは氷室がいるらしい方向へと走っていった。

シグナムはザファイラを見届けてから、綾が入っていった路地裏に向かって歩き出した。

（この勝負は逃げるばかりでは勝つことはできない……さっきの行動からしても、何か仕掛けている）

でなければ、見られてから路地裏に逃げ込むような真似はしないはずだ。

路地裏に差し掛かる一歩手前で、シグナムは歩を止めた。いつでもレヴァンティンを抜けるように構える。

そして――

ザッ!!

「……いない、か」

誰もいない、何も仕掛けられていないのを確認してシグナムは構えを解いた。

道は真つ直ぐで、抜けると広めの道路に出るようだ。おそらく、次こそ仕掛けてくる。ゆつくり、ゆつくり。足を前へと進める。

道路に出る一步手前まで辿り着いた。だが、ここからだ。

(どつちだ……右か? 左か?)

探知魔法を使えば一発でわかるが、使えば明らかかな隙が生じる。ここは勘、いや『読み』で推測するべきだ。

(私の利き腕とは逆の左か? それとも、居合いの起点とは逆の右?)

読み違えば、がら空きの背後から襲われることになる。それは避けたい。

(どつちか——)

その時だ。

——パァンツ!!

「っ!!」

甲高い破裂音が響いた。すぐ近くで、右からだ。

(暴発したのか? いやそれでも——右だ!)

確信的情報を得たシグナムは、好機を逃さないためにもすぐに道路に躍り出て、迷わ

ず右へと向いた。

……だが。

——ガンツ!!

「がっ!?!」

右側にあるものを見るより先に、後頭部に強い打撃が叩き込まれた。

◇

「がっ!?!」

狙い通り、俺は背後からの強襲に成功した。

後頭部を杖で殴られ倒れかかるシグナムに、俺は手を伸ばす。

狙いは、甲冑のジャケット部分に付けられたバッジ。取れば、一撃で勝利だ。

（取れる——!）

バッジに届くまで、あと数センチ。

だがその数センチまで来たところで、バッジが移動した。いや、バッジではなく、シグナム本人が動いたのだ。

半回転して俺を正面に捉えたシグナムが、納刀状態のレヴァンティンに手をかける。

「まず——」

「——空牙っ!!」

抜刀斬撃と共に剣圧が飛び、それが防御反応ができない俺の腹に直撃。

俺は、数メートル後ろに吹っ飛んだ。

「っ、がはっ!! ぐ、げほっ……」

たった一撃なのに、胃の中身が押し出されそうになる。のた打ち回りたいほど痛い。が、すぐに立ち上がり、杖を強く握り締める。

頭から血を流すシグナムは、俺ではなく後ろを見ていた。

しばらくして、こちらに向き直った。

「小賢しい真似をするな……あんな仕掛けをするとは」

「ここで正々堂々なんて考えるつもりはありませんよ。小細工ならいくらでも使わせてもらいますから」

俺はバツサリと言った。

俺が仕掛けたのはモデルガンを利用した誘導だ。火薬の量を弄って音を大きくしたモデルガンを固定し、手作りの装置でしばらくしてからトリガーが引かれるように仕掛ける。後はそのモデルガンとは反対側で待ち伏せて、シグナムが現れたら強襲。

頭を殴って脳震盪が起きている間にバツジを奪う算段だったのだが、このように失敗



してしまった。

「以前の試合から油断ならない相手とわかっていたつもりだったが、それでも心のどこかで油断していたようだな」

「……できれば、その油断をしている内に勝っておきたかったんですけどね」

長杖を解除<sup>リリース</sup>。末崎から借りた短剣型デバイスを抜く。特に特徴的なものもない簡素な刀身が露わになる。

竹刀に比べて、刀身が短い。柄も短く、両手で構えるのには適さない片手剣だ。だけど、使えない訳じゃない。

左手を前方に翳し、剣を持つ右手を引き、平突きヒラツキの構えを取る。

シグナムは俺の構えを見て剣道の試合を思い起こしたのか、レヴァンティンを中段に構えた。

凄まじい剣幕が俺に襲いかかってくる。

「もうバッジを奪って終わりとは言わん。お前を倒して、それからバッジを奪わせてもらおう」

「ああ、そうですか」

魔法陣を展開する。

強化魔法発動。

加速強化付与。

プロテクト  
防衛強化付与。

デバイスに攻撃魔力付与。

ギチ、と剣を握る手に力を込める。

一呼吸。吸って。吐いて。

そしてまた吸って、

「……行くぞっ!!」

突撃した。



一方、氷室はと言うと、とにかく全力でザフィーラの追従から逃げていた。

「であああっ!!」

「うおっ、危ねっ!」

ザフィーラの拳を間一髪で避け、背筋を冷やしながらも逃走を継続する。

(綾の奴、あいつの顔面に汗ぶっかけろとか言ってたけど、まずあいつから逃げるのに精

一杯だっつーの! 顔面捉えるどころか近づくことすら無理だろーが!)

世界一臭い汁はまだぶつけてない。勝つために綾の作戦に同意したとは言え、あまりにも無理がある。氷室には神に反逆するなんて言うつもりはなく、今を生きていければそれでいいと考えてるのだ。

とにかく、逃げる。逃げ続ける。

逃走する氷室な眼前に、地面から生えてきた白い棘が遮った。

「うわっ！ 危ねっ！」

自身に急ブレーキをかけ、なんとか接触前の静止に成功する。が、それがまずかった。

「つて、やべ——」

氷室も失対に気づいて動こうとするが、遅い。

完全に動きが止まっていた氷室の背中に、ザフィーラの強烈な蹴りが加えられた。棘を突き抜けて、氷室の身体が壁まで吹っ飛ぶ。

「っはっ!!」

強く叩きつけられた。だが、気を失っている訳にはいかない。

チラつく意識を繋いで氷室が振り返ると、ザフィーラが牙獣走破——跳び蹴りの態勢で突進する——で迫っているのが見えたので、回避する。

壁に足をつっ込んだザフィーラの顔面を間近に捉えた氷室は、ポーチから『あるもの』

の袋を取り出し……

「やられっぱなしは……俺だつて御免なんだよ!!」

それを……世界一臭い汁を叩きつけた。

ザフィーラの顔で跳ねた飛沫が、持っていた手や服、さらには氷室の顔にまでかかった。

「ぐおおおっ!!」

「うおおっ、臭っ!! 直に嗅ぐと余計臭っ! マジで鼻が曲がりそうだ!」

袋から解放された醜悪なまでのにおいに氷室は勿論のこと、寡黙なことが多いザフィーラまでもが耐えきれず悶える。

そして氷室が言った、『鼻が曲がりそう』なにおいを最も放つ者が今すぐそばにノーガードで存在する訳で。

「臭えから……吹っ飛んでろ!!」

「ぐおおおっ!!」

長杖の先端をザフィーラに押し付け、間髪入れずに砲撃で遠くに押し飛ばした。

「あーくそっ、ひでえにおいだ……とりあえず上着だけでも脱いどかねえと」

ザフィーラを吹っ飛ばした方向とは逆に逃走を再開しながら、かかつてしまったにおいに顔をしかめて着ているコートを脱ぎ捨てる。

実を言うと、綾や氷室はバリアジャケットを設定していない。しかし、バリアジャケットを纏っていないのかと言えればそれは別で、着ていた服をバリアジャケットの状態に変換しているのである。早い話が個性を取り入れていないだけなのであり、それなのでこのように脱ぎ捨てることができているのである。

「つたく、あいつにマトモな策を期待すんじゃないやなかつたぜ」

（とはいえ、有効打を叩き込むには成功した。あいつの考えも捨てたもんじゃないな）  
砲撃の威力はどうでもいいとして、あの激臭を直撃させたのだ。しばらくはのた打ち回っているかもしれない。それなりに時間は稼げるだろうと走りながら考える。  
が。

ドドドドドツ!!

「うおおおおっ!!」

地面を貫いて無数の白い魔力の棘が襲いかかってきた。ギリギリよけるも、バランスを失って倒れてしまう。

「え、マジ……?」

嫌な予感に汗を流しつつ、後ろを見る。

ザフィーラがいた。

（あ、やべ……）

姿を、正確にはそのオーラを見るだけでわかった。あれは、キレている。

「……よくもこのようなふざけたものを浴びせてくれたな……」

怒鳴ったりしない分、余計恐ろしさが溢れ出ていた。

これ、本当に死ぬんじゃないかね？ と、氷室はそう思った。

激戦は、まだ続く。

## 第三十二話

突きが来る。

左に回避。無駄は作るな。

反撃。回転を加えて後ろ首へ。

カントツ！

鞘で防がれた。

それも後ろを向かずにだ。後頭部にも目があるのかよ。

右薙ぎが来る。距離を取って回避。

剣を持つ右手とは逆の左手でポーチ内の着火道具を操作。当たり前だが止まってる

暇なんてない。走りながらだ。

着火させた物を投擲。火薬を可能な限り詰め込んだプラスチックの箱が爆破。

「……………!?!」

爆風に怯む俺に対して、シグナムはものともせず接近して来る。おい、爆風そつちにも仕事しろよ。つて、ふざけたこと考えてる場合じゃ、ない。

回避——できない。爆風に踏ん張るため硬直している。間に合わない。

防御は？——論外だ。プレシアの時の二の舞だぞ。ガス欠になる。

受けるしか、ない。

プロテクトブースト

防御強化、強化魔力追加。

ファイジカル筋力強化——は、間に合わない。今の筋力で間に合うか？

「動、けっ」

左膝を上げた。

踏ん張りが利かなくなつて風に押される。そこにシグナムの唐竹が、来る。

シュツ、という爆風に流されそうな、想像以上に小さな音。

線に沿つて、しかし実際より小さく割れる皮膚。

そして割れた箇所から噴き出す鮮血。遅れて伝わってくる痛覚からの信号。

「くっ——!!」

「でああっ!!」

追撃の回し蹴り。これも防ぐ術がなく、甘んじて受けた。

無様に地面に転がる俺。

何回目だろう。数えてない。否、数える暇なんかない。そんな余裕があつたら転がる

ことすらない。多分。

「何度も言うが、そんな小道具でダメージを負うほど、我が甲冑は弱くない」



これほどの爆発が小道具扱いだ。正直、この言葉は効く。しかしこれが現実だ。

しかし、それ抜きにしてもシグナムへのダメージが軽微だ。理由は、炎熱を操る騎士にこの程度の火力では効かないとシグナム自身が言っていたけど。

「げほっ！ げほっ……」

咽せるな。そんな暇もないぞ。

……まだまだ。まだ速く動く必要がある。他も強くする必要がある。

魔法陣展開。

強化魔法行使。

筋力強化付与  
ファイジカル

防御強化追加付与  
プロテクト

加速強化追加付与  
アクセル

加速強化追加付与  
アクセル

加速強化、追、  
アクセル

「うっ、ぶ……！ お、え……っ」

何か気持ち悪いものが込み上げて、思わず吐く。

シグナムの、呆れた声が耳に届いた。

「……無理をするな。過剰強化は己の首を締めることになるぞ」

シグナムの言ってることは正しかった。

強化魔法には限界レベルというのがあるらしく、一つの強化値や合計の強化値が限界値を超えると強化超過となり、身体内部に悪影響を及ぼすようになるそうだ。無理な魔力循環は身体を滅ぼす。そういうことである。

だが、それでも構わない。構っていられない。

「……まだまだあああつ!!」

加速強化×4の速度でシグナムへと迫り、突きを繰り出す。

かなりの速度で繰り出された攻撃は容易く流される。構わない。

ガガガツ、とブレーキをかけ、横薙ぎの斬撃。防がれる。

斬る。斬る。斬る斬る斬る斬る斬る。

しかし全てが防がれ、いなされ、かわされる。

「このっ……!!」

「空牙っ!!」

「がっ!?!」

最初に当てられたのと全く同じ箇所<sup>ブレストオーバー</sup>に剣圧が叩き込まれ、吹き飛ばされる。

「げっ、(ぎ)ほっ!!」

斬撃の痛み、強化の負担などが重なって尋常じゃない痛みが襲いかかる。

痛みで起き上がれない。

「……今更だが、元々今回を持つてこの街での蒐集はやめるつもりだった。おそらくは朝霧が勝負を持ちかけるまでもなく、お前の仲間から蒐集することもなかっただろう」

シグナムの声が聞こえてきた。

氷室から聞いて、予想はできていた。勝負を飲むことができたのにも、それが理由となっていたはずだから。

「朝霧との勝負は心躍るものだが、お前が無理をして何かあれば、私が主に顔向けできないだけではない。私自身も、そのような勝負は望まない」

「……………」

「お前の仲間の魔力はいい。ここで引け！ もう十分、ベルカの騎士には適わんとわかっただろう！」

「……ははっ」

俺は乾いた笑い声を上げた。

すでに傷だらけで、震える身体に力を入れる。

「何を言い出すかと黙って聞いてりや、引けだど？ ふぎけんな……あんたは相手が自分より強いからって退却一択しか選ばないのか？ 違うだろうが。引けないとか引きたくないとか、そんな相手だつてあるだろうか……！」

悲鳴を上げる身体を奮い立たせ、立ち上がる。

強化状態はそのままだから、吐き気は消えてない。また込み上げてくる。

「ぶっ、……………第、一……………よおっ!!」

短剣で地面を鳴らす。短剣も、刀身にヒビが入って限界が見えてきていた。

「男が……………同じ相手に負けっぱなしでいられるかよ!!」

面食らったような顔のシグナムに、剣先を突きつける。

「俺は騎士を名乗るつもりはねえが、あんたは騎士なんだろう？　騎士は、どんな相手であ

れきっちり勝負をするもんじゃねえのか……………」

「……………」

シグナムは黙って、目を伏せた。

ややあつて、フツと、シグナムが笑った。

「……………そうだな。私は、お前の信念をいつの間にか踏みにじっていたのかもしれない」

レヴァンティンから、空薬莖が一つ排出され、そして刀身が炎を纏った。

「だが……………お前をいつまでも無理させる訳にもいかん。この一撃で、墜とす」

「……………やれるもんならな」

シグナムは中段の構え。

俺は片平突き構え。

一撃で墜とすと言った以上、シグナムは本気だ。目立ったダメージもない状態で、本気を出されるのであれば直撃は本当に一撃で墜ちる。

今、付加させている強化魔法は筋力強化フィジカルが一つ、防御強化プロテクトが二つ、加速強化アクセセルに至っては四つでそれと剣に攻撃魔力も付けてるか。

これ以上、新しく追加するのは身体が持たない。これでやるしかない。

剣を強く握り直す。ミシリ、という音はデバイスからではなく身体から直接鳴った。  
 (勝つ……絶対に勝つ!!)

踏み込む脚に力を入れる。ビキリ、と脚からの悲鳴が伝わる。

——構うものか!!

「ギツ……オオオオオオオオオオツツ!!!」

強化された速度でシグナムへと迫る。

自分で強化しておいて何だが、すごい速度だ。認識するのがやつとだ。

——それでもいい!!

「ツ!!」

俺が踏み込み出したのとはほぼ同じタイミングで、シグナムの構えが上段へと変わった。

そのまま振るえば、俺の脳天に直撃するだろう。

——構わない!!

「紫電——!」

顔が本気だ。俺を叩き潰す気である。

——上等!!

非殺傷とは言え、それは完璧な訳がないんだ。当たれば本気でまずいぞ。

——構うか!!

「——閃ツ!!!」

（——今だツツ!!!）

アクセルブリスト  
加速強化、強化魔力追加!!

「グブツ、ごぼっ!!」

身体が耐えられず、口から逆流した胃液と血液が吹き出る。

——目を逸らすな!!

炎を纏う剣が、縦に真つ直ぐ振り下ろされる。

——ここだ!!

振り下ろされる剣の、刀身の根元を、直接掴み止めた。

「何っ!？」

「捕まえたっ……!」

斬撃は、突きを除けば全て遠心力が威力に繋がる。勿論遠心力が全てではないが、それでも遠心力が最も働かない根元は最も威力が低い。

それでも斬撃は骨まで食い込んだ。ジウウツ、と接触面が焼ける。激痛が走る。

——まだ、離しちやダメだ!!

「くっ……!」

この一撃に全力を注いでいたシグナムは、踏み込みに力を入れていて足が動かない。防御しようにも、レヴァンティンを両手持ちだった状態で手を離し、防御するまでにこの場合では時間がかかりすぎる。

——取った!!

——ビリッ

布が、破ける音。

欠けたシグナムの甲冑のジャケットト。

すでに俺の右手に剣はない。代わりにあるのは、その欠けた部分の布と……その布に

針が刺さったバツジ。

——勝利の条件だ。

俺の勢いが強すぎて、シグナムを巻き込んで地面を転がる。

なんとか止まった時には、俺の上にシグナムが乗っているような形になっていた。

俺は、右手のバツジを見せ付けた。

「……俺の、勝ちだ」

「……ああ、私の負けだ」

暗い中、夜空の星と一緒に彼女の呆れたような笑みがうつすらと見えた。

少し遠くから打ち上げ花火の光が、そんな笑みを僅かに照らした。



## 第三十三話

ドガツ！ という鈍い音が響く。

「ぶげっ!!」

殴られた氷室が地面を転がる。

開始からすでに十分近く。元からほぼ一方的だった氷室対ザフィーラであったが、あの一撃以降、より一層酷くなっていた。

すぐに立ち上がり、逃走を続行する。しかし、ダメージが大きいのか走る速度は明らかに遅くなっていた。

(設置されてる花火を上げればそれを辿って来るって話だけど、いつ来るんだよ!)

未だ来る気配のない助っ人に焦りを感じる。

事前に作戦会議として、綾ができるだけ素早くシグナムのバッジを奪い、こちらに来て二対一でザフィーラに勝つシナリオだった。シグナムに勝った後綾は、氷室があらかじめ設置された花火を打ち上げていき、それを辿って来るそうだ。シグナムに速攻で勝てるのか疑問だが、かといってザフィーラに勝つ算段がない氷室はそれに領いた。

しかし今言った通り、綾が速攻でシグナムに勝てるとは思いつらい。それどころか、

最悪シグナムに負ける可能性があるし、ぶっちゃけその確率の方が高い。

「うおっ!? ……くそつたれ!」

棘を寸前でよけ、適当に後ろに魔力弾を放って牽制する。

最悪の状況が脳裏に浮かびつつも、氷室は綾を信じるしかなかった。念話は自分の座標を綾が正確に知らないから綾の現状を知ることができないというのもあるが、何より自分達の現状である。

氷室他、『インテリ不良』は今のところ守護騎士一人にも勝てていない。

戦闘以外の勝利でもカウントされるのはすでに知ってはいたが、自分含めてチームにいる人は皆ガラが良いとは言えず、綾達のようにヴィータやシャマルに勝負を挑めなかったのだ。

ここで勝てなければ仲間が失格に、という優しい考えではない。ここでスターチップを獲得できなくても自分は生き残れる。しかし、今後を考えるとチップ数がゼロになるのはどうしても避けたいのである。

(……お、花火みつけ。さっさと打ち上げるか)

次の打ち上げ花火を見つけた氷室が、着火作業を取りかかる。

……が。

「オオオオオッ!」

「いいっ!?!」

拳を構えたザフィーラが接近してきた。咄嗟に氷室は右腕で防ぐ。

ボキツ! という、嫌な音が聞こえた。

「があっ!?!」

勢いは止まらず腹に拳を受けた氷室は吹っ飛ばされ、地面を転がる。

止まって右腕を見ると、やはりというか右腕が完全に折れてしまっていた。

「げほっ、ぐぐっ………、こいつは……マジでやべえなあ……」

杖は吹っ飛ばされた衝撃で手放してしまい、離れたところに転がってしまった。手を伸ばしても届かない。立ち上がろうにも今までのダメージや骨折の痛みが大きい。

そして、予期していた最悪な展開がやってきた。

「ザフィーラ」

(げっ………!)

シグナムが来た。

所々、甲冑や身体に傷や焼けた跡があるが、そこまで大きなものじゃない。そして何より、バツジが付いている。

バツジ付きで、彼女がここにいる。それが意味するものは、氷室には一つしか思い浮かぶことがなかった。

綾が、負けた。

「シグナムか……」

「終わったから来てみたが……私が来るには遅かったか？」

「ああ……今終わるところだ……」

言つて、ザフィーラが近づいてきた。

ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ。

「こんのっ……」

急いで立ち上がり、左手に魔力を付与させて殴りかかる。

だが氷室の火事場の攻撃はあっさりと掴まれ……

「ふんっ！」

「がはっ!!」

そのまま地面叩きつけられた。

全身に鈍痛が響く。特に骨折している右腕の痛みは尋常ではなく、今度こそ痛みで起き上がれなくなつた。

右腕を押さえて動かなくなつた氷室から、ザフィーラはバッジを奪い取つた。

「ところで何か臭うが、ザフィーラも何か朝霧の策にやられたのか？」

ザフィーラが氷室のバッジを奪つてから、シグナムがそう言つた。

ザフィーラは「臭う」という言葉に若干苛立ちを持ったようだが、気を持ち直して頷く。

「……そんなところだ。シグナムもか？」

「ああ。おかげでいくらか食らってしまった。だがなかなか手が込んでいて敵ながら面白いものだった。

しかし、そうか……………

ならよかったぜ」

「っ!？」

ビリィッ!

シグナムの豹変に気づいて動いたザフィーラより早く、シグナム——否、シグナムの姿をした者がザフィーラのバツジを掠め取った。

そしてすぐに距離を離し、シグナムだった化けの皮が灰色の光となって剥がれ落ちた。

「残念だったな。二つとも、取らせてもらったぜ」

擬態していたシグナムの姿よりボロボロで、己の血で血まみれになっている綾が笑み

を浮かべた。

「綾！」

「悪いな氷室、苦勞させちまった。擬態してザフィーラに近づくには、どうしてもこいつの鼻を潰す必要があったんだ。変身魔法も、匂いまでは騙せないからな」

「くっ……！」

言われて、ザフィーラはようやく合点がいった。あの酷いにおいの汁は気を散らせる目的ではなく、嗅ぎ分けられることを妨害するためのものだと。

氷室もようやく納得した。氷室は作戦の概要を全て聞かせてくれなかったのだが、その理由がここにあったのだ。敵を騙すにはまず味方から、とはよく言ったものである。

「シグナムのバッジもこの通りだし、俺達の勝ちだ」

疲労もピークに達したのか肩で息をしながら、綾は勝利宣言をした。



綾の勝利宣言を、離れた家の塀に肘を置いて見ている者がいた。

ギル・グレアムを主とする猫素体の使い魔、リーゼロッテである。今は変身魔法で姿を偽っているだけでなく迷彩魔法も行使しているため誰にも気づかれていない。

(ふくん。限定条件とは言え守護騎士に勝つなんて、やるじゃんあいつ)

勝利条件が『相手を倒す』ではなく『相手のバツジを奪うか破壊する』だったとはいえ、戦闘込みの勝負で彼らが勝つのは予想外だった。

そしてその勝負に勝てるよう策を組んだ綾という奴もなかなかできる奴だ。策の一部には、実戦で通用しうるものもある。

だがその頭脳が有能だと感じる反面、今の自分達にとっての弊害になるかもしれないとも感じた。

(でも、あの頭脳を自由にさせてたら、いずれ父様の計画の邪魔、最悪は計画がバレる可能性も、少なからずともありえるわね……ここは、早いとこ摘み取って縛っておくか)

計画……闇の書の負の連鎖を終わらせるためにも、できるだけ弊害となる存在は消さなければならぬ。

殺す必要はない。さすがに闇の書に関係のない者を殺してしまつては主が悲しむだろう。昏倒させて、何もできないよう拘束、監禁してしまえば十分だ。二人とも魔力持ちだから、蒐集もさせよう。

堀から道路に出る。できるだけ音を立てぬよう注意を払って、弾丸のように速く駆け出した。

すでに対策をとられているという事実を知るのは、すぐ後のことである。



ザファイラに敗北を認めさせた俺は、結界の解除をさせる前に、次のある作業に取りかかっていた。

携帯を取り出して、あるものが保存されているフォルダを開く。

「ザファイラ、耳塞いだ方がいいぞ。すごく嫌な音を流すから」

「む?」

「氷室も、急げ」

「え? おう」

二人に注意を促し、事前の操作も終わった俺は、手元の携帯の決定キー……『再生』ボタンを、押した。

「むうつ」

「ぐあつ!!」

「うおつ? おいこれ、モスキート音か? どんだけデカくしてんだよ!」

氷室の言った通り、今流しているのは通称モスキート音。正確には高周波と言い、年齢や普段の音の環境などによつて聞こえる人と聞こえない人に差がある。俺には聞こ



えない周波数なのだが、氷室や元が狼のザフィーラには聞こえているらしい。音量はM AXである。かなりの大音量だろう。

モスキート音は主に夜間に若者の迷惑行為を防いだり、野良猫の糞尿対策などで使われる。

そして氷室にザフィーラの嗅覚を潰させた理由のように、変身魔法で変えられるのは見た目だけであり体質を変えられる訳ではない。

即ち。

「せっかく隠れていたのに、声でバレバレだぜ……つてなあ！」

振り返って、俺達のものではない苦悶の声を上げた方向に魔力弾を乱射する。

数発、何も無いはずの場所で魔力弾が弾けた。そこか！

「シグナム！」

「はああつ!!」

「っ！ チイツ！」

近くで待機してもらっていた彼女の名を呼ぶ。呼ばれたシグナムが出てきて魔力弾が弾けた場所を斬るが、先に避けられてしまった。

遅れて、魔法の迷彩が解け、仮面の男が正体を現した。

「貴様、何者だ」

「……………」

シグナムが問う。しかし当然ながら、仮面の男は何も答えない。

「まあシグナム。相手が何者とかはどうでもいいじゃないか。どっちにしろあなたの敵だろ」

「綾？」

「だけど俺は正直もう疲れた。これ以上被害は食らいたくないし、あんたはもう引いてくれや」

「……………それで、引き下がると思っているのか」

「この不快音を聞きながらシグナムと張り合えるのか？ そんなだつせえ仮面着けてるってことは、顔を見られることですらタブーなんだろう？」

まあ俺達転生者は皆、顔どころか正体知ってる訳だけど。

「……………チツ」

仮面の男は舌打ちをして、静かに姿を暗闇に消していった。

心配がなくなつたのを感じ取ってから、俺はモスキート音を消して携帯を閉じる。

「……………まつ、こんなもんだろ」

「すまない、綾」

いきなりシグナムが謝ってきた。

「何を謝ってんだか」

「見て感じたが、奴の実力は生半可なものではなかった。私一人では退けることができなかつたかもしれん」

「俺は自己防衛で動いただけだ。感謝するのはこっちの方さ」

「そうか。ところで、どうして奴の存在に気づけた？」

「まあ、あれだ。前にも襲われたことがあつてな。予防線にかかつただけだよ」

当然だが、思いつきり嘘である。まあ、これぐらい無問題だろ。

「さ、勝負の約束だ。何も取らずに引いてくれ」

「ああ。もう管理局も結界の外に來ているだろう。ここで引き上げだ。ザフィーラ、行くぞ」

「ああ」

結界が解かれ、二人は素早く離脱していった。残つたのは、俺と氷室だけになった。緊張が解け、二人揃って溜め息を吐く。

「しつかし、お前だつたんなら俺のバツジ取られる前に動いてくれよ」

「ザフィーラを完全に騙すためだつたんだ。あれくらい我慢しろ……俺だつて大怪我したんだぞ」

何はともあれ、これで一安心……後はアースラの戦闘員が来て安全に家へ……あ。

「あ」

「どうした？」

「リンディさんへの言い訳……話す内容忘れちゃった……それあっても説教来るし……」

「……あーあ。俺知ーらねっと」

「何言ってるんだ。お前も説教確定だよ」

「あ」

……締まらないなあ。

チーム反逆者とチームインテリ不良、シグナムとザファイラに勝利。  
攻略者、朝霧綾と烏間氷室。

## 第三十四話

まあ、やはりというか、予想通りというか、ここまで来たら当然と言うべきか。

何を言いたいかというと、毎回無茶をした後必ずあるアレが来るということであつた。

「反省、しているのかしら？」

「しています……」

現在、リンディさん……いやいや、リンディ様の説教タイムなのである。俺も氷室も正座で。

もう、素晴らしいほどの笑顔が素晴らしいくらいに怖い。笑顔Ⅱ怒っているって構図、いつ生まれたんだらうね。俺達の真の天敵ってリンディさんなんじゃないだらうか。

あ、ちなみに言つとくけどこの場に末崎はいないのだ。俺達より離れたところにいたから関わってないと勘違いされ、それをいいことに回避に成功したらしい。おのれ……！

「話聞いているかしら？」 現実逃避しても聞いてなかったところからちやんと再開してあ

げるから♪」

「はっ」

ああ、ヤバいな。さすがに四回目になれば限界が来るよな……これがリアル『仏の顔は三度まで』なのか。そうなのか。

「聞いてなかったわね。じゃあまたリピートします」

すいませんマジでごめんなさい。

「……おい、俺達って、怪我人だよな？」

氷室がすごく小さな声で震えながら訊いてきた。

ああ、怪我人だな。ついでに言ったらまだまともな手当てを受けていない状態だ。そんな状態で正座して聞くのだからもう色々ヤバい。

あと、氷室。それは今口にすべきことじゃないぞ。さもなくば……

「氷室さん……？ その怪我人になった原因が自分達にあること、理解してますよね……？」

「あ、はい。すいません」

……とにかく黙って聞いていよう。そうしよう。

説教から解放されたのは、それから一時間弱経ってからのことだった。怪我の手当て？ 説教聞きながら医務員にやってもらったよ。



「ヤバかったな……」

「ああ、ヤバかったな……リンディさんの説教」

「いや、自業自得ですよね」

ユーノも辛辣な言葉を使うようになったな。

アースラの医務室に移送された俺達は、検査を受けた後ベッドでおとなしく横になっていた。

以前、フェイトとやり合った後の時は医務員に回復魔法をかけてもらっていたのだが、今回はそういうのが一切ない。

なぜか。リンディさん曰わく、「あなた達は回復させたそばから無茶をするから、反省の意味も込めて回復促進なんてやりません」とのこと。……うん、俺が悪いんだな。うん。

「綾さんは無茶をしすぎです。ついこの間の怪我が治りきつてない状態でまた無茶をして……本当に危険ですよ?」

フェイトが心配そうに言った。

現在の医務室にいるのは俺と氷室の他に、ユーノとフェイトが来ていた。海斗達？

入れたら騒がれそうだとリンデイさんが規制したらしい。説教といい、もう扱いがわかってきているな。多分。

「まあ、大丈夫だろ。お前達よりは体はできてる」

「綾さんもまだ体が出来上がってないんですから、ダメです」

「お前達よりはって言ったろ」

「屁理屈はいいです」

何だろう、ユーノが厳しい。ここまで厳しきでできてたっけこの子？

「ところでユーノ、頼みがある」

「ダメです」

「まず聞けよ」

「どうせ回復魔法をかけてくれて感じてでしょう。ダメです」

「左手の傷口を塞ぐだけでいい」

「ダメです」

「リンデイさんに止められてるのか」

「それ以前の問題ですよ。ミッドの検査を甘く見ないでください」

言うど、ユーノはモニターを展開した。



モニターに映し出されているのは誰かの……ていうか俺のレントゲン写真だった。借りたのかわざわざ。

そしてユーノはそのモニターを指差して叫んだ。

「一体どう戦ったら身体の中がこんなにボロボロになるんですか!! 説明してくださいよー!」

「強化魔法を合わせて七つ付与させた。うち四つ……いや五つか。強化魔力を追加した」

ブチッブチッブチッ。

あ、ユーノがキレた……ん? 二つ効果音が多いな。なんでだ?

「ブーストオーバーどんだけ強化超過してるんですかあなたは!!」

「そうですよ! 死んでしまえますよ!!」

うち一つはフェイトからだった。

彼女には珍しく強い口調で、身を乗り出して本気で怒っているのだが、その際両手を置いた位置が俺の、中身がボロボロな腹の上で、そこに体重をかけている訳でだ。

「ぐえぶっ」

潰れたような声を出してしまった。痛い! 苦しい!

なのはだつたらまだわからなかったのかもしれないけど、フェイトは訓練を積んでる

からなあ……過剰強化の危険性も知ってるのだろう。後に危険なフォームを開発する癖に。

とうか俺の腹に手を置くこれって、天然？ それともわざと？ どっちにしろ凶悪だと言わざるを得ない。

ところで、あと一つは？

「……………」

「……あの、リンディさん？」

「何かしら？ 綾さん」

「その、恐ろしいほど素敵な笑顔の理由を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」  
「ついさつき、あなたの検査結果を見せてもらいました。ついでに、今の話も聞かせてもらいましたよ？ 具体的には、あなたがした無茶について」

「……………ああ」

リンディさんの説教。それは、ひよつとしたら指令以上に避けられないものなのかもしれない。

……………ぎゃー！



またリンデイさんの説教を受けてもう寝ることはできず、いや、もはや寝る気になれず、そのまま昼になった。アースラの中だから景色は変わらんけど。

「……さすがに二回目は効いたわー」

「だから、自業自得じゃね？」

言うな。

現在、見舞いを解禁された海斗が来ていた。竹太刀はバイト、由衣は学校である。ああ、休日明けの学校ってことは今日フェイトが聖祥小学校に転校する日だったか。別に関係ないけど。

「で、結局どうなったんだ？」

「回復魔法はかけてくれなかった。勝手に俺達がやらないようにデバイスも没収されちゃった。正直、マズい」

まだ来てないが、夜天の写本を持ったことで来るはずの指令に備えるためにも、少なくとも左手の怪我だけはなんとかしたい。

という訳で。

「海斗、デバイス貸してくれ」

「悪い、俺も緊急時以外は預かるってことでリンデイさんに没収されちゃった」

おのれえ!! リンディさん見切つてやがる!

じゃあ、氷室は!?

「今連絡入れてみたが、同じく没収されたらしいぜ」

シイイット!!

ある意味最大の敵が味方にいようとは。あ、リーゼ姉妹も管理局か。

「で、どうすんだよ?」

「どうするか……」

才に頼むか? いや、あいつはまだ守護騎士攻略で忙しいから、今頼むのは迷惑か。見つかつて没収なんてことになれば攻略不能になりかねないし……

プルルルル。プルルルル。

「ん、電話?」

誰からだろう? そう思いながら携帯を開き、差出人を確認して……今の悩みがその瞬間、すうつと消え去つた。

差出人は、管理者。神からの、呼び出し電話<sup>コイ</sup>だった。

ゴクリと唾を飲み込み、通話ボタンを押し、耳に当てる。

奴の声が、聞こえた。

『守護騎士全員の攻略、おめでどう』

「……………それを言うただけに、電話をかけたにきた訳じゃないだろう？」

『……………そう。汝に、更なる指令を与える。汝の場合は、拒否は認めない』

緊急指令と同等、ということか。

……………何が来る？

『アルハザードにて、夜天の魔導書……………正しくはその写本を手に入れたな？ 十二月二

十四日、闇の書覚醒の時にそれを持って覚醒場所の半径五百メートル圏内へと行け。

……………指令は、追って説明する』

言うだけ言っつて、奴は一方的に通話を切った。

まだ内容を言うつもりはないか……………だけど闇の書覚醒場所付近に行けつてことは、管

制人格と勝負しろつてことか？

……………それと、『俺の場合は』？ どういうことだ？

「綾？ 一体誰からの電話なんだ？」

海斗が訊いてきた。

……………さすがに、ここに海斗を巻き込むのは危険か。これは俺が夜天の写本を持ち出したことから生まれた問題だ。写本のことは知ってるとは言え、本当に巻き込む訳にはいかない。

「……………いや、竹太刀からな、調子はどうだつてさ」

俺はおどけたような顔をして、嘘を言った。

「ん、そうか？ 急にマジな顔になるから、何かあったのかと思っただぜ」

「ああ。こんな時間に電話かけてくるものだから何かあったのかと思っちまった」  
「ふーん。じゃ、そろそろ戻るよ。また来るからなー」

「ああ。今度来た時は何か暇つぶしの道具も持ってきてくれ。片手でできる奴な」  
「うーっす」

海斗が出て行き、自動ドアが閉まってから、氷室が声をかけてきた。

「おい」

「なんだ」

「実際、何の電話だったんだ？ あいつに言ったのは嘘だろ？」

「……クリスマスイブに、闇の書覚醒の現場付近に行け……だとき。後は当日説明するらしい」

「行くのか？」

「緊急指令同様、強制だと。俺はな」

「お前はつて、どういう意味だ？ お前への指令じゃねえのか？」

「俺にもよくわからない。けど、そういうことらしい」

「一人で行くのか？」

「ああ。誰かを巻き込むつもりはないし、これは俺と神の勝負だ」

「言うねえ。その身体でか？」

「まだ三週間近くある」

「左手のそれとか、三週間程度じゃ治りようがないと思うがな」

「……………」

俺が黙ると、氷室は溜め息をついて携帯を操作し、どこかにかけてた。

「おう、俺だ。お前、今デバイスあんだろ？ それに回復系の魔法あるか？ ……ああ、

そうか。ならすぐそいつのデバイス持ってこい。……ああ、今すぐだ。デバイス取られ

んなよ」

ピツと、氷室が電話を切った。

「今由樹に訊いたところ、田嶋のデバイスに回復魔法が組み立てるらしい。今持つてく

るだと」

「氷室？」

「そんな身体じゃまともに動けねえだろ。せめて自分の魔力でできるだけ回復しとけ」

「……………」

「礼なら由樹のチームに言いな。俺はお前の戦いを拝見させてもらうぜ」

……………氷室らしい言い方だ。

俺は身体を横にし、デバイスの到着を待つことにした。  
十二月の二十四日に、神との勝負。  
失敗は、許されない。



## 第三十五話

どうしてこうなった、という台詞を考えた人は凄いなと才は思った。

なぜ彼がそう思ったか。簡単だ。今、自分自身がどうしてこうなったと考えているからだ。

「あう、えつと……才、どうしよう。緊張してきちゃった」

隣にはアースラで半年ほどの付き合いになる金髪の少女が狼狽えていた。

ここは、私立聖祥大学付属小学校。なのはの通う学校。

才とフェイトがいる場所は教室の扉の前。二人ともこの生徒の指定制服に身に付けている。

今日から、才はフェイトと共にこの学校の生徒なのである。



アースラスタッフの引越しの日に遡る。

引越し作業が終わり、フェイト達が翠屋制服を受け取り、綾が氷室と取引を行って

いる頃。

海斗や竹太刀とともに才がマンシヨンでクロノとエイミイの話を聞いていた頃、マンシヨンにあるものが届いていた。

その届け物を受け取ったエイミイが戻ってきた。

「才くん才くん！ はい、これ」

「……………これは？」

「開けてみて？」

言われるまま開けてみると、そこには白い制服が入っていた。

「……………これは？」

一つ前の言葉とは違うニュアンスで才が尋ねた。

「聖祥小学校の制服。休み明けから、フェイトちゃんと一緒に小学三年生ね」

「……………え？」

表情を一切変えないまま、才は制服とエイミイの顔を交互に見た。

「才くん、両親がいない関係で学校に行つてないんだつたよね？ リンディ提督が親代わりになって手続きしたから。やっぱ学校に行ける方がいいでしょ？」

「そうだ。才はリンディ達にそう説明した。なので学校に通つておらず、半年間アースラに住み込んで無償奉仕活動も可能となっていたのである。」

「……………えっと」

「一応、なのはとフェイトの護衛もある」

クロノも入ってきた。

「なのはもフェイトも、現在デバイスが修理段階で丸腰状態だ。数日間とは言え、襲われる可能性も否定できない。他にも何かあつた時を考えて、君を護衛として行かせた方がいいということになつてな」

「……………藤木さんは？ あの子も襲われる可能性が否定できないんじゃないの？」

「あの子にはあの子で護衛を付ける方針で決まつた」

「……………了解」

どっちにしろ、手続きがもう終わつてるのだから拒否は無理か。と才は諦め、頷くしかなかつた。



で、休み明けの転校初日の今日、今、ここに至る訳だ。

「才くん、フェイトさん。どうぞー」

「……………行くよ」

「え、あ……う、うん」

教室から担任の声がかかり、まずは才が先鋒として教室に入る。オドオドしながらも、フェイトも後に続き、二人とも教壇の上へ。

「ではお二人とも、自己紹介をどうぞ」

「……天翔才です。よろしくお願ひします」

「フ、フェイト・テストロツサです。よろしくお願ひします」

そして礼。教室中から拍手が鳴り響いた。



フェイトにとって緊張と困惑の連続である転校初日、その午前の部も終え、昼休み。

なのは達、所謂聖祥の三人組はフェイトを屋上へと案内し、昼食とした。

「フェイトちゃんのお弁当、誰が作ったの？ リンディさん？」

「ううん、今日は竹太刀さんが。姉さんの介護の関係で綾さん達が住み込んでるんだ」

すずかの質問に簡単に説明しておく。

本当は綾が担当する予定だったのだが、その綾が昨日の夜に大怪我。やむなく竹太刀が担当することになったのであるが、ちよつとそのことについて少し悩んでもいた。

(無茶をさせないためにユーノやリンディ提督に賛成したけど、一切禁止はやりすぎたかな……回復魔法はダメだけど、治癒補助ぐらいはよかったかも)

綾のあまりの無茶に対して怒った勢いの判断に、今更ながら少し反省していた。

実はフェイト、一度だけだがアースラで綾の手料理を食べたことがある。手料理……というよりはスイーツなのだが、それはとても美味しく、彼の料理の腕がかなりのものだと知り、自分が学校に通えるかわかってから彼の弁当が楽しみだった点もあった。

まあ、完全に回復させたりしたら、ユーノが言ったようにまた無茶しそうだから、反省したと言っても治癒補助止まりなのであるが。

「あー、竹太刀さんも綾さんも料理上手なんだよねー。この前なんて綾さんが翠屋でお父さんの新作の隠し味を見抜いたりしてー」

「ああ、そんな話あったわねー。私んちに来た時に由衣が持ってきたあのお菓子、あれも綾さんの手作りなんだっけ」

「あれ、美味しかったよねー」

(……やっぱり、ちよつとリンディ提督にお願いしてみようかな)

三人の会話に少し罪悪感を持ったフェイトは、治癒補助だけでも頼むよう交渉してみようと思った。

「……それにしても……」

アリサは一旦その話題を打ち切って、フェイトと一緒に連れてきたある人物をジト目で見た。

才である。フェイトが誘い、こうして同じく食事をしているのだが……

「……あんた、会話には参加せず、弁当はおにぎりで、右利きのはずなのになぜか左手でペンを持って、一体何書いているの？」

才の状況を事細かに解説した後にはアリサが尋ねた。

才はアリサが言った通りのことを黙々と行っていた。ノートの上に紙を乗せ、その紙になにやら書いている。

「才くん、何書いてるの？」

試しになのはが才の背後に回り込んで、彼の書いているものを覗き込んだ。

……すぐに戻ってきた。しかも涙目。

「アリサちゃん！ 才くんが全くわからない言葉を書いている！ 読めない！」

「ええ？ どれどれ……」

次にアリサが向かい、すずかもその後続いた。

一瞬で、アリサの眉間に濃い皺ができた。

「……ええ？ えっと、なにこれ？」

「……えっと、何かの暗号、かな？」

気になったのでフェイトも覗いてみることにした。

(……………え?)

その紙面に、首を傾げる他なかった。

紙面には、バラバラな箇所、日本語でも英語でも、ましてやミッド語でもない文字が単語単語で書かれていた。右上には何か線が引かれている。しかしフェイトには、何かを書いているということとした理解できない。

「……………えつと……………これ何語?」

「……………ロシア語」

「ロシア語!? 普通英語じゃないの!?!」

「わ、私英語もあまりわからないんだけど……………」

才の回答に、アリサがツツコんだ。なのはアリサの台詞に少し顔が引きつっている。というか、まず小学三年生なのなのは意見が普通なのであるが。

才はその空白だらけの文(?)が書き終わったらしく、事前に持ってきていた同じような紙数枚に重ね、その数枚の隅を纏めて折り、そして後ろにいるアリサに差し出した。

「?」

「……………読んでみる?」

「え? えつと……………いい、いいわよ。読んでやろうじゃない!」

アリサは強がって紙束を受け取った。

心配だったのか、さすががこっそり訊いた。

「アリサちゃん……ロシア語なんて読めるの？」

「よ、読めないわよ！ でも、なんか馬鹿にされてる気がしてならないの！」

「馬鹿にしてはいないと思うけどなあ……」

「……読み方がわかれば合格」

才がボソツと呟くように言った。

それにより、アリサの闘争心に火がついた。

「上等よ！ 読んでみせるわ！」

アリサは言つて、紙をパラパラと捲った。

紙には全てバラバラな箇所に単語が書かれている。右上にはさっきみたのは縦の直線だったのが、斜めだったり、曲線だったりしている。そしてこの謎の文と図は裏にもあるのだ。しかし裏の場合には、図の位置が左右逆になっている。

「う、うう……」

アリサが唸る。すずかも困り顔で、なのはに至つては頭から煙が出そうになっていた。

そんな中、フェイトは淡々と頭の中で紙束を整理していた。



読み方がわかれば合格、と言っていたのだから、これは発想の問題だろう。だとすれば、ただ読むだけではわからない。

（読み方に法則性が？ それとも何かを隠すとか……）

「……今日は、いい天気だね」

「え？」

「ここで天気の話!?! もっと別のタイミングないの!?!」

「日差しが強い」

（日差し？ 紙と、日差し………あ、ひよつとして）

「アリサ、それ、貸してくれる？」

「え？ いいわよ。はい」

閃いたフェイトは、アリサから紙束を受け取り、軽く角を揃える。そして、太陽の光に翳してみた。

すると、光によって紙が透け、単語は一つの文に、線は一つの図形になったではないか。

「「おお〜！」」

「……合格」

三人の感嘆声。続いて、才の合格の一声が発せられた。

「すごいーい！　すごいよフェイトちゃん！」

(あれ……でもこれ……)

喜ぶなのはに微笑み返しながらも、フェイトは完成したそれに疑問を持った。ロシア語ということで文は読めないが、図形は別だ。

図形……というか、設計図のようであるそれ。それに描かれている薬莖のようなものに見覚えがあった。

『あの、才。これって……』

『……念話つてことは、気づいたんだね。それは僕のデバイス用の、ベルカカートリッジシステムの搭載と運用理論……』

やはり、とフェイトは思った。薬莖型のこれは、カートリッジなのだ。

『カートリッジシステムの構造や設計を調べて、僕のデバイスに搭載するために必要なものを調べて計算した。必要な部品、必要な耐久力、増える重量、使用時の増加魔力やデバイスと術者にかかる反動……』

『あ、えつと、それが、この一枚分に？』

と、ここで念話を聞いたなのはも会話に入ってきた。話が長くなりそうだったので無理やり割り込もうとしたのが窺える。

『それは有り得ない。合計で二十数枚分。それはその一部を思い出して書いた……』

『えっと、わざわざロシア語で、こんな風に書いた理由は……?』

フエイトが気になったところを尋ねた。思い出して書いたというのとはとんでもない話だが、それ以上にアースラスタッフには読めない言語で書く必要があるのだろうか。『気分。書いてる途中で綾だったらすぐに読み方を気づかれそうだと思つて、さらにレベルを落としたそれを君達に見せることにした』

『あー……そうなんだ』

フエイトは詳しくツツコむのはやめた。やめるべきだと思つた。気分でこんなロシア語の暗号を、しかも裏の場合は文字や線を反転させながら書いたのだ。もはや適いそうにない。

そして、カートリッジシステムの運用理論ということだと思つたことが一つできた。

『才、この理論、私達のデバイスでも使えるかな?』

『使えないよ。僕用の設計だから』

バツサリ斬られた。

『その理論を元に二人のデバイスそれぞれのカートリッジシステム運用理論を作るのは可能かもしれない。けど、僕は他人のものまで責任はとれないから、技術部に相談した方がいいと思う。それもすでに技術部に渡してあるから……』

『うん、わかつた。そうするよ』

『フェイトちゃん。私も、お願いしてみるの。今度は絶対、負けないように』  
『うん。私達も、もっと強くなるために』

二人の決意は固まった。

二人のデバイスも、新たな力を自ら望み、二人と二機はより強さを得る。

## 第三十六話

転校から二日程。学生となった才は、学校から帰宅する夕方から夜にかけて、アースラへ向かう日々になっていった。

才は独自で調べてミッド式デバイス用のカートリッジシステムの理論を組み上げて提出した訳なのだが、それを実際にデバイスに組み込む作業も行っているのである。

「才くん、C-21のパーツ取ってくれる？」

「はい……これですネ」

「そうそう。才くんは物分かりが早いね」

才のことを子供のように（実際身体は子供だが）褒めながら、管理局技術部、マリエル・アテンザは机上の純白の杖にパーツを組み込んでいく。才はその様子を横目で見ながら、目の前に展開したディスプレイのキーの操作を再開した。

いくら理論を組み上げたと言えど、実際にデバイスを組み立てる技術まで持ち合わせていない才はマリエルにそれを頼み、自分はその作業を見学しつつもデータの確認と調整、さらにはレイジングハートとバルディッシュのカートリッジシステム運用理論の制作までやっていた。

「いやー、それにしても……」

マリエルは困ったような、あるいは参ったような顔を才に向けた。

「カートリッジ理論を組み上げるだけじゃなく、そんなマルチタスクもこなせるなんて、ホントすごいよね……」

「……マルチタスクは、魔法戦では必要な技能では？」

「まあ、確かにそうらしいけど。いや、私は戦闘員じゃないからよくわからないけど」  
涼しく返す才に、マリエルは苦笑を通り越して顔が引きつっていた。

才は椅子に座ってディスプレイ操作を行っている訳なのだが、その表示数が異常だった。カートリッジシステムの汎用理論、自分のデータベース用理論、レイジングハート用理論、バルディッシュ用理論。これら四つの高速演算を同時にやってのけ、その結果を両手は勿論のこと、両足（裸足）を用いて入力、再度確認して微調整を行っているのだ。しかもその作業を、大量のなのはやフェイトの魔法戦などのデータ映像、ベルカ式データベースのデータ、その他諸々を見ながら行い、マリエルの作業を観察し、手伝い、会話もこなす。

ぶつちやけたマリエルの感想を言えば、この人本当に人間なのかと疑いたくなるような光景だった。

「えっと……そんなに一辺にやって大丈夫？　こんがらがったりしない？」

「……一つ一つ冷静に判断すれば大丈夫です。確認もしてませんが、その上でマリエルさんにも再度確認をお願いしてますし」

「うん、私の確認の時点で直す必要がないのが怖いんだよね」

「そもそも、才が確認して微調整するところでも調整前で十分だと思えるぐらいである。」

「こんなにすごいなら、管理局に入って技術部で理論立てればもう凄い活躍になるんじゃないかな？ 戦闘員ばかりに目がいきがちなんだけど、他のスタッフも結構人員不足なんだよねえ」

「……どうでしょうね」

マリエルのさり気ない誘いに、才はなんとなくそう返した。

「……ところで、『白杖』<sup>しろづえ</sup>のカートリッジ機構の完成はいつになりそうですか？」

「え？ ああ、うん。才くんのお手伝いのおかげで、早くて明日にはもう完成かな？ 完成したら早速起動するつもり？」

「はい。現段階では理論上の安全性ですから、試験運用をいくつかして立証しなければいけないかと……」

『白杖』とは、今マリエルがカートリッジシステムの組み込みを行っている、才のデバイスである。

そして白杖には、『ミッド式デバイスにカートリッジシステムを組み込んだ試験機体』として導入される。ミッド式デバイスはベルカ式に比べて強度面で脆いため、術者だけでなくデバイスにも負担がかかるカートリッジシステムは搭載されていなかった。そこで発案者である才が自らのデバイスで試験運用することを志願したのである。

「ふーん。ところで、相手って決まってるの？」

才の答えに頷きながら、マリエルはなんとなく気になったことを尋ねてみた。

「ええ。優秀な執務官に相手を願いました」

才はそう答えた。



翌日、訓練室。

そこでは才と、クロノが対峙していた。

クロノはすでにS2Uを手にしているが、対する才が手にしているのは、未だに待機状態の白いクリスタルである。

才がそのクリスタルを、上に投げる。

「……白杖、展開。更新データを起動……バリアジャケット再構築……」



才が真っ白な光に包まれ、一瞬にしてバリアジャケットに包まれ、そして新たなシステムが組み込まれた白杖を手にした。

才がバリアジャケットとして纏っているものは、白杖と同じ純白のタキシード。特に特別な使用もないが、ボタンもネクタイも、何もかも純白一つだ。手にも真っ白な手袋がはめられていて、顔と髪だけが色を表している。

「……白杖、カートリッジロード」

才がそう命令すると、白杖のクリスタルコアの付け根部分がスライドし、空薬莖が一つ排出される。

すると、才の魔力が増幅され、溢れ出た魔力が髪を撫で揺らした。

少し時間を置いて、才はモニターを複数展開。流れるようにスクロールされて表示されるデータを確認する。

「カートリッジシステム正常稼働……術者及び白杖への負担も規定内……稼働状況良好……」

『こつちも確認してるけど、異常はないよ』

測定を行っているマリエルがモニターで顔を出し、才に報告した。

「空撃ちを数発……それから模擬戦でいい？」

「ああ。それで構わない」

「……砲撃術式形成……術式内容を空撃ち使用に変更、再計算………砲撃、発動」

白杖を明後日の方向に向け、ボフツボフツと射程ゼロの空撃ちを行う。

その様子をクロノは黙って見ていたが、ふと口を開いた。

「なあ、前から思ってたんだが」

「………何？」

「そのデバイスの名前……白杖って、どうも味気ないとは思わないのか？ 確か、魔法も

分類名称だけで固有名称を付けてないんだったな」

『ああ、それ私も思った。もうちよつと個性的な名前が欲しいよねー』

「………」

才は答えずに空撃ちを済ませ、白杖の調子を確認したり、術式の調整計算を始めた。

「別にいちやもんをつける訳じゃないんだが、魔導師とデバイスは信頼しあつて互いに

力を発揮しあう相棒なんだから、多少でも思い入れというのを——」

「……機械に嘘や裏切りが、できると思う？」

「は？？」

『え？』

「機械に嘘や裏切りはできない。嘘をつくようにプログラムを組めばできるけど、結局のところは『嘘をつけ』という開発者の命令に従っているだけ……裏切りの概念がない

「デバイスに信頼の概念なんて、ない」

『いや才くん、そんな言い方は……』

「マリエル、否定はするな。解釈に違いがあるのは当然だ」

クロノはマリエルを止め、S2Uを構えて戦闘態勢へと入った。

「確かに君の言う通り、デバイスには裏切りの概念はないだろう。裏切りがないから信頼の概念だけがあるのはおかしい……それは一理あるのかもしれない。だが、君が誰かを信頼する場合には、必ず裏切りの可能性も考えるのか？」

「……ゼロであるとは言い切れない。だから僕は、裏切りがないとは言い切らない」  
モニターを全て閉じ、才も白杖を構える。

二人の足元に、魔法陣が展開される。

「なら……試してみるか？ 裏切りがない信頼と、信頼すらもない関係」

「……そんな対決以前に、僕は負けないつもりで行くけど」

「奇遇だな。僕もだ」

同時に、杖の先端を相手に向ける。

「……射撃」

「ステインガールレイ！」

二人の間で、魔力弾が弾けた。



「うわあ、開始の合図も待たずに始めちゃいましたよ……」

射砲撃をぶつ放しあっている二人を見て、マリエルは溜め息をついた。

そんなマリエルの耳にガシユン、という音が届いた。これは部屋の扉が開く音だ。

誰だろ、と思つて振り返ると、

「才が模擬戦をやると聞いた。始まつてんのか？」

「綾さん！ ホントに安静にしてないとダメですよ！」

「フェイトちゃん……」

入ってきたのはマリエルには面識がなかった綾と、その綾の袖を引つ張つて引き戻そうとするフェイトだった。かかと立ちで懸命に引つ張る姿は、駄々をこねる子供のように微笑ましい。その後ろから入ってきたなのは、普段は見ないフェイトの姿に苦笑している。

綾はフェイトには気にせず、マリエルに訊いた。

「で、どうなんです？」

「ああ、はい。模擬戦やってますけど……」

「じゃあ、俺にも見せてもらえますか？」

「構いませんが……」

「綾さん！」

「大丈夫だって、歩くぐらい」

「リンディ提督に言いつけますよ」

「それだけはやめてくれ。……座って観ればいいんだろ？」

綾は仕方なさそうに言って近くの椅子に座った。

「で、どんな感じですか？」

「カートリッジシステムの稼働状況は良好。いい感じですよ。クロノくんとも渡り合ってるし、これならレイジングハートやバルディッシュへの導入も可能そうね」

綾はモニターングされている二人の様子を見た。モニター内では二人が飛び回り、激しく射砲撃を打ち合っているのが見える。

「すごい……」

「クロノと互角……いやそれ以上かも……」

「……………」

なのはとフェイトが二人の戦いの様子を感じ嘆としている中、綾は才、そして彼のデバイスの動きのみを見ていた。

「マリエルさん。魔力測定の記事を見せてもらえますか？ それと才が出した演算結果の理論書も……あと計算機」

「え？ あ、はい」

「綾さん？ 何するんですか？」

「なのが尋ねた。」

「実際の値がどのくらいか、ちよいと計算をな。すぐに全部はできないだろうけど、暇潰しには最適だろ」

綾はそう答え、計算機を叩き始めた。



「ブレイズカノンッ！」

「砲撃」

二つの砲撃の衝突が爆風を巻き起こす。

爆風に髪が流されながら、才は白杖から空薬莖を一つ排出させる。

「……射撃。高速弾、弾数二……」

眩くような命令。白杖の先端から魔力弾が二つ、高速で爆発の煙の中に突っ込んだ。

魔力弾は煙を突き抜け、砲撃を撃つてからその場に留まっていたクロノへと突き進む。

「つとー！」

クロノは魔力弾の存在を確認してすぐ、魔法障壁を展開して攻撃に備えた。

これは牽制。煙の陰から自分を出して、そこに砲撃をするつもりだろう。牽制に使う魔力弾は威力もさほど大きくないのが定石であるためここで牽制弾を防ぎ、追撃に対しての備えをするのが得策。

そう考えたクロノであったが、それは覆されることになる。

高速で突撃してきた魔力弾が、障壁に当たる直前で速度を緩めず直角に曲がったのだ。

「なっ!?!」

クロノは驚きを隠せなかった。というのも、高速の魔力弾を減速なしに直角で曲げるのは高度な技術だからだ。

基本的に魔力弾の軌道操作を行う場合、曲げる前に減速させるかもしくは徐々にカーブを描く。急ブレーキですぐには止まらない車のように、魔力弾も急に止めるのは難しく、直角軌道も簡単にできたものじゃない。できないことはないが、魔力弾を自在に操作する必要があっても直角軌道まで行う必要性がないというのもある。

だが、その直角軌道が目の前で見せられた。そもそも煙でこちらの様子が見えないはずということもあって、クロノは一瞬だが硬直してしまった。そこに二つの魔力弾が迫る。

「うおっとー！」

なんとか直撃する前に前に出て、回避に成功する。だが才の攻撃はこれで終わりではなかった。

前方の煙から、今度は才自身が突っ込んできた。白杖に魔力付与をし、振りかぶっている。射砲撃を軸にする魔導師が近接戦をするのはナンセンスなのだが、先の奇襲をギリギリよけたばかりでクロノは隙だらけだ。

「っー！」

「つくー！」

ガギンツ！ という硬質な音を響かせ、杖同士でしのぎを削りあう。

才は追撃はさらに続けるつもりだったようだ。左拳を引き、殴る態勢を取った。左手にも魔力付与がされている。

押されているクロノ。魔力弾の直角軌道は予想外だったが、相手がクロスレンジを仕掛けてくるのは読んでいた。その時の保険もかけてある。

(今だ！)



クロノは、その保険のトリガーを引いた。

クロノが用意した保険とは遅延型バインド。相手との接触状態を一定時間続けなければ起動、拘束するものだ。そのバインドを念のため三つ、仕掛けている。

そのバインドが起動され、才に魔力の鎖が向かい、拘束する。

「勝負を焦ったな。チエックメイトだ」

「……そうだね。僕がチエックメイトだ」

才の落ち着いた声。そしてすぐにパキンツという音と共に碎け散った。

「……拘束破壊術式の付与。フェイトの囑託試験を見て保険としてかけておいた」  
言つて、才は白杖をクロノに向けた。チャージはもう完了している。

「……前方は砲撃、後方にもさっきの射撃二つが構えてる……これでもう、いいんじゃないか？」

「……ふう、そうだな。目的のシステム試験は十分だし、参ったよ」

クロノは肩をすくめてそう言い、模擬戦は終了となった。



「理論値と実値が違うな……魔導発動の度に少しずつ変わってることからして、やっぱ

りそういうことか？」

「……何をやってるんだ君は」

模擬戦を終えてマリエルの元へ戻った二人が目にしたのは、いくつもの画面を見ながら計算機を叩き、出た数値を記録していく綾の姿だった。

眉尻をピクピクと上げながらクロノが尋ねる。その声でようやく二人に気づいた綾が振り返って、一言。

「……ああ、戻ってきたのか」

「ああ、戻ってきたのか。じゃない！ 何をやってるのかと訊いてるんだー！」

「何って、計算」

特に悪びれもせず、何でもなしのように言った綾に、クロノは余計にキレた。

「安静にしろと言ってるだろう！ 医務室に戻れ！ そして寝ろ！」

「大丈夫だってこのくらい。あともうちよいで区切りがいいから——」

「い い から 寝 ろ ！」

堪忍袋の尾が切れたクロノが綾の襟を掴んで無理やり引つ張りだした。突然掴まれたのに計算機や書類を手放さないとところを見ると、どうやら予測はしていたらしい。

「ああ、才。体感してどんな感じだった？」

引つ張られながらも、綾は才にそう尋ねた。

「ああ……やっぱり、実際は理論のようにはいかないよ」

「そう言いながらも理想値に限りなく近い状態にしてるところがすごいけどな」

「計算、できたんだ？」

「まだ半分程度で、荒い計算結果だけだな」

「……そう。まあ、今は療養に集中した方がいいよ」

「……そうかい。じゃあな」

綾はそのまま引きずられていった。

## 第三十七話

医務室で計算機、モニター、書類の三つとにらめっこして早数日。

確認の演算の周回数もはや二桁に達してきている中、俺の手はすでに止まっていた。

「やっぱり、そう……なんだなあ……」

「……なにが？」

氷室が尋ねてきた。

「この前の才の模擬戦。あれでの才の魔法運用効率の計算をしてたんだが」

「魔法運用効率？」

「読んで字のごとく、魔法を目的に沿って最も効率良く運用するためにどれほどの魔力を使えばいいのかってやつ。管理世界で世間的に出回ってる魔導術式のテンプレートはその計算で出た最適な値を基準にしてるそうだ」

「へえ、そんなのがあるのか。それで？」

「最適な値……すなわち理想値となる訳だが、現実として誤差等の影響で完全にその理想値で行うことはできない。それはわかるな？」

「まあ、当然だな」

「ところがだ。これ見ろ」

俺は書類とモニターを氷室に渡した。

「モニターは才が実際に模擬戦で魔法行使をした時の数値。順に追うと、数値が理想値に近づいている」

「近づくとぐらいじゃあ、何でもないんじゃないのか?」

「近づいていった結果、誤差0.01未満が何度も出ている。クロノやマリエルに聞いたが、まぐれや機械任せで出る数字じゃないらしい。そもそも近づくとことは調整してることだ。戦闘中に誤差0.01未満にすることを考えたら、それでも何でもないと思えるか?」

「……ふーん。まあいいさ、俺は今生きれるようにすることが目標なんでね。お前みたいにあいつを超えようなんざ思ってたねえし」

そう言つて氷室は渡したデータを返してきた。

それから、氷室は思い出したように話してきた。

「ああ、そーいやよ。すっかり忘れてたんだが」

「あ?」

「お前が色んなところにうろついている間にリンディが来てよ。お前が無茶やらかささない

ようにだとかでここにはアラートが聞こえないようにしたんだが」

「……？ それで？」

「原作軸で考えれば、なのはらはもう守護騎士との第二戦やつてるぜ？」



建物の陰に走り、白杖のカートリッジをロードする。

「……射撃。精密誘導弾、三発……」

才は呟くように命令を下して建物から僅かに出て、白杖から魔力弾を発射した。

発射された精密誘導弾——通常の誘導弾と比べてより細かく正確に操作できる——は、それぞれが法則性の見えない複雑な軌道を描き、目標——ザフィーラに襲いかかる。

「クツ……」

複雑な軌道を読み切れず、ザフィーラは手や足に魔力弾を受けてしまう。威力自体は大したことないのだが、関節や筋肉が反射的に強張り、動きが硬直してしまう。

「どりゃあああああっ!!」

「っ！ ぬおおおっ!!」

そこに追撃要員のアルフが魔力を込めた拳で殴りかかる。追撃の存在を確認したザ

ファイラは、半ば強引に身体を動かし、アルフと拳をぶつけ合った。

「……砲撃」

「っ、チイツー！」

拳同士で均衡している間を狙って、才が真上から至近距離で砲撃をかました。

ザファイラは避けようとする……が、掠って、手甲が一部砕けてしまう。

才はザファイラと距離を置き、アルフの隣に立つ。

「……即席コンビにしては、いい感じじゃないか？」

「まっ、あたしはフェイトとコンビの方が百倍以上の連携だけどねっ！」

「……そう」

才は大して気にした様子もなく白杖を構えた。

カートリッジシステムを手にしたとは言え、本人のスペックでは劣っているものが多い、戦闘での勝率は依然低いことを理解している才はコンビを組んで戦うことにしたのである。

アルフと組んだのは消去法なのだが、前衛で格闘戦を行うアルフと後衛で射砲撃を行う才のコンビネーションはなかなか以上の出来であった。特に才の射撃サポートは的確で、ザファイラの行く手を阻み、かつアルフの邪魔をしないでいる。

「……また、サポートする。そっちに合わせるから……」

指示をしようとして、才が何かに気づいた。

才が気配がする方向に防御陣を張る。すると、才に放たれた砲撃が張ったシールドに直撃した。

「え!?!」

「……………」

突然の奇襲にアルフが驚く中、才は射線上を辿る。

その先にいたのは、派手な装飾が施された杖を手にした、一人の少年だった。歳は大體十二、三歳といったところか。

「なんだいあいつ!?! おい! あんたの仲間か!」

「知らん」

ザフィーラは即答した。

才はあるものを確認した後、白杖を少年の方へと構えた。

「…………アルフ、ザフィーラの相手を任せて、いい?」

「別にいいよ。あんたこそ、しくじんじゃないよ」

「…………わかった」

才は魔力弾を少年の方に飛ばした。少年は建物の陰へと消えていったため、自身も飛び出した。



才が確認したのは、今きたメール……神からの緊急指令だった。干渉・解析魔法で見たのである。

内容は、

差出人：管理者

件名：緊急指令

内容：

守護騎士が撤退する前に『田所 郁也（たどころ いくや）』を戦闘不能にせよ。

なお、この指令の条件を満たし、守護騎士に一定のダメージを与えた場合、その守護騎士に勝利したと認定する。

成功条件：報酬：守護騎士が撤退する前に『田所郁也』を戦闘不能にする。スターチップを一個配布。

失敗条件：罰：自分が戦闘不能になる。もしくは『田所郁也』を戦闘不能にする前に守護騎士が撤退。スターチップを一個剥奪。

（ついに転生者同士の潰し合いが指令になったか……）

予想はしていた。きつとこういう指令が来るようにはなるはずだと。逆にそのよう

なことをしないなら、チップ強奪は即失格というルールは公開され、未然に失格者が出るのを防ぐはずだ。

『田所郁也』とは、おそらく先ほどの少年だろう。今回の指令は彼を潰せは達成ということのようだ。

そしておそらく、彼が戦闘不能になれば……

「……………」

才は少年が入っていった曲がり角へと消えていった差し掛かった。

「お前が、天翔才だな？」

「……………」

差し掛かった先に少年……田所郁也がいた。

「指令は見たよな？ まあ読まなくてもいいけど。お前に恨みとかはねえけどよ……

俺のために死ねえ!!」

田所は言つて、二つの魔力弾を才へと飛ばした。才はそれをよけるまでもなく、魔法防御で受け止める。

「……………」

「へっ！…これならどうだよ!!」

田所は続けて事前にチャージしていた高威力砲撃を撃ち出した。魔力弾を防いだた

めに身体が硬直していた才を、砲撃が直撃、爆風が巻き起こる。

「へへっ……これでチップは俺のもの……」

田所はこれで勝利を確信した。だが、田所は相手とその力を見誤っていた。

まず才のデバイス『白杖』は、守護騎士やなのは、フェイトのデバイスより劣るとは言え、専用のカートリッジシステムを組み込んだことによって大幅に強化されている。

だが、それは追加事項ではない。

「……………」

何よりも、才がその程度の戦法を見切れないはずがないのだ。

——無傷。煙が晴れた後、見えた結果がそれだった。

「……………は？」

田所が呆けた声を出した。

田所は過去に転生者を戦いで勝ち、潰したことがある。勝った時にはこの世界がデスゲームだと知っていたため、チップを奪う真似はしなかったのだが、実際には覚えがあった。

……だが、それ以上に、才の実力は転生者の中から抜き出していた。

才が、白杖を田所へと向ける。

「……射撃」

「っ!？」

田所は咄嗟に防御魔法を展開した。呆けた状態からその反応の早さはなかなかと言える。

……が、いつまで経っても相手の魔力光は見えない。

「あ? ……がつ!？」

衝撃は後ろから、突如としてやってきた。

「……迷彩弾。拘束用魔力鎖術式追加付与……」

パチンツと才が指を鳴らす。田所の後ろからジャラジャラと魔力の鎖が伸び、田所を雁字搦めにした。

「ぐっ……!？」

ジャンキン! と、拘束され倒れた田所の顔に白杖が突きつけられた。

「チエックメイト」

その言葉、そして表情を一切変えずに自分を見下ろす才に、田所は恐怖を覚えた。敗北……それが表す自分の未来がわかっていいるからだ。田所は負けられない状況にある。

だから、田所は切り札を切った。相手の心理を利用するという切り札を。

「チェックメイト……? 本当にお前がそれをできるのか? ここでお前が勝てば、俺は死ぬんだぜ? お前は人殺しになるんだぞ?」

実質的殺人。この言葉で相手の動揺を誘う作戦。

実際、田所はスターチップを持ってない。ここで指令に失敗すれば、本当に失格者として消される状況下にあった。

この作戦で相手が動揺している隙に拘束から抜け出し、一気に才を潰す。これが、田所の切り札だった。

「お前は俺を殺せるのか? お前は人殺しになれるのか? ああ!」

——だが。

「——できるよ」

「は……?」

「僕は神を討つ。そのために、その力を得るためなら、僕は今ここで君を殺すことも厭わない」

才の言葉には、迷いの欠片もなかった。

ガキユン、という音がした。田所にはその意味がよくわかった。白い杖から空となつた藁莖が一つ、落ちる。

殺される。



才、ザファイーラに勝利。

## 第三十八話

「才もこれで指令クリア。上々じゃねえか」

「……………」

そう上機嫌に言うのは氷室である。

今日、才は医務室に来て理論計算をしていた。わざわざここでしている理由は俺に計算を確認してほしいとのこと。という訳で俺は才の計算を眺めている。

「由樹んともクリアはしてるし。初期参加の面子は安全圏ってとこだな」

そう、氷室の言う通り由樹達もクリアしている。というのも、戦闘以外の勝負が有効だと竹太刀によって証明されてから似たような手順でクリアしたという感じだ。

……なお、氷室の言う初期参加メンバーの中に和也の名前が含まれていないのだが、氷室がわざと除外している他にはない。

「で、才はこの調子でヴィータやシグナムも勝ちにいくのか？」

氷室のその質問には、俺も才の反応を窺った。

俺もそれについては気になっていたところだ。ヴィータもシグナムも、戦闘での勝負は手強い相手。今時期戦闘以外で仕掛けることも難しいし、かと言って諦めるには早す



ぎる気もする。

才の回答は……

「……多分、無理だろうね……」

諦め……え？

「……諦めるのか？」

「……シグナムはほぼ確定的に無理。戦力差が大きいき、まず仕掛けるタイミングもない。フェイトとタッグ組むのも、多分できないと思う」

「ヴィータは？」

「……最初で最後のチャンスとして、クリスマスイブに見舞いの形で行けば、彼女には仕掛けられるかもしれない。でも、その場合には警戒されてるし、行けば闇の書覚醒に巻き込まれやすくなる。リスクが高い……それに、君は一人で挑戦したいんでしょ？」

「ん……まあ、な」

挑戦とは言わずもがな、イブの日に闇の書の覚醒に立ち会えというあれの話だ。

「なら、行かないことにするよ……邪魔にならないようにしたい……」

「……悪いな」

「ところでよ、綾。お前、デバイスどうすんだよ？」

氷室が挑戦に関して新たな話題を振ってきた。

「……ああ、それが。……俺もどうしようか考えてる」

俺はそう答えた。実際、これはかなり厳しい問題であつたりする。

相手はほぼ間違いなく闇の書管制人格。となると、間違いなく長杖一本では勝てないという問題が発生する。シグナム戦で使わせてもらった剣なんて焼け石に水程度にしかならないだろうし、そもそもどちらにも没収されている。主な原因俺。

「つーか、写本持つてるつつつてたよな。それは？」

「使えるかどうかわからん。マスター認証どうなつてんだか……まず、システムがどうなつてるのかすらわからない。神は夜天の書の写本つて言つてたから、システム改竄前であつてるはずだけど」

「……じゃあ、確かめて来ようか？」

顔を上げた才がそう言ってきた。



さらに数日後。

シヤマルははやてを送り、図書館に来ていた。蒐集を急いでいるが、こうした表向きの活動もしっかりしていかなければならない。

「じゃあはやてちゃん。夕方になったらお迎えに行きますから」

「うん。ほなな」

はやてを送り出し、シャマルは図書館を出る。今日の日中はヴィータ、ザフィーラが蒐集担当だ。二人のもしもの時に備えながら街で表向きの活動をするのが今日のシャマルである。

シャマルの普段することと言えば、近所の奥さん達との世間話。今日はどんな話が聞けるのか、また最近のニュースはどんなものだったかを思い出しながら、図書館を後にしようとする。

——そこに、声をかけられた。

『闇の書の守護騎士……シャマルさんですね？』

「っ!!」

念話がかかってきた方向に素早く振り向く。

振り向いた先、シャマルにじつと視線を向けていたのは、小さな少年——才だった。

『初めまして……でいいんでしょうね。天翔才と言います』

『才くん、ね。闇の書を知ってるってことはあなた、管理局の人ってことで間違いないかしら』

『……否定しません。ですが、今日あなたに話しかけたのは管理局とは関係なく、僕個人

のお願いがあるからです。通報も捕縛もしませんし、聞いていただけたら対価を支払います』

『……管理局とは関係ないって、そんなの証明できるの?』

『……今ここで通報しても逃げられるし、僕が捕縛を試みても失敗に終わるのが関の山でしょう。主が誰とわからない以上、ここで鉢合わせたところで特に意味もないはず』

『……………』

才の主がわからないという言葉聞いて、シャマルはひとまず心の中で安堵した。どうやら、自分のはやてを送っているところは見られなかったらしい。

『ところで、その対価って何なの?』

『……僕の魔力でどうです?』

『え…………?』

『僕の魔力を差し上げましょう。蒐集すれば、少しでも闇の書の足しになるでしょう?』  
これにはシャマルも驚いた。管理局とは関係ない理由で話しているとは言っても、彼は管理局員。その彼が、闇の書の完成を手助けするような発言をしているのだ。

『……あなた、本気なの?』

『ええ。まだ疑わしいなら、仲間を呼んでも構いません』

『……なら、そうさせてもらおうわ』

『……じゃあ、人気のない場所に移動しましょう。仲間にもそこに来るように言ってください』

移動すると共に、シヤマルはシグナムに通信を繋げた。



住宅街の路地裏に着いた二人は、静かにシグナムが来るのを待った。

二人が先に到着して十数分後、シグナムがやってきた。

「すまない。遅くなった」

「……いえ。気にしてません」

「そうか。……それで、お前は我等に頼みたいことがあるそうだな。己の魔力を差し出してまで、我等に頼むこととはなんだ？」

才はそこで、背負っていたリュックからあるものを取り出した。

箱だった。四角い、ただの箱。

「……それは？」

「……この中に入っているものの解析をしてほしいんです。調べて、その結果を教えて

もらうだけでいいです……できれば、中身を取り出さずにお願ひします」

「……管理局では、調べられないのか？」

「……管理局に見せるつもりはありません」

「ふむ……」

シグナムは悩んだ様子で黙り込んだ。

しばらくして、シグナムが口を開いた。

「……本当に、その中身を解析するだけでお前の魔力をいただけるのだな？」

「約束します。なんだったら、先払いでも構いませんよ？」

「……わかった」

シグナムはその条件を飲んだ。今は何よりも闇の書の完成が最優先だ。

「シヤマル、その解析を」

「ええ……わかったわ」

指示を受けたシヤマルは才から箱を受け取り、その場で解析を始めた。

「……ええ？」

解析を始めてすぐに、シヤマルの表情が驚きに染まった。

「え、嘘でしょ……？ これって……」

「シヤマル？ どうした？」

狼狽え始めるシヤマルに、シグナムはとりあえず訊いてみることにした。

シヤマルは振り向き、

『シグナム、これ……闇の書とほぼ同じシステムが積まれた魔導書が入ってる……』

『……なに?』

シグナムもその言葉には驚きを隠せなかった。それもそうだ。闇の書はロストログア。それもジュエルシードのような複数存在することが前提となる個体ではないのだから。

そう、才が解析の依頼をした箱の中身は、夜天の写本なのである。

写本の存在を知らないシグナムにとって驚きの結果は、まだあった。

『……それどころか、これ……私達の闇の書よりも馴染むような気が……』

シヤマルのその言葉も当然だった。写本とは言え、闇の書として改竄されるより前のあるべき姿なのだから。

『……お前、一体これをどこで手に入れた?』

「……それは知り合いの持ち物。ある世界で、その知り合いが見つけたものです。……解析できてみたいなので、それについて質問形式で答えてください」

『以前現れたらしい男が監視している可能性がありますので、通常の会話と並列して念話の方を答えてください』

「へ？ え、ええ」

通常の言葉と並列して聞こえてきた念話に一瞬戸惑いながらも、シヤマルは頷く。

「……まず一つ目。中に入っているそれについて、どういったものか教えてください」

『……この質問に、口頭では嘘の回答を、念話で本当の回答をしてください』

「えっと……転移型のロストログア、ね。そこまで危険なものでもないわ」

『……ほとんど闇の書と変わらない魔導書よ。魔導蒐集機能のところなんてそっくり』

「……転移型、ですか。人数や重量等、制限はどういったものですか？」

『闇の書と変わらないと言いましたが、マスターを侵食するシステムが付いているのですか？』

「ええっと……人数制限と……あ、あと回数制限があるわね。人数は……三人まで。回数も三、回まで」

『……そういうのはない……わ』

「……そうですか。転移距離はどのくらいですか？」

『……マスター認証について。どうなっていますか？』

「えっと………結、構……距離自体に制……限、は、ないわ……」

『誰にも……設定されてないわ。起動すれば、マスター認証も……できるけど』



「……………というか、やつぱり同時はちよつとキツいんだけど……………」

『我慢してください。……………話を少し戻しますが、闇の書と同じということについて、それには何か人格プログラムが入っているんですか?』

「……………使い方を説明してくれますか? 箱から出さずに」

「え、ええと……………転移座標……………を、イメージ、して……………それから……………ま、魔力を強めに、流し込むの、よ」

『は、入ってない……………わ』

「……………そうですか。以上で結構です」

『答えてくださって、ありがとうございます……………』

「え、ええ……………」

シヤマルは内心ぐつたりとした。片や闇の書にそっくりな未知の魔導書。もう片方は自分ででつち上げた架空のロストログア。両方の説明を同時に行うのはなかなか苦行であった。

「……………では、約束だ。リンカーコアから魔力をいただくぞ」

「……………どうぞ」

言つて、才は目を伏せて無抵抗な状態となる。

シグナムはリンカーコア摘出用の魔法を使い、才からリンカーコアを取り出す。そし

て、そこから死なない程度の加減で魔力を抜き取っていく。

「……………」

才が呻くようなことはなく、静かに蒐集が進み、数分で終了する。

「……確かに、いただいたぞ」

「ええ。それでは」

才は礼をして、静かに立ち去った。



(あの才って子、守護騎士に何を解析させたのかしら?)

空中で腕を組みながら、リーゼアリアは帰路に経つ才を眺めていた。勿論、姿が見られぬよう迷彩魔法を使い、かつ変身魔法で姿を偽っている。

当初はやてとシャマルを監視していたのだが、才とシャマルが接触してから才の言動の方を注意深く監視していた。そして人気のない路地裏での話を盗み聞きしていたのだが、真相は掴めていない。

というのも、シャマルが口頭で言ってるのがでっち上げた内容だと気づくのに遅れてしまったからだ。最初シャマルが言い淀んでいた理由は解析をしながら話していたと

思っていた。しかし、シヤマルの言葉のテンポが異様に悪いことから、念話の盗聴を試みたところ、二人が口頭と並列させて念話を行っていたのを知った。しかしその時には話が終わってしまったため、肝心な質問の内容とその答えを掴むことはできなかった。

(……まっ、それを確かめるためにこうして後をつけてる訳だけど)

計画の邪魔になるものなら奪い、ものによつては破棄しなければならぬ。とにかく、邪魔される訳にはいかないのだ。

以前、ロツテが似たようなことで綾にけしかけて失敗したそうだが、今回は相手が違うしその彼よりも幼い子供。しかも蒐集されたばかりで魔法も使えないし周りに守護騎士もいない。今度は大丈夫だと確信がある。

(さてと……行くわよー)

静かに、そして素早く、アリアは行動を起こした。

……彼がさらなる策を持っていることも知らずに。



(……来た)

敵の接近を知った才は、迷うことなくポケットの中で開いている携帯のボタンを押した。

キイイイイン！

押した直後、大音量の高周波が響き渡った。才にも聞こえている。

「くうっ!?」

「……そこだね」

相手の場所を知った才は、別のポケットから小さな玉を一つ取り出し、ライターで導火線に火を着け、相手に向けて投げつけた。

投げられた玉は空中で破裂。破裂自体は大したものではないが、大量の煙が舞い上がる。

しかも、それはただの煙ではなかった。

「……!? これ、は……っ」

「……魔力に特殊反応を起こす粉末入り……反応は人の魔力によつて様々らしいけど……」

迷彩を解き、悶え出したアリアに才はそう言ったが、実際はそんなものではない。

何かと言うと、マタタビの粉末である。

「本当に効くんだねえ、それ」

「っー！」

アリアの後ろから由樹他、チーム『連合軍』の四人が姿を現した。

「さて、あんたどうすんだい？ まだ呼んでないけど、管理局が来たらマズいんじゃないの？ 守りに徹すれば連絡してから一、二分ぐらいなら僕らでもなんとかなるけど？」

「フン……それは、魔力が抜かれた彼にも言えることか？」

アリアはそう言つて、才目掛けてダツシュした。マタタビの影響か若干覚束ない足取りだが、魔法が使えない才には十分脅威だ。

そう、魔法が使えないのならば。

「……展開」

才は呟くように言つて、長杖を展開した。

「砲撃」

そして杖先をアリアに向け、朱色の砲撃を放った。

「なっ!! ぐおおっ!!」

まるで予想できなかった砲撃を至近距離で食らったアリアは、あっさりと目標とは正反対の方向へ吹っ飛ばされた。

「ぐっ……貴様、蒐集されたはずなのに、なぜ……っ」

「……教える理由がない」

才は至極もつともな意見を言った。

「……まだやる？　だったら、管理局に通報するけど……」

「……くっ」

アリアは退却の選択肢を取った。魔法が使えないはずの才が魔法を使って戦えるとなれば、人数的にも目的の箱を奪取する前に管理局に来られかねないと踏んだのだろう。

才はアリアがいなくなったのを確認して、それから高周波を切った。

「……助かったよ」

「なあに、才の頼みとあらば、初期参加者なら誰でも買って出るよ」

才は待機状態に戻した長杖を由樹に手渡した。

先ほどのトリックの真相。それは由樹のデバイスを由樹の魔力で使っていたというものだった。使用者は才ではなく由樹であるため、才の動きに合わせて由樹がデバイスに命令を下していたのである。才がアリアの接近に気づいたのも似た理由で、由樹のデバイスによって周囲に魔力感知の魔法を張り、それで察知できたのである。

「で、調べたいことは調べたの？」

「……まあね。戻って彼に報告するよ……」

才はそう答え、再び帰路についた。

原作において、闇の書が覚醒する十二月二十四日まで、すでに十日を切っていた。

## 第三十九話

十二月二十二日。クリスマススイブまでもう三日もない。

回復魔法を使つて左手も何とか治り（転生者以外には秘密）、俺も氷室も生活に支障がない程度には回復したとして医務室から解放されている。生活に支障がない程度の回復なので、氷室の右腕骨折はまだ治りきつてない。本来ならば俺の左手もそうである。

「しかしお前、本当に大丈夫なのかそれで？」

「夜天の写本、結局は使えたものじゃないからねー」

「……仕方ないだろ」

氷室と由樹の言葉に、俺はそう答えるしかなかった。

才が守護騎士に接触して夜天の写本を解析してもらつて、起動すればマスター認証もできるということでもそれもやった。しかし、問題はその後で発覚した。

夜天の写本は、空っぽだった。

そもそも、夜天の魔導書及びに闇の書は魔導蒐集を行うことで真価を発揮する。蒐集した魔力を行使し、蒐集した規格外級の魔法を発動するものだ。

しかし、夜天の写本に蒐集された魔導はゼロ。何一つ入っていなかった。当然、この



ままだでは武器になるはずもない。かと言ってなのは達から蒐集することは当然無理。

結果、今夜天の写本に入っているのは俺達転生者の魔法と魔力のみ。原本相手にはとてもと言えるほどに無理があった。

しかも追加事項を言えば、俺の長杖や末崎の短剣は没収されたまま。つまり、このシステムスペックだけが有り余っている写本一つで挑まなければならぬことになる。

「とにかく、手札がなくともやるしかないさ」

そう、今更そのの文句を言っても仕方がない。寧ろ、戦力的に拮抗した戦いなんて俺達には無理な話だ。

「氷室や由樹は当日、奴から何か仕掛けてこないか注意していてくれ。俺も竹太刀にそう言うっておく」

「おう、お前も気いつけれよ」

「ああ」

「まっ、僕とマリアは当日になったらクリスマスデートの予定だからさ。帰ってから生きてたら結果を聞かせてもらおうよ」

由樹はニシシと笑って答えた。

そう、同じチーム『連合軍』の由樹とマリアは付き合っているのだ。だいたい半年近く前から。デートしてる二人の姿を見たこともある。

付き合い出した理由は由樹曰わく「タイプだから」。マリアは悪戯好きの由樹に手を焼いているものの、まんざらでもないらしい。

「よくこんな世界で彼女だなんて言えるねえ」

「こんな世界だからだよ。切羽詰まっただと、心に余裕がなくなるよ?」

「……まあ、それもそうなのかもな。じゃあ、お前ら気をつけるよ」

「おう。綾もしくじんじゃねーぞ」

「うん。じゃーねー」

こうして、俺達は解散した。

明後日が、勝負の日だ。



「なあ、アリシア」

「なあに? 綾さん」

「なぜ、アリシアは俺の膝に座っているのか」

「だって、綾さんつい最近までずーっと帰ってこなかったんだもん」

夕食後の現在、ソファに座っていた俺の膝にアリシアが座っていた。アリシアの現身

「体力では自力で車椅子から移動できないため、アリシアが頼んできて俺が移動させたのだが。」

アリシアのその理由もなあ……だって、リンデイさんが動くことを許可したのがつい最近……いえ、何でもありません。こうなったのも俺の自業自得なんで。

「ねえ、綾さん」

「……ん、なんだアリシア?」

「綾さんや、リンデイさん達のお仕事ってあとのくらいかかるの?」

「……んー、そうだな。できることなら早く終わらせたいもんだなあ。それがどうした?」

「二十五日にはクリスマスでしょ? 一月になったらお正月もあるし、その時には綾さん達のお仕事が終わって、みんなで楽しくなってほしいなって」

「……そっか」

純真な笑みを浮かべるアリシアを、そっと後ろから抱き締める。

「大丈夫……楽しみなクリスマスもお正月も、それから……きつと楽しいものになるから」

「うん!」

「ラブラブやなあ、二人とも」

「いや、だからそんなことねえから。そしてそれ抜きにしても水差すなよ！」  
こうして、十二月二十二日の夜は過ぎていった。

そして、二日後。

十二月、二十四日。

A、  
S、  
最後の戦いが始まる。

## 第四十話

十二月二十四日。もうすっかり夜となっている今、俺は夜天の写本と一部道具を入れたポーチを持って街中に一人でいた。

「……………」

目の前にはビル。そこに入っていくなのはやシグナム達の姿を確認したので、この屋上が闇の書覚醒の場所で間違いない。

ここに来れば、奴から指令が来るって話だが……具体的にいつだ？

ドオン、と爆発音が聞こえた。見上げると、屋上の一部から炎が見える。交戦が始まったらしい。

プルルルル。プルルルル。

「！」

着信……電話だ。すぐに通話ボタンを押す。

「もしもし」

『………汝の携帯に、インピンシブルアプリを追加した。今からそれを起動せよ。なお、起動時に表示される注意事項に従うこと』

ブツツ。切られた。

すぐに確認するて、確かに『インビンシブルアプリ』というものがあつた。

(インビンシブル……英語で無敵の意味……無敵のアプリ……?)

とりあえずアプリを押すと、神が言っていた注意事項というのが表示された。

『注意

このアプリを実行すると使用者は一定時間無色透明となり、加えて使用者の所持品を除いてあらゆる物体との物理干渉が不可能になります。

使用するには『アプリには周囲に誰もいないことを確認してから使用してください』

その後には『アプリを実行しますか?』『はい』『いいえ』という文字。

周りを見回して、誰もいないことを確認してから、『はい』を押した。

ヴン……。

そんな小さな音がした。だが、それだけで他に変わったような感じがしない。

(あらゆる物体との物理干渉ができなくなるとか言ってたな……)

試しに、近くの壁に触れようとするて、手が壁の中へと入っていった。

……なるほど。どうやらすり抜け効果を得たらしい。外から見れば無色透明らしいから、実質的にしばらくの間俺は存在しないことになる。

(さて……存在が消えて俺にどうしろと言うのか……つて!)

「うおっ!？」

思わず声が出た。急に毒々しい紫が辺りを包み込んだからだ。

これはおそらく、ディアボリックエミッション。つまり、

(闇の書が覚醒したか！)

アプリの効力によって、干渉できないだけでなく干渉されもしない俺は現在進行形で直撃を受けてる今でも痛みを一切感じない。

しばらくして、紫一色の世界から解放される。上を見上げるとビルの屋上から紫の軌跡が、空へと飛んでいった。

プルルルル。プルルルル。

「もしもし！ 今度はなんだ!？」

『……闇の書の意志を追え』

ブツツ。それだけ言ってすぐ切りやがった。

「だああっ、ちくしょう！ あいつが飛ぶ前かさっきの電話の時に言えよ！」

文句言っても過去は変わらないので、先ほどの光の軌跡を頼りに追跡を始める。

だが運良く闇の書の意志は比較的近くで見つかった。なのは達と交戦していたからだ。

桜色の射砲撃や金色の斬撃を容易く回避、防御をし、紅のダガーや紫の砲撃する闇の



書の意志。

俺は近くの建物の陰に隠れてその様子を観察することにした。今はインビンシブルアプリで守られているが、それがいつまで続くかわからない。しかもあのアプリは使い捨てにできているらしい。もう押ししても確認画面にすらならなくなっている。

(それにしても、一体いつ俺を割り込ませようって言うんだ……?)

闇の書と交戦中にフェイトが捕まっても、なのはが残る以上俺が入る余地がないはず。逆になのはが捕まると闇の書の暴走を止める人がなくなるため、物語的にマズい。いくら奴の指令が鬼畜と言っても、絶対不可能な指令は出さないはずだ……。

「つと、移動か」

確か戦闘中海上と街中を行ったり来たり、場所が結構変わってたな。体力切らさないようにしないと……。

ペース配分に注意しつつ、闇の書を見失わないよう後を追う。



闇の書を追いかけ、ついに闇の書が暴走とそれによる崩壊が始まってから、俺はあることに気がついた。

スターライトブレイカーが、撃たれてない。

考えてみれば当然だった。闇の書はなのはの魔力を蒐集していない。原作でシャマルに蒐集されるところを才に妨害されたからだ。どうやら闇の書を追うのに必死で、アリサとすずかが避難されるころは見逃していたらしい。

「闇に沈め……」

闇の書なその言葉と共に、なのはとフェイトの周囲を囲むダガーが爆破される。

「この……駄々っ子!!」

なのはを抱えて爆破から回避したフェイトが闇の書へと斬りかかる。

「言うことを……聞けえええええっ!!」

「お前達も、我が内に眠れ」

闇の書はフェイトの攻撃を防ぎ、魔法陣を展開した。

「!?!」

「フェイトちゃん!?!」

フェイトの身体が薄い金色に輝き、そして魔導書内に吸収される。カランと、何かが落ちる音がした。……何の音だ?

「お前もだ……」

「あ……!」

闇の書はいつの間にかなのにも接近していた。フェイトが闇の書に吸収され、呆気に取られて隙だらけであったなのはに防ぐ余裕はなかった。

「全ては安らかな眠りの地……」

なのはの身体が桜色に輝き、そして吸収される……つて、ヤバいぞこれ。こんな状態で指令が来たりなんかした時には……。

プルルルル。プルルルル。

(つて、考えてるそばから来たし！)

とりあえず物陰に隠れ、少しずつ闇の書の姿を窺いながら電話に出る。

「もしもしー！」

『現状は、把握したな？ これより指令を開始する』

最悪の状況が、開始の合図だった。

『ルールを説明する。三十分間、闇の書の意志から逃げ続けよ。闇の書の意志に捕まり、吸収された場合即終了、汝は失格となる。今汝が所持している夜天の魔導書が破壊された場合も同様だ。つまり闇の書の意志から己と夜天の魔導書を守れ。三十分間捕まらずにいれば終了し、汝に報酬を与えよう。なお、今実行中のインビンシブルアプリは開始と同時に効力を失い、もう使用はできない』

「……報酬つて、なんだよ」

『……フッフ』

奴が、笑った。

『そうだな……報酬はスターチップ十個。そして……私に挑戦する権利を得るに必要な条件を、教えてやらなくもない……』

『……!!』

『では、最後にアドバイスをしよう……汝は負傷すると指令の遂行に支障が出る。しかし、汝の負傷はルールに一切関係ない……このことをどう捉えるかは汝次第だ……では始めよう』

『……あつ、待てよおいつ!』

最後に意味深げなことを言い残して奴は通話を切った。

……俺が負傷するのは指令遂行に支障は出るがルールに関係ない……? 確かにルール上ではそうだが、なんでわざわざ……?

「まだ、いたか……」

「っ!!」

振り返ると、闇の書の意志がすぐ目の前にまで来ていた。

(しまった! さっきの声でバレたか!)

「お前も、眠れ」

「うおっー！」

間一髪彼女の手をよけ、道路の方に出る。

同時に、着火装置を使い、花火の玉の導火線に火を着けて投げつける。

爆破。閃光が飛び散って目くらましをさせている間に逃亡を図る。しかし走り始めてすぐにあるものを見つけた。

(……使えるなら持つてくか)

それは、地面に転がったレイジングハートとバルディッシュ。二人とも吸収される時に手離してしまった……らしい。先ほどの何か落ちたような音の正体もこれのようだ。俺はその二本ともを迷わず拾い上げ、それから走り出した。

捕まれば即死。写本が破壊されても即死。攻撃の直撃も当然死。そんな死の鬼ごっこ。

スタートは、まさに最悪の状況だった。

## 第四十一話

「穿て」

その一言と共に、紅い刃が俺に群がってくる。

「くっ!!」

俺は逃げながら回避。だが数が多すぎる。右手、左腕、腹部などに浅い傷ができていく。

刃の雨が止んだところにかさず、着火させた花火を投げつける。

花火は闇の書の目の前で爆破。だが闇の書は怯んだ様子もなくこっちに来る。

(目くらましにすらならないのかよ！)

「響け……」

「っ!!」

闇の書が手に砲撃の魔力を溜めだした。

——夜天の書起動。

蒐集魔力使用。二頁分消費。

防御魔法展開。

「盾っ!!」

左手を翳し、灰色の魔法陣が現れる。

ドウツ!!

「ぐっ……!!」

左手から伝わる鈍痛。怯んでる暇はない。

蒐集魔導行使。

誘導射撃弾展開。弾数二発。

「行けっ!!」

二発の魔力弾を形成。複雑な軌道を描く。まず一発は、闇の書の真正面へ。

「盾」

当然、防がれる。

（こっ）だ……!!

だが二発目は彼女の真後ろ。完全に死角を取った。当たる!

パンツ!

「なっ!?!」

「無駄だ……」

完全な死角に入ったはずの魔力弾が、振り向きもしてない彼女の左手によって弾かれ

た。

「くそっ!!」

花火を投擲。今度は複数同時に投げられた花火が一斉に爆破され、もはや光の花というより壁を作る。その一瞬の間に走り出す。

状況的に、かなり……いや、絶望的にマズい状態だ。

まず、持ち込んできた最大の武器である花火が全く効かない。威力的に効かないのならまだしも、目くらましとしての役割も全く成さない。役割を果たしてもらうため数を投げるが、その結果消費がハンパじゃない。

夜天の写本の方もヤバイ。元々蒐集魔力が少なすぎる。この指令のことを話していない海斗と由衣、すでに闇の書に蒐集された才を除いた除いた八人の転生者からの蒐集で集まった魔力は三十頁にも満たない。さっきの防衛行使でさらに頁を失い（誘導射撃弾は俺の魔力を使った）、残り二五頁となってしまっている。これでは、間違いなく足りない。

あと頼みの綱と言えば、これしかない。

「はあつ、はあつ……レイジングハート！ バルディッシュ！ 起きろー！」

《起きてます》

《何でしょう、綾》



今は片手に小さく収まっている、二人の少女の愛機の名を呼ぶ。

「お前らのマスターとのリンクはどうなってる!? 繋がってんのか!? 魔法は使えるのか!?!」

《繋がっています。しかし、マスターの魔力を行使できる状態ではありません》  
《申し訳ありません》

「チイツ! だつたら!」

舌打ちして、背後からやってきた無数の刃を頁を消費して防ぐ。

ガガガガツ! 喧しい音に対抗するように、怒鳴るほどの声で続きを言う。  
「俺を臨時のマスターにしろ! 力を貸せ!!」

《……しかし、あなたとマスターでは魔力資質の差が大きすぎます》

「構うか! 早くしろ!」

《しかし……》

なおもレイジングハートは躊躇う。だが、バルディッシュが決断した。

《了解。臨時的に綾をマスターとして認証します》

バルディッシュのその判断で、レイジングハートも決断した。

《……わかりました。私も、綾を臨時マスターとします》

「よし! レイジングハート、バルディッシュ、展開!」

俺の展開という一言で、レイジングハートとバルディッシュが再び杖の姿となり、俺の手に収まる。

「射撃弾形成！ 二発ずつ頼む！」

《《了解》》

レイジングハートによってアクセルシューターが、バルディッシュによってプラズマランサーが形成される。

「発射!!」

その一言で四つの魔力弾が闇の書へと飛ぶ。

まず弾速が速いプラズマランサー。防がれる。

その間に闇の書の後方両側へと回り込んだアクセルシューター。ダガーによって消される。

……来る！

「くっ！」

闇の書の拳をかわし、バルディッシュを振るう。当たらない！

さらに拳が来る。防御し、レイジングハートのカートリッジをロード。

「吹っ飛べ!!」

「……響け」

同時に砲撃。威力負けしてしまい、俺が吹っ飛んだ。背中から強く叩きつけられる。

「かはっ!」

「眠れ……」

「!!」

倒れた俺の真上に来た闇の書が、俺に手を伸ばす。マズい——!

「……されてたまるか!!」

「……っ!」

その場の土を掴み、彼女の顔へと投げつけた。目に異物が入ったことで、闇の書の動きが止まる。

その隙に立ち直り、逃走を再開する。

(とにかく、マズい! どうにかしてよりあいつの攻撃から逃れられる手段を作らないと……!)

でもどうすればいい? 考えろ。今すぐ、もつと考えろ。

時間はまだ経って五分。あと二十五分間も逃げ続けられる手段を考えないと——!

「……!?!」

何かが横目に入り、俺はその場で急停止した。

(……今、人がいなかったか……?)

いや、有り得ない。有り得ないはずだ。ここには結界が張られている。魔力のない人間は原則存在できない。転生者にしても、余程のことがない限り、指令に関係がなく命を危険に晒すような場所に来る奴なんていないはずだ。

(……どうなっている?)

とにかく、引き返すのは危険だ。先に進み、そこからさつき見た道を確認すればいい。再び走り出す。そして、横目でさつきの道を見ると——いた。

人がいる。それも一人や二人といった単位じゃない。もつという。

より確かめるため、俺はその道の方へと出た。

「……!?!」

あまり広いとは言えない道路。そこに集まっている人、人、人。

道が広くないこともあって、何人いるのかはよくわからない。ただ、中には銀髪だったりオッドアイである者もいることから、おそらく転生者だろう。

その中の一人が、こちらに気づいた。

「……おい、あいつが持つてるのって、レイジングハートとバルディッシュじゃねーか?」

「ホントだ……」

「なんであいつが持つてんだ……?」

ぞろぞろと近づいてくる。

引き返すべきか、と思っていると、

「どけっ！ このボンクラども！ 邪魔なんだよ！」

荒々しい声と共に目の前の奴らを押しつけ、こちらに誰かがやってきた。

誰か、というか……

「……氷室！ 由樹！」

「よお、綾！」

「頑張ってるねえ」

氷室であつた。由樹もいる。

互いに相手の姿を確認して、すぐに駆け寄つた。

「お前ら、なんでここに……」

「まあまあ、その話はちよいと移動してからだ」

「いや、呑気に話してる暇は……」

「大丈夫だよ。探知魔法で調べたけど、闇の書はこつちに来てない。君を見失つたらしいよ」

「とにかく、こつちだ」

氷室に案内されて道の真ん中に移動する。するとそこには、俺の知ってる顔があつ

た。

「海斗、由衣、竹太刀！」

「綾！」

「綾さん！」

三人だけじゃなく、チーム『インテリ不良』の残る二人も、チーム『連合軍』の三人もいた。

「どうしてこんなところにいるんだ!? 家にいたはずだろ！」

「そういう綾こそ何やってんだ? レイジングハートとバルディッシュなんか持って!?!」

「まあ落ち着きなよ。まずは僕らの現状を教えるから」

由樹が俺と海斗を制止させ、説明を始めた。

「まず、綾を除いたここにいる連中にこんなメールが来た」

由樹はそう言つて、携帯を俺に見せてきた。

差出人：管理者

件名：特別指令

内容：スターチップ大量確保のチャンスです。

達成すればスターチップを十個入手できる特別指令を発令します。

強制ではありませんので、参加しない場合には今すぐ不参加の通告をしてください。不参加通告をしなかった方には、転送後指令を通達します。

「……通告はしたけど、やられたよ。まさかずっと下に注意事項があるなんてさ」  
由樹が携帯を下へとスクロールさせていく。しばらく真つ白だった画面に、文字が入ってきた。

### 注意

チームの場合、不参加通告は全員分行わなければ全員参加になります。

「で、参加させられてから来たのがこれ」

差出人：管理者

件名：緊急指令

内容：三十分間、闇の書の意志から逃亡を続けよ。闇の書の意志からの攻撃は受ける度にスターチップを十個剥奪される。

成功条件・報酬：三十分間、闇の書の意志から逃げ切る。スターチップ十個配布。

失敗条件・罰：三十分間に闇の書に吸収される。もしくは指令による剥奪個数が所持数を超える。失格。

「失敗したよ。これなら二人にちゃんと注意させとけばよかった。マリアとのデートも強制中断されちゃったし」

「俺はいくらこいつらに言っても聞かなかつたからな……ちつ」

「うぐう……」

「……じゃあ、海斗達は俺のせいか……?」

この話を聞く限りだとそうなってしまう。

「いんや、わいらは強制なんや」

竹太刀はそう答えた。

「わいらもこれ見る前に通告しようとしたんやけどなあ、神の方から拒否権はないって言われてもうてな。そのまま参加するしかあれへんかつたんや」

「……そうなのか?」

「は、はい。私の元にも来ました……」

「俺のところにも来たぜ。で、綾は何してんだよ」



「……、実は……」

《警告。三時方向上空より高魔力反応確認しました》

「おい！　なんだよあれ？」

俺の受けている指令を海斗達に明かそうとしたとき、レイジングハートのその音声は割り込んできた。それから誰かの声。

すぐに指定された方向を見ると、桜色の光球が徐々に膨張していた。

闇の書は完成までになのはの魔力を蒐集していない。だが、今はどうだ？

闇の書は、なのはごと吸収している。

「……!! スターライトブレイカーが来るぞおおおおおつ!!!! 全員、逃げろおおおおお

おおつつつ!!!」

喉を枯らせるほどの声で辺りに怒鳴る。

辺りの参加者は呆けた顔をしていたが、上空の光球を見て、その言葉を現実と見た者達が顔を青くした。

「う……うわあああああつ!! 嫌だつ、死にたくないーっ!!!」

誰かのその言葉が、一斉に全体へと広がっていった。

「い、いやあああああつ!!」

「逃げろーっ!! チップがないなら死ぬぞーっ!!!」

「うわあああああつ!!」

すぐ近くの脇道に群がる人達。しかし、さらなるパニックが起きていた。

「おい! 早く行けよ!!」

「と、通れないんだ!! 変なつ、光の壁みたいなのが!!」

「うわあああつ!! 馬鹿つ、押すな!」

どうやら脇道が通れなくなっているらしい。しかしパニックで外側まで言葉が通じておらず、ごった返しのままどうにかなりそうにない。

「お前ら、こっちだ!!」

俺は海斗達を先導して走り始めた。

「おい、綾! どうすんだよ!」

「住宅でも脇道でも、片っ端から調べろ! 封鎖されてるのは近くの数カ所しかない!

絶対に助からない構造にはしないはずだ!」

「てめえらもさっさとしろ! 俺をこんなことに巻き込ませたツケはきっちり返しやがれ!!」

「僕はこつちを調べるよ! 綾は身体強化使ってできるだけ遠くを調べて!」

「わかつてる!!」

加速強化<sup>アクセラ</sup>を付与させ、数軒分飛ばした脇道、住宅の扉を調べる。

通れない、通れない、通れない……！！

……！！　ここは通れる！

「こつちだーっ！！　早くこつちに来い！！」

できるだけ大きく手を振って、大声で知らせる。全員がこつちに気づいて急いでこつちに来る。

「早く入れ！」

「てか、大丈夫かこんな民家で?」

「闇の書のスタブレは広域型や！　物質破壊効果はあらへん！　ほな急げ！」

急いで海斗達が入る中、上空の光球はいつ解き放たれても不思議じゃないほど大きくなってきた。

「……あ？　あいつ何やってんだ?」

氷室が声を上げた。

視線を落とすと、ここから十メートルほど先で末崎が座り込んでいた。

「つたく、もう集束が終わる！　綾！　あいつはもうほつとけ！」

その時だ。奴のあの言葉を思い出した。

『汝は負傷すると指令の遂行に支障が出る。しかし、汝の負傷はルールに一切関係ない……』

……負傷のリスクを負ってでも助けるか、見捨てて負傷のリスクを避けるかだと……？

「つ、ふっざけんじゃねえぞあの野郎!!」

「おい、綾!!」

俺は飛び出した。氷室の声は無視だ。

俺は、見捨てない！俺の届く範囲で、誰も死なせたたくない!!

筋力強化付与。

加速強化追加付与。

筋力強化、加速強化、それぞれの強化魔力追加。

ほんの一秒もかけずに末崎の元に辿り着き、腕を引っ張り上げる。

「早く立て!!」

「こ、腰が抜けちゃまった……」

末崎に肩を貸し、さっきの民家へと急ぐ。

ふと後ろを見ると、桜色の光球は今にも溢れそうに……否。

今、溢れ出した！

「う、うわああつ!! もうダメだあああつ!!」

「くっ……!!」

強化を使う暇がない。玄関までもう少し……せめて、末崎だけでも……！

「つたく、何やってんだよ」

……え？

「お前は、俺達の希望じゃねえか。そんな奴に構ってたら、てめえの命なくすぞ」  
ドカッと、後ろから強い打撃の感触。

打撃は末崎を巻き込み、俺達は二人とも揃って玄関の中に放り込まれる。  
後ろを、見ると、

「綾。ついでに末崎。……………生きろ！」

脚を蹴り上げ、そう笑みを浮かべた彼が、桜色の光に飲み込まれた……。

「氷室お—————つつつ  
!!!!」

## 第四十二話

俺の叫びは、スターライトブレイカーの轟音によつて掻き消され。

さらに巻き起こつた風圧によつて、俺と末崎は奥の壁まで押し飛ばされた。

「ぐはっ!!」

「ぐわっ!!」

「綾! 末崎!」

そこに海斗達がやってくる。

「綾さん! 大丈夫ですか!」

「あれ……鳥間さんは? あの人はどうしたんですか!」

「………………。おい、末崎、高田」

……俺は、最後の希望に縋つて二人に訊いた。

「無印終了時に氷室のチップ所持数は三つ……ザフィーラとシグナムに勝つたことによつてプラス六つ……あと一つ手に入れていれば、氷室は生きてるはずだ……」

「……………」

「……………」

「氷室は……ここ最近でチップを手に入れたのか？」

「……………」

「……………」

二人からの答えは……なかった。

「……………」

「おい、綾!？」

俺は外に、道路に飛び出した。道路に飛び出して、道を確認した！

「……………」

……誰も、いなかった。

誰一人いない。元からいなかったかのように。ついさつきまで脇道にごった返していた人達も……光に飲み込まれる直前に笑った氷室も……いない。

「ああ……………」

俺は逃げろと言った。だからあいつらは近くの脇道に逃げようとした。

俺は末崎を助けようとした。間に合わなかったから、氷室は俺達を蹴飛ばして避難させた。

どつちも……俺のせいだ……

「ああ……………」  
「わああああああああっつっつ!!!!」



「ぎゃああああっ!!」

「!!」

誰かの断末魔が聞こえる……誰かが、殺される。

どうする!!? どうすればいい!!? どうすれば、これ以上誰も死なずに済む!?

これ以上……誰の犠牲も出さない方法は……!!

『汝は負傷すると指令の遂行に支障が出る。しかし、汝の負傷はルールに一切関係ない……』

「……!!」

これ以上、誰も死なない未来……それができるのは……。

俺しかない……!!

「竹太刀! 由樹!」

「なんや!?! どないした!」

「なんだい?」

「みんなの統率は、お前らに任せる! これ持ってけ!」

俺はバルディッシュを竹太刀へと投げ渡した。

「おっとつと……つて、ちよい待ちい綾！ 自分はどないするつもりや！」

「俺はっ……、俺はもう、誰も死なせはしない！」

「おい、待て！ 綾ーっ!!」

俺は、走り出した。



叫び声があった方向を探すと、逃げ惑う転生者と、その転生者に攻撃しようとする闇の書を見つけた。

(させるか!!)

夜天の書起動。

蒐集魔導行使。魔力弾形成。弾数二発。

蒐集魔力行使。一頁分消費。

「撃て!!」

魔力弾を飛ばす。彼女の後頭部に直撃した。威力に期待はしていない。

「……………」

「……………来いよ。お前の相手はこっちだ」

挑発。そして逃走を開始する。

追ってきているのを確認して、花火を数発一気に投擲。光の壁を作る。光の壁を突き抜け、紅い刃が飛んできた。頁を削り、防御魔法で防ぐ。残り頁が二十を切った。

蒐集魔導行使。砲撃魔法展開。

蒐集魔力行使。残り全頁分消費。

光の壁が消える。奥には、掌に砲撃魔力を込めた闇の書。

「いっけえええっ!!」

残った全ての頁を使った大火力砲撃。

灰色が、紫を飲み込んで突き進んだ。

「ぜえ、ぜえっ……」

まだだ。これで終わりにはならない。

吹っ飛ばされた彼女が来ない内に、場所を移すべく足を進める。

「レイジングハート……ここから先、少し手伝ってくれ……」

《了解》

「今のお前の最大の形態……エクセリオンモードも使う。……いいな？」

《了解。……ただし、条件があります》

「……言ってみろ」

《生きてください、マスター。それが、私の願いです》

「……そうかい。いいぜ……誰も死なせはしないし、俺も死ぬ気はねえっ……！」

そうだ。俺が死ぬ訳にもいかない。

だから、勝つ。俺が……勝つつ……！



俺は国道の真ん中に立っていた。

もう使うことのないポーチは捨て、夜天の写本は解除させ、格好も出来る限り身軽に

させている。

「……いいか、レイジングハート。どんな状況であつたとしても、俺が指示しない限りは

防御は張るな」

《はい》

「よし。……レイジングハート、エクセリオンモード起動」

《了解。エクセリオンモード起動》

稼働音を鳴らし、レイジングハートの形状槍に近いものへと変化する。

両手でしっかりと持ち、直に来る相手を待つ。

……来た。

「……愚考だな。明らかな力の差を知ってなお、立ち向かうとは」

杖先を向けた俺に、向けられた闇の書はそう言う。

「違えよ。圧倒的な力の差を理解してるからこそ、俺は武器をお前に向けるんだ」

《A. C. S、スタンバイ》

レイジングハートが四枚の翼を出現させる。俺の灰色魔力の他に、その翼を展開するために使ったカートリッジの、なのはの桜色魔力も混じっていた。

「俺は、捕まらない……生きるためにも、もう誰も死なせないためにも、俺は、お前には捕まらない」

「……………」

強く、レイジングハートの柄を握る。決意を固めるために。震える手を抑えるために。

「——行くぞっ!!」

これが……この戦いの最大の賭だ!!

「A. C. S……ドライブッ!!」

《A. C. S、ドライブ》

賭の始まりのトリガーを、引いた。

ブーストが発射される直前。俺はレイジングハートの矛先を上空にいる闇の書から水平に戻す。

「いっけえええっつ!!」

「!」

突撃してくるものとばかりと考え守りの態勢を取っていた闇の書の真下を通り抜け、そのまま猛スピードで直進する。

「……逃がすかつ」

闇の書が追跡を開始する。

《後方上空より魔力反応。ブラッディダガーが来ます》

「まだ引きつける!」

横や後ろを確認する余裕がない俺に変わってレイジングハートが周囲の警戒をする。

《ブラッディダガー接近。間もなく被弾します》

「よし、加速しろ!!」

《了解》

ガシユン。と空葉莢が飛び出し、飛躍的に加速。

加速して通っていった後ろから、ガガガガッ! と刃の雨が降った。

《間もなく前方丁字路です》

「了……、解いいいっ!!」

ガリガリと足でブレーキをかけ、レイジングハートの向きを力業で強引に左へと切り替える。

まだ残っている前へのベクトルと、新たに生まれた横へのベクトルによりカーブが描かれ、再び道を爆走する。

《後方よりブラッディダガーの展開、接近を確認しました》

「……!」

上からではなく後ろからに変えた……マズいな。

カーブする時は杖の向きを変え、さらにブレーキをかけるためどうしても前方へ進む速度が落ちる。届く前にダガーが消えるようなことがない限り、被弾は免れない。多分振り切ることは、できない。

「……そのまま進め!」

《了解。次の壁に接触するまでの推定時間は、残り二〇・六七三八秒です》

その二十秒程度の距離は、すぐに辿り着いた。

《ブラッディダガー、依然接近中》

「ちっ……進路を曲げるぞ!」

足でブレーキをかけ、レイジングハートの矛先を再び左へ。後ろを見ると、無数の刃がこっちに襲いかかってくる！

「ぐっ……!!」

ザシユザシユザシユツと無数の紅い刃が俺の身体に突き刺さり、切り裂く。

俺は防衛強化の付与だけして、あとは左腕で最低限視界が潰されないようにする。

（止んだか……いや、まだ来る!!）

もうブラッディダガーが襲ってこないのを感じて確認すると闇の書が立て続けに砲撃を放とうとしているのが見えた。避けるには速度が足りない。

《綾！》

「何もするな!!」

砲撃が放たれる。俺は左手を突き出した。

突き出された左手に砲撃が着弾し、爆発が巻き起こる。

「がっ!!」

強烈な爆風に身体が吹っ飛び、壁に激突する。

倒れかかった身体を左手で支えようとして……それができずに倒れた。

「……っ」

見ると……左手がない。



左腕は肘から先が黒く染まり、手首から先は完全に消失していた。

《綾！》

「つ……よく、防がなかった。良い子だ……」

なんとか立ち上がり、レイジングハートを横に向ける。

「まだだ……行くぞ！」

《……了解！》

再びA・C・Sで高速飛翔し、逃走劇が再開される。

(また同じ方法で攻めてくる可能性が高い……どうしたものか……)

《後方よりブラッディダガーの展開、接近を確認しました》

「……っ!!」

来る……ここは……！

「レイジングハート、止まれ！ 砲撃の用意をしろ！」

《了解》

魔法陣展開。

術式計算。ゼロ距離爆撃砲の術式を構成。

チャージ完了。

完全に止まり、振り返ってレイジングハートの先端を向ける。

「撃てっ!!」

《バスター》

レイジングハートの先端に溜められた魔力がほぼ直接爆破し、ダガーと俺を吹き飛ばす。

「くっ! ——ッ!!」

態勢を立て直して確認すると、第二陣が来ていた。

よけられない——

ブシュツ!!

「——ッツ!!」

腕や腹に刺さる中、刃の一本が右目を抉り取った。

「っ——、まだだ……レイジングハート、行くぞっ……!!」

《綾!》

レイジングハートにもう一度翼を展開させようとして……その翼を形成する魔力が、跡形もなく霧散した。

「なっ——」

《魔力切れです!》

「「こんな、時に……!!」」

グラリと視界が揺れて、その場に座り込んでしまう。マズい、身体に限界が来てる。さすがに攻撃を受けすぎた。

動け。へばつてる暇なんてない。

動け。

動け。

動け！

動けよ!!

「もう、限界のようだな」

身体に動けと命令している俺に現実を教えるかのように、目の前に立った闇の書が言った。

「ぐ、ああああああああああつ!!!」

「もう、安らかに眠れ」

捕まる。捕まる訳にはいかない!

動けない。今すぐ動け!

死ぬ! まだ死ぬわけにはいかない!!

「おおおおおおおおつ!!!」

「っ!」

聞き慣れた声が大音量で聞こえてきた。

その声の主は金色と緑が混じった魔力を発する剣を横薙ぎに振るい、闇の書を吹っ飛ばす。

「ジェットザンバアアアアアアアツツ!!!」

彼——竹太刀がザンバーフォームのバルディッシュを振るい、闇の書に命中。爆発を巻き起こした。

「綾! しつかりしろ!」

「酷い傷……このままだと朝霧さん、死んでしまいますよ!」

「落ち着いて! まず運ぶんだ! 竹太刀、海斗、闇の書を引きつけるんだ! 一瞬気を引かせたらすぐ撤退していい!」

「お、おう!」

「了解や!」

末崎と高田の肩を借り、運び出される。

「田嶋! 回復魔法を!」

「で、でも、こんな酷い怪我はさすがに……」

「出血を止める程度でいい! 早くしないと、綾の身体が持たない!!」

……まだだ。まだ終わってない。終わってない以上、やらなきゃならないことがある

はずだ……。

何か……やれることは、何か……！

「……お前ら、俺を案内しろ……」

「あ、案内？ 案内って、どこへ!？」

「……、……魔力散布濃度が一番高い場所……そこに連れてけ……!」

決着の時は、確かに近づいていた。

## 第四十三話

魔法陣展開。

砲撃魔法形成。

魔力集束開始。集束所要時間約四十六秒。

なのは達と闇の書が撃ち合っていた場所で魔力の集束を試みる。ただの砲撃なのに集束に時間がかかりすぎるのは、俺が魔力切れを起こし、空間散布されている魔力のみで砲撃形成をしようとしてるからだ。

しかも、空気中の魔力だけで砲撃を作ろうとしても、自分の身体から魔力を引き出そうとされるため、空の状態から魔力を引き抜こうとする影響で胸の辺りに痛みが広がってくる。

指令の残り時間は、もう五分を切っていた。

闇の書が姿を現した。

闇の書が足元に魔法陣を展開し、俺の周囲を無数の紅い刃が取り囲む。

「穿て」

「——ッ！」

……今だ！

俺はレイジングハートを地面に向ける！

「デイバインツ、バスターツ!!」

地面を吹き飛ばし、爆風と土煙を上げ、俺と刃が吹っ飛ぶ。

「ぐはっ……!!」

倒れた俺に向かって、煙を突き抜けて闇の書が来る！

「おおおおおっ!!」

「でやあああああっ!!」

闇の書の両側から、バルディッシュザンバーを持つ竹太刀と、末崎の短剣を持った海斗が斬りかかる。

闇の書は二人の攻撃を防ぎ、砲撃で吹き飛ばす。

「海斗！ 竹太刀！」

「ぐっ、大丈夫だ！」

「さっきの引きつけと合わせて二十個……でも、生きとるで！」

「綾さん、急いで逃げますよ！」

田嶋が俺を担ぎ上げ、俺を動かす。

「逃がさん」

「逃がしてやりなさいよ！」

「やらせはしない！」

建物の窓からマリアと由樹の同時射撃。闇の書は簡単に防いでみせ、ブラッディダガーで反撃。

「おっと！」

「くっ！」

「由樹！ マリア！」

「綾さん！ 奴がこっちに來ますよ!!」

由樹もマリアも、建物の中に隠れて事なきを得た。

そして田嶋の言う通り、闇の書がこっちに來る！

「ここは、田嶋を逃がして……！」

「い、い、い、はっ……！」

俺が指示を出す前に、長杖を持った末崎が間に割り込んできた。

「ここはお、俺が止めるっ……おいお前！ 綾を早く逃がせ！」

「なっ……、馬鹿を言うな！ お前が叶う相手じゃないのはわかってるだろ！ さっさと引け！」

見れば末崎の身体はガタガタ震えていた。



自分でもわかってはいるはずなのに、俺の忠告もあるのに、末崎は引かない。

「ひ、引かねえ!! あの時お前が助けに来なければ、俺は死んでたんだけ! だからもう、俺の命なんか惜しくねえええええっ!!」

末崎は絶叫を上げながら闇の書に突進した。

しかし末崎が振り回した長杖は、あっさりと闇の書が弾き飛ばし、末崎が無防備になっってしまう。

(させ、るか!!)

強引に田嶋を振り払い、二人の元へと走る。

闇の書が、末崎が捕らえようと手を伸ばす!

「ひっ……………」

「しゃがめ末崎いいっ!!」

「っ!!」

俺の怒声で末崎の身体が縮こまる。

俺は力の限り最終攻撃手段である武器投擲……エクセリオンモードのレイジングハートを闇の書に投げつけた。

「無駄なこと……」

レイジングハートの矛先が闇の書に命中する寸前で、闇の書によって掴み取られてし

まう。

さらに闇の書はレイジングハートを持ち直し、よろける俺に向かって投擲。

「……………っ！」

なんとか脚を上げ、脚で受けようとする、が。

ゾブツ

脚の骨を砕き、突き抜け、俺の腹を貫いた。

「ズ、ぶっ……………」

血を吐いて、レイジングハートが腹に突き刺さったまま、地面に倒れる。ベチャリと、血溜まりが跳ねる。

(ダメだ……………いし、き……………が……………)

落ちちやダメだと思っても、片方しかなくなった瞼が落ちてゆく。

(も、う……………みんな……………の、こえ……………も……………)

聞こえない。そう思うより早く、俺の意識は失った。

ガ  
チ  
ヤ。

プ  
ル  
ル  
ル  
ル。  
プ  
ル  
ル  
ル  
ル。

『指令終了。参加者の諸君、指令達成おめでとう。

指令達成した諸君には、報酬を渡そう。

報酬及び、失格者の通知は後にメールで通達する。

では、また次回も頑張ってもらいたい』

## 第三章 エース武闘編

### 第四十四話

十二月二十八日。

闇の書覚醒の日から四日後。

アースラの、集中治療室。

そこにいる朝霧綾は、今日も目を覚まさない。



十二月二十四日に遡る。

闇の書否、夜天の書とその守護騎士達の主、八神はやてが眠る医務室では、はやてによつてリインフォースという名を得た管制人格とシグナム、ヴィータ、ザフィーラがこれからについて話をしていた。シャマルはある理由でいない。

「守護騎士達は残る。逝くのは私だけだ」

リインフォースが話すには、守護騎士は夜天の書から切り離しても個体維持はできる

らしい。リインフォースは夜天の書なしでは存在できないから切り離しはできないが、これで守護騎士だけでも残すことはできるという。

だが逆を言えば、この方法ではリインフォースは助からない。

それでも、彼女には覚悟ができていた。

「……シヤマルはここにはいないが異論はないな？ 切り離しを始めよう」

リインフォースはできるだけ早く、守護騎士と夜天の書との繋がりを切断した。防衛プログラムが復活する前に自身を早く破壊しなければならぬこともある。

そして、リインフォースにはどうしても訪れたい場所がある。



綾が気を失った直後、タイムリミットの三十分が到達した。

三十分到達と共になのはとフェイトが解放され、二人によって、ほとんど動かなくなった闇の書の意志を海上に移動、ダメージを与え、はやてと守護騎士達も解放。

それからは原作通りに、一斉攻撃とアルカンシエルによつて闇の書の防衛プログラムを破壊。闇の書事件は終結となった。

十二月二十四日、失格となったのは七十二人。

これは当日の指令開始前にいた百二人の転生者、そのうち緊急指令参加者九十四人の転生者が闇の書の攻撃、もしくは吸収されたことよって失格となった者達。通知の中には氷室も含まれていた。

後の話になるが、参加をしなかった八人の内六人が指令期間終了と共に失格。結果として、A's 終了時に生き残ることに成功したのは、二十四人となった。  
……そして、綾は。



チーム『連合軍』は現在アースラ内の一つの部屋にいた。

何をしているかと言えば、何もしていなかった。事情聴取を終えて各々帰っていいと言われたが、帰る気になれないのである。

「あの、由樹さん……」

「……何？」

城崎が由樹に声をかけた。

由樹は話をするような気分ではなかったが、特にやることもなかったため答えることにした。

「いや、あの……綾さん、大丈夫ですかね？ チーム『反逆者』の皆さんも……気になりませんか？」

「……フツの質問だね」

由樹はそう言つて、腕を組んで枕代わりにし壁に寄りかかり直した。

「大丈夫じゃない？ 綾、生きてはいるんだし」

「……………」

「じゃあ、由樹。私からも訊いていい？」

今度はマリアが言った。マリアは椅子に座つて、今日手に入れた星形のチップを手の中で弄んでいる。

「由樹も、綾も、あの氷室も。……誰も、間違つた選択はしてないわよね？」

「……………」

「じゃあ、どうしてこんな結果になつちやつたのかしら」

カチャカチャとチップ同士の接触音だけが、部屋を流れた。

頭脳明晰である由樹も、その回答はしばらく出てこなかった。

しばらく……それでも二、三分だろう。その時間を置いて、ようやく由樹が答えた。

「……間違つてないけど、正しくもなかった。つてことでしょ」

しかし出てきた答えは、それが精一杯だった。





『反逆者』の三人とリンディは、集中治療室の前でドクターの話を聞くところだった。海斗と竹太刀の身体には所々包帯が巻かれている。五人の他に、守護騎士達から一人抜けていたシャマルの姿もある。

「……なんとか一命は取り留めました。しかし、意識が回復するのは早くて一週間、長ければ一ヶ月近くはかかるでしょう」

「……………」

窓越しに見える集中治療室では、ベッドに全身包帯を巻かれた綾が眠っていた。骨を砕かれた左脚。

もう光を受け入れない右目。

短くなった左腕。

その他、全身に負った数多の傷。それを、海斗達は見せつけられた。

海斗達は呆然と、今の綾の姿を眺めるしかなかった。

「……魔法は、万全ではありません。むしろできないこともたくさんあります」

ドクターは静かに現実を言った。

傷や骨折なら、魔法でなんとかなる。しかし、右目や左手のように消失したものを元に戻すことは、魔法でもできなかつた。失つたものは、もう戻らないのだ。焼け焦げ、完全に機能を失つた左腕の肘から先が切断となつたことも、その表れと言える。

「しばらくは、医務員のいずれかは看護につけておきますので」

「……ええ。わかつたわ」

「……では」

ドクターはリンディに礼をしてから立ち去つた。

リンディは三人の様子を見た。

海斗も由衣も、悲しみに暮れているのが見てわかる。竹太刀は俯いているため表情が見えないが、二人の様子からして同じであろうというのが見てとれた。

「……事情聴取は、あなた達が落ち着いてからでいいから」

反応はなかつた。しかしリンディはそのまま、この場から立ち去つた。

「あ、あの、その……」

シヤマルはどうしたらいいのかわからず狼狽えている。

しかし、そんなシヤマルの目にある人物が映つた。

「あれ……リインフォース？」

シヤマルがその人物の名を口にすると、三人が彼女——リインフォースの方を向い

た。

三人と視線が合つて、リインフォースが会釈をする。

「何しに来たん？」

竹太刀がつっけんどんに尋ねた。鬱陶しいもの、邪魔なものを見るような目で彼女を見ながら。

「……彼に、謝りに来た」

リインフォースのその答えに、竹太刀は鼻で笑つた。

「はっ、自分ようわかつとるやろ。今綾に話しかけても意味あらへんて」

「わかつてる。意識のない彼に謝つても、それはただの自己満足にしかないだろう。だが、私にはもう時間がないんだ」

リインフォースは自分の状態と、その処置について説明した。これによつてシャマルは今自分が夜天の書から切り離されていることを知つた。

「私は、これまで多くの罪を重ね、今回も彼を傷つけた。……この罪は、私の死罪をもつて償う」

「めでたい話やなあ」

竹太刀はヘラヘラと笑い、大袈裟に言つて数歩リインフォースに近づいた。

歩を止めると、竹太刀は笑みを消した。

「せやけど残念。自分に死ぬ自由も権利もあれへんよ」

竹太刀は手に持っていたものをリインフォースへと投げ渡した。

リインフォースは受け取り、それを確認した。茶色の表紙に金色の剣十字の装飾。

リインフォースにとって、見紛うはずはない代物だ。

「これは……」

「夜天の書の写本。長つたらしいから夜天の写本と呼ばせてもろてるけど。綾がアルハザードで見つけたそれを依り代にすりゃ、自分が死ぬことはないんとちゃうか？」

「そ、そうよ、リインフォース！　ちゃんと生きて、ちゃんと綾さんに謝る方がいいわー！　シヤマルが声を明るくする。」

現在の夜天の書が修復不能なのは、元のデータが存在しないから。元のデータさえあれば修復の兆しはあった上、このように依り代の現物があれば、それに無事なデータを移植することでリインフォースは助かる。

だが。

「これは……受け取れない」

「リインフォース!？」

「過去の闇の書事件でも、今回の闇の書事件でも、大きな罪を重ねてきた私に、生きる権利なんてない……」

「……わかつとらんなあ、自分は」

竹太刀は溜め息のあとにそう言った。だんだんと、彼の声は冷えてきていた。

「わいは自分に生きれ言うてる訳やないんや。死ぬ自由も権利もあれへん言うてるねん」

「……違いはあるのか？」

「そんなの、自分が一番知つとるやろ？ 数百年もの間、システムに生かされた自分なら」

「……っ」

リインフォースの身体が小さく震えた。

竹太刀は再び彼女に歩を進め始めた。

「ええか。死ぬなんて、死んだら苦痛はそれまでやんか。でも生きとつたら違うでえ？」

まず、現在半死半生の綾はいつか目を覚ます」

ゆらり、ゆらりと竹太刀が近づく。

ゆつくりと歩を進める竹太刀は、幽鬼に近い気配があつた。

「目を覚ました綾がまず一番に認識するのは、五体満足の身体とは永遠にさよならつちゅー現実や。右目も左手も失つて、もうこれまでの生活は一生できへん。義手も所詮は義手。長ーいリハビリ生活も待つとる」

「……やめろ……」

ラインフォースが消え入るような、震えた声で呟いた。綾のその様子を想像したのか、一步身を引かせた。

しかし、竹太刀はやめない。

「それだけやあらへん。お前はぎょうさん罪重ねてきた言うとするけど、つまりその分被害者おることもわかつとんのやろ？ 直接的被害者だけやなく、その家族、友人、その他諸々。そういう奴らからお前も守護騎士もその主も、みんな揃って非難炎上や」

「やめてくれ……っ！」

「お、おい、竹太刀！ そのぐらいにしとけよ……い！」

怯えるような目をするラインフォースにはさすがに堪えられず、海斗が竹太刀を止めにかかった。

しかし竹太刀は、自身の肩に置かれた海斗の手を振り払った。

「……今更止めるんか？ すぐに止めに入らなかつたつちゅーことは、わいの言うとするのは正しいと思うとつたんやろ？ それに最初つから止めようとしたつて止まらへんで……綾を殺しかけた奴を苦しめてやる最大のチャンスやないか」

「……い！」

「それに、こんなんで縮こまるんなら所詮その程度の覚悟しかあらへんつてことやろ。」

自分の罪を、自分が残していった結果から目え逸らして死ぬことで逃げよう思っただけやないか」

「っ……………」

「…………もうええ。とにかくそんな中に移れ。自分に拒否権なんてあらへんからな。ほな、もう会わんこと願うわ」

吐き捨てるように言つて、竹太刀は早足で歩き出した。

「あ、お…………おい、竹太刀!?!」

海斗はそんな竹太刀を慌てて追いかける。一度だけリインフォースの方に振り返つて少し迷い、それからまた竹太刀を追つて立ち去つた。由衣もしばらく迷つて、それからもう姿が見えなくなった二人を追う。

結局残つたのは、シヤマルとリインフォース。

リインフォースはその場で座り込み、夜天の写本を抱いて泣いた。

「わたし、はっ……………私は……………」

本当に己の死が償いのつもりだった。

しかし、竹太刀に言われ何も言い返すことができなかつた。

自分のせいで一生元に戻るののない身体になつた彼の苦痛を考えるのが怖かつた。

自分に立ち向かい続けた彼が自分に呪いの言葉を吐く姿を想像して恐怖した。そ

してそれから逃げようとしている自分が、酷く醜く見えた。

「私は……!!」

「リインフォース……」

シヤマルは、そんな彼女に何か言うことはできなかつた。

竹太刀の言葉は行き過ぎとは思つたが、間違いだと言い切ることはできない。

事実なのだ。これから先、これまでの闇の書事件の被害者から恨まれる。被害者の中には綾のように、一生ものの傷を負つた者もいるだろう。

竹太刀は、リインフォースに死ぬ自由も権利もないと言つた。あれはリインフォースを生きるように説得する口実ではない。本当に、死ぬよりも苦しいかもしれない現実には彼女を突き落とす呪詛であつた。

リインフォースの泣き声だけが、しばらくその場を流れた。



「おい……おい竹太刀！ 待てておい！」

竹太刀を追いかける海斗は、彼を一旦止めようと肩を掴んだ。

その手が乱暴に振り払われた。



「……まだ言うんか」

「……竹太刀のはやりすぎだろ。あんなことしても、綾は……」

「……わかつとるよ。せやけど……せやけどどないせえつちゅーねん!!」

竹太刀は怒鳴りだした。

「あいつのせいで、綾は半死半生! それだけやなく一生今まで通りに戦えない身体になった! 氷室や、他の転生者達もぎょうさん殺した!!」

「た、竹太刀さん! いくら人がいないからって、ここでそれを言っちゃ……!」

二人に追いついた由衣が、竹太刀の言葉に慌てて止めに入った。

「ああわかつとる、もう氷室達は存在してない扱いやもんな! だからなんやねん!

あいつらが忘れられたから許せ言うんか!」

しかし竹太刀は止まろうとせず、なお声を荒げた。

そう、氷室はもうなのは達の記憶に存在しない。失格者となった者は、転生者以外の記憶には残されないのだ。

当然、存在しないことになっているのだから、ラインフォースが氷室達を殺したことも記録上存在しない事実になっている。なので闇の書事件における守護騎士とラインフォースの罪は、蒐集時の蒐集対象への傷害罪と覚醒時の綾への傷害罪。これだけである。

「ふざけんなよ!! わいは絶対許さへんからな! あんな人殺し、わいは絶対許さへん!!」

吐き出す怒りを吐き出して、ぜえぜえと竹太刀は肩で息をする。

呼吸を整えた竹太刀、打って変わって静かに語り始めた。

「……わかつとる。こないなことしたところで、わいが鬱憤晴らしとるだけや。こんなんで綾がどうにかなる訳やない。せやけどな? せやったらどうすれって話なんよ。魔法では治らん、わいらが願うことはできへん、綾も反逆やつとる限り治す気なんてあらへんやろ」

竹太刀達は指令が終わってすぐ、綾の怪我を、綾が失った右目や左手を治すために神の居城へと向かった。綾の身体を治してほしいと願った。

しかし、待っていたのはその願いは不可能という現実だった。

曰わく、他の転生者のための願いはルールにある『スターチップの譲渡禁止』に抵触するという。願いを叶えるのが神である以上、竹太刀達はその決定に従わざるを得なかった。

「ほんでもって、綾はその身体でこれからの指令なんかかするためこれまで以上に頑張つて、また大きな傷作つて、その繰り返しやろ? わいらは何かやつとるのかと言われたら、何もやれてへんやろ。むしろ、足手まといになつてばっかりや」

竹太刀は限界だった。そして、気づいてしまった。

成績優秀だった竹太刀だが、それが全く綾に適わず、役に立ててもいないという現実。いつでも身体を張っていたのは綾であり、背負ってきたのも綾だった。

「……わいは、チームを抜ける」

「そ、そんな、竹太刀さん！」

「……………」

「もう……わいには耐えられへん……」

竹太刀はそう言って、歩き出した。海斗は彼を追うことはしなかった。これが、十二月二十四日にあった出来事である。

## 第四十五話

十二月二十八日。

綾の自宅には現在、海斗と由衣の姿があつた。闇の書事件が片付いたことにより、マンションからここに戻つてきたのである。アリシアは綾が治療中であること、フェイトがいることからマンシヨンのままである。

「もうすぐ大晦日に正月かあ……」

「そうですね……」

チームの二人がいない今、二人揃つて雰囲気暗い。

「こうして見ると、俺達つて綾も竹太刀もないと正月すらまともに過ごせないんだな……」

「ですね……お節とか作つたことないですし……」

「まあ、正月とか考えてる場合でもないんだけど」

「はい……綾さん、早く目を覚まさないかな……」

重い沈黙。

それに耐えかねた海斗がガリガリ頭を搔いてソファから立ち上がった。

「あー、ダメだ。どーしてもしけちまう」

「海斗さん？」

「由衣ちゃん、買い物行こうぜ。確かもう食材切らしかけていたろ」

「あ、はい」

二人は出かける支度をした。



「あ、海斗さん、由衣ちゃん！」

「なのはちゃん、みんな……」

「……おお、お前らか」

商店街に足を運んだ海斗と由衣は、そこでののは、フェイト、アリサ、すずかの四人と会った。

「何してるんですか？」

「ん……まあ、食材なくなってきたから買い物、な。つっても、綾みたいに料理うまくないから、適当に肉と野菜買ったただけだけど」

「そう、ですか」

綾の名前が出てきてなのはとフェイト、それからアリサとすずかまでもが表情を暗くした。

アリサとすずかはなのはとフェイトが魔導師であることを知ってそう間もなく綾の現状も知った。直接の面識は多くないが、由衣の家族の重傷ということには同情を隠せなかった。

『ところで二人とも、最近のラインフォースの様子がどうか、知ってるか?』

海斗は念話でなのはとフェイトに尋ねた。アリサとすずかにはあまり聞かれない話ではないからだ。

『ラインフォースは……はやてから聞いた話だと、あまり元気がないように見えるって』  
フェイトがそう答えた。

やっぱりか、と海斗は思った。竹太刀から言われた言葉が効いているらしい。

(どうすりゃいいんだろうな……)

それはラインフォースについてだけでなく、自分に対してのものでもあった。

せつかく生き長らえることに成功したラインフォースにはしつかり前を向いてほしいと思う反面、竹太刀の言った通り、綾を殺しかけたラインフォースを許せないと考えている自分もいる。

ラインフォース自身は悪くない。改竄プログラムによって自由を失い、破壊行動に走

る他がなかった彼女が一方的に悪い訳ではないとわかつてはいる。しかし、結局のところ実行犯が彼女であり、彼女が止まることができなかったからといって親友を傷つけた彼女への恨みを消すことはできないでいる。

一体、どうすればいいのだろう。どうあるべきなのだろう。

彼女のために許すべきなのか。

それとも許せずに、綾への償いをさせるべきなのか。

「……………あのー、海斗さん？」

「ん……………」

呼ばれて気がつくのと、目の前でさすがに自分を見上げていた。

「海斗さん、急に喋らなくなったので。どうかしたんですか？」

「そういえば、魔法でこっそり話すこともできるんだっけ。なのは、フェイト、何か話してたの？」

「あ、いや、ええと……………」

「……………あまり詮索はしない方がいいぞ。面白くない話だから……………」

「別に、面白半分って訳じゃ……………」

「……………悪い。じゃあ、これで……………」

海斗は歩き出した。

由衣はお辞儀をして、それから海斗の後について行った。



思えば。

海斗はずっと、綾に頼ってきた。この世界でも、転生前でも。

海斗は高校一年の時、勉強が苦手だとわかっていながら進学校に入学し、苦しい高校生活を送ってきた。

授業に全然理解できず、周りの人達からも置き去りにされ、馬鹿にされた。

家族には出来のいい兄と比べられ、先生からも見捨てられ、自暴自棄になっていた。

その時に出会ったのが、綾だった。

『何もわからなくて自暴自棄って感じだな。教えてやろうか?』

綾は当時すでに学年主席の座を勝ち取っていた。そしてそんな彼の言葉は、その時の海斗にとって鬱陶しい以外の何物でもなかった。

海斗は無視したが、それでも綾は諦めずに声をかけてきた。それに苛ついて、スポーツだけは一級であった海斗は綾を投げ技で床に叩きつけた。

いきなりだったのにも関わらず、綾は完璧な受け身で衝撃を殺し、その後冷静に言っ



た。

『随分磨かれた投げ技じゃないか。それだけ努力する根性があるなら、コツさえ掴めば結果が勝手について来るぞ』

放課後、綾は海斗の勉強に付き合ひ、コツを教えた。的確なアドバイスは先生のそれよりも海斗の頭に入っていた。

結果が勝手について来る。綾の言葉は本当だった。海斗の成績は確実に伸びていった。といつても平均点を少し下回る程度だが、赤点からここまで伸びたことを考えると飛躍的な進歩と言える。

成績が上がって家族は兄と比べるようなことはしなくなり、先生もちゃんと見てくれるようになった。

しかし自分の成績が上がったのがそれまで自分を見下してきていた奴らには面白くなかったらしく、ある日集団で絡んできた。

いくらスポーツ関係で格闘技も強い海斗でも数の差で不利な状況に、助けに来たのは綾だった。綾と二人でその集団に大立ち回りし、圧勝だった。

こうして、学年主席の綾とドベの海斗という異端なコンビが出来上がった。

いつか、海斗は綾に尋ねた。なんであの時勉強を教えてやると言ったのか、なんでここまで自分を助けてくれるのかと。

『ん？ そうだな。………忘れた』

綾は、そうはぐらかしたのだった。



転生前のことを思い出しながら、海斗は由衣と共に帰路に着こうとしていた。

（転生してからも、綾はずっと頑張ってたんだよな……いや、これからも綾は一人で頑張ろうとするんだよな。神への反逆をするために、俺達を守ろうとするために）

それが傷ついてでも。そして、おそらくは自分が死ぬことになるとしてもやるかもしれない。

竹太刀は自分達は綾の足手まといにしかなくなってないと言った。随分前の話になるが、才は神を討つに相応しい人を選別していた。

その通りなのだろう。最終的に神を討つのは綾か才か、もしくは二人が組んで討つかのいずれかだ。自分達はその現場に立つことすらできないだろう。綾の助けにはならない。

じゃあ、今は？ 綾が動けない今は、一体何をすればいい？ 綾が神への挑戦をするために、自分はどうするべきだ？

自分は綾のための、どういう存在になればいい？

「海斗さん？」

いつの間にか自分の前を歩いてきた由衣が声をかけてきた。由衣が前を歩いてきたと言うより、海斗の足が止まっていたらしい。

「……ごめん、由衣ちゃん。先に帰っててくれ。やる事ができた。俺がやらなきや、ダメなんだ」

「あつ、海斗さん!？」

海斗は買った荷物を由衣に渡して、踵を返して走り出した。

昨日の零時に、あるメールが届いていた。

……神からのメール。今日の夜、次なる指令を開始するものである。

## 第四十六話

差出人：管理者

件名：指令3

内容：

次の指令を指定期間内に実行、達成せよ。

指令内容：闇の欠片事件における、闇の書断片データとの戦闘に勝利せよ。

期間：十二月二十八日、闇の欠片事件終了まで。

報酬：報酬は勝利する度に配布され、報酬の内容は勝利した相手によって以下の通りである。

闇の欠片……1個

マテリアル……2個

イレギュラー……3個

なお、同一種に複数勝利してもカウントされる。



建物の陰に隠れた海斗は長杖を展開し、陰から通りの様子を観察する。

もうすでにここは結界の範囲内。いつ敵が現れてもおかしくない。

（俺は綾みたいに頭がいい訳でも、戦術がある訳でもない。魔力もあいつより少ない……でも、相手を厳選さえすれば俺でもいけるはずだ……）

そう、無理をする必要はない。この指令で死ぬことはないのだから、無理してリスクの大きい相手を選ぶ理由などない。

チップを一個取れば十分。二個取れば最高。三個以上は、高望みだろうがやれたら儲け。

（できるだけ、綾のチップが減らないようにする……）

それが、今海斗が成すべきこと。

では、厳選で誰が狙い目か？

（まずは騎士とは言え一番戦闘能力が低いシャマル。あとは……張り付きさえすりや近接戦で勝てる見込みがあるのはとはやてつてところか。同じ理由でシュテルとデイアーチェ……あ、今は星光の殲滅者と閻統べる王か？ どつちでもいいか。……あの二人はやめといった方がいいか。リアルだと性格的な攻撃傾向に違いがでるだろうし）

ともかく、人数は絞り込めた。後はその人物を探し当て、戦うだけだ。

「……おしつ、行くか」

気合いを入れ直して、海斗は探索を始めた。



しばらく探索して回って、ようやくターゲットを見つけ出した。

見つけたのはシャマルだった。しかもまだこちらに気づいていない。

(よし……行くぞ……!)

魔力弾を一発作り、狙いを定めて飛ばす。

……当たった!

「ブーストアツプ……アクセルツッ!」

強化魔法を行使し、一気にシャマルへと駆け出す。元々運動能力が高い海斗。加速強化によって瞬時にトップスピードへと上り詰め、跳び蹴りを叩き込む。

だがまだだ。追撃はまだ終わらないし、終わらせない。

長杖を器用に使い、追撃を仕掛ける。できるだけ手足を狙い、反撃は許さない。

だがそれでも、反撃はきた。

「うおっと!」

クラールヴェイントのクリスタルコアが飛んで襲いかかってきた。とっさに避けたが、追撃の手が止まってしまった。

(しまった——！)

追撃を止めてしまったことを悔やむが、もう遅い。主導権が変わってしまった、主導権を取り戻すのが難しくなってしまった。なぜなら、このコア飛ばしは遠距離に効くからだ。

シャマルの攻撃は距離が開いてもできる。しかし海斗の行う棒術は今持っている長杖が届く距離まで近づかなければならない。魔法で攻撃しようにも肝心の魔力が少なから手数が取れない。こちらに気づかれて距離が開けられる以上、主導権を取り戻すのは難しいのだ。

「くっ……いっ！」

飛んでくるコアを避けながら、海斗はどうすればいいのか考える。

とにかく、あの飛んでくるコアが邪魔だ。近接距離に近づけさえすれば主導権を取り返せる。

(あいつならどうする……?)

思考する。彼ならどう動くか。彼なら、どうやってあれを止めるか。

(やるとしたら……)

そう考えている間にも、相手の攻撃の手が止まる訳ではない。四つのコアが、海斗目掛けて襲いかかる。

ブシツッ!

肉体に突き刺さり、鮮血が噴き出した。

しかし、それからコアが動くことはできなかった。

なぜか。それは、四つのコアが突き刺さった箇所が海斗の左手の手中だからだ。

「いってえ……っ」

血液が垂れ落ちる左手の痛み顔に顔を歪めながらも、海斗は握った左手を開くことはない。

海斗は自ら、左手でコアを受け止め、そのまま手を握り締めたのだ。

これで、コアが飛んでくることはなくなった。

「終わり、だああっ!!」

海斗は長杖に魔力付与をさせ、力一杯に振るった。その一撃がシャマルの頭に直撃して意識を刈り取り、シャマルは断片データとして消え去った。

闇の欠片が消え去ってから、鈍い光が現れ、スターチップが一つ落ちてきた。

「ふう……」

海斗はチップをポケットに突っ込むと、溜め息と共に座り込んだ。



時間にしてたった数分の戦闘だったはずだ。たった数分なのにも関わらず、強い疲労感に見舞われている。

(綾はこれ以上の相手と、すげえ時間をかけてやりあったんだよな……)

それは肉体的にも精神的にも、計り知れない負担だったのだろう。体感してみて、改めてよくわかる。

そして、そこまで苦勞して手に入れたせつかくのチップが、毎回一定数消されていく。

(これじゃあダメだな……もつととらねえと！)

「いっつ!?!」

気合いを入れ直して海斗は立ち上がろうとするが、立ち上がる時に左手をついたのが悪かった。左手に痛みが走った。比較的軽傷とは言え、怪我は怪我だ。

(これぐらい……綾が受けた痛みに比べりゃ、なんともねえー！)

「ヒーリング発動……傷ついた身体に癒やしを……」

「……!?!」

知ってる声と共に、水色の魔力が海斗を囲んだ。魔力が左手へと集中し、痛みが引いていく。

振り返ると、そこに長杖を持った由衣がいた。

「由衣ちゃん!?! なんでここに……」

「すみません……どうしてもじつとしていられなくて、綾さんのデバイスを持って来ちゃいました」

「来ちゃったって……危険なんぞぞ！」

「わかっています！ でも、それでも……なにもできないまま、ずっと頼ってばかりなのは嫌です！」

由衣の表情には、決意が込められていた。

「回復と……それから支援射撃なら術式がこれに入っているのでできます。海斗さんを、サポートしますね！」

「……全く」

海斗は眉間を押さえた。

それを見た由衣は怒られるのかと思つて慌てだした。

「あ、あの、海斗さん……」

「……まあ、どうせ俺一人だとこれで限界だっただろうしな……。わかった。サポートは任せませ」

「……はい！」

こうして合流した二人は、次のの相手を探すため走り出した。

## 第四十七話

海斗と由衣が次の相手を捜している頃。

才もまた、白杖を手に闇の欠片の捜索を行っていた。

と言つても、今は厳密には戦闘が終わつて小休止しているところである。

「……………」

鈍い光から落ちてくるスターチップを受け取つて、ポケットへと入れる。

ポケットの中で、チップ同士の接触音が鳴った。

現時点で、才が倒したのは闇の欠片が三体。チップの入手数は三つ。

才が持つチップの総数は、その三つを含めて二十一個にまで膨れていた。才も、あの

闇の書から逃げる指令に参加し、綾達とは別ルートで闇の書から逃れたのである。

(…………綾が持つチップの総数は確か…………無印終了時に十六個だったから、それに第二指令の十個…………加えて綾が最後に受けていた緊急指令…………闇の書と直接関わる分、獲得数は十個以上は間違いないだろうから…………)

四十個ぐらいか。と才は弾き出した。

その計算はおおよそ正しく、実際には十五個獲得によつて四十一個からのマイナス三

で三十八個。加えて今回の指令で海斗が闇の欠片を一体倒したため、三十九個にまでなっている。

比べれば倍近い差になっている。第一指令の分は仕方ないとして、第二指令でシグナムとヴィータの分を取らなかつたのは大きかつたか。

(……いや、そんなことを考えている暇はないか)

とにかく、今はチップを多く手に入れることが先決だ。

幸い、この指令は比較的簡単だ。相手を厳選すればリスクを大きく減らせるし、うまくいけばチップの大量確保も不可能ではない。

ただ……不確定要素が一つ。

(問題は……メールにもあつた『イレギュラー』の存在……)

獲得できるチップ数が多いとは言え、こればかりはどうするべきか迷う。

まず、イレギュラーという存在がどういったものかわからない。これが一番問題なのだ。戦闘能力や武器がわからなければ、どう対処すべきかわからない。

イレギュラーとして考えられるは、才や綾といった転生者をコピーした闇の欠片。原作には存在し得ないという意味ではイレギュラーと言える。しかし、闇の欠片という括りに入れられそうなので正直微妙だ。戦闘能力も決して高い訳ではないため、それも首を傾げる理由になっている。

後は『U—D』が現れるという可能性も考えたが、こっちの方が有り得ない。U—Dを目覚めさせるには、まずU—Dの正式名称であるシステム『アンブレイカブル・ダーク砕け得ぬ闇』を起動させる方法が必要になる。後の物語のことも考えれば、ない。

では、イレギュラーとは何なのか？ イレギュラーとは自分達にとつて有り得ない存在であり、この物語、原作に対しては何らかの存在意味があるようになっていくはずだ。意味もなく強引に入れるような真似を、神がするとは思えない。

(……考えるのは後にしよう)

しばらく考えて、才は考えるのを止めた。

敵が来たからだ。

フェイトと瓜二つのシルエット。しかし、フェイトとは明らかに違う、青い髪と魔力。

「……君か」

「砕け得ぬ闇を手に入れるため、僕は目の前の敵を、お前を叩き斬る！」

マテリアル——雷刃の襲撃者。

新しいカートリッジを組み込み、才は白杖を雷刃へと向ける。

「……やれると思う？」

「僕の剣に斬れないものはな——いっ！——いくぞお——!!」

雷刃は自分のデバイス、バルフィニカスを上段に構えて突撃してくる。

才は、白杖の先に集束させた魔力を撃ち出した。



一方、海斗と由衣はある人物と出くわしていた。

「……綾、さん」

「……よお、由衣。海斗も」

「……………」

見間違えるはずもない、自分達のリーダー、朝霧綾その人だった。

しかし海斗は、手にしている長杖を強く握り締める。

違う。『これ』は綾じゃない。綾であるはずがない。

「……海斗、できれば状況教えてくれるか？ 今俺に何が起きてるのか、俺にはよくわからねえんだけど」

「……ああ、そうだったな。綾は、ここらへんの物語は知らないんだっけ」

そう思い出して苦笑して、それで力んでいた力が少し抜けて。

少し気持ち落ち着かせて、海斗は状況を話し始めた。

「……綾は、いや……あんたは、闇の欠片って言って、闇の書の残骸が色んな人の形に

なっているんだよ。あんたはそれで綾の姿と人格を写してる」

「……ああ、なるほどな。プログラムとして作られたから、今の俺は右目が見えるし、左手があるのか」

目の前の綾は左手を握ったり開いたりしながら、納得したように言った。

「……覚えてるのか？」

「まあ、ボロボロになって、ぶっ倒れたところまではな」

そういうえば、欠片の個体によつては事件後の記憶を持った奴もいたんだっけ。と海斗は思い出した。

「そーいや、なんで綾はレイジングハートを持ってんだ？」

海斗はさつきから気になっていたことを訊いてみた。綾はいつもの長杖ではなく、レイジングハートを手にしていた。

「なんでって、お前の話からすると、俺は闇の書によつて再現されたんだろ？ だったら基本的には、闇の書が見た装備なんじゃないのか？」

「……ああ、そっか」

言われて、それはそうだと納得し、気づかなかつた自分を恥じた。あの戦いで綾が使っていたのはレイジングハートだったのだから、レイジングハートを持っているのが普通だ。

「さて、で、二人はどうするんだ？」

「え？」

「お前達がここにいるということは、何らかの目的があるはずだ。でもって俺は闇の欠片として、闇の書の防衛プログラムで動いていることになる。正直、こうして止まって雑談してるのも限界がきてる」

「そんな……」

「……………」

綾は何でもないように言ってるが、言ってることは現実だった。こうして戦うことななく話しているということが長く続くはずがない。

「闇の欠片を潰すのが目的なら、今すぐ俺を倒せばいい。それ以外が目的なら、すぐに行け。判断して行動するまでなら、なんとか止まり続けてやれるから」

「……、……………わかった」

海斗は、中段に構えた長杖に魔力を付与させる。

「海斗さん……………」

「これは……夢なんだ。あいつにとっても、俺にとっても。そして……夢は覚めなくちゃいけないんだよな」

夢——綾が無事でいて、こうして普通に話しているという夢。しかし、その夢はいつ



か覚める。覚めてしまう。綾が半死半生である現実に戻る。

でも……最後に一つ、綾に訊きたいことがあった。

「……なあ、綾。一つ訊いていいか？」

「なんだよ？ てか、早くしないとホント限界になるぞ」

「……今の、本当の綾はボロボロでさ。右目も左腕もなくして、他の怪我也たくさんして……それでも、お前はその体のまま戦うのか？ 奴への反逆を続けるのか？」

海斗の問いに、綾はめんどくさそうに頭を掻いた。

「俺は朝霧綾の姿と人格を持った闇の欠片であつて、朝霧綾じゃない。俺の答えがその綾の答えじゃない以上、俺が答えても意味ないぞ」

「難しい言い方しねえでよ……お前ならどうすんだ？ 綾の人格持つてんなら、似た答えになるだろ？」

綾は空に仰いで、しばらく思考した。

しばらく時間をかけて、綾は答えた。思考時間に反して、随分短い答えだった。

「そうだな。……わからん」

「……ははっ」

海斗は、思わず笑った。

「なんだ……結局、闇の欠片だろうが綾は綾だな」

「ん？ そうなのか？」

「そうだよ。肝心な時にはぐらかした答え方するんだもんなあお前。高校の時も、今も」

「ああ……あれか。お前に勉強教えようとした理由。あれもはぐらかしたんだっけ」

「思い出したか？ その理由」

「さあな。質問すら忘れてた」

「ほら、誤魔化してばかりじゃねえか」

「それは本人に訊け。つーか、もう限界になるぞ」

「わかったわかった。……じゃあな、綾」

「ああ。まあ覚めた後も会えるには会えるんだから、またな」

海斗は、振りかぶった長杖を真っ直ぐ振り下ろした。



綾の姿がプログラムとなって消え、鈍い光がそれぞれ二人の目の前に現れる。

そこからスターチップが落ちてきて、しかし、ここで由衣が気がついた。

「……あれ？ イレギュラーって、あの綾さんの闇の欠片なんじゃなかったんですか？」

「へ？ ……あ」

海斗も改めて手元を見てようやく気がついた。

今入手したチップは一つだけだったのだ。即ち、あの綾はただの闇の欠片であり、イレギュラーでないということになる。

「となると……イレギュラーって何なんですかね？」

「んー……ま、それはいいよ。マテリアルよりもヤバイ相手かもしれないだし。さ、次行こうぜ」

「あ、はい！」

このイレギュラーの存在は、二人とは別の場所で明らかとなるのだった。

## 第四十八話

『「夜天の雷!!」』

「ぐああああああっ!!!」

海鳴市海上。そこでははやてとの逆ユニゾンをしたリインフォースが、はやてを素体としたマテリアルD——闇統べる王にとどめの一撃を叩き込んだところだった。

紫の雷が闇王の体を貫き、吹き飛ばした。

『あ、あかん……ユニゾン、もう限界……!』

「ふわああ!」

「我が主!」

元から無理があつた融合騎主体のユニゾンが限界となり、ユニゾンが解けてはやてが押し出された。落下するはやてを助けようと、リインフォースがはやての元へと急ぐ。

その時、はやては見た。

(……!? リインフォースの後ろ……何かいる!!)

剣? 槍? 暗くてよくわからないが、何かをリインフォースに向けている。

「あかんリインフォース! 後ろ!!」

「え？」

闇王との戦いが終わって安心していたところもあって、リインフォースは反応が遅れた。

ドズリユツ！

「——ッ!？」

「リインフォースッ！」

はやての絶叫が響いた。

反応が完全に遅れたリインフォースの腹部を、刀と見られる真つ黒い刃が貫いていた。

「おいおい、油断大敵……お前は今回その言葉をよく体感したんじゃないのか？」  
「……ッ!!」

はやてには聞き慣れない男性の声。

リインフォースは声のする真後ろに拳を振るう。しかし、その前に刀は引き抜かれ、よけられてしまった。

「我が主……！」

敵が離れ、リインフォースは改めて落下中であつたはやてを抱える。

「リインフォース、血が……！」

「我が主、私なら大丈夫です……っ」

「敵がいんのに立ち止まっていいのかよ？」

「っ！」

真上からの強襲が来た。

ラインフォースははやてを抱えたまま、敵の斬撃を避ける。

斬撃は突きが主で、はやてを抱えているラインフォースが細かく動けないのを明らかに狙ってきていた。避けきれず、ラインフォースの体に傷がついてゆく。

「このっ……っ！」

だがラインフォースもやられっぱなしではない。ブラッディダガーの全方位射出をして、怯んだ隙に敵との距離を開ける。

「おいおい、弱っちなあ。闇の書がここまで弱いなんて記憶はねーぞ？」

「明らかに理由わかって言うとするやろこの卑怯者！ 一体何者や！」

攻撃の手が止まって、ようやく敵の姿を改めて見ることができた。

（……誰だ？）

真つ黒な袴と剣道着。剣道のようなだが、防具は喉当てがない面を被っている他は防具らしいものは着けてない。そして刃だけでなく、柄も鍔も鞘も真つ黒な日本刀。

ラインフォースは相手の姿を見て疑問を持った。このような姿の魔導師から蒐集を

した覚えがないからだ。

敵ということは、ほぼ間違いなく闇の欠片かそのマテリアルであるはずで、それらには必ず元になる人物、魔導師か騎士がいるはずなのだ。しかし、今まで蒐集してきた中にこのような姿の者は一人もいない。刀を使う者はいたかもしれないが、奴のように面を被っていた記憶はない。

そんな装備の敵は、はやての怒りの声を聞いてやれやれと被りを振った。

「子供が……戦いに卑怯なんてある訳がねーだろ。あの時油断して接敵の確認をしなかったお前らが悪い」

「なんやと！ 面外しい！ もう一度言うけどあんた一体何者なんや！」

「何者ねえ……おい闇の書。お前もまだわかんねえのか？ 散々やり合ったじゃねえか。まあお前の一方的展開だったがな」

「え……？」

「まあいいや。顔見ればわかるだろうしな」

クツクツクと彼は笑う。

とても楽しそうで、それでいてとても冷たい笑い声。復讐を目前に喜んでいるような、そんな狂気。

面に手を当て、面を魔力に変換して消した。金色の髪が露わになる。顔はまだ手が邪

魔で見えない。

「俺は——」

その手を、彼はどかした。

顔が、露わになる。

「——ッ!!」

「リインフォース……!?!」

彼の顔を見たリインフォースの身体が、びくりと震えた。はやての聲が頭に入らないくらいの恐怖が湧いた。

金髪に、血のような赤い瞳、闇の書の狂気に歪んだ笑み。ここまで変わってしまったも、それに見覚えがあった。今更だが、彼の発する声も、『彼』によく似ている。

よく知っている『彼』。今回の闇の書事件で、限界まで自分に立ち向かい続けた『彼』。そして、今回自分が最も傷つけてしまった『彼』。

まさか、と否定したい。

だが、それは現実だった。

彼の口が、動く。



「お前が殺しかけた男の、マテリアルだよ！ 闇の書おっ!!」

朝霧綾を素体とした、マテリアル。

物語には存在しないはずの、四人目のマテリアル。

——イレギュラーが、リインフォースの目の前にいた。

ビュオツ!!

「ツハアツ!!」

「くっ……!!」

加速強化付与による瞬間的接近からの刺突。それを間一髪で避け、ダガーを射出、リ

インフォースは綾のマテリアルからの逃走を試みる。

逆ユニゾンの反動で動けないはやてを抱えたままでは不利だ。とにかくまずは、はやてを安全な場所へ避難させなければ。

マテリアルの攻撃に備えるため後ろを確認する。

が、いない。

「!？」

「リインフォース、前や！」

はやての言葉で前を見る。前方十数メートルに集束させた魔力を拳に溜めたマテリアルがいた。

（加速強化の多重付与？ 違う、転移?! いやそれより……!）

リインフォースはその場で停止し、はやてを片腕で抱えて空いた右手で防御魔法を展開する。

直後、発射された砲撃が防御魔法陣に衝突。風圧が彼女の白銀の髪を掻き乱す。

「くうっ……!」

予想外の威力に、リインフォースが苦悶の声が出た。

予想外というのも、リインフォースは綾の魔力ランクがC程度だと事件後に聞いたのである。あの時、闇の書としての自分の砲撃を押し返す程の砲撃は夜天の写本に蒐集した魔力を行使したものであるということも。他にもいくらかの魔導技術や適性も聞いていて、決して高い実力を持つ訳でもない彼を自分がなぶり殺しにしようとしていたという事実が心を抉った。

しかし、今受けている砲撃の威力はあの時程ではないにしても、魔力ランクCの魔導師が片手で放てるようなものでもなかった。

飛行適性がないはずなのに飛んでいたことといい、先程の転移、そしてこの砲撃。

（考えられるとしたら、あのマテリアルは——）

「リインフォースッ！」

「——っ!？」

はやてに呼びかけられ、気づいた時にはいつの間にか接近していたマテリアルに側面から蹴り飛ばされた。

「かはっ！」

壁に背中を打ちつけ、肺から空気が押し出される。

思考している隙に近づかれたらしい。運良くはやては無事だったものの、こんなことでは騎士失格だ。

「だらしねえなあ。たった数日でロストロギアがこんなに弱くなるもんなのか？ それとも、こんな奴に死にかけるオリジナルがマヌケなのか？」

「……自身のプログラムを書き換えているからというの、ないのか」

マテリアルを睨みつけてリインフォースが問う。自分が馬鹿にされるのは構わないが、暴走する自分に立ち向かい続けた彼を、自分が生きていける最大の要因である綾を罵倒することは許せなかった。

そして、プログラムの書き換え。リインフォースはこれが奴が異常なまでに強くなっている理由と見た。

その名の通り、プログラムの構造を書き換えるそれは、魔法プログラム生命体である

リインフォースや守護騎士が行える荒技だ。適性のないスキルを扱えたり、術の威力を底上げすることが可能だが、無理な書き換えは大きな負担がかかり、最悪の場合書き換えに失敗して自身が消滅してしまう、賭けに近いものだ。

しかしマテリアルはケラケラ笑い、リインフォースの予想を裏切った。

「書き換え、ね。まあ確かに飛行適性をちよいと書き換えはしたが、それ以外は何もいじってねえよ」

「なっ……そんなはずはない！ 彼はお前ほどの魔力なんて……」

「この魔力が本来の俺だからな。わざわざ能力の低いとこまでオリジナルに合わせる必要はないだろう？」

「だが、魔導資質だつて……!」

「できるんだなあ、それが。オリジナルの奴は演算能力がすごいんだよ。知識さえありや術式を一から組み直すのも簡単にできるぐらいにだ。俺はうまく自分用の適性を計算して使ってたよ。まあ飛行だけは適性が低すぎて身体に手え加える他はなかったがな。ちなみに、俺は闇の書の断片であるから、やろうと思えば誰の魔法を使うぐらいできるんだが、それは言わなくてもわかるよな？」

まさか、マテリアルが自分が撃てるように計算し直しているとは思わなかった。

つまり、奴は綾が持つ頭脳に闇の書の強大な魔導の力を掛け合わせている。非常に厄

介だ。

「さて、そろそろ無駄話もしまいにしようぜ。その荷物置くならとつと置きな。せつかくこのオリジナルの体と記憶を選んだんだ。てめえを徹底的に苦しめてやりてえんだよ」

マテリアルは不適な笑みを浮かべ、クイクイと指で挑発する。

リインフォースは、はやてを壁際に降ろした。

「リインフォース……」

「我が主、ご心配なさらずに……私は、あのような者には負けません」

不安げなはやてを安心させようと微笑みかけ、そしてマテリアルへと向き直る。

マテリアルはヘラヘラ笑ったまま、肩を刀の反りで軽く叩いていた。

「負けない、ね。オリジナルとは違うってことはもう教えてやったんだし、その自信は俺がオリジナルとは別人だから遠慮の必要はないってとこか？」

「……ああ」

リインフォースは拳を固め、構える。

マテリアルは特に構えないまま、さらに笑みを濃くした。本当に楽しそうに、面白そうに。  
うに。

「ククククツ……いいぜ……その虚栄に覆われた心的外傷<sup>トラウマ</sup>、じっくり、たあつぷり炙り出

してやるからよおっ!!」

狂気の笑みを抑えぬまま、刀を構えてマテリアルは突進した。

## 第四十九話

「ツハア!!」

「……………っ!」

弾丸のような速さで繰り出される刺突。的確に急所を狙ってマテリアルが放つそれを、リインフォースは間一髪距離でよける。

マテリアルは突きの後の戻しも早く、すぐに次の刺突を繰り出す。

突く。突く突く突く。

高速の連撃をリインフォースは防ぎ、弾き、かわし。

そしてマテリアルの刀を流して懐に入り込み、魔力を込めた掌打を叩き込み、吹き飛ばした。

「げほっ!! ……カカカカカッ!!」

吹き飛ばされたマテリアルは、不気味に笑いながら魔力弾を飛ばす。弾数は十発。

対するリインフォースはブラッディダガーを射出。実体剣であるブラッディダガーは魔力弾を貫き、マテリアルへと向かう。

襲いかかるダガーを刀で弾き、かわし、マテリアルはリインフォースへと突っ込む。

「オラアアアツ!!」

刀を突き出した突進。

リインフォースは防御陣を傾けて展開した刀と障壁が接触して火花を散らせながらも、勢いは止まりきらずマテリアルはリインフォースの右側へと流れる。

「はああつ!!」

「ごはっ!？」

流されて隙ができたマテリアルに渾身の正拳突き。マテリアルが吹っ飛び、地面を転がっていく。

「ゲフツ、ごほっ!　　がはっ……………」

この一撃が効いたらしく、マテリアルは盛大に咽せ、なかなか立ち上がれない。

……………だが、それでも彼の笑いは止まらない。

「……………ク、クフフフ……………効くじゃねえか……………とてもオリジナルを殺しかけて反省してるような奴の拳とは思えねえなあ……………実際、特に何も思ってたかったりとかってすんのか?」

「自分で言っていただろう。お前は、彼じゃない。お前に遠慮する必要なんてない」

「わかってないねえ……………トラウマってのは、その人かどうかなんて関係ないんだよ。必要な一部を再現すれば、後はお前の頭が勝手に記憶を再生してくんだ」



マテリアルは刀を逆手持ちにし、右腕と左腕を交差させた。

「……こんな風にな！」

次の瞬間、マテリアルは刀を持つ右手を引き、自分の左腕を斬り飛ばした。

「——ッ!？」

「ガアアアアアアアアッ!!！」

ドチャリと左腕であった肉が落ち、プログラムとして霧散する。

切断された激痛に絶叫するマテリアル。しかし、激痛に歪んだ表情も次第に笑みへと変わっていく。

「ク、クカカカカ……！…… どうだよ闇の書お……！……これでちったあ思い出せるか!? あい  
つもお前との戦いで、左腕がなくなっただんだよなあ!!！」

「……っ!!！」

ぞわりと、リインフォースの脳裏の光景が映った。

こうして生きていられるようになり、今までのように忘れることはないあの光景。

クリスマスイブの日に、闇の書の意志として破壊と殲滅を振り撒いていた光景。そんな自分に立ち向かう『彼』。自分が砲撃を撃ち出し、彼は左手で受け止めた。受け止めた故に、彼は左手を失った。左腕が焼かれた。

そう、自分のせいで、彼は左腕を……それだけじゃない、その後も自分は容赦なく彼

に――。

「――ッ!!」

リインフォースは再生されていく記憶を振り払うように、大量のブラッディダガーをマテリアルへと撃ち出した。

刃の雨がマテリアルを襲う。しかしマテリアルは一切防ごうとせず、全身に突き刺さり、斬りつけていく。

そしてそのダガーの一つが、マテリアルの右目を斬り飛ばした。

「……ッ!!」

「あの時もお前はこうして、あいつを斬り刻んだ。そして右目を奪ったんだよなあー!」

……そうだ。砲撃でダガーを吹き飛ばした彼に、追撃の第二陣。抵抗する手段もよける時間もなく、彼は右目を失った。

目の前で再現され、脳裏で再生され、重なっていく。

いつの間にか、リインフォースの身体はガタガタと震えだしていた。カチカチと歯が鳴る。リインフォースはそれに気がつかないほど、気が動転してきていた。

「……違う……っ。お前は、お前は彼じゃない……っ」

「何が違うんだ? この身体は、朝霧綾と言ってもいいんだぜ?」

「違う! お前は綾じゃないっ!!」

恐怖でヒステリックな叫んだリインフォースが砲撃を放った。

動転して加減を忘れた砲撃の威力は、間違ひなく大きな一撃のはずだ。しかしその一撃は簡単に受け止められ、逆にその魔力で叩き返された。ザフィーラの魔法、烈鋼襲牙だ。

「がはっ!!」

「オラアアッ!!」

吹っ飛ばされたリインフォースにマテリアルが追撃。リインフォースの胸倉を掴み、地面に叩きつける。

「ケケケ……いくら管制人格でも、精神的にイッてるなら御しやすいことこの上ねえ……なあー!」

さらに、マテリアルは刀をリインフォースの腹に突き刺した。

「リインフォース!」

「キキキ……どうだよ……てめえのトラウマが炙り出されるのは……あいつと同じく腹を突き刺されるのはどんな気持ちだよおお……!」

「ぐ、あああああっ!!」

はやての叫びなどなかったかのように、マテリアルは突き刺した刀をねじ込んでいく。ねじ込まれる度に走る激痛に、リインフォースが絶叫する。

「ククククク……！　痛いかな？　痛いよなあ！　俺もわかるぞ。そういう記憶を持ってんだからなあ！」

「あああああつ!!」

「やめて！　お願いやから今すぐやめて!!」

動けないはやては、ただ叫ぶしかなかった。

しかしそれが届いたのか、マテリアルは刀を引き抜いてリインフォースを蹴飛ばした。

「リインフォース！」

「ごちやごちやうるせえ主様だなあ。言つとくが、てめえも射程圏内なんだぜ？　射砲

撃は勿論、その気になりや烈火の将の空牙で首を落とすことだってできるぜ？」

「や、やめろ……主に、手を出すな……！」

うつ伏せで倒れていたリインフォースが、ゆっくり起き上がりながらマテリアルを睨む。

マテリアルは顔だけをリインフォースの方に向ける。

「主、ねえ。つっても、こいつは元主であつて、お前が現在プログラムを置いてるあの写本の主はあいつなんだろう？」

マテリアルの言う通り、はやては厳密には主ではない。現在の夜天の写本の主は綾で

ある。はやてがその写本を扱っているのは、リインフォースが管制人格としての権限を行使しているためで、リインフォースがはやてとの融合がうまくできないのもそれが理由である。

だが、そんなことは彼女には関係なかった。

「それでも……、私にとつては、八神はやては私の主だ！」

「……ふうん。じゃあ、こいつ死んでも生きるお前はどうなるんだらうな？」

マテリアルは実験するような物言いで、はやてに向けて刺突の構えをした。目も、殺る気だ。

「やめろっ!!」

リインフォースがマテリアルを止めようと走り出した。

その時、マテリアルの口角がっり上がった。

「バカめ! こんな子供騙しに引っかかりやがって!」

「っ!」

リインフォースが気づいた時にはもう遅かった。

いつの間にか仕掛けられていた設置型バインドが作動し、リインフォースを絡め捕った。

「おらよおっ!」

「うああっ!!」

無防備なリインフォースにマテリアルが砲撃。リインフォースを吹き飛ばした。

しかも吹き飛ばされた先にもバインドが仕掛けられていて、それがリインフォースの自由を再び奪う。

「リインフォース!」

「まだやり足りねえと言っていてえが……そろそろ終わりにしてやるよ。こつちにもやるべきことつてもんがあるからな」

「やめて! リインフォースを殺そうとなんかせんでえ!!」

リインフォースに向けて平突き of 構えを取るマテリアルに、はやてが懇願するように、悲鳴に近い叫びを上げた。

はやてのその叫びを聞いて、マテリアルの笑みは濃くなる。

「カカカカカツ……安心しな。こいつの次はお前だ……二人仲良くあの世に行つてなあ!!」

地面を強く蹴りつけ、マテリアルがリインフォースへと走り出す。

走りながら、マテリアルは右手の狂剣を突き出す。

ドッ

しかし刀が到達するより前に、地面から突き出た白い棘がマテリアルの右腕を突き刺

し、右腕と刀が地面に落ちた。

ボトリと肉塊が落ちる音と、カランと乾いた金属音。

マテリアルはよくわからないものを見るように、なくなった右腕を見る。

「……………あ？」

「おらあああああつ!!」

これ以上なく隙だらけとなったマテリアルに叫び声と共にヴィータが突っ込み、ラケーテンフォームとなっているグラーフアイゼンをマテリアルの横つ腹へと叩きつけた。

吹っ飛ばされたマテリアルを緑色の魔力糸が縛り付け、身動きが取れなくなったところに炎を纏った矢が貫き、爆発を生んだ。

「はやて！ 大丈夫!?!」

「我が主、ご無事ですか!?!」

「みんな!」

駆けつけてきたヴォルケンリッターの姿に、はやては安堵の表情を浮かべた。

はやての元にヴィータとザフィーラ、そしてリインフォースの元にはシグナムとシャマルが向かう。

「将……………シャマル……………」

「随分やられたみたいだな。何はともあれ、無事で何よりだ」

「すぐに手当てをするわ。シグナム、バインドを破壊してリインフォースを寝かせて」

「心得た」

シグナムがバインド破壊の術式を発動しようと手を翳す。

だが、そこに声が届いた。

「ク、クカカカカッ……」

『!!』

不気味な笑い声。守護騎士四人全員が一斉に声の方を向いた。

「この……人殺し共があ……」

マテリアルだ。右腕も落とされ、鉄槌で殴り飛ばされ、矢を貫かれてなお、生きていた。

シグナムとヴィータは、自身の武器を構える。

「しぶといな……まだやるか」

「ケヒヒ……残念。どうやらここまでつぽいんでなあ」

仰向けに倒れたままシグナム達を見るマテリアルは、体中に受けた傷からプログラムの崩壊を起こしていた。

それでも、マテリアルは笑うのをやめなかった。



「おい、闇の書……てめえに俺からの親切的なアドバイスだ……よく聞け」  
「……………」

「俺達闇の欠片は……オリジナルの悲しみや憎しみ、怒り、狂気……心の闇を元にして駆体構築をする……まあ中にはその闇を表に出さねえ奴もいるが……闇を持たねえで存在する人なんざいねえんだよ……」

話している間にも崩壊を続けるマテリアル。残る体は遂に頭だけになっていく。

それでも笑いの表情を一切止めない。リインフォースに、守護騎士とその主にもその言葉を擦り付けていく。

「クフフフ……せいぜい……また後ろからぶっ刺されることがねえように……………」  
「気いつけるこつたなあああ!!」

それが最後の断末魔となり、マテリアルは跡形もなくなった。

マテリアルが消滅した後も、術者がいなくなつたことでバインドから解放されたリインフォースはしばらくマテリアルがいた辺りを眺め続けた。

リインフォースを抱えていたシグナムが、リインフォースを地面に寝かせた。

「リインフォース、奴の言葉は気にするな。……我々のしたことは罪だが、だからと言って悪の言葉まで聞き入れてはならん。それに、朝霧は策を弄することはあつても闇討ちまでするとは思わん」

「……ああ。……わかつてる」

そうは言っても、リインフォースの表情は曇ったままだった。

「手当てをして、すぐアースラに運ぶわ」

「我が主も、アースラへ。後は我々にお任せください」

「……うん。ほな、お願いな」

こうして、リインフォースとはやてはアースラへと送られていった。

綾が目覚めますのは、この闇の欠片事件から一週間後のことである。

## 第五十話

ここはどこだろう。

そうは思っても、別にその疑問を解決しようとは何故か思わない。

真つ黒い空間。暗い訳じゃない。自分の姿がわかる。

もうどのくらいここにいるんだっけ。たったの数分かもしれない。ひよつとしたら何日も経ってるのかもしれない。

でも、どうでもよかった。

何もせず、このまま何もないままがいいと思つた。

なんでだろう。……その理由を考える気にもならない。

「全く、いつまでへばっているつもりですの？」

とても澄んだ、誰かの声が聞こえた。

声の方を見ると、何もなかったはずの空間に、一人の少女がいた。

透き通った海のように青いドレスを身に纏い、白百合のような白さの髪をなびかせる少女。  
女。

歳は十二だ。何故わかるのかって訊かれれば、彼女の姿を見たのがその年しかないか

ら。

腰に手を当て、透き通った黒い瞳が真つ直ぐ俺を見つめてくる。

「君は……」

「ほら、早く来なさい。へばったままでいるなら、わたくしはもう行きますわよ」  
言つて、彼女は背中を向けて歩き出した。待つてくれる様子はない。

何に對してもどうでもいいと思つていた俺が、ここで初めて待つてほしいと思ひ、追いかけようと思ひ、動き出した。

「おい……おい、待てよー」

追いかけて、伸ばした手が彼女の肩に届きそうになつて。

彼女の名前を、呼ぼうとして――。



光を感じた。

ぼんやりと目を開ける。霧がかかったような風景しか映らない。右目は開こうとす  
らない。

それでもしばらく目を開け続けていると焦点が合つていき、ようやく見ている風景が

どこかの天井であることがわかった。

「……………起きたかい？」

声が聞こえた。

声の方に顔を傾けると、そこにはこちらを見る才の顔があった。

何を言えばいいかわからなかった。訊きたいことがあまりにも多すぎた。

「教えるべきことはたくさんあるけど、順を追って説明するよ。……………まず、今日は一月四日。闇の書事件から十一日経ってる。綾はあの指令終了直前から今まで意識不明でここ、集中治療室で治療を受けていた。右目と左手を戦いで損失し、左腕の細胞が死んだ部分も切除。左足は骨折……………けどそれは治るって」

みんなのことを訊こうと思って、自分が今呼吸器つけられていることを思い出し、念話で尋ねる。

『みんなは……………？』

「……………氷室以外、僕らが知ってる人達は生きてるよ。でも……………竹太刀がチームを抜けた」

……………。

『……………あいつは？』

「……………リインフォースのこと？ 生きてるよ。夜天の写本に無事なシステムや蒐集魔力を移して生きている」

.....。

「あと……闇の書事件の報告、まだ出されてないらしいよ。リンディ提督が報告書を出す前に、どうしても君と話しておきたいって」

.....。

「……じゃあ、みんなに伝えてくるよ」

『……待ってくれ』

立ち去ろうとする才を、俺は呼び止めた。

才は、こちらに振り返った。



才が集中治療室から出ると、ちやうどそこに海斗やなのはといった綾に関わった人物のほとんどが押しかけてきた。変わったところでは、『インテリ不良』のメンバーや『連合軍』のメンバーもいる。

海斗が尋ねた。

「なあ才！ 綾が目を覚ましたってドクターから聞いたぞ！ 本当なのか!?!」

「……うん。話をしてきた……」

その才の言葉に、海斗の顔が一気に明るくなった。転生前から一番付き合いが長い彼だからこそ、この中で一番綾を心配し、そしてこの知らせに一番喜んだのだろう。他の者達にも、意識回復の知らせに喜びの空気が流れる。

「……よかつたあ……！　じゃあ、すぐに……」

「だけど、しばらく面談謝絶だつて」

「……え？」

空気が急に冷えるような、海斗はそんな感覚を味わった。海斗だけでなく、他の全員も同じだった。

「面談謝絶つて……なんでだよ？」

「……疲れたつて」

才は答えた。

「疲れがまだ取れなくて……もうしばらくは一人で落ち着きたいから……だつてさ。今は寝てるよ」

海斗他、数人が窓の方へと移動し、中の様子を見た。

確かに、綾は横になっている。起き上がる様子はない。

「そんな……」

由衣が呟いた。

才は窓を見る人達の様子を見てから、リンディの位置を確認し、彼女だけに念話を送る。

『……午後九時以降にもう一度訪ねてみてください。彼が起きていたら、多分話ができると思います』

『……その話は、私だけが聞いていいのかしら？ 海斗さんや由衣さん……彼と話をしたい人はもつというのよ？』

『その彼が、まずはあなたとの話をつけたいとのことですよ』

『………わかったわ』

リンディの了承の返事を聞いて、才はこの場を立ち去った。



ベッドに横になったまま、俺は思考の海に浸かり続ける。

面談謝絶にして、みんなには申し訳ないことをしたのかもしれない。十一日も眠り続けていたんだ、みんなに心配されてたかもしれない。けど、それでも落ち着いて状況を受け入れる時間が欲しかった。

「……………」



……まず今回の戦いで、俺は神の指令に打ち勝った。三十分間、闇の書から逃げ続けるといふルールで、俺は気絶はしたものの逃げ切った。勝った。勝利した。少なくともルール上はそう言える。

(でも、他の状況を合わせたら?)

まず、この戦いで左腕を失った。右目も光が入らなくなった。

何より、たくさんの犠牲が出た。氷室も死んだ。

大勢の人達も、氷室も、俺が未熟だったから死んだ。そう言える。

こんな結果で、果たして勝ったと言えるのか?

そして関節的勝負でこの結果で、奴を直接討とうとする時に成功するのか? みんな

を守ることはできるのか?

(……………)

思案する。何度も。何度も。

……答えは、一つしか出てこなかった。



午後九時になってから、リンディは才の言う通りに再び綾の元へと向かっていた。

最近人の通りが多くなっていた集中治療室までの道のり。しかし今は時間帯に加えて綾からの面談謝絶によって、誰とすれ違うこともなかった。

集中治療室の前に着いて、まずは窓から中の様子を覗いてみる。

すると、才が言っていた通り、綾はベッドの上で上半身を起こしていた。

リンディはその姿を確認して溜め息をつき、集中治療室の扉を叩き、中に入る。

「無理に身体を動かさしちゃダメよ。ちゃんと寝てなさい」

まさか、起きた彼にかける第一声が説教になるとは。

しかし、喜びの言葉は彼と最も親しい友人が最初にかけるべきだろうということもあり、自分は説教役に回ろうと考えたのである。

「……………」

綾はゆっくりと顔をリンディの方へと向けた。

生気が感じず、疲れきった瞳。一瞬リンディは、彼が綾であると思えなかった。

「……………ほら、早く横になって」

「報告書……………俺の目覚め待ちにしてたそうですね……………」

綾を横にするために彼の肩へと伸ばした手を、その声がかかった瞬間に止めた。

「俺の判断が報告内容を変えさせようか……………そんな権限はないはずなのに、あなたがそれを決めた理由……………当ててみましょうか？」

「……言ってみなさい」

「……まず、闇の書覚醒から戦闘終了までの流れを確認しましょう。……流れは大きく分けて三つ。一つめは闇の書が覚醒し、なのはやフェイトとの戦闘を行い、そして二人を吸収した、闇の書の比較的安定期。二つめは、闇の書の本格的な暴走が開始され、なのはとフェイトが解放されるまでの間である闇の書の暴走途中段階。三つめ、夜天の書の主八神はやてや守護騎士が解放されてから一斉攻撃及びにアルカンシエルによつて防衛プログラムを破壊、事件終焉となる最後」

「……ええ。それで？」

「……俺達が戦っていたのは二つめの闇の書暴走途中段階になるのですが……あなたが事件報告書を出すことを迷っている理由もここにあるんですよね？」

「……理由は？」

リンディは敢えて訊いた。

「簡単な話ですよ……その時に対処していたのがなのはやフェイト、クロノといった優秀な魔導師ではなく、空戦すらできない魔力Cランクの俺を中心とした、低魔力の人達ばかりなんですから、そんな事実を正直に書けば上の者としては面白くないばかりか、管理局が無能扱いされるじゃないですか……。あなた個人で終わるならまだしも、プレシア事件のことがあるフェイトは叩かれ具合が酷くなる。それだけじゃなく、人を半死

半生にまで追い込んだと報告してしまえば彼女と主の罪はいつそう重くなり、守護騎士も一緒に纏めて刑務所行き、局の戦力としての確保ができなくなる可能性も高くなる」  
(……………)

綾の推理に、リンデイは無言。これは肯定の意味を示していた。

ここまで、彼の言うことはそのまま的を射ていた。リンデイは自分だけの責任でどうにかなのであればそのままありのままの報告書を出していただろう。しかし、それはフェイトやはやてに影響が出る。はやてや守護騎士について彼女達はちゃんと償いをすると言っただけだが、償いで人生を喰われることにはなつてほしくないという思いがある。戦力確保については、リンデイ自身はそこまで重要視はしていない。上がどう考えるかは別であるが。

これらのことから、リンデイは彼女達を守る方法を考えた。そしてその答えは出ていた。彼女達を守るといふ観点において最大の手法。

しかしそれは同時に人と法を守る者として、人として最悪の方法でもある。それ故に、リンデイはそれを即決することはできなかつた。

綾はそこまで見抜いていた。

「だから……作りはしたんですよね？　彼女達を守るための報告内容を。なんで迷う必要があるんですか？　下手に長引けば、感づかれる可能性が高くなりますよ？」

「本気で言ってるの？　そこまでわかってるあなた、その内容がわからない訳がないでしょう？」

「ええ、わかってますよ。簡単に言えば……俺の存在をなかったことにするんでしょう？」

「真実の一部隠蔽と改竄。それが唯一出た結論だった。」

綾が言った闇の書の暴走途中段階。そこで戦っていたのを綾ではなく、なのはやフェイトにすり替えるのである。すり替えて、綾が負傷した事実を伏せれば、三十分程度の内容を書き換えれば、死傷者ゼロという最高のストーリーに書き換わるのである。

そしてその報告書の内容はありのままの真実を書いたものとは別にすでに完成している。後はどちらかを提出するだけなのだ。

「私達は法を守る者として、真実を伝えるという責務があるのよ」

「ではなんで偽りの真実を作ったんですか？　偽ってでも守りたいか、あるいはその方が利益があると考えたからなんでしょう？　もう使い物になりそうにない身体になったCランクより、優秀な魔導師・騎士計七人を守った方が価値があり、得だと判断した」

「……」  
「そこまで言って、綾の言葉は遮られた。胸倉をリンデイに掴まれたからだ。」

「……人の命に、価値の上下も損得もないのよ!!」

「でもあなたはそういう選択肢を作った。その現実はもう変わりませんよ」

怒りを込めた言葉に、綾は平然とそう返した。もう、どうでもいいかのように。

綾が再び口を動かす。

「残酷でも、常に最善の判断をしなければならぬ。ジュエルシード事件の時にあなたはそう言ったじゃないですか」

「……この判断の、どこが最善なの？」

「逆に訊きましょう。彼女達を刑務所に放り込むことのどこが最善ですか？」

「……………」

「そもそもあの言葉は間違っているんですよ。最善なんてことはありえません。必ずどこかに最悪があります」

リンディはゆつくりと、綾の胸倉を掴む手を放した。

「決断、できましたか？」

「……一つ、訊いていいかしら？」

「何です？」

「毎回のようにあなたは無茶するけど……どうしてあなたは無茶するの？」

「……そうですね」

綾はしばらく考え、そして独り言のように答えた。

「勝ちたいから、ですかね」

「何よ、それ」

「さあ」

「さあつて……」

リンディは溜め息をついた。これ以上言及しても無駄なようだ。

「あなたつて、一体どこまで考えているのか、それとも考えていないのか、わかったものじゃないわね」

「それは俺自身もそう思います。あ、因みにですが、レイジングハートの使用履歴を使つてはどうですか。報告書の信憑性が高くなりますよ」

「それ考えて、レイジングハートを使ったなんて言うんじゃないでしょうね」

「まさか。偶然ですよ」

「全く……」

またリンディは溜め息をついた。綾を話をするとう溜め息をつきたくなる。

「じゃあ、早く横になって、治療に専念しなさい」

「ええ、それじゃ。……あと、もう数日くらいは一人で休ませてもらいますので」

「わかったわ」

リンディは踵を返し、出入り口へと向かう。

ドアを開けたところで、リンデイは一旦足を止めた。

「……………ごめんなさい」

「何を謝ってるんです。俺はもう、闇の書事件とは関係ないじゃないですか」

「……………」

リンデイは何も返さず、そのまま退室した。



ドアが閉まったのを確認して、俺は倒れたかのように横になった。ボフツと、枕に後頭部が沈む。

「……………最低だなあ、俺」

眩きの後は、医療機器の音だけが流れ続けた。



## 第五十一話

俺が目を覚まして一日が経過した。

脚が砕かれている以上現在歩くこともできない俺はベッドに横になり、右腕で天井からの光を遮っている。

「……………」

しばらくそのままのままでいた右腕をどかす。一気に取り込まれる光に、目を少し細めた。  
(できるだけ早い内に……………話をした方がいいよな……………)

寧ろ、今話すべきなのだろう。面談謝絶にしている今なら、一対一の話も容易だ。

念話をしようとして、やめる。アースラにいるとは限らない。なら、ここは電話で呼ぶべきだろう。

少し動いて、テーブルの上に置かれている携帯を手に取った。



「……………面談謝絶って言うっておきながら、君から呼び出すというのはどうかと思うよ?」

「……まあ、そうだろうな」

数分後、呼び出した才が集中治療室に入ってきた。彼には、話さなければならなかった。これからのこと、俺がどうするのかということ。

そして何より、あのことも。

「報告書、君が改竄するように進言したらしいね。彼女、話聞いて泣いてたよ?」

「リインフォースのことか。……まあ、なんとかなるだろう」

「そう……それで、話って?」

才が訊いてきたため、俺も話すことにした。

「……十二月二十四日の指令で、俺が達成した場合の報酬は、スターチップ十五個。それから……神への挑戦権を得るのに必要な条件の告知」

「……それで? 話は聞いたの?」

「……ああ」

リンディさんとの話が終わって、それから報酬のスターチップを受け取った後に奴からの電話がかかってきたのだ。

……そして、奴が言い放った条件は……

「……百個だとよ」

「……………」

「スターチップ百個。厳密には、百個揃えた方がいいなんて言い方だったかな」

それが、奴の答えだった。

そして、それを聞くより前に、俺はあることを決めていた。

「才……俺は、反逆から手を引く」

「……………」

「……限界になっちまった」

それが、俺の出した答えだった。

直接神に挑み、勝てる可能性……どうしても、俺には勝てる見込みがなかった。そして何より、精神がついていけそうになかった。

才は、静かに椅子に座った。

「……君の話を聞いて、一つ確信した」

「確信？」

「……うん。神との直接対決では、チップそのものが僕達の力だ。勝負の方法は……多分、戦闘系になる」

「……どういうことだ？」

「……神は、挑戦するにはチップは百個がいいと言っただけであって、百個揃える必要はない言い方をしたんでしょ？　つまり、チップの数を揃えることはただの下準備……」

チップを消費して挑戦権を得るのではなく、チップを使用して戦うことになる……」

「……でも、なんで勝負が戦闘だとわかるんだ？ ギャンブルって可能性も否定できないんじゃない？」

「……神に願いを叶える力がある以上、その存在そのものがイカサマになる。勝負を成り立たせるには、イカサマのできるギャンブル系ではできない」

「……………」

よく考えたら、俺でもわかることなのかもしれない話だった。ただ、今の俺は精神状態からそれに気づくことができなかったのだろう。

「チップを力として使用する戦闘であるなら、勝利の可能性はある。その方法は——」

「待ってくれ。それは……俺が聞くことなのか？ 俺は……引くと言ったんだぞ？」

「……僕としては、君以外は有り得ない。君だからこそ聞いてほしいと思ってる。我が儘だけど、僕は君が立ち上がって、共に戦ってほしいと思ってる」

「……………」

「……じゃあ、話すよ。僕が推測する、勝負の方法と攻略方法。それは——」

それから静かに、ゆっくりと彼は語り始めた。

「——」

勝負の大まかな概要。

その勝負で生じる一つの抜け道。

そして、それを利用した攻略法。

どれくらい時間をかけたのだろう。

ゆつくりとした話のはずなのに、理解して追い付くのがやつとだった気がした。

「——と、こんな感じかな……」

「……マジか？」

俺はそう訊いた。

訊いてるのは、推測された勝負の信憑性ではない。攻略法についてだ。

「リスクが大きすぎる……その方法も成功率は高くないはずだし、何より、まずどちらか一人は死ぬことになるんだぞ？」

「……だろうね」

「それ以前に、そのやり方が成立しない可能性だって……」

「それでも……構わない！」

「……!?!」

「例え成功率が低かったとしても、例え死ぬことになるとしても……謀反のためなら、それに全てを賭けても構わない」

相変わらず表情の変化が乏しい才だが、その目には確かな覚悟が見えていた。

その覚悟に俺は押し黙って、しばらくの間沈黙が流れる。

才が、沈黙を破った。

「……神風……という言葉は、知ってるよね？」

「……文字通り神が起こす風……その他に、日本に存在した神風特別攻撃隊から転じて、命知らずなさま……」

「そう……誰かが、その神風を起こす必要がある。僕は……それが、僕と君だと思ってる」

才は立ち上がった。

「答えはまだ言わなくていいよ……すぐ決めたところで、しばらくはチップを集めることに専念しなければならぬんだし。でも……できれば君が、もう一度立ち上がることを願ってる」

そう言つて、才は立ち去った。



俺はしばらく、ベッドに横になり、腕で目隠しをした状態でいた。

「……神風、か」

才の推理が正しいことが前提だが、あの作戦なら確かに通用するかもしれない。完全な特攻作戦であり、成否に関わらずどちらかは死ぬことになるが……。

……俺は……。

「……ッ!!」

上半身を起こした俺は、自らの拳で自分の額を殴った。

鈍痛が額から頭部全体へと広がっていき、クラツときたが、痛みによって意識がはつきりとした。

「……やってやる。なってやろうじゃねえか……神風に!」

そうだ。そもそも俺はもう引ける立場じゃなかった。

氷室はあの時、俺が希望だと言った。だったら、俺はそれに応えなければならぬ。

……!

(待ってやがれ、神……チップを揃えて、俺は俺達の神風を吹かせる……!)

例えこの世界で死んでも、お前にだけは絶対に負けない……！  
俺は、そう決意を新たにしました。



## 第五十二話

神への謀反を再度決意してすぐ、俺は面談謝絶を取り払った。

しかし話すべき人の人数が多いことから、数回に分けて先に話すべき順番で俺から呼び出していくことにした。

まず最初にチームの仲間である、海斗と由衣。

「綾さんー！」

二人が入ってきてすぐ、由衣が駆け込んで抱きついてきた。

「…………ごめん。心配かけた」

「綾…………」

「…………海斗も、悪かったな。そして、第三指令頑張ってくれたんだよな…………助かった。ありがとう」

俺の現在のチップ数は三十八個。第三指令があつて、俺が不参加を申請できなかつたことから、本来なら三十五個に減っていたはずだったのが、減少がなかった。理由を考えれば、すぐに答えは辿り着ける。

俺が礼を言うと、海斗はバツが悪そうに頬を掻いた。

「いや、俺は……チップの減りを抑える分しか取れなかったし、その分だって、由衣ちゃんへの助けがあったからだったし……」

「……それでも、助かった」

「お、おう」

「由衣も、ありがとな」

「……はいっ」

「……なあ、綾」

海斗が声をかけてきた。

「どうした？」

「綾さ……続けるのか？ 反逆……」

その質問で、由衣が不安げな表情でこちらを見てきた。

「ああ。俺は続ける」

俺は何の迷いもなく、きっぱりと、即答した。

「……その、チップ使って、左腕とか治さないのでか？」

「治さねえよ。使ってられっか」

「……そっか」

「なあ……海斗、由衣」

今度は俺から切り出した。

「これから先、指令はより危険になっていくかもしれない。それを抜きにしても、俺は危険を度外視した活動をしていくと思う。そうしないと、反逆そのものができないかもしれないからだ。はつきり言つて……お前達の安全も考えていられなくなる」

「……………」

「……………」

これは警告のつもりだ。

失敗が失格となる指令が出た以上、もうこれから先「チップを持つてるから大丈夫」とはならない可能性が高い。そして、百個のチップを集めるためには今以上にリスクを負う必要も出てくる。

だがそれらは、指令に関わるような状態であればの話だ。指令に関わるような状態でなければ、そのようなこともない。

「チップは十個以上はあるんだよね？ その状態なら、指令をリタイアし続ければ、しばらくは命が保証されるはず……これは多分、最後のチャンスだ。身を守るため離れるか……命を捨てても残るか……その選択を、今決めてほしい」

「……………へっ、何を今更」

海斗は鼻で笑つてみせた。

「お前がいなけりや、俺はとつくの前に死んでただらうぜ？　今更、引くなんてことするかよっ」

そして、海斗は笑みを一旦止めて続けた。

「……それに、これ以上綾に頼りっぱなしにするのは……綾だけに頑張らせるのはやめにしたいんだ」

「……そっか。……由衣は？」

「私も、同じです……できる限りのことはやらせていただきますー！」

「……そうか」

……実のところ、できればこれで二人とも離れてほしいと思っていた。

これから先、俺は本当に二人の安全を考えていられなくなるだろう。二人を守ることができなくなる。二人には、安全な場所での世界で生きてほしかった。

それなら強引にでもチームを解散すれば良かったのだろうけど……しかし俺は、これまで以上に動けない分を、二人に補ってもらおうと考えてる自分もいた。

おそらく、ほぼ間違いなく、俺一人では攻略はできないだろう。しかし手伝ってもらおうということは、二人を危険に晒すと同義になる。どうするべきか曖昧な状態でああ尋ねて、結局この結果になってしまった。

……でも、二人がそう言うのなら。

少しは……二人に頼るのもありかもしれない。

「……じゃ、俺の『左腕』として、頼むぞ」

「……ああ！」

「はい！」

さて、早いとこ他の人達とも顔合わせておかないと……次は誰を呼ぼうか……。

「……あ。なあ、綾。一つ、話しておかないことがあるんだけど……」

「? どうした？」

「実は……」

ここで俺は、闇の欠片事件においてリインフォースが交戦したらしい、俺を素体としたマテリアルについて知った。



「綾さん!!」

次に俺は、アリシアとなのは、フェイトを呼び出した。

アリシアは由衣と同じく、入ってきてすぐ抱きついてきた。

そして、泣かれた。怒られた。

「バカ！ クリスマスもお正月も、ずっと心配だったんだから！」

「……ごめんな。心配かけて……クリスマスや正月どころじゃなかったよな」

必死にしがみつくとアリシアの頭を優しく撫でてやる。そうしながら、俺はなのはとフェイトへ念話を送った。

「二人にも、心配かけちゃったか？」

『あ、その……』

『……綾さん。念話のまま、少し話をいいですか？』

フェイトが念話で話を持ち出してきた。

俺は了承する。

『ん、なんだ？』

『リンディさんから、闇の書事件の報告内容を聞きました。……あれは、本当に綾さんが

そう決めたんですか？』

『なんだ、リンディさんの言うことが信用できないか？』

『そうではありません。ただ、あなたが指示したというのも本当のことには思えなくて

……それに、隠蔽は犯罪なんですよ？』

『何かを守るためには、手段なんて選んでられないんだよ』

『でも……はやてもリインフォースも、その話を聞いて泣いてましたよ？』

『どうにかなるか、俺がどうにかするさ』

才の時と同じ話が出たが、彼女についてはここでは適当に流すことにする。

俺自身、それについてはしようがないと思ってる。思った通りにはいかないなんてことはよくある話だ。

『あの、じゃあ、綾さん』

今度はなのが訊いてきた。

『綾さんは本当に、リインフォースさんのこと……恨んでないですか?』

『恨んでる奴が、あんな報告書出させて言うか? 第一戦いに怪我はつき物だろ。その延長線上で俺は右目と左手を失った。恨んだらそりゃ逆恨みだ』

『そう、ですか?』

『そういうことだ』

少し強引だが、俺はそう言って話を打ち切った。

ああ、そういうや、二人にはあれの礼をしなきゃな。

『そういうや、あの時勝手に拝借したんだが、レイジングハートとバルディッシュ使わせてもらって、ありがとな。おかげで助かった』

『あ、いえ……』

『……じゃ、お前達との話はこれぐらいか?』

『綾さん、あなたは死にかけてたんですから、ホントにもう無茶はしないでくださいね』  
『だが断る』

『ええ!?!』

フエイトの忠告に即答。当然驚かれた。

『悪いが今んところ、立ち止まる気はないな』

『で、でも!』

「……………? 綾さん?」

アリシアの声がかかってきた。どうやら、念話に集中し過ぎてアリシアへの対応が疎かになっていたらしい。

「あつ、と……………どうした?」

「なのはちゃんやフエイトと、何か話してたの?」

「……………いや、大した話じゃないよ。……………さて、これからはいつでも話ができるんだし、俺は他にも話をしなきゃならない人がいるから、また今度な」

「……………うん」

こうして、三人との話は終わりとした。

あと、話をしなきゃならない相手と言えば……………彼女だ。





なのはとフェイトに呼び出しを頼んでから十数分ほど。ドアをノックする音が聞こえてきた。

「どうぞー」

「……失礼しますっ」

緊張したような、少女の声。

自動ドアが開放され、まず車椅子に座った少女、車椅子を押す銀髪の女性ときて、その後ろからはよく顔の知れた相手だったり直接会うのは初めてだったり、そんな守護騎士四人が入ってきた。

「随分大御所だな。まあ、いいんだけど」

「あ、あのっ、その……」

緊張か、戸惑いか、はたまた恐怖か。うまく言葉を出せていないはやてに変わって、まず俺が仕切ることにした。

「話とかで一応全員の名前はわかるにはわかるけど、とりあえずは初めて顔を合わせる人達で自己紹介しないか？ 俺は朝霧綾だ」

「あ……は、はい。八神はやてです。この子達の主を、しています……」

「顔を合わせるのには二度目になりますが……リインフォースです。我が主によって、この名前を授けていただきました」

「私は、湖の騎士シヤマルです」

「……ヴィータです」

「ん、シグナムとザファイラは前に顔合わせたから、こんなもんか」

「……あの、綾さん」

少しだけ落ち着きを取り戻したと思われるはやてが俺を呼び、そして頭を下げた。

「この度は……本当に、申し訳ありませんでした！」

それに続いて、リインフォースが頭を下げた。

「綾……これは、私の責任です。私のことは好きにしてもいい……ですから、どうか、我が主のことは……！」

「おい、落ち着け、お前ら。とりあえず顔上げてくれ」

二人が顔を上げたところで、俺は口を開く。

「フェイトから聞いたが、リンディさんから闇の書事件の報告がどのようなものになったのか、聞いたんだよな？」

「それは……」

「お前達が言いたいのは大体わかったが、俺の答えはノーだ。ついでに言うておくが、も

う俺達は何の関わりもない扱いになってる」

「でも！ 償いは、ちゃんとせえへんと……！」

「償う結果、お前達がもう一生一緒にならないことになるとしても？」

「……っ！」

はやての目が驚きで見開かれた。

その反応に溜め息をつき、俺は言葉を続ける。

「本当の真実が報告書として出された場合、重傷者を出したとしてほぼ間違いないとお前とリインフォースは刑務所行きになる。特にリインフォースは、過去の闇の書事件のことも含められて一生出れない可能性だつてあり得るんだ。今リインフォースや守護騎士達が自由なのは、多分今回の事件において重傷者や死者が誰もいないことになってるから……まあ、リンデイさんが色々やってるのも大きいだろうけど」

でも、これも大きな要因であることは確かなはず。でなければ、はやてはともかくとしてシグナムら守護騎士だつて問答無用で刑務所行きだっただろう。

「俺は、お前ら家族を崩壊させてまで償ってもらおうとは思わない。寧ろ俺のせいで家族崩壊なんてこと、考えるだけでゾツとしちまう」

「……………」

相手が黙り込んだところで、俺はあることをやろうと思った。

「ところで、夜天の書の写本はどうしてる？」

「それなら、こちらに……」

ラインフォースが虚空から夜天の写本を呼び出す。

「ちよいと借りるぞ」

「はあ……」

「はやて、これに手を置いて」

「え……あ、はい」

置いた夜天の写本にははやての手が乗せられる。その上から俺の手を置き、相手には聞こえないように命令を呟く。

しばらくして、写本を取り巻く魔力が灰色から、白色に変化した。

「……はい、終了」

「……え？」

「じゃ、これ返すわ」

「え？　え？」

されるがままに写本を渡されて、はやては狼狽える。

はやての後ろを見ると、ラインフォースとシグナム、ザフィーラは俺の言葉の意味を捉えたらしい。対してヴィータはまだ理解できてないらしく、シャマルに至ってははや

てと同じく狼狽えている。

「……マスター認証を、変えたのですか……」

リインフォースが俺が何をしたのかを言い当てた。

正解だ。

「ああ。本を使って戦うつてのは、やっぱ俺には合わないんでね」

それもある。しかしそれ以上の理由として、リインフォースに頼らずに戦いたいというものもあつた。

もし彼女に頼つてばかりでは、肝心な戦い……神への反逆の時に困る。おそらくその時に、リインフォースを連れて行くことはできないだろうと思うから。

「だからそいつは、原本の主であるお前が持つてろ」

俺のその言葉に、はやてはゆるゆるとかぶりを振つた。

「そんな……受け取れません。こんな、こんな大変なことをしてしまったのに……」

「つつても、もう認証変えたんだし。あと、また認証変えようとは思ふなよ。あんま手間をかけさせんな。いたちごっこは好きじゃないんでね」

「……あなたは、どうしてそこまで……」

「私達に尽くしてくれるのか……てか？ 悪いが、俺はお前達のためと思つてやつてはいい。結局は自分のためだ」

リインフォースに俺はそう答える。

そう、自分のためだ。ここまで戦ってきたのも、写本を手放すのも、自分のために、自分が神への反逆をするためのこと。それに、親切の押し売りは結局のところ親切ではないのだ。

「俺なら、大丈夫だから。お前達は今の家族がなくならないようにしな」

優しく言ったつもりがこの言葉も、彼女達には重くのしかかっているのだろう。

結局、何も言えなくなつたはやて達は、そのまま部屋を退室していった。

色々酷いことしたって自覚はあるが……これでいい。

夜天の写本を失つたことになるが、大した問題じゃない。魔導書は俺には合わないつていうのは本音だし、武器がないなら作ればいい。

その武器を作るためにも、必要なこと……。

「……まず第一に身体か」

当分は、そうするしかないさそうだ。

## 第五十三話

数日後。今日は客が来ていた。

チーム『連合軍』の四人と、チーム『インテリ不良』だった二人だ。

だった、というのもチームリーダーであった氷室の失格により、チームが解散の扱いにされたからだ。新たにチームを組もうにも、新たなリーダーがどっちになるか決まらず、現在チームとはなっていないらしい。

「リンディさんからは随分沈んでたって聞いてたけど、元気じゃんか」

「もう大分前の話だぞ、それ。今はもう平気だ」

「というか、安静について言われてるんじゃないの？ 起きて本呼んでて、医務員に怒られても知らないわよ？」

頭の後ろで手を組んで、少し安堵したように言う由樹と、呆れたように言うマリア。

確かにマリアの言う通り、俺は本を呼んでいる。

いつだかの事件よろしくこれは資料本であり、デバイス構築の基礎理論やらAI構築応用など、基礎から細かい高度技術まで、あらゆる本を揃えている。海斗と由衣に頼んで持ってきてもらったのだ。

作る武器は、すでに決めている。

「その様子だとやる気ありみたいだけど、右目はともかく左腕はどうすんの？ どう考えても片腕だけってのは厳しくない？」

「リンデイさんと話したところ、技術部に頼んで義手造ってもらうことになった。完成自体は二、三週間ぐらいでできるって話だ」

「ふーん」

ちなみに、その話は昨日のことである。

「で、そっちはどうするんだ？」

「ん？」

「これからのこと。第三期とかにも関わるのか？」

そう尋ねると、由樹はおどけたように両手を上げた。

「残念……僕はここでリタイアとするよ。しばらくは命は繋がるだろうし、その間にこのデスゲームが終わることを祈るよ」

「……そうか。二人は？」

俺は末崎と高田に視線を向けた。

「俺は……」

しばらく躊躇った様子だったが、意を決したらしく、末崎が頭を下げた。



「頼む！ 朝霧……いや、綾！ 俺に、あんたの手伝いをさせてくれ！」

「……は？」

せがまれた。

「……どうしてそう思った？」

「俺は、お前のおかげで命拾いした！ お前の男気に俺は惚れたんだ！ そんなことでも言うとおりに何でもする。だから、この通り！」

「……末崎」

手を合わせて拜んでくる末崎に溜め息をつき、俺は諭すように言った。

「もし、それがチップ欲しさか、もしくは助けてもらったことへのただの恩義だつて言うのなら、それはやめた方がいい。これから、反逆を成功させるまでの間に俺達のチームのうち一人は死ぬと思ってる。お前の言ってることは、はつきり言つてただの自殺願望になるぞ」

その言葉に、末崎はにかつと笑みを浮かべた。

「それでもいいぜ……俺は、あんたが勝つために生け贄が必要だと言えば、俺が第一になつてやる。俺は、あんたに全部乗るよ……！」

「……」

俺はもう一度溜め息をついた。

そして、決めた。

「……わかったよ」

「……おお！ やった！」

「ただし。命の保障は一切しない……絶対に忘れるなよ」

「おお！ おお！ わかった！ 肝に銘じるぞ！」

すっかり舞い上がって小躍りを始めた末崎に呆れながらも、俺は高田の方に顔を向ける。

「……で、高田はどうなんだ？ お前も、命を捨てる気があるのか」

「あ、えっと……俺は……」

「……高田」

言いよんでいる高田に、俺は言葉をかける。

「生きたいと思うなら、今すぐ引け。さっき言ったように、これから先俺がやることに参加するのは自殺願望のようなものだ」

「……すいません」

高田が頭を下げる。

「謝んなくていい。寧ろ、お前や由樹達の方が正常だ」

「……………」

高田はもう一度頭を下げ、部屋を退室した。

「……末崎。お前をチームに入れておくから、お前は海斗達にそのことを伝えに行つてくれ」

「おお！ わかった、それじゃあな！」

俺からの指示を受けた末崎も、即行で退室していった。

「よかつたのかい？」

扉が閉まつてから、由樹が訊いてきた。

「なにが」

「あんなお調子者をチームに入れたりなんかして、さ。正直お荷物にしかならないと思うよ」

「必要な時に動いてくれりやそれだけでいい。それ以上求めるつもりはないさ」

「……ふーん。まあ、僕らにはもう関係ないか。じゃあね。君達の目的が果たされて、僕らが生かされることを願つてるよ」

「ああ。じゃあな」

由樹達も退室していった。



午前中はこんな感じで、午後にはクロノが来た。

「調子はどうだ？」

「まだ学習段階。設計を始めるのは早くても何週間かはかかると思う」

「そうじゃなくて、身体の調子だ」

「見りゃわかるだろ。動かせる部分は動く。動かせない部分は動かない」

「今は動かせる部分も動かさないのが普通だろ」

「知ったことか」

「知れ」

はあ、と溜め息つかれた。まあ身体の調子を訊いていたのはわかっていたのだが。

現在俺が読んでいるのはベルカ式アームドデバイスの構造資料。それを読みながら

クロノの話に受け答えしている。

「……ところで、綾」

「なんだ？」

「君が読んでるそれって、デバイス製作関係の資料本だな？」

「ああ、そうだけど？」

「まさか管理局に入る気なのか？」

「ああ」

あつきりと、そしてしつかりと、俺は答えた。

「言つとくが、技術部とかじゃなくて前線な」

クロノはそれに食いついてきた。

「本気で言ってるのか？　いくら人員不足の管理局とは言え、片腕のない奴がどうにかなるほど生易しいものでもないんだぞ」

「それぐらい知ってる。というか、腕消し飛んだ原因がその生易しくないどころじゃない戦場だったじゃないか」

「理由を、聞かせてもらっても構わないか？」

「勝ちたいから……いや、勝ち続けたいからだ。全部そこからだ。勝たなきゃ何も始まらないし、勝てなきゃ何も得られない。俺は勝ちたい。勝つための力が欲しい」

「……………」

クロノは考え込むように顎に手を当てた。

「……綾、君に贈られる義手は魔導式だ。自分の魔力を使用して操作するもので、戦闘ではどれほど不利になるかぐらい予想できるはずだ」

「それぐらい知ってるさ。それも計算したデバイスと魔導術式の作成をするつもりだし」

クロノが言いたいのは、義手に魔力が割かれてしまったために肝心の戦闘で使える魔力の量が減ってしまったということだ。義手操作に使われる魔力そのものは多くないとはいえ、仮になのは達エース級の魔力を持つてる者ならまだしも、魔力Cの俺には致命的なものである。

勿論、それを考慮したデバイス及びに術式の製作はする。ある程度考えも浮かんでい

る。「君は十分に戦った。そんな傷だらけの君が戦う必要なんてない。……そうは思わないのか？」

「思わないね。これくらいで立ち止まるなんてできないし、したくもない」

まだチップは目標個数の半分にすら到達していない。こんなところで止まる気なんてないのだ。

クロノがまた溜め息をついた。

「……はあ。まあ、君の無茶な身勝手は今回に始まったことじゃないから……」

「そういうことだ」

「だが、君が無茶を続ければその分心配したり、悲しむ者もいる。そのことはわかっていろよ」

「そーかい」

「……あと、身内とだけではなんとかならないようなものとかがあったら僕に相談してくれ」

「あ?」

本のページを捲る手を止めて、クロノを見た。

「可能であればこちらで支援する。ここで君が止まろうとしないのはある程度予想できてたさ。そしてまた無茶をするだろうし、だったら不足した状態で無茶をさせるよりは万全な状態にさせた方が、被害も少ないだろう?」

「……もう無茶はするなとかは言わないのか?」

「言っても、どうせ聞かないんだろう? 母さ……ゴホン。艦長の再三再四の説教も全く聞かないんだし。だったら無茶を軽減させた方がよっぽどマシだ」

どうやら俺についてはもうある意味諦め始めているらしい。こちらはそれに対して反論はない。事実だし。

「そうか。じゃあ頼む時は遠慮なく頼むことにするわ」

「そうしてくれ。限度はあるがな」

読書を再開しようと思ったが、またクロノが声をかけてきた。

「なあ、綾」

「なんだよ?」

「はやてとリインフォースについて、君はどう思ってるんだ？」  
「どうって？」

「二人は君について、しつかり償いをしなければいけないと、そう考えている」  
「そのことについてはとづくに本人に答えを言った。そんなもんいらん」

「優しく接することだけが適切とは言えない。償いになるようなことをさせて彼女達に前を向いてもらう……言ってしまうば、達成感を持たせるといいうのも手なんだぞ」  
「つつたつて、何すれつて言うのさ」

「そこは自分で決めてくれ。君が納得しなければ意味がないだろ」

「そこは丸投げかよ。確かにそうなんだろうけど。」

「納得ね……まあなんか検討しておく。つーか、今更だけどクロノは何しに来たんだ？」  
「様子見と、さつき訊いたようなくつかのことにどう思っているのかの確認だ」  
「あーそーか。じゃ、もうここにいる理由はないのか」

「いや、もう一つ質問がある」

「まだあるのかよ。」

「君には、心の闇というものがあるのか？」

「はっ。」

「なんだそりゃ。」



「そのままの意味だ。悲しみや憎しみ、怒り、狂気……そういったものが、君にもあるのか？」

「あるのかって……」

俺は呆れたように返した。

「当たり前だろ。むしろそれが無い奴がいるなら見てみてーな」

「……そうか」

「で、それがどうしたんだよ？」

「……いや、ただ訊いてみたかっただけだ」

なんだそりゃ。

それに、ただ訊いてみたかっただけにしては随分と表情が重いように見えるんだが。

……まあ、いいか。

「以上か？」

「ああ。つまらないこと訊いて悪かったな」

聞くこと聞いたクロノは扉へと向かう。

自動式の扉が開いたところで、クロノはこちらへと振り返った。

「それではな。デバイス開発の勉強や自己回復についてもウツツコまないが、無理はするなよ」

「おう」

クロノの姿が扉の向こうへと消え、プシユウと扉が閉まる。

再び一人になってから俺は読書を再開し、同時に魔法陣を展開した。

「心の闇、ね……」

確かに、俺にはそれが存在すると言える。

一つの悔恨。俺は『彼女』を救えなかった。それどころか、現実を前に、俺は『彼女』を裏切った。

それが、俺の心の闇であり、俺の罪……。

（今、君は……元気にしているか？）

答えられる者などいないとわかっているけど、しばらくその質問が頭に浮かび続けている。

## 第五十四話

それから一ヶ月半……闇の書事件から二ヶ月近く経過した。

魔法による自己回復もあって、左脚の骨はもう繋がっている。ただ繋がっただけであって動きはまだぎこちない。リハビリ段階である。それでもまあ、その左脚を除いて治るところは治ったため退院。海鳴市の俺達の自宅での生活を再開している。

デバイス製作については、武器を造るための知識ならすでに入った。現在はデバイス設計図を作成中。完成したらマリーさんに頼もうと思う。

あと、『左腕』はすでにものになっている。一ヶ月程前に完成して、操作訓練や『左腕』の操作数値の調整などをして、すでに普通に生活する上では知らない人からすれば本物と見間違えうだろうというレベルにまで達した。調整して消費魔力を極限にまで抑えているとは言え魔力を食うため、必要のない時……特に自宅にいる時にはシステムを切るようにしている。出掛ける時には袖の長い服や手袋で『左腕』を覆い、鋼鉄の表面が露出しないようにしている。今は外が寒いからその格好でいいんだが、近いうちにミッドチルダへの引越しを考えている。

後は、彼女についてなのだが……そればかりは、うまくいっていないのが現状だった。



雪が降る上に風も吹き……ようは軽い吹雪の中、俺はレジ袋を右手に歩いていた。

普段は海斗と末崎（名前は幹みきというらしい。女っぽい名前ですみずかしいから末崎で呼んでくれと言われた）がバイト、由衣は学校であり、普段の料理担当ということもあって食材の買い物は俺が行くことが殆どだ。米などの重い物を買う時はさすがに海斗達にも手伝ってもらうが、今日のようにただおかずを買う程度の買い物なら俺一人で買い物に行っている。

「あー……寒っ」

行く時は雪こそ降ってはいたが吹雪いておらず、大丈夫だろうと思って買い物に出た。しかし帰る時になって風が吹き始め、こんな軽い吹雪状態になっている。

（確か雪は一晚中降るって予報だったか……今日はもうこの調子か？）

だとしたら嫌な話だ。明日早くに雪かきする必要があるし、それ以上に灯油の需要が増える。春にはもうミッドへ行く予定である俺達とはとにかく節約を意識したいところだ。

買い物をするスーパーやデパートはいくつかおさえているが、今日行ったスーパーへ

の往復道は公園の前を通る。

いつも閑散とした公園でただ素通りするだけ、特に今はこんな天気なんだし急いで帰りたいものなのだが、ふと公園のベンチに誰かがいるのを見つけ、俺は立ち止まった。

「あいつは……」

それが誰なのかを理解し、俺は足の向きを彼女へと向けた。



雪が降り積もる中、私……夜天の書管制融合騎・リインフォースは一人寂れた公園のベンチに座っていた。

何かをしている訳ではない。何かを眺めている訳でもないし、誰かを待っている訳でもない。ただ一人で、何の目的もなくずっといた。

こんな天気の中外に居続けたら凍えてしまうだろう。

だが、そうなってもいい。むしろ、私はそうなってしまうべきなのだろうと思う。私は、温もりを求めてはいけなのだから。

ここ一ヶ月ほどの間、私は主と共に世界を渡り、闇の書事件の被害者と会って謝罪する日々を送っていた。

最後の闇の書事件の被害者は、はやてを想う騎士達の加減が功を奏し、『蒐集段階で』重い怪我や障害を負った者はいなかった。だがそれでも、私や主の謝罪を受け入れる者はいなかった。

そして、それ以前の闇の書事件の被害者は、それより酷いものだった。

いや、考え方としては逆だろう。今回の被害者は特別被害が軽かった。主はやてを犯罪者としないために、騎士達は手加減をして、重い怪我はさせなかった。

だがそれ以前の時には、手加減容赦が全くないのが当たり前だった。怪我以前に、蒐集された後口封じに殺された者の方が多く、むしろ生きた被害者の方が少ない。謝罪するも、殆どが遺族からの怨みや呪いの言葉。

——この、人殺しが。

——この人喰いが。

——息子を返せ。

——お父さんとお母さんを、返して。

——局員だった妻を殉職させて、お前らは局員としてのうのと生きてるのか。

——ふざけてる。

——ふざけるな。

——お前達なんかを許すか。

——お前達の名前も聞きたくない。

——お前達は死ぬべきだ。

——死ぬよ。

——夫が受けたように、焼き斬られてしまえばいい。

——俺の親友は蒐集されてから心臓を叩き潰された。お前がそれ受けるよ。

——体中串刺しにされる。

——リンカーコアを握り潰されて死ぬ。

……また、生きていた者も、完全無事な者は誰もいなかった。

リンカーコアに障害をきたし、魔法を使えなくなった者。神経が潰れ、身体を自由に動かせなくなった者。……そして、『彼』のように腕や目など、身体が欠損してしまった者もいた。

——腕を返せよ。

——車椅子の生活から元に戻してくれ。

——私の目、あなたのせいで何も見えなくなったんだよ。

——どんな魔法も入ってるんじゃないのかよ。

——何のためにあんたがいるんだ。

——呪いの魔導書は、結局呪いの魔導書か。

みんな闇の書を恨んでいる。みんな私を恨んでいる。

それが当然だ。被害者の中で、私を恨まない人はいない。そうなるのが普通であり、そうなるべきだ。

そうなるべきなのに、しかし『彼』——朝霧綾だけは、私に恨みの言葉を向けていない。い。

どうしてだろう。

彼は私のせいで、腕と目を失った。下手すれば命をも失っていたかもしれないなかった。

闇の書事件の後彼の友人、坂本竹太刀が行方知れずとなっているのも、私が原因だ。

それに、彼に心の闇があるのは間違いなかった。理由は、あのマテリアルの言葉。

——俺達闇の欠片は……オリジナルの悲しみや憎しみ、怒り、狂気……心の闇を元に  
して駆体構築をする……闇を持たねえで存在する人なんざいねえんだよ……。

——せいぜい……また後ろからぶっ刺されることかねえように…………気いつけるこつたなあああ!!

最後の忠告は、彼の記憶を持っているからこそ言えたことだろう。つまり、彼の心の闇は、あのマテリアルは、私のせいで生み出された。

彼は私を恨んでる。恨まれて当然だ。

なのになぜ、彼は私に怨みの言葉を吐かないんだろう。



なぜ、彼は私に償いを求めないんだろう。

なぜ——

「こんなところで何やってんだ、ラインフォース」

——あなたはこうして、私に声をかけてくれるのか。  
私には、わからない。

## 第五十五話

公園のベンチに座っていたリインフォースは、随分憔悴した様子だった。

彼女の肩や頭に積もった雪を俺は軽く払ってやる。

「もう一度訊くけど、何やってたんだ？　こんな吹雪になつてでも外でやらなきゃいけないことなのか？」

「吹雪……？」

「ここでようやく、リインフォースは今の天気気がついたようだ。……こいつ、何時間ここにいたんだ？」

『左腕』起動。稼働音を鳴らす左手に買い物袋を持ち替え、右手の手袋を外し、リインフォースの頬に触れてみる。

手から伝わってきた感覚に、俺は舌打ちをした。

「……ガチガチに冷えきってるじゃないか！　何時間ここにいたんだ！」

「……………」

俺の怒った言葉にも、リインフォースは俯くだけ。

あーもう、しょうがない奴だな！

「ほら、立てるか？ 行くぞー！」

リインフオースを立ち上がらせ、半ば強引に手を引っ張って連れていく。

「……どこへ、ですか？」

「ここからなら八神家より俺達の家の方が近い」

言つて、俺は彼女の手を取つたままずんずん進んだ。



どうしてこうなっているのだろう。

私は綾に連れられ、いつの間にか彼の自宅にまで来ていた。

彼が扉を開け、私の手を引いて入っていく。

「綾さん、お帰りなさい。吹雪いてましたけど大丈夫でしたか……つて、あれ、リインフオースさん？」

玄関の物音で来たらしい、藤木由衣が、私を見て意外そうな表情をした。

「吹雪だつてのに近くの公園でボサツとしてたのを見つけて連れてきた。由衣、タオル出してきたくれ。清潔なやつな」

「あ、はい」

「さ、はいれ。とにかくその冷えた身体を温めねーと」

「あ、いえ……迷惑をかける訳には……」

「何を今更。それに今外に出られる方がよっぽど迷惑だ。いいからはいれ」

綾に言われるがまま、されるがままにリビングへと案内される。

「綾、お帰り……って、なんでリインフォースが？」

「後で由衣から聞いとけ。海斗、風呂入れてくれ。末崎は食材を冷蔵庫に入れるのを頼む」

「ん、わかった」

「おお、いいぞ」

「リインフォースはそのソファに座つとけ」

「……はい」

二人に指示を出し、綾自身も台所へと入っていった。私は綾に言われた通り、ソファに座る。

それから、藤木由衣が真っ白なタオルを持ってこちらにやってきた。

「どうぞ。髪とか拭いてください。今綾さんが何か温まるものを用意してると思いますがので」

「あ、ああ。ありがとう……」

タオルを受け取り、言われた通り雪で濡れた髪を拭く。

そうしていると、目の前のテーブルにマグカップが置かれた。中には湯気を立ち上らせるミルクが入っている。それを置いた綾はさらに砂糖の入った瓶とスプーンも置いた。

「ホットミルクだ、飲め。砂糖は自分で入れとけよ」

言つて、綾は手に持っているホットミルクを飲んだ。

「……すみません」

「そういうのはいいから」

綾は携帯を取り出すと、どこかに電話をかけ始めた。

「もしもし、俺だ。はやてはいるか？」

我が主の家にかけたらしい。私のことで報告をするようだ。

しばらく綾は沈黙して、相手が我が主に代わったのか話し始めた。

「ああ、はやてか。今こっちで吹雪の中ボケツとしていた祝福の風を預かってる。ああ、

この吹雪は今日一日続きそうだし、とりあえずはうちに泊めとく。いいな？」

「……え？」

「……あ？ ああ、すぐ近くにいますけど。ああ、わかった」

携帯を耳から離れた綾は、通話中と表示された携帯を私へと向けた。

「はやてが、お前に代わってほしいってさ」

「いえ、あの……今、私を泊めるって……」

「そのままの意味だ。それより、ほら」

携帯を押し付けられ、私は携帯を耳へと近づける。

「……私です、我が主」

『あ、ラインフォース？ もう、吹雪になっても帰ってきいひんから、みんなで心配し

とったんやで？』

「も、申し訳ありません」

『この吹雪、今日一日続くみたいやし、綾さんが泊める言うてるからお願いしようと思っ

とるけど、迷惑はかけへんようにな』

「はい、我が主」

『……それと、何かあったら連絡してな？ 私が、なんとかするから』

「……はい。……では、綾に代わります」

要件を聞き終え、携帯を綾へと返す。

……主の最後の言葉は、綾が何かしてきたら、ということなのだろう。

彼が優しい方だというのは、主もわかっているはずだ。しかし、これまでの闇の書事件の被害者の対応から、綾も彼らのような態度を取るかもしれない、という不安が拭え

ないのだろう。

「ただ、恨まれて仕方ないのだ。私は綾を殺しかけた。恨まれたのなら、それは報いであり、当然のこと。それに主を巻き込む訳にはいかない。」

「さて、と。ラインフォース、今風呂を入れてるから、沸いたら入って身体を温めろ。着替えは俺の服で我慢してもらうけど、それでいいな？」

「い、いえ、そんな迷惑をかける訳にはいきませんし、私は……」

「だから、今更迷惑かけたくないって言われるのが逆に迷惑なんだよ。迷惑かけたくなければ、指示通りにしろ」

「は、はい……」

苛立ちの含んだ言葉に気圧され、私は肩をしぼませながら頷いた。

「また、怒られてしまった。今日公園で綾に会ってからというもの、私は綾を怒らせてしまつてばかりだ。」

「大怪我を負わせた上、このように怒らせてばかりの私は、綾にとって迷惑な存在に違いない。」

「今日はシチューにすつかな。寒いし、客もいることだし」

「そういえば、皿が四人分しかないはずですけど、どうしますか？」

「んなもん、俺が代用品使えばいいだろ。お椀とか」

なのになぜ、彼は私に気を遣ってくれるのだろう。

なぜこうして私を家に迎え入れ、私にこのホットミルクを出してくれるのだろう。

「綾ー、風呂沸いたぜー」

「そうか。ほら、風呂に入った入った。着替えはお前が入っている間に用意しとくから」  
なぜ、冷えた私の為に、熱い風呂を用意してくれるのだろう。

「お、上がったのか。ちょうどシチューができたところだ。食べるぞ」

どうして、温かい夕食を用意してくれるのだろう。

……どうして、私に……。



「寝室とベッドはここ一つだからな。今日はここを使ってくれ。汗臭いかもしれないけど、そこは我慢してくれると助かる」

夕食を終え後片付けもして、ラインフォースを俺の寝室に案内した。なお海斗、由衣は自宅に、末崎は海斗の家へと戻っていった。今言ったように寝室及びベッドは一つだけなので、こういう時に家が隣同士というのは助かる。ちなみに末崎は基本俺の家あるいは海斗の家を交互に利用して寝るといふスタンスをとっているが、今日はライン



フオースに俺のベッドを使わせるといふことで海斗の家へと向かっていった。

「俺はもう少し起きてるから。何かあつたら言ってくれ」

「……………」

ラインフオースの表情は依然暗い。いや、家に連れ込んでからさらに次第に暗くなっていた。被害者と一緒に一夜を過ごすといふことで肩身が狭く感じているのだろうか。

だとしたら、俺は早いところ出てって一人で落ち着けるようにしてやるべきか。

「じゃあ、お休み」

言つて、部屋の扉へと向かいラインフオースとすれ違いかけたところで、彼女の口が開かれた。

「どうして、私に優しいのですか？」

「あ?」

言つてることがよくわからず、中途半端な声を漏らしてラインフオースに振り向く。

「私は……………あなたを殺しかけたんですよ?」

「……………ああ、そうだな」

こちらを向かず、俯いたまま話すラインフオースにとりあえず頷く。

「左手を吹き飛ばした」

「ああ」

「右目を抉った」

「ああ」

「他にも……あなたをたくさん傷つけた。あなたから色んなものを奪った」

「ああ」

　　自分が進むにつれて、リインフォースの声が震えていくのがわかった。

　　俺はフォローをしようとせず、適当に相槌を打っていた。変にフォローのつもりで優しい言葉をかけたら、それは棘と変わって彼女の心に突き刺さる。フォローをしなければしないで、そのまま棘として突き刺さる。

　　俺の頭はこんな時に中途半端な効率で回っていた。何を言おうが、それは彼女にとっての棘となる。ほんの数ヶ月前の戦闘では彼女に追い詰められていた俺が、今度は彼女の心を追い詰めている。

　　そこまではわかる。そこまではわかっているのだ。

「なのになんで、私に優しくするのですか？　どうして、償いを求めないのですか？」  
「……………」

　　ここもわかっている。こう訊いてくるのはわかっていた。

　　だが、そこから先の答えがどうしても出てこない。

　　優しさは棘となる。そうしなくても棘になる。そんな中でどんな答えが傷つかない

のか、検討がつかない。

だからといって黙っていれば余計、最悪だ。

「……何か言つてください。答えてください。どうして私に優しいのですか。私に、恨みを向けないのですか」

「……理由を言えつてのは難しい話だけど、まずお前を恨んではないから、だな」

リインフォースが顔をこちらに向けた。目からは少なからず驚きの色が見えた。

しかし、すぐにリインフォースはかぶりを振った。

「嘘でしょう?」

「そんな嘘ついて、俺に何の得があるというんだ」

またかぶりを振った。さつきより強く。

「嘘だ……」

「嘘じゃない」

俺が言う度、リインフォースはその答えを振り払うように首を振る。

「嘘……」

「嘘じゃないって」

「嘘だつ!!」

四度目は怒鳴り声になっていた。リインフォースの表情には苛立ちと悲しみが混

じって、怒りながらも涙を流していた。

部屋全体を叩く怒鳴り声から一転、沈黙に包まれた部屋で、俺は四度目の答えを返す。

「嘘じゃない」

「どうしてっ！ あなたはそう私に優しい言葉を選ぶのですか!! 私のせいであなたは一生の傷を負った！ 心の闇ができた！ あなたが私を恨むことは、わかっているのに!!」

……心の闇？

「おいちよつと待て。お前のせいで俺に心の闇ができたって、何言つて……」

「とぼける必要なんてないです！ あなたに心の闇があったから、あなたの闇の欠片が生まれた！ あなたに心の闇ができたのは、私のせいじゃないですか！ 今までの被害者は皆私を恨んでた。あなたが違う訳がない!!」

所々声を裏返ししながら、泣きながら言っている内容で、俺はようやく納得がいった。

俺の闇の欠片、いやマテリアルが現れたことから俺に心の闇があることは明らかになった。そして彼女が知る限りで心の闇ができる原因は、あの戦闘の時しかない。加えて今までの被害者からの恨み。だから、それらを結びつけた。自分が原因であると思いついた。

仕方のないことだ。リインフォースは俺の過去を知らない。知りようがない。だか

らこのようなことになったのだ。

「過去の被害者のことは、闇の書の欠陥で忘れていった……でも、今回は違う！ 左手を吹き飛ばす砲撃を撃つ感触も、右目を潰す刃を造る感覚も覚えてる！ 自分でも恐ろしく思うような殺意を覚えてる！ そして、この感覚に何も思っていないかった私が憎い！！」

「リインフォース、ちよつと落ち着け」

取り乱すリインフォースを落ち着かせようと彼女の肩を掴む。が、その手は振り払われた。

「もう私に優しくしないでっ!! 私なんか優しくさを向けなくてください!!」

もう彼女の顔は涙でぐちゃぐちゃだ。悲しみや苦しみで押し潰されかけていた。

ああ、確か、こういう時の対処の仕方は——

「こんな優しさを向けられるくらいなら、恨まれる方が——」

最後まで言わせることはしなかった。

彼女が言い切る前に、俺が彼女を抱き締めた。両腕で、ギュツと、強く。

「え……っ？」

身体が密着され俺の顔二、三センチ隣にあるリインフォースの顔は、突然のことによくわからない様子だった。

「な、何を……っ」

我に返ったリインフォースが抵抗をしませんが、俺は強く抱き締めて抵抗を許さない。相手が俺ということもあり、リインフォースも抵抗こそすれど全力で突き放すまではしない。

しばらくもがいて、抜け出すのは無理だと判断したのか、リインフォースの抵抗が止んだ。

それから十数秒の間無言でそのままを保ち、それからリインフォースを解放する。

「……………」

「あの……一体、何を……」

「少しは、落ち着いたか？」

「え？ あ……………」

はっとして、迷惑をかけたと思ったようにリインフォースは顔を俯かせた。

これは……『彼女』から教えてもらった方法で、不安や悲しみなどでパニックになった人に言葉はなかなか通じない。なので、相手を抱き締めて十数秒ほど落ち着くのを待つ。抱き締めることで相手を抑えて暴れるのを防ぐ上、相手は自分以外の体温を感じることで落ち着きやすくなるらしい。

『彼女』以外にはリインフォースが初めてなのだが、効果はなかなかにあったようだ。

「すみません……」

「いいから。ほら、座れ」

そう言つてリインフォースを促し、ベッドに腰掛けさせる。そして俺もその隣に腰を降ろす。

少し間を置く。その間リインフォースは俯いたままであった。

完全には言えないだろうが、すぐに痲癩を起こすことはないのを確認してから、俺は話を始める。

「落ちていたところで、まず一つ訂正してもらうぞ。俺の心の闇だが、大元はお前じゃない」

「え……そんなはずがありません！ 私のせい……！」

また泣き叫びそうなりインフォースの口到人差し指を当てる。

それでリインフォースが黙つて、数秒間を置いてから話を続ける。とにかくこういう時に焦つたら負けだ。多少時間がかかるとしても、じっくり話さなければちゃんと伝わらない。

「まず聞け。確かにお前を恨む心はどこかにあるかもしれない。だけど、大元……それ以上の心の闇を持つてることさ」

「それ以上の……？」

「ああ。大切な人を失うっていうのは、酷い苦痛になるもんだ」

言いながら、脳裏で『あの』風景が再生されていく。

ずつと守ると言った。ずつと一緒にいると約束した。でもその約束は、自分から裏切った、あの記憶。

他の人が聞けば子供の約束だと笑うかもしれない。だけど俺にとっては、こうしてこの神のゲームに選ばれるほどの強い後悔となっている。

「……綾？」

「……それともう一つ。俺は優しくなんてない。他人のためだけの行動なんて全くできちゃいない。前にも言ったと思うが、全部自分のためだ。お前のためには思っていない」  
物思いに耽った俺が心配になったのか、こちらを伺うリインフォースに気づいてもう一つの訂正を口にする。お前のためではなく、自分のため。一ヶ月半程前にも言った言葉だ。

「そんなこと……！」

「あるさ。俺の言葉や態度で、お前はさっき泣き出すほどに苦しんでいたんだろ？」

「それは……」

「反論、できないだろ？」

……今のは、少し意地悪だったか。



「だけど、結局は事実だ。俺の言葉が原因で、彼女は苦しんでいた。いや、今もそうだろうか。そんな俺は優しくくない。」

優しい言葉はイコールして優しくさではない。だから言葉は難しい。

だが……。

「言葉だけの優しさなんて誰にもできないさ。けど」

優しくくないことと優しくしたくないこともイコールではない。俺だって、誰にでも優しくしたいし、優しくありたいと、そうは思ってる。

俺は右手で、リインフォースの目に溜まっている涙をぬぐい取る。

「こうして……泣いてるお前の話を聞いて、涙をぬぐうくらいの優しさなら俺にもできるや」

「あ……」

「今優しくしたのは、俺がそうしたいと思ったからだ」

「なん、で」

「まだ理由が必要か？ 正直これ以上の理由はないと思ってるんだけど」

今にも泣き出してしまいそうなリインフォースにちよつと困り顔になる。

「そうだな……」

「元がつく上かなり短い間とは言え、主が臣下のことを受け止めてやるのは当然だろ？」

あと、何を言えればいいんだ？ 被害者九十九人が敵だとしても俺は味方だ、か？ 悲しみに吞まれそうになった時には俺がそばにいてやる、か？ 恥ずかしい台詞ならいくらでもあるぜ？」

「……………」

もう泣き出す寸前、いや少し泣き始めているかもしれない。ラインフォースは目頭に手を当てて堪えようとしている。

俺はそんな彼女の肩に手を置き、そつとこちらへと寄せた。

「例え罪人でも、泣く権利ぐらいあるさ。今ここには恨みの言葉を吐く被害者も、今お前が仕え、守るべき主もない。俺だけだ。俺は、お前の弱音を聞くだけならしてやれる」  
そう言つて、僅かに震えている背中を優しく叩く。

堤防の決壊する音は、そのすぐ後に聞こえた。

「……………う、うくつ、ああ……………」

震える腕が俺の身体に回ってくる。

堪えようとした嗚咽が、完全な泣き声へと変わっていく。

「うああああ……………うわああああ……………」

我ながら、酷い奴だなあつて思う。

こうなるとわかつていた。わかつていて、こうなるように言葉を選び、彼女の心をつ

ついて泣かせた。

クロノに言われてから、それなりの償いをさせるといふ選択肢も視野に入れて考えた。ただどいい案は思いつかないし、何よりいらんと言った言葉を曲げるのは癪だから、という酷い理由で今回の手段を考えた。

結果として、彼女を何度も泣かせることとなった……最低だな俺。

それと、もう一つ。

(よく、恥ずかしい台詞をペラペラ言えたもんだよ……)

もうできることなら、あんな台詞は使わない。俺はそう決めた。

## 第五十六話

照明の落ちた部屋、私はすでに二桁の回数になる寝返りを打った。

現在十一時四十六分。いつもならずで眠りについていてというのに、まだ目が覚めてる。

(……眠れない)

今日のベッドはいつもと違う……というより、ここは八神家ですらないのだが、寝心地が悪いという訳ではない。

ではなぜか。……正直、私にもよくわからない。

ただ、綾が普段使う布団に身を包まれているという事実には、恥ずかしさや緊張感がある。胸が高鳴る。

しかし逆に、ベッドについた綾の匂いに安心感を覚え、なぜだか嬉しくも感じる。

矛盾している。この気持ちは一体何なのだろう。

(……………)

さつきまでいた綾のことを思い出す。

取り乱し泣き叫んでいた私を抱き締めた綾。そっと私の涙を拭ってくれた綾。泣き

出した私を受け止めてくれた綾。

泣き止んで落ち着いて、こうして思い出す程にドキドキと鼓動がうるさくなる。なんだか顔に熱さを感じてきた。

ああ、私は一体どうしてしまったのだろう。

(……水を飲もう)

キッチンに行くためにはリビングを通らなければならない。もう寝ているであろう綾がいるリビングを通り、彼を起こしてしまうかもしれないのが気が引けるが、水でも飲んでこの気持ち落ち着かせたかった。

私は起き上がった。



「よ、どうした?」

綾は起きていた。

リビングに明かりがついていたためもしやと思い、どうしたものと踏みとどまっていたら、扉越しに私の存在に気づいたらしい綾からやってきていた。

「え、えっと、少し水を……」

ただ事実を言っているだけなのに、なぜここまで緊張するのだろうか。

「ん、そうか。持つてくるか？」

「い、いえ。大丈夫です」

「そうか？ コップの場所とかわかるっけ？」

「は、はい。なので、大丈夫です」

そっか、と綾は納得して、半開きにしていた扉を私が通れるように開放した。

なぜか綾と話すと妙に緊張する。うまく話せない。罪悪感に押し潰されていた時の方がちゃんと話せていたと思う。

とにかく目的を達成させて早く戻ろうとリビングへと足を踏み入れる。ふと、テーブルの上にあるものが目に入った。

「あれは……デバイスの設計図……ですか？」

「ん……ああ、段々形になってきてはいるんだ」

テーブルの上、展開されたディスプレイに描かれていたのは『剣』だった。

気になったので近くで見ると、それは僅かに曲線が描かれた剣だった。設計の文字を見る限り、その刀身は将のレヴァンティンのそれよりも細く、薄い構造らしい。はつきり言つて、強度は大丈夫なのだろうか。わざわざ曲線を描く必要もよくわからない。

「リインフォースって、日本刀知ってるっけ？」

「ニホントウ？」

「日本製の刀だから日本刀。薄い刀身や僅かに描いた曲線は納刀状態からの居合い斬りに最も強いってさ」

居合い斬りと言えば、将の得意とする空牙の動きのことか。もしレヴァンティンが日本刀で将が空牙を最速の域で使えばどうなるか……誰にも止められなさそうだ。

つまり、綾は居合いを主体とした戦法を取るのだろうか？

「まあ、後は見た目が綺麗だから美術品としても有名だよ。俺はある意味後者の方になるかな。日本人は日本刀に限る」

そっちだったか。しかしバリアジャケットだけでなく、デバイスをも見た目重視で考える人もいないことはない。日本刀というものの性能も優秀みたいなので、あまり気にするものでもないか。

それよりもう一つ気になったことがある。

日本刀型デバイスとは別のディスプレイ。そこに描かれているもう一種の剣である。日本刀とは形状が違う。

こちらは知っている。『レイピア』だ。

突きに特化した刀身は日本刀よりさらに細く、また柄の部分には丸みを帯びた装甲が

ある。

この設計図も作られているということは……

「二刀流、ですか？」

「ん？ ああ、それか。それも考えてるけど、そいつは試作機。まずはそれで考えたやつを試して、それから本命の日本刀を作る予定だからさ。その後でもそのレイピアは日本刀とは違う運用で使ってくよ」

「そうなんですか……」

「デバイスを複数持つのはあまり一般的ではない。製作コストや二つ同時に扱う技術など、難しい面が多いからだ。」

我が主のデバイス、夜天の書とシユベルトクロイツ、そして私は、夜天の書が蒐集した魔導をシユベルトクロイツが媒介となつて運用。私は自身をシユベルトクロイツ同様に媒介として魔導を自分で運用したり、主と融合することで主の魔導運用の補助を行う。このように私を含めた三機は、複数で同時に運用することを前提に造られている。

また、ハラOWN執務官はS2Uとデュランダルというそれぞれ独立したデバイスを所持しているが、デュランダルが強力な反面扱いが難しいことがあつてか、彼がこの二機を同時に運用することはない。

対して綾が設計したデバイスにはそういうことは特にない。試作機であることを踏



まえても、純粋なデバイス二刀流という意味では珍しい。

(それにしても……)

私は思う。本当に綾は管理局入りするつもりなのだろうか。

綾が管理局入隊を希望しているという話はちらほらと聞いたことはあった。しかし右目はともかく、片腕が義手というハンデが重いものであること、そして魔法戦の中には命懸けになることもあるということは綾が一番理解しているはずだ。そんな厳しい条件下で綾が管理局入りすることについては半信半疑だった。

しかし、この完成に近い設計図を見て確信した。彼は本気だ。本気で管理局の前線で戦うつもりでいる。

正直、行って欲しくない。彼を傷つけた私がこう思うのも変かもしれないが、綾が傷つくのをごこれ以上見たくない。

それで一つ、訊いてみることにした。

「綾は、管理局員となつて戦うのですか？」

「ああ、まあそんなとこだ」

「なぜ、まだ戦おうと思うのですか？ 私の時みたいに、誰かを助けたいからですか？」

我が主は贖罪と同時に、自身のようにどうしようもないと苦しむ人を助けたいという思いで管理局入りを決意した。高町とテスタロッサも、魔法で誰かを助けたいと言って

いる。

しかし綾は、私を実際に助けた彼は、それを否定したのだった。

「いいや、俺は、自分のために戦うのさ」

「自分のため？」

「ああ、人助けはついでになる。俺はそういう奴だよ」

コトン、とテーブルにマグカップが置かれた。中にはホットミルクが入っている。

「少し甘めのホットミルク。眠れない時には水なんかよりも落ち着くぞ。寒い日には特にだ」

話をしながら、作ってくれたらしい。自分のため、と言っておきながら、こうして優しくしてくれる。

その優しさに、私は頬に少しの熱を感じた。



翌朝。

あの後にはホットミルクのおかげか、ちゃんと眠りにつくことができた。

ベッドのシーツを整え、それからリビングに入ると、朝食のおかずを並べている綾の

姿があつた。他の三人もすでにいる。

「ん、おはよう。ちゃんと眠れたか?」

「あ、はい。お陰様で」

「そうか。ちよつと待つてくれ。もう少しで朝食ができるから」

そう言つて、綾は台所へと入つていく。

椅子に腰掛けて待つてっていると、藤木海斗が話しかけてきた。

「なありインフォース、昨日俺達がいなくなつてから綾と何話した?」

「え? ……ええと」

少し言い淀む。寝室でのあの話は正直どう説明すればいいのかわからない。その後  
のデバイスの話をするのも、彼——いや、藤木由衣と末崎の様子からして彼らと呼ぶ方  
がいいか。彼らが聞きたいことではないだろう。

言い淀んでいる間に、藤木海斗は話を続けた。

「まあ、綾ならあんたを許してるんだらうけどさ」

言つて藤木海斗は台所の方を見やった。物陰に遮られてしまつてゐるが綾に視線を  
向けているのだろう。

「あいつはすげーよ。強くて、頭も良くて、俺達の面倒を見てくれたり、あんたのことを  
許してやられたりできるぐらい優しいからな」

言うとな、彼は悲しそうな、羨ましそうな、悔しそうな、そんな表情をした。

「……俺にはそんな強さも、頭の良さも、優しさもねーや」

「……………」

「俺は……あんたを許せそうにない。俺にとって、いや俺達にとって、綾は命そのものなんだ」

「海斗さん……」

藤木由衣が呟いた。私は何も言わない。言う権利も余地もない。被害者の周りの人までも恨みを持つことは、この一ヶ月で経験した。

「だけど、俺達は何もしねえよ。てか、できない。権利を持つてるのは俺達じゃなくて綾だ。俺達がやってもそれは……ええと……ああもう、やっぱ難しい言い方ができねえな」

藤木海斗はむしやくしやしたみたいに頭を搔いた。

「あーもうあれだ、要するにだ。俺はあんたを許さない。だけど俺達は何もしない。わかったな？」

「……はい」

この方がその答えに落ち着くまでどれほど苦悩したのだろう。自分の欲求を退け、誰かのために想った答えを導き出すのは、簡単なことではない。そしてそんな苦悩の原因

は紛れもなく私だ。

綾を傷つけ、彼らに苦惱を背負わせた私は、どうしようもない大罪人だろう。

「できたぞー。さつきから何か話してみたいんだけど、何の話だ？」

「別にー。じゃ、食おうぜ」

だから、償いたい。

被害者全てに償わなければならないのはわかっている。その上で、彼に私を救ってくれた恩を返し、彼らを支えてやりたい。

そう、私は思った。



朝食を取った後、綾が洗ってすっかり乾かしてくれた私の服に着替え、私は帰路に立った。

隣では綾も一緒に歩いている。今日の飯分の買い物ついでの寄り道だと言って、こうして送ってもらっている。

道中では、互いに話はほとんどない。だが息苦しさというものは全くなかった。

元々私が無口な方だからというのもあるかもしれない。しかしなにより、ただ彼がそ

ばににいるというだけで心地よく感じている。

昨日までは、彼と会う度に強い罪悪感に捕らわれていたというのに。今では、そばにいると心が安らぐ。

「? どうした?」

「え?」

綾が尋ねてきた。目の前にはこちらに顔を向けた綾がいる。どうやらいつの間にか、私は綾に視線を送っていたらしい。

私はなぜか急に気恥ずかしくなり、慌てて視線を彼の顔から外した。

「い、いえ。何でもありません」

「そうか」

ああ、今の私は何かが変だ。

綾と接する度に、胸の鼓動がうるさく鳴り響く。体温が上がっているような感覚にみまわれる。

綾がそばにすることに安心感がある。しかしどこか切なく、胸が痛むような錯覚を起こす。

一体どうしてしまったのだろう。プログラムを写本に置き換えて二ヶ月経ち、今になって異常が出るとは考えづらい。しかし過去に組み込まれた、もしくは学習した中に

これほど複雑な感情はない。

ではこの気持ちは、感覚は、一体何なのだろうか。わからない。けど、不思議と怖くは感じなかった。



「さて、着いたぞ」

「あ、はい」

それからしばらく歩いて、八神家に辿り着いた。

なんとなく、綾と一緒に歩いたこの距離が短く感じた。考え事をしていたからだろうか。

「じゃ、もう送ってもいいか」

「寄っていかないのですか？」

思わず彼を引き止める言葉が出た。別れる時が来るのは当たり前なのに、なぜかそれが嫌になっていた。

「元々買い物に行くついでだったからな。それに俺が上がっていったら、八神家の雰囲気悪くしちゃう」

「そう、ですか」

その返答に引き下がるしかなかった。

我が主や騎士達は綾を悪く思っていない。しかし、良く思ってもいないのが現実だ。綾は被害者であり、私達が加害者。私はともかく、主や騎士達がその後ろめたさで雰囲気悪くするという意味だ。

「すみません……」

「なんで謝るんだか。別にどうこう言うつもりはないさ。強いて言うなら、あつちの人前でも露骨な対応されるのはよしてくれればそれでいい」

あつちとは言うまでもない。管理世界だ。綾は公式には闇の書事件には関わっていないことになっている。私のために、私達のために、己自身をなかつたことにした。

綾は色々なことをしてくれているというのに、私は何もできていない。

「じゃあ、俺これで」

「……待ってくださいい！」

歩き出す綾を呼び止める。綾は歩を止めてこちらを向いた。

「何だ？」

「……えっと」

ドキドキと心臓が高鳴る。その緊張を抑えるため、深呼吸する。



頭の中にある言葉を思い浮かべ、心の中で反芻する。

思えば彼には一度も言っていないかった、感謝を表す言葉。

「綾。ありがとうございます」

「……どういたしまして」

綾は微笑んでそう言つて、それから歩き去つていった。

ああ、私は変だ。

彼のことを思うと緊張し、心が安らかになり、胸が高鳴り、熱くなる。恥ずかしくなり、嬉しくなり、時には切なくなり胸が痛む。

（だけど——）

だけど、悪くない。嫌じゃない。

私のこの気持ちの正体が明らかとなるのは、まだ先の話。

## 第四章 運命の歯車編

## 第五十七話

三月某日夜。無人世界海上。

元は無人世界の調査目的でリインフォースと共にここを訪れていたはやては、目の前の状況に「困ったな」と心の中で呟いた。

目の前には、三ヶ月程前に退治したはずの闇の書防衛プログラムの残滓、その構築体<sup>マテリアル</sup>。しかも三基。

加えてキリエという、変わった武器と自分達とは異質の魔導技術を行使する少女。

キリエと同じような人として、アミティエと名乗る少女がいるが、どうやらキリエとは対立しているらしい。

「さて……小鴉とその融合騎。我らが揃ったからには、貴様らももう終わりだ！」  
「そうぞうぞう。終わりだぞー！」

はやて自身を元にした王のマテリアル、<sup>ロドとディアーチエ</sup>闇統べる王とフェイトを元とする力のマテリアル<sup>レヴィ・ザ・スラツシャー</sup>雷刃の襲撃者が言う。自分達が元になっているだけあって、姿形はそっくりだ。

「また、近いうちに……?」

なのはを元にした理のマテリアルシュテール・ザ・デストラクター星光の殲滅者は、途中で言葉を止めた。顔ははやてとリインフォースに向けたまま、視線は全く別の場所に向けている。

それにディアーチエが気づく。

「む？ シュテール、どうかしたのか？」

「……いえ。恐らく気のせいでしょう。それでは、近いうちにご挨拶に参ります」

シュテールは自分が感じた違和感を気のせいだと一蹴し、中断していた台詞を改めて言った。

「じゃあね〜♪」

キリエが言っただけで、三基プラス一人はすたこらと飛び去っていく。

「あつ、キリエ、待ちなさいっ……っ！」

アミティエもキリエを追って飛び去っていった。

「……行つてもーた」

嵐のように次々と現れて、そして一気に去っていかれたものだから、残されたはやてとリインフォースは若干ポカンとするしかなかった。

実はこの様子を、隠れて見ていた者がいたことには、誰も気がつかなかった。

それは、シュテールの違和感の正体でもある。



マテリアル復活の現場を監視していたのは、黒い袴姿に黒い刀を腰に差した、金髪赤眼の少年だった。

綾の身体と頭脳と技を写し、闇の書の魔力を加え、三ヶ月程前にはリインフォースを追い詰めたマテリアルである。

マテリアルは楽しそうに狂気的な笑みを浮かべる。

「カカカツ……マテリアルが三基、加えて俺も復活できたとはねえ……誰がやったか知らんが、感謝しねえとなあ……！」

ゲラゲラとマテリアルは笑う。

復活できたということも喜びだが、マテリアルにとってはそれ以上の情報も得た。

「しかも、システムU—Dが目覚めるらしいじゃねえか……ようやく目的達成のために動ける……！」

デイアーチェ達は飛び去ってしまったが問題ではない。

マテリアル三基とついでにキリエ、マテリアルは隠れてこの四人にサーチャーを貼り付けた。シユテルには気づかれそうになったが気づかれなかったし、そもそも気づかれなくても問題にはならない。サーチャーさえついていけばそれでいいのだ。

いつもふざけた笑みを浮かべていたマテリアルは、いつの間にか笑みを止めていた。何より真剣な表情となっていた。

「……さて、行くか。眠り姫が待っている」

そしてマテリアルは音もなく姿を消した。



差出人：管理者

件名：指令 4

内容：

次の指令を指定期間内に実行、達成せよ。

指令内容：闇の欠片と戦闘し、勝利せよ。

期間：碎け得ぬ闇事件終了まで

報酬：指令期間終了後、闇の欠片との勝利数÷3（少数切り捨て）の個数分布。チームで参加する場合はそのチームの平均勝利数÷3（少数切り捨て）の個数とする。

これが一昨日送られてきた指令の内容だった。

「なあ綾、昨日からGOD編始まった訳だけど、どうするよ?」

海斗が訊いてきた。彼の言う通り、昨日の夜謎の魔導師二人の出現とマテリアルの三人が復活したという情報が入った。今日はすでになのは、フェイト、はやてがそれぞれユーノ、アルフ、リインフォースを連れて追跡調査を開始している。

「早く指令に取りかかった方がいいんじゃないか? なにより俺達四人チームだから、たくさん倒さなきゃならんぞ!」

末崎の言うことはもつともだ。今回の指令は、前回海斗達が受けた指令に比べて難易度が跳ね上がっている。俺達の場合、最低でもチップの消費を打ち消すために3（指令の消費分）×3（チップ一つ取得に必要な勝利数）×4（チームの人数）で合計三十六体倒す必要がある。チップを増やすならさらに一つにつき十二体追加で倒さなければならぬ。

けど、まずは情報だ。闇雲に探すより場所を特定させた方が効率がいい。俺はゲーム版の物語を知らないから、尚更情報が足りていない。

「まずは情報を整理したい。闇の欠片はもう出てきているのは確かなんだな?」

「ああ。追跡調査の途中でフェイトやアルフが出てくるから、間違いはないぜ」

「闇の欠片発生の主な要因は? 魔力に反応するとか」

「ええと、そういうのは描写がなかったものでわからないのですが……マテリアルやユー

りちゃん……あ、今はU—Dって言った方がいいのかな。……を中心に発生していたと思います。必ずではないかもしれませんが」

そこは情報不足、か。

とにかく発生場所を調べて向かうしかないようだ。

「じゃあ、まずアースラに行こう。なのは達の指揮をしているあそこなら、闇の欠片の居場所について情報があるはず」

「了解」と

俺は携帯を取り出し、アースラへと通信を繋げた。



アースラへ転送してもらった俺達は早速ブリッジへと向かった。

「失礼します。早速ですけど、状況はどんなもので？」

ブリッジに入って早々に俺は尋ねた。

三つの追跡チームの映像を見ていたリンデイさんがこちらを向く。ちなみに、リンデイさんと隣では才がモニターを眺めていた。

「調査が始まってそんなに時間が経ってないから、何も言えないわね」

「まあ、やっぱりそうですね。対象との遭遇も、まだ？」

「海鳴市内でなのはさんとフェイトさんが、それぞれアミティエさん、キリエさんと遭遇したわ。ただ、逃げられちゃったけどね」

「……キリエが、単身で見つかつたのですか？」

「ん？ 綾、それがどうかしたのか？」

海斗が訊いてきたので、俺は振り向いて説明をする。

「碎け得ぬ闇だとかを起動させる技術を持った本人が、碎け得ぬ闇もしくはそれを抱えているマテリアルと離れて単独行動しているって、おかしくないか？」

「んん？ んー……まああいつらで話し合つてそう決まったんじゃねーの？ 碎け得ぬ闇の起動方法をマテリアル達に教えちゃつて、自分は囿をやつてるとか。あつちにもシユテルつー頭脳がいる訳だしさ」

「海斗らしからぬ、的を射た発言だな」

「ちよつ、酷くね？」

「だがキリエが囿をしているとしても、起動方法の全情報という重要なアドバンテージはそう簡単に渡せるものじゃない。渡してしまつたらマテリアルがキリエと手を組む理由を失つちまう。そうなるのを防ぐためにも、やるとすれば……」

「……最後の一部手順だけ教えず、自分が担当するようにして、起動の場に立ち会えるよ



うにする……でしよ？」

「……そうだ」

俺の言いたいことを全部言つてのけた才に、俺は頷く。

そうすれば、マテリアル達はキリエを切ることができず、キリエはU—Dとの接触を行ふことが確実にできる。おそらくはこれが現実的な手段だろう。

「それつてつまり、すでに碎け得ぬ闇の起動が始まっていると？」

「可能性としては十分かと」

言うど、リンデイさんは困つたようにこめかみを指でつついた。

「うーん、碎け得ぬ闇が危険な存在である可能性を考えると、すぐに搜索したいところだけど……」

「情報不足……」

「そうなのよねえ……今のところマテリアル達を追つて辿り着くしかないわ。闇の欠片が現れることも考えると、後手に回るかも」

闇の欠片の話が出てきた。それに乗つて、俺達の目的を遂行に乗りかかる。

「闇の欠片なら、俺達が対応します。後手に回るくらいなら三チームを搜索に専念させて早期解決を図つた方がいい。闇の欠片事件では欠片の掃討に才や海斗達が尽力したと聞いています」

「あなた達に、ね……」

リンディさんは少し考え込んだ後、「よし」と考えを固めた。

「なら、欠片の対処はあなた達にお願いするわ」

「了解」

「ただし。それはクロノや守護騎士の皆さんがこちらに戻ってくるまで。そして、絶対に無理しちゃダメよ。わかったわね？」

「はい」

頷く。もつとも、それは指令の進行状況にもよるが。

「海鳴市内にて、魔力反応検出！ このパターン……闇の欠片です！」

早速エイミイからの報告が来た。早いな、暇することはなさそうだ。

「場所は？」

「広い範囲に複数……五カ所で反応が出てるね」

「僕は、別れて行動する……」

才は言つて一足先に転移ゲートへと向かいだした。だがその足はすぐ止められることになった。

止めた張本人はちよつと驚きの、海斗であった。

「ちよつと待った才。俺も行くぜ」

「海斗?」

「才がすげー奴でも、さすがに一人はまずいだろ?」

『一つに固まってる、稼げる数に限りがあるはずだからさ、俺が才と一緒に稼いでくる』

念話でこつそり打ち明けてくる。

確かにその通りだ。俺達四人がひとかたまりになれば一つの区域が限界である。だから人数を割いてチップを稼ぐ場所を広げるという選択は正しい。

俺が知らない間に海斗は、いや多分由衣も強くなり、何をすればいいのか自分で考え、判断を下せるようになってる。守るだけじゃない、頼れる仲間だ。

俺は頷いた。

「よし、わかった。……才もいいか?」

「……構わない。むしろ助かる」

「よし、じゃあ行こうぜ!」

「……僕らは東南の区域に行くよ」

言つて、才は海斗を連れてゲートの中へ。そして転移されていった。

さて、後は俺達だ。

モニターを見る。点で表示されているのが魔力反応が検出された場所だ。才はその

点が比較的多い東南の区域へと向かった。それで、次に多いのは……  
「……北東だな。俺達はそこへ向かうぞ」

行き先を決め、ゲートへと向かう。

だがそこで、俺に待ったがかけられた。

「綾くん、ちよつと待って!」

「マリーさん?」

ブリッジに入ってきて止めたのはマリーさんだった。そして彼女の手に持っていた物を俺に差し出す。

「はい、これ」

「これって……レイピア、ですよ。完成までまだかかるはずだったので?」

渡されたのは、俺が設計した武器、『レイピア』であった。簡素で飾りのない剣が鞘に収まっている。俺は名前をつけるセンスがあるとは思ってないし、名前にこだわりもないので武器の分類をそのまま名前にするようにしている。

そんなデバイス、レイピアだが、本来の完成予定日はまだ少し先なのだ。というのも、設計図を渡して開発を依頼したこと自体が最近のことであり、そこから考えると、いかに開発を早めたとしてももう完成するとは思えない。

マリーさんは俺の問いかけに対して、うんうんと頷いた。

「うん、完成はしてないよ。それはまだシステムを積んでないただのフレーム。一応武器としては使えるから、持って行って。本来なら完成前のシステムインストール前にグリップの確認とかで持たせる予定だったんだけど……」

武器として貸し出すとついでに、フレームの確認も頼む、か。

だがそれでもありがたいものだ。断る訳もなく、レイピアを受け取る。

「ありがとうございます。使わせていただきます」

「うん。あ、システムは積んでないって、威力調整機能も抜けてるから。間違つて怪我起こしたりしないようにね」

「わかりました」

少しだけ鞘から刀身を覗かせ、カキンと納める。

「よし、行くぞー！」

「おうー！」

「はいっ」

そして俺達はゲートに立ち、海鳴市へと向かった。

## 第五十八話

（——来る）

直感的にしゃがみ込み、後ろから来る斬撃をかわす。回避したら回転をつけて、レイピアの柄で後ろにいるシグナムの腹を殴りつける。

「くっ、はああっ！」

明らかに苛立っている様子のシグナムがレヴァンティンを振りかぶる。そのシグナムの足を蹴りつけ態勢を崩し、突きを放つ——が、ここは防がれる。

ギャンツ！ という金属音。その音と共に剣が弾かれ、距離が置かれる。

シグナムが剣を構える。苛立ちから歯を食いしばり、叫ぶ。

「そこを退け、朝霧！」

「……………」

「我が主を救うために、お前に構っている暇はないのだ！」

「ああ」

俺はそのシグナムの言葉を肯定する。そして平突きの構えを取る。

「俺だって、お前の夢物語に構っている暇なんてない」

「つ、レヴァンティン！ カートリツジロー——」

シグナムが自身のデバイスに命令を下す最中。<sup>さなか</sup>閃光が通つてレヴァンティンを持つ右腕が吹き飛んだ。

シグナムの右腕とレヴァンティンが宙を舞う中俺は接近、突きを繰り出す。

いきなり腕を失つたことに同様しながらも、シグナムは俺の平突きをかわし続ける。

『末崎！』

『わかつた！』

攻撃の手を休めないまま、俺は末崎に合図を送る。

シグナム程の猛者なら、腕が吹き飛んだくらいで思考が完全停止しないことはわかっている。だが、それでも思考力はだいたいぶ落ちる。

片腕を失い、武器を失い、状況を理解し終える前に立て続けに攻撃を仕掛けられている状態では、目の前の対応で精一杯になる。

死角である真後ろで剣を振りかぶっている末崎には、気づかなくなるってものだ。

「うらあああつ!!」

バシッ！ と肉を裂く音。

斬られたシグナムの背中からは鮮血の変わりに、崩壊したプログラムが散ってゆく。だが傷は浅くないものの、致命傷にもなっていない。

やるからには完全に、徹底的に、例え知ってる顔だとしても——殺る。パキツ

首にレイピアを突き立てるとそんな音と共に首の骨が割れる感触がした。それからシグナムは動かなくなった。

レイピアを抜き、血がついている訳でもないが軽く振るう。ヒュンツ、とレイピアが風を斬る。

動かなくなったシグナムはホログラムのようになって崩壊していった。

周囲を見渡し、後続の敵が出てこないのを確認してからレイピアを鞘に納める。パチンと綺麗に納まる音がした。

「あー、終わった〜!」

末崎はへたり込んで四肢を投げ出した。

「お疲れ」

「つーか、綾は疲れてねえのか? 天才は身体も強いのかよ?」

「俺だって少しは疲れてるさ。ただ表に出す労力を惜しんでるだけだ」

「疲れる労力を惜しむって……」

そんな話をしていると、ビルの屋上から由衣がふわりと降りてきた。

結構最近になって知ったことだが、由衣には飛行適性があったのだ。初期魔力がデ



フォルト最大値のB+であることといい、魔法の素質には恵まれていいらしい。

なお、シグナムの腕が吹き飛んだのは由衣がビル屋上から砲撃で狙ったためである。砲撃の適性もちゃんとあるみたいだ。

「お疲れ様です。綾さん」

「ああ。そつちもお疲れ」

軽く言葉を交わす。

主にこの三人での動きはこうだ。俺が敵の真正面を陣取って陽動、由衣は死角から射撃による支援、そして隙を見て三人のいずれかが急所を刈る。ただそれだけだ。

口によれば単純な策だが、それがいい。個人でやるならまだしもチームプレイであれば複雑な策は味方のせいであつまずくなど却って危なかったりする。味方にわかりやすく、敵に感づかれづらい策というのが最高の訳だが、策が成立しなければ元も子もないため、取るとしたら迷うことなく前者だ。

「魔力バイパスを繋げますか？ 遠くから見てましたけど、途中から左腕の動力切つてましたよね？」

「それはそうだが、まずはアースラに次の確認だな」

俺に魔力を供給しようとする由衣を手で制し、携帯を操作する。

由衣の言う通り、魔力の消費を抑えるために俺は戦闘の途中から左腕の動力を切つ

た。そうやって片腕が使えなかった故に戦闘中に少々つらい展開になったこともあった。

左腕を動かす他、戦闘の持続力を持つためにも魔力は必要だ。だが、今すぐ急いで供給を貰う必要はない。供給を繰り返せば当然ながら由衣の方がガス欠になる。それに、左腕がない状態でも戦えない訳ではない。これを言うのは少し気が引けるかもしれないが、俺は最低限相手の陽動ができれば十分なのだ。作戦上、基本的に相手の首を刈るのは由衣や末崎の仕事。俺はその隙を作らせればいい。

まあ作戦とか俺の動きとかバイパスとかの話の前に、目当ての相手がいらないのでは話にすらならないのだが。

「えっと、ここでシグナムさんの闇の欠片を倒して……これで何体目でしたっけ」

「九だな。綾が二体、由衣が五体。俺が二体」

末崎が内訳まで即答した。疲れている割には数える余裕はあるみたいだ。

大体昼の二時から闇の欠片の掃討を開始して五時間、午後七時。欠片の討伐数は末崎が言った通り九体である。まだチップ一個分の討伐もできていない。由衣が一番多く倒しているのは単純な話、陰から狙い撃つというスタンス故にチャンスと成功率が高いからであろう。少ないように感じるがこれでも稼げている方だと思う。なんとたって、シグナムといった強者も倒してきてるのだから。

前回の指令である闇の欠片事件、そして今回の砕け得ぬ闇事件はPSPゲームの物語であるとは聞いている。そしてその情報を頭に入れる過程で闇の欠片についても聞いた。

実際に戦ってみて、確かに闇の欠片のシグナムはシグナムと同一だ。ただし、元が闇の書の残骸データとだけあつてか、時々言動が過去のデータをつなぎ合わせたようなものになっている。俺と戦っているようで、俺に対応した動きにはなっていないことがある。

まあ、過去データであり劣化コピーであるならば、戦って勝ちやすい分こつちにとつてはありがたいものなのだが。

……と、繋がった。

『そっちは終わったみたいね?』

「ええ。次はどうなんです?」

『欠片は大体叩かれて、現時点で新たな発生はないわ。一時休憩として、アースラに戻ってきてくれるかしら』

「わかりました。では、ゲートの方よろしくお願いします」

『ええ』

リンディさんとの通信を終え、通話を切る。もういなくなつたのか。序盤だからまだ

数が少ないのだろうか。

とにかく、まずは帰還か。二人の方を向く。

「アースラに戻るぞ。もうすぐゲートが開く」

「あ、はい」

「お？ おう」

ゲートが現れ、俺達はアースラへと戻った。



翌日。午前十時二十分。

昨日はアースラで一晩過ごして、また闇の欠片の反応を察知。曇天の空の下、海鳴市に降り立った。

これまでの捜索チームの途中経過は、まずなのは・ユーノペアは昨日の夜にヴィヴィオ及びアインハルト（海斗達の話だと漫画版のキャラらしい）と遭遇。今日の未明にシユテルの反応をキャッチして急行、夜明けになるまで戦闘を繰り返したが結局逃げられた。海斗によればなのは側ルートはここまではいい。

次にフェイト・アルファ。二人は昨日の夜にレヴィと遭遇、戦闘。しかし逃げられ

る。こちらでも海斗が言うにはここまでだそうで、フェイト達は搜索を続行している。これはなのは・ユーノペアも同じだ。

二組がルート終了まで行っているのに対し、はやて・リインフォースペアはそこまで行っていないらしい。まず昨日の夜に、これまた漫画版に登場というトーマとリレイに遭遇。その後は今日の早朝に搜索を始めたところ、イギリスで隠居してるはずのリーゼ姉妹と鉢合わせしてしまったそう。リーゼ姉妹は本物だったが、そちら側がはやて達を闇の欠片と勘違いして戦闘になったとははやては言うが、あの二人には私怨もあったのではないだろうかと思う。

とにかく、進行状況はこのような感じだ。原作ゲーム版を知ってる海斗と由衣（末崎は知らないらしい）によれば、後ははやて達がディアーチエを発見し、システムU—Dが目覚めて物語が次の段階に進むそう。

「シグナム達が戻ってくるのって、いつぐらいなんだ？」

「あ、はい。U—Dが目覚めた後ですよ。だから早い場合には今日中には私達呼び戻されるんじゃないですかね？」

「守護騎士のみんなが戻ってくるまでって話だからなあ……ああでも、稼ぎたいよなあ。才はもう九体倒してるっばいしなあ……」

俺の質問に由衣が答えると、末崎が名残惜しいようにそう言った。なお、今回も海斗

は才と共に掃討へ赴き、俺達は三人チームでここにいる。

海斗と才の欠片掃討チームは、昨日の時点で討伐数十一体。その内訳は海斗が二体、才が九体である。つまり、才はすでにこの指令で必要最低限のチップの入手は約束されている。対して俺達は海斗の分を含めて十一体。まだチップ一個分にも到達していないのだ。最悪でもチップ二個分は入手したいところだが、リンディさんと約束した『クロノや守護騎士達が戻ってくるまで』という制限がある以上、由衣の言う通り今日ぐらゐが掃討ができる限界かもしれない。

「守護騎士が来てからの立ち回りは、その時に考えるか。——来るぞ」

「ー」

前方を見る。そこにいるのは暗い紫に染まったバリアジャケットを纏い、紫のパーツを輝かせる杖を握り締めた少女。

「苦しい……邪な殺意が、私の胸の炎を燃やします……あなた達を屠れと、そう語る……！」

ガシユンツ、と闇の欠片のシユテルが持つルシフェリオオンが吼える。

それに合わせ、こちらもレイピアを鞘から抜き取る。

「昨日と同じだ。俺が陽動。二人は死角からの奇襲を仕掛ける」

「はいっ！」

「お……おうつ」

「ブラスト……ッ！」

「……行くぞっ!!」

俺達が散った直後、炎熱砲が襲いかかった。



搜索が再開されて数時間後、午後二時を過ぎた辺り。

はやてはようやくやくデИАーチエの姿を捉え、交戦の末にデИАーチエを無力化するこ  
とに成功した。と言つても、双方魔力切れという終わり方のため、捕獲はできていない  
のだが。それでもリインフォースが来てくれれば今のデИАーチエを捕縛することは  
できる。

しかし、それはこの場にいた相手がデИАーチエだけであつたならばの話。現実には  
キリエに加え、巨大で禍々しい魔力の球体まで存在していた。

おそらく、あれがシステムU—D。キリエが操作しているのは、システムU—Dを起  
動するプログラムのはずだ。

「いずれにせよ、時は満ちた。——桃色！ 準備はよいか！」

「はぁーい。強制起動システム正常、リンクユニットフル稼働♪」

ディアーチエに『桃色』呼ばわりされて普通に受け答えするキリエ。愛称と化しているらしく、気にする素振りは一切ない。そして予想通り、キリエが操作しているのは起動用のプログラムであった。

と、ここでリインフォースが駆けつけてきた。

「我が主！」

「リインフォース！ 状況は……見ての通りや。砕け得ぬ闇が起動しようとしとる」

「はい……！」

「む、融合騎まで来たか。だが今更よ。さあ蘇るぞ！ 無限の力『砕け得ぬ闇』！ 我の記憶が確かなら、その姿は『大いなる翼』！ 名前からして戦船か、あるいは体外強化装備か——」

両腕を広げ、期待を膨らます目の前で、巨大な球体が卵の殻のように剥がれ、消え始める。

その様子を見てディアーチエは高笑いを始める。

「ふはははは！ さあ蘇れ、そして我が手に収まれっ！ 忌まわしき無限連環機構、システムU—D——砕け得ぬ闇よっ！」

そして外殻が消え失せ、その中身が、砕け得ぬ闇が——



「ユニット起動——起動命令確認——無限連環機構動作開始。システム『アンブレイカブル・ダーク』、作動」

——第一声を、放った。

「お……おおお？」

「はいっ？」

「え……？　これって……」

起動した本人であるディアーチエやキリエ、夜天の主であるはやても、目の前の『砕け得ぬ闇』に驚きの声を隠せなかった。リインフォースも声は漏らさなかったものの驚きで唾然としていた。

目の前に出てきたのはディアーチエの想像に反して人だった。ウエーブがかつた金髪に、袴に似た防護服。見た目年齢はおそらくはやてよりも低い。ただの女の子である。

そんなただの女の子にしか見えないU—Dは、おもむろに自分の手を眺め、手を握つ

たり開いたりする。

「動作確認……正常」

そんなU—Dをよそに、はやて、ディアーチエ、キリエの三人は敵味方入り混じつての話し合いが行われていた。

「ちよつと王様？ システムU—Dが人型してるなんて、聞いてないんですけどっ!？」

「むう、おかしい。我が記憶でも、人の姿を取っているなどとは……いや、それを言うなら、我々も元々人の姿などしておらなんだ訳で……」

「あ……とりあえず、『碎け得ぬ闇』やから……ヤミちゃん？」

「ヤミちゃんっ!？」

U—Dは目の前にいる四人を認識していないのか、それとも敵意はないと判断しているのか、確認作業を続けている。

「システム確認……、……システムに一部欠損を確認……？ 欠損部分、修復不能。動作再度確認……、……正常。駆体への異常はなし」

(害意は感じない。無害なシステムであつてくれれば良いが……)

確認作業を淡々と続けるU—Dをリインフォースは、いつ何があつても動けるように準備しておきながら眺める。

自分の中に存在しながらも、自分の記憶には一切存在していなかった碎け得ぬ闇。警

戒に越したことはない。

U—Dはようやくここで、はやて達の方を見た。

「視界内に夜天の書——…夜天の書に類似したストレージデバイスを二冊確認。識別、困難……」

U—Dは夜天の書を認識しようとして、それが失敗に終わった。はやてが今手にしているのは写本であり、デアーチエが持っているのは夜天の書を元に出来た別物。どちらも本物としては認識できないようだ。

その声に気がついたはやてが、U—Dに声をかけた。

「あー……あの、こんにちは、現在の夜天の主、八神はやてです」

「待てえーいっ！ うぬら、なんたる横入りっ！ 起動させたのは我ぞー！」

「起動方法を伝授したのは私です〜！」

だがそれは残る二人によって止められた——いや、厳密には違う。はやてに反論したデアーチエにキリエが文句を言っている。

そこからまた三人による口論が繰り広げられようとしたその時、凄まじい魔力の放出と共にU—Dの背中から一対の巨大な翼が生えた。

「「「っ！！」」」

突然のことに、全員に緊張が走る。

「状況不安定……駆体の安全確保を最優先。視界内の魔力反応四体を脅威判定と認識し、危険因子を……」

翼は大きさを納めていくが、魔力の放出量は依然として変わらない。小さくしていると言うよりは、形を変えているようだ。

翼はU—Dの身の丈近くまでの大きさに変え、さらにそこから姿を変え——

「排除しま——」

宣言するU—Dの顔面に、何かが突撃した。

意識が目の前のはやて達のみに行き、他が全く持つて無警戒であったU—Dは、突撃してきたそれ——足裏蹴りをモロに受け、軽い身体を吹っ飛ばした。

「なっ——!!」

あまりに突然のことに、誰もが驚いた。

「——お前はっ!!」

そしてその正体を知って、一番に警戒心を露わにしたのはリインフォースであった。因縁深い奴だからこそその反応であった。

「よお……やつと会えたなあ。地獄から蘇ってきたぜ……」

黒い道着。手に持っているのは全てが真っ黒な刀。金髪に血のように赤い瞳。

三ヶ月前には、その『奴』に苦しめられた。

因縁深い奴の口元が大きく吊り上がり、狂気に歪んだ濃い笑みをU—Dに向ける。

「さあ殺りあおうか、『ユーリ・エーベルヴアイン』っ！ 俺はてめえに刀をぶつ刺すために生まれてそして蘇ってきたんだからなあっ!!!」

イレギュラーとして存在する、綾を元とするマテリアル——狂気と共に参上。

## 第五十九話

「何なのだあやつは！」

いきなりU—Dを蹴り飛ばした乱入者に「ディアーチエが憤りを見せると、はやて、リインフォースが揃って意外そうな視線を向けた。

「え、王様知らんの？ あの人、自分でマテリアルやって名乗ったけど」

「皆目知らぬわ！ 第一、マテリアルは理と力と、そして王たる私の三基構成ぞ！ 勝手に一基増やすでない！」

「いや、一基増やしたのはあの人なんやけど……」

とにかく、彼はディアーチエらとは別の個体らしい。

リインフォースはそう情報を纏め、U—Dと綾のマテリアルに警戒しながら、先ほどマテリアルが言ったことを思い出す。

（あのマテリアルはU—Dのことをユーリ・エーベルヴァインと呼んでいた……奴は、ディアーチエにすらわからなかったU—Dの正体を知っている……？）

まだ定かではないが、砕け得ぬ闇とは呼ばず、ディアーチエ達が一度も口にしていない名前と呼んだ。それだけでも他の者より多くの情報を持っている可能性は高い。

しかし疑問なのは、あのマテリアルはU—Dに対して明確な攻撃意志を向けていることだ。ディアーチエ達は砕け得ぬ闇を手に入れることを目的としている。だが、綾のマテリアルは砕け得ぬ闇を手に入れることが目的ではないのだろうか。

(奴の目的は、何だ——?)

目的が見えないマテリアルに、リインフォースは困惑していた。

マテリアルは何が面白いのか口元を吊り上げたまま、腰に差した真つ黒な刀を抜き取った。

「さあ、やろうぜユーリ。退屈はさせないでくれよ?」

「……新たに脅威判定を一体追加。排除を開始します。空中白兵戦システムロード。出力上限八パーセント」

ユーリと呼ばれたU—Dがそう宣言した途端、凄まじい魔力によって大気が揺れた。

「な、何ちゆう重圧や……魔力の桁が違いすぎる……!」

「我が主、ここは危険です。お下がりください!」

危険を感じ、リインフォースははやくに避難するよう促す。

大気を揺るがすほどの魔力。しかしU—Dの言葉だとこれでも力は一割に満たないという信じられない話だ。目覚めたばかりだから上限がさらに上がるとは考えにくい。が、それでも驚異的であることには変わりない。

マテリアルはこの状況もわかっているのか、笑みを止めない。

「殲滅、開始。魄翼、形状変——」

U—Dが戦闘を始めようとした刹那。急接近したマテリアルの膝蹴りが顔面に直撃し、またもやその小さな体が吹き飛ばされた。前回と違うのは、途中で魔法陣の壁に止められ、バインドで拘束されたことだった。

「クハハッ、おらよおっ!!」

「かはっ」

休む暇も与えず、マテリアルはU—Dの鳩尾に、顔面に、拳を食い込ませていく。魔力で強化した拳を、笑いながら、一切の容赦もなく。殴られる度にU—Dの口から空気が吐き出されていく。見ている側からすれば、ただの暴力にしか見えない。そして何度目かの殴打で、U—Dを張り付けていた壁の方が耐えきれなくなり砕けた。

だがそれでもマテリアルの暴力は終わらなかつた。U—Dの後頭部を掴み、今度は足元に展開した魔法陣の床に叩きつける。

「ナパームブレス」

マテリアルがそれだけを言うと、U—Dの頭を掴んでいた手の先から爆発が生まれた。爆風と煙が収まるとマテリアルと、後頭部を掴まれ倒されたままのU—Dの姿が現れた。



る。U—Dに動きはなく、防護服や髪には焦げた跡がある。

さらにマテリアルはU—Dを掴む手をどかすと、今度は頭を踏みつけた。ガンツ！という音が響き、踏みつけの威力を思い知らせる。さらにゴリツ、と骨の音が鳴った。

これだけ一方的な暴力を見せつけられれば、しかも暴力を振るう人が楽しそうに笑みを浮かべていれば、ディアーチエの沸点が突破されるのも無理もない話であった。

「貴様アアアアツツ!!」

「おっと」

しかし魔導書の頁を捲り、ディアーチエが魔導を行使するより先に、マテリアルがバインドでディアーチエを縛り上げた。ディアーチエのみならず、他の三人も同時に拘束する。

「な、くっ！」

「まあ黙って見てろよ。これからが大事なところなんだからよ」

見せ物を披露するかのようにはらへら笑うマテリアルは、手に持った刀を逆手に持ち替え、大きく振り上げた。U—Dに刺す気が満々である。

冗談じゃないといった様子で、キリエが声を張り上げた。

「ちよつと待ちなさい！ U—Dを壊されたら、私の計画が全部パーにッ」

「知らんなあ、てめーが誰だとかてめーの計画だとか。俺は俺の目的を遂げるだけなん

だよっ！」

キリエの言葉を意に介さず、意気揚々とマテリアルは刀をU—D目掛けて振り下ろす。

……が、刀がU—Dに突き刺さることはなかった。それどころか、刀が振り下ろされることもなかった。

刀は、マテリアルの右腕と共に宙を舞い上がっていた。

「えっ？」

「なっ——」

はやてには何が起きたのかわからなかった。マテリアルも驚きを露わにする前に、横からの『何か』に衝撃を叩き込まれ吹き飛ばされた。

その『何か』とは、『手』だった。

U—Dの身長程、いやそれ以上の巨大な手が、背中の中だったものから姿を現していた。全体的に赤黒く、禍々しい巨大な手。マテリアルの右腕を吹き飛ばしたのもこれであつた。

「——魄翼、動作正常」

自身を押しさえつけるものがなくなり、一方的にやられていたU—Dが身体を起こす。ポンポンと叩くと、叩かれた汚れは軽く落とされ、ほぼ無傷の姿となった。

そう、無傷。殴られ、蹴られ、踏みつけられ、そして爆破を受けてなお、U—Dはほぼ無傷の姿を保っていた。

その姿を見たはやては、戦慄を感じずにはいられなかった。あれだけの攻撃を受けて無傷でいられる防御力。変幻自在な翼から繰り出される攻撃力。そしてその二つを実現する魔力を持つU—Dの力が、本物の化け物だと理解した。

マテリアルもまた、自身のあれだけの攻撃が無意味であったことを理解して冷や汗を流した。しかし、それでも笑みを浮かべていた。

「……やってくれるじゃねえか」

マテリアルは手元に魔法陣を展開した。転移魔法陣であるそこから、腕と共に吹っ飛ばされた刀が呼び出された。

「まだまだいくぞおらあつ!!」

U—Dへと肉薄。加速強化《アクセル》による瞬時加速から高速突きを連続で繰り出す。綾が右利きで、マテリアルもそれは変わらないのだが、不得手とする左でありながらも高速突きを連発する。

しかし嵐のような斬撃に対してU—Dはスルスルとよけていく。まるで次にどこに

来るのかがわかるかのよう。

そしてU—Dはマテリアルごと斬撃を飛び越え、マテリアルの背後に立った。

「くっそ——」

「ヴェスパーリング」

トン、とマテリアルの背中に手を当て、眩くような一声。

その一声で当てた手を中心に赤黒いリングが形成、そのリングとゼロ距離にいたマテリアルは衝撃で跳ね飛ばされた。

だがそれだけでは終わらない。何もない空中で吹っ飛んでいたはずのマテリアルが、何かに衝突して停止した。見ると、暗黒色のベルカ魔法陣でできた壁だった。

魄翼が変形してできた巨大な手が、マテリアルの身体を鷲掴みにした。魔法陣の壁と言いつこの状況、どこかで見た光景だ。具体的には、つい先ほど自分がやっていた。

「ナパームプレス」

バチンツ、と僅かにショートした後、先ほどとは比べ物にならないような爆発がマテリアルを包囲した。U—Dが魄翼の手を引っ込める。爆破の煙の中から、マテリアルが力無く墜ちていった。

「動作正常……システム負荷許容範囲……」

「あのマテリアルが……ほぼ一方的やなんてっ……」

はやては再び戦慄を味わった。あのマテリアルはリインフォースをギリギリまで追い詰めた程の力を持つ者だ。リインフォースを追い詰めたのは心理的要素も含まれていたとは言え、高い戦闘能力も見ている。そのマテリアルが、ほとんど一方的に撃墜された。

しかし戦慄したのはあくまでU—Dを敵視するはやてとリインフォース。この場にはその力にむしろ喜ぶ者もいた。

「ふはははっ！ よくやったU—D。うつけ者退治、大義であつたぞー！」  
ディアーチエであつた。

彼女の高笑いに反応し、U—Dが視線をディアーチエへと移す。

「闇の書の構築体、ユニットD、ロード・ディアーチエ……駆体起動を確認……？」  
ディアーチエ？ ……そこにいるのですか？」

「ああ、そうとも。我はここにいます。やつと巡り会うことができましたわ。うぬをずっと捜しておつたぞ」

「私もです。U—D」

「僕もいるよー！」

いつの間にか来ていたシユテルとレヴィが、U—Dの周りへと近づく。

「シユテル・ザ・デストラクター……レヴィ・ザ・スラツシャー……確認……」

シユテル、レヴィ、ディアーチエ。三人と会うことが叶ったU—Dはしかし、表情が明るくなることはなかった。

「——こういう時、人は嬉しい、という感情を表すんですね」

「……む？」

U—Dの顔は、明るさも暗さもなく、ただ無表情。ただただ、無表情一つのみだった。後になって思えば、U—Dは目覚めてから一度も、戦闘で攻撃を受けた時にさえ表情に変化を見せなかった。言葉も機械的なしゃべりだった。ただ、マテリアル三基はU—Dとの邂逅に浮かれて判断力が若干鈍っていた。

「ですが私はもう、そのような感情は棄てましたから」

「……何を言っておるのだ？ うぬは……」

だから、ディアーチエは、マテリアル達は近づいてしまった。近づきすぎた。

U—Dの翼が届く範囲へと、踏み込んだ。

「——接敵確認。排除実行」

「——え？」

目の前の少女の言葉を理解する前に、ディアーチエは何かに襟を掴まれたようで強く

引かれた。

バックスクロールされていく視界の中でディアーチエがまず見えたものは、爪に変形した魄翼がなぜかこちらに迫ってくる光景と、それと自身との間に割り込んでくる何か。

そして次の瞬間には、自分がいた場所に立った誰か——綾のマテリアルの右目が斬り裂かれていた。

「ぐおお……ッ！」

「なっ……」

ディアーチエは何が起きたのか全く理解できていなかった。ましてや、自分達のものであるU—Dが襲ってきたなどという想像などつかなかった。

だがその現実には、嫌でも思い知らされる。

なぜなら——

「ああああっ!!」

「うああああっ!!」

シユテルとレヴィの身体を、魄翼の爪が貫いていたのだから。

「——シユテルッ！ レヴィッ!？」

ディアーチエが叫ぶが、もう遅い。

シユテルとレヴィの身体は崩壊を始める。

「——沈むこと無き黒い太陽。影落とす月。ゆえに、決して碎かれぬ闇」

仲間であるはずのシユテルとレヴィに手をかけたという事実を前にしても、U—Dの表情は変わらない。

「みんな私を制御しようとしましたが……けれど私を目覚めさせた結果残ったのは絶望と、破壊の爪痕だけでした。だから、私を闇の書の奥へと沈めました。私も、絶望しか感じない自分の感情を棄てました」

「感情を棄てれば、ただシステムに従うだけの存在になれば……その方がずっと楽だと思っただってか……このクソガキがっ」

そう言って、吐き捨てたのはマテリアルだった。

息が荒い。ダメージを多く受け、彼も駆体の維持をするだけで限界に近かった。

しかしそれに構わず、マテリアルはU—Dに得物を向ける。

「くだらねえこと言っただねえでっ……黙ってこの剣に刺されやがれっ!!」

マテリアルが今一度U—Dへと駆ける。

U—Dは無表情のまま、迎撃を取る。

「迎撃開始。ヴェスパースブラッシュ」

U—Dが掲げた手から、先の赤黒いリングがばらまかれる。



「なめんなあっ!!」

マテリアルはリングの弾幕をかくぐり、U—Dの眼前まで辿り着いた。魄翼はシュテルとレヴィへを突き刺した状態で塞がっている。

(取った!!)

「無駄です」

マテリアルの賭けの刺突は、僅かな動きでよけられた。

だが、マテリアルはこれで終わる気はなかった。

「まだまだあっ!!」

突きから派生した横薙ぎ。マテリアルにとって本当の賭けの一撃はU—Dの首元に直撃、刃が肉に僅かに食い込んだ。

だが、U—Dは自分の首元に食い込んだ刃を見ても表情一つ変えることはなかった。

バインドが現れ、マテリアルを絡め取る。そしてU—Dは、魄翼から巨大な槍を作り出した。

「さようなら——ジャベリンバツシュ」

投擲された槍はマテリアルを貫き、そのまま海へと突き落とす。

マテリアルを沈め、シュテルとレヴィが崩壊したのを見届けてから、U—Dは残る四人に視線を向ける。

「脅威判定、残り四体。殲滅続行……、……うっ……」  
「……？ 何や？」

魄翼の形状を変えようとして、U—Dは突然頭を押さえた。今まで何一つ変えること  
のなかった表情が、僅かに苦痛で歪んでいる。

「……正体不明のプログラムが侵入、動作障害を確認……現状での殲滅続行は危険と判  
断。駆体安全の確保を優先し、この場は回避します」

「……！ ヤミちゃん！ あかん、待って！」

はやてが制止の声をかけるが、U—Dは魄翼を羽ばたかせ飛び去ってしまった。

「待ちなさいっ！ 私はあるのに用があるのっ！」

キリエは飛び去ったU—Dを追ってこの場から姿を消す。

デИАーチエは消え去ったシユテルとレヴィに呆然とし、そして強く歯噛みした。

「……待たぬかU—D貴様あああつ!!! 貴様は我のものだ！ 勝手に行くことは許さ  
んっ！」

「あ、王様！」

はやての声も届くことなく、デИАーチエも転移魔法で姿を消してしまった。これで  
残されたのは、はやてとラインフォースのみとなった。

「シユテルとレヴィ、もしかして、消滅してしまっただん？」

「いえ、おそらくは駆体維持を放棄して、ディアーチエのリソース内で再構築しているはずですよ」

「そっか」

ラインフォースの説明に、はやては内心ほっとした。敵であるはずなのに心配するのは、彼女達が一方的に悪い子ではないと思っっているからか。

ふと、ラインフォースは魔力の放出を感じ取った。場所は自分達よりずっと下。海の中だ。

(この感じは転移魔法……？ あのマテリアル、まだ動いているのか？)

あのダメージからして、シユテルらと同じく一旦駆体放棄をして身体を治すべきはずなのに、無理してまで奴は何をする気なのだろうか。

と、ここで通信が入ってきた。送信者はシャマル。どうやら出張から戻ってきたらしい。

「はやてちゃん！ 大変ですよ！ 海鳴市内にて思念体反応が多数出現！ ものすごい数ですよ!!」

「!？」

その報告に強く反応したのはラインフォースだった。

(海鳴市には、欠片の掃討に綾が……!)

いくら綾でも、劣化コピーとはいえ欠片が大群で迫られては危険だ……その思考に辿り着いたリインフォースは、すぐさま行動に出た。

「我が主、先にアースラにお戻りください！ 私は、綾の救援に向かいます！」  
「ちよつ、リインフォース!?!」

すぐさまリインフォースは海鳴市に向かって飛び出した。

(綾、無事でいてくれ……!)

焦りから、リインフォースはさらに加速していった。

## 第六十話

「ぬおおおおおおっ!!」

走る。

全力で走る。とにかく走る。強化魔法を行使して走り続ける。

雄叫びを上げながらアスリートさながらの走りを披露している末崎の方向指示機になりつつ、由衣を左脇に抱えて走る。

「走れ走れっ! 減速するな! 絶対止まるなっ!!」

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ! こんなの、失格じゃなくても死んじゃうだろオオオツ!!!」

止まることは許されない。止まれば最後、迫り来る滝に飲み込まれて終わりだ。

滝の水は色とりどりで、意外と綺麗な虹色となっている。

チラリと後ろ上方を見る。見えた範囲だけで、少なくとも見積もっても二、三十……魔力弾の滝に隠れて見えない分も合わせると四十は超すんじゃないだろうか。そんな数の闇の欠片がこつちを狙ってきている。

「綾さん! 前っ!!」

「っ!」

前方から闇の欠片トーマが来る。戦闘は避けられない。だが止まってる暇はない。なら、走りながら一撃で葬るしかない。

「邪魔だああああっ!!」

レイピアを抜く。トーマが銃剣を振るってくる。

斬り上げを回避。そしてトーマの眉間に刃を叩き込む。バズツ、という音と共に刃は頭を突き抜けた。

「……ッ!」

筋力強化、強化魔力追加。右腕の腕力だけで強引にトーマの首を引きちぎる。レイピアに刺さったまま残った頭部は程なくして崩れ去った。

「どこまで逃げればいいんだよおおっ!!」

「とにかく走れ! 一発でも食らえば終わりだっ!」

こんなことになったのは、ほんの数分前からだった。

突然、闇の欠片の数が爆発的に増えた。ただそれだけのことだ。しかしそれで窮地に立たされている。二、三体ならまだいい。五体になるとさすがにきつい。十体は論外。それが四十ともなれば、語る前に満場一致で逃走一択で即決だ。だから逃げている。

だが逃げてるだけではどうにもならないのも事実。どうしたものか……!」

「っ、脇道に逃げるぞ! こっちだ!」

「おわあっ!?!」

進路を九十度ねじ曲げ、近くの脇道に駆け込む。こちらの方向転換に追いつかなかった魔力弾は一気に後ろを通過していった。

だが安心してはならない。すぐに追撃が来る。なのですぐに走り出す。

「ひいつ、ひいつ!」

マズい。なんとかしないとマズい。このままではいずれ体力切れで終わりだ。現に末崎が息を切らし始めている。俺も正直、キツイ。

それと海斗の方も気になる。俺達と同じ状況に陥っている可能性が高い。才がいるとはいえこちらと同等の状態だとどうしようもないはずだ。それ以前にこっちが人の心配ができる状態じゃないのだが。

脇道から広い道路に出て、進路を変えて逃走する。

その時、抱えられてる分視野が広い由衣が気づいた。

「り、綾さん!」

「何だっ!」

あわあわと口を震わせ、顔を真っ青にして、由衣は言った。

「ス、ススス、スタツ、スターライトブレイカーとっ、ルルふえ、ルシフェリオンブレイカーが来ますー!」





後方からの突然の音に目を向け、驚くべき光景に思わず急停止する。ズザザアツ、と慣性の力で少し路面で滑った。

「おいおいおいっ、何してんだ綾!?! 早く逃げないと——っ!?!」

俺が止まったことで前に出た末崎も、俺に声をかけようと後ろを向いて事態に気づいて脚を止める。

「…………二つのブレイカーが、消えてやがる……」

それだけじゃない。俺達を追い回していた魔導師や騎士が一人もいなくなっている。残っているのは焼け野原になりかけた戦闘跡だけだ。

「ど、どうなってんだこりゃ……?」

一体何が……っ!

(…………誰かいる……)

地面からの砂煙でよく見えないが、確かに人型だ。

シグナム達が救援に来た? いや、シグナムら守護騎士の基本スタンスは一对一の対人型だ。救援に向かってきてはいるかもしれないが、あの数を一瞬で消すのは難しい。広域殲滅の場合はこっちが巻き込まれるからはやて・ラインフォースの線も違う。なのはらミッド型の大技という可能性も、同じく巻き込みという意味ではずれだ。

リンデイさん……も、違うと思う。『仲間がピンチだから』程度のことですら簡単に腰を上

げる程軽い立場じゃない。仮に行くとしても、二人しかおらず窮地に陥りやすい海斗と才の元へ向かうはずだ。

(……じゃあ、誰だ?)

段々と影が濃くなっていることから、こちらに来ている。

……そして、姿を現した。

「——あー。やっぱり無理なやり方はするもんじゃねえな……」

砂煙から姿を現したのは、『黒』だった。

黒い道着に黒い刀。全身黒一色の装備が男の金髪をよりはつきり見せている。赤い瞳は一つしかない。右腕も肩から抉れたように消えている。そして腹には大きな穴が空いていた。

普通の人であればとつくに死んでいるはずのその男の手には、なのはやシユテル他多数の魔導師の首が髪を一纏めに掴まれていた。

「うわっ……!」

「あー騒ぐな。喋るなら殺す」

男は末崎にそう言って、首をポイと放り捨てた。首は全てプログラムとして呆気なく崩壊した。

そして男は俺達を、いや俺を見て満身創痕ながらもニヤリと笑った。

「よお……こうして会うのは初めてだよな、オリジナルさんよ……」

オリジナル？ ……ああ。

「そうか……お前か。俺を元にしたマテリアルってのは……」

「おうよ。まあ自分でそう名乗っておいて、厳密にはマテリアルではねーんだがな」

厳密にはマテリアルではない……？ いや、それは今はどうでもいい。今重要な

は、あのマテリアルが何の目的で、闇の欠片を蹴散らしてまでここに来たのかだ。

俺は由衣を地面に降ろし、マテリアルに問う。

「俺達の前に出てきた理由を答えろ。……イレギュラーとして、俺達を自らの手で抹消するためか？」

「いいや違うね。俺みたくないイレギュラーには存在意義がある。現れた時点で原作の人物の一人さ。言ってみれば、俺はイベントキャラってところか」

「イベントキャラ……？」

「……ちよいと、お前と話し合ってみたいんだが——」

言つて、ダメージが残ってるのかフラついた足取りでこちらに近づき始めた時だった。

「綾!! 離れてくださいっ!!」

「!？」

「っ!!」

後ろ上空からの声。その地点を確認してすぐ飛び退くと、マテリアルに赤い雨が降りかかった。マテリアルは防壁を展開するが防ぎきれず、赤い雨に当たった皮膚が裂けていく。

マテリアルにある程度のダメージを与えた後、俺を退かせ、赤い雨を降らせた張本人が俺のすぐ前に降り立った。俺を庇うように片腕を広げ、マテリアルを睨みつける。

リインフォースであった。

「綾、下がっていてください。ここは私が!」

「……………」

口調がリインフォースにしては攻撃的だ。以前痛い目に合わされたという出来事があつたからなのか、あいつへの警戒心が剥き出しになっている。

赤い雨——空からのブラッディダガーを受けたからか、それ以前のダメージの影響か、両方か……マテリアルは膝をつき、刀を杖のようにして身体を支えていた。

そんなマテリアルから舌打ちの音が漏れる。

「チツ……一番話聞きそうにない奴が一番話聞きそうにない条件の時に来やがって……」

そう悪態はついてるものの、マテリアルに動く様子は見られない。

と、こちらと目が合った。

仕方ないな……。

俺は臨戦態勢のラインフォースの肩を掴み、少し引かせる。

「……!? 綾? どうしたのですか?」

「ちよつとこのまま待つてくれ」

「え……? 綾、いけません! 危険です!!」

ラインフォースの制止の声を無視して、俺はマテリアルの元へと近づいていく。

マテリアルの目の前で足を止める。座り込んでいるマテリアルは顔を上げて目を合  
わせた。

「まず先に、訊きたいことがある」

「……なんだ」

「お前、なんて名前なんだ? いつまでもマテリアル呼びじゃあ他と紛らわしくなる。

名前ぐらいあるだろ?」

「名前ね……あるにはあるが、俺がその名前使う訳にはいかねえからなあ……」

そうボヤいてしばらくして、それから思いついたように「じゃあ」と呟いた。

「ウレクでどうよ? 悪くはねえだろ?」

「ウレク、ね」

頭の中で反芻。それからマテリアル——ウレクに、先ほどの彼が言いかけていた話を持ちかける。

「話をしたい、って言つてたっけか？　今なら取調室っていうそれに相応しい場所を用意できるんだが、どうだ？」

「どうだつて、俺に拒否権ねえだろこの状況」

「言うだけならただだぜ？　言つたら後ろの綺麗なお姉さんに追っかけられるというサービス付きだ」

「生憎銀髪に追いかけられるのは嫌だね。俺は金髪派だ……っか、んなもんでもいい」

言つてウレクはニヤリと笑みを作る。疲れ切つた身体で、しかしこの状況の中で心底楽しそうに。

「つれてけ……お前と話をするためなら、多少の条件ぐらいなら受けてやる」  
「決まつたな」

身体を屈ませ、ウレクの肩を担ぎ、ウレクと共に身体を立たせる。

ウレクの肩を貸していることに不満があるらしく、駆け寄つてきたリインフォースが非難の声を上げる。

「綾！　一体何故その男を!？」

今回のリインフォースは結構私情を持ってきているみたいだが、俺はそれに構わず指示を出す。

「アースラに連絡しろ。マテリアルの一体、識別名ウレクを確保。治療と共に尋問を行う」

連絡が届いてゲートが開き、ウレクをアースラへと連れ込むのはそれから一分ほど後のことだった。

## 第六十一話

アースラの中。人数が少し多い上一部腹が減ったという発言が理由で選ばれた食堂には、ウレクを回収した俺達の他にも無事だった海斗と才、捜索組三チームも揃っていた。現在ここにいるメンバーは皆一時休憩を命じられてここにいる。

そんな計十一人は食堂で比較的思い思いに休憩時間を過ごしている。食事をとったり、互いに捜索の結果を話し合ったりといった感じだ。

俺もこの時間を利用して食事を取っているのだが、とある視線がちよくちよく気になる。

感じ取った視線を辿るとリインフォースに辿り着く。リインフォースは俺と視線が合うとつぎに目を逸らす、チラチラとこちらの様子を窺っている。

今日のウレクとの対峙の時や、そして昨日の闇の欠片の掃討から戻ってきた時もそうだったのだが、リインフォースはなんだか俺のことを過保護気味だ。

確かに、俺の力はそこまで強くはない。闇の欠片を倒すのだからって苦労するし、ウレクと戦闘するとなれば、一方的な展開が予想できる。

ただ、



（心配だつてことなら嬉しいけど、心配しすぎなのはなあ……）

その感情が行き過ぎて、相手からの情報引き出しを怠るとなるとさすがに容認しかねる。無事ウレクは取調室行きにはなったものの、もしあの場でリインフォースを止めなかつた結果ウレクが消滅、物語に重大な支障をきたすなんてことになったら、色々マズかつた。もしまた似たようなことが起きたら、その時は感情的になりすぎだという注意ぐらいはした方がいいかもしれない。

それはいいとして  
閑話休題。

前述の通りウレクは取調室にいる。ダメージが深刻であることから医務室で尋問をする案もあつたのだがそれはウレクが却下。それでも治療のために出張から戻つてきたシャマルもついている。

ウレクは俺と話があると云つていたものの、ウレクの危険性に含めて、俺は囑託魔導師でもないため尋問には立ち会えない。だからこうして取り調べが終わるのを待つて、それから話をしようと思つているんだが……。

（尋問の結果……来るの遅くないか？）

ウレクを引き渡してからすでに二時間は経過している。尋問がすぐ終わるものではないとわかつてはいるが、それにしたつて遅いんじゃないだろうか。これからの捜査や任務の進行にも関わるため、途中経過でも話に来るべきなんじゃないかと思うのだが

……。

それでもしばらく待っていると、数十分してようやくリンディさんが食堂に来了。シャマルもいる。

「綾さん。ちよつといいかしら?」

「はい」

「みんなにも聞いて欲しいから、ちよつと集まって」

そう言つて主要メンバーを召集すると、リンディさんは話を始めた。

「今、綾さん達が確保したマテリアル、ウレクの尋問をしているところなんだけどね……」

「あいつが口を割らない、と?」

浮かない表情から簡単に察して予測を告げると、リンディさんは溜め息を吐いた。

「……ええ、その通り。何を訊いても、一言も答えないのよ」

「……質問の回答以外も、何も?」

才がそう訊くと、リンディさんは首を横に振った。

「いいえ。『ただの取り調べには興味ない』と言つた上で、『綾との交渉に限つて応じる』という話。その一点張り」

「治療も受けるつもりはないみたいです。ただ、綾さんと交渉できるなら考えてやると

言ってまして……」

でもその場に俺はいなかったから、二時間も徒労となったのか。というか、よく二時間も続ける気になったな。

「現在、ウレクを構築している身体は限界に差し掛かっているの。不足している碎け得ぬ闇の情報を持つている貴重な人物をこのまま消滅させる訳にはいかないわ。だからあなたにウレクとの交渉をお願いしたいの」

「しかし、ウレクは人格的にとても危険です。そんな彼の元に綾を引き出すのは……！」  
そう言ったのはリインフォースであった。リンデイさんはその話を聞いて「わかっているわ」と頷いた。

「ウレクの手足には全部、魔力抑制用の拘束具を取り付けさせているわ。その上で、綾さんが交渉の席に着く場合には護衛も取調室に入れるつもりよ」

「その護衛には、私が！」

真つ先に名乗りを上げたのはリインフォースであった。

リインフォースは確かに実力がある。ウレクが本気を出した場合、まともに奴とやり合える力があるのはまず彼女で間違いない。

ただ……今の彼女はやや感情的であるため、思いがけないミスを犯す可能性も否定できない。ここは、もう一人護衛をつけておくべきか。

……よし。

「リインフォースに加えて、フェイトも護衛に加えてもよろしいですか」

「え……私？」

指名されたフェイトは目を丸くした。

「一応、理由聞かせてもらってもいいかしら？」

「ええ。フェイトは高速近接型、取調室の広さの関係上、不測の事態に対応できる近接型がよろしいかと。ついでに言えば、執務官は取り調べや交渉の機会もあるでしょうし、見学になるかなと」

理由を聞いたリインデイさんは「なるほどね」と頷いた。

「後半はともかく、まあ一理あるわね。フェイトさんは、それでいいかしら？」

「はいー」

フェイトはこくりと頷く。

「さつきリインフォースが言ってたみたいに、彼は危険が多いわ。もし何かあったら、まず自分の身を守ることを優先すること。いいわね？」

「はいっ」

それから、シャマルが手を挙げた。

「あの、私ももう一度行きます。やっぱり治療しないといけないですし」

これで、メンバーは決まった。

「綾さん」

リンディさんから声をかけられた。返事と共にリンディさんに向く。

「ウレクの言う交渉はあなたにお願いするけど、重要な判断まで任せる訳にはいかないわ。重要な決定については私が行います。いいわね？」

「はい」

そこは俺もわかっていたので頷く。当然の話だ。俺にそんな権限はないし、決断について責任を持つのは艦長であるリンディさんだ。

「それから、こちらも尋問の様子はモニタリングしているから、場合によっては指示を与えていくわ」

「了解です」

「じゃ、お願い。くれぐれも気をつけてね」

……さて、ある意味自分との交渉だが、どのようになるかな。



尋問員と交代してまず俺だけが部屋に入る。

真ん中に机、それを挟むように椅子が置かれていること以外には何も無い殺風景な部屋。広さもそんなになく、ここで生活というのはとてもできそうにない。

そんな部屋の椅子にふんぞり返っているウレクは、俺の姿を見てニカリと笑っていた。

ウレクの右肩を見る。海鳴市で見た時は右肩の少し先まで腕はあったはずだが、今では右肩が抉れたようになってなくなっていた。右目の崩壊も進んでいるし、机の陰に隠れている腹部の崩壊も同じく進んでいるだろう。

「随分やつれたな」

俺は言つてウレクの向かいの椅子に座る。

「構築崩壊もだいぶ進んじまつてな。身体能力にも影響が出始めた。見た目以上に中身は壊れてきてるんだぜ？」

「治療を受けないからだ」

「んなもんいらねえよ」

数秒の間が置かれる。

他愛のない会話をリセットし、それから口を開く。

「さて、お前が望む通り、お前との交渉には俺が対応することになった」

「おお。嬉しいねえ、それ」

「ただしそれに伴い、俺の護衛のために二名、お前の治療のために一名の魔導師をこの部屋に入れることとなった。加えて、こちら側の決定権は俺ではなく、ここの艦長、リン・デイ・ハラオウンが持つ。文句はないな？」

「まあ、お前実力的にも権力的にも弱つちいからな。それで了解してやるよ。治療のと以外はな」

「いい加減、お前限界なんじゃないのか？」

「まだまだやれるさ。どっかで俺みたいに腕と目玉吹っ飛ばされて腹貫かれた奴とは違つてな」

「……………」

「まあもつとも、治療自体意味もねーしな」

「意味がない？」

オウム返しで尋ねるとウレクはああ、と頷いて答えた。

「俺が厳密にはマテリアルではないってことは言つたよな？ 交渉のこともあるんで多

くは言えねーが、俺はある部品を中心に、闇の書の残骸データから駆体構築に必要なデータと魔力をかき集めてできたガラクタみたいなんで、作りは闇の欠片に似たようなもんさ。闇の欠片は単体では非常に脆い。壊れたらどんどん崩壊して、寄せ集めデータなんで直すことも叶わない。そこは闇の欠片寄りの構築である俺も例外ではない。

「ここまでの説明でもういいよな」

「直せないから意味がないと」

「まあそれで納得してくれ」

「だが崩壊を止めるぐらいならできるんじゃないのか？」

「直らないと言ったが、治療は受ける気そのものがねえよ」

「わかった。……だが、万が一に対応できるように、部屋には入れるぞ」

「勝手にしろ」

相手からの承諾を受けたので、扉の方を向き、三人に入るよう促す。

リインフォース、シヤマル、フェイトと入ってきて、シヤマルにはウレクに治療は意味がないこと、本人に治療を受ける意志がないことを告げ、それでももしもの時にはすぐ治療に入れるよう、デバイスをいつでも展開できるようにと言っておく。

その間に残る二人の様子をチラリと見てみるが、一番の不安材料であるリインフォースが冷静でいるようなので少しほっとした。フェイトは崩壊部分が剥き出し、加えてその状態で笑っているウレクにおっかなびつくりの様子だが、九歳少女の当然の反応であるため気にしないでおく。

交渉の準備も終わり、改めてウレクと正面を向いて椅子に座る。リインフォースとフェイトは俺の後ろに、シヤマルは俺の右側に立つ。



「……では、これより交渉を始める。この交渉はモニタリングされていることを明言しておく」

「了解ですどーぞー」

「単刀直入に訊く。お前の言う交渉の内容を説明してもらおうか」

「おう、いいぜ」

ウレクは余計笑みを濃く浮かべる。左腕を机の上に乗せ、それを支えに身を少し乗り上げる。

「まあ早い話取り引きをしたいんだよ。こちらの出すカードは情報だ。ユーリ・エーベルヴァイン——ああ、システムU—Dのことだ。あいつの現在の実状、ユーリを止め、救ってやる方法、他にも知りたいことがありや全部。マテリアル三基も知り得ない全情報を管理局の者に開示する。これが俺の出すカードさ」

「でっ」

俺は問うた。

「こちらが出すカードは？」

「お前だよ」

「……あ？」

言ってることの意味がよくわからず、思わず眉を蹙めた。

何の冗談かと思つたが、だがどうやら、目の前の狂人は本気らしい。ズイ、と顔をこちらに近づけてきた。

「お前が欲しい。正確に言うなら、お前への命令権。いついかなる時でも俺が命令したらどんな命令でも絶対に従うという権利。それが欲しい」

「……随分と、マニアックなものを要求してくるんだな」

「互いに必要なものを交換するつてだけさ。本当ならディアーチエも追加したかつたんだが、ここにはいないみたいなんだ。だから今回は格安、大特価、出血大サービストつてことにしてやるよ。管理局では三流の駒にしかならないようなお前の身で、世界を救うのに必要な情報を買えるんだ。これ以上得な話なんてないだろ？」

そう言ったウレクは、俺から視線を外した。

いや、視線を外したんじゃない。視線を送る相手を変えた。俺の後ろにいる、こんな話を聞けば間違いなく怒りを爆発させるであろう人に。

「——ふざけるなっ」

案の定、爆発は起きた。

普段は控えめな性格である彼女が、普段では考えられないような怒りを露わにした。

「貴様に、そのようなことを言う貴様につ、綾のことを侮辱する貴様なんかにつ——!!」

「リインフォース、下がれ！」

俺が忠告するも、当人は怒りに任せてウレクへと近づいていく。

怒りを誘うことは、罠に誘うことと同義だ。そのことぐらい、お前だつてわかつてい  
るだろ……！

そしてその懸念は、当然現実になる。

「綾を渡してたまるか……——っ!？」

リインフォースの伸ばした手がウレクの胸倉を捉えようとする直前で、リインフォー  
スの両手両足をリング状のバンドが拘束した。

「くっ……!？」

「リインフォース!？」

「あなた……魔力拘束具はどうした!？」

フェイトが睨む。睨まれたウレクはゲラゲラと盛大に笑い出した。

「ばぁーか! んなもん、つける前にぶっ壊したに決まってるだろ!」

「リインフォース待つて! すぐに拘束解除を……!」

「おおっとお! デバイスの展開、魔法行使、どちらもするなよ! 俺に近づくことも離  
れすぎてもいけないぜ! そうすりやその管制人格の二の舞だ!」

「!？」

クラールヴィントを展開しようとするシャマルをウレクが左手で制する。どうやら、

こいつは随分厄介な仕掛けを作りやがったらしい。

そんな状態でリインフォースは、力づくで拘束から逃れようと試みる。

「こんなものっ……!」

「おっと、そちらの管制人格さんも無理にバインドを壊そうとしたら大変なことになるぜ!」

「そんなハツタリが効くと……っ!」

バキンッ、とリインフォースの右腕を縛るリングが破壊される。

その次の瞬間、壊れたリングから一瞬の光、それから音。さらには強い衝撃と熱量が降りかかってきた。

「きゃあ!」

「——っ!!」

衝撃の直後にさらに大きな衝撃が上乘せされる。椅子に座っている以上踏ん張ることもできず、椅子ごと壁まで吹っ飛ばされる。今の悲鳴が誰のものだったのかはわからなかった。

「いたた……」

「……クソ、何が起きた……」

煙が晴れてきたので辺りを見回す。

障壁で防いだのか、ピクリとも動かずに鎮座している机と椅子から落ちることもなく座ったままのウレク。

対して、反応しきれずに壁まで吹き飛ばされた俺、フェイト、シヤマル。

そして、手足に火傷を負って倒れ込んでいるリインフォースが見えた。

「……………うつ……………」

「リインフォース！」

シヤマルが彼女の元へと駆け寄る。

こちらから見る限りでは熱傷、それと爆発を受けた手足からの出血……………血の流出が早い。気を失っているのは、吹き飛ばされた時に頭を打ったのだろう。リインフォースのことはシヤマルに任せて、俺はフェイトの方へ寄る。

「フェイト、怪我はないか？」

「は、はい。ちょうど私のいる所は綾さんで陰になってましたから……………」

「あーあ。だから無理にバインド壊すなつったのに」

卑屈な笑みを浮かべるウレクが、俺達を見下してそう言った。

その口調、表情に怒りが湧いたフェイトが飛び出そうとしたので、俺が捕まえて引かせる。

シヤマルがリインフォースを抱え上げた。

「綾さん、交渉は一旦中止にしましょう！ リインフォースの手当てをしないと！」

「無理だな」

「無理だね」

同じ音程の声があもった。

一方の声、ウレクはもう一方の声の主である俺を見て「わかってんじゃねえか」と言つて、続けた。

「バインドエリアの外に出ようとすりゃ、自動的に拘束されるぜ。ま、さつきも言つたけどな」

「特定条件で捕縛を行う自動範囲型バインドと、バインドの破壊をトリガーとする起爆式の爆弾か。……やりやがる」

「話を最後まで聞かなかつたお前らが悪い。初回は警告の意味で爆破で死んだり手足が吹き飛ばない程度に威力を調節してやったんだから、むしろ感謝してほしいもんだね」

初回は死ぬことがない威力。逆に捉えれば、次からは本気の威力を使うという現れだ。最悪死ぬ可能性がある。これでこの部屋にいる、交渉人である俺を含んだ四人は事実上人質になった。

「さあ、どうする俺のオリジナルよお。俺に服従するのかしないのか。世界を救いたい、その管制人格を助けたいってんなら服従がお勧めだぜ。さあさあ早く決めないと、そ

「いつの命が危うくなつてくぜえ？ ヒヤハハハハハハハッ!!」  
俺と同じ音程のふざけた笑い声が、勝利宣言のように部屋に響いた。

## 第六十二話

別室では、リンデイや休憩組であつたのは達がモニターで交渉の様子を見守つていた。映像は取調室の片隅から撮影されており、部屋全体を眺めることが可能である。

そのため、ウレクへと掴みかかろうとしたラインフォースが捕らえられ、爆破を受ける様を、彼女達は見せつけられた。

「……………!!」

はやては画面の中で倒れ伏している家族を黙つて見ているようなことは我慢できず、部屋の出入り口の扉へと車椅子を走らせた。

しかし、自分の足とも言える車輪の推進力はすぐに止められた。

「はやてさん！ どこへ行くつもり!?!」

はやてが振り返ると、車椅子のハンドルの掴むリンデイの姿が見えた。眉尻がつり上がったその顔はいつもの優しい現在は一児の、そして近い内に三児の母となる人ものではなく、場合によっては非情な判断をも下すアースラの艦長のそれであつた。

「ラインフォースの元に決まっています！ このままやと、ラインフォースが!」

「あなた、今の状況がわからない訳でもないでしょう!?! 今行つても、いたずらに人質の



数を増やして、綾さんが不利になるだけよ！」

はやての大声に対して、リンディも反射的に大声にして返す。

はやての気持ちはわからなくもない。むしろ、助けに行きたいのは自分だって同じである。養子として迎え入れようとしているフェイトも人質に取られているのだ。すぐに突撃してウレクを打ち倒し、フェイトを助けてやりたい。

しかし、相手は危険なバインド爆弾を周囲に仕掛けている。彼の言動からして、次から捕まった場合には死の危険性もある。そのバインドの範囲内に入れることは死と隣り合わせにさせることだけでなく、その人質を盾にされ、交渉が綾にとって不利なものになる。

さらに、ここでははやての行動を認めればそれはフェイトの友達であるのはや、フェイトの使い魔であるアルフまでもが行こうとするのが予想できた。事実、二人はもう飛び出そうとする寸前だ。ユーノが抑えているものの、はやての行動を許したら歯止めが効かなくなる。

これ以上、人の命も交渉も危険な方向へ進ませる訳にはいかない。なんとしてもここで食い止める他はなかった。

だが、はやてはまだ幼い少女だった。行けば自分が危険に晒されることならまだしも、周りへの影響まで予測を立てることは困難であった。

「だからって……リインフォースを見殺しにするって言うんですか!? リインフォースはどうなってもいいって言うんですか!?!」

「っ——!!」

だから、そんな叫びが出た。

ただ、家族を失うのが怖くて怖くて、もう寂しさに捕らわれたくないが故の叫び。

だがそれは、アースラに乗る者全ての命や責任を預かる艦長を否定する内容になってしまっていた。

「お、おい。こいつはマズいんじゃないか?」

末崎はこの言い争いの様子を見てうろたえていた。マズい方向に進んでいるということは理解していた。

「なあ才! あれ、どうにかして止められないか!?!」

「……………」

海斗に言われ、才は二人の方へと視線をやった。しかしそれは僅かな時間で、すぐ視線はモニターの方へと戻った。

モニターからは、位置は変わらず、その場でうろたえているシャマルやフェイトの声が聞こえていた。

「……………多分、必要ない」

「え……？」

「つ、この——！」

はやての発言に対し、リンデイがつい手を出そうと右手を振りかぶった時だった。

うるさい。

その一喝が、この部屋を叩いた。その声に、部屋の全員の声と動きが止まった。

声の主は綾で、取調室にいる人に対しての言葉……だと思う。ドスの利いた声は、一瞬誰のものかわからなかった。

また、低く冷えた声音が叩いた。全員がモニターを注目し、綾が口を動かしているのを見たため、綾の声であることが明らかとなった。それでもあまり信じていない者もいたが、確かに綾が言った。

——少し黙れ、と。



「……………」

ふうー、と長く息を吐く。

シヤマルやフェイトの声がうるさくて、つい感情的になつて大きな声を出してしまつた。だが結果としてはこれで正解だつたようだ。これで、雑音が消えた。

……冷静になれ。

冷静に、冷徹に、冷酷にまでなれ。

まずは状況の把握。相手の状態、こちら側の状態、それと……向こう側の把握も必要になつてくるか。俺は声を出す。

「リンディさん。聞こえますか」

少しして、目の前にモニターが展開された。モニターにはリンディさんの顔が映された。

『……何かしら?』

「そっち、状況としてはどうです?」

『あまり良くないわ。はやてさんが飛び出そうとしてる。なのはさんとアルフさんも寸前まできてるわ。なんとかこつちで抑えてるけど』

「じゃあ、力づくでいいからそのまま止めておいてください。はつきり言って、雑音が増えるのはやめてもらいたいんで」

『……。……わかったわ』

通信を続ける必要がなくなったので勝手に切る。寸前ではやての声が聞こえた気がしたがすでに切った後だ。

次。リンフォースの手当て。手足からの出血を止める必要がある。

「シヤマル、フェイト、リンフォースの止血をやつてろ。シヤマルは魔法が使えなくても出血を止める心得ぐらいあるだろ。急げ」

「は、はい」

「わ、わかつたわ……」

若干戸惑った様子を見せながらも、二人は止血に取りかかった。

吹き飛んだ椅子を拾い上げて元の位置に戻し、そこに座る。

目の前には、相変わらず卑屈な笑みを浮かべている金髪赤眼の俺。

「事態の一時収集も済んだか？ さあどうするよ？ 俺に従うか否か。あ、決定権は艦

長さんが持つてんだったか？ だったらその人に繋いだ方がいいんじゃないのか？

どうなんだ？ え？ クカカカカッ！」

「……安心しろ。これについてはリンディさんに訊くまでもねえよ」

「綾さん!!」

「お？ それで？ どうなんだ？」

俺は腕を組み、椅子にふんぞり返って、答えた。

「ノーコメント」

「あ？」

「ノーコメントつつつた」

「おいおい、いいのか？ んなちんたらしてたら、その管制人格が保たねえぞ？」

「問題ないさ。その前にお前が音を上げる。音を上げるまでの間俺達は動かなければいい。今のお前ならどうせ、その自動捕縛魔法を維持することで精一杯だろうしな」

「……………」

ようやく、ウレクがへらへらした笑みを引つ込めた。

ウレクは自身でも、崩壊が進んでいると言った。その影響は魔法行使にも出ているはずである。そして今の反応を見て確信した。こいつはすでに魔法を同時に複数発動する程の力もなくなっている。

こいつの交渉の手口は、人質を命の危険に晒し、脅すことによって自身を優位に立たせる手法。そのためのバインド爆弾であるのだが、バインド爆弾の範囲に入った時点で人質とはいえ入っただけでは命が危険という訳でもなく、人質としての意味が薄い。優位に立つためにはバインドで捕らえる必要がある。

そのためにあの、人の感に障る話し方だ。大事なのは、こちら側に明確な攻撃意志を持たせ、正当防衛とすること。こちらの非を作らせて優位に立つという意味もあるが、

回復魔法を使おうとしてバインドが反応したとあればウレクの一方的な攻撃行為となるため、交渉には不利になる。治療を拒んだのはそういうことを危惧した結果であろう。

すなわち、動かなければいいのだ。動かずにウレクの消滅を待てば、こいつは自分から情報を吐いてくれる。

なお、自動捕縛を切ってウレクから捕縛を仕掛けてくる可能性もあるが、そうなれば逆にチャンスだ。こちらにはフェイトがいるし、崩壊によってウレクの身体能力は落ちているはずなので俺でも狩れる。

加えてもう一つ、俺が首を縦に振らない理由があった。

「ちなみに言っておくが、仮にお前の身体が崩壊していなかったとしても俺はあの条件は呑まねえぞ」

「なんでだ？ 格安提供だと思っただがなあ」

「そう言っておきながら結局のところ、話す気がないだろ。でなけりや、『管理局』ではなく『管理局の者』なんて言い方はしねえよ。俺に話して箝口令を敷くつもりだったんじゃないのか？」

「……………」

これは、ウレクが自分のカードを提示した時から薄々気づき、要求を聞いて確定に

なったことだ。

まず、ウレクは自分の要求が先だと言って俺への命令権を手にする。人質を盾にすれば造作もないことだろう。そして俺だけに情報を開示し、俺に他言禁止の命令を言い渡す。そうすれば『管理局の者』に情報を開示するという条件は達成される。実質、ウレクは何一つ消費することなく欲しいものを手に入れることができる。

「そんな条件、誰が呑むかってんだばあーか」

「……チツ」

ウレクが舌打ちをした。

だが舌打ちをする割にはウレクは楽しそうに笑っていた。

「やっぱり、お前相手だとバレちまうかあ」

「当たり前だろ。同じ頭脳をしてんだぞ」

「ちげえねえ。ま、先に引つかかってくれた奴がいるおかげで、まだこつちにも希望はあるぜ」

言うのと、ウレクは天を仰いだ。

「おい！ リンデイ・ハラオウン！ 聞こえつかあ!？」

『何かしら?』

ウレクの横にモニターが展開され、画面内のリンデイさんが答える。



ウレクはモニターに顔を向ける。

「現在このように我慢比べの状態だ。オリジナルに動く気はねえ。お前だって情報はほしい、しかしお前は艦長という責任上この管制人格を見殺しにする可能性がある判断は避けたい。そうだろ？」

『……何が言いたいのか？』

「これからオリジナルと勝負する。その結果に互いの要求を賭けるつてのはどうだ？ こいつが勝てば情報をお前らに開示するし、お前らとの協力関係も約束してやる。俺が勝ったら綾への命令権をいただき、俺を釈放する。どちらが勝とうがこの部屋は用済みになるから、管制人格他、人質は解放となるし、勝負はすぐに終わらすことだって可能だから、治療は間に合うとは思うぜ？」

『……………』

リンディさんに対して、俺対ウレクの勝負を要求してきた。これ以上俺との交渉は不可と判断して、リンディさんの立場を利用する策に出たようだ。勝負の結果に関わらず人質の解放を提示する辺り、ウレクはこの要求と勝負に賭けるらしい。

ウレクの言う通り、リンディさんは艦長として、アースラに乗る者全ての命を預かるという責任がある。ラインフォースには適切な治療が必要な状況で、この状況を長引かせてはならない。

だが、リンデイさんがすぐにその要求を呑むことはしなかった。

当然だ。負けた時のリスクが厳しい。人一人差し出して逃げられたというのは艦長としての責任が大きくなる。

しかし、元々こちらが動かないという選択肢はリインフォースの怪我を考慮しない、今の状況では危険な手段だ。ウレクは限界に近いとはいえ、いつ消滅するかわからない。ひよつとしたら僅か数分かもしれないし、何時間も後になっても生きているかもしれない。そんな不安要素の大きい賭けを行うのは好ましいものではない。

なので、ここは後を押し。

「リンデイさん、ウレクの提案を受けてください」

『あなたねえ……言ってることの意味、理解しているのでしょうか？』

「当然です。負けた時のリスクは大きいですが、ここで死者が出ることは可能性としても存在しなくなる。人が死ぬ可能性を考えるよりは明らかにマシです」

それに、もつと単純な解決方法がある。単純で、簡単で、最良な方法が。

「それに、勝てばいい」

勝負とはそういうものだ。負ければリスクを背負う。だが勝てばいい。勝てば、そのようなりスクを考える必要がなくなる。

はあ、とリンデイさんが溜め息をついた。

『これじゃあ、何のために決定権を持ったのかわからないじゃない』

「仕方ないですよ。こうなったんですから」

俯きがちにまたリンディさんが溜め息をついて、そしてすぐに顔を上げた。

決心したらしい。

『綾さん。勝負を受けるということは、あなたが責任を負うということよ。わかってい  
るわね?』

「当然」

『なら、いいわ』

そしてリンディさんは決定を下した。

『わかりました。その提案を受けましょう。それで、こちらで何を用意すればいいのか  
しら?』

望みが繋がったウレクは、口角を引き上げた。

「そこなくつちやな。じゃ、新品のトランプ二組を用意しろ」

ああそれと、とウレクは要求を追加した。

「シユテルのオリジナルと、シユテルが師匠呼びしてる奴。その二人を連れてこい」

## 第六十三話

「フェイトちゃん！」

「フェイトー！」

「なのは！ アルフ！」

扉が開いて早々、フェイトに駆け寄ったのはなのはとアルフだった。

フェイトも二人の元へ駆け寄ろうとして、一瞬何か迷う素振りを見せたのだが、その時にはもうアルフに抱きつかれていた。

「フェイトお！ 無事だったかい!? あたしもう心配で心配で！」

「ア、アルフ駄目だよ。血がついちやう」

なるほど、どうやら自分についたリインフォースの血が付着するから少し躊躇ったらしい。

リインフォースに行った止血方法は圧迫止血という、布の上から手でその名の通り圧迫して出血を止める方法である。本来ならゴム手袋をはめたり、ビニール袋を手に被せて血の付着を防ぐのだが、そのようなものがなかったのでフェイトやシャルマルの手は血で染まってしまっている。

もつとも、すでにフェイトが気にした意味がなくなつたのだが。

そしてなのは、アルフと続いて、今度はリインフォースの元へ直行する人物が二人。はやてとリンディさんである。

「リインフォースう！」

「シヤマルさん！ 応急道具を持ってきました。急いで応急処置をしましょう！」

「わかりました！ リンディさんはまず右手の応急処置をお願いします！」

シヤマルとリンディさんで応急処置が行われる。はやても手伝うが、車椅子という位置上、「ないよりはマシ」程度の手伝いしかできない。

そしてなのはと共にウレクの要求に出てきた人物である、ユーノが最後に入ってきた。ユーノは入ってくるなり、俺に謝ってきた。

「すみません、綾さん。本当ならばやてもアルフも、今ここに連れて来ちゃ駄目だつてわかつてたんですけど……」

「いや、いい。来てしまったからにはしょうがないさ」

確かに、アルフといいはやてといい、余計な人まで来て欲しくはなかつた。特にこの場では感情的になりやすいであろう二人は止めることに苦労することが予測でき、うるさく、正直言つて邪魔だ。しかし、邪魔だと言つて追い出すことができない以上、必要以上に氣にする訳にもいかない。

「海斗達は？」

「才の発案で、何かあった時のために待機してます」

「それでいい」

「ここにはいない仲間のことを尋ねて、返答を聞いて心中で才に礼を言う。」

「それがいい。もしもの備えもある方がいいが、それ以上にこの場をこれ以上上うるさくせず、集中できるように努めたことが重要だ。雑音はできるだけ少ない方がいい。」

「ウレクの要求の物は？」

「持ってきました」

「言つて、ユーノはポケットからトランプの箱を二つ取り出した。どちらも新品で、ビニールの包みもついている。」

「ユーノからそれを受け取り、その二つを机の上に置いた。」

「用意するものは用意したぞ。それで、どうするつもりだ」

「よおーし。じゃ、シユテルのオリジナルさん。お前ちよつとこつち来いよ」

「わ、私……ですか？」

「クイクイと手招きするウレクに、指名されたなのは戸惑った様子でいた。」

「そこに、はやてが待ったをかけた。」

「なのはちゃん待つて！ 私が行く！」

「はやてちゃん!？」

「おめーなんざ最初っから呼んでねーよ。すっこんでろ」

「リインフォースを、私の家族を傷つけて! それでもそのまま自分の思い通りになると思つとるんか! そんなことはさせへん!」

言つて、はやては車椅子をウレクの元へ走らせようとする。

なので、俺はレイピアの鞘を車椅子の車輪に差し込んだ。

差し込んだ鞘は車輪と共に少し回り、背もたれに引つかかつて止まる。車輪も鞘と共に動きを止める。

「っ!? 綾さん、何するんですか!？」

「はやて。今のお前は邪魔でしかない。黙つて、すっこんでろ」

「っ、……どうして」

「あ?？」

はやてが一瞬俯いて呟いたかと思うと、次には顔を上げて怒鳴つてきた。

「どうして! そないなことばかり言うんですか!？ 邪魔と言つたり、雑音呼ばわりしたり! 家族を傷つけられて、それでも外で黙つて見てろつて言うんですか!？」

「はやてさん! 勝手なことを言わないで」

叱ろうとするリンディさんを手で制する。俺に考えがある、ということが伝わったり

ンデイさんは、それだけで身を引いてくれた。

少女の痲癩はまだ続く。

「綾さんは、ただ呼ばれなかったからなんて理由で、何もしようともせず、ただのうのうとしてろって言うんですか!?! あなたは何とも思わないんですか!!」

ふう、と溜め息。敵意を剥き出しにしている九歳の顔を見据えて、口を開く。

「そこまで言うなら、席譲ってやろうか? そしてこう言えばいい。『綾を渡すから、一刻も早くリインフォースに治療をさせてほしい』って」

「え」

「ちよつと、綾さん!?! 何を言ってるの!?!」

「おい、何勝手なこと言ってるんだコラ」

多方から非難の声が挙がるがそれは無視し、続ける。

「正直、俺自身はこの交渉がどつちに転ぼうがどうだつていい。俺が動こうとしない理由はただ、俺が安全な場所に留まって生存率を少しでも上げたいだけだ。仮に俺がウレクの元へ行くとしても、直接的に死ぬって訳でもないだろう。なぜかは知らんが、俺がU—D……ユーリを救出するのに必要な駒に抜擢されたつてだけだ」

そう、この交渉による結果の違いはそんなところだ。ウレクが降りて管理局と共に事件解決に取りかかるか、ウレクの元に降りて単独でユーリ救出に乗り出すか。



ウレクが管理局の協力を拒む理由は単純に、管理局への信用を持ってないからという理由で解決する。管理局がいなくともユーリを救出する手段をウレクは考えているはずだ。後はその成功率と俺の生存率がどちらが上かの問題で、俺は管理局に留まる方を選んだ。

しかしそれはどんな屁理屈を使おうと、たった九年程度しか生きていない少女にはわからないだろう。家族のことを選ぶだろう。

「俺は、お前の言ってることが間違っているとは思わない。俺だつて海斗らが人質にされたらそりゃあ怒る。家族が助かる確率が上がるならなんだつてする」

はやての言ってることは認める。だが俺は生存率の高い方を選びたい。

「リンディさんは責任を俺に預けた。俺はどうでもいいと今言った。だから、選びたいならお前が選べ。俺をあいっぴに差し出して、リンフォースに治療を少しでも早く施すか。それとも、リンフォースをもうしばらくほっといて、俺をここに留まれるようにするか」

だから、楔を刺す。容赦なく、この少女の選択肢を奪う切り札を使う。

「闇の書の被害者に対する誠意がその程度だつて、今ここにいる全員に示してもいいつて言うのなら、俺を差し出せばいい」

「!？」

目の前の少女の双眸が大きく見開かれた。その顔が驚愕と共に、恐怖で塗りつぶされていく。

被害者特権。その名の通り、闇の書事件の被害者が持つ非公式の特権。俺は闇の書事件とは関係ない扱いになっているが、あくまで管理世界では俺と闇の書事件の関係を隠しているだけであり、この特権を使うことは可能だ。

しかも情報改竄を推進してはやてらの刑務所行きを回避させたり、ラインフォースが現在システムを置いている夜天の写本を手に入れたりしたのが俺であるため、この特権の威力は凄まじい。使えば絶対とまで言える程度には効力を発揮する。

かつ、こういう特権というものは見せびらかすのではなく、ちらつかせることでより意識させ、相手の抑止力となる。

「つ、……………う、あ……………」

ああ、酷いことするなあと、自分のことながら思う。

自分のやつてることが、間違はなく下種のやつていうことだということにはわかつていゝる。家族を助けようとすれば、友達の信頼を失うことになるだろう。二人はそうは思わなくても、はやてはそのことに恐怖する。友人の信頼と家族、俺はそれを天秤にかけさせた。

ああ、本当に、反吐が出るようなくらいに最低だ。

「……そんな……選べる訳、ないじゃないですか……」

「だったら、従え。選べない奴が出しゃばるな」

震える声で、絞り出すように言ったはやてをその言葉で一蹴する。

はやてを黙らせ、俺はようやくウレクへと向き直る。

「……下らん内輪もめを見せたな。悪かった」

謝るが、思いの他ウレクはニヤニヤ笑っていた。

「いんや。結構面白いもん見させてもらったよ。冷徹に冷酷に、自分のためなら他人の傷をも抉ってみせるその残忍さ、さすがはオリジナルだ。あんたを素体にして良かったよ」

「……どうだかな。それより、話を戻さないか?」

「おっと、そうだったな。じゃあシユテルのオリジナルさん、お前だけ来い。ああ安心しろ。お前だけ特別配偶として触れる程度ならバインドも作動しない。明確な攻撃的速度での接触をした場合には容赦なくバインドだがな。後、シユテルの師匠はオリジナルの隣にいれ」

「なのは。行けるな?」

「あ……は、はい」

なのはは頷くと、恐る恐るウレクの元へと近づき、隣に立った。

「で？　これでどうするんだ？」

「互いの都合上、勝負は単純なものの方がいいだろ？　捲りで勝負しようぜ」

「捲り？」

ユーノが訊いてきた。こういうギャンブルには無縁のようだ。

「引いたカードの優劣で勝負を決める、ギャンブルの中では最も単純な種目の一つだ」

「そうそう。ジョーカーを除いた山から一枚引き、その優劣を競う。ランク、スートの強弱はポーカー基準でいいよな？」

「構わん」

ランクとはトランプの数字、スートはスペードやダイヤといったマークの正式な名称である。ただ数字やマークでも十分事足りるため、こういったトランプの用語は一般的に広くは知られていない。

強弱はポーカーが基準ということは、最も強いランクはA、スートの優劣は強い順にスペード、ハート、ダイヤ、クラブとなる。

「なのはとユーノの意味は？　不正防止用の見張り役か？」

「不正防止って意味では正解だ。ただやり方は違う。ただ見張らせるんじゃない、こいつらにシャッフルを代行させるのさ」

「え、私が……？」

なのは驚いた様子でいる。ウレクはグリーン、と首を彼女の方に向けた。

「ああ。俺は見ての通り片腕しかない。シャツフルに時間がかかっちゃうだけでなく、オリジナルと比べて不利だ。だからここは平等に第三者に切ってもらってことさ」

ただし、とウレクは言葉を切り、顔をこちらに向け直した。

「それじゃあ自分の引くカードに責任が持てないだろ？ だから最後にカットの、切り分けだけは自分で行う。切り分けた札を積むのは代行に任せる。これなら最低限責任は持てるよな？」

「……切り分ける数は？ 統一する方がいいんじゃないか？」

「ああそうだな。切り分ける直前の一番上のカードを含めて五つに分けようか。一応言つとくが、代行はカットの意味を持たせるために直前で一番上だったカードをまた上にして積むようなことはするなよ？ あと勝負は三本先取、シャツフルは捲る度に、捲ったカードを抜いた状態で行っていく。以上だ。あとは訊くようなこともないだろう？」

「そうだな。それでいい」

言つてすぐ、互いに机の上にあるトランプの箱を手に取り、片や手で、片や口でビニールの包みを取る。

「中身の確認はしてもいいよな？ ここにきて不良品掴まされたとあつちやあ堪んねえ

からな」

「勿論だ。俺からもそう願いたかつた話だ」

互いに同意を得て箱を開け、中身を取り出し、確認をする。俺は両手の中で、相手は机の上でカードを滑らせて。

すでに、とつくに勝負は始まっている。

「ジョーカーを除く五十二枚、確認した」

「カカカツ、俺もだ」

ドン、と同時にカードの束を机の上に置く。

「ユーノ。シャツフルを頼む」

「じゃあシユテルのオリジナル。シャツフルやれよ」

カード引く。たつたそれだけに人と情報賭けた捲り勝負。

事前準備も終わり今、本格的に開始された。

## 第六十四話

責任重大。

綾が置いたトランプを手に取ったユーノ・スクライアの頭の中はその四文字が占めていた。

カードを引いた時点で勝敗が決する捲り勝負。鍵を握るのは当然、一番上に何が来るか……すなわち、シャツフルである。

そのほぼ全てが自分に任されているとなれば、嫌でも責任を感じさせられる。仕方のないことだ。

だが、その責任に押し潰される訳にはいかない。

まず手順を整理すると、まずユーノがトランプをシャツフルする。ある程度シャツフルを行ったら綾がトランプを切り分け、それからユーノが積みをする。

ユーノにはトランプを指定した場所に仕込むようなシャツフルの技術はない。仮にできたとしても、綾から指定を受けていないのだから仕込みようがない。完全なランダムだ。

綾もそれは理解している。しかし負ける訳にはいかないはず。だから、どのような

シャッフルでも、どこに引きたいカード——Aがあるのかわかる仕掛けを施しているだろう。

すなわち、

(カードのどこかに目印をつけている……)

目印——すなわちガンカード。カードに直接、目に見える目印をつける手法は管理世界では最早古典的なイカサマ手段である。管理世界には魔法があるのだから、自分だけが認識でき、相手の目視では認識できないガンカードを作る手段は探せばいくらでもある。

しかし実際には、こうした魔法によるイカサマは魔力計測器によって簡単に見破られてしまうため、古典的イカサマの方が横行しているのだそうだ。

それはともかく。話はズレたが、用はガンがすでに仕掛けられてあるはずだ。タイミングはおそらく、カードの確認と言ってトランプの山を手にしている時。というか、そこしかない。

だとしたら、ユーノにはそのガンを正しく見分けることができるようにサポートするのが正しい行動だ。

そのやり方は、

(カードの上下がバラバラにならないようにシャッフルする)



これしかない。

ユーノはトランプを右手で持ち、数枚ずつ左手へと落としていく。その手法は日本人が好んで行うヒンズーシヤツフルと呼ばれるものに近いが違い、その切り方は地球ではオーバーハンドシヤツフルと言う。違いはトランプの持つ位置がサイド（トランプの長い二辺）ではなくエンド（トランプの短い二辺）であること、親指でカードトップを押さえて滑らせることである。

ミッドチルダにもトランプ他、カードゲームは存在する。シヤツフルも種類が存在し、一部名称が違えど多くは地球と通ずるものである。

海鳴市にいる頃はなのはとその友人がトランプで遊ぶのを目にし、ミッドでもある程度カードゲームに対する知識や経験があるユーノ。シヤツフルの方法もいくらか知っている中で、彼はこの手法を選んだ。

自分なりにやりやすいシヤツフルであるというのものもある。しかし最も重要なのは、カードの上下がバラバラにならないようにすることにある。

綾がトランプにガンをつけるのであれば、おそらくAだけでなく次点のKにもつけている。引いたカードは山に戻さずに続行するというルール上、A以外のカードを引く可能性が出てくるからだ。少なくとも、第五戦までもつれ込むと確実に一度はA以外が出てくることになる。そうなった場合当然、引きたいカードは次点であるKになる。

綾なら、AもKも見分けることが可能なように仕掛けているだろう。しかし、それはつけたガンの位置がそのままである場合の話だ。シャツフルの過程で上下や左右がバラバラになった場合、認識が困難になる可能性がある。

それを避けるために、上下が変わってはいけないのだ。

上下を変えず、綾が少しでも有利になるようにオーバーハンド。かつ、ベストな展開は、

(逆になのはがクラスターでもやって、トランプの上下をバラバラにしてくれば、こちらが有利なんだけど……)

魔法戦では拡散の意味を持つクラスターシャツフルは、地球で言うところのウォツシユシャツフル——机の上でかき混ぜる手法。スクランブルや焼きそばとも言う——のことを意味する。

綾がやると考えた場合、間違いなくウレクもイカサマをすると考えた方がいい。人格は違えど頭脳は同じなら、イカサマをするという考えも共通するはず。

だとしたら上下がバラバラになった場合のリスクも同じであるはずなので、なのはに期待の視線を送るが、僅か九歳のなのはにそれを察することはできなかつた。そもそもユーノも半分無理だろうとは思っていた。念話も使えない以上、なのはが自力で気づくか、気まぐれでやるしかないだろう。

何度目かのシャツフルを終え、ユーノはトランプの山を右手に持ち直し、綾の前へと置く。それを見たのはもウレクの前に切り終えたトランプを置いた。

「さて……いよいよカットだな」

ウレクは狂気の笑みを浮かべ、左手の指を波のように動かして言う。

「今一番上になっっているやつを含めて五つ、パケット(数枚のカードの束)を俺達が作る。そして積みは隣の奴に任せる。今一番上になっっているカードは一番上にしちゃいけないから、選択肢は四つってことだ。カカカツ、パートナーにいい選択肢を与えてやれよ?」

「……………」

言つてウレクは左手を、綾は無言のまま右手を、相方が切ったトランプへと伸ばす。

サイド・エンドを確かめるように触り、一枚一枚慎重に、相方に選択肢を、作る。

そうして出来上がった選択肢は、厚さが全てバラバラになった。

当然だ。どこにあるかわからない狙ったカードを意図的に探し出しているのだから、そうなるのが自然だ。

「完了した」

「こつちも完了だ。じゃ、シユテルのオリジナルはちやちやつと積み込みしてくれや」

「あの、私、高町なのはっていう名前があるんですけど」

「知らねえよ。とつととやれ」

「ユーノ、頼む」

「はい」

ユーノは迷わずに中央のカードの束を取った。迷いはない。迷う必要がない。

選択肢は四つ。同一ランクのカードは四つ。つまり一巡目は、ガンの認識ミスを犯さない限りは確実にAとなるのだ。後はどのスーツを選ぶか。ユーノもなのはもわからないため、完全に運頼み。迷う意味がない。

カードを積み、一つの山に戻す。なのはも少し悩む素振りを見せた後、積み込みを完了させる。

積み込みが完了してすぐ、綾は一番上のカードを引いた。そしてそれを、机の上に叩く。

『『ダイヤ』の『A』』

その宣言と、表になった赤い菱形一つの札に、固唾を飲んで見守っていた観戦者の多くが沸いた。

ユーノも自身の高揚を感じていた。行けるかもしれない、そうも思う。

しかし――

「……………」

相手は静かに笑っていた。目の前の札を見てなお、その笑みを消さなかった。

相手は山から一枚引き、表にして叩きつけると共に、宣言する。

「俺は、『スペード』の『A』だ」

「!?!」

打ち碎かれる。

ポーカーにおいて、ダイヤはおろか、四種の中で最強のスト・スペード。それが意図もたやすくこちらのAを飲み込む。

……誰もウレクがスペードAを引いたことを抗議しない。引く前から確信したような笑みを浮かべ、確認もせずカードを言い当てたことに文句を言わない。いや、できない。

綾もイカサマを使っているとか以前の問題だ。取り押さえることができない。取り押さえようとすれば、ウレクのバインドが作動し、勝負以前の問題になる。ただ歯を食いしばり、見ていることしかできない。

ルールは三本先取。次取られた場合、ウレクが勝利ヘリーチとなる。

しかし綾は一敗を目にしても、表情一つ変えることはなかった。変えることもないまま、言う。

「次だ」

ウレクも笑みを浮かべたまま言う。

「ああ、次だ。引いたカードは戻さず、五十一枚となった山をシャッフルする」  
言つてウレクは五十一枚となったトランプの山を取り、なのはに差し出した。

「ほうら、早く切りな。早くしないと、管制人格が死んじゃうぜ？」

憎たらしい、嫌らしい声に、なのはの表情から怒りが覗かせた。死んじやいそうなのは誰のせいだ……と。

しかし、触れることはある程度許されているのはでも攻撃はできない。なのはは怒りをぐつとこらえてウレクからトランプを受け取った。

「ユーノ、シャッフルを頼む」

「はい。……でも、大丈夫なんですか？ いきなり先手取られましたけど……」

ウレクと同様に五十一枚の山を取つて差し出した綾に、ユーノはこつそり耳打ちで尋ねた。

「スピードが相手だと勝ち目はないんだ。仕方ないさ。寧ろこちらのスーツがハートでないのにも関わらずスピードが出たのはラッキーだ。ハートが負けることがなくなつた……いいことじゃないか」

返つてきた答えは、冷静な綾らしい状況を正確に認識したものだった。

確かに、一敗した。しかし、相手のスピードのAが消えたことでこちらのハートのA

が負けることはなくなったのも事実だ。勝つチャンスは、まだある。

気を取り直し、ユーノはシャッフルを始める。一巡目と同じシャッフルを行い、右手から左手へとカードを落とす。

ユーノとなのはがシャッフルをしている間に、ウレクが口を開いた。

「なあオリジナルさんよお。お前、夢はデカいか？」

「あ？」

「俺はデツカいの持つてるぜ。何でも、デカい方がいい。ずっといい」

「……………」

突然、勝負とは関係ない与太話を始めるウレク。綾は黙って聞く。

「俺の夢はデケえぞ？　なんたって最終的に世界を救うことになるんだからな。そりや

あデカい。お前はどうよ？」

「……………さあな」

「夢はデカい方がいいぜ。デカくて損することなんてねえよ」

意図が全く読めない会話。

話をしている内にシャッフルが終わって机上に置かれる。

綾は同じように山を切り、四つの選択肢を作る。

今回の選択肢には一枚『ハズレ』がある。その一枚はこの勝負の中では強い方Kなの

であろうが、それでもハズレ。引けばほぼ間違いないく負けける。

だが、そこまで問題ではない。味方に難しい問題を出す必要はない。最初に切ってきたカードを掴めばいいのだ。ちゃんと目で追ってきたため、わかる。

ユーノは迷わずカードを選ぶ。最初の束を選べば、後は適当にカードを積む。

「……………」

綾は自分のカードが積まれる様は見ず、相手を、正確には相手の積み込みを見ていた。

「綾さん？」

「…………ああ、積み込みが終わったんだな」

綾は一つに纏まったカードの上から一枚引き、表にする。

「っー」

『クラブ』の『A』

あまり良くない。そう思ったのがユーノの正直な感想であった。

最弱のスイートであるクラブのA。相手がダイヤやハートであれば負ける。そうなればリーチだ。一気に不利が加速する。

それは、できれば避けたい。できることなら、なのはが選んだカードが同じクラブか、もしくはA以外のカードか。二分の一の確率に賭けたい。そうユーノは願う。

だが、その願いはあっさりど踏みじられる。



「キキキッ！ 『ハート』の『A』だっ！」

「くっ——！」

相手が表にしたカードに描かれていたのは黒い三つ葉ではなく、赤いハートであった。

二連敗。あと一回負ければ、綾が連れて行かれる。情報が手に入らなくなる。

「ちよつと綾！ このままだと、あんた負けちまうよ!？」

「綾さん！」

思わずと言ったところなのか、アルフとフェイトが叫んだ。

それから湧き上がる、綾を心配する声。狼狽した声が部屋を包み、反響する。

綾は答えない。誰の声にも答えず、ただ目の前の相手を見つめる。

「クククク！」

対してその声に喜び、ウレクは笑う。狂気の笑いを上げ、この場の者の焦燥感を加速させ、蹂躪する。

「ケケケツ、どうだオリジナル！ 勝てばいいとか言つて、無様に負けていく気分はどうだよお！ あと一勝したら俺勝つぜ？ 勝ちちまうぜ？ お前負けちまうぜ!!? え？

どうすんだよお!!」

相手の精神を蹂躪する舌剣ぜっけんが綾に斬りかかる。

綾は何かを口から出すこともなく、ただ五十枚のカードをユーノへと渡した。

## 第六十五話

(まず一勝)

目の前の五十枚となった山を切り分け、選択肢を作る。

「あの、綾さん」

「ユーノ、迷うな。迷う必要はない。迷う意味もない。さっきと同じように、迷わずに取れ」

「は、はい……」

ユーノは迷わず、最初に切って出てきたカードを掴む。それでいい。

こちらがさつきと切り終えたのに対して、ウレクは少し悩んだように停止した後。切り分けた。

「さ、積みな」

「え……えと」

「随分、極端だな」

「ルール上の問題はねえだろ？ パケットの枚数に指定はないんだし」

その言葉は認めるしかない。しかしそれでも、奴がなのはに与えた選択肢は極端だっ

た。

選択肢の四つはこちら主点で左から、極端に厚い束、一枚のみ、一枚のみ、そして普通の束となっていた。

カッツは普通極端な分け方はしない。均等に分けるのが常識的だ。だが、極端に分けてはならないという言われもない。だからこれも、好ましくはないが違反でもない。

「さつさと積みな。どれを上にしても構わんぜ」

ウレクは迷うなのはにそう言った。相変わらずの笑みを浮かべて。

「枚数の少ないところからでも、多いところからでも構わない。でも悩むよなあ？

ひよつとしたら俺のお望みのカードが一枚だけのところに二つとも入ってるかもしれないよなあ。そういや、二巡目は枚数が一番多い束を選んで、それがハートのAだったんだよなあ。たくさん悩んでもいいが、早く決めないとなあ？」

「うう……！」

なのは悩んで、しかし長く悩むことはできない状況も理解していて、選ぶ。

選んだのは、多くもなく少なくもない、普通の束。それを上にして、後は適当に積み重ねていく。こちらより少し遅れて完成する。

「キッツ。さあて、俺の引くカードはつと……『ダイヤ』の『A』だ」

表にする前に宣言。そして中。三枚目のA。

ここで俺の引くカードが負ければ、これで終わりになる。

引き、表にする。

宣言する。

『『ハート』の『A』』

これでやつと一勝。

初めて一勝を勝ち取ったことに、周りからは安堵のため息が聞こえる。

それにしても……

「あくどいやり方だな」

「お前らが事実上の結託をしてんだ、目え瞑ってもらおうか。それに、お前すでに一回黙

認してんだから今更文句言ったっておせえよ」

「まあ、違うかい」

「綾さん？ それってどういう……」

ユ一ノが耳打ちで尋ねてきた。なので答える。

「あいつは心理的になのはに取るカードを誘導させたってことだ」

「え……!？」

「ユ一ノは、相手を罠にかけたい時、言葉で誘導するならどうする？」

「えーと……そこが安全だと言って騙す？」

「確かにそうだが、どうやって安全を証明する？ 安全だと口だけで言っていると、逆に罨だと感づかれる可能性がある。相手が自分を信用してるならまだしも、ウレクとなのはのような敵対関係では疑われる」

「じゃあ、どうするんですか？」

「逆の考えを持つのが。その安全を証明するんじゃない、他ところ全てに危険性を孕ませる。明らかに不自然で危険に見えるものを敢えて掴むより、無難なものを選びたいと思うだろ？ その考え方をウレクは利用した」

ウレクは四つ中三つは危険な匂いを漂わせたが、一つだけ何も言わなかった。なのは頭のの中では、特異で明らかに怪しい三つより、何の変哲もなく、何も言われなかった一つの方が確実に安全に感じただろう。なのは子供であるから余計簡単に引つかかる。危険だらけの中に安全だと思ひ込む仕掛けを作るのが今のやり口だったのだ。

「なるほど……ところで、ウレクは緩がすでに一回黙認したって言っていましたけど、さらに前にもやってたんですか？」

「お前、二巡目のあの与太話が何の意味もないことだと思うのか？」

「え？ いや、変だなとは思ってましたけど」

「あれは一種の刷り込みだ。やたらデカイデカイ連呼していただく。そうすれば自然に意識は大きい方に向いていく。事実、なのはは枚数の多い束を取ってっただぞ」

意図的に特定の形や色を言った上で自由にものを選ばせると、人は言われたものを取る傾向になりやすいらしい。

ウレクはあの与太話で「デカイ」という言葉をよく使い、逆に「小さい」という言葉は一度も使われなかった。それによって「デカイ」という言葉が印象に残り、そうしてからパケットの厚さを調節してやれば、なのはウレクの狙ったカードがある。パケットを最初に掴んでしまう。そういうカラクリだったのだ。

「でもそれって、もうシャツフル代行の意味がないじゃないですか」

「確かにそうだが、誘導こそされても結局はなのは自分の意志でカードを積んでる。ユーノにも似たようなことが言える。文句は言えないさ」

そもそも取り押さえられないのでは文句もあつたものじゃないのだが。

しかしユーノの言う通り、もう互いに代行の意味はない。後は四巡目と五巡目、どちらにAを当てるのか。相手がどうするのか。単なる腹の探り合いだ。

「話はこれぐらいにしよう。ユーノ、またシャツフルをやってくれ」

「あ、はい」

ユーノは四十九枚となったトランプを取ってシャツフルを始めた。

俺はウレクを見据える。ウレクも同じくこちらを見ていたため、視線が重なる。

四巡目、Aを出すか出さないか。それで勝敗が決まる。相手のAを仕留めれば、勝つ

チャンスは残る。

逆に仕留め損なつた場合には、そこで敗北となる。



迷う。

どちらの解が正しいのかここにきて強い迷いが生まれる。

勝つても負けても、計画が狂うことはないだろう。しかし負けてもいいという落ち着き方はしたくない。

不安材料、不確定要素である者を含んで作戦を実行する気にはならないというのもある。例えばそれが物語の中心人物達であろうとだ。ウレクはあの神によつて造られたイレギュラーであるという自覚がある。この世界が作られた物語であることも知っている。しかし同時に、今や自分がこの物語の人物の一つであると理解もしている。どうか、させられている。そういう振る舞いをしなければならぬ。加えて物語の結果はわからない。そのためできれば人数と共に余計な思考が入ってくるようなことはしたくないのがウレクの考えだ。

だがそれ以前に、勝負に負けたくないという私情もある。



ただ負けたくないという私情。ただ勝利への欲望。詳しい説明はいらない。それだけで十分。自分の意志か神の意志かも関係ない。

そのために、迷う。考える。

四巡目に来るのがAか、その他か。ウレクが勝つ条件は、残ったクラブのAを通すこと。

(仮に、オリジナルがAを出そうと考えていたとする)

勝つために仮定をする。

が、すぐやめる。

(いや……そんな考え方しても下等な裏読みのループになるだけか)

相手のカードを仮定して、その裏について、しかしそれは読まれるだろうと仮定して、その裏についての繰り返し。

そのようなループは何も意味をなさない無駄な思考だ。そもそも、最初の仮定が違っただけで結果が正反対になる。そしてループになる。

相手の表情を読もうにも、綾はまだ切っていない。現在、互いに目の前の山を切るところである。

では、どうするか。

ウレクは、椅子にふんぞり返った。

「……………」

「……………」

それから、動かない。互いに微動だにしない。

「…………あの、早く切つて欲しいんですけど」

「まあ慌てんなよ。これが勝負を決めるかもしれないねえんだ、悔いのないようにしたいだろ？ カットに制限時間なんてかけてねえし」

じれたなのは言葉には適当にそう言い訳して無視する。

鳴かぬなら、鳴くまで待とうだかなんとかかんとか。オリジナルからかその他聞の書が吸収した記憶の中間にそんな詩があつたのを思い出す。全くその通りだ。

(出さぬなら、出すまで待とう、そして読む…………つてな。こんな感じでよかつたか)

合っているかどうかはともかく、策はそういうことであつた。

無論、綾と自身での持久勝負であつたなら身体の問題上ウレクが当然負ける。しかし、ラインフォースが相手となると話は別だ。止血は行われていても所詮は応急処置。危ない状態であることに変わりない。綾が先に出すのは時間の問題だ。

その時を待つ。待ち続ける。

「……………」

「……………」

「あの、早くしてくれませんか！」

「綾さんも、早よう切ってください！　もたもたしている暇なんてないんですよ!」

じれて苛立ったなのはとはやての声。こういった子供の考えが浅い言葉はウレクにとつては大助かりだ。

子供の言葉がウレクの動く理由になるなどありえない。しかし綾には一方的に早急な判断を迫られる。

ギャンブルは運だけの遊びじゃない。勝負として頭脳を使う。さらに状況次第で何でも使う。人質を使い、怪我人を使い、野次馬の子供を使い。そうして相手の弱さを炙り出し、仕留める。どんな手段を使つても勝ちを得る。それがウレクのやり方である。

（さあ出せ、さあさあ出せ！　待つても得はないぞ？　早く動かなければならないのはお前も理解しているだろ。雑音もうるさくなってくる。早く出せ。読まれるために出せ。そして負ける……!）

ウレクの念が通じたのか、沈黙していた綾がおもむろに動き出した。

右手で山を切り、パケットを作り出す。

（来た！　来た来た来た来たっ!）

四つの選択肢が完成し、ユーノはまた最初に切つて出てきたカードを掴む。

山が完成した。イコール、引くカードが固定された。後は、読めばいい。

「クククカカカカッ……！」

肘を付け、腕を杖代わりに机に乗り上げる。

間近まで近づき、綾の顔を舐め回すように観察する。

「どっちなあ。Aかなあ？ それともクズ手……いいや次点のKかなあ？」

「さあな」

「つれねえなあ。じゃあこっちも運に賭けてみようかなあ」

「好きにすりゃいいさ」

言葉で反応を伺うが、変わる気配はない。強い精神と優れたポーカーフェイスだ。

だが、時間をかけてしつこくこすれば、ポーカーフェイスという鍍金も剥がれ落ちる。

(剥がれた瞬間俺の勝ちだ。この上のカードを見透かして……)

ちらりと綾の山を見た。

その時。

(……あ！)

ウレクは見つけた。綾の、あろう事か鍍金のさし残した部分を。

(ああ！ 見つけた！ 勝った！ 俺の勝ちだ!!)

確信は顔へと伝わり、狂喜への変貌させる。

見つけたのは、カードの縁に付いた傷だった。

明らかに人為的につけられた傷であるそれは、カードを探すための目印であるガンを示している。

一枚だけを見てもただ目印がついているとしかわからない。しかし、今ここには他の『記録』があつた。

ウレクは視線を横にズラす。そこにあるのは、今まで綾が引き、戻さずに捨て札として重ねられたカード。一番上にはハートのAが置かれている。

ウレクはハートのAの縁をなぞるように見る。確証を得るにはこの一枚で十分だ。

そして見つける。山のカードと比べ、確信する。

（——勝った!!）

ウレクが注目したのは、ガンの位置だ。

ガンで重要なのはバレないことより、他との区別がわかるようにすることだ。この勝負では、AとKが混同することだけは絶対に許されない。

AとK、この二種類を確実に分別する方法とは、サイドとエンドで分ける方法だ。Aはサイドに、Kはエンドに。もしくはその逆も然り。

ハートのAのガンはサイドに付いていた。

そして、次に綾が引くカードのガンの位置はエンド。これですでに決定した。

(次に奴が引くのは、Kだ!!)

確信したウレクの行動は早かった。

最後のAを指で探し出し、切る。さらにそこから、なのはが自分でAを選ぶ仕掛けを作る。

使えるものは、何でも利用する。左手も、心理学も、なのはの立ち位置だつて利用物の対象にする。そうやってなのはを操り人形にする。

そして、

「さあ」

完成した。

「積みよ……!」

開いた左手を並んだポケットに向けて、カードに注目させる。

すでに、心理的誘導は始まっていた。

なのはの立ち位置はウレクの右側。ウレクは開いた手を左端のポケットに被せ、一時的になのはの視界から左端のポケットを隠す。

死角などによつて最初に見た物の数が制限されると、人は最初に見た範囲のみから物を選ぶ傾向にあるという。

これで、なのはの選択肢は三つに限定された。さらにここから言葉で制限を与える。

「どつから取ってもいいぜ？ 一枚だけのパケットを取ってもいいし、たくさん積まれたパケットを取ってもいい。勿論中間のだってありだ。だけどこれまで分厚いやつや中間のやつを取って、それがAだったりしたよなあ？」

他の選択肢には危険を孕ませる。さらに狙うパケットは印象がつきやすいように最初に、少しだけ強調する。そうしてなのはの選択肢を奪う。操り糸を絡ませる。

苦悩の表情を浮かべながら、なのはは選ぶ。

一枚だけのパケットを。

そこに仕込まれた、最後のAを。

（勝った!!）

確信は笑みとなる。

山が完成し、もう引くカードが変わることがなくなつてから嬉々とした表情と言葉を向ける。

「タカマチ・ナノハ、お前最高だよ。最っ高の、操り人形になつてくれた。お前のおかげで、俺はオリジナルを連れて悠々とここから出られそうだぜ」

「え……」

「こいつの次引くカードはKだ。Aとはガンの位置がサイドとエンドで違う。まあ、今

思えばてめえを操ること自体くじってクズ札掴まれる可能性もあったんだ。リスクのデカいところでAを出す訳なんかなかったのさ。んでもってなのはが持ってきたカードは……」

言いながら、ウレクは山から一枚引き、そして半回転して見せつける。

「お前のKを叩き潰すA。こいつで俺の勝ちだ……!」

タンと机上に叩くと一緒に勝利宣言。

周囲は焦る。焦りと不安を抱いた視線が綾に集中する。違っただけ。奴の推論が間違いであって欲しい。Kではなく、Aであって欲しい。

しかし、

「……いつ気づいた？ ガンがサイドとエンドで違うことに」

「綾さん!」

リンディが思わず声を出した。ウレクの推論が肯定されたため、つまりは敗北が決まってしまうためである。

「間抜けなこと、ついさつきさ。それもたまたま、お前が次引くカードを見た時にガンの位置を確認するって手段を思いついた」

「そうか……」

綾は天を仰いだ。



ウレクは自分の勝利がいよいよ確信となり、笑みをより濃くする。

「なら、残念だな」

「ああ、残念だったな」

綾は顔の向きを正面へと戻し、

「AとKを、サイドとエンドで区別してると思い込んだお前の頭がな」

笑ってみせた。

「……………あ？」

「え……………」

そこにいた全員が綾の発言に訳がわからないといった様子を示した。

ウレクも笑顔が凍っている。逆に綾はウレクに負けず劣らずの笑みを浮かべていた。

「さっき言ってたが、ガンのサイドとエンドの違いに気づいたのはついさっきってことは、ハートのAしか見てないんだろ？」

綾は重ねられた三枚のカード……………ダイヤ、クラブ、ハートそれぞれのAを手に取り、広げる。

「なら、見てみるよ。今、他のもきつちりとな」

「……………」

広げられたカードを一枚一枚見て、ウレクは目を見開いた。

三枚の内ハートを含む二枚は推測通りサイドにガンがついている。ただし、一枚だけ、クラブのAだけ、

「エンドにガンだと……………」

「ああ。ただ、お前のその推測はAとKを区別するための共通点があると仮定した結果  
だろ？　そこは間違っちゃいないぜ？」

「……………」

「もう気づいたか？　全部辺の端についているってことに」

そう、端であった。ハートのAは左辺の下端に、ダイヤのAは左辺の上端に、そして  
クラブは下辺の右端に。どれもコーナーギリギリの箇所<sup>に</sup>傷がついていた。

「俺達は元を辿れば同じ頭脳だからな。どんなものでも利用するとは思ってたぜ。ガン  
の位置にも気づくと思つた。それにお前が結構なDSだつて話を聞くし交渉でその度  
合いを確認したから、先に二勝して相手に精神的に追い込むやり方もある程度予想でき  
てたぜ。でもそうなればその間、相手のガンの位置なんて確認する気はないだろ。第一  
ガンなんて相手にわからないようにつけるのが基本だ。最初の内は意識しにくい」  
ハメられた。今になってようやく、ウレクはそのことに気がついた。

「さて」と綾は、余裕の笑みを浮かべて腕を組んだ。

「辺の端という共通点を持ち、かつ上下回転を考慮してガンを打つとどうやっても組み合わせは二通りしか有り得ない。かつ、三枚明らかになったから残るスペードAのガンの位置はお前も特定できただろ？ その上で俺の引くカードをもう一度見てみな」

言われるまでもない。特定はすでにできていた。

他のカードと被らないようにできるガンの位置は下辺左端。しかしこれは現在他の三枚同様に表である場合の話であるため、裏として考えると下辺右端、もしくは上下回転によって上辺左端しか有り得ない。

カードはもう確認するまでもない。先程確認した時に見た光景が脳裏に蘇っていた。

——こちらから見て、『上辺左端』に刻まれた爪痕が。

(クソツッ！ クソツッ！ クソツッ!!)

「スペードA。これでタイだ!!」

「——っ!!」

裏を読んだはずが、相手の完全な裏の裏返しを受けた。

二勝二敗。見事なまでの逆転劇に歓声が湧く。残るはあと一戦。それで結果が決まる。

だが、互いは理解していた。

片や、常にパートナーと結託状態。片や、現在パートナーに敵対視されている。言葉の操り糸は長くは使えない。

もう、四分の三は結果が見えていた。

## 第六十六話

コツコツという足音がする。

音の数は二名分。隣にいるのはつい先程勝負の重圧から解放されたためか、少し疲れた表情が残るユーノ・スクライア。何でも、ついてきているのは訊きたいことがあるからだとか。

「そう言えば、まだ言ってなかったな」

「何がですか？」

歩を止めることはしない。顔を向けることもしない。

しかし確かな感謝を込めて口にする。

「パートナー、お前がやってくれて助かった。おかげでこうやってここにいれる」

「いえ、ウレクの要求に従ってやらされたままで、大したことはしてませんよ」

「カットの積み込みの時、常に最初に切って出てきたカードを掴んでくれた。おかげで逆転に成功した」

「一巡目は適当に取ったんですけどね。……なのは達に魔法戦では適わないですけど、洞察力や注意力ではまだ負ける気はしませんから。遺跡調査ではどんな罠があるかわ

かったものじゃないですし」

「ああ。俺もそこを信じて正解だった」

「でも、ウレクはどうして五巡目の勝負を投げたんですか？ 二〜四巡目と同じように、なのは誘導してしまえば、まだ引き分けてそこから延長戦とか別の勝負を仕掛けることもできたはずじゃ……」

確かに、ウレクは五巡目の勝負を投げた。正確には、四分の一の確率にかけたと言った方が正しいか。なのはを言葉で誘導することなく、ただ普通に選ばせた。結果として俺は三勝二敗で勝つことができたのだが、ユーノはそれが腑に落ちないようだ。

俺は大体の理由に検討はついていた。

「心理的誘導にはいくつか弱点がある」

「弱点ですか？」

「二つは確実性がないこと」

当たり前の話だが、言葉による誘導は絶対ではない。ただ心理的に相手が自分の思い通りのものを選びやすくなるというだけだ。選択肢を消したはずがその消した選択肢のものを取ったというのは可能性としては当たり前に存在する。四巡目の時にウレクが俺のカードをKだと予測した理由でもある。

「二つ目に連続して効かせるのが難しいこと」

人間は学習する生き物である。

誘導されているという自覚がないならまだしも、ウレク自身がなのはを誘導していたという旨を伝えたのだ。警戒される。もつとも、世の中にはそれを上回る誘導というのは当然存在するのであろうが。

だがこれら以上に、この勝負という形の場合に存在する最大の弱点がある。

それは――

「そして三つ目。相手の介入によって誘導の成功率が大きく変動することだ」

「どういうことですか？」

「じゃあ例えば二巡目の話だ。あいつは与太話でデカイという言葉を多用してなのはに刷り込んだ。ここでもし俺が同じくらい小さいという言葉を使用していたら、お前はどれを選んだと思う？」

「え？……うーん」

「迷うだろ？ それがこの弱点だ。誘導先が簡単に変わってしまう」

大きく解釈すれば、心理的誘導の全てが刷り込みであると言える。より刷り込めばそれだけ誘導はしやすくなる。しかし、他からの刷り込みを受けた場合それは中和されてしまい、誘導に失敗してしまう恐れがある。特に今回のような形式では対戦相手に自分が何を引かせたいのかが感づかれる可能性も高いため、中和どころか全く別の誘導をさ

れる危険性もある。

さらには前述の通りウレクは自身でなのはを誘導していたと言ったため、別の刷り込みを受ければなのはは簡単に意志を曲げられてしまう。操り糸はもうなくなっていたのだ。

そのことも解説すると、ユーノもよく理解したように頷いた。

「つまり、下手に誘導を試みるよりは四分の一にかけの方が確率的には良かったってことなんですな」

「まあ、明らかに負ける確率の方が高いし、こうしてその確率通りの結果になったんだがな——つと、着いたか」

目的の扉を見つけ、そこで歩を止める。

「大丈夫なんですかね……」

「俺としては怪我の具合より、起きてすぐ歩き回って勝手に痛めてないかが心配だがな」  
適当にそう返し、扉を開くためにセンサーの前に立つ。

プシューウツ、という空気音と共に扉がスライドされる。

「うあつ!？」

「おっと」

バランスを崩したのか、扉の向こう側にいた人が倒れかかってきた。倒れかかる相手



の肩を掴んで受け止める。

「す、すみません。もう大丈夫……って、綾!?!」

「なーにしてんだか」

「ラインフォースさん……」

俺の顔を見て驚いている彼女——ラインフォースに対して呆れた声で言ってる。隣でユーノも呆れ顔になっている。

ふと扉の奥に視線をやるが、誰かがいる気配はない。シャマルは取り込み中、他の医務員も闇の欠片の掃討で負傷した局員の手当てでひっきりなしに動いている。加えてなのは達もマテリアルズやユーリなどの捜索に出張っており（はやては一時ラインフォースの様子が気になると言っていたが、渋々出ていった）、そうした中でラインフォースの元には誰もいなかったらしい。

「綾、奴は……ウレクとの交渉はどうなったのですか!?!」

「落ち着け、今話す。……まあ、ざっと言えばお前が気絶した後、俺とウレクはそれぞれ俺と情報を賭けて勝負することになった。結果として俺が勝って、これから情報を聞き出す。ウレクは崩壊した身体の治療をするために集中治療室にいる。こんなところだ」

現状はそんなところである。詳しく説明すると、勝負が終わってすぐにウレクの自動捕縛魔法を解除させ、ラインフォースとウレクはそれぞれの治療に運び出された。ウレ

クは崩壊した身体に治療は無意味と言ったが、治療で崩壊を止めることでは無意味ではない。

ちなみに崩壊を止めるだけなら別に医務室でもできたはずだが、リンデイさんは敢えて集中治療室を選んだ辺り、リインフォースがウレクと衝突するのを避ける魂胆があったのだろう。

「そうだったのですか。……あの、綾」

「ん？」

先程とは打って変わって、リインフォースは歯切れが悪そうな口調になった。

「その……あの時は、勝手な行動に出てしまって、申し訳ありませんでした……」

「……わかればいい」

シユンとした声に、溜め息をつきそうになりながらもそう言うておく。今回のことで説教すべきかと思っていたが、本人は反省しているみたいだし、追い討ちをかける気にはならなかった。

いつまでも肩を抱き止めているのも何なので、倒れかかっていた彼女を立たせて手を離してみる。しかし足の怪我が痛むのかフラついたため、やはり支えていることとなった。

「さて、もうそろそろウレクの治療が終わってるだろうし、話を聞きに行くんだが、リイ

ンフオースも行くか？」

「え？　しかし……」

「どうせ話を聞くなら、本人から直接聞く方がいい。仮に気に障ることを言われても、その手足じやとっさの行動はできないだろうし。それに一人ここに残して、また勝手に歩き回られて倒れたりされても困るからな」

う、と小さな唸り声が聞こえた。

リインフオースは落ち込んだように少しだけ俯いて、それから気を持ち直して答えた。

「……わかりました。私も行きます」

「わかった。じゃ、さっさと行くぞ……つと！」

「へ……ひゃあ!？」

リインフオースからは似つかわしくない悲鳴が漏れる。そして、彼女の顔が赤くなる。

俺が何をしたのかと言うと、リインフオースを後ろに倒れさせ、実際に倒れてしまう前に膝裏と肩に手を入れて抱え上げる……まあ早い話、お姫様抱っこである。

しかしお姫様抱っこって、古代ベルカの人でも恥ずかしいと思うのだろうか。とか、お姫様抱っこは古代ベルカの時代から存在するのか？　あ、そうか。リインフォー

スの場合、確か非覚醒状態でも夜天の書を通してものを見る事ができるから、結構近代の文化も見ているのか。記憶の完全保持はできないといっても経験的な記憶はあるのだから、お姫様抱っこが恥ずかしいという知識もあるのか。もしくは主がはやてとなつてから新たに知つたのか？ まあどうでもいいや。

「綾さん、大胆にやりますね……」

「つつても、足の怪我があるリインフォースを歩かせたら時間かかるだろ。おぶつてやるつて言つても遠慮しそうだし。だから無理やりこうして抱える方が手っ取り早いんだよ」

「だからつて何の躊躇もなくそんな抱え方ができる人はそういませんよ」

知つたことか。

「じゃ、このまま行くぞ」

「あ、あの、綾。その……重くは……」

「ない。仮にそうだったとしても、強化魔法使えばいい話だ」

スパツと言いつつ、リインフォースを抱えたまま目的地に向かつて歩き始めた。



集中治療室の扉を開け、中へと入る。

「よお、お熱いねえ。見せつけてくれるじゃないの」

「言ってる。それより、椅子はないか？」

ウレクののからかいを軽くあしらひ、近くの椅子にリインフォースを降ろす。

現在この部屋にいるのは、今入ってきた俺達三人を除いては海斗達チームメイト三人に才、ウレク、シヤマル、リンディさん、そしてクロノ。

「綾、遅くなつてすまなかつた。任務中に海鳴市で事件発生と聞いてつい先程ようやく戻つてくれたんだ。現状がどうなっているかは艦長からすでに聞いている」

「そうか。俺達が来るまでの間に、ウレクは何か言つたか？」

俺がそう尋ねると、クロノは首を横に振つた。

「もうすぐ綾が来るだろうと言つて、君が来るのを待つていたよ」

「そうか」

だろかなとさらに心の中で呟く。

あいつがここに来た目的は俺にある。なら、一番に話しておきたい相手も俺だろう。

壁に背中を預け腕を組む。そうしてから視線をベッドの上にいるウレクへと向ける。

「気分はどうだ？」

尋ねると、ウレクは左腕の肘から先だけを上げ、手のひらを上に向け、おどけたような動きをしてから答えた。

「あまり良くないな。結構な時間かけたせいで、かなりのデータが流失した。重要なデータは無事だが、身体能力データや、特に魔力の方はかなりの重傷だ。元はSSは下らねえはずだったんだが、今ではA……しかもニアにまで落ちてらあ」

「情報は？」

「安心しな。それならちゃんと残ってる。お前さんも来たことだし、ちゃつちやと話すとするか。あ、録音するならしつかり録れよ？」

そう言ってからウレクは一旦黙る。録音を始める猶予を与えているといったところか。

時間にして約十秒。そしてウレクの口が再び開かれた。

「さて、話す順番なんだが、俺が勝手に決めてもいいよな？　というか、そうさせてもらうわ。まずはユーリの現状についてだ。最初に言っておく、今のユーリは欠陥品状態だ」

「欠陥品……だと？」

クロノの呟きを聞いたウレクは「そうとも」と言った。

「あいつは、昔はちゃんと感情があったんだがなあ。エグザミアっていう、システムU—

Dの核に取り込まれて、エグザミアの暴走によって何度も世界が滅ぼしていった。メモリーが壊れてるから正確に思い出せないんだが、確か闇の書の力を使ってエグザミアを掌握しようとか考えた馬鹿がいて、それでユーリやそいつを取り巻くマテリアル達が闇の書に吸収されたんだっけか？」

「だが、私にはシステムU—Dのことなど記憶にない。それはどういうことだ」

ラインフォースが尋ねた。敵対意識はあるようだが、身構えている様子は見えないところから、多分問題ないだろうと判断する。

「んなの、全記録からU—Dについて抹消したからに決まってんじゃない。ついでに言えば闇の書からU—Dに繋がる道も全部潰された。だから闇の書が中身ぶちまけることがない限りは、本来マテリアルもU—Dも起きることなんて有り得なかったんだよ——まあ、それについてはどうでもいい」

ウレクは咳払いして、逸脱してしまった話を元に戻す。

「起きれば自分の意志に関係なく破壊、制御はことごとく失敗、それでもって挙げ句の果てには闇の書の深奥に隔離封印。そんなことで、絶望ばつかのあいつはどうとう自分の感情を棄てるという行動に出ちまったのさ」

「感情を棄てるって、そんなことができるのか？」

「できるぜ」

ウレクは海斗にそう断言した。

「エグザミアに取り込まれた時点で、あいつはプログラムじゃん。ただの文字の羅列なんだから、棄てるのは簡単だぜ？　なあ？　お二方？」

「……………」

「それで？　感情がないからどうだつてんだ」

「問題なのは感情があるかないかじゃない、欠陥があるかないかだよ。どんなものだって穴が空いてりゃ、そこからどんどん壊れてく。それが結構問題なんだよ」

「どういう風にだ？」

また海斗が訊いた。

「ユーリを救出するにはエグザミアを一時停止し、そこに正常化させるプログラムを流し込む必要があるってのが俺の考えなんだが、エグザミアを一時停止させるには飽和攻撃を撃ち込むのが有効だ。だが、そんなことすりゃユーリの駆体は穴からヒビ入ってパーンだ。しかも厄介なことに、駆体は吹っ飛んでもエグザミアが壊れることはない。粉微塵となった駆体と共に拡散したエグザミアはいずれ集結して欠陥状態のユーリと共に元通り。そして無限ループだ。いや失礼、無限じゃねえや。お前らが力尽きてドボンだ」

「なら、どうすればいいと君は言うんだ？」



「穴が空いててダメだってんなら、穴を塞ぎやあいって話さ。穴に元の感情を組み込んで、それから飽和攻撃を撃ち込めば粉微塵になることもあるめえよ」

「その、ユーリの感情とやらはどこにあんだよ？」

末崎の質問にウレクさニヤニヤと、ケラケラと笑った。

「……何が可笑しいんだよ」

ウレクのその笑いが気にくわなかったようで海斗が食ってかかった。

俺は……何も言わない。大体の予想がついてきた。

「……ユーリ・エーベルヴアインは自らの感情を棄てた。棄てた感情に一部データもくっ付いたが、まあそれは置いとく。棄てられた感情はしばらく闇の書の中を漂っていたが、闇の書が壊れた時にマテリアルズやU—Dと共に外へと放り出された」

放り出された感情は形のないプログラムであるため、そのままでは消滅していつてしまふ。生き長らえるためには別のプログラム生命体の感情として組み込まれる必要があった。しかし本来の居場所であるユーリはU—Dが非起動状態であるため入れない。

そこでその感情が目をつけたのは、同じ残骸プログラムである欠陥品……つまり、闇の欠片というところか。

「放り出された感情は闇の書の残骸をかき集め、ある天才を素体にして一つの個体を造り出したんだが、迂闊なことに寝ぼけてて、U—Dがまだ闇の書の中にあると勘違いし

てその主と管制人格を強襲。精神的にあと一步のところまで追い詰めはしたものの、ヴォルケンリッターによってぶつ飛ばされて消滅……しかし何の因果か、蘇つて来たそいつは、目覚めたユーリに勝負を仕掛けて彼女との接続を試みるが失敗。右腕と右目を欠損する大怪我を負った」

ここまで言われれば、もういい加減全員が気づくのも訳がなかった。

そもそのことを言えば、マテリアル達でも知り得ないU—Dのことを知っている時点でわかる話だった。U—Dに一番近い立場である三人が知らずに彼が知っているとなれば、それが成り立つのは一つしかない。

「感情は諦めず、ユーリに組み込まれるために必要な駒集めを始め、自分の今の身体のリジナルとの勝負に負け、こうして今、この集中治療室にてお前らの目の前で話をしていく」

それは……本人であるということだ。

自分が使う訳にはいかない名前があるとこいつは言っていた。それも今納得と理解をした。

その名は——ユーリ・エーベルヴァイン。

「俺が、ユーリの部品感備なのさ」

## 第六十七話

「——姉妹機による妨害を確認。このまま殲滅を続行します」

「お姉——」

「させる……もんですか……ヴァリアントザッパー！ オーバーブラストオオオツツ  
!!!」



「なんだ!?! 爆発っ!?!」

魔力の揺れを感知して駆けつけた、シヤマルを除くヴォルケンリッターの三人。

遠く先の空中で突如起きた爆発に、ヴィータはとっさに身構えた。

「熱と物理破壊を伴っているな……威力は主達のトリプルブレイカー並——いや、それ以上か」

そう分析するシグナムは平静を装っているものの、自分が目にしている威力に顔が少し強張っていた。

爆発が収まっていく。その最中、ザファイラが気づいた。

「む」

「？ ザファイラ、どうかしたのか？」

「転移反応だ。あの爆発の真上に誰かが来る。一人——いや、一つの身体に二人分か……？」

「……って、それ、ユニゾンしたはやてなんじゃねーのか!？」

「まずい！ 直ちに主はやての援護に行くぞ！」

ヴィータとシグナムは慌てて爆発の地点へ向かおうとする。

一つの身体に二人分の反応というのは、融合しているからに他ならない。となると、可能性として一番高いのはリインフォースとユニゾンした状態のはやてである。もう一つ、トーマとリリイも融合型であるのだがわざわざ戦闘現場の真上に転移する理由がない。

しかし焦る二人に対して、ザファイラは冷静に、そして疑問を持った目で転移地点に視線を向ける。

「いや——我が主でもリインフォースでもない……誰だ？」

とにかくは急行する二人に加わるのが先決。ザファイラは二人に追いつくために飛翔速度を上げた。



落ちてる感じがする。

重力の枷に捕らわれ、蹴るものがないため移動も許されず、自由落下の法則に従って速度を上げながら落下している。体とバリアジャケットに変換されている衣服の間、空気が入って服が捲れ、髪は見えないが逆立っているだろうと予想がつく。

このまま落ちていけば、海に叩きつけられる。高さ的に考えて、その衝撃は洒落にならない。今までの自分ならそうなるだろう。

だが、今の自分は違う。

『さ、行こうぜ。相棒』

「ああ」

左腕から脳内に振動してくるような声に応える。

真下には目標がある。それを見据えたまま、柄も鍔も刀身も真つ黒な刀——『黒刀』をくろがたな逆手持ちの状態で握り締め、振りかぶる。

目標まで五メートル。

三メートル。

二メートル。

一メートル。

——振り下ろす！

ガキンツ!!

鳴つたのは肉に突き刺さる音ではなく、硬い金属に弾かれたような音。

事実、弾かれた。目標の背中から生えた翼から出てきた赤黒い装甲が、こちらの剣を妨げている。

(気づかれた……!)

「接敵確認。排除開始」

「くっ——!」

すぐに装甲を蹴りつけて間合いを離す。自分のいたところを赤黒い手の爪が引き裂いた。

己を支えるものを失い、再び落下を始める。

叫ぶ。

「ウレク!」

『わあつてるよ。——墮翼、展開』

直後、炎のように揺らめく真っ黒い翼が、背中から生える。

墮翼と呼ばれた翼が羽ばたくと身体が持ち上げられ、落下のエネルギーと相殺されてその場に静止した。



「俺とお前でユニゾンする……だど？」

少し前に遡る。

ウレクの話がユーリを止める方法へと移り、その内容に俺は疑問符を浮かべていた。

「おう。まあ正確に言えばユニゾンとは言えないだろうが、融合という意味ではその通りだ」

ウレクはそう答えて続ける。

「さつき説明した通り、ユーリを止めるためには今俺が所有しているユーリの感情プログラムをあいっくに組み込まなければならぬ。そしてプログラムを組み込むには俺のデバイス『黒刀』であいつの身体と『接続』する必要がある。だが、今の俺の状態は見て、さらに先程言った通りだ。この状態で戦闘をしながらインストールするつてのは無理。そこで、だったら表での戦闘は別の人に頼んで、俺はその人の中でインストールに集中しようって訳さ。これならインストールにかかる時間も短縮可能だぜ」

「そもそもお前、融合できるのか？」

「俺の基礎構造が闇の欠片だったのが幸いした。寄せ集めた断片データの中に融合システムもあるから、そのデータを弄って使えばいけるぜ」

「待て。それで綾が選ばれる理由がわからない」

「確かに、僕もそれについて訊きたい。綾はお世辞にも戦力が高いとは言いにくい。なぜその彼を融合対象にするんだ？」

リインフォースとクロノが質問する。

ウレクにもちゃんとした理由があるのだろうが、クロノの言う通り俺を選ぶ理由が不明だ。剣士ということであればシグナムがいるし、融合適性という面であればマテリアルズでもいけそうな気はするのだが。

「適性の問題さ。俺は管制人格めいじゃねーんだ、適性の範囲が大きくズレる。そういう問題でまず闇の書の奴らは除外される」

「だが、それならマテリアル達が——」

「てめーの集めたデータが邪魔なんだよ。今の俺の駆体構造は大部分が朝霧綾だし、他の余計なデータも混ざってる。マテリアルズはそもそもは闇の書とは別物、溶け合う訳がねえ。やりたくてもできねえよ」

そう答えてから、ウレクは俺の方を目を向けた。



「だからこいつさ。俺とオリジナルの基礎構造は同じだから、融合はまず間違ひなく成功する」

「しかし、綾はお前と違って空戦はできない」

「んなもん、俺が翼になりやいいさ。もしくはお前達がユーリを誘導すりやいいだろ？」

「だが——！」

「リインフォース、少し落ち着け。……質問がある」

熱くなり始めたリインフォースを一旦落ち着かせ、俺はウレクに訊く。

「あん？」

「俺とお前が融合した場合、俺の能力は欠損前のお前を超えることはあるのか？」

「ああ安心しろ。ありえねえに決まってるじゃん」

即答。

ウレクは続ける。

「戦闘技術も思考能力も同じ。魔力は圧倒的にお前の方が低い。加えてお前は身体が一部欠損状態。これらが融合一発で完全体だった時の俺に適うなんて天地がひっくり返ってもありえねーから。強いて言うなら思考の方向性が俺とお前で変わるだけさ」

「そうか」

「そうかってお前……それじゃあ勝てねーじゃんか」

「いや、完全な劣化ではないことが最後の言葉で証明された。こつちにはアースラのみんなもいる。可能性はあるさ」

「綾……ですが!」

「それに、今のウレクが行っても、それこそ勝ち目はない上、死なれたりしたらユーリを停止させる方法そのものが消える。これが確率的に一番であり、これしかない」

「物分かりがいいねえ。さすがはオリジナル様だ」

「……だが、まずは安全性の確認を」

させてもらうぞ。と言う前に、アラート音が遮ってきた。

喧しい音の中、リンディさんの目の前にモニターが表示される。モニターにはエイミイの顔が映し出されていた。

「何があったの?」

『海鳴市海上で、未知の魔力反応を複数確認! 捜査対象であるユーリ・エーベルヴァイン、アミティエ・フローリアン、キリエ・フローリアンのものと思われます!』

「だってよ。ちよいと腕出しな。両腕だ」

そう言うウレクの左手には、転移魔法で取り寄せたのか没収されたはずの黒刀があった。言われるがままに手を出すと、まず右手に黒刀を持たせ、そして左腕をがっちり掴ん

できた。

「さっきも言ったが、俺がやるのはユニゾンじゃねえ。正確には俺の中にあるユニゾンシステムの不足データを闇の書の侵食能力で補った、身体の一部に取り憑き、取り憑いた箇所の操作権限を強奪しちまう、名付けるなら『侵食融合』。なに、融合すること自体に危険性はないし、融合中の操作権限もちよいと手え加えることで返してやれる」

左腕が黒く染まり始める。途中からゾワリ、ゾワリと這い寄ってくるような悪寒を神経が感じ取った。

同時に、俺の足下に魔法陣が敷かれる。塗りつぶされたような真っ黒い魔法陣はウレクのものであった。

「っ、ウレク！ 貴様、綾に何を!!」

「さ、まずは侵食融合とユーリとの実戦、これらの体験コースを受けてもらおうとすっか」  
視界が一時的に真っ白になり、次の瞬間、目の前の光景は夕焼けの空になっていた。



状況を整理する。

現在、俺はウレクと融合してユーリと対峙している。

俺の変化は、まず侵食を受けて左腕が黒く、禍々しい鎧を着けたような姿になっている。背中も侵食を受けた感覚があるので、多分似たようなことになっている。しかし左腕はちゃんと、自分の意志で動かせる。

得物はそんな左腕で持っている黒刀。腰には一応レイピアも差している。

背中からは墮翼というらしい翼が生えている。曰わく棄てられた部品と共に流れ出てしまったエグザミアのデータを元に再現したものだとか。背中まで融合している理由がこの墮翼を操作するためらしい。

対するユーリは、映像の時と同じ姿のままであった。

確か海斗の話だと、色彩変化と刺青のような模様が体中に現れる暴走状態なる姿があるという話だが、まだ安定しているのだろうか。

いや、違う。

(暴走のトリガーとなる感情がそもそもないから、か)

だがそれは安心にはならない。安心してはいけない。

暴走する感情はないが、逆に己を抑制する感情もない。自分の行動の全てをエグザミアに任せてしまっている。言ってしまうえば、平常モードで暴走レベルの出力を出している可能性がある。

これで大体の状況は把握した。後は如何にして相手の攻撃をかいくぐり、接続を果た

すかだ。

『いいか』

俺の内側からウレクが話しかけてくる。

『あいつの身体のどこでもいいから、黒刀で刺すんだ。そしてその状態を保ち続ける。その間にインストールすつからよ』

「インストールにはどれくらいかかる？」

『そうだな。……短くて一分か？』

一分……正直に言って、一分は厳しい。

そもそも、U—D相手に接続だけでも厳しい話だ。それを一分も続けるといふのは、はつきり言って無理がある。

『ま、無理つつつてもやるハメになるがな！』

「つ！！」

急速接近からこちらを引き裂きに來る爪を下がつてよける。

今度はすくい上げるように魄翼の爪を振り上げて來たので、身体を反らして間一髪で回避……いや、皮膚が少し裂けた。

攻撃直後の僅かな隙を逃さずにユーリの顎を蹴り上げる。硬い。効いてる様子も見られない。

黒刀を振るう。ユーリの手のひら程度まで圧縮されたシールドに阻まれ、弾かれた。左腕を掴まれる。左腕を掴んだ手を支えに跳ね上がり、蹴りを側頭部に叩き込んだ。た。

結果、吹っ飛んだ。

「ごはっ！」

ユーリの見ただ目からは想像のつかない威力によって吹っ飛ぶ。おい、どうなってんだこれは。

『当然だろ。ユーリはその存在をエグザミアに依存しているんだぜ。見た目と性能はもはや別物だ』

「ああ、そうかよっ！」

墮翼の羽ばたきでその場で停止する。

さつきからウレクはちよくちよくこちらの思考を読んだような発言をしているが、融合によって思考が共有化されているらしい。相性がいい程思考の共有化もより細かいところまで可能となるようだ。

それはそうと、つまりユーリの能力全てがエグザミアが設定したものになっている。あの姿で、ただのパンチやキックで岩を粉々にすることだって、数値を弄れば可能ということだ。

最悪だ。ユーリを上回ってると思っていた貴重な要素、身体能力が蓋を開けて見れば圧倒的に負けと来た。

後はもう、頭脳で上回る他はない。

「ヴェスパースプラッシュ」

ユーリが手をこちらに向けてくる。

「ウレク」

『おうよ』

呼ぶ。応える。思考がわかるからこれだけで十分。

墮翼を飛ばたかせ、猛スピードで後退する。加えてウレクの魔力を借りて誘導弾を生  
成。数は五発。

リング状の弾幕が拡散しながら来る。

大きく迂回するように回避しつつ、魔力弾五発のうち四発を発射。

弾幕を潜り抜け、四発はユーリの身体に直撃。だが、効いていない。防御も回避もし  
なかつたのは、そうする価値がなかつたかららしい。

正確な認識だ。だがその判断は間違いになる。

弾幕を抜け、残しておいた一発を飛ばす。ユーリは避けることも防ぐこともせず、直  
撃。

破裂した魔力弾から、大量の煙がユーリを包み込んだ。

『煙幕弾、正常作動』

魔力製の煙が拡散していく。

これでユーリの視界が闇へと変わった。魔力を視覚化させても、魔力でできた煙が邪魔になる。あいつがシステムに全てを委ねている現状なら、取りあえず動こうなんて考えは持たないはず。

またウレクから魔力を拝借し、右手に灰色の炎を溜める。使うのは、ウレクがいつの間にもやら手に入れていた理のマテリアルの魔法。

「ディザスターヒーロット！」

砲撃三連。それが煙の塊を突き抜ける。

そう、突き抜けた。

「……!?!? いない!?!」

『上だ!』

「!」

確認するより先に黒刀を盾にする。

直後、魄翼により形成された腕と黒刀が衝突し、衝撃ではじき落とされる。

「ぐっ!!」



奇襲失敗。それどころか煙に紛れて転移で頭上から仕掛けられた——その情報だけ処理しておき、態勢を立て直し、魔力弾を生成する。

一発は高速直進する狙撃弾。誘導弾は三発。誘導弾は高密度魔力で生成。まっすぐ、ユーリに狙いを定める。狙う箇所は、視界を潰すため顔面。

「行け！」

号令を受けて狙撃弾が飛ぶ。百メートル近い距離を一瞬で駆け抜け、彼女の右目に直撃した。

誘導弾を三方向に飛ばす。

「エターナルセイバー」

ユーリは赤黒い炎のような巨大な魔力剣を右手に作り出す。

身の丈を悠に超える剣を軽々しく振るい、魔力弾が打ち消される。剣を振るった時の隙を逃さず、レイピアを抜き、飛び込む。

——二刀同時に突く！

ギインツ！

「っ、邪魔だなこの腕！」

両方とも魄翼の腕に阻まれた。

距離を取る——のは得策じゃない。詰めることができたんだ。このまま続行するべ

きだ。

接続を試みるべく魄翼の腕を駆け上がり、そして黒刀を――！

ガアンツ！！

「……………っつ！！」

駆け上がった直後、エターナルセイバーの縦一閃が襲いかかってきた。

なんとか二刀で防ぐことはできた。が、重過ぎる。魄翼の腕を足場に立っているので精一杯だ。

「エターナルセイバー、追加工成」

ユーリは空いてる手にもう一本の魔力剣を作り出す。まずい……………！

一本を受け止めて踏ん張っているのに精一杯な俺に向け、今度は横に斬りかかる――。

「おおおっ！！」

俺の視界に突如入り込んだ蒼い影。雄叫びと共に割り込んできたそれはバリアを展開し、魔力剣を受け止めてみせた。

「綾、無事か！」

「ザファイラ！」

「はああああっ！」

「どりゃあああっ!!」

ユーリの背後からシグナムとヴィータが獲物を振り下ろす。ガアンツ! という重い音が鳴り二人の武器が弾かれる。弾かれはしたが、ユーリの態勢も崩れた。

その瞬間を逃す手はない。前のめりになったユーリの肩に黒刀を突き刺す。

「……………」

「ウレク! インストール急げ!」

『わあつてるよ!』

「シグナム! ザファイラ! こいつを取り押さえててくれ!」

「わかった!」

「心得た!」

シグナムとザファイラに頼み、ユーリの両腕を締め上げて固定させる。

いけるか……………?

「……………」

ユーリは一瞬黙り込んだが、周囲をぐるりと見回して、呟くように宣言した。

「オーバーアシストプログラム、起動」

直後。

膨大な魔力放出によって俺達全員が吹き飛ばされた。

「うおっ!？」

『やべえ……! おい! とつとと引け! こいつはさすがに——』

金色と赤の軌跡が一瞬見えた。

それが何かを理解するよりも早く、俺の両腕が切断されていた。

## 第六十八話

『オーバーアシストプログラム、起動開始』

綾の両腕が切断される直前に自身の核を綾の背中に移動させていたウレクが宣言した。

直後、綾の姿が消えた。シグナム達が見えるのは赤黒い炎の軌跡と黒い残像、そして落ちていく二つの腕だった。

そしてその二つの腕も突如姿を消した……と思った次の瞬間には、切断されたはずの両腕をつけた綾の姿が見えた。対峙する形で、十数メートル先にはユーリの姿もある。

荒い息をしていた綾が突然、ゲロツと胃の中の物を吐き出した。吐瀉物の中には多量の血が混ざっている。

「ゲホツ、ペツ……チツ、さすがにこいつの身体じゃ、負担がデカいか」

そう言う綾——否、綾ではなくウレクであった。

侵食融合を全身に張り巡らし、黒く禍々しい鎧に身を包んでいた。頭部に鎧はないものの、ウレクの金髪がメッシュとして入っており、左目も血のように赤いウレクのものになっている。

ウレクはユーリの様子を窺う。すでに黒刀は抜けている。ユーリは以前同様、僅かにも流し込んだプログラムが影響しているのか頭を押さえていた。

「正体不明のプログラムが侵入。身体障害を確認——」

（本来ならチャンスつてヤツなんだが——）

転移魔法で黒刀を取り寄せ、右手に取る……が、握力が定まらず、ガタガタと震え、しまいには落としてしまう。

（——引き際だな。体験させるっつー目的は十分か）

ウレクは改めて転移で黒刀を鞘に納め、ユーリが飛び去っていくのを見送った。

「朝霧、無事か！」

「あなた、その姿なんだよ!? そもそも飛べないんじゃないのか!?!」

シグナムらが集まってきた。今のシグナム達は綾が腕を切断されたはずであること、綾の姿そのもの、そして綾がここにいる理由など、訊きたいことが色々あった。

ウレクはニカツといつもの自分の笑みを浮かべ、言った。

「おう、三ヶ月ぶりかなあ。闇の書の騎士ども」

「……!? お前は一体——貴様、あの時のマテリアルか!」

ウレクと気づいてからの反応は早く、三人はすぐに臨戦態勢に切り替わる。

しかしウレクは慌てず、軽く両手を上げた。

「おっと待て待て。今は味方だぜ？」

「信じられつかよ、そんなこと！」

「信じる信じないは別として、この身体は朝霧綾のものだ。武器を向けるのはよろしくないと思うぜ？」

「くっ……！」

シグナムが悔しそうに歯噛みする。

相変わらず他人の苦しむ表情を見て嬉しそうに笑いながら、ウレクは言葉が続けた。

「アースラに戻ろうや。話ならいくらでもしてやるよ」



「気分はどう？」

「正直全然よろしくないです」

リンデイさんの質問に対して、俺はそう即答した。

侵食融合を受け、ユーリに頭を蹴り飛ばされ、腕を切断され、ウレクに完全に乗っ取られ、やっと解放されたと思ったら全身の激痛と凄まじい吐き気に襲われ。はつきり言つて、ボロボロである。

現在は医務室のベッドで、上半身を起こしてリンデイさんと話をしている。

ウレクは現在俺から離れていた。俺が手当てを受けている間にみんなに説明の続きをして、今は誰かの監視下に置かれていると思う。

「腕は大丈夫？」

「握力や腕力がまだ戻りきってないことを除けば」

二の腕のあたりで切断された両腕だが、早く接合したことが幸いしてなんとか無事。シャマルによる回復も加えて大体は治った。それでも握力、腕力ともに完全に戻っておらず、しばらくは安静にするべきだと言われたが。

俺の回答を聞いて、リンデイさんは「そう」と安堵したように息を吐いた。

「みんな心配したのよ？　もう会った？」

「何人かすでに来ました」

その何人かとは大体転生者達なのだが、その中にリインフォースが混じっていた。というか、一番に来た。

必死の様子で無事を確かめに来て、腕は完治できると知ると気が抜けたようにへたり込んだ。目に涙も浮かべてた。

心配してくれているというのわかるが……いや、ウレクが起こしたこととはいえ、一人で無謀な戦闘を行った俺が悪いと言うべきか。



——それはともかく、だ。

「ウレクから、何か絞り出せましたか？」

「ええ。ユーリが持つている、いわば最終手段——『オーバーアシストプログラム』。あなたも一応見たと思うけど」

ああ、見た。ついでに食らった。

そして大体の検討もついた。

「膨大な魔力放出にこちらが感知しきれないほどの異常速度——俺が知る限りでは、プログラムを書き換えによる過剰強化といったところかと」

俺の推論に、リンデイさんは頷くことで肯定した。

「ええ。大体そんなところよ。『エグザミアは壊れない』という性質からユーリの魔力、駆体強度、身体能力、さらには五感までも異常強化を行う代物。ウレクはこのプログラムを綾さんが『死なない程度に』調整して使ってたそうよ」

ウレクが身体操作の権限を一時全部乗っ取ったのは、俺がそれを扱うのが難しいというとか、あるいは俺では耐えきれない負担を侵食することで身代わりとするためか……または、両方か。

しかし、それ以上に問題なのは、

「リンデイさん、ひよっとしてそれ、今のユーリの場合」

「ええ。ウレクの証言では、今のユーリが酷使した場合には身体が耐えきれず崩壊する可能性があるらしいわ」

……余計に厄介になってきた。

性能強化も脅威だが、自壊する手段も持っているということがさらに面倒にさせている。

感情がないのがまだ救いか。自ら壊れようとする頭はないだろう。ただし、自壊のリスクを考えて思いとどまる頭もない。アプローチが長引けばユーリは勝手に壊れてしまい、壊れたら再構築され、今までの苦労が水の泡。それどころか対策されるだろうか。成功率が格段に落ちる。最悪もう止めることができなくなる。

まあ、元々何度も仕掛けられないとわかっていたから、接触できる回数が減ったぐらいのものとも言える。それが問題であるのだが。

「……………他には？」

「以上よ」

他に追加情報がないと聞き、俺はため息をつきながら頭を抱えた。勿論、腕に負担はかからないように注意はしている。

とにかくそのオーバーアシストプログラムが邪魔だ。戦闘能力はともかく五感まで強化されては奇襲の成功率が極端に下がる。発動前に奇襲を成功させたとしても、今度

は一分間接続を維持する必要があるのが難点だ。今回のように吹き飛ばされる。

どうしたものか思考の海に浸かり始めたところで、リンデイさんが俺の両肩を押さえて横にさせた。

「対策を考えるのもいいけど、今は安静にしてなさい。まずは腕を本調子に戻さないとね?」

「……了解」

「あら、意外と素直」

「元々素直ですよ」

「ダウト」

否定された。過去の行いから言い返せないのが悔しい。

「じゃあしばらくは私達に任せて、ちゃんと寝ているのよ? あなたは何かと怪我とか気にせずすぐに飛び出すけど、そこは直さないと大事な時に動けなくなるわよ?」

「あなたは保護者ですか」

「一児の母よ。何か問題ある?」

「そうだった……とにかくわかりましたから、持ち場に戻ってください」

「ええ。そうするわ」

リンデイさんが医務室から出て行くのを見送ってから、ため息を吐く。

見舞いの人も医務員もいない中で、口を開く。

「……そろそろ起きるか？」

独り言ではなく、呼びかけるように発した言葉。

それから数秒して、隣のベッドからもぞりと身体と布団がこすれあう音が発せられた。

首を向けると、見た感じ今の俺より一つか二つほど年上であろう赤髪の少女の瞳がこちらを見つめていた。

少女——アミティエ・フロリアンは困ったような笑みを浮かべた。

「……バレちゃってました？ 寝たふりしてたの」

「寝たふりっていうより、寝ている間に会話が聞こえたから起きなかつたんじゃないのか」

「……なぜ、そのことを」

「人間じゃ耐えきれないような超威力の技使えるくらいだから、多少便利な体質にしてるんじゃないかってなんとなく思った。その様子じゃ当たりなんだな」

「……はい。寝ている間に何かが起きたとしてもすぐ対応できるように、博士に改良してもらったんです。オーバープラスや他の機能も含めて、私とキリエを人間として育ててきた博士はそういう改造はしづらなかつたんですけどね」

懐かしむように言って、それからアミティエがベッドから起き上がった。

「ご迷惑をおかけしました。それではこれで——」

そのままベッドから降りようとして、しかし身体が上げた悲鳴に身を縮める。

「腕は繋がってるし、胴体の穴も塞がってるとは言え、かなりの部品が欠損しているはずだぞ」

「こ、これくらい大丈夫です……それに、いざというときの修復機能だつて……」

「お前のデバイスも半壊状態でメンテナンスルーム行きだ。場所わかるのか」

「う……」

アミティエが止まった。

しばらくして、彼女はこちらを首を向けてきた。

「……場所を、教えてくれませんか」

「口頭じゃわからんだろ。説明も面倒だ」

「だったら、ご同行を……」

「見つかった瞬間二人仲良くリンデイさんの怒りの餌食になる。俺は御免だ」

「なら……」

「実力行使もやめておけよ？ ナースコールという最強の武器があるから」

「なんでわかるんですか……!!」

そういう気配がしたから。

がつくりと肩を落としたアミティエは、しばらくして諦めたらしくベッドに入り直して、それから声をかけてきた。

「……あの、私はアミティエ・フロリアンと言います。愛称はアミタです。えと、あなたは……」

「ああ、まだ言っていなかったな。俺は朝霧綾。呼びやすい方がいい」

「じゃあ、綾さんで。……綾さん、私がいつでも起きられるとわかって、どうして人がいなくなってから起こしたんですか？」

「わかってたって言うっても、勘の領域だったからな。ミスって醜態さらすのは御免だ」  
それと、と俺は続けた。

「休んでる間の暇潰しとして、話し相手が欲しかったからな。どっちかって言うところちがメインだ」

利己的なその理由に、真面目に聞いていたアミタはまたがつくりと肩を落としていた。



パアンツ、と闇の欠片の頭が撃ち抜かれる。

長杖をライフル銃のように構えていた由衣は、霧散する闇の欠片を見届けた後に「はふう」と息を吐いた。

「お疲れ」

そう言つて由衣に近づいたのは海斗だった。

近づいてきた海斗に、由衣はすぐに姿勢を正して応える。

「あ、はい。お疲れ様です」

「は……！」

海斗に続いて戻ってきた末崎は強く息を吐きながら背筋を伸ばす。

「そろそろチップ二個分いったんじゃないか？」

「えーと……」

「いや、まだこれで二十三体。あと一体だな」

海斗の質問に答えたのは末崎であった。それも即答である。

「……お前、どうしてそんなに早く答えれるの？」

「い、いいじゃねえか！ 数を把握できるのは便利だろ!？」

「まあ、そうだけだよ」

「それにしても、今回は変わってますよね。指令が追加されるなんて……」

由衣が漏らした言葉に二人は言い合いをやめ、話題がそれに変わる。

それは少し前……綾がユーリとの戦闘から戻り、ウレクによる説明を受けた後からきた神からの指令であった。

差出人：管理者

件名：指令5

内容：

指令4参加者に通達。

次の指令を指定期間内に実行、達成せよ。

指令内容：システムU—Dの暴走を止めよ。なお、U—Dの攻撃を受ける度にスターチップを二個剥奪される。

期間：碎け得ぬ闇事件終了まで

報酬：U—Dを止めることに貢献した者にスターチップを三個配布。また、最も貢献した者、いわゆるMVPの場合は十五個、MVPのチームメンバーには十個スターチップを配布。

「しっかしこれ、MVPは綾で安定じゃね？」



末崎の言葉に、海斗はうーんと腕を組んだ。

確かにこのままではMVPは綾になる。というのも、転生者の中でユーリ救出にあたって役割を与えられているのが綾一人であり、その役割の遂行が可能なのも綾のみだからだ。

しかし、神が特定の人のみがクリアできるような仕組みにするととは思えない。今までの指令は困難ではあったが、誰でもクリアはできるようになっていた。

(何か仕掛けがありそうだけども……)

しかしその仕掛けが何かは海斗にはわからない。なので、海斗は今できることの方に意識を切り替える。

「ま、とにかくまずはやることやろうぜ。勝利稼いで、ついでに搜索」

「本当は搜索が主なんですけどね」

説明が遅れたが、海斗達が戦場（戦場）にいる理由はユーリやキリエ、そして未来からの四人の搜索活動である。ただし、これは指令のために地上へ降りるためのリンディ向けの口上であるのだが。

強力な戦力がいようと、高性能なリーダーがあろうと、数でもって地道な活動を行う、将棋でいうところの『歩』の役割というのは一つの軍やそれに準ずる組織でも必要なものである。ユーリが再び行方を眩ませてから、ユーリの搜索に人手が欲しい状態であ

り、そこを利用したのだ。

もつとも利用したのは才であり、海斗達が便乗して地上に降りれたのも才のおかげである。その才は現在単独で別行動。

「そりやそうだけどさ。対峙しても俺達じゃ適わないから、こうやって後々の邪魔になる欠片の掃討を——」

海斗がそう口実を披露していた時、

「ぎゃああああつ!!!」

「!?!?!?!」

三人の身体が一斉に強張る。

いち早く硬直を解いた海斗は、絶叫が響いた方向へと駆け出した。

「あ、海斗さん!?!」

由衣が呼び止めようとするが海斗は止まらず、由衣も慌てて追いかける。

「お、おーい!?! 自分から危険な場所に行くなんて……ちよ、ま、まっつてくれえ!」

末崎は少し躊躇したものの、すぐに視界から消えてしまう二人を慌てて追いかけた。

先頭を走る海斗は、すぐに絶叫の元まで辿り着いた。

見えたのは、魄翼を巨大な腕に変えたユーリと、倒れた男と、その男の手を握る少年、

壁際に座り込んで震えている少年、そして片腕を無くし、残った腕で手にしている杖を

ユーリに向ける男の計五人。

——否。

パキンツ……

(……………!!)

「うわあああああ！ 圭斗けいとおおおおおっ!!」

倒れていた男の身体が青白い光となつて碎ける。離れているはずなのに、その嫌な音が海斗の耳にはつきりと聞こえた気がした。

そこにいる人が消え、その男の手を握っていた少年が叫んだ。その悲痛な叫びは恐怖となり他の者にも伝染していく。

「嫌だ……死にたくないっ……くるな、くるなバケモノおおおっ!!」

絶叫と共に隻腕の男の杖から魔力弾が発射される。が、それはユーリに防がせることもできず、情けなくユーリの身体に当たつて消える。

「……………」

無表情のままのユーリが男に手を向け、魄翼に攻撃命令を出そうとする。

「どっ、せええええええいっ!!」

海斗は全力疾走、全体重をかけたタツクルをユーリに叩き込んだ。

タツクルを受けてユーリの身体は押しとばされ、攻撃も中止となる。

「あ、ああああ！ た、助けが来たあああつ！ 救世主だよ救世主ア！」  
「ばっか、そういうのじゃねえよ……」

隻腕の男の泣き言を返しながら、ユーリを見据える。ユーリはすぐに立ち直ったものの、なぜかそれから直立のまま動かない。

ポケットから携帯を取り出し、アースラへの通信を急ぐ。

「海斗さん！」

「げっ、ユーリまでいるじゃねえか……！」

「由衣ちゃん、末崎！ こいつらを安全な場所に非難させてくれ！」

遅れてやってきた二人に指示を出していると、アースラと通信が繋がった。

「こちら海斗！ ユーリを捕捉、接触した！ 負傷した民間人……三名を保護！ 指示を！」

『こちらリンディ。モニターで確認したわ。今そっちになのはさん達を向かわせたけど、持ちこたえろとは考えず、自分を守ることを考えて！』

「了解です！」

通信を切る。

末崎が隣に来て耳打ちしてきた。

「おい、海斗」

「なんだよ?」

「……緊急指令がきちまったよ」

「マジかよ……」

しまいかけた携帯を開き、海斗はメールを見た。

差出人：管理者

件名：緊急指令

内容：管理局からの救援が来るまで持ちこたえよ。

成功条件・報酬：救援の魔導師もしくは騎士がシステムU—Dと接触する。スターチップを五個配布。

失敗条件・罰：救援が来る前にシステムU—Dに逃げられる。スターチップを十個剥奪。

「つたく、五個とか割に合わねえだろ」

「で、でも、海斗さん。失敗すると、あの人達……」

「ああわかつてるよ。俺達はともかく、あいつらがヤバいんだろ?」

由衣の言うことに頷いた。

緊急指令はその場に在る者に与えられる。怪我とか、戦意を失っているとか、そういうの関係なしに神は与えてくる。

そして失敗し、チップが足りなければ、容赦なく消される。

「な、何言つてんだ。逃げようぜ！ あんな奴ら助けようとして俺らが死に行く必要なんかねえよ……！」

「嫌なら逃げてもいいいぜ。綾だったら助けるだろうって勝手に考えただけだから。てか、実際にリスク負ってまで助けてたじゃねえか」

「う……」

実際に綾がリスクを負ったために助けられた末崎がたじろいだ。

「俺達は自分から死ぬことを選んだ。今更怖じ気づいたつてののか？」

「……あーもうわかったよ！ やればいいんだろ、やれば！」

何も言い返せない末崎は痲癩を起こし、ヤケクソ気味に了承した。

それを見て呆れ気味に笑い、そしてユーリの方に向き直る。

「俺が前に出る。支援を頼むぜ」

海斗が長杖を構える。二人も二人もそれぞれの獲物を構え、より警戒する。

直立のまま動かなかつたユーリが、動きだす。

「……攻撃、開始」

破壊の爪が空気を引き裂いて三人に迫る。

## 第六十九話

散開して初撃を回避してから、海斗はユーリへと突撃した。

攻撃が通らないのは始めからわかっている。だが救援がくるまでこの場に張り付かせるためにはターゲットの存在が不可欠。ターゲット、つまりは囷になるのは、この中で身体能力が最も高い海斗となるのは自然であった。

ユーリは接近してくる敵を最初の目標につけ、魄翼を動かす。

魄翼の爪が細く鋭く、針状に変形し、海斗を刺殺せんと高速で襲いかかる。

「うおっ！」

目前に迫ってくる爪を身体を捻り、僅かに横にズレることで回避する。が、爪は僅かにだが海斗の顔の皮膚を切り裂いた。

（あつぷ——いや、アウトか……！）

直後、スターチップが二つ浮かび上がって碎け散る。闇の書事件にてリインフォースと戦っていた時にも見た光景だ。

海斗が持つチップの総数は十九個だった。そこから二つ引かれ、十七個。あと九回も攻撃を受ければ失格となる。



「——でも引かねえ！」

だが海斗は突撃を続行する。

魄翼が引き裂きにくる。斜め上からの攻撃をしゃがんでよけ、さらに接近する。

立て続けに攻撃が来る。右から、左から、顔面を狙って、心臓を貫く気で。

それをしゃがんで、バックして、身体を逸らし、時には蹴り飛ばして狙いをずらせて。ひたすら避ける。由衣や末崎のバックアップを受けながらユーリに張り付く。

「おらっ!!」

攻撃を間一髪でよけ、砲撃を撃ち込む。ダメージを与えるためではなく、反動で飛んで一旦距離を開ける。

「海斗さん！　あまり無茶をしないでください」

「大丈夫だよ。最初以外は全部完全によけてっから」

そーじゃなくてっ、と由衣は反論するが、海斗は聞く様子もなく再突撃の機会を伺う。  
「っし、行くぜ！」

気合いを入れ、再びユーリへと突貫する。

ユーリは接近する海斗に向けて魄翼の爪を振り下ろすが、先読みしていた海斗は素早く横へと回避する。

「ヴェスパースプラッシュ」

「っ、うおっ!?」

大量の赤黒いリングが海斗に向けてばらまかれる。その質量及び、ゲームでは出てこない攻撃方法に驚くも、海斗はなんとかかいくぐった。

海斗はよけきった。だが、よけきれなかった者もいた。

「ぐわっ!」

「きゃあ!!」

「っ!? 由衣ちゃん! 末崎!」

拡散するリングは由衣と末崎にも襲いかかった。それに対応できず、二人とも被弾してしまふ。二人からそれぞれチップ二つが砕け散る。

仲間の負傷に海斗の注意が逸れた。感情を棄てた相手はその隙を見逃すことはない。

マズいと思つても、もう遅い。

ドスドスドスツ!!

「が、あつ!」

「海斗さん!!」

針状の爪が次々と海斗の身体を貫いた。左足二カ所、腹、右手首に穴が空く。左足や右手首は骨も砕かれた。

身体を貫く爪が抜かれ、海斗はその場に膝をつく。

痛みに顔を歪めながら海斗が見ると、ユーリは右手に赤黒い魔力を収束させていた。動かなければ、と思う。なのに海斗の身体は動かない。単に身体が破壊されただけでなく、激痛によって身体が麻痺している。

「エターナルセイバー・カノンモード」

「ああああああああああつっ!!」

横から絶叫と共に海斗の身体が突き飛ばされた。

突き飛ばしたのは末崎だった。末崎によって海斗は射線から逃れた。代わりに末崎が射線に入ってしまう。

ドゴンツ!!

「海斗さんー！ 末崎さん!!」

砲撃の直撃を受けた末崎は、そのまま砲撃と共に壁に押し込められた。クレーターができた壁に埋まった末崎は血まみれとなり、意識も飛んでいる。

海斗も、末崎によって直撃は免れたものの風圧によって吹き飛ばされ、壁際に倒れていた。その際頭を打ったのか、意識がない。

ユーリが残った由衣へと顔を向けた。

「脅威判定、残り一体。殲滅、続行」

「ひっ……!!」

由衣はすぐに長杖を構えようとするが、恐怖で震えた手は長杖を取り落としてしま  
う。

丸腰になった由衣を引き裂こうと、ユーリが接近する。

——パァンツ!!

「!?」

恐怖で身体を縮め頭を抱えていた由衣は突然の音に驚いて顔を上げた。

すると、もう目と鼻の先にいるユーリはこちらを襲う様子はなく、全く別の方向を見  
つめていた。

(え?…え……?)

何が起きたのかわからず、由衣はユーリの視線を追いかけた。

ユーリの視線は僅かに上向いた方向なのだが、何も無い。ただ道路が続いているだ  
け。

そして二人とも人間の素の視力では見えない「何か」に意識が集中していたため、由  
衣はともかくユーリも気づかなかった。

自分の背中に近づく者が、その得物をユーリに向けていることに。

ズドンツ!!

「!?」

いきなりユーリが吹き飛んだことに、由衣はギョツとした。

慌ててユーリがいたはずである場所を見ると、

（え？）

そこにいたのは、仮面をつけ、ランスを片手に持った女性だった。

その人は仮面に加えてフードつきコートを羽織っているため髪も見えない。なのになぜ女性とわかるのか。スカートを履いているからだ。レース付きの黒いロングスカートで、ゴスロリのそのように見える。彼女が持つランスは突くことに特化した円錐状の物理刀身で、鈍い銀色に光っている。

「下がってなさい」

「え？」

鋭く棘のある声。彼女はそれだけを言うと、状況理解が追いついていない由衣を置いてユーリへと駆け出した。

「脅威判定、一体追加……迎撃開始」

すでに起き上がっていたユーリは接近してくる彼女をターゲットに絞り、魄翼を腕に変化させて襲いかかった。

——しかし。

バアンツ!!

「――！」

由衣は驚くしかなかった。なぜなら仮面の女性を引き裂かんと振り下ろされた魄翼の腕が、彼女の一突きによって砕かれたからだ。

さすがにおかしいという思考がよぎった。彼女の突きは鋭く、由衣の素人目から見ても熟練されているのだろうと思う。しかし、魄翼はそもそもエグザミアの魔力でできたものであり、無類の強度を誇る。熟練されていようが、突きの一撃で砕かれるようなものではない。

だが由衣のその疑問はお構いなしと言わんばかりに、ユーリと仮面の女性の攻防は始まっていった。

状況は仮面の女性の方が優勢だった。ユーリが繰り出す攻撃の数々は完全に見切られている。彼女の衣服が傷つくことはあれど、（由衣からは見えていないだけかもしれないが）チップが砕かれてないところから彼女の身体に傷はついていない。さらに言うと仮面には一切傷が入っていない。

しかも、

（ユーリちゃんに、ダメージを与えてる……！）

それが何よりも驚きだった。先ほどまでの戦闘では、由衣は海斗へのバックアップとして援護射撃を行っていたのだが、ダメージは一切入れられなかった。

しかし、仮面の女性はユーリに明確なダメージを与えることができています。今も彼女の突きを掠めたユーリの頬が、殻のようにひび割れた。

自身の身体が傷ついているという異例の事態でもユーリは無表情のまま、危険因子を排除すべく魄翼の両腕で仮面の女性を挟み込もうとする

仮面の女性は瞬時に長杖を展開。素早く魔力弾を数発撃ち込み、同時に反動で後ろに下がって魄翼の挟み込みを回避する。

回避してすぐ長杖を放り捨て、仮面の女性は青いベルカ式魔法陣を展開した。同時に左手を標準を合わせるようにユーリへとかざし、ランスを構える。

ズダンツ!!

その直後に放たれた突きはユーリの胸を捕らえ、彼女が乱入してきた時と同様壁へと強く突き飛ばした。ユーリが叩きつけられた壁にはクレーターが出来上がっている。

(っ、強い……)

由衣にはそれしただけの思い浮かばなかった。しかし、それほどまでに強かったのだ。

由衣や末崎は勿論のこと、海斗や竹太刀、もしかしたら綾や才を凌駕しているのかもしれない。由衣にそう思わせるほどの強さであった。

ガラリと瓦礫の中からユーリが立ち上がった。ユーリの腹には受けた衝撃に比べた

ら小さいものの穴ができている。

ユーリは自身の損傷率を見て、相手への警戒レベルを引き上げた。そして躊躇いなしにプログラム起動の宣言をする。

「オーバーアシストプログラム、起動開始」

宣言した瞬間、ユーリから膨大な魔力が放出される。放出された魔力が風を生み、暴風となつて仮面の女性や由衣を襲う。

が。

「……!?!」

突然、ユーリの右腕が壊れて落ちた。落ちた右腕は跡形もなく霧散する。

さらにユーリの顔が傷を中心に壊れていく。皮膚が剥がれていき、その下はプログラム故か赤い筋肉ではなくそれに似た黒い何かだった。

「いったい、何が……!?!」

ウレクから今のユーリがオーバーアシストプログラムを乱用すれば駆体を壊すことになりかねないとは聞いている。しかしそれにしたって早すぎる。崩壊するのは乱用した結果大きな反動に耐えきれなくなるためのものであり、たった二回目で崩壊を起こすとはないはずだ。しかし、それが今日の前で起きている。

「ギッ……原因不明の、プログラムの……機能低下ヲ確認……一部……ホウ、壊……開始



……」

右腕も顔も壊れ、ノイズが入ったような声を出すユーリ。しかしオーバーアシストを止めようとはせず、そのまま仮面の女性に襲いかかった。謎の崩壊だけでなく速度も綾との戦闘時よりも大幅に低下していた。しかし、それでも速度が大きく上昇していることに変わりがない。

「……っ！」

ガアンツ！ と魄翼の腕と盾として構えられたランスで衝突が起きる。仮面の女性は何んとか防いでいるが、仮面で表情が見えなくともつらそうであることは容易に想像できた。

一本の腕の攻撃を止めて硬直している間に、もう一つの魄翼の腕が裏拳のように振られて仮面の女性を吹っ飛ばされた。

「あ……！」

吹き飛ばされた仮面の女性に由衣の注意が行く。その隙にユーリが由衣を引き裂こうと接近する。

だが、それは桜色の砲撃が阻んだ。由衣は砲撃の出所を辿って空を見上げ、見つけたと同時に安心感を覚えた。

「由衣ちゃん、大丈夫!？」

「なのはちやん!」

やっと救援が来た。

来たのはなのはと他にもフェイト、ユーノ、アルフ、ヴィータ、シヤマルの計六人。増援が来たのを確認してからのユーリの行動は早かった。

「ギギ……脅威判テイ……増加……ギツ……コレい上の……戦闘続、行ハ……危ケン……駆体保護のため……撤退し……ます」

「逃がさないっ!」

「逃がすかよっ!」

フェイトとヴィータがユーリを捕らえにかかる。

撤退すると言いながらユーリは自分の身体を抱いて身をかがめていたが、次の瞬間、

——ドオオオオン!!

「——っ!? フェイトー!」

「ヴィータちゃん!?」

ユーリが大爆発を起こした。正確には魄翼の魔力を爆発させたのだが、爆煙にフェイトとヴィータが包まれる。

濛々と立ち込める煙からユーリが飛び出した。ユーリはそのまま飛び去っていった。

「あ、危ねえ……」

「ヴェータ、大丈夫？」

「そっちこそ」

爆発をシールドで防いだヴェータとフェイトも出てきた。見た限り怪我もない。

ほっと息をつくアルフとシヤマル。由衣も同じく息をついていると、なのはとクロノが駆け寄ってきた。

「由衣ちゃん、怪我はない？」

「う、うん。でも、海斗さんと末崎さんが……」

「ユーノとシヤマルで応急処置をした後にアースラに運ぶ。由衣、保護した民間人がどこにいるかわかるか？」

「あ、はい。それと………あれ？」

「？ どうしたんだい？」

アルフが訊く。由衣はつい先程まで確かにいたはずの場所を見て、言う。

「いない……」

「いない？ 誰かいたのか？」

「私達を助けてくれた、とても強いランス使いがいたんですけど……」

由衣が少し目を離していた間に、あの仮面の女性の姿がなかった。ユーリの攻撃を受けはしたが、その直後に立ち上がったところまでは見たので失格にはなつたとは思えな

い。

「……その人物については、後で話を聞こう。まずは民間人の手当てが先だ。案内してくれ」

「あ、はい！」

クロノに急かされ、由衣は助けた三人がいる場所へと急いだ。



「お疲れ様です、リーダー」

とあるビルの屋上。そこに一人立っていた少年は軽い声音でそう言った。

黒い髪をやや長めに伸ばした、綾や海斗と同じくらいの歳であろう少年だった。手にはスナイパーライフルに似た形状と機構のデバイスが握られている。

つい先程まで一人であった少年が見つめる先には、今まさに転移の魔法陣を閉じ、少年へと歩み寄っていく人影が一つ。

人影の正体は、あの仮面の女性だった。今も仮面をつけたままで、右手にはランス、左手には一度放り投げたが転移魔法を使うために回収した長杖が握られている。

仮面の女性は少年の目の前で歩を止めた。女性の身長は少年とほぼ同じ。年齢も同

じくらしいの少女だと推測できる。

「ええ。一撃貰いましたわ、何とかありませんでしたわ」

「俺の狙撃のおかげってことですかね？」

「ええ。正確には、狙撃によって撃ち込まれた『プログラム』のおかげ、ですが」

淡々と冷静に答える少女に、面白みがないなあと少年は肩をすくめる。

ここは、ユーリと海斗達が戦闘を行った場所から一キロ以上離れたビルの上。ユーリが海斗と末崎を蹴散らして由衣に襲いかかった時、少年はこの位置から狙撃し、少女の言う『プログラム』を撃ち込んだのである。

「しっかし、あのユーリはヤバくないですか？ いきなりユーリの魔力が跳ね上がった

時は焦りましたもん」

「オーバーアシストプログラムとか言っていましたわね。撃ち込んだプログラムののおかげで弱体化しましたが、逆に弱体化がなければ対抗できないでしょう」

「てえことは、まずはプログラムの蒐集が先決つすかね？」

「指令のことも考えると、それが一番でしょう。撃ち込むのはあなたに任せますわ」

「りよーかい」

指示を受けて少年は敬礼のポーズを取った。軽い冗談として取った態度に少女はため息をつき、さっさと歩き始める。少年もすぐにその横を歩く。

そういえば、と少年は少女に問うた。

「仮面、そろそろ外してもいいんじゃないですか？」

「ああ。そうでしたわね」

思い出したように言つて、少女は仮面を外した。同時に被っていたフードも外す。

フードから解き放たれた髪は白百合のように淡く色づいた白が輝き、瞳は透き通つた黒い色をしていた。

## 第七十話

才は一息をついた。

才がいる周囲は戦闘の跡が刻まれていた。結界の中なので、結界を解除すれば全て元に戻る。

この爪跡を刻んだのは全て闇の欠片だ。才は攻撃を外すことはなかったし、無駄に魔力を消費して砲撃のような高火力の魔法を使うこともなかった。

それはそうとして。

才は自分の得物、白杖を見つめていた。正確には白杖の中にある、とあるものを見ていた。

「……………」

しばらく見つめた後、才は白杖に登録された回線からアースラに通信を始めた。

『才くん？ どうかしたの？』

応答したのはエイミィであった。

繋がったことを確認して、才はまず最初の質問を訊く。

「……………いえ、そちらや他の様子はどうですか？」

『ああ、他のところはね、海斗くん達がユーリと交戦して大怪我しちゃったの。交戦中にランス使いの子が乱入したおかげで、命に別状はなかったけど』

「ランス使いの子、ですか?」

『うん、由衣ちゃんの話だと、突然乱入してそのままユーリと交戦したんだけどね、その子ユーリに何度も有効打を与えることができたんだって。でもなんで有効打を与えられたのかは由衣ちゃんにもわからないみたいで……』

エイミイの話に、才はこう答えた。

「……障害プログラムを撃ち込んだのでは?」

『何か知ってるのか?』

一緒に聞いていたらしいクロノがそう訊いてきた。

才は静かに答える。

「……倒した闇の欠片のうち数体から、解析不能のプログラムカートリッジの回収に成功しました。用途は不明ですが、由衣の話が事実であればそのランス使いはユーリの防衛能力などに異常をきたす何らかの手段を用いたと考えられます」

『その手段が、君が回収したというカートリッジである、ということか?』

才は無言で頷いた。

ランス使いはほぼ確実に転生者。加えてユーリの資料映像からユーリの防衛力は桁



外れであり、転生者どころかなのは達でも有効打を与えられないほどだということが明らかになっていった。

さらに、綾がユーリと交戦してから発覚したオーバーアシストプログラム。異常強化を行うそれは、発動されたら勝ち目がなくなる。これらの理由からして、ユーリを弱体化させる『何か』がなければおかしいと才は分析したのだった。

それに今回追加された指令、スターチップ獲得の条件がユーリを止めることに最も「貢献」した者という条件。それもこのプログラムをより多く集め、より撃ち込むということであれば納得がいく。

「効果の有無、種類や程度を調べるために検証が必要ですが」

しかしこれはあくまで憶測に過ぎないため、加えて才はそう言った。

『……わかった。検証には僕も向かおう。エイミイ、ユーリの現在の居場所はわかるか？』

『えっと、一応特定できてるけど……』

「……クロノに加えて、さらにもう二人ほどの戦力増強を求めます。ただしこの増強要員には、いずれユーリの救出行動時に主力となるであろう魔導師や騎士以外のメンバーでお願いします」

『その要望は確かにそうだが、その条件だと選択肢はだいぶ限られるぞ。誰か検討をつ

けているのか?』

クロノのその問いに答えるべく、才は口を開いた。



「なんでこいつと一緒に動かなきゃならないんだか」

「我慢しなさいロツテ。仕事なんだから」

才が指名したのはリーゼ姉妹だった。

アリアはともかく、ロツテは自分達を指名した相手が闇の書事件の時に煮え湯を飲まされた奴であることから機嫌が悪い。ロツテは才とはやり合っではないが、綾と同じく計画を妨害されたことから快く思っではないらしい。アリアも口では平静であるように見えるが、表情は硬い。

『……才、大丈夫なのか? 二人の様子がアレだと、君主導の作戦の遂行に影響が出るぞ』

二人の様子を見かねたクロノが才に念話で尋ねた。

しかし当の本人はいつもの無表情で、なんでもないように答える。

『……二人とも、私情だけで作戦をねじ曲げることはないだろうから……それはクロノ

「が一番良く知ってるでしょ？」

『……………そうだな』

クロノはとりあえず納得した。

交差点に差し掛かったところで、一行の足は止まった。

情報ではこの交差点を出て右側、そこにユーリがいる。まずは見つからないように、壁から慎重に顔を出して確認する。

「……………いないな」

『建物の中から反応があるから、多分そこにいるんじゃないかな』

通信と共に詳細な情報が送られる。ユーリの現在地を確認し、才は三人に言い渡す。

「検証実験を開始します……………各員配置につき、作戦通りに……………」



ビル内の一室に潜み、ユーリは先の戦闘で負ったダメージの回復に努めていた。

まず優先して、ユーリにとっては原因不明の理由によって壊れた右腕を再構築、修復していく。肩から損失していた右腕は、すでに手のひらまで再構築が進んでいた。右腕の回復に優先しているために、顔は皮膚が剥がれて黒い姿のままだ。

余計なエネルギーの消費を避けるため、ここに潜伏してからは指一本動かさずにいたユーリであったが、敵の接近を感じ取ってピクリと首を動かした。

周囲をぐるりと見回して、数秒後。

ババンッ！

ユーリは後方の左右から撃たれた。

幻影魔法で身を潜めていたクロノとロツテの砲撃によって前方——窓の方へとユーリの身体が吹き飛ばされる。

襲撃者に対処すべく、空中で身体を切り替えて壁に足をつける。

だが次の瞬間、ユーリのすぐそばの窓が魔力弾によって叩き割られ、外から入ってきた魔力の糸にユーリが絡め取られた。外でスタンバイしていたアリアのものだ。

ユーリを捕らえたアリアは、魔力糸を引っ張ってユーリを外へと引きずり出す。ユーリを追ってクロノとロツテも外へ出る。

ユーリは魄翼の爪で自分を拘束する糸を一瞬で切り裂き、まずは一番近くにいるアリアに襲いかかった。

……才が提案した検証実験のプランはこうだ。

まず、プログラムを撃ち込む前のユーリと戦闘し、その戦闘記録を取る。先の戦闘のダメージや、阻害プログラムがまだ残っているかもしれないため、比較するデータを手

に入れるためだ。

戦闘記録が取れたら次に、離れた箇所から才が狙撃で現在持っているプログラムを四つ全てをユーリに撃ち込む。ユーリ相手に持久戦が難しい以上、効果が出る可能性を高めるためである。

プログラムを撃ち込んだ後は、才も戦闘に参加。代わりにアリアが戦闘から離脱し、撤収用の転移魔法を準備。転移の準備ができ、戦闘記録も取れたら即時全員撤退、アリアが用意した転移で逃げる。これが今回実行されるプランである。

魄翼の巨大な爪を回避、アリアは魔力弾を叩き込む。顔面に直撃させた。だが効いている様子は見られない。

「つと」

再び引き裂きに来た爪を後ろに跳んで回避する。

魄翼の爪がセンサーに引っかかりバインドが機動、ユーリを拘束する。

すかさずクロノが砲撃。吹き飛ばされたユーリはさらにロツテの魔力強化をした足で蹴り飛ばされ、壁に叩きつけられる。そしてアリアがバインドで拘束する。

が、一連の攻撃は全てダメージとはならず、バインドもすぐに破壊される。

「ジャベリン」

ユーリのその一言で、魄翼から無数の槍状の塊が三人に襲いかかる。

「くっ……！　才！　狙撃はまだか!?」

シールドで猛攻を防ぎながら、クロノは才に念話を飛ばした。



「……うん。データはもう十分だよ」

五百メートル以上離れたビルの屋上。肉眼ではほとんど見えない距離にいる才はそう呟くように念話を送る。

「……プログラムカートリッジ……フルロード」

手にしている白杖にそう命令する。カシユンカシユンと四回音を鳴らし、現在持っているプログラム四つ全てがロードされる。

構える。ライフルで狙撃を行うように、白杖の先端を五百メートル先のユーリに向けらる。白杖の先端に魔力弾を形成させる。

神が仕組んだこのプログラムカートリッジは時間制ではなく、ロードした直後の一発だけが有効という可能性が高い。

外せない。そんなプレッシャーが才にかかっているはずなのにも関わらず、才はいつもの無表情で、望遠魔法でユーリを狙う。

——パアンツ

そして、撃った。

白杖から離れ、超高速の弾丸が飛んでいく。

「命中確認」

それだけ確認した才は、すぐに現場へと飛翔する。

移動中にも誘導弾を五つ形成。ついでに白杖内のメモリーを確認するが、やはりプログラムカートリッジすでに効果を失っている。

表示を全て閉じ、魔力弾五発を放つ。

ユーリの迎撃や防御を全てかいくぐり、魔力弾は全てユーリの腹部に命中。集中攻撃を受けた箇所が小さく抉れた。ダメージが通っている。

自分に明確なダメージを与えた才を一番の脅威判定と見なしたのか、近くにいろクロノやロツテを差し置いてユーリは才の元へと飛んだ。才を狙って、魄翼の爪が振り下ろされる。

しかし、振り下ろされた場所にはすでに才はいなかった。

攻撃が来る前に当たらない場所に回避した才は、攻撃時の隙に白杖をユーリの顔面に押し付けて砲撃を叩き込み、爆風を生む。

砲撃を叩き込んですぐ、反動を利用して後ろへと退避する。直後、吹き飛ばずにいた

ユーリが才がいた場所を切り裂いた。

「……………」

それからも才は相手が動く前に回避し、時折反撃を加える。クロノやロツテも加勢し、ユーリにダメージを蓄積させていく。

才は、海斗や綾のように運動能力は高くない。飛行魔法はとつさの瞬発飛行などの時に運動能力によって差が出るが多く、才もその例外ではない。

なので、相手の動きを先読みし、先に動く。その明晰な頭脳を利用し、僅か先の未来を予測する。

「ゲイザー」

安全な場所に非難し、撃つ。

「セイバー」

当たる場所には行かず、撃つ。

「ヴェスパー」

隙を予測して、

「——砲撃」

撃つ！

才の砲撃でユーリの身体が壁に押し付けられた。すかさず、クロノとロツテがバイン



ドで縛り上げる。

一向に才にダメージを与えられず、逆に確実にダメージを受け、かつ拘束まで受け、危機感を募らせたユーリは負担を考えることなく宣言した。

「オーバーアシストプログラム、起動開始」

直後、才が壁に叩きつけられた。

「……………ハッ」

全身で受けた衝撃で空気が吐き出される。加えて才の身体にできた浅い裂傷から血が垂れる。

オーバーアシストの恩恵を受け、知覚不能速度となったユーリの攻撃だった。魔力の解放で拘束は解け、壁にいたはずのユーリは才がいた場所に立っていた。

ユーリの攻撃を受けたことで、才の目の前で二つスターチップが破壊される。

「才!!」

「いの——!!」

ロツテがユーリに蹴りかかる。が、蹴りが命中する前にユーリの姿が消える。

魄翼の炎の残像と金の髪の毛の軌跡を一瞬描き、魄翼の爪が才の身体を——

切り裂けなかつた。

「？」

切り裂いたのは才の手前だった。何もなく、空を切るだけ。ユーリは手応えの無さの理由がわからず、一瞬動きが止まる。

対象に当たっていないことを知り、攻撃を再開するのにかかった時間は僅かだったが、すでに才はシールドを展開していた。

しかしユーリは構わずそのシールドに魄翼で殴りかかる。オーバーアシスト起動時の攻撃力の前にはシールドなど何の意味もないと知っていたから。

——なのに、壊れない。

並みの魔導師どころか、鋼の上に魔力防護服を身にまとったアマタでさえ貫く程の力があるのに、その数倍の力を発揮しているというのに、目の前の一枚のシールドを全然割ることができない。

実際には数倍の能力を発揮していたから壊せないというのに、ユーリは気づいていない。気づかないまま、ひたすら殴り続ける。

『……クロノ！』

『才！ 無事か!?』

シールドで防ぎながら、才は念話を飛ばした。

クロノの問いに答える代わりに、才は指示を出す。

『……今すぐデュランダルで、ユーリを凍結させて』

『馬鹿を言うな！ 君も巻き添えをくらうぞ！』

『僕ごとでいい……急いで！』

「なっ……！」

思わず声を漏らし、クロノは迷う。

デュランダルの凍結魔法は強力で、使えば一時的だとしてもユーリの動きを封じるのは可能だ。才が巻き込まれても、非殺傷調整によって直接的に死ぬこともない。

しかし、その後の対応が問題となる。凍結させたところで、才を解放するために氷を碎けばユーリも解放され、状況が元に戻るだけだ。

かといってユーリの凍結を維持するために放置するにしても、ユーリによって破壊される可能性が高く、仮に破壊できないとしても、今度は氷によって才の命が危なくなる。非殺傷調整が適応されるのはあくまで直接的な魔法威力であり、魔法によって発生された氷の効果は適応の範囲外なのだ。加えて、ユーリを弱体化させているであろうプログ

ラムカートリッジの効果は切れて状況が余計悪くなる可能性だってある。プログラムのカートリッジの効果効いている今離脱しなければならぬ。

防御もできない。空間そのものを凍結させる魔法なので、シールドやプロテクションでは意味がないし、フィールド防御はそもそも補助用なので防御には足りない。

才もこれらは理解しているはず。それにも関わらず凍結を進言するのは、何かしらの手段があるということなのか？

「……デュランダル！」

クロノはS2Uからデュランダルに切り替えた。

才を信じることにした。もし才に脱出策がなく、そのまま凍結されたとしても、その間に可能な限りの増援を囿り、ユーリに対応するのが最善だと判断したのだ。

デュランダルによって魔力が冷気へと変わり、周囲の温度が低下していく。

「エターナルコフィンッ！」

クロノの命令で、デュランダルを起点にして氷が発生。空間を氷で侵食していき、ユーリと才がいる場所をも飲み込んだ。

その後、

「……助かった」

「！ 才！」

「え!? なんで!？」

いつも通りの表情で、才がクロノの隣に立っていた。声でようやく気づいた二人は当然驚く。

「なんで無事なの!? あんた、さっきまであそこにいただろ!？」

「うん、いたよ」

若干声を荒げたロツテの問いに平然と答える。

「……一応、タネを聞かせてくれないか」

「……クリスタルゲージで自分を囲ってから、凍結が来る前に転移で脱出した」

「凍結の前に転移すれば、ユーリも逃げられるはずだぞ?」

「問題ないよ……多分、今のユーリにはゲージの中の様子は見えてなかったから……」

「……どういふことさ?」

「……まず、今回撃ち込んだプログラムカートリッジの効果は恐らく、『防御力の低下』『攻撃力の低下』『感覚機能の低下』の三つ……資料で見せてもらったランス使いとの戦闘のデータや、今回の検証から、通常時に適用されるプログラムとオーバーアシスト時に適用されるプログラムがある可能性がある……」

『防御力の低下』はプログラムを撃ち込んだ後にダメージが通るようになったことから最初に発覚した。『攻撃力の低下』は、オーバーアシスト直後の攻撃で才が受けたダ

メージが浅い裂傷であったこと、シールドが割られなかったことから判明。また、ランス使用とユーリの戦闘資料でユーリがオーバーアシスト起動と同時に崩壊を起こしたこと、通常時とオーバーアシスト時それぞれ個別にプログラムが存在すると才は推測していた。撃ち込んだプログラムは四つだが、残り一つは確認できていないか、もしくは重複している可能性がある。

そして『感覚機能の低下』。これはユーリが才への追撃を外したことが発覚のきっかけであり、凍結からの脱出においては重要な役割となっていた。

「ユーリはあの時攻撃を手前で外した……距離感を掴めていなかったということであり、視力低下が起きていたとも言える。そこにクリスタルゲージでフィルターをかければ、こちらの様子が見えなくなる可能性があった……」

加えてユーリの攻撃力が低下しているので、凍結前にクリスタルゲージが破壊される可能性も減っていたのも、この策が成功した一因となっていた。

転移で一足先に退避した才。しかし視力低下の影響でゲージの中の様子がわからないユーリは、ゲージの中身がないことも凍結が来ることにも気づかず、そのまま凍結されたということだった。

「説明は以上……早く離脱を……」

説明を終え、撤退を急かす。ユーリがいつ解放されるかわからない。検証はもう十分

だった。

「……ああ、そうだな。——アリア、準備はできてるか？」

『いつでも転移できるわよー』

「よし。では撤退だ！」

ユーリが凍結されている内に、三人は撤退した。



「……なあ、一つ訊いていいか」

「……？」

転移先である戦闘区域から離れた街の一角。そこについてから、ロツテが才にそう尋ねた。

才は地面に腰掛けて回復魔法で自ら怪我の回復を行っている。幸い怪我はそれほど酷いものではなく、もう少して傷口も塞がる様子であった。

ロツテはどこか歯切れ悪そうにしながら、質問した。

「あんたも、あの綾ってヤツもさ、今の戦闘もそうだし、闇の書事件の時でも、そうなんだけどさ……どうして戦うことを選んだんだ？ あんたや綾の頭なら、無謀だってこと

ぐらいわかつてるはずなのにさ」

ロツテがこんなことを訊くのには理由がある。

最後の闇の書事件において、ロツテやアリアはグレアムと共に闇の書の凍結封印を計画していた。はやてを犠牲に、他の誰も犠牲にすることなく、その先の未来でも闇の書の脅威が来ないように、そして闇の書に復讐するために決行したこの計画は闇の書覚醒の日にクロノに止められ、結局ははやては助かり、守護騎士や融合騎も無事となり、死者もゼロという奇跡が起き、しかし綾は治ることのない傷を負うこととなり、悲しみの連鎖が残ることとなった。多くの転生者がその戦いの中で失格となり、消えていつてしまったが、そのことは神によって転生者以外にとつてはなかったことにされている。

グレアムの計画は正しくなかったかもしれない。最後の闇の書事件での死者は出さずに済んだ。しかしロツテは、なのははやフェイトが吸収された後に綾達が戦ったのは正しかったと思えなかった。なのは達が帰還するまでの間に綾が囷として奮闘したために結果として被害は抑えられたが、なのは達がいつ帰還するか、そもそも帰還できるかどうかかわからない、綾自身に勝ち目は一切ないとリスクがあまりに大きい行為であったのは事実だ。ロツテやアリア、そしてグレアムが現場にいたなら、なのはとフェイトが吸収された状態のまま凍結に踏み切っただろう。可能性の低い希望に縋って綱渡りするようなことはせず、犠牲を生んでも確実性の高い手段を選ぶ。グレアムの闇の書



封印計画とは、まさにそういうものだったのだから。

ロツテは、綾が絶望的な希望に賭けた理由がわからなかった。綾の頭脳についてはシグナムとの決闘などから高い水準であることはわかっていて、その頭脳があれば無謀であることはわかっていたはずなのに、それでも戦いに身を投じることが理解できなかった。

才に質問したのは、才と綾が親しい関係であるというだけでなく、才も今回の検証実験のように自ら危険を冒してまで戦うため、二人で共通している何かがあるのではないかと思ったから。

「……そうですね。無謀だとわかってました」

「じゃあ……なんで」

「——スクラップだから、ですよ」

「……はあ？」

ロツテは怪訝な顔を浮かべた。

「壊れたものが正常じゃない動きをするのは当たり前でしょう？ それと同じですよ……あなた方が異常だと思ふことが僕らの正常であり、あなた方の正常は僕らの異常となる」

いつもの無表情で、いつもの口調で、当たり前前のように答える。

しかし言っていることの意味がわからず、ロットは顔をひきつらせた。

「えーと……ちよつと言っている意味がわからないな〜って思うんだけど……」

「……それでいいんですよ。僕らの生きている世界とあなた方の生きている世界は、同じように見えて違うのですから……」

才はそう言って立ち上がった。傷はずでに癒えていた。

ちよつど、その二人の元にアースラに報告をしていたクロノとアリアも戻ってきた。

「二人とも、一旦アースラに戻るぞ。ユーリを止める具体的な作戦も確立してきているらしい」

「了解。……では、行きましょう」

「お、おう」

結局自分に納得のいく答えを得られずに話が打ち切られることになったが、仕方ないのでロットは三人と共にアースラへと向かった。

## 第七十一話

残り少なくなった缶ジュースを呷る。中身が喉を通過し、空となった缶を適当に握り潰し、少し離れた場所にあるゴミ箱目掛けて投げ込む。——よし入った。握力も腕力もだいぶ戻ってきたみたいだ。

現在俺が座ってるベンチの隣では、少し前にユーリと交戦、負傷して搬送された海斗達と共に保護された転生者の一人、水田次郎みずたじろうの話が続いていた。無論聞き逃してなどいない。

「——このデスゲームで知り合った仲ですけど……スターチップを早々と手放してしまつて、後がなかった僕らがこうして生きていられるのは、圭斗けいとのおかげだったんです。何にもできないやしない僕らを引っ張つてくれて……いつか僕が支えていきたいと思つたのに……なのにつ……！」

嗚咽が混じり始め、すぐに嗚咽と泣き声ばかりになつてゆく。俺は何をしてやることもなく、黙つて聞き続ける。

——橋山圭斗はしやま。水田が所属しているチームのリーダーであつた人物。正義感が強く、ほとんど一人でチームを支え、仲間を失格の窮地から守つてきたが、ユーリとの戦闘で

水田達を庇い、チップを失って失格。海斗達によって水田達は助かったが、水田と、ユーリによって片腕をもがれた少年は戦意喪失状態となった。

ユーリを止める追加指令がきてから、失格者が後を絶たない。今回の橋山の失格で四人目だ。

「質問だ。闇の欠片事件や、今回の事件から新たに追加された転生者がいるとか、そういう情報はあるか？」

水田は首を横に振ることで答えた。

A, s 時の転生者の追加以降、新たに転生者が追加されていないとすると、闇の欠片事件での失格者はゼロであるため、転生者は残り二十人。二百人参加させられた中で、生き残っているのは十分の一ということになる。

「もう一つ質問。ユーリとの戦闘はお前達から始めたのか？ それともユーリから始めたのか？」

「……闇の欠片を倒してる途中、ユーリが突然現れて……襲われたんです……」  
嗚咽混じりの回答に、やはりと内心で頷く。

失格者が続々出ているということとは、それだけユーリと遭遇しているという意味になる。遭遇率が高いのは、ユーリの方から強襲しているということのようだ。

それによって問題となるのは、闇の欠片からの障害プログラム収集率の低下。ユーリ

と遭遇しないように立ち回る必要があり、ユーリから逃走するだけの魔力を温存しておくことも必要になっていくため効率が悪くなる。場合によっては、逃走するためにせっかく集めた阻害プログラムを使うことにもなりかねない。

才にはメールでこのことを知らせておく方がいいだろう。そう思い携帯を取り出す。その時、水田が気づいた。

「あれ、和也？」

「え？」

聞いたことのある名前に、携帯に落としていた視線を前に向ける。

「……和也？」

「……あ？ お前誰だよ？」

約十一ヶ月ぶりに呼んだ名前の主は、当時からは様変わりしてしまった俺が綾である。とわかっていないようだった。

無印時に抜け出して以降、すっかり連絡が途絶えていた佐崎和也。どうやら橋山のチームの一員となっていたらしい。

「……声でわかる程の付き合いでもないか。朝霧綾だ。十ヶ月以上も経ってこうなった」

「……あ？ お前、綾なのか!? ……けつ、なんだよ。氷室とか言う奴がお前がチップ十

九個持つてるだとか言ってたけど、蓋開けたらそんなのはガセで、結局お前は何もできなかつたってか？」

俺が綾であることに気づいた途端、和也は俺の身体を見て見下した態度を取った。

「あれ、和也、知り合い？」

「神を倒すだとか大法螺吹いてる馬鹿だよ。こんな奴に付き合ってたら、すぐにチップがなくなるぜ」

「か、神を倒すって……本気ですか!? ……あの、ところで、今スターチップはどのくらい……」

若干興奮気味の水田に訊かれ、メール作成を一旦やめ携帯から現在のチップ個数を調べた。

「三十八……いや、さつき海斗達が指令をクリアしたからその分増えて四十か」

「……ハッ、チップの数まで嘘ついて、何が楽しいんだか」

「証拠、見せるか？」

そう言つて、チップ管理アプリからチップ取り出しを選んで決定を押す。チップ管理アプリはいつの間にか、おそらくはこのデスクゲームが始まった時から追加されていたアプリの一つだ。スターチップの格納、取り出しが行える。

取り出し命令に従つて目の前に鈍い光が発生し、そこからスターチップがジャラジャ

ラと落ちてきた。

俺の手持ち四十個のチップでできた小さな山に、隣で水田は驚きで口を開けていた。和也に至っては、驚きを通り越して呆然とその場で停止している。

「こ、これ……全部、あなた個人の……ですよね？」

「それ以外ないだろ。あと触るなよ。強奪と判断されたらその瞬間失格になるぞ」

水田は触ろうとしてはいなかったが、俺の忠告を受けてチップから少し距離を離れた。

「……なんでだよ」

「あ？」

和也を見ると、明らかに怒気を含んだ顔と声で怒鳴り始めた。

「なんでそんなにチップあるんだよ！ おかしいだろ!!」

「毎回指令をクリアしていったからに決まってるだろ」

「だったらなんで腕とか目え治さないんだよ！ バツカじゃねえの!」

「使う必要がないと判断したからだ」

「ケツ！ カッコつけやがって！」

かなり一方的な怒りを見せ、和也はそっぽを向く。

しかし何か思いついたらしく、すぐに向き直り、高圧的な口調で話してきた。

「おい、なら一つ交渉しようぜ」

「……どんな交渉だ？」

「今回の指令、お前は攻略の方法考えついてんだろ？ お前がやろうとしてることを俺達にやらせろ！ そんだけチップ持ってるや、もう何もしなくてもお前死ぬことねえだろ!？」

「……こつちが攻略法を差し出すとして、お前は何を差し出すって言うんだ？」

「俺達が戦力として入ってやるよ。デバイスはあるし、魔力だってそこそこある。お前なんかよりずっと戦力になるしな！」

「綾より戦力になる？ カカツ、それこそ法螺を吹くって言うんだぜお子様よお」

「ああ!？」

「……お前、いつからいた」

ため息を吐きそうになるのを抑え、横を見る。

少し離れたところに、和也をお子様呼びわり——見た目年齢的には合っているかもしれないが——してけなした人物、ウレクがいた。何かを食っているようで、中身が空になった菓子の小袋を左手で持っていた。



ウレクはこちらへと近づき、菓子の小袋をゴミ箱に捨てるいつもの狂気じみた笑みを向けてきた。俺は慣れたが、ウレクと面識のない二人は若干たじろいだのが見えた。

「このオッドアイのガキがお前と話を始めた辺りだったかなあ？ いやはや、こいつの交渉ごっこが聞いてらんねえクオリティだったんで、無駄に時間使っちゃう前にさっさとお前を連れていこうとな」

「ああ!? てめえ、でしゃばった上に生意気なこと言つてんじゃねえぞ!!」

「でしゃばりも生意気もお前の方だよばーか。まずお前に俺を扱える訳ねーじゃん。それに何だっけ、ああ、お前なんかよりずっと戦力になる？ キキツ、妄言もほどほどにしねえと信用無くすぜ？」

「……この野郎、調子乗ってんじゃねえぞオラア!!」

「お、やるか?」

激昂した和也の拳が到達する直前で、ウレクは回し蹴りを叩き込んだ。普通の回し蹴りとは変則的で、振り抜きはせずに足で引っ掛けて押し倒すように和也を床に叩きつける。

「ガハッ!」

「じゃ、一発死んでみるか?」

楽しそうに、心底楽しそうにウレクは言い、魔力を付与させた左手を振りかざす。

俺はその振りかざした腕を左手で掴み固定した。

「……ウレク、俺をどこに連れて行こうってんだ？」

「お？ おお、すっかり忘れてた」

ウレクはそう言うと、興味の対象外となった和也を蹴ってどかした。

「そろそろリハビリしたいだろ？ 今プログラムカートリッジの試験運用って奴が行わ

れててなあ。どうよ、俺もいい加減退屈してんだ」

「確かにいいタイミングだな。腕はだいたい治ったし、お前の扱いもちゃんと理解して

おきたいと思ってたところだ」

腕の切断という大怪我をしたが、逆にこの怪我の大きさに医務員やシャマルの魔法治療を受けることができ、すでに治ってはいる。ウレクの扱いも、前回は唐突な運用であつたため、もつとちゃんとした運用方法の確認をしたかつたところだった。

「決まりだな。じゃ、さっさと行こうぜ」

言つて、ウレクはさっさと歩き出す。

ウレクの後ろ姿を見て息を吐き出し、後ろを見る。

和也は座り込んだ状態でただ呆然としていた。ウレクとの圧倒的差、そして今し方のウレクの殺意に当てられ、瞳には恐怖が見える。

それを見てもう一度息を吐き、俺は先ほどの答えを言い渡す。

「……悪いが、交渉は却下だ。俺の役割は代われないし、俺はまだチップを手に入れていかなきゃならない。もう戦力も欲しいって訳じゃないしな」

そもそも、今回の指令……ユーリ救出の方についてだが俺のやることは無関係ではないがMVPは取れないと思われる以上、和也が求めているチップは手に入らない事態に陥る可能性が高い。もう一つの指令、闇の欠片の掃討についても、闇の欠片の個体それぞれで対処法が多岐に分かれる上、その人の技術が問われたりと俺がアドバイスしたところで無意味になる。どの道、この交渉はどちらにとつてもメリットがない、無意味なものだった。

「水田」

「は、はい?」

「一つアドバイス。今回追加されてきたユーリ救出の指令だが、闇の欠片から抽出できる阻害プログラムって奴を撃ち込めればとりあえずクリアにはなるはずだ」

交渉は決裂したが、一応彼らの生存率を底上げするためのアドバイスは置いておき、俺はこの場を去った。



「……朝霧、本当に大丈夫なんだな？」

「大丈夫だって。保険も用意されているんだし」

電脳によって構築された空間で、ウレクと融合した俺はシグナムと対峙していた。

対ユーリ用のプログラムカートリッジ。主力としてそれを使うのはなのはと、今日の前にいるシグナムとなった。なのは別の訓練施設でクロノを相手に試運転を始めているという。

空間内には、俺とシグナムの他にもリーゼ姉妹もいた。プログラムカートリッジのデータ測定に加え、万が一の不祥事——特にウレクが俺を乗っ取っての暴走の可能性——に対処するための、今俺が言った保険としての役割を持っている。

「そういう意味ではない。繋がったとは言え、腕が切られてまだ時間が浅いのだぞ」

「握力も腕力も件並戻った。そしてリハビリもウレクの検証も必要だから動く。文句あるか」

「しかしだな……」

シグナムといい、ラインフォースといい、夜天の関係者は俺が戦線復帰を渋る奴ばかりなのはなぜだろうか。

「シグナム」

俺はやや強い口調でシグナムの言葉を遮った。

「相手を俺と考えるな。劣化とは言え、今から相手にするのはシステムU—Dの力に他ならない。本番の時にもそんな情けで手え抜いて、仲間を墜とすのか」

「……………」

シグナムは何も言わなかった。だが、答えなかった訳じゃない。

対ユーリ用の力が加えられた魔剣が鞘から引き抜かれ、その主の命令が発せられる。

「——プログラムカートリッジ、『ヴィルベルヴィント』……ロード」

通常のカートリッジと同様に炸薬の炸裂音が鳴り、シグナムの魔力上昇が感じられる。ただ通常のカートリッジとは上昇幅が格段に大きいこと、効果に持続性があることが違いだった。

「その通りだな。だが私は加減というのが苦手だな……そこは承知してくれるか?」

「今更だな。それに、ユーリとの戦闘は直撃は身体が欠損か直接死ぬかになるだろうから、当たるつもりなんて毛頭ない。今回だって同じだ」

「そうか」

シグナムが構える。それに合わせて、俺も黒刀を抜いて平突きを構えを取る。

「——いくぞー!」

言うや、シグナムが加速して斬りかかってくる。

俺は動かない。回避する必要がないから。

ギインツ！ と金属音。しかしそれを奏でたのはシグナムのレヴァンティンと、硬質物体と化した墮翼だった。

墮翼とはそもそも、システムU—Dによつて作り出される魄翼が元になっている。前回は説明がなく使えなかったが、こうした硬質物体の生成も魄翼と同様に行える。

「——！」

驚いて硬直したシグナムの隙を、黒刀で文字通り突く。こちらはシグナムのつつさの魔法防御に遮られた。

そしてシグナムは後ろへと跳んで退避する。仕切り直しのつもりだろう。確かに俺単体では近づいて斬りかかるしかない。

だが、今回は別だ。

「スピア」

墮翼から無数の槍を生成し、シグナムへと飛ばす。本来魄翼から作られるそれと比較すると威力・強度・速度どれを取っても劣るが、それでも牽制や誘導のためなら使える。左に偏らせて射出した槍。シグナムは反対側へと回避する。当然だ、よけれない速度じゃない。だが移動の方向性が決定された。

「エターナルセイバー——！」

右手に長い刀身を作り上げ、シグナムの正面から叩きにかかる。

レヴァンティンで緩やかな傾斜を付け、それで流された。

(ちっ——！)

雑ぐ動作は隙がデカイ。叩くのに失敗した今、この隙の大きさは致命的だった。

「穿空牙ッ！」

一気に間合いを詰められ、居合い切りを腹で受ける。

しかもそれだけじゃない。

「紫電——」

(——ッ！)

炎熱を纏ったレヴァンティンが振りかぶられる。

回避——無理。防御——間に合いはするが割られる。なら——、

「一閃ッ！」

左腕で最低限直撃を避ける。

そして墮翼の片方を変形させて、シグナムの腰に巻きつけた。

「ッ!？」

俺が落ちるのに連動し、シグナムも引つ張られて降下する。

墮翼のもう片方を腕型に変形。シグナムを掴み、地面に投げ飛ばす。

「がはっ！」

飛行制御もせずに落下していたため、当然地面に激突。仮想地形に柔らかさなどないためかなり痛い。

だが痛みを無視して立ち直り、シグナムの落下地点へと走る。

強化魔法行使。加速強化付与。

加速強化追加付与。

防御強化付与。

——突く！

ガギンツ！

レヴァンティンで弾かれ、黒刀が手元から離れる。

それだけではない。黒刀を弾くために斬り上げられたレヴァンティンをシグナムは、俺に向けて振り下ろすため両手持ちにする。

「っ、まだまだあ!!」

右手でシグナムの腕を掴み、さらに左手でレヴァンティンの刀身を掴んで無理やり奪い取り、投げ捨てる。

そして墮翼から槍を生成して射出を——、

「ふんっ!」

「なああっ!?!」



投げ飛ばされた。しかも身体強化でもしてるのか、かなり吹っ飛ばされる。

墮翼で態勢を整え、投げられた勢いを殺して着地。もう一つの剣、レイピアを抜き取って駆ける。シグナムもレヴァンティンを拾って駆ける。

「おおおおおっ!!」

俺の突き、シグナムの唐竹が繰り出され――、

それらは、水色の魔法陣によって阻まれた。

「!？」

「はい、そこまでそこまで!」

「熱くなるのは構わねーけど、目的忘れてんじゃねーか?」

止めたのはリーゼ姉妹。ロットが俺を、アリアがシグナムを受け止めている。

「……すみません」

『ケツ、白けるねえ』

「……………」

シグナムは謝罪し、剣を引つ込める。俺も黙ってレイピアを鞘に納める。ウレクは文句を垂れるがそれだけだった。

「あんたの墮翼ってやつのは扱いは悪くないな。魔力が強化されてる割に攻撃時の出力が小さいのは本人のスペック上仕方ないとして。——ほれ、お前の刀」

「はい。ありがとうございます」

黒刀をロツテから受け取り、これも鞘に納める。

試験運用の結果は概ね良好。シグナムの方も聞く限りでは問題ないようだ。俺としては、さらにこの力の扱いを慣らすため、何よりチップを手に入れるために海鳴市に降りて戦闘を積みたいところだが、俺は一応病み上がりの身体。この模擬戦も無理やり許可を得たものであるため、また安静にしろと言われるだろう。

『手え貸してやろうか?』

『却下だ。リンディさんから雷どころじゃ済まされなくなる』

念話によるウレクからの提案は瞬時に蹴った。まだ死にたくはない。一応、無理が祟って最終戦に影響したらということもある。

「では、失礼します」

話を終えて、シグナムは立ち去っていった。

続いて俺もロツテに礼をして立ち去ろうとすると、ロツテから待ったがかかった。

「ちよいと待った」

「はい?」

「一つ訊きたい。お前が戦う理由つてなんだ？ どうして無謀と言えるような戦いで、自分の命を捨てるような真似をする？ お前の友人の才つて奴にも訊いたけど、さっぱり意味がわからなかった。元々闇の書事件におけるお前の無茶ぶりに思ったことだ。だから本命のお前に訊きたい」

「……才は、なんて言つたんですか？」

「自分達がスクラップだからどうのこうの。あたし達から見たら異常な行動を取るのが当たり前だとか……そんなところだな」

スクラップ、か……。

ロツテだけではなく、いつの間にかアリアも真剣な表情で俺の回答を待つていた。

俺はため息に近いような息を吐き、それから二人に答える。

「……確かに、俺達もスクラップなんでしょうね。多分間違いじゃありませんよ」

「はあ……お前も訳のわかんねーことを言うのか？」

「俺だつてわかりませんよ」

「はあ？」

「ただ、スクラップである俺達は一度壊れてる。壊れたまま動いてる。ここまではわかります。そして、もう一度壊れた時、どうなるかわからないということもわかりますよ」  
そのもう一度壊れる時は、俺の場合いつになるだろうか。

神を討つ時？ または神を討つために手段を選ばなくなった時？ それとも、その他の何か？

一切わからない。いつ壊れるのか、どう壊れるのか、何一つわからない。ただ才が言つてたという話を聞いて、漠然と、それだけがわかる。

「壊れて異常となつている俺達は、異常な判断しか取れないし取ろうともしない。才と同じ答えですね」

「……はあ。お前、一回頭ん中も診てもらつた方がいいんじゃないの？」

「それぐらいで治るなら、とつくに治されてますよ。——では、失礼します」  
俺は訓練施設を去った。

## 第七十二話

その後、ウレクの扱いの経験を積みたいと言ったものの、やはりリンディさんから今は安静にしろと却下された。

ウレクはまた暇になったとアースラ内のどこかへ行き、俺は医務室に海斗と末崎の見舞いに訪れていた。

「具合はどうだ？」

「おう。大人しく治療を受けてるよ」

「海斗に同じくだ」

海斗達とユーリの交戦からそれなりに時間が経ち、二人とも意識を取り戻していた。

しかし、末崎はともかく腕と脚の骨を砕かれた海斗は今回の指令への復帰は不可能とといった状態だ。一応、魔法治療を行えば回復できないこともないが、この状況で海斗にそれだけの質と時間をかけた治療を行ってくれる可能性ははつきり言って有り得ない。そう考えると末崎の復帰もなかなか難しい。

「お前達でどこまで数を伸ばした？」

「二十三体だ。二個目までまだ一体足りない」

そう答えたのは末崎。言うまでもなく、闇の欠片を潰した数を指している。

「まだ、欠片を大量に狩るチャンスはある。それは間違いないんだな？」

そう尋ねると、海斗ははつきりと頷いた。

「ああ。ユーリの中のシステムU—Dが完全に目覚めるっていうんだっけか。それに近づくほど闇の欠片がまた増えていくはずだぜ」

「なら、焦る必要はないな」

そう言つて壁に寄りかかる。第一俺も動けない状態だ。そのチャンスに降りて、一気に狩るしかチップを増やす方法はない。

「あの……とこころで」

二人の看病についていた由衣がおずおずと訊いてきた。

「プレシアさんとリニスさんのことなんですけど……その……どう、しますか？」

「……どうつて？」

だいたい言いたいことはわかったが、敢えて訊く。

「その……アリシアちゃんを、二人に会わせるかどうか……ということですよ。闇の欠片としてできた残滓とは言え、アリシアちゃんにとっては話ができる最初で最後のチャンスですよ……？」

「……………」

すぐに答えは出さなかった。

答え自体はできていた。いや、今までの俺の行いから答えは限定されていたというべきか。だが、その答えで正しいのかどうかにはまだ少しばかり迷いがあった。

「……会わせるべきじゃ、ないだろ」

それが、俺の行いから導かれた答えだった。

「……いいのか？ 由衣ちゃんの言った通り、最初で、最後のチャンスなんだぞ」

「そのチャンスで会いに行つたために、五歳の子供に、母親が目の前で消えて、もう二度と会えない現実を突きつけるのか？」

「それは……」

「アリシアがプレシアの存在に気づいた場合には、その時はその時で俺が考える。どうするにしろ、俺が嫌われて憎まれ口を叩かれるだけのことだ」

プレシアが遠くの世界で仕事をしていて会えないと言つたのは俺だ。アリシアは今もその嘘を信じ、そのうちプレシアに会えると信じている。それが嘘だと知つた時、まず俺を恨むのは当然だろう。

「……………」

言い返す言葉が見つからないのか、海斗は押し黙つた。

プルルルル。プルルルル。

携帯が鳴った。俺だけでなく、海斗、末崎、由衣のそれぞれの携帯も鳴っている。

それだけで、差出人が誰なのかが理解できた。真っ先に俺が携帯を取り出し、届いたメールの中身を確認する。

「おい……どういふ内容なんだ？」

「また失格者か？ それとも指令なのか？」

「……緊急指令だ。噂をすればなんとやら、だな」

差出人：管理者

件名：緊急指令

内容：現在、海鳴市内にはプレシア・テストロッサと使い魔リニスの残滓が同区域内で自身の関係者もしくは関係者と接点がある者の付近へ転移を繰り返している。ただし、特に介入がなければプレシアとりニスは接触できないようになっていいる。プレシアとりニスの接触を成功させよ。なお、該当の二人を接触させるには、両者の転生者との接触人数の合計が一定数を上回ることで、両者の転移開始時刻がある程度同一であることが条件である。また、一度転移目標にされた者が再度転移目標にされることはない。

成功条件・報酬：プレシアとりニスが接触する。どちらかと接触した者にスターチップを五個配布。



失敗条件・罰：プレシアとリニスが接触できずに消滅する。どちらかと接触した者のスターチップを五個剥奪。非接触者からはスターチップを二個剥奪。

「ど、どうするよっ…」

「……どうするも何も、俺達が動けない以上、参加も何もない。参加できたとしても、成功させるための条件が曖昧だし、まず無理だ」

一定回数以上転生者と接触した上で、プレシアとリニスが同時に転移できるよう調整しなければならぬ。ある程度と記載されているが、何秒間までのズレが許容範囲内なのかわからない上、まず同時に転移させる手段がない。幸い、こちらのチームでは例えこの指令が失敗してもまだ安全圏に留まれる。ここは無理をしないでおくのが無難だ。

プルルルル。プルルルル。

また携帯が鳴った。今度は俺だけだ。

相手は………オ？

「………もしもしっ？」

『………今、緊急指令が来たけど、そっちにも来たかい？』

「ああ。プレシアとリニスを会わせろって指令だろ」

『………それについて、手伝ってほしい』

「俺はまだ降りることができない状態だぞ。ついでに言うなら、海斗と末崎も今回復帰は難しい」

『わかつてる……海斗達も怪我したとも聞いている……だけど、本当に全員動けないの?』  
「……………」

俺は横目で由衣を見る。

由衣の怪我は小さく、もうすでに回復している。このメンバーの中では由衣だけは今すぐ出ることが可能だ。問題は由衣がどこまでやれるのか、そもそも才が何を望んでいるのかだが……。

「……………今出れるのは由衣だけだ。どうするつもりなんだ?」

『……………今回の指令は、プレシアカリニスのどちらかをこちらでもう一方に合わせることでできれば多分成功する。そのためはこちらにもう一人ほしい。……………加えて、こちらが戦っている間にもう一方の様子を見て、知らせてくれる人も必要……………』

「……………転移のタイミングを合わせる方法はわかった。だが、そのためにどうやってどちらかに遭遇するかが問題だぞ」

『……………アースラにいれば座標にされることなく、時間が経つにつれて降りた時に座標にされる確率を高めることができる。降りる狙い目はリニスがフェイトと接触した時……………リニスはその場に留まる時間は長いはずだから、プレシアとの接触が多少遅れても

合わせやすいと思う……それでも、さっきの説明も含めて運に頼るところが大きいけど』

「……………」

運に頼る。それが問題なんだ。その方法でプレシアに接触できたとして、プレシアとリニスと同時に転移してくれなければ失敗となり、チップも余計に失うことになる。由衣も才も、ユーリに遭遇しない限りはその失敗で失格にはならないが、特に才にとつてはチップ五個の剥奪は大きいはずだ。

しかし才の運の強さは俺も目になっている。才自身が大丈夫だと思ってるなら、成功するんじゃないかと思ったりするが……。

「……俺が行くならまだしも、俺以外の人に行かせるとなると独断で決める訳にはいかない。少し時間をくれ」

『……………いいよ。僕も座標にされないためにアースラに戻るから……じゃ、切るよ』  
通話が切られ、携帯をしまう。

携帯をしまうとはほぼ同時に、由衣が訊いてきた。

「あの、綾さん、何の話だったんですか？ 私の名前が出てたと思うんですけど……」

「ああ、実は——」

俺は才との電話で聞いたことを説明した。

「——ということだ。現状、俺達の中で身動きが取れるのは由衣、お前だけだが……どうする？」

「……わかりました。やらなければチップが減っちゃいますから、ここは私が頑張ります！」

「……無理はするなよ。状況の連絡は俺がやる」

頷いて了承を示した由衣に俺はそう忠告しておく。

そして再び携帯を取り出して、才へと連絡を取った。

## 第七十三話

緊急指令の通知を受けて数時間。プレシアとリニスはそれぞれ人と接触して戦闘、転移を繰り返している。

ブリッジのモニターに映されるのは現地でユーリや闇の欠片を搜索しているチームのデバイスからの映像であり、リアルタイムなのだが、二人が転移されてから別の映像に映るまでに数分から十数分ほどの空白がたまにあった。ほぼ確実に、アースラ側が認知していない転生者の元へ転移したためだろう。成功条件の一つである接触人数についてはなんとかなるかもしれない。

後は才と由衣がプレシアと接触することそのものと接触のタイミング。それも今し方訪れた。

フェイトのバルディッシュから送られてくる映像、そこにリニスが姿を現した。

「フェイトちゃん、リニスと接触。アルフ、急いで！」

『わかったよ！』

エイミイの指示を受けて、フェイトから少し離れていたアルフが現場へと向かう。

それを見てから、俺の隣にいた才はきびすを返した。

「……行ってくる」

「ああ。由衣も気をつけろよ」

「はいっ」

才と、才に続く由衣の二人が静かにブリッジを後にする。

俺は携帯がいつでも才にかけられる状態であることをもう一度確認し、それからモニターに視線を戻した。



才と由衣は海鳴市内のビルの屋上に転移された。

二人ともすでにバリアジャケットに身を包み、才は白杖を、由衣は長杖を手にしている。

「あの、才……さん。これからどうやってプレシアさんと会うのでしょうか」

会つてからの戦闘のプランは聞かされているが、プレシアと会う方法を聞かされていない由衣はそう尋ねた。なお、由衣と才は年齢はおそらく一緒（才の年齢は未だに不詳）だが、由衣には到底届かない存在かつ、怖いとは別のベクトルで近寄りがたい雰囲気であるため、敬語とさん付けになっている。

「……待つ」

才はまずそれだけ言った。そして後から付け足す。

「……五分以内に来ない場合は、諦めて戻る」

ええ……。というのが由衣に浮かんた素直な感想だった。アースラにてプレシアとの戦い方、特にリニス側に合わせるためにどうするかを入念に説明した人物とは思えない話だった。

しかし実際にはこれがまともな方法だった。なんせ、プレシアはこちらを座標に転移してくるのでこちらから探すなどの行為は一切意味がない。五分という待ち時間も、リニスとフェイトの戦闘が中盤に差し掛かる前にはプレシアとの戦闘を始めたい才としては結構、というかかなりギリギリなものである。

待ち始めて一分。二人の前で転移の光が輝いた。

転移の光が止むと、そこには――

「あなたは……」

才が確かに、アルハザードで死亡を確認した大魔導師、プレシア・テスタロッサの姿があった。

プレシアが二人の前に現れて発した第一声は才に対するものだった。口調からして、才のことがわかるらしい。

「あなたの顔……覚えてるわ。ジュエルシードを持ってきた魔導師ね？」

「……プレシア・テスタロツサ。どこまで記憶していますか？」

「……そうね……アルハザードに降り立って、蘇生装置を動かして………それから………」

記憶はどうやらそこまでらしい。アリシアが蘇生されてからのプレシアは意識が朦朧としていたため、その記憶がないのも頷ける。

「……簡潔に言います。アリシアは蘇生され、今も存命しています」

「！　アリシアが、生き返ったのね？　……なら、私をアリシアの元へ案内なさい」

「今は無理です………加えて僕らは、闇の欠片を掃討するために来ている」

「邪魔を、する気なのね」

プレシアが魔法陣を展開した。才も白杖を構え、由衣には巻き添えを食らわないように下がらせる。

「なら——消えなさい」

プレシアの杖の先から砲撃が発射される。

才はシールドを展開して防ぐ。じわりと響く鈍痛に加え、多量の魔力が削ぎ取られる。だが、才はそれを表情には出さない。

「……高速狙撃弾一発、誘導弾二発生成」



魔力弾を素早く作り出し、撃ち出す。

先に高速狙撃弾がプレシア目掛けて一直線に飛ぶ。発射されて目標まで一瞬で到達する狙撃弾を、プレシアは発射直前にシールドを張って防ぐ。

続けて才は誘導弾二発でプレシアの両サイドを狙う。

「サンダースファイア」

プレシアは両手を誘導弾に向け、それぞれの手の先に大型の魔力弾を生成。誘導弾はその魔力弾にかき消される。プレシアが作った二つの魔力弾は手から離れ、プレシアの近くを漂う。

「バリアントスファイア」

さらにプレシアはより大型の魔力弾を生成、才に向けて発射する。二つのサンダースファイアもバリアントスファイアに追従していく。

速い——だが、よければいいことはない。

「散るよ」

「へ!?! は、はい!」

散開の指示を出して、できるだけ引きつけてから才は右へと飛び出す。

空中へ身を投げ、飛行魔法によって空を駆る。カートリッジを一発ロードして、誘導弾を十発精製。プレシアへと放つ。

『さ、サポートします！』

『任せる』

返事はそれだけで済ませ、十発の魔力弾の操作を続ける。

由衣からの射撃と衝突しないようにしつつ、プレシアに攻撃を仕掛ける。

しかし二人がかりで多角攻撃を仕掛けてもプレシアに攻撃が通らない。

プレシアが杖を向ける。

「サンダーレイジツ！」

「——！」

「あ——」

紫の稲妻が二人に襲いかかった——。



「あ、海斗さん、末崎さん」

「ん？ あれ、アリシアじゃねえか」

「よっ、アリシアもアースラに乗ってたんだ？」

海斗と末崎の医務室に訪れたアリシア。彼女の入室に末崎、海斗の順に反応を見せ

た。

ちなみに彼女はまだ車椅子に座っているが、すでに歩く訓練もそれなりに進んでいる。もう近いうちに車椅子から離れた生活を始めることが予定されていた。

「フェイトもリンデイさん達もみんなお仕事で忙しいから、お家で独りきりにならないようにってリンデイさんが乗せてくれたんだ」

アリシアは嬉しそうに笑ってそう答える。

独りきりにならないようにという理由もあるが、実際には安全確保の意味合いが大きい。アリシアにも魔力は少ないながらも存在するため、結界に取り残され闇の欠片に襲われる危険性があつたからだ。

「ところで、綾さんは来てないの？ 海斗さん達がここにいるから、綾さんもいるかもって聞いてきたんだけど」

「あー、残念。確かに来てたけど、もうどっかに行っちゃった」

「えー」

海斗の答えに不満なようで、アリシアは口を尖らせた。その様子を見て末崎が尋ねる。

「なんだ、綾に何か用でもあんのか？」

「綾さんまた無茶してると話でしょ？ だから私から無茶しちやダメって叱るの」

「ああ、なるほど」

頬を膨らませているアリシアに和みながら、彼女の話に納得する。子供や大人、さらにはデバイスにまで心配される我らがリーダーだった。

それから末崎がアリシアと会話を始めている間、海斗はあることに少し迷った。迷い……そして決断する。

「……アリシア。綾なら、きつとブリッジにいるぞ」

「え、ホント?」

「ちよ、おい。お前何言って——」

枕を投げつけて末崎の言葉を遮る。

末崎が一瞬怯んだ隙に海斗はアリシアに答えた。

「ああ、きつといる。だから……綾を叱るなら早めにそこに行ったらどうだ?」

「うん! ありがと、海斗さん!」

アリシアはペこりと礼をすると、車椅子を操作して医務室を出て行った。

扉が閉まってから、末崎が焦ったような、少し怒ったような口調で話しかけてくる。

「お、おい、何考えてんだ! 綾は会わせるべきじゃないって言ってただろ!」

「……いいんだ。これで」

海斗は自身に言い聞かせるようにそう答える。

正直、海斗もこれが正しかったのかはわからなかった。

緊急指令終了の通知が未だにきていない以上、今アリシアが行けばプレシアの存在が知られる可能性が高い。そうなればアリシアは闇の欠片のプレシアに会うことができようが、できなからうが、真実を知るといふ結末は目に見えている。生きていると信じていた母親が実は既に死んでいたと知れば、アリシアは悲しむ……ここまでは、海斗でも理解できていた。

それでも、海斗はアリシアを行かせた。

「俺は……プレシアの最期を看てる。プレシアは最期の最期で結局、アリシアと言葉を交わすことは叶わなかった」

そう、海斗はプレシアの最期の瞬間を看ていた。加えて、アリシアを蘇生させている間、プレシアの支えとなつて彼女を間近で見た。海斗の目に映つたのは、一人の娘のため文字通り命を懸け、必死になっている母親の姿だった。

アリシアを生き返らせることはできた。しかしそれはプレシアの目的の途中経過に過ぎない。結局プレシアの『アリシアとの日々を取り戻す』という夢は叶わなかった。「アリシアをプレシアに会わせたいつてもある。けど……俺は、例え夢の中だったとしても、プレシアの夢を叶えさせてやりたい……そう思ったんだ」

海斗は、願うように拳を握りしめた。



首を横に反らす。高速で放たれた鞭が頬を掠め、才の皮膚を裂いた。

痛みを表情には出さず、才は白杖をプレシアに向ける。先にプレシアの魔力障壁が挟まれるが、構わず砲撃を発射。反動で後ろへと後退する。

才がプレシアが離れてから少し遅れて、由衣の射撃。簡単に防がれ、逆に誘導弾であしらわれる。

戦闘が始まって数分。二対一の状況で、才と由衣は劣勢だった。未だにほぼ無傷であるプレシアに対し二人、特に才は体中に傷をつけられていた。バリアジャケットも傷つき、多くの部分が電熱によって焼け焦げている。それでも致命傷を避けられているのは幸いである。

才は空となったカートリッジマガジンを取り外し、新たなマガジンを白杖に組み込む。即座に一発分カートリッジをロード、弾幕をプレシアに飛ばす。

止まっているといい的ではない。才はプレシアを中心として周回しようとして、

(……………！)

白杖から携帯の受信連絡。こんな時に、しかし待ち望んでいたその連絡。

才は動きを止めた。魔法を発動する訳でもなく、ただ棒立ちとなる。

当然、いい的にしかならない。プレシアの電撃が直撃する。

「あ……………」

墜ちていく才を見て、由衣は彼の身を案じると同時に、理解する。これが何を意味するか。自分はどうすべきか。

「次は、あなたね」

「降参しますっ」

プレシアが視線をこちらに向けた瞬間の、素早い行動だった。長杖を解除し、両手を上げ、宣言する。

「……………どういうつもり？」

「さ、才さんが墜とされた時点で、もう勝ち目がありませんので……………」

「……………まあ、いいわ。私をアリシアの元へ連れていきなさい」

「……………あの、プレシアさん」

「何……………？」

「アリシアちゃん、いつもあなたのことを、優しく大好きなお母さんだと言っていましたよ」

「御託はいいわ……………早く案内しなさい」

「会えますよ。私が何もしなくても、きつとすぐに」

杖を突きつけられ、恐怖から今すぐ逃げ出したくなるのを必死に抑えて由衣は言う。持てる勇気を精一杯出して、言葉を紡ぐ。

「でも、アリシアちゃんはあなたが今までにやってきたことを知りません。だから、今のあなたを見たらアリシアちゃんは心配しますよ。『お母さん、どうしてそんなに怖い顔してるの?』って」

「……っ!」

プレシアの表情が険しくなる。

かなり危ない綱渡りをしていた。プレシアの怒りを買えば冗談抜きで殺されるかもしれない、内心ビクつきながらも由衣はプレシアに言いたいことを伝える。

「プレシアさん。アリシアちゃんに会う時には、優しいお母さんでいてあげてくださいね」

返事は聞けなかった。転移によって、プレシアがどこかに飛ばされたからである。



## 第七十四話

携帯を閉じ、一息つく。

フェイトとりニスの戦闘に決着がつくのに合わせて才に電話をかけ、才は受信後すぐにわざと負け、才が墜ちたら由衣はすぐ降参する。そうして同時に戦闘を終了させることで転移を合わせる。これが今回の才の作戦だった。

そして才の狙い通り、プレシアとりニスはほぼ同時にどこかへ転移した……これで指令は達成となるだろう。このまま終われば才と由衣は五個、由衣とチームである俺、海斗、末崎は二個チップを手に入れることになる。

……いや、俺はこれから、プレシアとりニスに接触することになるのか。

「お母さん、今海鳴市に来てるの?」

「ア、アリシアちゃん……!?!」

「……………」

先程聞こえた扉の開閉音。そして聞こえてきたフェイトとそっくりな、フェイトよりも幼い声。

エイミイは驚いて振り向いているが、俺は振り向かない。ただ、さっきまでプレシア

が映っていたモニターを眺める。

「誰か迎えに行かないの？　今、海鳴市は危ないんでしょ？」

「そ、それは……」

「会いたい。お母さんに会いたいよ……」

アリシアの言葉一つ一つがこの場の全員に刺さる。真実を隠し、彼女に嘘をついたのは俺だ。その嘘に同意したみんなは共犯者といえる。

困ったエイミイがこちらに視線を向けてきた。エイミイだけじゃなく、他のスタッフ、加えてリンディさんもこちらに視線を向けている。

「リンディさん」

俺は口を開いた。

「……何？」

「俺と、アリシアに地上に降りる許可をください」

「綾くん……でもそれは」

「最初で、最後のチャンスです。こうなった以上、もう隠し通せるものではありません」

「……………」

リンディさんは目を瞑り、ややしばらくして小さくため息を吐いた。

「……わかったわ。なら、あなた達と一緒に武装隊を——」

「結構です。嫌われて憎まれ口を叩かれるのは、一人でいい。リンディさんは二人の魔力反応の搜索をお願いします。きっと、一緒にいる」

そしてすぐに行動に移す。

きびすを返してアリシアに近寄り、アリシアを抱きかかえる。アリシアは、俺が言った事の意味がわからないでいた。

「綾さん……最初で最後つて、どういうこと？ それに、私は綾さんのこと嫌いなんかじゃないよ？」

「……行けばわかるさ」

それだけ言つて、アリシアを抱えたまま転移ポートに立った。



プレシアとリニスの戦いは苛烈をきわめていた。

海鳴市の市街地上空で、黄色と紫の魔力がぶつかり合う。

片方は自分の愛娘に会うために。もう片方は自分の君主に安らかに眠ってもらうために。

互いに相手を知っているため攻撃をかわし、そして互いに知っている相手の隙をつい

て攻撃を入れる。互いに相当のダメージを受け、傷だらけとなっている。闇の欠片である二人にとっては活動限界が近かった。

『——プレシアッ!!』

綾が二人の元に辿り着いたのは、そんな時だった。

ビルの屋上から、ありつたけの声と共に発せられた念話。リニスにとっては初めて聞く、プレシアにとっては聞き覚えのある声に二人は動きを止め、下にいる綾を見る。

そして二人は、綾に抱きかかえられている少女を目にすることになった。

「フェイト……?」

リニスはまずそう認識しようとした。だが、先ほど会ったフェイトよりも幼く見えるし、フェイトならもうこちらに飛んできてもおかしくないはず。怪我や魔力枯渇の可能性も考えたが、そのようには見えない。

(だとすると、この子は……)

リニスが答えを導き出すのと、プレシアが二人の元へ降りようと動き出したのは同時だった。

「アリシア……なの……?」

「……うん。アリシアだよ、お母さん」

降りして。とアリシアは綾に言う。綾はアリシアを足から降りし、立たせた。

アリシアは歩き出した。まだリハビリ中の脚、うまく力が入らない。それでも一歩一歩、プレシアに近づいていく。

「あつ……！」

しかし躓き、前のめりに倒れかかる。プレシアはすぐに駆け寄り、アリシアを倒れる前に支えた。

長い間触れられなかった母の温もりに触れ、アリシアの目から涙が溢れる。

「ああ……お母さん……会いたかったよお……」

利き手である左手でプレシアの頬を触る。

その瞬間、感極まったプレシアはアリシアを強く抱きしめた。

「ああ……アリシア、アリシア……!!」

「お、お母さん……苦しいよ」

アリシアが軽く抗議するも、プレシアが離れる様子はない。遅れて屋上に降り立ったリニスはどうすればいいのかわからず、そのまま呆然と立っている。

『プレシア、そしてリニス。二人に言うておくことが二つある』

プレシアとリニスの二人に、綾は念話で声をかけた。

『一つは、アリシアは今もあらゆる真実を知らないこと。ここはアリシアの話に合わせてほしい。もう一つは……逝く時になったら念話をこちらにかけてほしい。それまで

は、席を外す』

そう言つて、綾は扉の向こうへと姿を消した。いるのはプレシアとアリシアとリニスの三人のみとなった。

「お母さん、私ね、リハビリ頑張つて歩けるようになったんだよ」

「……ええ。偉いわアリシア」

「友達もたくさんできたし……あ、妹のフェイトとも仲良しだよ！」

「ッ……」

フェイトという名にプレシアは一瞬嫌悪感を現そうとしたが、先ほどの綾の言葉と、少し前の由衣の言葉を思い出した。

——アリシアの話に合わせてほしい。

——アリシアちゃんと会う時には、優しいお母さんでいてあげてくださいね。

(……仕方ないわね)

プレシアは内心で溜め息をついた。アリシアと話せる最後のチャンス、それを棒に振るような真似をする訳にはいかない。

「……お母さん？」

「……ええ、ちゃんと仲良くできて偉いわアリシア」

アリシアの頭を優しく撫でる。アリシアは少しくすぐったそうに、それ以上にとても

嬉しそうに破顔した。

そしてアリシアは、プレシアの後ろで立ち尽くしているリニスに気がついた。

「あれ……あなたは？」

「あ、その……リニスと言います。プレシアの使い魔をしております」

ぺこりとお辞儀をするリニス。アリシアはリニスの名を聞いて少し意外そうな顔をした。

「リニスなの？ ……そっか、リニス、使い魔になったんだね。おいで……」

「え？ あ、はあ……」

言われるがまま、リニスは手招きするアリシアのへと近づく。

アリシアと視線を合わせるためにしゃがみ込む。すると、アリシアがリニスの頭を撫で始めた。リニスが身につけている帽子はプレシアとの戦闘でなくしていた。

「使い魔になっても、リニスはリニスなんだね。えへへ、懐かしいなあ」

懐かしむアリシア。しかしリニスにとつて使い魔としてアリシアに会うのは初めてである。使い魔となつてから撫でてもらったことすらなく、使い魔となる以前の記憶もなくした。だがこうして撫でられて、この感触がどこか懐かしい。

（あ……。ああ……そうだ……）

思い出した。

優しい小さな手のひら。元気で温かな笑顔。

プレシアと、自分と、彼女の三人で過ごした、穏やかで幸せな日常。

「——はい。本当に……久しぶりですね……」

目頭が熱くなるのを感じながら、リニスは微笑んだ。

プレシアが望んだ一時は、リニスとも一緒になつて取り戻すことができた。

——しかしこれは、夢だ。

夢は、いつか覚める。

「あれ……？ お母さん、リニス、体が小さくなつてるよ……？」

アリシアが二人の変化に気づく。

戦闘によるダメージ、そして心残りがなくなつて、プレシアもリニスも消滅を始めていた。少しずつ身体が崩壊し、体積を小さくしていく。

「そう……もう、逝かなきゃならないのね……」

「お母さん、どこかに行つちやうの……？ やだ、行かないでよ！」

アリシアは駄々をこねてプレシアに抱きついた。せつかく会えたのに、また離れ離れになりたくなかった。

「大丈夫よ」

プレシアは優しくアリシアの頭を撫でた。



「今度はとても遠いところかもしれない……でも、お母さんはずっとあなたを見守ってるわ」

「行っちゃやだ、行っちゃやだあ……!」

泣き声でわがままを言うアリシアに、プレシアは困り顔になる。そうしている内にも崩壊は進んでいる。

そこでリニスは、アリシアとプレシアの二人を優しく抱きしめた。

「リニス……?」

プレシアが問う。

「アリシア、お休みしましょう。このぬくもりを忘れない内に、忘れないように……昔、よく一緒に寝てましたよね?」

プレシアは過去の記憶を探る。アリシアとの思い出からか、すぐに探し当てた。

確かに、二人と一匹、よく一緒に寝ていた時があった。アリシアが山猫だったリニスを抱いて、そんなアリシアをプレシアが抱いて。

「……ええ、そうね。休みましょう、アリシア」

「……うん」

アリシアは小さく頷いて、プレシアの胸に顔をうずめた。今ある力でしっかり母を抱きしめる。

「大丈夫よ。お母さんはずっと、あなたのそばにいるわ」  
「私もです。きつと、ずっと……」

それから、アリシアが抱きしめていたものが急に軽くなった。

最後のひとかけらも崩れ、粒子は風に乗ってどこかへと飛んでいった。視界がぼやけているせいで、アリシアは粒子の行方を追うことができなかった。

プレシアとリニスの粒子を攫っていった風は、まだ少し冷たかった。夢から覚めるには十分だった。

「……うええ……っ」

一人取り残された少女は、その場で泣きじやくった。



綾は、屋上出入り口の前に立っていた。

扉は開いている。その先では独り座り込んでいるアリシアが見える。こちらに背を向けているが、泣いているのが聞こえていた。

綾は携帯を開いた。いくつか操作して、携帯を耳にあてる。

「……俺です。ええ、終わりました。ゲートの用意を……帰還します」

用件を伝え、携帯を閉じる。

もう、ここに留まることはできない。闇の欠片がいつここに来て襲われるのかわからないからだ。

アースラに戻るため、綾はアリシアの元へ歩き出した。

## 第七十五話

——カタン。

「アリシアが、プレシアに会いに行ったそうですよ」

——コトン。

「へえ、結果は？」

「目の前でプレシアとその使い魔のリニスが消滅したのがショックだったようで、部屋に籠っているとのことですよ」

「全く酷いねえ。案内したのはどこのどいつなんだかね」

カタン。

コトン。

「あなたのオリジナルですよ、ウレク」

「ハハッ、まあ、だろうとは思ってたさ」

カタン。

コトン。

……カタン。

「んで、そのオリジナルは今何してんだい？」

コトン。

カタン。

コトン。

「医務室にいる仲間を見て回っているだとか」

「ふーん」

カタン。

コトン。

カタン。

コトン。

カタン。

コトン。

カタン。

コトン。

カタン。

コトン。

「……だあつ！ うぬら、何呑気にチェスなどしておるのだー!!」

「うるさいです、王」

「黙つてろ、じゃじゃ馬王」

「んなっ……!」

配下と部品に一蹴され、ダイアーチェがたじろいだ。

アースラの一室。マテリアルズの私室となっているそこで、ダイアーチェの言うとおりウレクとシユテルはチェスをしていた。優勢はウレク。

「き、貴様ら、やはり我のことを尊敬しておらぬな?」

「勝負の邪魔をしてくるなら、例え王でも容赦はしませんよ」

「俺にとつちやあ尊敬の対象でもねーしな」

しれつと答える二人。その間にもチェスがサクサクと進められている。というより主な意識はダイアーチェではなくチェスに向いている。

握った拳をわなわなと震わせて怒りを我慢しているダイアーチェを無視して、ウレク

はおもむろに懐から水色の菓子袋を取り出し、迷うことなく真後ろに放り投げた。

「キヤーツチ！ ウレクよくわかったね！ なんてわかったの？」

菓子袋を落とすことなく受け取ったのはレヴィだった。手に入った物に嬉しそうな表情をしながら尋ねる。

ウレクは当然のように一言。

「心配が丸分かりだ」

「へー。あ、お菓子ありがとー！」

「何レヴィは餌付けされておるのだ、このうつけえ!!」

「ですからうるさいです、王」

「ほらよチエツクメイト」

「おや、詰み……ですね。私の負けですか」

マイペースな連中を前に、こいつらを従えたのは間違いだっただかもしれないという考  
えが、わずかに頭をよぎったディアーチエであった。

……。

……。

……。

「ウレクよ、貴様に一つ訊きたい」

シユテルと何度かチエスを続け、全勝記録を打ち立てたウレクに向かってディアーチエはそう声をかけた。

「あん？」

「なぜ、あの時我を庇った？ あの程度なら、我もいざれ回復していたであろうもので。それを、回復もできぬ貴様がなぜ身代わりになどなったのだ？」

あの時とは、ユーリがディアーチエらマテリアルズ三人に攻撃した時、ディアーチエを庇ってウレクが負傷した時のことだ。シユテルとレヴィが回復できたのだから、当然ディアーチエが回復できた可能性も高かった。

「さてね。そんなこと忘れちゃったぜ」

「とぼけるな」

「気分屋なんだよ俺は」

やや強い口調で強引に話を打ち切ろうとする。ディアーチエは小さく舌打ちした。

「では、こちらからも質問がいくつか」

そう声をかけたのはシユテルだった。

うっとうしそうに睨むウレク。しかしシユテルはそれを気にすることなく質問を始めた。

「まず、あなたは自身をU—Dの感情部品と言いましたが、あなた自身が彼女の部品なの



ですか？ それとも、あなたのどこか一部がその部品なのですか？」

「どっちかってーと俺自身は闇の欠片に近い。というか、感情部品を中心に闇の欠片で駆体を構築したようなもんだ」

「では、そのユーリの感情はあなたの行動に介入することはあるのですか？」

「ないね。もしゴチャゴチャ言われてもねじ伏せるだけだ」

「次の質問です。あなたがユーリと呼んでいる、システムU―D。彼女もあなたのような性格あるいは人格だったのですか？」

「NOだな。細けえところまでは覚えてねえが少なくとも違う」

「そうですか。では、四つ目です」

あなたは、何ですか？

「あ?」

「ユーリの部品だと言いながら、ユーリの人格が宿っている訳ではなく、ユーリの感情で動いている訳でもない。ならあなたは、一体何なのですか? 王と質問が被りますが、あなたの残虐な人格とは矛盾した、私達やユーリを助けるといふ行動の訳と目的も教えていただきたい」

「目的って……」

ウレクは何かを言いかけようとして、しかしその口を閉じた。

「……やめだ。どうせ言ったところで何も変わらねえさ。最終的にそれを完遂できりやあいいんだよ俺は」

「……そうですか」

「ただ、これだけは言っておこうかね」

言つて、ウレクは口角を吊り上げてニタリと笑った。

「俺には気に食わねえモンがある。この作戦が成功すれば、俺はそいつを否定できるの

さ」

「……………」

「おい、それはどういう——」

ディアーチェが尋ねようとするが、しかしその言葉は艦内に響き渡るアラートに遮られた。

「んん？ 何!?!」

「どうやら、パーティーがおつ始まるみてーだぜ」

ウレクは楽しそうに笑い、ふらりと部屋を出て行った。

アナウンスが流れる。

——海鳴市内にて闇の欠片の大量発生を確認。出撃可能な戦闘員は直ちに現場に急行せよ。



仮面の少女とスナイパーの少年は空を見上げた。

闇のような夜の空に、闇の欠片達の魔力が星のように煌めいている。

「そろそろ終盤かしら?」

「みたいですねえ。すげえ数だ、ぶるつちまいそうですよ」

「向かってくる欠片達を狩りながら、U—Dを探しましょう。援護をお願いしますわ」  
「了解であります」

それぞれの得物を手に、二人は夜の海鳴市を走り出す。

ビルの屋上から、才はビルの周囲を見下ろしていた。

次々の現れる闇の欠片。一部はこちらをすでに捉えている。

「……行くか」

白杖のカートリッジをロードする。

飛翔魔法を展開し、彼は闇の欠片の群れへと躍り出る。

アラートとアナウンスが鳴り止んでから、綾は自分の得物である黒刀とレイピアを手  
に取った。

「……行くんですか？」

ベッドの上で上体を起こしたアミタがそう尋ねた。

綾は頷いた。

「誰かに行くなど言われても、行く理由があるからな」

「よーおオリジナル。迎えに来てやったぜえ」

声をかけられる。開いた扉に背を預けてウレクが待っていた。ウレクは綾に近づくと彼と一体になり、左腕の義手が黒く染まる。

それから誰かの走る足音が近づき、由衣が部屋に駆け込んできた。

「はあ、はあっ……綾さん、行きましょう！」

「ああ」

綾は応えると、由衣と共に海鳴市に向かうべく部屋を後にした。

決戦の時は近い。

## 第七十六話

「スパアークッ!!」

スパライトフォーム姿のレヴィが放った大量の電刃衝は、その誘導性によってユーリの元へと群がっていく。

ユーリはその誘導弾に対して減速することなく、右へ左へ、振り子のようにして回避してみせた。

「光翼斬!」

「ブラストファイヤー!」

レヴィの魔力刃に加え、シユテルの炎熱砲による同時攻撃。

二人の攻撃もユーリにはヒラリと避けられてしまうが、その避けたルートこそがシユテルの狙いだった。ユーリの進むルート上に仕掛けられた設置式バインドが作動し、ユーリを絡め取る。

「今です!」

バインドの起動とその合図はほぼ同時。そして墮翼を羽ばたかせ、ある限りの速度を持って綾が突撃したのもほぼ同時だった。

「うおおっ!!」

高速突進からの刺突。しかし黒刀が貫くよりも早くユーリはバインドを引き千切り、綾をよけた。

「ちっ……!」

「スピーアー」

ユーリが手をかざす。自分を覆うように球状に展開された無数の槍が、全方位に一斉に撃ち出された。

綾はできるだけ最低限の動きで回避する。いくつか身体を掠めそうになって冷や汗が出たが、当たってはいない。チップは無事だった。

狙われないようにするため、ユーリを中心にして円を描くように飛翔する。

「タイムリングはいいと思ったんだがな……」

『もつと早くしろってこったなあ』

(これ以上タイムリングを早めるとなると、バインドが作動する前になるな……)

それは厳しいと考えた綾は、シユテルに指示を出す。

「シユテル! もう一度トライしてくれ!」

「わかりました」

再度シユテルとレヴィのコンビネーションアタックが仕掛けられる。

二人の攻撃による誘導、そして再度捕縛。綾は飛び出した。

(今度こそ……!)

ガギインツ!!

だが、今度は表面で『何か』が弾き、黒刀が通ることはなかった。

見た目からはわからずに、ユーリの多層防御機構。これがある限り接続どころか攻撃も通らない。

ユーリからの魄翼の爪を回避し、後ろに下がる。

「やはりあの防御層がある限り、何をやっても通らないようですね」

「………みたいだな」

自分のところにやってきたシユテルにそう答え、ユーリを見据える。

大量発生した闇の欠片を由衣と共に倒していたところ、ウレクがユーリを捕捉した。由衣をアースラに帰し、様子を見るために向かうて、力の補充をしているユーリがいた。ウレクが言うには、力の補充が完了されるとユーリに近づくことすらできなくなるといふ。加えて指令も来たため、途中で合流したシユテルとレヴィと共にユーリに挑んだのだった。

差出人：管理者



件名：緊急指令

内容：

現在U—Dは力を溜め込み、その充填率は85%となっている。

U—Dの力の充填を阻止せよ。

成功条件・報酬：規定時間後の充填率が85%以内となっている。85%から充填率の数値を引いた数だけスターチップを配布。

失敗条件・罰：規定時間後の充填率が85%を超える。充填率85%を超えた数だけスターチップを剥奪。

「……とにかく防御層を削る。俺が前に出るから、シユテルは後方からの支援を頼む」

「ウレクのオリジナル。僕は？」

「お前達がさつき言ってたワクチンプログラムってやつを、全部一撃で撃ち込めるように詰め込んで待機してくれ」

「一撃に賭けるのは、かなり大きなリスクを伴いますが」

「むしろ二撃三撃もチャンスを作れると思うか？」

「……………」

「……………異論はないな？ 行くぞ」

綾はユーリの元へと飛び出した。

手始めに首の両側を狙って黒刀とレイピアを振るう。硬質音と共に両方とも弾かれた。

「攻撃、開始」

彼女の振るう腕の動きに合わせて魄翼の爪が襲いかかる。

それをよけ、斬る。また弾かれる。

再び来る爪を、今度は後ろに下がって回避し、魔法陣を展開。

加速強化<sup>アクセラ</sup>、付与。

（一撃じゃ足りねえなら、いくらでも食わせてやる！）

斬る。斬る。

魄翼の正拳突き。黒刀で逸らす。

相手のエターナルセイバー。くぐって近接状態を維持。

加速強化追加付与。

（まだ、上がる……！）

弾かれる。弾かれる。弾かれる。弾かれる。

爪を回避。後ろに下がった瞬間、シユテルからの砲撃。まだ効かない。

さらに斬る。唐竹、袈裟斬り、薙ぎ、斬り上げ、突き。

加速強化追加付与。

加速強化追加付与。

加速強化追加付与。

加速強化追加付与。

「う、ぐ……っ!!」

強化超過。込み上げてくる吐き気を綾は飲み込む。

隙ができてしまった綾の腹に魄翼の拳が直撃した。肺の空気と共に我慢していたのもまで嘔吐する。そして、目の前で二つのスターチップが砕け散る。

魄翼の拳が再び来る。脚に防御強化を施し、その拳を蹴って後ろへ跳ぶ。拳を蹴った脚がミシリと音を立て、また二つスターチップが砕けた。ダメージ判定が出たということになる。綾は小さく舌打ちした。

「パイロシューター!」

シユテルからの魔力炎弾がユーリへと向かう。

ユーリは飛行にて回避。追いかけてきたところをエターナルセイバーによって一網打尽にする。

「ルベライト!」

ユーリの足が止まった隙にシユテルが捕縛を試みる。が、あっさりとその拘束が引き

千切られてしまう。

拘束が解かれたユーリに綾が斬りかかる。弾かれるが、それでもさらに激しい高速連撃を入れ続ける。

が、

「ぐ、うつ……」

グラリと、綾が揺れた。先ほどの腹部へのダメージ、加えて行き過ぎた強化による負荷が腹部のとてつもない痛みと吐き気として綾にのし掛かる。

その隙を逃すほどの情は今のユーリにはなかった。綾を引き裂かんと魄翼の爪が襲う。

まずいと思っても、もうよげきれない。——そのはずだった。

——ダアンツ!!

「……っ!?!」

ユーリが何かに撃たれた。その衝撃でユーリが仰け反り、攻撃も中断となる。

(狙撃……誰だ!?!)

方角的にシユテルではないとはすぐにわかった。レヴィやディアーチエに狙撃ができとは思えない。才ならできないことはないだろうが、それなら狙撃の前後に念話が来てもおかしくない。なのはなら事前に念話が来るだろうし、彼女の場合砲撃を撃つだ

ろう。

つまり、それらとは別の誰か。おそらく、狙撃能力を持った転生者だ。だが、今はそれを長々と気にしている場合ではない。

黒刀とレイピアを同時に振るう。弾かれる感触と音がした。しかし先ほどとは違い、剣を振るった箇所は防護服に傷がついていた。

(やはり……防御層が弱まっている……！)

狙撃で仰け反ったということは、その狙撃が効いたということになる。ということは必然的に、ユーリの防御が弱まっていることを意味していた。ダメージとしての通りは薄い、それは綾の攻撃自体が威力が低いことを考えると、レイヴィの火力なら通る可能性はある。

ならば次に自分がやることは、レイヴィの攻撃——ワクチンプログラムを通すための補助をすること。

念話を飛ばす。

『レイヴィ！ 合図が出たらすぐ撃ち込めるよう準備しておけ！』

『いつでも出れるよ！』

『シユテルは補助を！』

『わかりました』

綾はレヴィの動きが感づかれないようにする為の囮として、ユーリに斬りかかる。高速化状態での乱舞。攻撃し身体を捻る度痛みと吐き気が綾を襲うが、歯を噛み締め耐える。

斬る。斬る。斬る。

エターナルセイバーによる唐竹。かわす。

ユーリ自身のハイキック。くぐる。

斬る、斬る、斬る、斬る。

「弾幕陣、展開」

魄翼が大きく広がった。警戒して後ろに退避。

膨大な数の魔力弾が飛んできた。横へ飛ぶ。

「エターナルセイバー・カノンモード」

続けて広範囲砲撃。間一髪でかわす。

隙をついて、ユーリの後ろからシユテルが接近。ルシフェリオンの先端をユーリに押し付ける。

「ディザスターヒートツ!!」

ゼロ距離での三連砲。直撃し、ユーリが吹っ飛ぶ。

飛んできたユーリを左手で掴む。バチチツ、とウレクの魔力がショートする。

「ナパームプレス」

爆発がユーリを包んだ。綾は後ろに下がって様子を伺う。

「それなりのダメージは与えたでしょうか」

「まだ一区切りもついてないぜ。多分な」

ウレクはこちらに來たシユテルにそう答えた同じく綾も、ここまでのダメージが効いているとはさほど思っていない。

煙から魄翼の腕が飛び出してきた。

綾は墮翼で飛んで退避する。が、ユーリの狙いは綾ではなかった。

二つの腕によって、シユテルが捕らわれてしまった。

『……チツ！』

「ウレク！ 方向を変えろ！」

シユテルに意識が向かい、ウレクが操作する墮翼の動きが止まる。綾が指示するが、それが叶う前に弾幕が押し寄せてきた。

黒刀とレイピアで捌こうとするも、多勢に無勢、弾幕が容赦無く綾を襲う。被弾数十発。二十ものスターチツプが一気に失った。

そして綾もシユテルと同様魄翼の腕に捕まえられる。さらに二つチツプが消える。

綾とシユテルを掴む魄翼に魔力が集束していく。

「ナパーム——」

「——行けっ」

綾が、そう呟いた。

バチバチという電流の音が鳴る。魄翼からではない。ユーリの背後からだ。

「干渉制御ワクチンを詰め込んだこの一撃……!」

大剣形態のバルフィニカスを振りかぶったレヴィ。ユーリの魄翼は両方とも埋まっている。

「ブラスト——!」

「ヴェスパーリング」

「レヴィ——ッ!!」

しかし、バルフィニカスが振り下ろされる直前にユーリの手から発せられたリングがレヴィを弾き飛ばした。バルフィニカスが手離され、宙を舞う。ようやく駆けつけたダイアーチエが叫んだ。

『オーバーアシストプログラム、起動』

「お、おとおおおおっ!!」

まだ、終わっていないかった。ウレクによって過剰強化を受けた綾が力尽くで魄翼の腕から抜け出し、宙を舞うバルフィニカスを掴んだ。そして振りかぶる。



「今度こそ逃がさねえ！」

バルフィニカスを掴む手に力を込める。魔力刃がレヴィの魔力とウレクの魔力で混ぜられて染まる。

「はあああああああつ!!」

一閃。直後に膨大な魔力で爆発が生じた。

爆風に飛びされまいと踏ん張る綾。しかしそこにウレクの声がかかった。

『ケケツ。さあて、ゲームの最終準備だ』

「——ッ!?!」

直後、融合を解いたウレクに蹴り飛ばされた。蹴られた衝撃と爆風に流される。

煙から飛び出してすぐ、煙から何か綾の目と鼻の先まで迫った。赤黒いそれは、針状に変形した魄翼の爪だった。

上昇のベクトルを失って落下する。レヴィが捕まえてくれたおかげで落下は止まった。

「よつと！ ウレクのオリジナル、大丈夫!?!」

「ああ……っ、ゲフツ、ごほっ」

綾は答えようとして咳き込み、血を吐く。強化魔法や過剰強化による負荷の影響だった。

そこにダイアーチェも駆けつける。

「おい貴様！ シュテルはどうした!?!」

「……わからない。あの中にウレクも残ってる」

綾は少しづつ晴れていく煙に目を向けた。

やがて煙が失せ、三人の姿が見えるようになる。

ユーリとシュテル、そして、シュテルの盾となり幾つもの針に貫かれたウレクがいた。

## 第七十七話

「正体不明のプログラムによる干渉を確認。現状での戦闘続行は危険……撤退します」

ユーリは魄翼を元に戻し、どこかへと飛び去っていった。

支えるものを失い、落下しかけるウレクをシユテルが支える。

「なぜ……私を庇ったのですか。あなたがいなくなれば、作戦そのものが成立しなくなるというのに」

シユテルはウレクの行動が理解できないでいた。これがディアーチエを庇ったのであれば、ユーリの制御に必要な存在を守るためとしてまだ理解できる。しかし、マテリアルが三基で一つの存在だとしても直接ユーリの制御には関わらないシユテルを守る理由はないはずだった。

ただ、理由があるとすれば――

「……俺には、システムU―Dの記憶がある……」

ウレクは薄ら目を開け、独り言のように語り始めた。

「俺達が、人の姿を得るより前から……俺達は四つで一つの存在だった。――家族みてえなもんなんだよ……そんな記憶を持ってたせいで、手前の命欲しさに見捨てるなん

てできなかつたじゃねえか……」

理由があるとすれば、それはウレク自身の意志と感情——すなわち、心と言うべきそれだった。

ピシリ、という音が立った。ウレクは崩壊寸前の状態になっていた。

そこへ綾、レヴィ、ディアーチエが駆けつける。

魔法陣の床を張り、そこにウレクを寝かせ、綾も足をつける。

「ウレクー!!」

「おい貴様、しつかりせぬか!」

レヴィとディアーチエが心配の声をかける。ウレクは周りを見回した。そして綾の姿を見つける。

綾を見つけたウレクは、おおよそ誰も理解できないような行動を起こした。

「——クツ、クククカカツ……」

笑い出したのだ。

今にも死が目の前にあるその顔で、先ほどの死にそんな口調とは打って変わって、いつものように、楽しそうに楽しそうに、笑う。

「……何がおかしい?」

マテリアルズが啞然としている中、綾がそう問うた。

「カカカッ……いやあ、嬉しくて嬉しくてなあ。これで俺の目的の一つが果たされるってことに気づいたんだよお」

「目的だど？」

「ああそうだよ。朝霧 綾」

ウレクは普段はオリジナルとしか言わない、綾の名前を口にしたら。何かあると綾がとつさに警戒するには充分だった。

ウレクの口が動く。

「残骸の俺は、コイツを守れたぞ。そこんところどう思うよ？ 『リリ』を守れなかった、オリジナルのお前さんはよお！」

「——ッ!!」

『リリ』の名を聞いた瞬間、綾の怒りが沸騰した。ウレクの胸倉を掴み、激しく揺らす。「お、おい！ 離さぬか！」

「お、落ちて着いてよ。ウレクが消えちゃったらホントにマズいんだから！」

「リヨウ、落ちて着いてください。ウレクも妙な刺激を与えるのはやめた方がよろしいかと」

マテリアル三人が慌てて止めに入るが、当の二人は全く聞く耳を持たなかった。

「キキキッ、そうだ、その面だ！ てめえのそのいつまでも拭えやしねえ負け犬の顔が俺

は見たかったんだよお！」

「何だと……っ！」

「こんなことやつてりや人生変わるとでも本気で信じてたのか？　んな訳ねえだろ。いくら頑張ったって過去が変わるとかありえねえ。所詮お前は負け組のまんま。そんなもんお前だつて分かり切った話だろう。ましてやお前の場合にはもはや解決だつて叶いやしねえ」

ギリツ、という歯軋りが綾の奥歯から鳴った。

「……答えろ。お前は俺をどのくらい知っている」

「全部だよ。ALL、ALL、オール！　てめえが味わった後悔、屈辱ぜええんぶ！

俺の頭ん中だ！」

「てめえ……っ」

「まあ、そんなことあどうだつていいんだ。それよりこれから先のことを教えてやろうと思ってるが？」

数秒の沈黙後、綾は苛立たしげに舌打ちした。その音と綾の表情はウレクの笑みを更に濃くする。湧き上がる怒りをどうすることもできないまま、ウレクの話が始まる。

「これから俺はお前の左腕にユーリの感情部品とそのインストールシステムを託して、それから気を失うだろう。そうなればお前は、俺からの補助が受けられなくなる。墮翼

で飛ぶことも、俺の魔力、魔法を使うことも、オーバーアシストを受けることもみんな、できなくなるってことだ」

それはすなわち、綾の戦闘能力が元に戻るに等しく、綾にとっては致命的な問題だった。

すでにウレクの身体が崩壊を始めていた。ウレクは綾の左腕を掴み、魔力を発する。

「じゃあな。過去が変わる訳でもねえこのクソみてえなゲームを、せいぜい頑張れ」

憎たらしい笑みが砕ける。ウレクが綾の左腕に溶け込み、黒く染めた。

掴んでいたものが消え、綾の腕は力なく垂れた。



その後、なのは達が駆けつけた。

俺は事の顛末を話し、作戦の一部変更を告げた。

早い話が俺が飛べない以上、第二陣の戦闘領域を地上とし、第一陣の人達にユーリを地上まで運んでもらうというものだ。

作戦は第一陣から第三陣までの三つに分かれる。

まず第一陣。シグナムとクロノをメインアタッカーに据えたチームでユーリにある

程度のダメージを与え、また防御層を削っていく。その後、新しく入った役目としてユーリを地上に運んでもらう。協力を申し出たフローリアン姉妹や未来組も加えて戦力と人数は最大規模である。

第二陣。俺と才を中心としたチームで、ユーリと接続して感情部品のインストールを行う。やることはあくまで部品の組み込みなので、チームの人は選はそれを行うための補助役を俺が選んだ。戦力としては最小であり、かつ人数も少ない。

そして第三陣。インストール終了後、飽和攻撃とデИАーチエによる制御で一氣に力タをつける。——これが作戦の大まかな流れだ。

## 第一陣

シグナム

ヴァイタ

シヤマル

ザファイラ

クロノ

アミタ

キリエ



ヴィヴィオ

アインハルト

トーマ&リリイ

第二陣

綾

才

由衣

リーゼ姉妹

第三陣

なのは

フェイト

はやて

リインフォース

シユテル

レヴィ

デイアーチエ

作戦の確認を終え、ユーリの居場所が特定されてそれぞれが持ち場へ向かう中、リンフォースがこちらにやってきた。

「綾……本当に大丈夫なのですか？」

「何がだ」

「その、第二陣が作戦の重要な役割を担っている割には、戦力が心許ないのではないかと……」

「戦闘でダメージを与えるのが目的じゃないんだ。元から火力なんていらぬ。一応、リーゼ姉妹を加えてもいるしな。それにできるだけ少ない人数の方がこちらの作戦上やりやすい」

「ですが……！」

「リンフォースッ」

強い口調と共に睨みつける。そうすることによってリンフォースが萎縮した。

「俺を心配しているのはわかる。だけど過ぎた心配はかえって迷惑だ」

「それは……」

「俺はこれなら成功すると見てこの作戦とチーム編成を決めた。お前はそれを信じて、持ち場につけ」

「……わかりました。……綾、武運を——」

顔を俯けてそう言い、ラインフォースは持ち場へと向かっていった。飛んでいく彼女の後ろ姿を見てため息をつく。

「……綾、あんたさつきから苛立っているんじゃないのかい」

「それで作戦失敗とかなつちやあ笑えねーぞー」

「……わかつてる」

ラインフォースとの会話を聞いていたらしいリーゼ姉妹に言われ、俺はそう答えた。

——俺が苛立っているのはわかつてる。ウレクが遺した言葉に俺は過剰に反応している。ラインフォースには過ぎた心配とか言ってたが、過ぎた怒りをしている俺も人のことを言えやしないだろう。

フウツ、と深呼吸をする。それで少しはクリアになった頭で作戦の再確認をする。

……大丈夫だ。この方法が、計算上最もチップの損失を少なくできる可能性が高いんだ。さつきの緊急指令が終わって現在のスターチップの総数は三十一個。一つも無駄にはできない。いくつかの不安要素もあるが、ある程度の対策も用意した。

空中に投影された画面の中では、第一陣の者達がユーリと対峙していた。

決戦の第一幕が開始される。

## 第七十八話

ユーリの正面にはシグナムとクロノが立っていた。

その三人から少し離れて囲うようにヴィータ、アミタ、キリエ、さらにそれをシャマル、ザフィーラ、ヴィヴィオ、アインハルト、トーマ（リリイとリアクト状態）が包圍している。ユーリを逃がさないようにするための多重包圍網であった。

「脅威判定、十……十一体検知。排除します」

「早速、話をする余地もなしか」

振り下ろされる巨大な爪を、シグナムは引かずにくぐり抜け、すれ違いざまにユーリを斬りつける。

人間の見た目からは想像できないほどの硬い感触。同時に刃を阻む存在をシグナムは感じた。

（朝霧が言っていた多層防御機構——すでに回復されたか）

しかし、綾とユーリの戦闘から大した時間は経っていない。加えて干渉制御ワクチンも撃たれていることも考えると、回復してもその量はさほどのものではないはず。

なら、再び防御層を砕き、それから斬り伏せればいい。

「プログラムカートリッジ『ヴィルベルヴィント』、ロード」

対U—D用のプログラムを走らせる。

プログラムの持続力は持つて数分。その数分で果たすべき役割を全てこなさなければならぬ。

爪がまた迫る。一步踏み込んで避け、同時に回転して遠心力をつけた一撃を後頭部に叩き込む。

そしてすぐユーリから離れる。こちらの攻撃が阻まれている間は長々とした攻撃はできない。一撃ヒットアンドアウェイ離脱で確実に攻撃を蓄積し、こちらに狙いを向けさせる——それが、シグナムが導き出した自分の役割。

そして、

「ブレイズカノン！」

プログラムシステム『オストヴィント』で強化されたクロノが遠距離から火力支援を行って行く。

表情を変えずにただ受けていた先ほどとは違い、ユーリはそれを魄翼で受け止めた。

攻撃を受け止め硬直しているユーリの背後からシグナムが斬りつける。本来正々堂々、一対一を良しとするシグナムだか、そうは言ってられない。

「弾幕陣、展開。全方位斉射開始」

ユーリの頭上に魔力の塊が形成、そこから大量の魔力弾がばら撒かれる。

シグナムは弾幕を縫って進み、炎熱を纏ったレヴァンティンで斬りかかる。

「紫電——ッ!?!」

剣を振り下ろす直前、シグナムの目が驚きで見開かれた。彼女の目には、レヴァンティンと同じくらいの刃渡りに調節されたエターナルセイバーを持ち、シグナムと同じ動きを取るユーリがいた。

「紫電——」

台詞まで同じ。シグナムは内心で舌打ちしつつも、回避は間に合わない身体を可能な限りの攻撃に当てる。

「——閃ツ!!」

「閃」

同じ技同士の衝突。しかしエグザミアの恩恵を受けているユーリの方が魔力、筋力共に大きく勝っていた。

ガアンツ!! と僅かな拮抗も叶わずにシグナムが海面へと突き落とされる。

「シグナム!」

「クロノ執務官、あたしが入ります!」

シグナムが墜とされた穴をカバーするため、ヴィータがユーリに突貫した。ユーリの

顔面にグラブファイゼンを叩き込む。

「かつてえ……！」

が、使用しているのが不完全なプログラムカートリッジであるヴィータでは威力が足りず、防御層が削れる手応えもなく弾かれ、逆に蹴り飛ばされる。

シグナムとヴィータを蹴散らしたユーリは、クロノに背を向け逃走し出した。

「待てっ！」

クロノが射撃で足止めを図るが、ユーリは防御層によつて強引に無視していく。アミタとキリエも追うが、追いつけない。

「逃がさん！」

「ヴィヴィオ、行きます！」

第二包囲網のザフィーラとヴィヴィオがユーリの前に立ちはだかった。

ユーリは速度を緩めることなく、邪魔な二人をどかさうとエターナルセイバーで薙ぎ払う。それをザフィーラはくぐり抜け、ヴィヴィオは飛び越えてユーリへ向かう。

ザフィーラの拳はユーリのボディをとらえようとして、しかし無効にされる。逆に魄翼の腕が襲いかかり、ザフィーラは防ぐものの、こちらは押し潰されるような力にミシミシと身体が悲鳴を上げた。

「アクセルッ！」

足が止まっている隙を狙ったヴィヴィオのアクセルスマッシュ。その直撃も、まだ効き目がない。

ユーリはヴィヴィオの方が脅威と判断したのか、ザフィーラを押しつけて魄翼で彼女に襲いかかった。

魄翼の二本の腕に加え、小型のエターナルセイバー二刀流による四連攻撃。ヴィヴィオは攻撃を全て見切り、最小限の動きで避ける。そして、攻撃後の隙を狙い、カウンターをユーリの顔面に打ち込む。

「——ッ!？」

直後、ガリツという音と共にヴィヴィオの顔が歪んだ。

ユーリはヴィヴィオの拳を歯で捕らえていた。歯は拳の皮膚と肉を裂き、骨にヒビを入れる。下手に振り解こうとしたら食い千切られる状態だった。

それでもヴィヴィオはアクションを起こそうとするが、魄翼の砲撃がヴィヴィオを吹き飛ばす。

しかしヴィヴィオもただでやられはしなかった。例えば自分がやられても、次のための布石を残した。

最後に置かれた遅延型の拘束魔法。それが作動しユーリの身体を巻きつける。その拘束はすぐに破られてしまうが、その一瞬で充分だった。



「霸王……」

後ろに、すでに構えたアインハルトがいた。足先から練り上げた力を拳に籠める。

「断空拳ツ!!」

アインハルトの一撃がユーリの防御を突き抜けた。ユーリは吹き飛ばされる中即座に体勢を立て直し、同時に魄翼から槍を二本生成して放つ。

「はああつ!!」

「でえいつ!!」

しかしアインハルトを狙ったその二本は、アマタとキリエの大剣（ハウエイエツ）ザツパーによつて弾かれた。弾いた反動で二人の顔が歪むが、怪我はない。

ユーリはすぐさまさらに大型の槍の生成を行う。しかし、

『させない!』

「クリムゾンストラッシュユ!」

トーマとリリイがそれを止めた。真紅の飛ぶ斬撃が槍を「分断」し、破壊する。

反撃を無効化されたユーリ。しかしそれだけじゃない。いつの間にか、水色のスフィアが周囲を漂っていた。同時に彼女の感覚機能があることを察知する。

「極度の気温低下……緊急回避——」

「遅い!」

デュランダルによる空間凍結。スフィアを中心に発生した氷がユーリを飲み込んだ。

「シャマル、転移急いでくれ！」

「はい！」

シャマルが旅の鏡によって氷漬けのユーリを転移しようとする。

だがユーリが膨大な量の魔力放出が氷を砕き、旅の鏡も吹き飛ばした。

「弾幕陣展開……」

魔力の塊が形成される。先ほどの物よりもさらに巨大な塊となっていた。弾幕の量、威力が強力になるとう想像は容易だった。

「全方位斉射——」

破裂せんばかりに膨れ上がった魔力。

しかし遠くから、この魔力を放とうとする彼女を狙う者がいようとは、誰も予想だにしていなかった。



第二チームが控えている場所からほど近いビルの屋上。そこには双眼鏡を手にする少女と狙撃銃を構え、スコープを覗く少年がいた。以前、海斗達とユーリの戦闘に乱入

し、海斗達の窮地を救った二人組だった。

二人が見つめる先ははるか遠く、海上にいるユーリの姿があった。少年が覗くスコアの標準はユーリを中心に押さえている。

ユーリに標準を合わせたまま待機しているよう少年に命じていた彼女が口を動かした。

「撃ちなさい。ただし、半分で」

それだけの言葉。少年は従う前に、スコープから目を離さないまま少女に確認の言葉を放った。

「全弾ぶち込むんじゃないやなかったつすか？ やっぱ、地上の奴らの中に気になる奴でも——」

「いいから撃ちなさい」

棘のある鋭い声。少年はそれ以上言葉を続けるのをやめ、息を吸って止め、トリガーに指をかけた。

「アンチプログラムカートリッジ、ロード」

ガシヤンガシヤンと音を立てる。プログラムなので薬莖などは落ちてこない。手持ちの半分のプログラムカートリッジをロードし終え、少年は集中力を最大に高める。

「バンカーショット——撃ちます」

幻影魔法の応用で防音を張られている空間の中、轟音と共に一発の弾丸が放たれた。



突如、ユーリの左腕が吹き飛んだ。

少なくともクロノ達にはそう見えた。魔力弾の一斉射撃が来る寸前、ユーリの左肩が破裂したかのようにして消失した。

それから、ユーリの様子がおかしくなる。グラグラと姿勢が揺れ始める。

「飛行制御困難……魔力低下ヲ確ニン……オーバーアシストプログラム………ハツ動不ノ……ギツ、ギギギギツ——」

ノイズまで聞こえ、これがアンチプログラムであることによりやくクロノが気がついた。すぐに綾に回線を繋ぐ。

「おい綾、アンチプログラムカートリッジの使用は第二フェーズまで取っておくんじやなかったのか？」

『いや、こつちからは何もしていないぞ』

「何……？」

「アンチプログラムはまだ一発も使ってない。第一、ここからでは才でも狙撃は届かな

「い」

確かにそうだ。第二チームの中に超長距離狙撃が可能な人物はいない。

「つまり、僕達が把握していない第三者が狙撃を……？」

『それ以外ないだろ。でも、チャンスだ』

綾の言う通りだった。誰が狙撃したのか知らないが、ユーリは大きく弱体化している。ついには飛行制御を失ったユーリが落下を始めた。

しかしユーリにもまだ手はあった。弾幕を放つための魔力を失っていないことだった。

「ゼンホウ位斉シャ——開シ」

魔力の塊が破裂した。

弾幕というよりもそれは、もはや嵐のような災害だった。

「きゃあああつー！」

「シヤマル……ぐおあ……ッ!!」

「ぐ……うう……っ!!」

『銀十字、どうにか持つて!』

防御をしても防ぎきれない。

そんな中、シグナムとヴィータが弾幕を突き進んだ。

「おおおおっ!!」

「でやああああっ!!」

弾幕を受けつつも、落下するユーリを打ち上げた。打ち上げられたことによつて弾幕が切れる。

「さっさと運べえええええ!!」

満身創痍のシグナムが怒鳴る。

応えたのはアミタだった。ザッパの銃口から射出した魔力糸をユーリに巻きつける。続いてキリエも同様にユーリを縛り、二人でユーリを引っ張る。

「いっけえええええええっ!!」

第二戦闘区域上空に着き、二人で合わせて拘束されたユーリを地上に叩きつけた。

傷付いた体で飛行継続が困難なため、アミタとキリエも地上に降りた。百メートル先ではユーリを墜落させて発生した土煙が舞っている。

「……早く、第二チームへの連絡を——」

キリエが通信を繋げようとした次の瞬間、キリエが砲撃によつて吹っ飛んだ。

「キリエー」

アミタが砲撃が来た方向を見ると、墜落の衝撃でさらに右腕が欠損した上に肌がヒビ割れたユーリが、アミタに向かって這っていた。這っていると云えど、その速さは並み

の人間の全力疾走よりも圧倒的に速い。

「くっ——いうっ……!!」

迎撃しようと動かした腕に痛みが走り、ザツパーを落としてしまう。マズいと思っても遅い。

伸ばした魄翼の爪が、アミタを引き裂こうとして、

——ガ、ギギイインツツ!!

甲高い金属音を立て、爪は何かによつて弾かれた。そして割つて入つてきたその人はユーリを蹴り飛ばして距離を開ける。

弾いたのは、黒く染まった左腕の義手だった。

右手には真つ黒な刀。加えて腰に提げられたレイピア。

「——綾さん!」

「対象を確認——第二フェーズを開始する」

綾とユーリの三度目の対峙。  
決戦は、予測不能の第二幕へと移っていた。



## 第七十九話

「綾……話がある……」

第一陣の作戦行動開始より少し前。才は綾に声をかけていた。

「今回の作戦行動に関して……懸念事項……」

「懸念事項？ ユーリ以外にか？」

綾がそう訊くと、才は無言で頷いた。

「最初のジュエルシードの取り合いは、うまく回避できた……その次の守護騎士や、その次の闇の欠片との戦いでは、争う必要がなかった……でも、今回はそうはいかない……」

「……どこかで俺達を出し抜こうとする奴らがいるかもしれない、か」

「現に、結衣の報告にあった人物の動きが捉えられてない……多分、来ると思う……そこで」

——今回の指令は、僕にとらせてくれないか……？



「強化魔法発動」

魔法陣を張り、綾はそう宣言する。魔法陣が少し輝き、そして収まった。これで見た目には現れないものの綾には様々な強化が施される。

「はーっ、はあー……っ」

しかし、強化を施してから間もなく、綾の息が荒くなっていた。すぐ後ろにいたアマタがそれについて気にしない訳がなかった。

（こちらに駆けつけた疲労……じゃない。オーバーブースト——も、今綾さんにかかっている魔力量からして負荷は酷くないはず………まさか!）

「綾さん、あなたすでに活動に無理が!」

前回の戦闘でのオーバーブーストとオーバーアシスト。このダメージから綾は回復しきれていなかった。

アマタの声を無視し、綾は動き出した。

「ッ!」

平突きで構えでユーリに直進する。綾が得意とする、最短最速の剣術。

しかしその一撃はユーリにあっさりとはよけられる。綾もよけられるのは承知済みだった。黒刀の刃の向きを変え、横薙ぎへと派生する。ユーリはそれをシールドで弾き、逸らす。

感情のないユーリだが、危機管理と学習はしていた。『敵が持つあの黒い刀には触れてはならない』と。

黒刀を完全に避けたユーリが反撃のジャブを放つ。ジャブと言えど、今のユーリが放てば、十分な破壊力を伴うものだ。ダメージが残る綾ではなおさらである。

黒刀を持たない左手でジャブを弾く。生身の肉体ではない左手で受けた場合はダメージとして判定されないのはアミタを庇った時に知ったので、迷いはなかった。

刀を振るう。しかし黒刀の攻撃を警戒しているユーリの防御は硬く、攻撃は通らない。

「セイ■ー」

小型セイバーを持ってユーリが薙いでくる。綾はローリングで回避、続けざまに来るユーリの唐竹をさらに横に転がって避ける。

「魔」弾形成、ハッ射」

十数発の魔力弾が飛んでくるのを、綾は後ろに飛び退いて避ける。

加速強化追加付与×2。再び平突きアックセルの構えを取りユーリへ駆ける。

速度が上昇した突進に対し、ユーリは魄翼の腕振るった。綾の速さに合わせてあり、このままでは直撃する。

だが綾は、引かない。

加速強化強化魔力追加。さらに速度を上げ、魄翼の攻撃を抜けてユーリに肉薄する。  
ガイッ！

プロテクションで受け止められる。弾かれるのではなく受け止め、綾の動きを封じる。

一瞬できた隙に、魄翼の腕による裏拳が直撃した。

ビキビキビキッ！ と全身が破壊されるような力を受け、綾の身体が吹っ飛ばされる。吹っ飛んだ身体は窓を突き破って建物の中を転がっていった。

「綾さんー」

アミタが叫ぶ。

ユーリはアミタのことを気にも止めず、追撃に向かおうと身を乗り出す。そこに、魔力弾が三発、ユーリの身体に命中した。

「……………」

撃つたのは才であった。白杖を持ち、周囲には魔力弾をいつでも発射できる態勢で従えている。

以前ユーリにダメージを与えたことのある才を危険と判断したのか、ユーリは新しく現れた才に向かってガサガサと這い始めた。才はユーリがこちらに向かって来るのを見るや走り始める。

一方、建物内に吹っ飛ばされた綾は受けたダメージに血を吐きながら、次の手を打つべく行動を起こしていた。

「ゴボツ……………俺だ……………ここまで作戦通り、急げ……………」

床に、水色の転移魔法の陣が張られる。

そして、綾はその場から転移されていった。



スナイパーの少年はビルからビルへ、屋上を飛び回っていた。少女とは別行動をとっている。

少年に課せられた目的は二つ。

一つは、自分の手元にある残りのアンチプログラムカートリッジをユーリに撃ち込むこと。

そしてもう一つは、自分達の勝利を確実にするための、敵チームへの妨害工作。

つまり、敵チームのアンチプログラムカートリッジ所持者を見つけ出し、狙撃すること。

(ユーリの強さを考えりや、俺みたいに狙撃ができる奴が安全な場所からプログラムを

撃ち込むはず)

自分がそうするように。でなければ戦闘のリスクが高すぎる。

問題はその狙撃手がいる場所だが、現在ユーリと交戦中の奴がどこかに誘導しているようだとその情報が入っている。そのまま進んで行くと大きな通りになる。見通しがよく、身を隠すにはいいビルも多い、狙撃するにはいい場所である。おそらく、狙撃手がいるとすればそこだ。

「先回りして度肝抜かせてやるぜ！」

ニイツと口元を歪ませ、少年はビルを飛んだ。



後ろから来る魔力弾を、一瞬だけ確認して見切り、器用に回避する。

白杖に魔力を付与させて地面を叩き、砕いたアスファルトを拡散させて飛ばす。ユーリは回避せずに受け、身体が欠けていこうとも気にせずに這ってきていた。

魄翼による砲撃を回避し、才は作戦の地点を目指す。

作戦の地点には結衣や、リーゼ姉妹がいる。そこに誘い込めばアンチプログラムを撃ち込み、さらに弱体化したユーリに綾がインストールを実行することができる。才は

ユーリをそこまで誘い込む役割を遂行していた。

もう少し、この道を抜けたら作戦地点に到着する。

「——機能一部回復。飛行開始」

ユーリが宙に浮いた。アンチプログラムの効力が切れたらしい。

魄翼をはためかせ、ユーリが才へと直進した。

(速い——！)

とつさに才が張ったシールドに、ユーリの蹴りが衝突した。鈍痛を感じつつ、衝撃を利用して後ろへ飛ぶ。

さらにユーリが砲撃を連射してくる。才はなんとか避けつつも、目的の地点へと急ぐ。

開けた通りへと出た。目的の場所だった。

才は仲間への合図を送ろうとするが、ユーリが襲いかかってきた。

「く……！」

魄翼の爪による猛攻。速度も威力も回復し、防ぐのに精一杯だった。

しかし次の瞬間、

パァンツ!!

何か——狙撃弾がユーリを貫いた。再びユーリの声にノイズが入る。

「ギ、ギギツ……魔力低下ヲカク認……シス■——一部■害発セイ……ギギギギツ——」  
さらに才にとって面識のない少女が乱入してきた。仮面で顔を覆った少女は手持つランスでユーリを突き飛ばすと、チラリと才を睨んだ。

勝ち譲らない、という才への牽制だった。

(……彼女が、由衣の報告にあつた人か……)

今このタイミングで出てきたのは、先ほどのアイコンタクトから察するにこちらの妨害が目的なのだろう。決してこちらの手助けが目的ではない。狙撃も彼女の仲間の可能性はそれなりに高い。だが、こちらもやるべき理由がある。

白杖を上に向け、合図である閃光弾を発射する。

後はどう動くか——才は自分のやるべきことを始めた。



(才さんの合図……！)

ビルの一室から合図を確認した由衣は身を乗り出し、長杖を構えた。

長杖を掴む、震えそうになる手をぎゅっと握り締め、ユーリに狙いをつける。

そして由衣は念話を送った。



『由衣です。そちらの準備はどうですか?』

『こっちは、準備できてるよ』

『成功しようが失敗しようが、こいつを飛び出させるからな』

念話を返してきたリーゼ姉妹の言葉に、由衣の緊張が濃くなる。

能力の關係上正攻法で勝つことはできない。勝つには戦闘不能になったと思わせてからの不意打ちをしかける必要があると綾は言い、作戦はアンチプログラムを撃ち込んだ直後、ユーリの頭上から綾が不意打ちをしかけて接続させるといふものだった。全プログラムを一撃で撃ち込むため、プログラムが入ったか否かを問わずに綾の不意打ちは実行するという、他の人によつてまたアンチプログラムが入れられたとはいえ、博打もいいところな作戦だった。

だが、綾はこれなら成功できると言った。

だから、由衣はそれを信じることにした。

狙う。才と以前自分を助けてくれた少女と三つ巴の戦いを繰り広げているユーリを狙う。狙い続ける。

由衣には狙撃の技術などなかった。だが、それでもいいのだ。狙われるように狙い続けるのが、彼女の役割なのだから。



(見つけた……っ！)

才が放った閃光弾から間も無く、少年は由衣の姿を探し当てた。

すぐさま自分のデバイスである狙撃銃を展開し、構える。いつ彼女が撃つかかわからない。もたもたしている余裕などなかった。

銃口に小さな魔力弾を形成し、発射。

ガアンツという轟音、反動と共に飛び出した弾丸は見事長杖のコアを粉々にした。

よっしやあと心中でガツツポーズを取ったのもつかの間、少年は違和感に気づいた。

由衣は突然<sup>目標</sup>デバイスを破壊された瞬間こそ怯んでいたが、それから何が起きたのかを理解し、立ち直るまでが異様に早く感じたのだ。おかしいと思った次の瞬間——由衣の口角が上がっているのを見てギクリとした。

(マズった——こいつ囷か!?)

「おい」

ギクウツ！

先ほどまで誰もいなかったはずの真後ろからの声。

恐る恐る後ろを振り向くと、そこにはすでにレヴァンティンを抜剣しているシグナム

と人間形態のザフィーラがいた。非常に嬉しくない、それどころか最悪のタイミングでの出会いだった。

「こんなところで何をしている?」

「いやー、あはは……何してるんでしょね?」

ドツと汗を浮かべて苦笑いする少年は、誰がどう見ても大ピンチだった。



チーム『反逆者』と才が集めた全てのアンチプログラムを保有している才は、これを撃ち込むタイミングを見計らっていた。

最大の障害は、ユーリ以上にランス使いの少女だった。こちらの妨害が目的とあつて、才もしくはユーリから一向に離れない。今も彼女はこちらの出方を伺っている。

(一瞬でいい。彼女を出し抜くことができれば……!)

由衣からの報告で、予定通り狙撃手は特定されて今頃シグナム達に捕捉されている。後は彼女の妨害をどうくぐり抜けるかだ。これ以上の混戦は作戦に支障が出る恐れがあるため、才が拒否している。

少女に向け砲撃を放つ。最小限の動きで避けられ、次の行動ができぬよう監視され

る。

ユーリは互いに牽制しあっている二人に対して砲撃を放つ。才は回避と同時にユーリへと接近するが、少女が割って入り才に突きを放つ。防いだものの、ユーリの元には届かない。

「……………」

言葉には出さないが、才にも少し焦りが出てきた。

現在撃ち込まれているアンチプログラムの有効時間も残り少ないはず。アンチプログラムの効果は切れると撃ち込むことが困難になるため、有効な間にどうにかしなければならぬ。最悪、失敗する可能性も考えるとその有効時間内に綾を動かす必要がある。

通常のカートリッジを一つ弾く。増強された魔力を加速強化アクセラに充て、少女に突っ込んだ。

迎え撃つてくる突きを避け、白杖を振るう。よけられるがそこを蹴り、怯ませると同時にユーリへと跳ぶ。

しかし少女も速く、すぐに追いついてランスで薙いできた。白杖を盾にするも吹っ飛ばされる。才と少女の距離が空いた。

「ダン幕」展■

二人に魔力弾の嵐が襲いかかった。ユーリからのダメージはチップの消滅に繋がるため、さすがに少女は距離を取り、防ぎ、回避する。

しかし、才にとっては最大かつ、おそらく最後のチャンスだった。引くどころか、才はユーリに突撃する。

一発、二発、三発……計四発の魔力弾を受け、チップを八個失う。それでも才はユーリのもとに辿り着き、アンチプログラムカートリッジをロードした白杖を向ける。この距離なら外さない――。

ドンッ！

外れた。

「なっ……」

才の左手に突き刺さったランス。それが白杖を押し、角度を変え、外された。

ランスの持ち主である少女は離れた場所にいたままだ。つまり、あの場所から投擲し、才の左手を突いたことになる。

思いもしなかった。杖や銃のような遠距離攻撃ならともかく、この離れた距離で、武器投擲で正確に、動く相手の手を狙ってくるなど。

結果として、外した。全てを込めた一撃を。そしてこの時点で指令の勝敗は決まった。外した。

だが才はすぐに冷静さを取り戻した。指令の勝敗は決まった。しかし指令とは別にやるべきことがある。才にはある。そして僅かだがまだ時間がある。

『急げ！』

念話を飛ばす。四の五の言ってられない。時間との勝負。

まだ才が何か残してあると考え妨害をするためか、少女がこちらに走ってきた。才はランスを少女とは反対側に投げ捨て、ユーリに応戦する。

できるだけ動かない。動けば的が外れる。魄翼の爪を防ぎ、逸らす。頭上から振り下

ろされるのも防ぐ。ミシミシと音が鳴る。刺された左手に力が入らない。

上空に綾の姿が見えた。ビルから飛び出し、逆手に構えた黒刀でユーリを後ろ頭上から奇襲する。

グリーンと、ユーリの首が後ろを向いた。

その次には、綾が引き裂かれていた。



## 第八十話

「いやああああつ!!」

リインフォースが絶叫した。

頭上からの奇襲は失敗、何よりも綾の死をモニター越しに見せつけられ、第三陣メンバーに絶望の色が濃くなっていく。

綾の元へ行くためにリインフォースが飛び出そうとして、バインドで止められる。バインドは橙色で、シュテルのものを意味していた。

「っ、離せ……!!」

「落ち着いてください。この場を離れることは、作戦上許されていません」

「いいから離せつ!!」

『はい。なんか騒がしいけど、とりあえず落ち着いて』

新たに展開されたモニターモニターからそう声をかけたのは、アリアだった。

アリアの声に緊張感がないように聞こえて、カチンときたはやてが反論した。

「落ち着いて……綾さんが死んで、それで落ち着けると思えますか!」

『ああもう、だからこいつらには言つといた方がいいって言ったのに……』

アリアは呆れたような顔で眉間を押さえた。その意味がわからずにいると、ロツテが画面内に割り込んだ。

『だーかーら、あたしらが作った分身にいつまでも騙されてるんじゃないやねーっての!』

「——え？」

啞然として、それから画面を確認すると、引き裂かれたはずの綾が正面からユーリを突き刺している姿が映されていた。



わかっていた。上から斬りかかるぐらいでは届かないことは。

必要だったのは、決定的な隙だった。完全な無防備となる瞬間が一瞬でも欲しかった。だから、この作戦を実行させた。念には念を入れ、ユーリに悟られないようにほとんどの者には話さずに。

幻影の俺を殺して、俺という脅威、黒刀を向けられることはないとな奴が思い込み、そこに違和感を覚えるまでの一瞬。

たったの一瞬だった。普通なら間に合うはずがなかった。だが『普通』を凌駕する魔法がある。それを使えばいい。

七重の加速強化とその魔力増強は、その一瞬の条件を満たしてユーリに刃を突き立てた。

「ぐ、うううううっ!!」

身体が悲鳴を上げていて。気を抜けば、その瞬間に意識が飛びそうだった。

まだ刺さらない。刃はユーリの身体を貫かず、ただ押すのみに留まっている。

後先など考える気もなかった。ただあるのは、目の前にいる相手に勝つということだけだ。

——通らないなら、通るまで上げるだけだ!

ストライク  
攻撃強化付与。

ストライク  
攻撃強化追加付与。

ストライク  
攻撃強化追加付与。

ストライク  
攻撃強化追加付与。

ストライク  
攻撃強化追加付与。

「お、おとおおああああああっっ!!」

身体中の痛みを絶叫で掻き消し、魔力で強化された黒刀を押し込む。

ドスンと黒刀が鏝まで深々と刺さった直後、高まっていた体温が急激に下がるような感覚を覚えた。過去に一度経験のある感覚——魔力が切れた時の感覚だった。

「が——ああああああああああああっっ!!!」

ユーリへのインストールが開始され、ユーリが絶叫を上げた。たちまち防護服の色彩が変化し、ユーリの身体中に刺青のような紋様が浮かび上がり、海斗曰く『暴走状態』に変貌する。インストールが始まってすぐ効果があるというのが変な話だが、黒刀が貫いている今、黒刀とそれを握っている、感情部品が入った義手がユーリの一部として成り立っているのかもしれない。しかし今はそんなことはどうでもよかった。

魔法によって発生した効果は魔力とは関係なく残存する。魔力を失いながらも、まだ残っていた強化の効力をもってユーリを押し込み、壁に叩きつけた。

「ああああああああっ!!」

「——っ!!」

ユーリから放たれた突然膨大な魔力波に当てられ、残存強化も失った俺はユーリから引き剥がされ、さらに強烈な蹴りを入れられ飛ばされる。チップが二つ碎ける。このタイミングで、オーバーアシストを使われた。

だがもはや引くことなんてできない。レイピアを抜き、ユーリへと走る。

魄翼が砲撃準備をする。それが発射される前に、俺の後ろから放たれた砲撃が魄翼を撃ち抜いた。

「走って!」

才が援護してくれている。

前へ。

大型のエターナルセイバーが壁を斬り裂きながら横に薙ぐ。それを今度は仮面を被った少女がランスで弾いた。

「行かなきゃいけないの？」

少女がそう訊いてきた。どこか懐かしい声に感じた。

「……ああ」

「なら——行きなさい」

凜とした声。やはりどこか懐かしい。そして、俺はこの人を信用できる。

この人が剣を弾いてくれる。

前へ。

脚が重い。腕も動いてくれない。意識も朧げになりつつある。

身体が動かなくなっていく、感覚も薄れる——この感じは、以前と同じだ。生と死の境目を彷徨う、半死半生の瞬間。

前へ。

もう指令の勝敗はついたも同然だ。ここで頑張ろうとも、チップは増えやしない。それどころか減るのが目に見える。

それでも——前へ！

指令とか関係ない！ 今を勝つために、今この勝負を勝つために前へ！！

「うおおおおおおおつ！！！」

ユーリの身体に刺さったままの黒刀を掴む。再度インストールが開始され絶叫とともにユーリが暴れる。魄翼を腕に変えて俺を押し潰そうとして、才と少女がその魄翼の腕を砕く。

暴れられても黒刀を掴む左手を離さず、左腕をユーリの身体に押し付ける。そして、右手に持つレイピアで鋼鉄の左腕を突き刺した。あるだけの力で、レイピアをさらにその先のユーリの身体に刺し込み、そして左腕を外す。

左腕を外したと同時に、大出力のヴェスパーリングの直撃が俺を襲った。吹き飛ばされ、地面を転がって、そこで俺の意識は途切れた。



「ああああああつ！！！」

綾が吹き飛ばされ、気絶してなお、彼の機転によって黒刀を通した左腕とユーリの接続は成立していた。ユーリの絶叫は止まず、苦しみのままデタラメに周囲に砲撃を始めた。

才は地面に伏したまま動かない綾の元まで下がり、シールドで自身と綾を守る。

仮面をつけた少女は綾を一瞥したかと思うと、砲撃の嵐を避け、ビルを駆け上がっていった。

一通り砲撃して、ユーリは魄翼の腕を振り回し、周囲を破壊しながら上へと上がっていった。しかし暴走しているためか、非常にふらついている。

上空にはなのは、フェイト、はやて（リインフォースユニゾン）、マテリアルズによる第三陣がスタンバイしていた。

「これより、第三フェーズに移行します」

「まずは、綾さんが最後の最後に繋いでくれた接続を維持して、インストールを完了させて——」

「それから、私達で一斉攻撃！」

「最後に王様の一撃でユーリを制御する！」

「塵芥共の戦力には期待しておらぬが……まあいい。行くぞ貴様ら！」

ユーリが同じ高さまで上昇してきた。暴れ回った影響で、元から刺さりが悪かった

左腕を固定しているレイピアがグラついている。

「まずは接続の維持です。あまりユーリを動かさせないようにしてください。……ナノハ、行きますよ」

「うん！アクセルシューター！」

「パイロシューター！」

桜色と橙色の魔力弾が飛ぶ。狙いは抜けかかっているレイピアをもう一度打ち込むこと。ユーリはデタラメに魔力を放ち、魔力弾全てを掻き消した。

魔力波が止んだのを合図に、レヴィが高速接近する。ユーリの弾幕をくぐり抜けてバルフィニカスを振りかぶるが、先に魄翼が襲ってきたため距離を取る。

魄翼を振り回した隙について、今度はフェイトが飛び込んだ。バルディッシュでレイピアを打つが、押し込むには叶わなかった。

「硬い……！」

魔力もなく綾はよく刺せたものだフェイトは思う。フェイトは知らないがことわざで言うならば火事場の馬鹿力というものである。

「あああああああ!!」

「っー！」

ユーリの叫びと共に大量の魔力弾がばら撒かれる。そうしてフェイトを離してから、



誰も近づけまいと巨大なエターナルセイバーをむやみらたらに振り回し始めた。

やたらに動き、その影響でレイピアがさらに抜けかかっている。

「あかん……どうにかせんと……！」

はやては焦りを見せるが、高速で振り回すセイバーが寄せ付けない。

一方その頃、仮面の少女はスナイパーの少年の元へと急いでいた。

「準<sup>じゅん</sup>！」

「ヒイツ!? ……なんだ、脅かさなくてくださいよ」

準と呼ばれた少年は肩を跳ねるが、相手を知るとほつと息を吐いた。

「どうしたんですか? こちとら、管理局勢を撤くので忙しいんですけど」

「バンカーショット! ユーリに刺さっているレイピアを押し込みなさい! 今すぐ

!」

「はあっ!」

何言ってるんだといった風に準は反応した。

現在のユーリがどのような状況かは彼は知らないが、対象物を狙撃して押し込むということ自体は、角度的に不可能である場合を除き一応可能ではある。しかし懸念はその後であった。

彼は追っ手を撒いたばかりである。そう遠くないところにシグナム達がいることが

予想され、狙撃の音を鳴らすのは自分の位置を知らせるに等しかった。加えて、準は大量のアンチプログラムの撃ち込みを行い、指令の勝利をほぼ確定させている。これ以上この事件に関わる必要はなく、それは目の前にいる彼女自身も言っていた。

しかしその彼女が、今すぐ撃てと言っているのである。

「早くー！」

「……ああもう、わかりましたよー！」

準は諦めて狙撃銃を展開した。もうどうにでもなれと彼は思った。

スコープのレンズと魔力で強化した視力で遠く先のユーリを捉える。その場で暴れるユーリの身体には黒い日本刀と、レイピアが刺さっているのが確認できた。レイピアの方は義手が串刺しにされているが、ユーリの身体には深く刺さっておらず、抜けかかっている。

息を止め、狙いを完全に一点に絞る。

「バンカーショット、撃ちます」

トリガーを引く。轟音と共に放たれた弾丸が一直線に飛んで行き、レイピアの柄に命中。レイピアを深く打ち込んだ。

命中を確認して、準は銃を下げた。

「もうこれ以上撃ちませんよ」

「十分ですわ。行きましょう」

発砲音を聞きつけて飛んできた追っ手を躲し、二人は何処かへと去っていった。



一斉に発動した多数のバインドがユーリを捕捉した。

「あ、ああ……うあああああああつ!!」

「もう、逃がしはしませんよ」

「時間も充分経ったはずだよ。今なら!」

準の狙撃の援護もあって、インストールに必要な時間は充分に経った。

あとは――

「よかろう。集束魔法、<sup>ブレイカー</sup>放てえい!」

バツとデアーチエが手を伸ばす。五人がそれぞれの最大魔法を発動する。

「全力全開、スターライト――」

「轟熱滅砕、真・ルシフェリオン――」

「疾風迅雷、ジェット――」

「光雷炸裂、イグナイト――」

『響け角笛!』

「未来を拓け! 届いて——」

「ブレイカーツ!!!」

「ザンバーツ!!!」

「スパークツ!!!」

『ラグナロク!!!』

五人同時の一斉攻撃。ユーリはその爆心地と化し、激しい爆風が吹き荒れる。

ディアーチエはその爆風の中に、爆風に流されることなく何かが漂っていることに気がついた。

「黒い欠片……? ……そうか」

その欠片の正体に気づくと、ディアーチエは目を伏せた。

「いいだろう。お主の力、借りてやる」

爆風の中静かに言ったディアーチエは、エルシニアクロイツを掲げ、カッと目を開い

た。

「集え残骸、闇統べし王の元へっ!!」

声高らかに叫んだその言葉に従うように、黒い欠片は次々とディアーチエの元へ集まっていく。

集まった欠片はディアーチエの暗黒甲冑ディアアボリカに纏わり付き、黒く染めていく。全ての欠片が取り込まれた時には、金の装飾以外全て黒に染まった、さしずめ漆黒甲冑とも言うべきそれをディアーチエは纏っていた。

魔法陣を展開する。元々暗い紫色であるディアーチエの魔力光だが、欠片を吸い込んだためか更に黒くなっていた。

「ユーリよ、これが星と雷、王たる闇、そして残骸の願いが織り成す、我らが四人の碎け得ぬ闇!! 堕ちよ、ジャガーノートオオオオオオツツ!!!」

膨れ上がった闇の魔力が、ユーリを完全に飲み込んだ。



ユーリは真っ白な場所に立っていた。すでに防護服は通常の紫天装束に戻っている。

「(ト)は……」

辺りを見回すが、何も無い。

ここにいるのが自分ただ一人だと知って、ユーリは顔を俯けた。

遠い昔に感情を捨ててから感じなくなっていたはずの、孤独であることへの悲しみ。

「結局私は、この苦しみから逃れられないのですね……」

「ところがどっこいそうはいかねえ」

声が出た。顔を上げると、そこには黒い道着に金髪の少年がいた。

「あなたは？」

「俺はお前だよ」

目の前の少年はそう言ってユーリに近づき、もたれかかるように彼女を抱きしめた。

「つたく、手間あかけさせやがって。何度か死にかけて、本気でダメかと思っただぞ」

そんな悪態をつきながらも、少年は笑っていた。そこにいつもの狂気はなかった。

「でも、よかった。こうやって、ちゃんと救うことができた」

「……本当に、救われるのでしょうか？」

「あ？」

「苦しみしか感じないこの感情で、本当に私は救われるのでしょうか。破壊を幾度となく振りまいてきた私は、救われるべきなのでしょうか」

「バーカ」

「え？」

「救われるんだよお前は。感情も、すぐに正常なものになる」

「何を根拠に言ってるんですか……？」

「俺が根拠だ」

そんな無茶苦茶な。ユーリはそう思った。

「それと、救われるべきかとか言ってたが、俺の第一の目的がそれだ。救われてねえとこつちが困る」

「……………」

「ダイアーチエや、シユテルやレヴィもそうだ。お前が救われ、帰ってくるのを待っている。もう独りになることはねえ」

「……………そう、ですか」

「……………ま、その中に俺が入って、救われたお前のその後を見れないのは心残りだがな」

「え？」

ユーリが見ると、少年の身体はすでに消えかかっていた。

「……………どうして」

「俺は部品だ………あるべき場所に戻って、役割を果たすだけだ。この身体で得られた自由も、悪くはなかったがな」

「……いや、嫌です。消えないでください！ 私はまだ、あなたに償いができていない！」

「いらねえよ。そんなの……それと、消えるんじゃないかってお前の部品となるだけだからな」

「でも……でも……っ」

そうしている内に、少年の身体はどんどん消えていく。

「なら……俺のもう一つの心残り、叶えてくれや」

「もう一つの……？」

「おう。それが目的で、こうしてここに来ただからな」

「それは……」

「インストールされて、ついでにお前には俺の記憶も流れたはずだぜ。もう、わかってるはずだ」

「……………」

ユーリは少年から少し離れ、袖でゴシゴシと自分の顔を拭いた。そして、今にも泣きそうな顔で笑顔を見せる。

「これで……いいですか？」

「ああ。それで……いい」



心残りもなくなり、少年の姿が完全に消えていった。彼の粒子はユーリの元に集まり、溶け込んでいく。

「ウレク……ありがとう……」

一筋の涙を流しながら、ユーリはもう一人の自分に囁いた。

## 第八十一話

意識がうつすらと戻って目を開き、天井からの明るさに目を細めた。

少し眩しく感じる光をある程度遮ろうと右手を動かす。筋肉痛の何倍もの痛みを感じたが、もう動かし始めたんだしいいやと、そのまま右手を顔に被せる。

「ここは……アースラの医務室……か？」

「……気がつきましたか？」

声がしたので首を向けると、そこにはアミタがいた。椅子に腰掛けてこちらの様子を伺っている。

「……何日寝てた？」

「丸三日以上寝てましたよ。綾さんの身体ものすごくボロボロだったんですから、むしろ早い目覚めです」

「三日か……十日程寝てた頃に比べりゃマシか」

「一体何があったんですか」

ツツコミを入れた後、アミタはクスリと笑って立ち上がった。

「綾さんが起きたこと、皆さんに知らせてきますね」

言うど、アミタはこちらが呼び止める間もなく部屋を出て行った。  
先に状況の確認、したかったんだがなあ……。



アミタが出て行ってからしばらくして、まず海斗達チームメンバーが入ってきた。  
心配させたのは仕方なく思うが、海斗から決戦の結果——主に、俺が気を失ってから  
のことを聞かせてもらった。

システムU—Dの制御、及びユーリの救出は無事成功したこと。

謎の二人組は結局捕らえられなかったこと。

それからアミタ達未来からの渡航者やマテリアルズは猶予いっぱいまで俺の目覚め  
を待っていたこと。

「……そうか」

俺はそれだけ呟くように言った。

指令期間終了時に失格となった者はいなかった。物理的な死は通知が来るのかわか  
らないが、そういった例外がなければ生き残ったのは二十人ということになる。

「まあなんにせよ、綾が目え覚めてよかったぜ」

「……ああ」

「……とにかく、これから何人も来るだろうけど、しつかり身体休めろよ」

言つて、海斗達は出て行つた。

次にやってきたのは、もう毎度お馴染みになりつつあるリンデイさんだった。

「全く、やつぱり無茶をするのね。あなた、三日も寝ていたのよ?」

「目覚めてすぐアミタから聞きましたよ。それと、今回の無茶は不可抗力かと」

「不可抗力だからつて、十個以上の強化魔法同時使用を認可すると思つて? 後遺症が

出てもおかしくなかったのよ?」

「……すいません」

「もう、こんなのじゃあ管理局で戦つてなんていけないわよ?」

「そこはなんとかしますよ」

はあ、と露骨な溜め息がリンデイさんから聞こえた。今の言葉、どうやら前線を引かせようという考えもあつたらしい。無論引くつもりなど毛頭ない。

「まあ、あなたにこの手の話は言つても無駄だつてわかつてはいるんだけどね。でも身体はちゃんと治しなさい。これ以上取り返しのつかないような負傷はしないこと」

「わかつてますよ。……ところでリンデイさん」

「ん? 何?」

「俺達の妨害と援護をした人物、何か情報は得られたんですか？」

「……ううん、完全に撒かれたわ。あの二人が何者なのか、何が目的なのか、一切不明よ。才さんも面識がないみたい……綾さんは、何か心当たりある？」

「……………」

思い出すのは、あの仮面の女の声。

あの時はユーリとの戦闘に集中しなければならず、彼女のことを気にしている暇なんてなかったが、今思い出すと、あの声は……

「……いや、まさかな……」

「？」

「……ああ、すいません。……俺も、彼女らが何者かは……」

「……そう、ならいいわ。目を覚ましたあなたとお話をしたい人は他にもいるし、私は一旦失礼するわ」

リンディさんはそう言って医務室から出て行こうとする。

扉を開けたところで、リンディさんはくるりとこちらに振り返った。

「そうそう、今までの表沙汰にできないあなたの数々の功績、その報償となるものを何か考えておきなさい。あなたの傷が完治した後には支払ってあげるから」

パチつとウインクして、リンディさんは歩き去っていった。

次に入ってきたのはなのは、フェイト、はやて、キリエ、それからヴィヴィオ、アインハルト、トーマ、リリーの未来組だった。

「綾さん、お身体の方はいかがですか？」

「動くたびに身体が痛むのと、左腕がないことを除けば概ね平常か」

処方された錠剤を水で流し込んで俺はなのはにそう答える。

「綾さんはやっぱり無理をし過ぎです。あんなリスクの高い作戦でなくとも、みんなと一緒に戦えばもつと安全に接続を行えたかもしれないのに……」

「そうですよ。それにあの時、綾さんが死んじやったって思ってたんですよー」

そう言ったのはフェイトにヴィヴィオだった。ヴィヴィオの言うあの時とは、頭上から奇襲して引き裂かれた幻影のことだろう。作戦を明かしたのはリーゼ姉妹と才のみであったため、他のところではそれなりの混乱が起きたことが予想できる。

「あれが接続を行うには最善の方法だった。俺はそう判断したまでだ」

「……万全でない綾さんにリスクを背負わせるのが、最善だったんですか？」

そう尋ねてきたのははやてだった。

「万全で戦いに臨める方が稀な話だ。それに、失敗すれば死ぬんだからリスクは同じだ」

「……………」

はやては不服そうだが、それは無視してフェイトの方を向く。

「フエイト。……アリシアは今、どうしてる？」

「……姉さんは」

フエイトはそこで一旦言葉を飲み込んだ様子だった。彼女の表情から少し、察しがついていた。

「……綾さんが眠っている間に、本当のことを話しました。母さんはもう、この世にいないことを……今は、姉さんは落ち着いています」

「……そうか」

俺はそう返すだけだった。そのうち、アリシアと話す必要があるだろうがその時はその時だ。

「そっちの話は終わり？」

沈黙してからそう声をかけてきたのはキリエである。

「……ん、ああ。なんだ？」

「起きてすぐで悪いけど、これからあなたの記憶の一部に封鎖処置をさせてもらうわ。タイムパラドックスを防ぐためって言ったらわかるかしら」

「ああ……封鎖の範囲はどうなるんだ？」

「この事件について、『時間移動があった』という部分だけを封鎖させてもらうわ。あんまり封鎖しすぎちゃうと、却って思い出しやすくなっちゃったりするから。私やお姉

ちゃんについては、管理外世界から来たってことにしておくわね」

「……わかった」

じゃあ早速、とキリエは魔法陣を展開してその封鎖というのを始めた。完了した直後、何も変わらないようだったが、どうやら彼女らが帰った後で効果を発揮するらしい。「じゃ、私の用事はここまで。王様達もあなたに会いたいって言ってるし、私はここで失礼するわ」

そう言っつて踵を返して、直後何か思い出したようにまた振り返った。

「忘れるところだった。お姉ちゃんを助けてくれてありがとう」

じゃあねー。と手を振ってキリエは去って行った。それから後続くようになるのは達も出て行った。

次に来たのは、キリエの言っていた王様達——シユテル、レヴィ、ディアーチェだった。

「ウレクのオリジナルー！ 調子はどう？」

「概ね平常だ」

「ダウトですね」

「うむ」

いきなりダメ出しを食らった。



「診断結果を見ましたから。仮に診断結果を見なくとも、あなたの無謀な行いとその負傷を見たのですぐにわかりますよ」

「身体を起こすのも容易ではなからう。無理をするな」

「これぐらいなんでもない。ところでユーリは来てないのか？」

「ああ、あやつなら——」

言つて、ディアーチェは顔を出入り口の方へと向けた。

未だ閉まつてない扉。その陰から、見覚えのある金髪が覗かせていた。恐る恐るその金髪の主の顔が扉から出てきて、こちらと視線が合つてすぐに引つ込めてしまった。

「……………」

「少々お待ちを。引つ張つてきます」

一礼してシュテルが部屋から出て行つた。

「ほらユーリ、入りましょう。リヨウと話があるのでしよう？」

「で、でも、緊張します……」

「入つてしまえばなんとかなりますから」

「ひゃー」

……しばらく小競り合いみたいなのが續いて、ようやくユーリがシュテルに押される形で部屋に入つてきた。

「あう……えっと、そ、その……」

シユテルに押し込まれたユーリは、何やら恥ずかしいのか手で顔を覆った。戦闘で損失した身体は元に戻っていた。

「……こんな感じだ。今や感情が豊かっちゃあ豊かになった」

「ウレクの性格とは似ても似つかないねー」

ウレクの性格がぶっ飛んでるだけだと思いが。

レヴィへのツツコミを飲み込んでいると、シユテルが後ろからユーリの肩を掴む。

「さあユーリ、私が逃がしませんので、安心して話を」

「シユテル……お主案外スパルタだな」

「必要処置です。あまり時間がないのも事実ですので」

「……で、話ってなんだ？」

そうユーリに尋ねる。部屋の外でシユテルがユーリを引っ張っている時にも何度か耳に入ったことだが、そこまで重要なことはあつただろうか。

「そ、その……こ、この度は色々迷惑をおかけして、ごめんなさい。そして、助けてくれて、ありがとうございます」

「怪我はいつものことだ。半分近くが自滅ものだしな。礼は受け取っておく………だけど、話ってのはそれだけか？」

「あ、いえ。まだあります。……これ、なんですが」

ユーリが差し出したのはユーリとの接続に使用したウレクの武器、黒刀と、それから楕円形で灰色の水晶のようなものだった。

実物を見た訳じゃないが、俺はこの正体に気がついた。

「これは……俺の義手の、システムコアか？」

「はい。ほとんど壊れてしまってますが、メモリーのサルベージくらいならできるかもしれません。……それで、話というのはですね……これを、どちらかだけでもいただくことはできませんか？」

「ウレクがユーリの部品として還り、遺ったのが刀とコアの二つのみとなつてな。彼がいたという証を持ち帰りたいとユーリが言うのだ」

「なお、その意見は王を含め満場一致で賛成でした」

「ちよつ、こらシユテル！ 勝手なことを言うでない！」

逃げるシユテルを追うディアーチェ。そんな二人に代わってレヴィが解説についた。

「でも、黒刀も義手も君が使つてたものだからさ、君に訊いてみようつて話になつたんだ。アマタ達も君が起きるまで待つてゐるつて決めてたし！」

「あ、両方必要ということであればそれでもいいんです。ウレクのことを忘れるつもりはありませんので……」

「そうか。なら、システムコアは返してもらおうかな」

俺はそう答えて手を差し出す。

「あ、はい。……それだけですか?」

コアを返してもらい、とりあえず近くの棚に置いて「ああ」と返事をする。

「義手は元々俺のだからな、データのサルベージができるならしておきたい。対して黒刀はウレクのものだし、今となつてはただの硬い刀だ。特別必要とは思わん」

「そう……ですね。では、これはいただいてもいいんですか?」

「ああ」

「よかったですね、ユーリ」

「はい……!」

「さて、用事もこれで済んだことだし、我々も準備せねばな。貴様が目覚めたことで、アマタ達も準備を始めているだろう」

「お前達も行くのか?」

「ええ。我々はエルトリア復興を支援するため、アマタとキリエについていくつもりです」

「エルトリアにはたくさんさんのダンジョンやモンスターがいるんだって!楽しみ〜!」

「私も、このエグザミアの無限連環機構がお役に立てるそうです」

「そうか。見送りぐらいならリンデイさんからお咎めがくることはないかな」  
「勝手にしろ。ではな」

こうしてディアーチェを先頭に、マテリアルズとユーリも去っていった。

四人が去った後、俺は義手のシステムコアに目をやった。

まさか残っていたとは思いもしなかった。メモリーを回収することができるなら、ひよつとしたらアレも利用できるかもしれない。うまく使えば、今後の戦いにも活用できる。さすがに管理局の技術者に話す訳にはいかないだろうから、使うとしても時間をかけるだろうが……。

……とりあえず、今は休もう。



まどろみの中にあつた意識が何と無く浮上し、目を開ける。

何時間くらい経ったのか、そう思っていると扉の開閉音が聞こえてきた。

首を向ける。

「あ……寝てましたか？」

そこにいたのはアミタだった。

「いや……今さつき起きたところだ」

「そうだったんですか。あ、失礼しますね」

医務室に入ったアミタは、ベッドの近くにあつた椅子に腰掛けた。

「出発の準備は整つたのか？」

「はい。今日はもう遅いので、明日の朝に出発します」

「ああ……今、夜か」

「はい。夜の十時を過ぎたところですね」

「それにしても慌ただしいな。そんなに余裕がないのか？」

「実のところ、滞在予定時間はもうとつくに過ぎてしまつていまして。身体も本調子

じゃありませんし、早いところ戻らなければという状態です」

「それなら、わざわざ俺が目覚めるのを待たずに行つた方がよかつたんじゃないか。命

に別状がある訳ではないし、記憶封鎖も眠っている相手にはできないって訳じゃないん

だろ？」

「それはそうなんですけど、できればあなたとこうしてお話したくて……」

「話？」

「はい。とは言つても、大した話ではないとは思つてますけど……綾さん」

まっすぐとこちらを見つめるアミタ。その表情には、感謝の笑顔が溢れていた。

「この度は色々と助けていただき、本当にありがとうございます。——この言葉を、直接あなたに言いたかったんです」

「……感謝は受け取っておこう。そこまで何度もお前を助けた覚えはないんだがな。せいぜい決戦の時の一件ぐらいだと思おう」

「他にもありますよー。ユーリからキリエを庇って私が負傷した時だって、助けていただきましたもん」

「あれは助けた内に入るのか？俺が来た時にはもうお前は負傷していたし、投げ捨てられていたお前を戦闘後に回収しただけだぞ」

「それでもですよ。その後は、話し相手になってもらって、こちらの世界のことも教えていただきましたし」

「その時は俺も暇だったからな」

「何より、ユーリを救ってくれたこと。あなたがいなければ、きっとそれも叶わなかった」

「俺だけで遂行した訳じゃない。俺個人にだけ礼を言うのは間違いだろ」

「はい！他の皆さんにはすでにお礼を言いました！」

「目覚めの遅い俺が最後まで訳だ」

そうですねー。とアミタは誤魔化すことなく答え、クスクスと笑った。

そして、アミタが腰を上げる。

「さて、そろそろ失礼させてもらいますね」

「ああ、おやす——」

直後。

サツと素早く近づいたアミタの唇が、こちらの頬に触れた。

「……は？」

「——ふふっ。それじゃあ、お休みなさいです」

顔を朱に染めながらもイタズラっぽくアミタは笑って、それから素早く部屋を出て行った。

俺は彼女を見送ってなおしばらく呆然として、それからようやく右手を頬に触れた。まだ柔らかい感触が残つてるような気がした。

キスされたことを遅れながら理解して、まず込み上げたものは恥ずかしさよりも懐かしさだった。

きつと、ウレクから『彼女』の名を聞いたのも影響しているのかもしれない。リンディさんと話している時にも、『彼女』と関連づけていた。



思い出すのは、『彼女』——リリと過ごした時間……もう、戻ってくることはない思い出……。

「リリにされて以来、五年振りだな……」

リリ……俺は……。

## 第八十二話

フロリアン姉妹とマテリアルズとユーリ、それからなぜか顔も名前も思い出せない次元漂流者四人ほどが元の世界に戻ったのがすでに一時間ほど前。

彼女らの見送りをしてから戻ってきた医務室は今、重苦しい空気が漂っていた。

原因は俺……と、俺の目の前にいるアリシア。

普段の人懐っこそうで笑顔の絶えないアリシアはなく、その表情には悲しみの他に躊躇いなどがあるように見えた。

周囲にはなのはやフェイト、アルフ、リンデイさんなど、プレシア事件に関わっていた人達が揃っていた。ただ、才や海斗達は俺の指示で来ていない。

アリシアから話があると部屋に入ってきてから数分、目の前に来てから沈黙していたアリシアが、その口を開いた。

「……綾さん、あのね？　綾さんが眠ってる間にフェイトから、お母さんのことを聞いたの。お母さんは、本当はもう死んじゃってるって」

「……そうか」

「綾さんは、お母さんはお仕事で遠くにいるって言ったよね？　……ねえ、どっちが本当

なの？」

そう問うアリシアから、まだ母の死を受け入れられていないことが見てとれた。そして妹の言葉よりも、プレシアが生きているという俺の言葉を信じようとしていた。

俺はすぐには答えず、一旦視線をリンディさんに移した。俺の視線に気づいたリンディさんはコクリと頷いた。

視線をアリシアに戻す。

「……フェイトの言ったことが本当だ。そして俺は、お前の母さん——プレシアが死ぬのをこの目で見た」

「……！」

アリシアの表情が、信じていたものが崩れ落ちた瞬間のそれになった。

「……どうして、あんなウソをついたの？」

俯き、震える唇でアリシアが問う。

「幼いお前には耐えられない話だと俺が判断した。それで今まで他のみんなにも口裏を合わせるよう俺が指示した」

「——嘘つきー！」

アリシアが怒鳴った。ボロボロと涙を流して、俺を睨んだ。

「嘘つき、嘘つき、嘘つき……！ お母さんに会えるって、信じて……ずっと頑張って

……た、のに……うえ、うええええん!!」

「……………」

泣き出してしまったアリシアを、フェイトに部屋から出すよう念話で指示する。

アリシアを乗せた車椅子を押して出て行くフェイト。それに続いてアルフとなのはが  
が出て行く。

「きつと、時間があなたとアリシアさんの関係を治してくれるわ」

励ましのつもりか、リンデイさんがそう言った。

「……………」

それに対して俺は否定的だった。

「仮にあいつの中で解決しても、その時に相手がいらないんじやあ修復にはならないだろ」

「……………」

ポン、とクロノは俺の肩に手を置いた。

「少なくとも、お前の傷が完治するまではゆっくりしてもらおうぞ」

「……………」

俺は言葉を返さなかった。



粥状の料理をスプーンで掬って口に運ぶ。過剰強化で体内にダメージを負った俺に出されているこの食事にももう慣れてきた。喜ばしくないことに。

粥状なので嘔む必要もほとんどなく、すぐ飲み込む。見た目とも相俟って食ってる感じがしないが、今朝のことがあつてか、それを気にする気にはならない。

アリシアのことが気にはなるが、早く身体を治すためにも目の前の料理を食らう。そして右隣に声をかける。

「……で、何の用だ？」

「……………」

椅子に座っているのは八神はやてを主とする融合騎リインフォース。今この医務室には俺と彼女の二人だけである。

リインフォースは俯いて暗い表情を見せているだけだった。

彼女がここに来たのがつい先ほど。話があるということなのだが、椅子に座つてから、一言も発さず沈黙している。

呼びかけに対しても反応なしかと思つたが、ようやくリインフォースが口を開いた。

「……碎け得ぬ闇事件への対応をしている間、一度ウレクと二人で言葉を交わしたことがあります」

「……へえ」

相槌を打っておく。

タイミングはプレシアとアリシアの一件辺りか？いや、そういやその時はリインフォースもレヴィと行動してたな。となるとあとは、俺がシグナムと模擬戦をする前辺りか。

「それで？」と訊く。これで終わりという訳がない。

「その時にウレクに言われた言葉に、答えがわからなくなつて……」

「……悩みなら、まず俺ではなくはやてなんじゃないのか？ あいつから回答は貰つてないのか？」

「いえ、その……その言葉というのが、綾に関わる話なので……綾に訊くべきかと……」

「……俺に関わる話？」

リインフォースは静かに頷いた。

「……その話、聞かせてみる」

リインフォースはまた頷いて、それから当時のことを話し始めた。



「お前、オリジナルに随分熱心だよなあ」

そのウレクの言葉が始まりだった。

ラインフォース他アースラ乗組員への攻撃に加え、綾を勝手に戦場に連れ出して負傷させるといったことをしでかしたウレクには、医務室での治療と同時に交代で監視がつけられることになっていった。その時はちょうどラインフォースがその監視役だった。

「……どういう意味だ」

「いやさ、お前俺のオリジナルが絡むとよく首突っ込んでくるじゃん？ 交渉の時然り、ユーリへの対処法教えている時だって然り。そういや俺が欠片一掃してオリジナルに近づこうとした時にも割り込んで俺を目の敵にしたな。あと、ユーリとドンパチやって戻ってきた時にやあオリジナルに泣きついてたんだっけか？」

「……だから何だと言うんだ」

「だから言ってるじゃん？ 熱心だなんて」

「綾には私達とは違って大きな力がない。その彼を守ろうとするのは不思議なことか？」

「んな理由だけで、そこまで熱心になるもんかねえ」

ウレクは見透かしたような様子でニヤニヤとしている。ラインフォースはそれが不愉快に感じた。

「お前、オリジナルに恋してんじゃねえの?」

そしてウレクは、そんな言葉をリインフォースに投げ込んだ。

「……恋?」

「おうそうだ。オリジナルに恋してるから、お前は過剰にオリジナルを守ろうとしてんじゃねえのか?」

「なにを馬鹿なことを。私は恋なんて……」

「恋してないとお前が判断できるのか? 判断するだけの経験があんのか」

「……………」

ウレクにそう言われると、押し黙るしかなかった。

リインフォースは恋をした経験はない。闇の書であった頃は目覚めたら破壊を撒き散らすか、遠からずそうなる未来に絶望するかだった。それより前の夜天の書であった頃の記憶は存在しない。

つまりウレクの言うとおり、恋をしていないと判断する証拠はない。

「お前はあいつに色々助けてくれてるからな。それで恋に落ちてんじゃねえの?」

確かに、リインフォースは彼に救われている。

加えて、綾と和解してからリインフォースが感じるようになった不思議な感覚。それが恋によるものだとすれば、説明がつくかもしれない。



「これが……恋……?」

「……………プツ」

直後、ウレクが嘖き出した。

ゲラゲラと馬鹿にしたような笑い声が部屋に響く。

リインフォースはむっとした。

「何がおかしい」

「お前、ホント単純だな。敵視していた、いや、今も敵視してるか? そんな相手の言葉をあつさり信じるのかよ」

「……………」

「そんなお前に朗報だ。お前がオリジナルに抱いている本当の感情を教えてやる」

「……………どうせ、それも嘘だろう?」

「ああそうかもしれないな。だが事実を言ってる可能性だってある。一応言っておくが、俺は今まで嘘をついたことはないぜ?」

一応、事実である。ウレクは今まで嘘は言っていない。紛らわしい言い方をするため、真実を言っているとも言えない訳だが。

嫌な予感がして、リインフォースはウレクへの警戒を高めた。

それを知ってか知らずか、ニタアと笑みを濃くする。

「お前、オリジナルに依存してんじやねえの？」

「な……」

「何かあつてもオリジナルが助けてくれる、守ってくれる。そういう思いがあるから、それを失いたくなくて熱心になつてんじやねえか？」

「ふざけるな！」

ラインフォースは声を張つた。

「私は、彼に償わなければならぬ身だ。依存するなど……！」

「だが、お前は何度もあいつに助けられた。ついさつきもそうだ。違うか？」

「それは……」

「頭では償いだとか考えても、意識しない内にあいつに助けてもらおうとか思つてんじやねえか？」

「違う、私は……！」

ラインフォースは強くかぶりを振つた。依存しているんじやないか、という脳裏に浮かんだ考えを振り払うように。

だが、考えないようにしようとすると、否定するほど、その意識に反発するかのように「依存しているかもしれない」という考えが強くなつていく。

「お前がオリジナルを過剰なまでに守ろうとしてんの、実のところはその対価に守つ

てもらいたいんじゃないのか？」

「っ——！」

「何をしている」

いつの間にか医務室に入っていたシグナムが割って入った。

会話の内容こそ知らないが、状況からウレクがラインフォースに何やら吹き込んでいると判断したシグナムはウレクを睨む。

「ただのお話さ」

対するウレクは悪びれる様子もなく、さも当然のように笑って言った。

「そうか。なら私にもその話を聞かせてもらおうか」

言葉とは裏腹に、並の人間には耐えられないほどの冷たさを持った目でシグナムは返す。

シグナムの返答に笑みを崩さないウレクから、ラインフォースへとシグナムは視線を移した。

『ラインフォース、交代の時間だ。下がれ』

実際には交代の時間はまだ先である。ラインフォースはそれがシグナムの気遣いだということとはすぐにわかった。

『将……すまない』

『気にすることじゃない。敵の言葉にそのかさかれるというのは直すべきだがな』  
『……ああ』

ラインフォースはそつと立ち上がり、その場を後にした。



「……そのことがあって、私は綾のことをどう思っているのかがわからずにいるんです」  
「……………」

「私は……綾に、依存しているのでしょうか……」

「……どうも彼女は予想以上に純粹らしい。人の言葉に簡単に影響されちまうという  
か。」

闇の書であった頃、自分の意思や判断で物事の取捨選択をすることがなかった弊害つ  
てところか。加えて今まで経験したことがない感情に対して、どう受け取ればいいのか  
わからないのだろう。

「……依存、すればいいんじゃないか」

「え……」

「人の誰もがすることだ。責められることじゃないだろ。お前自身、今の自分の存在は

「夜天の写本とその主であるはやてに依存してるんだろ」

「ですが……綾は、私が償わなければならぬ相手なのに、それなのに依存するなんて……！」

……ああ、そういうことか。

償わなければならぬという使命感があるのに、その相手に手前勝手な思いを持って  
いるかもしれないというのが不安なのか。そういう関係であること、少し忘れかけてい  
た。

しかし。

「それでもいいんじゃないのか」

「え……？」

「自責や償いの思いが先走って、本当の思いを燻らせたまま終わりにすると後悔するぜ」

「……………」

「……俺みたいにな」

「え？」

「……なんでもない。まあもつとも、俺がそれに応えるとは限らないがな」

俺はそう言つて、食後に飲むと言われている薬を口に入れ、水で流し込んだ。

それから横になる。ラインフォースには悪いが、この質問には答えられない。答えた

としても、その後リインフォースには応えられない。

「少し寝る。悪いが一人にしてくれ」

「……はい。綾、お休みなさい」

リインフォースの足音が遠ざかるのと、扉の開閉音が聞こえたのを最後に、俺はまどろみの中へと落ちて行った。

## 追憶 劍の姫

## 第八十三話

俺の父親は、大手企業の幹部だった。

父さんは成果主義であると同時に、出世に対して貪欲と呼べるほどにまで意識が強かった。とにかく結果を残し、上へ上へと上り詰めていくことにこだわる人だった。

その性格は俺の成績に対してもそうで、とにかくいい成績を出すよう厳しい躰をされた。

そんな父さんだが、嫌いという訳ではなかった。いい成績を出せば褒めてもらえたり、ある程度自由も許された。何より父さんの性格が遺伝でもしてるのか、勉強やスポーツその他諸々、自ら一番になってさらに高みへ目指すということが好きだった。小

学校中学年からはほとんど常に一番を取り続けるようになり、叱られることもなくなっていた。

仕事で忙しい父さんとは会話することがなく、なんとなく寂しかったが、そこは母さんがいてくれたおかげで孤独ということはなかった。



中学一年の頃。

俺は父さんからある縁談を持ちかけられた。

父さんが勤めている企業の社長、その娘との縁談である。相手は俺と同年代で、許嫁を探して見合いをしているということだった。

しかしその見合い、企画は社長とその妻なのだが、件の令嬢自身は乗り気でないのかこれまで会った相手はことごとく断っているらしい。全く決まる様子もなく社長が困り果てているところに父さんが俺を売り込み、見合いをすることが決定したようだ。

はつきり言って、興味がなかった。

父さんはここで縁談がうまくいけばさらなる出世がとかを考えているようだったが、俺にとってはどうでもよく感じていた。なにより当時の俺は同年代の人と仲良くなる



ということが、ものすごく苦手だった。

当時すでに学校の成績で他者の追隨を許さなかった俺は、クラスの中で浮いていた。俺もクラスメイトのことは年下の子供のようにしか見ていなかったため、進んで仲良くなるうともしなかった。そのため、俺にとつて最も苦手だったのが『同年代と仲良くする』こととなっていた。

どう考えても、無理だ。

しかし、それを言ったところで叱られるだけで終わるのはすでにわかっていた。そのため渋々、俺はその見合いに頷くことになった。

——相手もその気じゃないみたいだし、適当な話をして終わりだろう。父さんには悪いが……。

いかに父さんの立場を悪くせず、相手の興味をなくすか……そんな無駄に高度な条件の答えを探しながら、見合いの日を待った。



見合い当日。

豪勢な屋敷の中、父さんに連れられて見合いの席へ向かう。

ここだと言われて入った先には、すでにその相手が席についていた。

まず目に入ったダークブルーの着物と、それに対して淡く色づいた白い髪が、まるで夜空の星のような輝きを放っているようだった。それから綺麗に伸びた背筋や指先、容姿の一つ一つから気品が溢れていて、まさにお嬢様という感じだ。

ただ瞳だけは少し違って、表面上はこちらを歓迎しているが、どこかこちらを見る気はない、要するに興味がなさそうな感じだった。

名前は、東上院瑠璃々とうじょういんるりという。東上院家の長女とのことだった。ちなみに高校三年の兄がいるらしい。

俺が席についてから親同士でいくつか話し合ったのち、あとは二人の会話だと俺と彼女を残して退室した。

——さて、どうしたものか。

やる気がないのは相手も同じようであることは確認できた。無難な会話をして、印象に残らないようにすればいいか。

「九条」

そう思った矢先、東上院が誰かを呼んだ。ふすまを開けて出てきたのはメイドだった。

東上院はメイド——この人が九条なのだろう——に何やら指示を出した。かしこま

りましたと言つてメイドは静かに部屋を後にする。

「……朝霧綾さま、でしたわよね？」

「え？ ああ、はい。……どうかされましたか？」

「あなたが私の許嫁となる方かどうか、これから試させていただきますわ」

「……試す？」

メイドが戻つてきた。両手で持っているのは、二本の竹刀。

東上院はその一本を受け取り、庭へと出た。

「あなたも、竹刀を受け取つてこちらへ来てくださいいな」

……なんなんだ一体？

どうぞ、と頭を下げたメイドが差し出す竹刀を受け取り、いつの間にか用意されていた草履を履いて言われるまま庭に立つ。

意図はわからないが、やることの察しはついていた。

試す、竹刀と来れば、やることは一つ——勝負。

「あなたは多彩な習い事をしていらつしやるとのこと、その中から剣道を選ばせて頂きました。一つ勝負をしませんこと？」

「ルールは？」

「打ち合つて、参つたと言わせた方の勝利としましょう。勝つた方がこの場で願いを聞

き入れてもらえるということでしょうか？」

「……その服では、断然あなたが不利では？」

東上院の服装の着物は瞬発的な動きにはあまりに適さないものだ。この時点で圧倒的に彼女が不利である。俺も運動に向いた衣服ではないとはいえ、彼女よりはまだマシだ。

しかし彼女はそんなことなどお構いなしといった様子で、不敵な笑みを浮かべた。

「心配いりませんわ。勝つのはわたくしですから」

「……………」

「ちなみに、手加減や接待プレイは結構ですわ。これまでそういう相手ばかりで余計に退屈でしたの」

自意識過剰……ではなさそうだ。本物の実力と、それに伴った自信が見て取れる。

しかし何が目的だ？ まさか自分より強い奴しか認めないとか、そんな脳筋とか言われそうな選定基準をつけてるのか？

真意が測りかねずメイドの方を見るが、メイドはただ縁側に立って俺達二人を見ているだけだった。怪我の心配とかはないのか？

相手はああ言ってるが、もし怪我なんかさせたらそれが発端で父さんの立場が悪くなる可能性もあるしな……。

「怪我の心配をしていらっしやるのですか？」

こちらのことを見透かしたかのように東上院が言う。これまでの相手がそうだったからという経験から出た推測なのだろう。

「……ええ」

「なら、この勝負でわたくしが怪我をしたとしても、そのお咎めやあなた方の立場が悪くなることは一切しないとお約束しますわ。必要とあれば、契約書でもしたためますが？」

「……いえ、約束していただければ結構」

俺は竹刀を構えた。

武術の習い事のうち、剣道は俺が最も得意とするものだった。教師から今まで見てきた中で一番の天才児だと言われ、これまでほとんど負けなしだった。

中段に構えた俺に対して、東上院は竹刀をこちらに向けて後ろに引き、竹刀を持たない手を竹刀の先端に添えるようにして構えた。

「……怪我しても、知らないからな」

「どうぞ」

ニコリと東上院が笑顔で返す。

竹刀の柄を握り締め、俺は先手の一步を踏み出した――。



負けた。

十分と打ち合い続け、一太刀入れることもできなかつた。この日のために用意された俺の服はもう泥だらけだ。

当初はある程度打ち合つてから適当なところで降参しようと思つていた。それが初撃で突き倒され、そのまま参つたと言うのは気に食わないからと続行し……十分も打ち合い続けたら、否が応でも相手の実力を認めざるを得なかつた。

負け知らずだつた俺が完膚なきまでに打ち負かされ、当然悔しかつた。しかし同時に、これほどまでの完敗はむしろ新鮮に思つてもいた。見合いとか親のことなどどうでもよくなるほど勝負にのめり込むのもこれが始めてだつた。

対する東上院は、着物が多少乱れ、額から汗が滲んでいるものの、逆を言えばそれだけだつた。その彼女は、息絶え絶えで先ほど敗北宣言をした俺をじつと見下ろしている。

しばらくして、彼女がからクスリと笑い声が出た。

「わかりましたわ。では今回の勝負、わたくしの勝ちですわね」

「さて……」と東上院は期待が籠ったような眼差しで続ける。

おい、まだなんかするつもりなのか。

「わたくしが勝利しましたから、何をお願いしましょうか」

……すっかり忘れてた。

そう言えば、勝った方がこの場で願いを聞き入れてもらえるとか言ってたな。

しかし、今更だが彼女はこれで見合いを強制終了させるつもりだったのだろう。彼女が見合いには乗り気ではなかった辺り、これでお開きか。父さんがなんて言ってくるかな。

「……決まりましたわ」

考えて思いつく振りもしっかりしていらっしやる。

「後日、お屋敷にご招待しますわ」

「……はい？」

「招待状が届きましたら来ていただくことを、ここでお約束してくださいませ」

「……それが、今回の願いですか？」

「ええ」

……てつきり、「これでお開きにしましょう」ぐらいで済ますものだと思っただけだな。なんか気分が変わるようなことでもあったのか？ いや、そんなドストレートに断ち

切るのではなく、こういう言い回しで関係の悪化は防いでいるのか？

「さ、お約束してくださいませ」

「え、ええ。……お約束します」

「よろしい。では今回はお開きにしましょう。縁談については保留ということだ」

「はあ……」

結局、よくわからないまま見合いはお開きとなった。

その後服を泥だらけにしたことに父さんから叱られそうになったが、訳の説明と招待の話をすると手のひらを返して褒められた。



## 第八十四話

東上院との見合いから数日後。

本当に招待状が来た。というか、迎えが来た。

高級車に乗せられ、俺は東上院家の屋敷に案内される。

豪邸だった。まあメイド付きの生活を送っているのを見た時点で豪勢な生活もある程度想像がついてはいたが。

車から降りると東上院家の長女、瑠璃々が出迎えていた。

「ようこそ朝霧さま。東上院家へ」

「…………招待していただき、うれしく思います」

「クスツ…………ええ。では客間へ案内いたしますわ」

そう言つて振り返り、屋敷へと歩いていく。お嬢様なだけあって、動作一つ一つに気品があり優雅だ。俺はその後ろをついていく。

屋敷の中は通路一つを取つても広かった。大理石の床に、壁や天井には豪華絢爛な装飾。俺の家も広くて豪華な方だとは思っていたが、幹部と社長でこれほどの差があるものなのか。

辿り着いた客間もまた広い。

どうぞと勧められ、ソファに腰掛ける。東上院は付いてきていたメイドに何か指示して下がらせ、それから向かいのソファに座る。

それから、先ほど下がったのとは違うメイドがティーセットを運んできた。

「まずはお茶にしましょう」

「砂糖やミルクはいかがしますか」

メイドが訊いてきたので、砂糖だけ入れてもらうことにした。

メイドに入れてもらった紅茶を口にする。……うまい。

しかし、今回の招待は一体何のつもりなのだろうか。招待状には何をすると書いてなかったのだが。

第一に彼女が俺を気にかける理由がわからん。あの時の勝負は完全に負けたっていうのに……約束を守るためだけとは見えないし。

「どうかなさいましたか？」

「……いえ、なんでもありません」

「そうですか？ ……ああそうでした、今回お呼びした理由を申しませんでしたかね」

「こちらの考えを察したのか、単にそのことを思い出しただけなのか。どちらとも取れ

る喋りが少しだけ不快に感じた。こちらの考えてることを見抜かれてるのに、こちらは相手の思考を読めていないという感覚が少々悔しく思えた。

「この度は、朝霧さまにお願いがありますの」

「お願い？」

ノックと扉が開く音が聞こえた。

メイドが何かを持ってきていた。それは一つだけでなく、何人かのメイドによつて一つ一つ運ばれてくる。

運ばれたものの正体は、チェスや将棋といったボードゲーム、トランプ、花札などのカードゲーム、さらにはビリヤードテーブルやダーツボードまでもが運ばれた。

「また、わたくしと勝負してくださいさる？」

そう言う東上院は目を細め、妖しく微笑んだ。



訳を訊いてもはぐらかされたため、真意を確かめるためにも勝負を受けることにしたのだが……。

結果、全部負けた。

チェスも、将棋も、トランプも花札もビリヤードもダーツもその他諸々も全て、負けた。

ルールのある勝負には必ず、勝ち負けの線引きがはつきりとされる。そこに至るには運、知力、技術、運動神経……様々なものが複雑に絡み、優劣となり、勝敗となる。惜しかったとは言いい訳にしなければならない。

俺は負けた。そこには、俺が持っているものが彼女より劣っていたか、そもそも持っていないかった。

——羨ましい。

悔しさの後に、それ以上に思ったのが東上院への羨ましさだった。

俺が持っていないものを、俺より優れたものを、彼女は持っている。

どうしたら手に入れることができるのか。何をしたらそこまで辿り着けるのか。

知りたい。知って、自分もそこに辿り着きたい——。

東上院は、見定めるように俺を見て、それからクスリと笑った。

「さあ、それでは何をお願いしようかしら？」

……辿り着く以前の問題が、目の前にある訳だが。

今回も前回のように『勝つたら一つ願いを聞き入れてもらう』という賭けをした。勝負一つ一つにその賭けが適用されているため、相当な負債を抱え込んでいることにな

る。

果たして、どんな無茶ぶりをされるのやら……。

「……決まりましたわ。朝霧さま、暫くわたくしの執事となつてわたくしに従事なさい」

「……はあ!？」

「勿論ここに泊まり込んでもらいますわ。朝霧さまの学校は現在夏休みとなつていてと聞いております」

知つてますとばかりに東上院はドヤ顔をこちらに見せつけてくる。

確かに今夏休みで学校はない。その夏休みもまだ始まったばかりなので日にちはある。

だが、だがそれでも、この命令にすぐ頷くことはできなかつた。

「何言つてんですか、いくら命令は何でもいいつて言つても、限度つてものが……!」

「ええ。なので権利一つにつき一日、合わせて十日間ですわ。それなら許容範囲内でしよう?」

「ぐ……」

一日何かをする、というのは罰ゲームではある方だろう。そうなると反論できない。

そもそも、こんな賭けをして負ける方が悪いのだ。どんな命令でも受け入れるという条件に頷いた以上、文句は言えない。

「まあ、ご両親への説明も無しに泊まることは難しいでしょう。わたくしが話を……」  
「……いえ、こちらで話をおきます。恥ずかしい話ですが、喜んで許可を出すと思いますので」

「あら、そう」

電話を借りて父さんに東上院家にしばらく泊まり込むことを伝えると、案の定訳も聞かずに二つ返事で許可を出した。想像通りとは言え、流石に恨めしく思った。

「ではこれから、朝霧さまには執事となつていただきますよう。如月！」

新たにメイドが一人入ってきた。いったい何人メイドがいるんだ。

「彼に合う執事服を仕立てなさい」

「かしこまりました。——朝霧さま、ついてきてください」

言われるがままメイドの後を追う。

廊下を歩いている途中、如月と呼ばれていたメイドから声をかけられた。

「……朝霧さまは、お嬢様のことをどのように感じられましたか？」

「は？ ……ええと」

突然の質問に一瞬回答に困ったが、俺は先ほど思ったことを答えることにした。

「……突拍子もないことを言ったりするので読めない方ですが、俺が持つてないものを多く持つている。正直……羨ましいと思つてます」

「……そうですね」

如月さんが立ち止まったので、合わせて俺も歩を止める。

如月さんは振り向き、

「お嬢様は、同世代の方々と親しくなることを苦手とされています。また、今までの社交場の影響か、素直になることも苦手とされているようです。今回朝霧さまを執事にするに仰つたのも、何か理由があたりだったのだと思います。——どうか、お嬢様をよろしくお願いします」

そんなことを言つて、如月さんは深々と頭を下げた。その姿は、使用人というよりは保護者のようだった。

しかし顔を上げた瞬間、彼女の雰囲気は保護者からメイドへと変わった。

「失礼しました。こちらへ」

すぐ近くにあつた扉を開け、如月さんは中へと入る。どうやらすでに目的地に到着していたらしい。

採寸や着付けをされるがまま、俺は如月さんの言葉を思い返していた。

同世代と仲良くすることが苦手……それは俺と同じようにしてできた苦手意識なのだろう。いや、社長の令嬢という立場も考えると俺よりも堀は深く、壁も厚いことが予想できる。なのにどういふ訳か俺はその内側に招かれたということになる。

(……どうにも、期待されてるみたいだな)

口から出そうになった溜息は、どうにか押しとどめて胸の内に片付けた。



「着替えてまいりました」

執事服に着替えた俺を見て、東上院は一言。

「似合っではいるけれども、服に着せられてますわね」

余計なお世話だと俺は思った。

しかし彼女はそれでも何か納得したようで、それ以上言及することもなく、次の話に移った。

「さて、それではまずあなたには剣道を教えて差し上げましょう」

「……剣道？」

言ってる意味がよくわからなかった。なぜ、執事となって最初にやるのが剣道なんだ。

「だって、あなたに家事をやらせたところで、このメイド達よりいい仕事などできる訳がないでしょう？」



「……………」

まあ、正論だ。俺とメイドを比較した場合、俺の利点といえば精々力仕事の時に少し役に立つくらいだろうか。

だが、だとしてもなぜ剣道なのか。

「まあ、わたくしの執事を名乗らせるのですから、主を守ることにくらいできてもらわないと」

そういうことらしい。

「……………それでは単なるボディガードでは？」

「何か言いまして？」

「……………いえ」

渋々、彼女の言うとおりにすることにした。

場所を変えると言われてついていくと、その先にあつたのはスポーツジムだった。屋敷からは出ていない。しかしスポーツジムがあった。なんでもありなのかこの屋敷は。話を聞くとやろうと思えば大抵の競技を行えるだけの道具は揃えてあるが、最近では剣道やフェンシング以外はあまりやってないらしい。

「さ、始めましょうか。まずはあなたの動きをもう一度見せて貰えますか？」

「……………防具は？」

「今は必要ありませんわ。防具自体好きではありませんですし」

竹刀を渡され、とりあえずは一通り素振りを行つてみた。

一通り素振りをし終えたところで、東上院がやはりといった様子で口を開いた。

「基礎がしつかりできていますわね。充分美しい剣捌きですわ」

……上から目線の言葉に聞こえるが、まあ事実彼女には負けている。てつきりダメ出ししてくるかと思いきやそれどころか褒めたことを意外に思っていた。

「ただ、教科書の通りになりすぎている。相手からしたら、ただ教本の通りに捌けばそれで終いですわ」

「……教科書の通りの基礎もできなければ、勝つのは余計に難しいのでは？」

「勘違いしないでいただきたいのですが、教本の型を捨てろとは言っておりませんわ。ただ、そのまま過ぎて工夫がなっていないということですよ」

はあ、と生返事をする俺。その指摘に実感がなかったのは、彼女と会うまで負けなしだった経験によるものだったのかもしれない。

「安心なさい。わたくしがその一工夫を教えて差し上げますわ。あなたが我が流派の一番弟子、誇りに思いなさい！」

「……その流派の開設日は？」

「今日ですわ！」

「……………」

「そんな目をしないでくださる!？」

本当に大丈夫なのかこれ。

これからのここでの生活に不安を感じ、俺はため息をついた。

「馬鹿にしないでくださる!？」

## 第八十五話

目が覚めて目に見えた天井は、ここが自分の慣れた日常とは違うことをよく教えてくれた。

午前四時。早起きの俺でも少し早すぎたと思える時刻に起きた俺は、とりあえず執事服に着替え……それからどうするべきかと少し頭を悩ませた。

普段なら早朝にはランニングなどで身体を動かしているのだが、他人の敷地内を勝手に走り回るのはよろしくない。そもそも執事服で走り回ることも好ましくないし、普段の運動服は手元がない。

この時間にはもうメイド達は起きているのだろうか。だとしたら何か仕事を貰ってくるのがいいかもしれない。客人に仕事はさせられないと発言してきそうだが、「執事として従事している身だ」と言い張ればなんとかなるだろう。



メイドが困った顔をしながら言い渡してきた仕事は、お嬢様——つまり東上院瑠璃々々

を起こすことだった。

思春期に入っているかもしれない女の子を男が起こしにいくのはどうかと思うが、無理言つて受け取つた仕事を断る訳にもいかなない。今はまだ早いための時間になるまで待つ。

時間になつて、東上院の寢室の前に来た。

扉を四回ノックし、声をかける。ノックの回数にはマナーが存在し、礼儀がいる相手には四回が正しい。

「お嬢様、朝です」

……父さんがこの光景を見たらどう思うのだろうか。許嫁として送り出した息子が召使い。きつと叱られるんじゃないだろうか。

……東上院からの返事がない。

「お嬢様？」

再度四回ノック。……返事がない。

「……入りますよ？」

ドアノブを回し、中へと入る。

部屋には天蓋付きの大きなベッドがあり、東上院はそこで気持ちよく眠っていた。

お嬢様を揺さぶつて起こす訳にはいかなないので、日光を遮るカーテンを開けて明るさ

を東上院に届ける。

瞼の上に降り注ぐ眩しさに堪えたのか、東上院は声を漏らして身じろぎした。

「朝です、お嬢様」

「んにゆう……」

上半身を起こした東上院はまだ寝ぼけているのか、その場で固まってブーツとしている。昨日の凜とした彼女が嘘のようだ。

「お嬢様は、朝が苦手なもので？」

「そうですね……こう、ふかふかであたかかいベッドがあるとつい吸い込まれるような気になりますのよ……」

「昨日はあらゆる勝負で俺に十連勝したお嬢様も、早起きの勝負には敵いませんか」

「そうですね……むしろこの幸福感を早々に手離すなんてとても……俺？」

再びベッドに戻ろうとしていた東上院の動きが止まる。逆再生するかのように身体を起こし、俺に視線を向けてくる。

「……………」

「……………」

「……………いつからいましたの？」

「先ほどから」

「……まさか、聞いてました？」

「話し相手が俺だったのですが」

お嬢様の眠気は綺麗に吹っ飛んだようだ。証拠に目はしっかりと開いており、顔が引きつっている。ツーツと汗をかいてるように俺には見えた。

お嬢様を起こす仕事はこれで達成と見ていいだろう。仕事は達成できて嬉しいかぎりだ。決して一回も勝つことができなかつた相手の弱点を知れたとか、これで少しは鬱憤が晴らせるなんていう下賤な気持ちはない。

ないが、しかし。

「……お嬢様は朝が苦手」

「——ッ!!」

次の瞬間、俺の顔面めがけて枕が突っ込んできた。



「最悪ですわ……メイド達とお父様お母様以外には誰にも知られていなかったのに……」

「むしろそれ以外の人を招き入れて泊めること自体がなかったのでは？」

「……………」

凶星だったのか、東上院がプルプルと震えている。

東上院が朝食を食べ終え、その後俺も朝食を済ませてから昨日に引き続き稽古をするべくスポーツジムに来てからも東上院は未だに落ち込んでいた。

……うん、『いた』だ。もう過去形だった。

「ふ、ふふ、ふふふふ……」

今更だが、やりすぎたと思った。本当に今更で手遅れだった。

明らかに黒い笑みを浮かべた東上院が竹刀を構える。東上院が得意とする平突きを構えた。

「口答えして主を困らせる悪い執事には、少々懲らしめて躰ける必要がありますわね……………」

寝起きが悪いことを知っただけでどうしてこうなるんだ。

俺はため息をついて、それから竹刀を中段に構えて東上院を迎え撃った。

……結局、全部打ち負かされることになった。

東上院による『仕返し』もそこそこに、真面目に剣術指南に入った。

「さて、まずはわたくしの流派の解説ですが、朝霧さまはこれまでのわたくしの剣技を見てどう思いました？」



「……突きが多い。いや、突きに比重を置いてる？」

「ええ。剣術の型の一つ、突きに昇華していますわ。剣術の基本形態は九つですが、相手までの距離が最短であるのが突きです。他の八つの型はいずれも剣の腹で打ち込むのに対し、突きは剣先で突くのですから、距離が最短であることはより顕著になります。すなわち、それぞれを極めた場合、最短である突きが最速となりやすい」

まあ、理解できる。そのまま彼女の説明を聞くことにする。

「最短距離を最速最強で貫く、このわたくし流刺突剣術を極めてしまえば、目の前に敵なぞいませんわ！」

東上院は自信満々にそう言い放つ。言ってることは理解できる。要は突きの速度に特化させて相手より先に決定打を打ち込む、完全なスピードアタッカーだ。

だが……

「……敵なしなんて言葉、そこらの流派にあたればいくらでも聞きますよ」

「う、うるさい！ 文句があるなら、わたくしに勝つてみせなさいな！」

若干顔を赤くしながら怒る東上院。なんとというか、ここに來てからというものの彼女のお嬢様らしくないところばかり目についている気がする。まるでどこにでもいる、やや背伸びしている年頃の少女のような……。

二日目にして早くもそんな評価を胸の内に押し留めながら、それからしばらくの時間

また打ち合った。



東上院に従事して四日目。

二日目の一件以降、なぜか東上院を起こす仕事を一任された。あんなことがあったんだし、寝室を出入り禁止にされてもおかしくないと思つていたんだが……彼女の考へていることがわからない。

それはそうと夕方の現在、俺は一人竹刀を振るつていた。

今夜、東上院は金持ち達が集まるパーティーに出席することでのこの屋敷にはいない。俺が同行することなど当然できず、こうして一人鍛錬をしている。

『東上流』と名付けられた剣術の動きを確認しながら竹刀を振っていると、ふと一人のメイドがこちらを見つめているのに気がついた。

「あなたは確か……如月、さん？」

それは、ここに来て初日に東上院のことを頼んできたメイドだった。

名前を呼ばれたメイドは、バツが悪そうに頭を下げる。

「あ……申し訳ありません。お邪魔するつもりではなかったのですが……」

「いや、気にしていませんが……何か御用ですか？」

「いえ、用という程のものでもないのですが……」

「……？」

用という程でもないというが、言葉の濁し方からして何か用ではあるはず、話をしたいとかだろうか。そう言わないのは、俺が鍛錬の最中であるからと考えるのが妥当か。

そう憶測を立て、俺は竹刀を元あつた場所へと片付ける。

「汗を流してきます。それから、お茶にしませんか？」

「はい。では、お茶と茶菓子を用意しておきますね」

如月さんはまたぺこりと頭を下げた。

シャワールームで汗を流し、居間にて俺と如月さんはテーブルを挟んで向かい合っていた。テーブルには如月さんが用意した紅茶と茶菓子が置かれている。まだ手は付けられていない。俺が手をつけていないのは、来るであろう如月さんの話題を待っているためだ。

予想通り、程なくして如月さんの口が開いた。

「お嬢様とは、どんな感じでしょうか？」

「……どんな感じ、というと？」

非常に曖昧な質問に、思わず質問で返してしまふ。

「屋敷に来て四日目となりますが、現時点でのお嬢様との関係や、お嬢様をどうお思いかを聴きたいのです」

「……どう思うか、ですか」

俺は少し悩んで、それから答えた。

「……ありふれた年頃の少女、ですかね」

「そうなのですか？」

「朝には弱いし、やや行き当たりばったりなことも言ってくるし、意見したら逆上してくるし、そういったところは、俺が学校なんかでよく見る奴らと同じようにも見えます」

そう答えると、如月さんは驚いたような表情を向けていた。

「お嬢様が、逆上されたのですか？」

「ああいえ、そんな大したほどではなくてですね……彼女の我流剣術が敵なしだと言ったところで、敵なしなんて言葉は他の流派でも使われてると意見したら、文句があるなら自分に勝てと……」

「……お嬢様は、他人に対して感情的になることはまずありません」

「……はい？」

「お嬢様にとつて朝霧さまは、何かしら特別に見ているのかもしれないね」

「特別？」

「はい。私が見てきた中では、お嬢様は常につまらなさそうな様子でした。私達とお話する時も、見合いの相手にも……きつと、自分の立場を意識して感情を吐き出すことができなかつたのでしよう」

……そういえば、メイドが来るときにはあいつは常に毅然とした様子で振舞つていた。

「きつと、お嬢様は朝霧さまのことを認めていらつしやるのだと思います」

だけど、疑問が生まれる。

なぜ俺なのか。なぜ少し前まで何の繋がりもない赤の他人であつた俺にそこまで気にかけるだろうか。

彼女にとって、俺は一体何なのだ？

疑念が晴れないまま、話は終了し、それからしばらくはその疑問が頭から離れることはなかつた。

## 第八十六話

突きが来る。

当然回避。回避に竹刀を持つ右腕を引いて構える動作を織り込む。

距離は……ここからなら充分だ。

腕だけでなく、脚に腰、できるだけ全身のバネを使って東上院に向けて突きを放つ。

東上流刺突剣術『壺型』

用途に合わせて幾つかの型がある東上流。その技名ともいうべきものは簡素に番号とした。理由は「あまりに凝った名前には後々使つて恥ずかしくなるんじゃないか」と俺が忠告したからだ。自分に名付けにセンスはないと思つているし、東上院もそんなことやったことがないらしいため、最終的にそれで落ち着いた。

『壺型』はその若い番号が示す通り、東上流刺突剣術の基本型である。その場で相手を狙う突き。単純だが、だからこそ本人の腕の程度が露わになる。

竹刀の切っ先は東上院を捉えるにはかなわなかった。回避した東上院はすでに竹刀を持った腕を引つ込め、もう一度突きの構えを取つている。回避するには少し間に合わない。

点の攻撃である突きに対して防御は難しい。だがやる必要があった。負けないために、勝つために。

(そのためには——)

東上院からの『壱型』が放たれる。俺はその瞬間に突き出していた竹刀を素早く引き戻し、東上院の竹刀の腹を押し上げた。軌道を逸らされ、竹刀は耳元を通過する。かなりの速度で通過した竹刀を見て、若干冷や汗のようなものを感じた。

少しの間拮抗し、竹刀を弾いて距離を取る。

すぐにまた突きの態勢に移つ——

「——く、っお!!」

目の前の相手の動きを見て咄嗟の判断で竹刀を盾にする。ほぼ同時に竹刀同士の間で音が響いた。

かなり無理な受け方をしたせいで押し合いはこちらが明らかに不利となっていた。その上、女の力も馬鹿にはできない。

程なくして、押し合いに負けて床に倒れこんだ。

「勝負ありですわね」

顔に若干汗を滲ませた東上院は、俺を見下ろしながらそう宣言した。

メイドから東上院のことを聞いた翌日、いつものように俺と東上院は稽古をして、そ

れから試合をした。結果はこの通り、俺の負けだ。

「……まだ勝てそうにないな」

「当然ですわ。同じ流派なら練度の差が大きいんですもの。むしろその上達の早さは褒められるべきですわよ」

呟いた声を聞かれたのか、東上院がそんなことを言ってくるが……ここまで実感を感じられないのは何年ぶり——いや、初めてかもしれない。

ずっと負け知らずだったのが、東上院との勝負ではずっと黒星だ。いやでも劣等感を感じざるを得ない。

だが、同時に楽しくもある。今まで負けなしでつまらなかったところもあったのだ。

「フフッ♪」

そんなことを考えていると、東上院が急に笑い出した。

昨日、パーティーから帰ってきた彼女はどこか不機嫌のようだった。今朝もそれが若干残っているようだったのだが、今ではむしろご機嫌のようだ。一体なんでだ？

「さ、汗を流しに行きましょう。その後はまたいつもの、いいですわね？」

「……ええ」

昨日のと合わせて疑問に感じつつも、俺は汗を流すべく立ち上がった。





「スペードのロイヤルストレートフラッシュ」

「……………」

汗を流し終えて、俺と東上院は娯楽室にいた。

娯楽室の今いるここはランプやダーツ、ルーレットなどカジノものを集めた部屋だ。俺と彼女はそこでポーカーをやっていた。

ただし、普通のポーカーではない。やっているのは、それぞれが五十四枚の山札を持って勝負する『五十四の二倍ポーカー』だ。

ただのルールで勝負しても面白くないと言う東上院は、少し前から既存ルールに多少の手を加えたオリジナルルールで行うようになっていった。

ルールを作っては勝負し、勝負してはルールを見直し、そうやってゲームを作っていく。

今勝負がついた『五十四の二倍ポーカー』もそうやって開発している勝負の一つだ。

「…………俺の負けです」

ため息をつき、俺は手に持っている札を伏せる。

「やはり、山札を各自所持というルールがいけないのでは？ある種のイカサマ公認ル―

ルでは、こうなるのが当然ですわ」

「……それにしたって、お嬢様のロイヤルストレートフラッシュを揃える速度は異常だ  
と思うのですが」

『五十四の二倍ポーカー』は“自分の山札”を持ち、“自分”でシャッフルすという、  
イカサマを事実上認めた作りとなつている。当然、最初からガン（カードにつける目印）  
をつけたら勝負にならないため、勝負する時には新品のトランプで行つている訳なのだ  
が、それでも彼女は五巡目以内に最強の手役を出してくる。勝てた試しが一度もない。  
仮にも複雑にシャッフルしている以上、運の要素も関わるはずなのだが……。

「それは、わたくしは持つていて朝霧さまは持つていないということなのは？ ……  
まあいいですわ、次の勝負でもしましょう。今朝考えたものなのですが……朝霧さま  
？」

「はい？」

気が付くと、東上院がこちらを覗き込むように見つめていた。

「どうかしましたの？ 考え事ですか？」

「それは……」

少し、悩む。そして、訊くなら早い内がいいと思い、肯定する。

「……そうですね。質問してもよろしいでしょうか？」

「ええ」

許可をもらったので、昨日から——いや、それより前から思っていて昨日より強くなった疑問を打ち明けることにした。

「……昨日、メイドからお嬢様のことを聞きました」

「メイドから？」

「お嬢様は他人に感情的になる方ではないと言っていました。しかし、俺が見る限りではそのような様子は見られなかった。メイド達の言うことが本当ならば、俺はお嬢様にとって感情を露わにするほどの何かがあるということになる」

「……………」

「その何かとはなんなのか……それをお聴きしたいのですが」

俺の言葉が終わり、静寂に包まれる。

東上院はしばらく考えているような様子を見せ、それから彼女は語り始めた。

「……わたくしの周りにいる方々は、二種類しかいませんでした」

「……………」

『わたくしにとって逆らえない人』と『わたくしに逆らおうとしない人』。その二種類が全てでした。時折、わたくしを自分のものとして扱おうとする方もいますが、そんな方はお父様やお母様によってすぐ弾かれますから、周りにいたのは本当にそれぐらいでし

た。前者はまだいいですが、後者には本当に飽きていましたの。皆わたくしの顔色を伺つて、不快にさせないようにと持ち上げてばかり。見合いではそんな相手しかいませんでしたわ」

まあ、そりやあそうだと俺は思った。

彼女曰く、東上院の見合いに出されたのは社長と親しい間柄である幹部の息子達ばかりだったそう。社長と幹部となれば、東上院の機嫌を損ねたらマズいと保身に走るはおかしくない。

保身でなくとも口説くために彼女を持ち上げたとも考えられるが、どちらにせよ東上院にとって印象のいいものではなかったようだ。

「けれど、そんな時に朝霧さま、あなたがやってきましたの。最初会った瞬間はやる気のなさそうな方と思いましたけど、一度勝負して気が変わりましたわ。今までは皆接待プレイなんかでわざと負けてはおだててくる連中でしたのに、あなたは違った。勝つために本気で歯向かってきた。わたくしには及ばないとはいえ、十分以上の腕前も見せてくれましたし、いい印象を持つには充分でしたわ」

「……つまり、新しい玩具を見つけたようなものだ」と

「口が悪いですわよ。わたくしの弱点を見つけようとするし、いちいち意見してくる方ですけど、わたくしはあなたに良い評価をしています。それに、玩具だと思ふならあな

たに朝起こしてもらおうとも、一緒に劍の腕を磨こうとも考えませんわ。そう、わたくしは……」

そこで一度途切れる。東上院は顔を赤らめ、若干恥ずかしそうに、しかしそれでもしつかりとした意思を込めて言った。

「わたくしは、あなたと友達になりたいって……そう思いましたの」

呆気にとられた。

恥ずかしがりながらも微笑むその顔に、そして言葉に。

だつて、その台詞は……

「……こゝ、これで質問の回答はお終い！ それで！ そういうあなたはどうなんですか！？」

本格的に恥ずかしくなったのか、そう打ち切つてこちらに質問を返してきた。

勢いよく指を向けられ、俺は、

「……俺にとつて、見合いの話は最初からどうでもいいものでした」

自然に、口が開く。

「同年代の人と仲良くなろうと思わなかった俺は、その見合いについても適当に終わらせることばかり考えていました。でも、あなたと勝負して、本気を出して負けたとき、衝撃だつたんです。それからここにきて何度も勝負して、未だに勝てないというのは悔し

くて……同時に、それだけのものを持つているあなたが羨ましかった。一体どうすればそれだけの域に辿り着けるのだろうって。……まあ、蓋を開ければ朝は弱い上に勝手に言つてはそれに意見すると逆上してくる、特に特別でもない年頃の女の子だとわかつた訳ですが」

「ちよつと怒つてもいいのかしら」

「でも、そんな女の子に、俺はいつの間にか惹かれていた」

そこで区切つて、息を吐き、吸い込む。きつと、俺の顔には恥ずかしさがでていることだろう。それでも俺は、しつかりと意思を込めて、言つた。

「俺は、あなたと友達になりたいと……そう思いました」

それが俺の気持ちだった。

今度は逆に東上院が呆気にとられていた。しかし、すぐに我に帰つた東上院は、今の言葉を受け止めて徐々に破顔していく。

「じゃあ……友達になつてくれますか？」

「はい。俺からお願ひします」

「ええ、ええ！ それでは、わたくし達は友達ですわ！ ——あ、そうだつ」

「どうしましたか？」

「親しい方とはあだ名で呼び合つたと聞きましたわ。是非ともわたくしにあだ名をつけて

くださる？ さすがに人前ではいけないとして、二人きりの時に呼び合う名前ですわ」  
若干彼女の知識が偏ってるんじゃないかと思つたが、悪くないので考えてみることにする。

あだ名となると、名前を弄るのが普通だが、彼女の名前は瑠璃々々……ルリは安直すぎる気がする。となると……。

考えながらふと彼女を見て、白い髪が目についた。白……白百合……そうだ。

「……リリ、でどうでしょうか」

「リリ……ええ、悪くないですわね！ それで、今度はあなたの番なのですけど……」  
「はい」

「……綾という名前では、略しようがないですわね。綾と呼ばせていただいてもよろしいですか？」

「あー、……ええ、構いませんよ」

「ありがとうございます、綾。友達なんですし、楽な言葉遣いで構いませんよ。二人きりの時に限りますけど」

「……わかつたよ、おじよ——リリ」

「ええ」

こうして俺は東上院、もといリリと友達になった。



リリと友達になり、メイド達の前ではお嬢様と執事、二人きりの時には友達として、剣道の鍛錬やゲームの開発といった日々を送り……リリの執事となって九日目の夜と  
なった。

明日で執事として従事する約束は終わりだ。

こうして見ると、なんだか短かった気がする。もう少し一緒にいたかったと思わない  
訳でもない。

そんな夜に、リリが声をかけてきた。

「綾、今日テレビで映画が放送されるのですが、よかつたら一緒に観ませんか？」

「映画？」

「ええ、このタイトルの映画なのですが……」

そう言つてリリが見せたタイトルに俺は眉を顰めた。

だつてこれ……

「……リリ、これのメインビジュアルとか、宣伝は見た？」

「？ いえ、全く」



「……………これ、ホラー映画だぞ？　平気なのか？」

「……………ホラー？」

「それも、結構グロテスクだと当時有名だった」

タイトルだけではホラーとは察しづらい映画であるため、タイトルだけで知らずに見ようとしていたのだろう。セレブは外界の情報には疎いと聞くし、庶民の映画を知らないのも無理はない。

確認するようにリリの顔を見ると表情は固まり、身体はカタカタと小刻みに震えている。だいたい察した。

「リリ？」

「はい？　わたくしは平気ですわよ？　ホラーなんて所詮怪奇現象だとかぬるい非科学的ものを合成編集で見せているだけでしょう問題ありませんわ」

「……………ああ」

震えたまま雄弁に語る強がりな少女に、俺は何も言えなかった。せめて必要になったら手を握ってやった方がいいだろうか……と思いつながらリリの後をついていった。

二時間後。

「……………」

「……………」

映画のエンディングが流れているが、俺はどうしたものかと困っていた。

俺の右隣にいるリリだが、震えは余計酷くなり、表情もより固くなっただけでなく目尻に涙が溜まっていた。タイミングを見計らって手を握ろうかと思っていたが、リリの方から掴んできて今も俺の手を握りしめている。それでも最後まで観賞を続けたのは、彼女なりの負けず嫌いなのだろう。

まあ、それほどの映画だったということだ。正直、俺もこれについては心臓に悪いという感想を抱いている。

とりあえず、震えているリリをどうにかしなければならぬ。

「リリ?」

「な、なんですか?」

リリの声が涙声で若干上ずっている。

安易に慰めの言葉を使っても逆効果だ。なので俺はこう尋ねる。

「何か、してほしいことはある?」

「……………」

リリは少し俯いて、それからおずおずと上目遣いでこちらを見た。

「……………じゃあ、抱きしめてくださる?」

「え? ……ああ」

言われた通り、俺はリリを優しく抱きしめた。

「……………こうか？」

「……………もつと強く」

「えつと、こうか？」

より強く抱きしめると、リリがこちらの背中に手を回して強く抱き返してきた。

程なくしてすすり泣く声が聞こえる。

「……………大丈夫か？」

「何も言わないで……………」

「はいはい……………」

それからしばらく、互いに一言も発することなく抱き合う。

そうしてしばらく経って、ようやく落ち着いたのでかりりからの力が弱まったのを感じてこちらもリリを解放する。

「……………ありがとう。まさかあそこまですとは思いませんでしたわ」

「評判は聞いていたけど、これはさすがに予想外だったな」

はあ、と二人してため息を吐く。

タイミングが合ったのがおかしかったのか、互いに互いの顔を見合わせた後、プツと吹き出した。

それから、互いに感想を言い合った。これが印象的だった、あれが怖かった。途中で最大の恐怖シーンを思い出して互いに硬直したこともあった。

あと、その途中で先ほどの抱きしめることの意味も教えてもらった。

「しっかりと抱きしめることによつて相手に体温や心臓の鼓動を伝えて、それで落ち着きやすくなりますの。これはお母様から教えてもらったのですが、おそらく原理は赤ちゃんが一番落ち着くのは母親の体温と鼓動という話からきているのでしょね」

「……まあ、おかげで俺たち二人とも落ち着けたという訳だ」

「そうですね。……さて、そろそろおやすみとしましょう」

「そうだな」

もう夜もそこそこだ。俺とリリはそれぞれの寝室へ向かうため、ソファから立ち上がる。

「あ、そうだ」

リリは思い出したようにそう言うと、くるりとこちらに振り向く。

そして素早く近づくと、そのまま俺の頬にキスをした。

「……ええ？」

「……フフツ、今回のお礼ですわ」

リリはそう悪戯っぽく微笑むと、サツと部屋を後にした。

俺は棒立ちになつたまま、キスされた頬をさする。まだ柔らかい感触が残っているよ  
うな気がした。

まだ、俺達は友達になつたばかりだ。許嫁と呼ぶには、言葉としては理解していても  
わかつていないのが現実だろう。

でも、彼女とこのまま良好な関係を築けるのであれば……それは悪くないのかもしれない。

そう……思っていたのに……。

それから、一ヶ月後。

父さんが逮捕された。

## 第八十七話

「……………」

目が覚めて、視界に広がるのはいつものアースラの医務室だった。

あの頃の夢の余韻を脳内に残したまま、上体を起こす。夢の途中で覚めてしまった頭は、自然とその続きを思い出していた。



会社の金を横領した疑いで逮捕された父さんは、当然無実を主張した。

出世欲が強いとはいえ、横領のような不正をする人ではない。父さんが恨みを買いたいが、今となつてはもうわからない。

結局、父さんは主張もかなわず裁判で有罪判決を受け、会社からも追われることになった。

その影響は当然こちらにも及び、父さんが逮捕されてすぐりりとの許嫁の話は取り消

され、それ以降俺は彼女と会うことができなくなった。

いや、一度だけ会った。正確には、遠目で見かけただけなのだが。

リリのことを諦めきれなかった俺は、東上院家の近くまで何度も立ち寄った。警備があるため、リリに迷惑かけないためにも忍び込むような真似はしなかったが。

その時に一度だけ、リリの姿を見つけたのだ。そしてその隣には、知らない少年の姿があった。

……新しい許嫁だと、すぐ理解できた。

新しい許嫁の少年は、まるでリリがもう自分のものであるかのような態度だった。それはかつて彼女が嫌いだと言っていた、すでに勝ち誇ったような態度をとる男のそれだった。

対するリリは……リリは――。

……そこからは、あまり覚えていない。気がつくくと、息を切らして家に帰っていた。全身の、特に脚の疲労感から走ったのだと思う。膝などには転んだとみられる擦り傷が幾つかあった。

俺は、あの場合から逃げたのだ。

ただとにかく、惨めだった。そして自分自身に失望した。

あんな奴がリリの隣にいること。リリの前に立ち、声をかけることができなかつたこ



と。逃げ出したこと。

そして、約束を守れなかったこと。

十日間の東上院家での暮らしの後も、時折りりからの誘いで東上院家に訪れては鍛錬をすることもあった。その頃に一つ、約束をしたのだ。

『何にも負けず、君を守る』

その約束も、もう果たせない。俺から逃げ出したのだ。

子供の約束と言われるかもしれない。四六時中守るなんてそもそも無理な話だ。

しかしそれらを引き起こした自分の弱さが、ひどく惨めで、自分の不甲斐なさに絶望し、失望し、後悔した。

もう彼女には会えない。その現実には打ちひしがれ、ぐにやりと歪んだ視界も直さず、ただ嗚咽を漏らし続けていた。



(あの時の後悔が俺をこの世界に呼び寄せた……)

しかし、もうそれを気にしてはいられない。ここはもう彼女のいる世界ではないのだ。

加えて、こちらにはやり遂げなければならないことがある。

このデスゲームを始めた神に反逆し、神殺しを果たさなければならぬ。

もう、あの時のように立ち止まっている訳にはいかないのだ。

『砕け得ぬ闇事件』から三ヶ月。もう傷は癒えた。

患者服から私服に着替え、新しく作られた『左腕』を取り付け、ネックレスとなつて  
いる『レイピア』を首にさげる。眼帯のズレもない。

「綾！ 調子はどうだ？」

「おっ、もう準備できてるな！ やつとこれで進めるぞ〜！」

「綾さん、お引越しの準備はできてますよ！」

もう地球に来ることはないだろうから、仲間達に引き払う準備はさせた。新しい住居  
も、リンディイさんのおかげですでに準備は整っている。

すでに才は向こうへ行き、訓練校に入校している。他にも転生者の幾らかはもう現地  
入りしているはずだ。俺達も出遅れないよう、次の試験目指してやることは多くある。

「行こう——ミッドチルダへ」

仲間とともに、俺は新たな舞台<sup>ステージ</sup>へ向かう。



ミッドチルダのとある時空管理局武装隊訓練校。

「……………」

「どうしたんすかあ、そんな不機嫌そうな顔で。今朝からずっとその調子つすよ?」

やや長い廊下を一組の男女が歩いていく。訓練校では訓練生を二人一組で指導することが多く、ここも例外ではないが、この二人はそういったコンビの関係ではない。

ではなぜ共に行動しているかと言えばそれは単純で、入校前から関わりがあったからである。

少年に不機嫌面だと言われた少女は話し相手の少年と同じ十五歳前後。大人と呼ぶにはまだ幼いながらも整った顔と容姿は、誰からも美少女と呼ばれるであろうものである。二人の関係を恋人と見たのか、すれ違った同期から少年に対する嫉妬の視線をもらうが、それに対して二人は無視と決め込んでいた。

少女が口を開く。

「別に、不機嫌ではありませんわ。ただ懐かしい夢を見まして」

「まーたその手の夢ですか?よく見るんっすねえ」

「……………そうですわね」

少女は少年に対して適当にそう答えた。

その夢は彼女にとって不愉快なものであつた。故に、不機嫌ではないと言つた彼女だが、実際には不愉快であつた。

あるものを失つた夢。それが彼女の心を今でも縛り付ける。

彼女にとつて、失う夢はもう沢山なのだ。

「……この話はもういいですわ。早く次の座学の教室へ向かひませう」  
「うーっす」

二人は廊下を歩く足を速めた。

九年後——新暦〇〇七五年に向け、転生者達の足は止まらない。

## 魔法都市争乱編

## 第八十八話

〇〇七五年四月、ミッドチルダ臨海第八空港近隣廃棄都市街。

一般人が立ち入ることのないこのような廃棄都市は、新たな都市開発が行われない限りは時空管理局がよく有効利用している。模擬戦などの訓練場は勿論のこと、凶悪犯を誘導して遠慮なく叩き伏せる、そう言いたいわゆる狩場として。

——そして今回二人が受ける、魔導師試験の試験会場としての一面もある。

二人とも歳は十代半ばといったところ。試験時間まで待機している二人の様子は両極端と言えた。

方や準備運動として体を動かし、方や自身のデバイスの点検をしていた。

「スバル。あんまり暴れていると、そのオンボロローラー壊れるわよ」

「現在は」拳銃の姿をしているデバイス、その簡易点検と調整をしている橙の髪をツインテールに纏めた少女が見向きもせず忠告した。

彼女が『スバル』と呼んだ少女が暴れていると判断したのは、相方の運動量をよく見ているから、訓練校時代からの付き合い故の経験だった。

「そういうこと言わないでよティア。ちゃんと油は差してきた！」

「内部部品の磨耗チェックは？ フレームの歪み確認、出力数値の調整、他にもあるけど？」

「う……で、でももうそんなのやってる時間はないよ」

「それを言うなら、前日までに確認をしなかったあんたが悪い」

ぐうの音も出ない正論だった。

反論できず、まずスバルの口から漏れたのはため息だった。

「はあく、どうしてこんな時にティアのお師匠さんいなかったんだろ」

「あの人に頼ろうと考えたのがそもそも間違えよ。言っとくけど、あそこで捕まえられることなんてほとんどないから」

「そんなに忙しいの？ 『雑務課』って」

「ええ。あそこの人達はクソ忙しい日々を送ってるって聞いたことがあるわ」

「そういう風には見えなかったけどなあ」

「……つと、そろそろ時間ね」

最終確認を終えた自分の得物をホルスターにしまう。

程なくして、ブザーと共に空中にモニターが投影された。

『魔導師試験受験者二名、整列お願いします！』

「はい！」

少女二人が整列する。

モニターに映されたのは黒い髪をストレートに伸ばした女性だった。眼鏡をかけているが堅さはなく、あどけない印象すら見える。

『確認します。時空管理局陸士三八六部隊所属、スバル・ナカジマ二等陸士』

「はい！」

『同じく、ティアナ・ランスター二等陸士』

「はい」

『所有している魔導師ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは陸戦魔導師Bランクで間違いありませんか？』

「はい！」

「間違いありません」

スバルとティアナ、二人の回答にモニターの女性は笑みを浮かべ、自己紹介に移った。

『はい！ 本日の試験官を務めます、藤木由衣三等空尉です。よろしくお願いしますね！』

「よろしくお願いします！」

それから試験官、由依は試験の説明を開始した。

藤木由衣（十九歳）

魔力ランク：＋A A

魔導師ランク：空戦A A

階級：三等空尉



ミッドチルダ陸士二〇七部隊、メンテナンスルーム。

スバルとテイアナが試験の説明を受けている頃、そこには二人の男性がいた。

一人は、赤みがかった茶髪の青年。やや長い髪を現在は髪留めで留めている。

もう一人は、頭を刈り込んだ男性でがたいが大きい。茶髪の青年とは一歳年上程度だが、髪型や体型のせいか周囲からは三十代に見られることが多い。今はデバイスを弄っているため外しているが、プライベートの時にはサングラスをよくかける。

「もうそろそろ、テイアナは試験に挑んでる頃か？」

デバイスの部品を交換しながら、丸刈りの男が尋ねた。

茶髪の青年が答える。

「ああ……」



「なんだ、心配なのか？」

「試験については心配ねえよ。むしろ原作のアクシデントも潰して大勝利つてのが目に見える」

「じゃあ、なんだよ？」

「あいつに仕込まれたモノがモノだし、おかげであいつの思考がエライ殺伐としてつからなあ。その後の方が心配なんだよ」

「まあまあ、なんとかなるだろ」

「んな適当な……」

「そーいや、試験官つて誰がやんだ？」

丸刈りの男がまた尋ねた。

「知らなかったつけ？ 由衣が担当だよ」

「マジか!? あいつも出世したもんだな」

「ああ、俺達の中でも一番の出世頭だ」

例外を除いてな。そう茶髪の青年が言う。

違いねえ、と丸刈りの男が頷いた。

しばらくしてメンテナンスが完了し、元通りとなったデバイスを青年に手渡す。

「ほらよ」

「しっかし、今でもその図体でデバイスちまちま弄ってるのが見慣れねえな」  
「嫌みかコラ」

「いや、お前が機械に強くて助かってる。こいつを他人に見せたくはないからな」  
「くっそー、いいよなあお前は。俺なんてお呼ばれにかかってすらいねえぞ」

「仕方ないさ。俺としては由衣だけって可能性も見てたんだぜ。あいつらと末崎の繋がりなんてなおさらねえじゃん」

「はあ……だよなあ〜」

末崎と呼ばれた男は落ち込んだが、ふと思いついて顔を上げた。

「そーいや海斗、綾はどうなんだ？海斗はスカウトされてあいつにはなしってことはないだろ」

「……ああ、あいつはな——」

海斗と呼ばれたその青年は、若干面倒くさそうに答えた。

藤木海斗（二十四歳）

魔力ランク……—A

魔導師ランク……陸戦A

階級……陸曹

末崎幹（二十五歳）

魔力ランク：B

魔導師ランク：陸戦C

階級：二等陸士

特記事項：デバイスマスター資格保有



カツカツと硬い靴底と廊下によつて足音としてその空間に響く。静かなこの場ではどこまでも響いていきそうな音だ。

歩いているのは黒いバリアジャケットを纏った黒髪の男だった。右目には眼帯をしている。右手に持つ刀は、その刀身を赤く濡らしていた。

すぐ後ろに置き去りにされた、この施設の研究員 “ だったもの ” の血で。

彼は侵入者だった。彼はこの施設の脅威だった。しかし、敵を報せるサイレンは、ここに入った時から一度も鳴っていない。

鳴っていないから、未だに異常に気づいていない者がいた。今入った部屋にいた者達がそれだった。数は四人。

「だッ、誰だ貴様——」

ドスツと、一瞬で白衣の男に接近して刀を突き立てる。心臓を貫かれ、鮮血を噴き出す男が絶命するのは数秒とかからなかった。

恐怖より先に混乱に抱かれながらも、両脇の男二人が懐から実弾銃を取り出し、侵入者がいた場所に向ける。しかし、向けた先にいるのは銃を向けあう互いの姿だった。誤射を防ぐため、慌てて銃口を上に向ける。

一人目を刺し、その勢いのまま通り抜けることで射線を避けた侵入者にとって、そんな二人の姿は格好の的だった。

襟の裏に手を伸ばす。そうして取り出したのは、USB状の四角い棒だった。先についているキャップを外すと、先端から魔力が鋭い刃となつて噴き出した。その魔力刃二つを、ようやくこちらに気づいた二人に投げる。一つは喉仏を貫き、もう一つは頬に突き刺さった。刃が頬に刺さり痛みに悶える男の首に、彼は黒い装甲でできた左手の手刀を叩きつける。首の骨が折れる音と感触が彼に伝わった。

「わ、わあああああッ!!」

ようやくと言うべきか、最後に残った一人が恐怖に囚われ出口へと走る。しかし死体から抜き取られ投げ放たれた刀が男の後頭部を貫き、その先の壁に縫い止めた。

辺りは再び静寂に包まれた。

侵入者は刀を抜き取り、死体が纏う白衣を裂いてそれで刀身についた血と脂を拭き取

る。そうしながら、彼は念話の回線を開いた。

『ルートB、四人処理した。残りはどうなっている』

『処理した人数はこれで十六人。ここの職員の人数と一致したわ。制圧完了と見ていいんじゃない?』

『こちらルートA、管制室に到着。ミュが現在データの回収を“お願い”してますぞー』

『シノ、まだ調べていない部屋はあるのか?』

『一応、実験室つてところが未確認ね。ミュ、実験室の様子つて確認できない?』

『えつと……カメラが壊れているためか、一面砂嵐です……』

『俺が確認する』

『ああ待った、俺も行くぜ。研究員だけじゃ物足りなかったんだ』

『あつ、い、行っちゃうんですか!?!』

『ミュはそこで待つてなさい。私がそこに行くから』

次の目的地が決まり、彼は歩を進めた。

『実験室』をミッドチルダの言語で書かれた部屋に着くと、程なくして向かいの廊下から男が一人やってきた。

銀髪をまるでハリネズミのように尖らせたヘアスタイルの男性。バリアジャケット

の基本色は同じ黒だが、黒髪の男とは違い、革製特有の光沢といくつものシルバーアクセサリーが目立たせていた。

「おう、ここか。じゃあ早速——」

「入る時のマナーは？」

黒髪は銀髪を止めた。銀髪は「わかってるよ」と言つて続ける。

「部屋に入る時には——」

「ノックしてからお邪魔します、だ」

魔力で強化した足蹴り二つが扉を突き飛ばした。

実験室は他と比べて広い空間だった。二人はその中に入り込む。

中には、二つの影があった。

一つは竜。ずんぐりとした体に長い首と尻尾、四本の足を持った、地球で言うならば西洋竜というものであった。ただしその身体の至るところが鋭い鋼鉄の刃となっている。

そしてもう一つは、獣の身体に蛇の尻尾、大きな翼、そして異なる三つの頭という、ケルベロスとキマイラを合わせたような怪物だった。

そのどちらも自然には存在し得ない異形の存在である。導き出される答えは一つだった。

「生物兵器の開発所という訳か」

「あの三つ首面倒くさそうだな。俺ドラゴンの方にするわ」

「奇遇だな。俺もドラゴンを相手取りたいと思ったところだ」

「……………」

「……………」

そうしている間に獣と竜は二人の存在に気づいた。腹を空かせた二頭は、二人を餌だと殺気で眼を光らせる。

しかし二人はそれを気にも止めない。

「おい」

「……………ああ」

二人は互いに頷き、同時に手を突き出した。

片方は握り拳、もう片方は人差し指と中指。

「じゃあ、俺がドラゴンだな」

「ちえー。まあ面白そうだしそれでもいいか。しくじんなよー」

「わかってる」

刀を抜き、黒髪はドラゴンと対峙した。

己に向けられた殺気を理解したのか、ドラゴンは咆哮を上げながら彼に向かって走り

出した。

鋭い牙に加え、劍の角を持つ頭を振り回す。床や天井を斬り裂きながらそれが男へと近づいていく。

男は魔法陣を展開した。灰色の魔力が彼の表面に纏わりつき、体内で循環する。

必要な魔法をかけた男は、まだその場を動かない。斬撃はどんどん近づいている。

微動だにしない男に対し、ドラゴンは確実に捕らえようと口を開き、牙を向ける。

そして閉じた——が、当たらなかつた。

噛み付く寸前に、男は間一髪回避をしていた。間一髪といえど追い詰められたものではなく、彼が作り出した状況であつた。

ドラゴンが口を閉じ空いた空間に男は身体を滑り込ませ、胴体へと一気にかける。ただ走るだけでは不可能なその速度は、強化魔法によつてもたらされたものである。

刀を構え、ガラ空きの胴体に向かって駆け抜け、突きを放つ。

ガギイインツ!!

その一撃は甲高い金属音と共に弾かれた。このドラゴンの鱗や表皮は鉄でできているみたいだ。

男を踏み潰そうとドラゴンの四つの足が動き出す。男はすぐに距離を取る。その途中で振るわれた鋭い尻尾は飛び越え、より距離を開ける。



ドラゴンは再び首を振り回しながら突進を仕掛けた。

対する男は、腰を落とし、刀を持つ右手を引き、左手と合わせ照準を固定する。そして、駆け出した。

ドラゴンは即座に反応し首を振り下ろす。このままでは直撃する——と横目で銀髪  
の男が見た次の瞬間、黒髪の男はさらに加速して斧のような首の一撃を潜り抜けた。

速度を乗せた突きを放つ。胴体の先ほど突いた箇所突き立てる。相手は鋼鉄だが、  
技術があれば同じ鉄の剣で鉄を斬り裂くことは可能だ。

彼の刀はドラゴンの鉄の皮膚を切り裂いて肉に届いた。

痛みにドラゴンが吠えるが、彼の攻撃はまだ終わりではない。刀はドラゴンの肉に届  
いただけでまだ浅いのだ。刀の柄の先に右拳を当て、足元に魔法陣を、柄に当てた拳に  
術式の円環を展開し、力を込める。

魔法で強化した拳によって、刀がドラゴンの体内を突き抜けた。

「ギャアアアアアアアアアアアッ!!」

ドラゴンは経験したことのない痛みに怒り狂い、のたうち回る。二箇所傷口から出  
血するが、臓器は避けたようで弱る様子はない。

運のいい奴だ。男はそう思った。

同時に、運の悪い奴だとも男は思った。これで絶命してくれてたら、そんな痛みへの

たうつこともなかったのに。

男はバリアジャケットの内に仕込んでいる手の平ほどの黒い球と、魔力カートリッジを取り出した。カートリッジを球の中に組み込み、ボタンを押してからドラゴンの傷口にねじ込む。

直後、傷口を中心にドラゴンの胴体が破裂した。爆発によって首と胴体を繋ぐ肉体を失い、頭は地面に落ち、残る胴体もぐらりと揺れて崩れ落ちた。

竜の絶命を確認して、彼はもう一方の戦況を確認すべく振り返った。

「なんでえ、一発で終わったぞ。拍子抜けじゃねえか」

視界の先にあったのは、バラバラに飛び散った獣の肉塊と、全身に返り血を浴びて不満を漏らす銀髪の男だった。

終了を察した彼は、刀の回収行動に向かいつつ再び念話の回線を開いた。

『俺だ。実験室の制圧も完了した』

『了解。じゃあセダンに後処理をさせて、私達は先に戻りましょう』

『ああ』

念話を閉じ、彼はその後処理担当のセダンに声をかけた。

「セダン、後処理は任せる。残さず喰って」おけよ」

「了解だ、綾。上への報告はいつも通り任せるわー」

セダンがヒラヒラと手を振るのも見ないうちに、彼は部屋を後にした。

朝霧綾（二十四歳）

魔力ランク：——

魔導師ランク：——

階級：——

特記事項：時空管理局地上本部属秘匿特殊部隊所属（通称：ゴースト。表向きには地上本部雑務課所属）

## 第八十九話

怪奇現象の代表例として幽霊というものがある。心霊、亡霊、死霊などともいうその存在を信じるかどうかは人それぞれだ。

しかしミッドチルダは、いや、管理世界の大体は幽霊という存在に否定的だ。

それは管理世界では身近なものとなっていて、不可思議的存在、魔法が理由である。

火となり、雷となり、鋼鉄よりも硬くなったり、傷を癒したり、質量を得たり肉体の力を増加させたり重力に逆らったりと上げればきりが無い。それらを可能にするのが魔法だ。リンカーコアやレアスキルなど、未解明な部分も少なくはないが、管理世界において魔法とはもはや『科学的に存在し、証明できるもの』であり、魔法を根拠にあげる科学論文というものも少なくない。

しかしそんな魔法を持つてしても、幽霊の正体については証明できていない。

目に見えず、質量も存在しない幽霊は科学では証明されない。そして幽霊に魔力はない。なぜならリンカーコアは生きている生物にしか宿らず、すでに死んでいる幽霊がリンカーコアを持つことはありえない。カートリッジのような物理的に魔力を閉じ込めておけるような身体もない。よって魔力による感知もできない。

ある種何でもありの魔法でも証明できない幽霊ソレに対して、魔法を知る人々が否定的になるのは無理もない話だった。

そして証明できないものは、認められない。

例えばそれが犯罪となるものであっても、証明ができず、存在が認められないものでは罰することはできない。亡霊は存在しないのだから、仮に亡霊が人を呪い殺しても認識できず証明ができないのだから罰せられることはない。

メディアにも明かされず特務を執行する時空管理局秘匿特殊部隊『ゴースト』は、彼らを亡霊に見立てたことが部隊名の由来とされている。



地上本部の廊下を、少しだけ速足で歩いていく。歩いている最中、度々左目だけの視界で周囲を見回しながら。

速足なのは、廊下にいる時間を短くするため。何度も周りを見るのは、周囲に人がいないか確認し人目につかないようにするため。足音を出さないようにするのも、自分の存在を殺すため。どれももう慣れたことだ。

自分の存在を消しながら歩いていると、目的地が目についた。壁から『雑務課』とい

う文字が突き出してゐる扉を開け、中に入る。

部屋の中は、端的に言うなら個人経営の事務所のようなだった。大して広くない部屋を応接用のテーブルと椅子が約半分占め、デスクは二つ隣接し、内一つにだけ据え置きキーボード端末。部屋の隅には雑務課としての仕事用具が詰められたロッカーが並ぶ。この広さに最大五人の人間が勤務すると考えると、普通ならあまりに狭い空間だ。しかしこれで充分やっていけてるのだから、自分でもそれなりに驚きである。

「戻ったぞ」

「うーす、お疲れさん」

銀髪をハリネズミのようにした男が言葉を返してきた。来客用のソファに踏ん返り返り、その手に持つてゐるいわゆる『大人の本』を平然と読みふけてゐる。

彼の名はセダン、苗字はない。理由は苗字の概念がない世界出身だからだ。管理世界、管理外世界を探すと、たまにそういう世界も存在する。また、彼の人格はお世辞にもいい奴とは言えない。

「お帰りなさい、綾さん」

「お疲れ様。早速だけどここれ、点検と清掃お願いしてもいいかしら」

「ああ」

ポンと投げられたデバイスを受け取る。

デバイスを手投げてよこしてきたのは、薄い緑色の髪を生やした女。名前はシノ・シークェット。サバサバした物言いが多い。

それから、黒の長い前髪と青いクリアバイザーで目元を覆っているのはミュ・ダットサン。よく人見知りする少女で、『仕事』のため地球でいうところのノートパソコンにあたる、携帯用のキーボード&ディスプレイ端末を持ち歩いている。

「課長は……定例会議か」

「ええ。もう少しで帰ってくるんじゃない？」

他愛のない会話をしながら、シノから受け取ったデバイスをデスクに置き技師権限で展開する。

展開して出てきたのは一丁のスナイパーライフル。鈍い輝きを見せる黒いフレームは、管理世界において裏で扱われるような質量兵器となら変わりない。変わらぬのは外見だけでなく、実弾を込めて撃つこともできるし、威力調節機構についても近年は搭載すら規制されている生体破壊効果——要するに人を殺せる調整である——が付け加えられている。まさしく敵を撃つための兵具だ。

パツと見た所、特に異常はない。特別変更するようなオーダーは入っていないのだし、消耗部品のチェックと内部クリーニングで済みそうだ。

そうなれば仕事は早い。整備用のゴーグルと手袋を装着し、何年と任されて手慣れた

動作でフレームを分解し、開いて、パーツ一つ一つを確認していく。

「そういえば、ティアナが魔導師試験受けたんだっけ。どうだったのかしら?」

ふと、シノから話題が上がる。俺達が仕事をしている間に受験した知人の話だった。

「綾一、なんか知らない?」

「試験の結果で言えば不合格。理由は試験中の危険行為」

「え、何かあったんですか?」

「Bランク試験では大型射撃スフィアが出てくるんだが、その破壊手段が問題だったらしい。相方が注意を引いてる内にティアナが上の階でシューターボムを大量設置、爆破で天井落としてターゲットを生き埋めにしたところをフクロにしたそうだ」

結構怒られたらしい。だがスバルに任せっきりにするのは不安があり、かといってティアナが近接やるのもまずいという判断からこの策をとったそう。大型はそこそこ硬いからティアナの射撃では通りづらかったのだろう。

「どの辺がわりいんだ? 俺達だつてよくやるじゃねえか」

「建造物の破壊方法が、自分達も巻き添えにあう危険があったからじゃないでしょうか? 今回の場合は味方がいましたし、味方も生き埋めになる可能性が高かったんじゃない?」

「そんなの作戦の話は通してたはずなんだし、埋められた奴が悪いでしょ。障害物破壊



は誰でもやってるじゃない」

「ふ、普通は、自分達や周囲の安全を確保しながらが基本ですので……」

「普通ねえ……っ—か、ティアナも随分染まったな？ こっちに入れた方がいいんじゃないかね？」

「執務官の道が消えるぞ」

セダンの提案は即行で否定した。

「それにあいつは機動六課からの招待がきている。補習して近く再試験を受けてから相手とそこに入るそうだ」

「機動六課……ああ、あの身内部隊つてもつぱら言われてるところね。隊長格はみんなあんたとお知り合いつてやつ」

八神はやて二等陸佐を隊長として、八神の守護騎士に高町一等空尉にハラオウン執務官、技師などその他バックアップも多くが隊長達と縁がある。身内部隊と白い目で見られるのも無理はない。

ちなみに、俺達雑務課——もとい、ゴーストの連中としてはどうでもいいの一言に尽きる。そもそもがゴーストの連中が表沙汰にできないような存在の塊なのだ。それも、現代の夜天の騎士達など眼中に入らない程の。

そういうえば、海斗と結衣もそこに異動するんだったな。末崎は呼ばれてないって聞いて

だが、二人はデバイスの整備をどうしようか。他人の技師に任せたくはない機構が取り付けられているから、場合によっては雑務と称して六課に潜り込むことも考えておかなくはならないか。

「新人や平局員からすれば夢のオールスターチームだなあ。そんな戦力の一局集中すりゃ白い目で見られるわな」

「ぶっ飛んだ戦力の集中って意味では、ある意味私達も負けてないけどね」

「六課についてレジアス中將や他上層部は煙たがってんだっけか？」

「元闇の書の主にその守護騎士と管制人格、これだけでもいい顔しないのには充分だからね」

新しい声が入ってきた。俺を含め全員が顔をその方向に向ける。

眼鏡をかけた初老の男性。彼がこの雑務課課長で、名はサイオン・レクサス。物腰の柔らかい人だが、詳しい過去などは知らない。俺だけでなく、他のメンバーも彼のことは知らない。だが別に知りたいことでもないため、皆気にしている様子もない。

なお、サイオンを課長と言ってるがゴーストである俺達全員に正確な階級は存在しない。ゴーストに入った時点でデータは消されるのだから。しかしサイオンは俺がゴースト入りする前からこの部隊の責任者として、便宜上課長という位置付けがされている。

「加えて隊長格の人達は皆、本局との関わりが深い。これが海から陸<sup>わか</sup>への介入なんじゃないかという噂も立つくらいだ。海嫌いのレジアス中将はいい顔しないさ」

「うつつ、課長」

「セダンさん、もつとちゃんとした挨拶してください」

「諦めなさい、ミュ。いつものことですよ」

「ああ、いつものことだし、気にしなくていいさ。綾も作業に集中しているし」

「また、いつもの嫌味で？」

セダンが尋ねた。返ってきたのは肯定の意だった。

「ああ。この前の任務でちよつとね。いつものことだから慣れっこだけどね」

ああ、そうそう。とサイオンはこちらに振り向いた。

「綾、今日客が来るから。対応お願いね」

その台詞に俺は手の動きを一瞬止めた。

「……また“彼女”ですか？」

「ああ」

「なんだ、お前の女か？」

「またって、前にも来たの？モテるわね」

二人が面白がって食いつく。血生臭くてそういう話とは無縁な職場だからか、興味が

あつたらしい。もしくは、俺をからかいたいのか。

「お前達が『アルバイト』でいなかつた時に来たんだよ。あと、そういう関係は一切ない。……いつです?」

「午後二時」

「……了解しました。シノ、できました。セダン、お前もデバイス出せ。来る前に修理する」

「うーす」

セダンのデバイスは壊れ具合にもよるが、充分間に合うはず。待機形態に戻したシノのデバイスを投げ渡し、代わりにセダンのデバイスを受け取った俺は作業の手を早めた。



ノックの音が鳴る。

どうぞー。とサイオンは扉に答える。

入室許可が降りて、失礼しますという言葉と共に一人の人物が入ってきた。

その顔を見た瞬間、ミユはギョツとしてすぐデスクの影に隠れた。その様子に入って

きた人物はまず呆気にとられ、それから苦笑を漏らした。

その人は良い意味でも悪い意味でも有名人だった。そして俺の知り合いでもある。いや、表向きには赤の他人だ。

だが、ここでは知り合いということにしておくべきか。

「お久しぶりです、綾さん」

「二週間を久し振りと言うかは人によるな」

女性からの挨拶に俺は素っ気なくそう答えた。

八神はやて、それが今回の客だった。

サイオンに促され、八神は応接用のソファに座り、相手である俺はその正面に座った。

「余計なことと言わなくていい、要件を言え。大体の予想はついてるがな」

「ほんなら遠慮なく……私達は、綾さんを私達が設立する部隊……機動六課に迎え入れたい。そう思っています」

予想通り、以前ここに来た時と同じ内容だった。

なので、

「断る」

即答。考える必要もなかった。一度言った答えだったからだ。

「前にも出した答えだ。答えの出た相手に何度も訪ねるな」

「いやあ、ひよつとしたら気が変わるかもしれないと」

「それはない。希望的観測はやめておけ」

「例え条件が良くても？」

しつこい女だ。まだ諦める気がないらしい。もうわかりきっているはずなのに。

「俺にとつてはここが最高の条件だ。そもそも、お前の懐から何を出せると言うんだ」

ゴーストは危険な任務を秘密裏に遂行するため、上の奴らからそれなりに多くの金が入ってくる。そもそも金だけで動くつもりはない。加えて正規の部隊と比べゴーストには制約が極端なほどに少ないため、その分好きに動きやすい。任務を遂行して証拠を残さなきゃ大体良しの部隊である。

八神もそのことは承知しているはず。だから、それをひっくり返すほどの条件があるのかと訊いた。

「女ですかね」

八神はやてという人物を知る者からしたら、おおよそ耳を疑うような答えが返ってきた。

「ブツ！」

「なんだよ、結局女いるじゃねえか！」

バリスタで淹れたコーヒーを飲んでいたミュが嘔いてむせ込んだ。セダンにはヒュー

ヒューと口笛をうるさく鳴らす。

とりあえずセダンを黙らすため懐から魔導兵具『斬』を取り出し、安全装置とキャップを外して先端から噴き出す魔力刃を本体ごとぶん投げた。俺の体によるセダンの死角から放った刃をセダンは咄嗟に回避し、『斬』はその先の壁に突き刺さって、直後魔力切れでポトリと落ちた。

あぶねーとか抗議するセダンは無視して、八神の話に戻る。

「寝ぼけてるなら叩き起こしてやるか？ 頭蓋骨陥没する威力でやってやるが」

「起きた上で言ってますよ。綾さんに心底惚れ込んでいる人です」

「ぬかせ。惚れさせるほど付き合った女なんざいねえよ」

「ちゃんといえますよ。いくら情報を隠されても、亡霊に変えられても、人の心は変わらな  
いんです」

いつの間にか八神の顔からおちやらかな霧囲気が消える。この目はそう、誰かを救おうと懸命になる奴の目だ。

「綾さん、亡霊から戻ってきてください。アインスも、私達も、みんなそれを望んでるんです。こんな部隊で人を殺していくなんて間違ってる」

純粋な奴だ。とても互いが十年も同じ組織に属している奴とは思えないぐらいに。

彼女の言ってることは正論。法を護る組織である時空管理局が人殺しなど笑えない

話だ。殺しが間違っていると言われりやまさしくその通りだ。

その通りだが、その純粹さは、ウザかった。

「いらねえよ。そんな望<sup>も</sup>み」

「陵さん……」

「正義だ悪だ、そんな価値観はどうに捨てた。今は好き勝手できるここの方が都合がいい」

この世界に転生した当初なら、その正義感に共感して六課に入ることもあったかもしれない。

だが、今となつては正義でどうにかなるものではないとわかっている。デスゲームの参加者達による醜い戦いを生き残るには、そんな概念も捨てて勝つ他はない。

そのためにはまず、自由に動けることが条件なのだ。制約に縛られることなく目的遂行に動くには、そもそも認識されないゴーストであるのが都合がいい。例え結果として人を殺しても、すでに何十人と殺した俺だ、今更何も問題はない。

……俺も、この九年で変わったものだ。

「俺は別の場所に移る気はない。それにこんな仕事やってきた奴だ、無理に入れても不協和音を生み出すだけだろ」

「……そうですか。うん、そう言われたら無理に言えへんね」



「どうやら八神は諦めたようだ。八神から先ほどの険しい様子がなくなる。

「せやけど、アインスのことをそんな邪険に扱わないでほしいです。あの子もあの子なりに綾さんのことを想っているんですから」

「アインスとは誰だか知らんな」

「まあ、そう返すんやないかとは思ってましたよ。ほんなら、今度来る時はスカウトではなく、仕事の依頼者として来ますね」

「こつちも暇じゃないんだ。雑務は寄こすな」

「ほどほどにしときます」

一礼して部屋から出ていく八神。それを確認してから、俺は小さくため息をついた。

「お疲れ」

シノがコーヒーの入ったカップを目の前に置いた。

「全くだ。おかげでどつと疲れた。時間を潰して疲れて何もないうって冗談じゃない」

「でも、接客はもうちよつとマイルドにした方が良かったんじゃないかな?」

「馬鹿につける薬はないってやつですよ、課長」

「お、チキユーの格言ってやつだな」

「コトワザでしたっけ、正しくは」

八神客がいなくなったことで雑務課の雰囲気客が元に戻る。セダンはソファに座って踏

ん反り返り、シノはスコープの調整を始めた。

「おい綾、お前とハヤテ・ヤガミの話聞いてたらお前の英雄譚を聞きたくなくなった。聞かせろよ」

「断る。そもそも英雄譚なんて持つちやいない」

「いいじゃない、ここだけの話なんだし。今までも話したでしょ？ だつたら今更よ」

「何度も話をさせられるこつちの身にもなつてみやがれ」

「まあまあ、このメンバーの中では君のが一番英雄譚らしいんだから、話してあげなよ。かく言う私もまた聞いてみたいなあつて、ね？」

「課長まで……」

軽い頭痛を覚えた俺はこめかみを押さえた。

こうやって何度も繰り返し話をさせられるのが、ここでの悩みの一つだ。

## 第九十話

特殊部隊ゴーストにとって雑務課とは隠れ蓑だが、同時に仕事の一つでもある。

雑務といつてもやることは多岐に渡る。清掃、運搬のような雑用はもちろん、食堂での調理、配給、デバイスの開発及びメンテナンスもしくはそれらの補助、さらには戦闘訓練における模擬戦など、頼まれたのであれば大抵のことは何でもする。無論、雑務課に頼むよりそれぞれ専門の人を頼った方が出来はいいし、ゴーストにも特務があるのだからその方が都合がいい。しかし雑用はともかく、デバイスマンテや教導のように優れた人員が不足気味の仕事がある以上、結局のところ雑務課に頼る部隊というのもミッド内にはいくつが存在する。

ただ、部隊から雑務課への評価というのは冷ややかなものだ。

仕事の出来が悪い訳ではない。そこについては一定の水準を満たしている。原因は雑務課の正体であるゴーストに対する批判である。

メディアには一切公開されず、世間には知られていないゴーストだが、管理局内部では公開こそされてはいないが存在は周知の事実となりつつある。さらには『殺しを快楽にする殺人部隊』だとか言う噂が歩き回ってる状態でもあり、関わり合いたくないのも

無理はない。中には自身の正義感から突っかかってくる者もたまにはいるが、そういうのは大抵無視するかその場もしくは模擬戦でねじ伏せている。そういつた対応もまた冷たい態度に拍車をかけていると言っている。

そんな仕事を、ゴーストの構成員は『暇つぶし』として捉えている。

金についてはゴーストとしての特務手当てで充分以上に貰っている、それ以上稼ぐ必要もない。しかし、常に特務が入っているということはなく、むしろ暇していることが多い。そのため、人によつては単純な暇つぶしとして、他部隊との交流手段として、殺伐とした仕事のリフレッシュ目的など、多少の違いはあれど「気軽にできてついでに金も貰える」程度の認識であり、周囲の反応観察も含めて暇つぶしとして扱っている。

ちなみに、雑務のことを仲間内で『アルバイト』と呼称するのだが、きっかけは六年前。

ゴーストに入隊して間もない頃、初めて雑務の仕事が入ってここでの雑務の認識についての説明を受けていた時だ。暇つぶしや気分転換のような軽い感覚であることを聞いて、なんとなく「仕事というよりアルバイトか」と俺は呟いた。

就労適齢が低い管理世界ではアルバイトという概念があまり浸透しておらず、その言葉の響きが当時からゴーストにいた課長やセダン、シノにも受けたようでそれから雑務のことを仲間内ではアルバイトと呼ぶようになったのである。

さて、なぜこんな説明をしているかというところ、俺達雑務課がその『アルバイト』に出向いているからだ。

仕事内容は陸士部隊隊舎の清掃と部隊員の所有デバイスのメンテ補助。そのアルバイトにゴースト戦闘員四名総員で当たっている。というより、特務で人員が欠けている場合を除いて課長以外の全員でやるのがほとんどだ。雑務課に頼るということはそこがそれほど忙しいか、もしくは人員がいなかったかのどちらかなのだから人手は可能な限り欲しいに決まっている。なお、今回は後者である。

そういう訳で、俺はデバイスメンテナンスルームで片っ端からデバイスを清掃し、修正し、弄っていた。部屋には他に人はいない。他の三人はメンテには使えないから、清掃の方に向かわせている。この部隊では専属のデバイス技師というのもない。戦闘員は万年不足だとよく言われるが、技師不足も深刻であったりする。そのため一人だ。それぞれデバイスを点検し、必要な箇所を分解、パーツを修理・交換し、元通りに組み立てる。同じ作業を次々とこなし、最後の一つも例外なく終わらせた。

自分の仕事が終わえ、作業開始からほぼずっと同じ姿勢だった身体を伸ばす。パキパキと身体のうちこちで音を鳴らせ、目を強く閉じる。一連の動作をしてある程度の疲労感が払拭された気になった。実際には何一つ疲労は取れていないのであるが、こちらの気分の問題だ。

セダン達清掃組と合流しようかと思つたが、現時刻を見てその気が失せた。もうすぐあつちの作業も終了するからだ。そろそろこの部屋の掃除にも来るだろう。

程なくして、その予想は現実となつた。ノックと共にミュと、筒の機械が入ってきた。「綾さん、ここに掃除しちやつてもいいですか？」

「構わん。やつてくれ」

「はい。ここに二面の掃除、お願いね」

ミュが筒に対してそう言葉をかけると、それは独りでに動き出した。

人が座れる程の幅とミュの膝ほどの高さを持つ金属の筒は、ローラーの足で進みながら下部のブラシで床のゴミを取り込んでいく。また、上部の蓋が開いて中から現れた小型の円盤が三機、壁や天井に張り付いて同じく綺麗にし始めた。

その間ミュは何もせず、近くの椅子に腰掛けている。この機械の動作はミュの能力によるもののだが、彼女の能力を知っている者からすれば能力の無駄遣いとも取られかねない。というか、俺も若干そう思っている。彼女自身はこういう使い方が気に入っているらしいが。

やることもなく暇つぶしに左腕の調整をしていると、仕事が完了したのか掃除用具を持ったシノとセダンがやつてきた。

「うーす、終わったぜー」

「ああ、どうだった」

「視線は何度かあったけど、直接突つかかってくる奴はいなかったわ」

「あーつまんね。ちよいと前だったら当たり屋紛いのことする奴が多かったのになー」

そこを期待するのはどうかと思う。というか、並の魔導師では発散の相手にもならないだろうに。

グチグチとここの隊員への文句を吐き続けるセダンだが、何か思いついたようである。顔を上げた。

「なあ、一度六課に行ってみねえか？綾の弟子の入隊祝いとかしてえしよ」

「どうせそこで喧嘩ふっかけるつもりでしょ。やめなさい」

「入隊祝いなんて大層なものをくれてやるつもりはない。却下だ」

「六課から仕事も来てないですし……」

拒否の集中砲火をくらってセダンはデスクに突っ伏した。

「んだよつまんねー。闇の書の騎士シグナムとか死神執務官フェイト・テスタロッサとかとやりあえそうなのによお」

「リソースの無駄遣いになるからやめろ」

加えて言うならセダンは能力と人格の両面から下手しなくても殺傷沙汰になりかねないのだから、セダンはサイオンからも一切の模擬戦を禁止されている。……のだが、

それでもセダンはこうして暇になれば喧嘩をふっかけようとするので困ったものだ。

それから時間になるまで各自デバイスを弄ったり雑談で時間を潰していった。



木田きだよしひこ義彦は歓喜していた。

義彦は転生者である。五年前、神によって転生者三百人の内の一人として選ばれ、ミッドチルダに当時十歳の身となつて降り立った。

最初に貰つたスターチップ三個はすぐに消費された。無計画にも自己強化の願ひとして自ら手離したのである。しかしその強化のおかげかどうかはわからないが、神から度々メールで来る指令を難なくこなしていった。毎回指令が終わつた時やその途中に来る失格者通知を見て、この程度の指令もこなせないのかと最初の頃は鼻で笑い、そのうち興味をなくして通知を見ることもなくなった。

管理局の道を目指したのは、指令をこなすためよりも原作キャラの仲間としてお近づきになりたいという思惑があつたからだ。怪しまれないために人々を守るためと上辺だけの理由を人には騙っていたが、訓練をした経験などない彼は当然訓練校では何度も



音を上げることになった。

しかし、一応は明確な理由を持つだけあって、何とか訓練を耐え抜き、卒業を果たし、訓練校の頃から組んでいた義彦と同じ転生者で一つ上の相棒、ケイト・クローシー（本名：黒島圭人）と共に活動を続け、ついに機動六課の一員となることができた。この機動六課への入隊が、前述した歓喜の理由である。

今までは稀に姿を見るくらいだった原作キャラ達が目の前にいて、同僚となる。それだけでなく、機動六課で活動していれば神からの指令も楽にクリアしていけるだろうと彼は見ている。その考えに深い根拠はなく、ただ主人公側の方が安全だろうという漠然とした理由付けだ。しかし、途中から見るとはいえ二百人は残つてるであろう転生者の中から現状確認できる範囲ではたった二人、その一人に自分がいるという状況。圧倒的勝ち組と信じて疑わない愉悦感に義彦は浸っていた。

目の前では六課の部隊長、八神はやてが部隊開設の挨拶をしている。その横には高町なのはやフェイト・テスタロツサなど、この部隊の隊長格や重要なポジションにいる者達が並んでいるが、その中にリンフォース・アインズが存在していることには驚いた。が、それはそれでいいことではないかと簡単に結論付けた。他にも彼にとつて面識のない人物がいるが、機動六課の隊員全員を把握している訳でもないのに、特に気にすることはない。

ただ、アインスが生きているということはすなわち、この世界が原作と違うということと深く考えていなかった。それゆえ、まさか自分の知っているものとは違う性格となった者がいるなどとはこの時考えもしなかった。

その違いに義彦は勿論ケイトも驚くことになったのは、開設初日の訓練の時である。



機動六課の訓練第一回は、これから機動六課の敵としてよく戦うことになるガジェットドローンと十機相手にした模擬戦だった。

低空移動するガジェットの正面に回り込み、義彦は剣を振るうが当たることなくスリと避けられてしまう。

義彦はAMFへの対策を意識して実体型両手剣を己のデバイスとしていた。しかし、予想以上にガジェットの動きが速く、剣が捉えられていない。

「クソッ、ケイト！こいつらどうか押さえられないのかよ！」

『あらかた試してるけど、触れる前に『糸』が切れちゃうー！』

ケイトは魔力系の操作という変わり種のスキルを持っていた。物を引き寄せたり、巻きつけて捕らえる他、網にしたり、道具と組み合わせる罠を作ったりと用途は多岐に渡

る。が、そもそもの強度がそう高くない純魔力製の糸がAMFに触れれば、当然切れて使い物にならなくなる。ちなみに、ケイトの扱うデバイスはその魔力糸の操作をするために自作した支援型である。

つまり、ケイトにはガジェットを撃破も捕縛もできないと義彦は判断した。役立たずだと言わんばかりに義彦はわざとらしい舌打ちをする。

「チツ、お前は屋上からガジェットの動きでも見ている！」

『前衛、敵を散らさないで。面倒になるから。五分経つて未だ撃破数一とか、後で何言われるかわかったもんじやないわよ』

そこにかかつてきたのはティアナの念話だった。しかし義彦はティアナの言葉に内心首を傾げる。

『え、誰がその一体倒したんだ？』

『あただけど』

「え」

『何、あたしが前衛より先に撃破とつちや悪い？まあ、魔導兵具を使った実体弾狙撃なんて褒められたものじゃないし、こればかりに頼つてられないから、二度も使おうとは思わないけど』

「え？」

何を言ってるのか理解できていなかった。実体弾？魔導兵具？いやいやおかしい、この時のティアナがガジェットを倒した手段は……。

若干以上に混乱している義彦の脳内に、再びティアナの声が響く。

『作戦通達。前衛三人はガジェットをフィールド中央に誘導して。纏めて叩くわ。できれば何機か間引いてくれるといいわね』

義彦が再起動するには、その通達から五秒以上の時間を要した。



スバル、エリオ、義彦がガジェットを追い回している間、ティアナは一人廃ビル一階に身を潜めていた。割れて存在意義を失った窓からはティアナが指定した、フィールド中央に位置する開けた交差点が見える。

ティアナが手にしているのは、拳銃ではなく長い銃身を持つ狙撃銃だった。その長い銃身を窓から覗かせ、スコープにてティアナは前述の交差点を見つめている。

『仕掛けの配置、終わったぞ』

念話が届いた。この声の主はケイトだ。

『オーケー、二人は仕掛けの場所から離れて、ターゲットの観測を続けて。……ところ

で、残り何機になつてる?』

『残りは……六機であります。二機と四機、それぞれがポイントに近づいています』  
質問に返答したのはキャラロだ。ケイトとキャラロは一緒に動いてもらっている。

『二機のグループと四機のグループ、どっちが先に着きそう?もしくは同時?』

『二機グループの方が、先に着きそうです』

『じゃあ、その二機を狩るわ。そのあと全員で残りを片付けましょう』

『本当にうまくいくのか?』

『うまくいかなきゃ困るわ。まあそれでもまた次を考えるしかないけど』

『うまくいっても問題な気がするけどなあ……』

『ガジェット、ポイントに入ります!』

割り込んで入ってきたキャラロの言葉にティアナはすぐ反応した。狙撃銃を構え、足元に魔方阵を展開する。それと共に、銃身の周囲と銃口の先にリング状の魔方阵も展開された。

魔方阵展開。

バレルコントロールリング展開。

バレットレール構築完了。

カートリッジロード。空カートリッジ排出。

弾丸構築……完了。

銃型デバイスは通常、シューターなどの魔力弾を銃口の先に構築する。そもそも魔力弾がそういった砲身などを必要としないため、銃口はただの飾りか、質量兵器としての銃を知っている人が魔力弾をイメージしやすいように作られているにすぎない。

しかし、ティアナのデバイスはある理由から、本物の銃と変わらない構造を持ち、魔力弾も銃身の中に作られるようになっていく。

ティアナはスコープの中の世界に集中する。雑音に対する意識が消え去る。引き金に指をかけ、その瞬間を待つ。

『ファイア』

スコープに対象が入った瞬間、その短い機械音と共に一発の弾丸が発射された。

空気を切り裂いて小さな弾丸は一直線に、一瞬の間にガジェットとの距離を詰めていく。

前進するガジェットの動きに変化はない。感知はしているのかもしれないが、反応して回避する時間などなかった。

弾丸はガジェットのAMFに衝突した。AMFは魔力弾を打ち消さんとするが、その前に魔力弾が爆発。弾丸による衝撃波と爆発の威力がガジェットを二機とも吹き飛ばした。

爆発と衝撃波で大きくへこませながら、ガジェットはその先の廃ビルに突っ込もうとして、それをなんとか踏みとどまる。

ティアナはそれも計算済みだった。彼女にとって重要なのは、そのビルのすぐそばまで押し込むことにあった。

ズン、と低い音が轟く。ガジェットが衝突を逃れたビルが煙を上げて崩れ、倒れ始めていた。

二機は下敷きになるまいと逃走を始めるが、ティアナの狙撃が足止めをし、そのまま崩れるビルの下敷きとなった。

ビルの崩落はガジェット二機を埋めるのみならず、遅れてやってきた四機にも影響を与えた。エリオと義彦に追われて進んでいたその四機は突然進路に瓦礫が積み上げられ、一瞬動きが止まる。

すぐ瓦礫を越えようと高度を上げるガジェットだが、そのわずかな隙を逃すことはしなかった。キャロが召喚した鉄鎖がガジェットのうち二機を拘束する。鎖を逃れた残りの二機も、拘束されたガジェットの踏み台に跳び上がった二人によって破壊。それによつてガジェット十機は全て撃破もしくは捕獲が完了となった。



「なあ」

「何？」

「ありやあ、一体何だったんだ？」

「あれって、何のことかわからないんだけど？」

「ビル一つ吹っ飛ばしてガジェット潰したあれだよ。何、ティアナそんなこともできるの？」

訓練終了後の食堂で、フォアードの六人がテーブル二つ使って食事をしている中、義彦はティアナにそう質問していた。

義彦がそれを尋ねたのは、ティアナが自分の知っているそれと全く異なっていたからだ。訓練終了後になってようやく気付いたことだが、デバイスもあまりに違う。

「あたし一人の魔力だと精々小部屋の床をブチ抜くのが限界よ。スフィアボムとその起爆はケイトが担当してもらったわ。ま、あの爆破解体は爽快だったわね」

「爽快って……でもあれはそうそう使えないだろ。なのはさんから注意されたし」

ケイトは苦い顔をした。彼の言う通り、訓練終了後になのはから注意を受けていた。人が巻き込まれたら大惨事になりかねないのだから当然である。

「使えるものは遠慮なく使おう。それが師匠の教えでもあるし」



「師匠？」

「訓練校に入る二年ぐらい前からかしら。親代わりやつてもらってた師匠に戦い方を教えてもらってたのよ」

「その師匠から爆破術とかも教わったんですか？」

「違うわよ。というか、あの人から技術的なことは一切教わってないから」

「え？」

「最初の頃はこういう訓練なのかも知わずにひたすら模擬戦でこつちを容赦なく叩き潰すのよ。で、今回の模擬戦の反省をヒントも出さずに考えさせて、また次の模擬戦をするの。次の模擬戦では前半は前の動きを機械的にやって対応させて、後半はまた違う動きでこつちを叩き潰す。これを繰り返す」

「うわあ……」

「で、これと並行して考え方ってやつを教わるのよ。技術じゃなくって、どう事を運べば勝てるのかっていう考え方。技術については自分でどうにかしろってバツサリ斬られたわ。おかげで技術は探して磨いて、可能であれば人に訊いて、対策も立てて、さらに師匠に攻撃入れられるように考えてっていうのを全部自分でやる羽目になったのよ」

「す、スパルタだな……」

ケイトが引き気味そう評価すると、ティアナは頭を乱暴に搔きながらため息を吐い

た。

「こつちが必死になって策を考えて、幻影魔法まで身につけたつてのに、それでも当たり前のように返してくるのよ。射撃も狙撃もヒヨイヒヨイ避けるし……今思い出して腹が立ってきた、そろそろガンズナイパーにガトリングガンでもくつつけようかしら」  
「ガトリングガンつて……とところで、あれ自作なのか？」

「ティアのお師匠さんが、訓練校に入る三ヶ月前に作ってくれたんだつて」

「持つてる人はなんでも持つてるつてことを、これもらつた時によく実感したわ……」

「デバイスマイスターでもあるのかよ。ティアナの師匠つて何者だよ」

「地上本部所属の雑用」

「「「えっ」」」」

四人の声がハモった。スバルは苦笑していた。



「ぶえつくしっ！」

「うおっ、きつたねえなあ」

「生の死体喰つてるお前よりは衛生的だ」

「風邪ですか？」

「どっかで誰かが噂してるんじゃない？」

「そんなベタなことあるか。戻るぞ」

## 第九十一話

差出人：管理者

件名：指令

内容：

次の指令を指定期間内に実行、達成せよ。

指令内容：レリックを確保せよ

期間：新暦0075年9月12日まで

報酬：期間終了時に所属組織のレリック保有数1個につきスターチップを3個配布。

レリック——高密度の魔力結晶体であり、StrikerS編にとって重要なロスログニア。

レリックにはそれぞれNo. が割り振られており、またそのNo. ごとに魔力の量や波長に多少の差異が存在する。

作中では主に機動六課が回収対象のロスログニアとして追っていると同時に、スカリエッティ一味もまたレリックウエポンと呼ばれる兵器の動力として集めている。

ゆえに、このレリックを回収する手段は大きく分けて二つ——六課に着くか、スカリエツティに着くかだ。

五年前にこの指令が通達され、当時ほとんどが六課入りを目指した。が、六課に入ることができた転生者は四人。そもそも時空管理局入りを断念した者も少なくはなく、多くが傭兵として外部からの介入を図るか、犯罪者に身を落とし、スカリエツティとの接触を図るといふ路線変更をしていった。

管理局所属、三十四人。

無所属のフリー魔導師、およそ十六人。

犯罪組織所属もしくは犯罪者、およそ五十二人。

未だ不明、三十二人。

正確な数字はわからないが、存在自体が不明となっている三十二人を除いておそらくはこの通りだ。

総数百三十四人。五年前の指令開始と共に三百人もの転生者が新たに送り込まれ、現在までに失格として消えていった結果の人数である。

指令、緊急指令により失格とされた者。違反を起こして失格となった者。そして——

何者かによつて“狩られた”者。

狩られたとは、俺達にとつてのもう一つの生命線、スターチップが奪われることを意味する。

他人からスターチップを奪うことは、このデスゲームの違反行為であり、即失格となる。デスゲームが始まつてから今日こんにちまで適用され続けている原理だ。

しかし、どういふことかその違反行為であるはずのスターチップが奪われ、そして奪われた者が失格として消される事案が、五年前から起きているらしいのだ。

偶然目撃した民間人——のちの調査で転生者だったことがわかつた——が、その現場を見たという。

発覚後、その“転生者狩り”と思われる失格通知が数日続いたが、犯人の尻尾を掴む前に下手人の消息は断られた。

しかしその後、ある一定のタイミングで“転生者狩り”の被害が出るようになった。——指令終了の直後である。

転生者がスターチップを手に入れた直後、“転生者狩り”はなんらかの手段でそれを強奪し、相手を失格に至らしめる。そのため、この五年間は指令終了後失格者の通知が二回来るようになっていた。

しかし不思議なことに、この五年間でその“転生者狩り”がこちらに現れたことはな

い。

この世界で特に名も上がってない転生者までもを狩っているような奴が、秘匿部隊にいる俺や“ジョーカー”の異名を持つ才ならまだしも、由衣や海斗のように“名は上がってはいるが狙い得る”奴らにも仕掛けないというのがわからない。

理由として考えられるのは、五年前に加えられた転生者しか把握できていない、手を出した場合のリスクを警戒している、強奪を仕掛けるための条件を満たしていないなどいくつか考えられる。が、いずれも決定的とは言えず、奴もしくは奴らを捕捉できていないのが現状だった。

——指令の話に戻そう。

StrikerSの物語において重要な存在の一つであるレリックだが、五年前から始まったことから察せられるとおり、レリック回収の動きは五年前から始まっている。

高密度の魔力を内包した“危険物”——というのが、管理局がそれを回収する表向きな理由だが、高エネルギー体という“金の成る木”を見逃すことなどあり得ない。ゴーストを始めとした暗部組織によって記録に残ることなく回収されたレリックが各地の研究所によって研究・エネルギー開発されている。研究所は当然違法のものだが、こちらにとって重要なのはレリックの所在を把握していること。順当にいけば“記録にな

いレリック”はいずれ俺や才が襲撃・回収する算段となっている。

問題は、指令に書かれている所属組織というものがどれだけの範囲を表すのかという不確定要素と、指令が終了するその日は管理局の保有するレリックが確実に狙われるという不安要素だろう。前者については可能な限り手元に確保できるようにすれば確実だろうが最悪、俺がいる地上本部か、海斗がいる機動六課のどちらかが確保していればいいはずだ。そういう意味では海斗と由衣が六課に入ったのは行幸と言える。後者については、地上本部襲撃に対し備えをする他ないが、襲撃のある程度のタイミンと、そしてこの世界における敵の戦力を知っていることは決して小さくはないアドバンテージのはずだ。

……十年前からあらゆる手を尽くしてきた。

武器を造り、力を造り、今の立場も散々利用した。

転生者を含め、殺した人も数知れない——全ては、あの神への反逆のため。

現在のスターチップ保有数……四十七個。

神風には、まだ遠い。



「さて、今回の特務の確認といこうか」



やや薄暗い部屋の中、雑務課——否、ゴーストとして召集された四人を前に、サイオンは口を開いた。

ここは、普段俺達が過ごしている雑務課の部屋ではなかった。

暗部部隊が、人知れず作戦会議を行う場所。本部の案内図等に記されておらず、その場所に名前はない。便宜上、『暗部室』などと呼ぶものが一部いたらしい。しかしその性質上、暗部会議より上層部の密約・密談に使われることもあるため、その名が暗部内に浸透することもなかった。

「今回の特務は『記録にないレリック』の運搬。対象物は貨物用リニアによつて一般貨物とともに密輸される。レリックは暴発されると面倒だから、脅威が近づくことのないよう護衛すること」

「つまんねー特務なこつた」

「セダンさん、レリックの暴発は被害が洒落にならないですから、適当なこと言わないでください」

態度悪く言うセダンをミュが嗜める。セダンの態度はいつものことだが、真面目な彼女は無駄と知りつつも注意をしている。

「真面目なこつて。無人リニアなんだから被害なんざねーよ」

「人的被害よりも、懸念されるのは『記録にないレリック』の存在がバレることだろ。

俺達が呼ばれたのも、状況対応力の高さから選ばれたという話だ」

近接戦に強い俺とセダン、狙撃が強いシノ、そして機械に対する絶対的な制圧能力を有するミュ。あらゆる状況に対して柔軟な対応を取りやすい俺達は、暗部隊の中でも特務に選ばれる回数が多かった。

そして、今回の任務が特務とされる理由。リニアへの襲撃やレリックの暴発によつて今回のレリックが管理局の明るみに出た場合に、そこから他の「記録にないレリック」の存在に感づかれる懸念があるからだ。無論、このレリックが明るみになっただけで全てバレルなどということはないだろうが、懸念は少しでも払拭したいのだろう。人の思考を読み取るレアスキル持ちの監察官というものが存在する以上、それが来ないようにしなければならない。

「話、続けるよ？ 有事の際はレリックの安全確保を最優先。必要であれば破壊制限の解除及び実弾兵器の使用を各自の判断で認めるものとする」

「いつもの通りだな」

「許可が明言されていることが重要なよ。その違いだけで私達の動きやすさが大きく変わるわ」

「G5がヘリを操作しリニアを追走、有事の際にG2、G3がリニア上に降下して脅威を迎撃、G4は遊撃支援及び作戦指揮をしてほしい。以上だ」

「G 2、了解」

「G 3、了解」

「G 4、了解」

「じ、G 5、了解です」

G 2——セダンとG 3——シノが敬礼、続いて四<sup>ゴ</sup>番目<sup>スト</sup>の亡<sup>ト</sup>霊<sup>4</sup>として俺も敬礼する。G 5であるミユも言葉にたどたどしさを残しながら敬礼した。

「G 5ー、そろそろコードネームにも慣れようぜ〜？」

「わ、わかってますよう！」

「ミユは気を楽しにしなさい。基本的にはヘリの中で安全を確保してれば充分だし」

「仲が良いのは良いことだね。では行って来なさい」

「了解」

ミユを話のダシにしている二人に代わり、俺は再度敬礼をした。

## 第九十二話

「護衛対象のリニアを確認したわ」

スコープ越しにリニアを捉えたシノが声をあげる。

「ミュ、ヘリを対象の真上につけてくれ」

「はい！——『リニアの真上に追従して』！」

ミュが操縦席に向かって声をかける。操縦席には、誰もいない。

しかしヘリはミュの言葉に反応しひとりでに旋回、一気にリニアに向けて直進する。まるでミュの指示に従うようで——否、実際に従っているのだ。

『マシンナリー・ルーラー機械の先導者』と名付けられたミュのレアスキル。機械に対して命じれば、対象がA Iを搭載している・いないに関わらずその命令に従わせるというものだ。

このスキルには制約が二つ。一つは『機械の性能上実現不可能な命令はできない』こと。もう一つは『人間が直接触れている機械には命令が効かない』こと。

制約こそあれど、ミュのスキルは極めて強力であり、活用の範囲が大きい。今やっているヘリの自動操縦による戦力の輸送のみならず、戦車などの自走・自律兵器に命令すればリスクゼロの兵士となる。他にも情報端末に命じれば容易に情報の引き出しがで

き、また彼女以外では絶対に開けないシステムロックをかけることだつてできる。応用の幅が極めて広いのだ。彼女がゴーストにいるのも、そのスキルの有用性を知った上層部が体よく使うための囲いこみであつたと聞く。

「しっかし、不幸なもんだ」

不意に、セダンがそうぼやいた。

「誰がだ」

「全員さ。俺達はこんなシヨボい任務に駆り出される。リニアレールはレリックを積みされたがために壊される。敵どもは皆死ぬ。誰一人として得がありやしねえ」

「ごちやごちや言つてないで、行くわよ。綾、敵がリニアに取り憑くまであとどのくらい？」

「今の速度のままだと、五分後には接触するだろう」

俺はシノと同様にスコープ越しに、リニアレールの後ろに目を向けていた。見えるのは、五く六十は下らないであろう物が、リニア目掛けて飛んでいる。

卵型と、小型戦闘機型の機械の軍勢——ガジェットドローンだ。今はまだリニアとの距離は遠いが、確実に距離が詰められている。

ガジェットの狙いは間違いなく、貨物として積まれている「記録にないレリック」。

「車両の真上に着き次第降下、迎撃しろ。俺は上空から狙撃支援する」

「今更だけど、私が狙撃の方がいいんじゃない？」

「俺は司令役だからな。そしてセダンは魔力の扱いが雑だ。もしもの場合にはシノ、お前がレリックを回収して離脱しろ」

「まあ、いいけど」

肩をすくめながら、シノは懐からデバイスの待機形態であるドッグタグを取り出す。セダンも同じくデバイスを取り出した。

「キラバレット、セットアップ」

「ヨロイ、セットアップ」

二人の姿が変わる。

シノのバリアジャケットは、全身を覆うインナーの上にハーフスリーブジャケットとショートパンツ、そしてフラッシュ対策のゴーグル。腰や太腿には魔力カートリッジを始めた道具類が入ったホルスターがついており、手には狙撃銃型デバイス『キラバレット』が収まっている。狙撃専門のシノは近づかれたら即敗北に繋がるため、『討たれる前に撃つ』そして『近づかれないよう素早く逃げる』。そんな機能性から最適化された姿だった。

対して、セダンの装備は黒革のジャケットとジーンズに、金属製のアクセサリーがジャラジャラと巻き付いていた。サポート型のデバイスなのだが、彼の戦闘は完全にレ

アスキル任せであるためデバイスとして入れるべき機能のほとんどが入っていない。機能性を完全無視した装備だった。ちなみに、バリアジャケットのデザインについては『当時の趣味』らしい。

「さあーて、行くかね」

「ミュ、モニタリングお願いするわね」

目標にたどり着き、装備を展開した二人が降りる。

「二人を支援する。ヘリの高度を上げろ」

「はい！」

二人がリニアの上に着地したのを確認し、ミュに指示。ミュがヘリに命じ、ヘリが上空へと上っていく。

スコープで確認すると、ガジェットとの距離がかなり縮まっていた。

足元に置いていた狙撃銃を手取る。デバイスなどではない、対物狙撃ライフル……質量兵器だ。これを握るのももう慣れた。

安全装置を解除し、スコープを覗きこむ。スコープの中央に、卵形の敵を収める。

「——戦闘を開始する。敵は滅ぼせ」

そしてその引き金を、引いた。



「これが……」

「俺達の新しいデバイスか……」

機動六課のデバイスルームでは、フォアードメンバーへの新デバイスの紹介が行われていた。

義彦やケイトを始め、フォアードメンバーはそれぞれの新たなデバイス、その待機形態を覗きこんでいる。——一人、ティアナを除いてではあるが。

「……あれ？ ティアのデバイスは？」

ティアナのデバイスがないことに気づいたスバルが疑問を漏らす。

対してティアナは、無言である方向に指を向けた。

「……誰？」

この部屋に入った時は気づかなかったが部屋の片隅で、大柄の男が一心不乱にキーを叩いていた。

髪全体を短く刈り込んだその男は、六課では見覚えのない者だった。キーを叩く男の前に、ティアナのデバイス『ガンスナイパー』と、他に二つのデバイスが置かれている。

他の面々も存在に気づいたのか、彼に視線を向ける。



「末崎さん。デバイス技師よ」

「知り合いなのか？」

「師匠の友人……って言えば良いのかしら。ガンスナイパーの整備を時々して貰ってるのよ」

「ふーん……」

ピタリと、末崎の手が止まった。それからウィンドウをいくつか開いて流し読み、領くとウィンドウを閉じてガンスナイパーの待機形態であるカードを手に取り、ティアナ達の方を向く。

そこでようやく自身に視線が集まっていたことに気がついたらしか、末崎が軽く仰け反った。

「うおっ……なんだよ、見せもんじゃねえぞ……」

ボソボソと呟いた後、末崎はガンスナイパーをティアナに投げ渡す。

「ガンスナイパーのリミッターを一段外したぞ。それからリミッターの管理権限を六課の技師に渡した。これで一々俺を呼び出す必要はないからな」

「ありがとうございます」

「フルライトとブリッターレフトの整備もやんなきゃなあ……技師も楽じゃないぜ……」

ブツブツ呟きながら、末崎は再び片隅でデバイスを弄り始める。

その光景を見ながら、ケイトはある懸念を浮かべていた。

——あのスエザキさんって人、転生者じゃないか？　それも、由衣さんと海斗さんの仲間の可能性もある。

最初にそう思った理由は彼の名前だ。スエザキという名前は、日本であればそう珍しい訳でもない。……無論、理由はそれだけではない。

現在末崎が弄っている二つのデバイス。彼はフルライトとブリッターレフトという名で呼んでいた。それはケイトと義彦が所属している「ストーム」隊の上司、藤木由衣隊長と藤木海斗副隊長のデバイスの名前だ。

ケイトは、自分達の隊長・副隊長が転生者であると考えている。原作にはいなかった人物、日本人らしい名前、そして原作にはなかった部隊。初代リインフォースの生存やティアナの変化は何らかの介入があった可能性が高く、二人はそれに関係している可能性が大いにあった。そんな二人とティアナのデバイスを整備している日本人らしき人物となれば、彼も転生者であることはあり得ない話ではなかった。

ケイトが望むのは、転生者同士の協力だ。この世界がデスゲームであると知ってから、生き残るために仲間が欲しいと考えている。

デスゲームと知ったのは三年前。偶然、失格者がガラスめいて砕ける光景を目撃し

た。そしてその直後に失格者の通知が来た。最初は訳がわからず混乱し、一日経っても理解できず、散々悩んだ末に貴重なスターチップを使って神に問いただし、この世界の事態を知った。

デスゲームという真実に絶望し、しばらくしてようやく動かし了った頭脳で考えたのが、これからどうすれば生き残れるかということだった。

そして第一に必要なとしたのが、仲間の確保だった。戦力の強化、情報の収集、何をやるにせよ、仲間が必要だった。そのため、訓練校で出会った義彦とコンビを組み、転生者の多くが目指すであろう機動六課に入った。

そんなケイトの目論見は、ひとまずは順調と言える。義彦と共に六課入りに成功し、転生者らしき人物をさらに見つけることもできた。近い内に、こちらから海斗らに協力を呼び掛けようとも考えている。

協力を呼び掛けるにあたっては、自分達の有用性を見せることも大事だ。海斗は陸曹、由衣は三等空尉と上の立場。自分達を引き入れるメリットを提示する必要がある。

故に――

隊舎中にアラートが鳴り響く。

――故に、今日の戦いは、自分達の実力を見せる重要な一戦となるのだ。



『だーーーーーッ!! 無駄にデケエ図体でちよこまかしてんじやねーーーーッ!!』

『うっさいわよセダン! さっさとその鉄屑蹴落としなさい!』

『あわわわわわわ、り、綾さん! セダンさんとシノさんが!!』

「うるさい、全員黙ってろ」

迫り来る斬撃の嵐をいなしながら、うるさく叫び合う三人を一蹴する。

ミユの命令によって自動運転するバイクに跨る俺に、踝から先をローラーにした脚で並走し前後左右を取り囲む四体の鉄人形。左右の肘に取り付けられたブレードは長大なのだが、二メートル半は下らない巨体のせいで少し大きいナイフのようだった。

鉄人形の斬撃は単調だが、四方から来る上に場所が悪い。可能な限りいなし、直撃を避けても、次々と皮膚を割かれて血が流れる。

舌打ちを漏らしながら、状況を見る。

鉄人形の数は六体。こちらが相手をしている四体は新型、リニアにいる二体は空から降ってきた。正確には降ってきたのも四体だったが、二体は着地の衝撃で脚回りを損傷させセダンとシノにより破壊された。

だが、今残っている六体が厄介だった。今まで交戦してきた個体よりも動きが良すぎ

る。付かず離れずの距離を保ち、こちらの攻撃は回避しつつも確実に削ってくる。

知性のある立ち回り……おそらく、今の六体は“入って”いる。

俺及び新型四体とリニアの距離は確実に狭まってきている。足場は必要だが、リニアに取りつかれる訳にはいかない。それに鉄人形どもに手がかかりきりになったせいでガジェットへの対処ができないでいる。

再び舌打ちし、それから状況打開のため通信を繋げた。

「——各員に到達。レリックは一時放棄。『機兵』をリニアから引き離し破壊すること  
を優先しろ」